

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第90集

韋山城跡・韋山城内遺跡

平成7年度県立韋山高等学校プール改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第90集

韋山城跡・韋山城内遺跡

平成7年度県立韋山高等学校プール改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



集落全景 西より

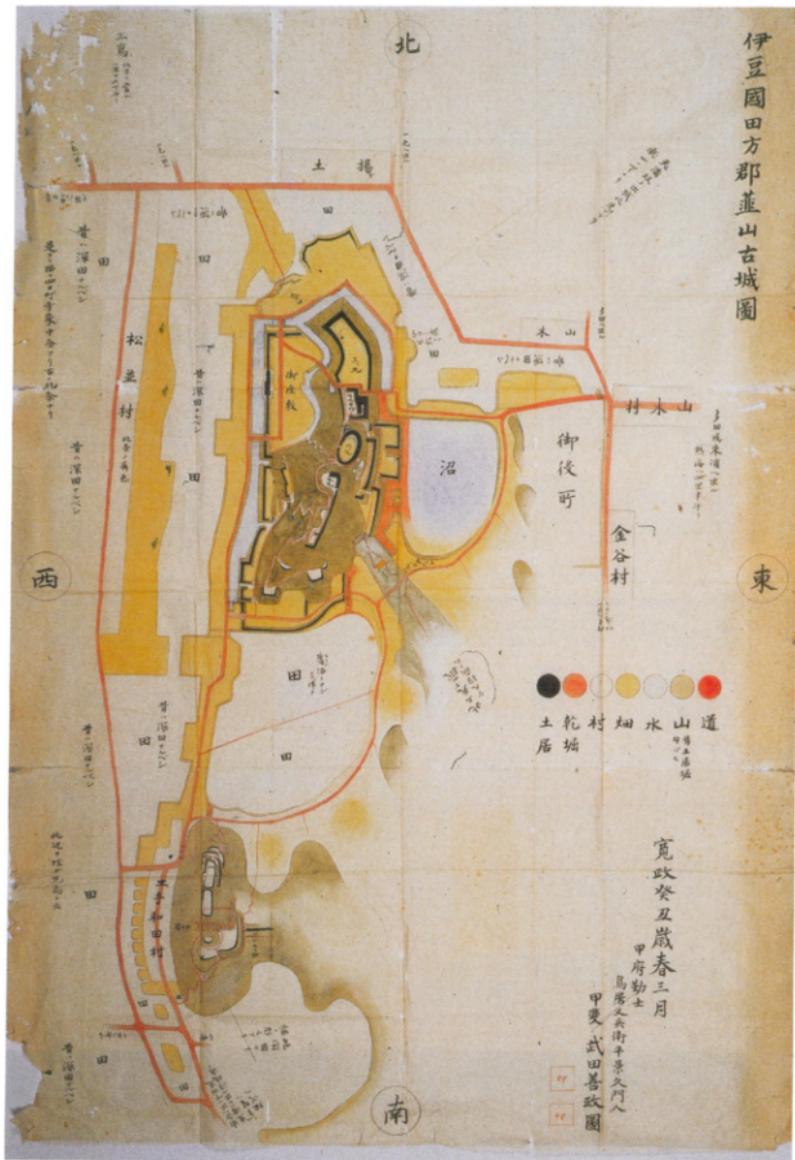


1. 第1トレンチ西壁土層断面（部分）東より



2. 荘山城石積み造構（SX-4）北東より

伊豆國田方郡
葦山古城圖



葦山城繪図（江川文庫所蔵）

序

葦山城跡の発掘調査は、静岡県立葦山高等学校のプール改修工事の事前調査として、平成7年4月から7ヶ月にわたって実施された。葦山高校のプールは、昭和39年に竣工されてから現在まで、体育教育の一環として活用されてきた。しかし、最初の建設工事の時は発掘調査が実施されず、そのため遺跡の大部分は消滅しているものと考えられていた。今回の発掘調査では、このような認識を覆すには充分な程、多くの遺構・遺物が出土し、多大の成果を挙げることができた。

葦山城跡に関する遺構は、プール造成工事によって大部分が破壊されていたものの、発掘調査によって石積み遺構を検出し、従来の中世城郭に関する知識に対して、新しい所見を加えることができた。また、本地点において少なくとも2回にわたる造成がなされていることが分かり、文献史料の調査と併せて、造成時期について論究することができたのは大きな成果であろう。なお、この石積み遺構はプールサイドの真下に位置しており、残すことのできる場所であるため、盛土して保存することが決定された。

また中世の遺構として、東西に伸びる杭列も検出された。この杭列の出土位置や方位は、従来の調査で明らかにされている田方条里の方位に極めて近似している。これは、今までの葦山町における条里型水田の調査成果を強力に裏付ける物証である。残念ながら水田遺構は検出されず、本杭列が水田畦畔の補強材であるかどうかは明らかにされなかったが、もし葦山城の普請に関わるものだとすれば、城の繩張りと条里の関連が垣間見え、学的に興味深いものとなろう。

葦山城の下層からは、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落跡が良好な遺存状態で見つかった。本調査地点は、古墳時代を主体とする水田遺跡として著名な山木遺跡に隣接するため、山木遺跡に関連する居住空間の可能性が高い。戦後間もなくの頃、大量の木製品出土遺跡として登呂遺跡と並んで全国に知られた山木遺跡ではあるが、今まででは集落部の本格的な調査が行われることがなかった。それが今回の調査により、登呂遺跡と同様に水田等の生産域と居住域をセットで捉えることができたのである。特に、多種多様の掘立柱建物跡を検出したということは、かつて、登呂遺跡および山木遺跡出土建築材をもとに推定復元された高床倉庫等を、遺構で検討できるという意味で重要である。

最後になったが、調査の実施及び報告書の作成に当たっては、静岡県沼津土木事務所・静岡県教育委員会・葦山町教育委員会・静岡県立葦山高等学校の各位に、深い理解と協力をいただいた。ここに関係各位に深い感謝の意を表すとともに、調査及び資料整理に従事した本研究所員及び作業に参加された多くの人々の労苦に感謝するものである。

1997年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

- 1 本書は、静岡県田方郡庵山町庵山229に所在する庵山城跡および庵山城内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、平成7年度に静岡県立庵山高等学校プール改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県教育委員会体育保健課、沼津土木事務所及び静岡県立庵山高等学校からの委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。
- 3 現地発掘調査は、平成7年4月1日から平成7年10月31日まで実施し、引き続き平成9年3月31日まで、資料整理および報告書作成作業を行った。
- 4 調査体制は次のとおりである。

平成7年度

所長 斎藤忠 副所長 池谷和三 調査研究部長 小嶋章男 調査研究四課長 橋本敬之
調査研究員 小川正夫（10月まで） 青木修

平成8年度

所長 斎藤忠 副所長 池谷和三 調査研究部長 石垣英夫 調査研究四課長 橋本敬之
調査研究員 青木修

- 5 グリッドの設定および航空写真測量は、㈱シン技術コンサルに委託した。花粉・珪藻分析、植物珪酸体分析および炭化材同定は、パリノ・サーヴェイ㈱に委託し、分析結果を巻末に掲載した。
- 6 木製品の樹種同定は東北大学大学院理学研究科助教授 鈴木三男氏に委託した。獣骨は早稲田大学金子浩昌氏に分析して頂いた。また、金属製品及びガラス製品の組成を国立沼津工業高等専門学校助教授 望月明彦氏に分析して頂いた。
- 7 本書の遺物写真は当研究所特殊技術員 渕嘉秀が撮影した。また、石材同定は当研究所技術作業員森島富士夫が行った。
- 8 本書の執筆は調査研究員 青木修が行った。
- 9 本書の編集は静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
- 10 発掘調査資料は、すべて静岡県埋蔵文化財調査研究所が保管している。
- 11 発掘調査および報告書の作成に当たっては、次の方々から御教示や御指導を賜った。特に静岡県立庵山高等学校および庵山町教育委員会の関係各位には大変なお世話を頂いた。記して厚くお礼を申し上げたい。（敬称略、順不同）
市原壽文、田辺昭三、長田実、宮本長二郎、湯之上隆、鈴木三男、望月明彦、金子浩昌

凡　　例

本書の記述については、以下の基準に従い、統一をはかった。

1 本書で使用した方位は、グリッド座標軸の方位（座標北）である。

2 遺構・遺物の標記は次のとおりである。

遺構 (S)		遺物 (R)	
A 杭列	H 掘立柱建物	P 土器	Pt 土製品
B 穴住居跡	P 小穴(Pit)	W 木製品	B 玉類
D 溝状遺構	X その他	S 石製品	N 自然遺物
F 土坑		M 金属製品	

3 グリッド杭とグリッドのそれぞれの名称については、下記のように設定した。



4 遺構実測図中のスクリーントーンは次のとおりである。



5 遺物実測図中のスクリーントーンは次のとおりである。



6 土器の色調は、新版『標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修1992)を使用した。

7 挿表における標記については次のとおりである。

- 各観察表・一覧表における「計測値」のうち、() で示した値は推定値であり、[] で示した値は残存値である。
- 遺構の数値の単位は原則としてmで、柱穴のみcmである。遺物の数値の単位はcmあるいはgである。
- 遺物番号の後の「e」は、他の番号の遺物も接合していることを示す。
- 第15表「技法の特徴」は、①外面②裏面③右側面④左側面⑤上面⑥下面⑦その他と記述する。
- 第20表「技法の特徴」は、①正面②裏面③右側面④左側面⑤上面⑥下面⑦その他と記述する。

目 次

序

例言・凡例

第Ⅰ章	遺跡の立地と歴史	
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	1
第3節	葦山城の変遷	4
第Ⅱ章	調査の経過	
第1節	調査に至る経緯	10
第2節	調査の方法	14
第3節	調査の経過	16
第Ⅲ章	基本層序	18
第Ⅳ章	歴史時代	
第1節	遺構	22
1. 第1遺構面	(1)堅穴状遺構	
(2)土坑		
(3)石組暗渠跡		
2. 第2遺構面	(1)溝状遺構	
(2)性格不明遺構		
(3)石積み遺構		
(4)杭列		
第2節	遺物	41
(1)陶磁器等		
(2)かわらけ		
(3)土製品		
(4)石製品		
(5)金属製品		
(6)錢貨		
(7)木製品		
(8)自然遺物		
第Ⅴ章	弥生時代～古墳時代	
第1節	遺構	70
(1)堅穴住居跡		
(2)掘立柱建物跡		
(3)溝状遺構		

(4)土坑	
(5)土器集中出土地点	
第2節 遺物	124
(1)弥生土器・土師器	
(2)土製品	
(3)石製品	
(4)ガラス製品	
(5)金属製品	
(6)礎板・柱根	
(7)自然遺物	
第VI章 まとめ	
第1節 歴史時代	198
第2節 弥生時代～古墳時代	200
付編1 蕨山城周辺の古環境 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	203
付編2 蕨山城跡における自然科学分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	221

挿表目次

第1表 周辺遺跡地名表	3
第2表 蕨山城跡及び関連遺跡調査一覧表	12
第3表 山木遺跡及び関連遺跡調査一覧表	13
第4表 調査工程略表	17
第5表 陶磁器等一覧表	45
第6表 かわらけ一覧表	54
第7表 土製品（歴史時代）一覧表	56
第8表 石製品（歴史時代）一覧表	58
第9表 金属製品（歴史時代）一覧表	58
第10表 錢貨一覧表	60
第11表 木製品（歴史時代）一覧表	68
第12表 穴立住居跡一覧表	70
第13表 捶立柱建物跡一覧表	96
第14表 柱穴一覧表	116
第15表 弥生土器・土師器觀察表	148
第16表 土製品（弥生時代～古墳時代）一覧表	164
第17表 石製品（弥生時代～古墳時代）一覧表	170
第18表 ガラス製品一覧表	170
第19表 金属製品（弥生時代～古墳時代）一覧表	170
第20表 硙板・柱根觀察表	191

挿図目次

第1図 位置図	1
第2図 周辺遺跡地図	2
第3図 蕁山城縄張り図	6
第4図 蕁山城縄張り図（本城）	6
第5図 蕁山城絵図（拡大）	7
第6図 蕁山城調査区周辺図	7
第7図 蕁山城周辺地籍図	8
第8図 蕁山城跡関連調査地点位置図	12
第9図 山木遺跡関連調査地点位置図	13
第10図 グリッド及びトレンチ設置図	14
第11図 第1トレンチ土層断面図	19
第12図 土層堆積模式図	20
第13図 調査区全体図（歴史時代 第1遺構面）	23
第14図 調査区全体図（歴史時代 第2遺構面）	25
第15図 S X - 1・S F - 1・S F - 2 実測図	28
第16図 S X - 3 実測図	29
第17図 S D - 1 実測図	31
第18図 S F - 3・S X - 7 実測図	33
第19図 S X - 4 実測図	37
第20図 S X - 4 土層断面図	39
第21図 S A - 1 実測図	40
第22図 陶磁器等実測図 1	42
第23図 陶磁器等実測図 2	43
第24図 陶磁器等実測図 3	44
第25図 かわらけ法量分布	46
第26図 かわらけ実測図 1	49
第27図 かわらけ実測図 2	50
第28図 かわらけ実測図 3	51
第29図 かわらけ実測図 4	52
第30図 かわらけ実測図 5	53
第31図 土製品実測図（歴史時代）	56
第32図 石製品実測図（歴史時代）	57
第33図 金属製品実測図（歴史時代）	59
第34図 銭貨拓影	61
第35図 木製品実測図（歴史時代） 1	64
第36図 木製品実測図（歴史時代） 2	65
第37図 木製品実測図（歴史時代） 3	66
第38図 木製品実測図（歴史時代） 4	67
第39図 調査区全体図（弥生時代～古墳時代）	71

第40図	S B - 1 実測図	74
第41図	S B - 2 実測図	75
第42図	S B - 3 実測図	77
第43図	S B - 4 • S B - 7 実測図	78
第44図	S B - 5 実測図	79
第45図	S B - 6 実測図	80
第46図	S B - 8 実測図	81
第47図	S B - 9 • S B - 1 8 実測図	83
第48図	S B - 1 0 • S B - 1 6 実測図	85
第49図	S B - 1 1 • S B - 2 0 実測図	87
第50図	S B - 1 2 • S B - 1 3 • S B - 1 4 • S B - 1 5 実測図	89
第51図	S B - 2 1 実測図	91
第52図	S B - 2 8 • S B - 3 0 実測図	92
第53図	S B - 2 9 実測図	93
第54図	S B - 3 1 実測図	94
第55図	S B - 3 2 実測図	95
第56図	S H - 1 実測図	97
第57図	S H - 3 実測図	99
第58図	S H - 2 • S H - 4 実測図	101
第59図	S H - 5 実測図	102
第60図	S H - 6 実測図	103
第61図	S H - 7 実測図	104
第62図	S H - 8 実測図	105
第63図	S H - 9 実測図	106
第64図	S H - 1 0 実測図	107
第65図	S H - 1 1 実測図	108
第66図	S H - 1 2 実測図	109
第67図	S H - 1 3 実測図	110
第68図	S D - 2 • S D - 3 • S D - 4 • S D - 6 • S F - 5 実測図	111
第69図	S D - 7 実測図	113
第70図	土器集中出土地点3 実測図	114
第71図	弥生土器・土師器実測図1	128
第72図	弥生土器・土師器実測図2	129
第73図	弥生土器・土師器実測図3	130
第74図	弥生土器・土師器実測図4	131
第75図	弥生土器・土師器実測図5	132
第76図	弥生土器・土師器実測図6	133
第77図	弥生土器・土師器実測図7	134
第78図	弥生土器・土師器実測図8	135
第79図	弥生土器・土師器実測図9	136
第80図	弥生土器・土師器実測図10	137

第81図	弥生土器・土師器実測図11	138
第82図	弥生土器・土師器実測図12	139
第83図	弥生土器・土師器実測図13	140
第84図	弥生土器・土師器実測図14	141
第85図	弥生土器・土師器実測図15	142
第86図	弥生土器・土師器実測図16	143
第87図	弥生土器・土師器実測図17	144
第88図	弥生土器・土師器実測図18	145
第89図	弥生土器・土師器実測図19	146
第90図	弥生土器・土師器実測図20	147
第91図	土製品実測図（弥生時代～古墳時代）	165
第92図	石製品実測図（弥生時代～古墳時代）1	166
第93図	石製品実測図（弥生時代～古墳時代）2	167
第94図	石製品実測図（弥生時代～古墳時代）3	168
第95図	石製品・ガラス製品・金属製品実測図（弥生時代～古墳時代）	169
第96図	礎板実測図1	176
第97図	礎板実測図2	177
第98図	礎板実測図3	178
第99図	礎板実測図4	179
第100図	礎板実測図5	180
第101図	礎板実測図6	181
第102図	礎板実測図7	182
第103図	礎板実測図8	183
第104図	礎板実測図9	184
第105図	礎板実測図10	185
第106図	礎板実測図11	186
第107図	礎板実測図12	187
第108図	礎板実測図13	188
第109図	礎板実測図14	189
第110図	柱根実測図	190
第111図	竪穴住居跡規模一覧	201
第112図	掘立柱建物跡規模一覧	201
第113図	竪穴住居跡方位集成	201
第114図	掘立柱建物跡方位集成	201
第115図	古墳時代集落変遷図	202

図版目次

- カラー図版1 集落全景 西より
- カラー図版2 1. 第1トレンチ西壁土層断面(部分) 東より
2. 荘山城石積み遺構(SX-4) 北東より
- カラー図版3 荘山城絵図(江川文庫所蔵)
- 図版1 遺跡遠景 北より
- 図版2 1. 荘山城跡(航空写真) 東より 2. 荘山城跡(手前城池) 東より
- 図版3 1. 調査前状況 西より 2. 調査区全景 西より
- 図版4 1. SX-1 西より 2. SF-1 北より
3. SF-2 北より
- 図版5 1. SX-3 南より 2. SX-3上蓋除去後 南より
3. SX-3土層断面 西より
- 図版6 1. SD-1 南より 2. SD-1 簸群出土状況 西より
3. SD-1 箸状木製品出土状況 東より
- 図版7 1. SF-3 西より 2. SX-7 北より
3. SX-7(部分) 北より
- 図版8 1. SX-4石積み(東半分) 北より 2. SX-4石積み東端 北より
- 図版9 1. SX-4石積み(西半分) 北より 2. SX-4石積み西端 北より
- 図版10 1. SX-4石敷道 北より 2. 第4トレンチ東壁土層断面 西より
3. 第7トレンチ南壁土層断面 北より
- 図版11 1. 遺物出土状況(261) 東より 2. 遺物出土状況(34) 東より
3. SA-1検出状況 東より 4. SA-1 東より
- 図版12 陶磁器等 1
- 図版13 陶磁器等 2
- 図版14 陶磁器等 3
- 図版15 陶磁器等 4
- 図版16 かわらけ 1
- 図版17 かわらけ 2
- 図版18 かわらけ 3
- 図版19 かわらけ 4
- 図版20 土製品・石製品・金属製品(歴史時代)
- 図版21 金属製品・銭貨(歴史時代)
- 図版22 木製品(歴史時代) 1
- 図版23 木製品(歴史時代) 2
- 図版24 弥生時代～古墳時代 調査区全景
- 図版25 1. SB-1 南より 2. SB-1炉 南より
3. SB-1 P3 北より
- 図版26 1. SB-2 西より 2. SB-3 西より
3. SB-3 P2 東より

- 図版27 1. SB-4 東より 2. SB-4 遺物出土状況 (362) 西より
3. SB-5 東より
- 図版28 1. SB-6 北より 2. SB-7 東より
3. SB-7 遺物出土状況 (636) 西より
- 図版29 1. SB-8 東より 2. SB-9 北より
3. SB-9 炉石出土状況 北より
- 図版30 1. SB-10 西より 2. SB-11・SB-20 北より
3. SB-20 遺物出土状況 (374) 東より
- 図版31 1. SB-12・SB-13・SB-14・SB-15 西より
2. SB-16 北より 3. SB-18 南より
- 図版32 1. SB-21 東より 2. SB-28 南より
3. SB-29 東より
- 図版33 1. SB-30 東より 2. SB-31 東より
3. SB-31 P4 南より
- 図版34 1. SB-32 西より 2. SB-32 P1 南より
3. SB-32 P4 南より
- 図版35 1. SH-1 西より 2. SH-1 P1 西より
3. SH-1 P2 北より 4. SH-1 P3 東より
5. SH-1 P6 西より
- 図版36 1. SH-2 北より 2. SH-4 西より
3. SH-5 南より
- 図版37 1. SH-3 北より 2. SH-3 P2 東より
3. SH-3 P3 東より 4. SH-3 P5 西より
5. SH-3 P6 東より
- 図版38 1. SH-6 北より 2. SH-7 西より
3. SH-7 P2 北より
- 図版39 1. SD-2 西より 2. SD-2 遺物出土状況 (389・395) 西より
3. SD-3 南より
- 図版40 1. SD-4 南より 2. SD-6 南より
3. SD-7 南より 4. SF-5 北より
- 図版41 1. 土器集中出土地点2 北より 2. 土器集中出土地点3 (西側) 北より
3. 土器集中出土地点3 (東側) 完掘状況 北より
- 図版42 弥生土器・土師器 1
- 図版43 弥生土器・土師器 2
- 図版44 弥生土器・土師器 3
- 図版45 弥生土器・土師器 4
- 図版46 弥生土器・土師器 5
- 図版47 弥生土器・土師器 6
- 図版48 弥生土器・土師器 7
- 図版49 弥生土器・土師器 8
- 図版50 弥生土器・土師器 9

- 図版51 弥生土器・土師器 10
図版52 弥生土器・土師器 11
図版53 弥生土器・土師器 12
図版54 弥生土器・土師器 13
図版55 弥生土器・土師器 14
図版56 弥生土器・土師器 15
図版57 土製品・石製品（弥生時代～古墳時代）
図版58 石製品・ガラス製品・金属製品（弥生時代～古墳時代）
図版59 磁板 1
図版60 磁板 2
図版61 磁板 3
図版62 磁板 4
図版63 磁板 5
図版64 磁板 6
図版65 磁板 7
図版66 磁板 8
図版67 柱根

第Ⅰ章 遺跡の立地と歴史

第1節 地理的環境

遺跡の所在する田方郡韮山町は、北伊豆の中央部に位置する。韮山町の地勢は東西で大きく2分される。東は箱根の西麓で、町域の大半を占める。西は狩野川による沖積平野である田方平野が広がる。韮山城跡は田方平野の東寄りで、狩野川から東へ約2kmの地点に所在する。韮山城は平山城であり、本城は「龍城山」と呼ばれる標高約50mの丘陵に築かれ、周辺の半地部や南の天ヶ岳（標高約128m）も城域に含まれる。今回の調査地点は龍城山の北側で標高約14.5mの半地部であり、丘陵の縁辺部に位置する。

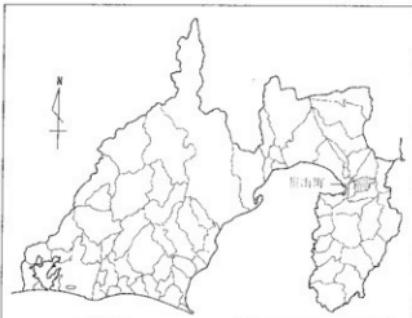
地質的にみると、伊豆半島の基盤は湯ヶ島層群と白浜層群からなる。韮山町東側の箱根西麓はこの湯ヶ島層群を基盤とする多賀火山地である。多賀火山は箱根の火山列のひとつで、成層火山である。一方、韮山城が築かれた天ヶ岳や龍城山は箱根西麓に隣接する独立丘陵であり、石英安山岩の貫入岩体から成っている。なお韮山町には他に、狩野川右岸に守山と呼ばれる独立丘陵が存在する。

韮山町の西に広がる田方平野の沖積層は、最下部層（砂礫層）・下部層（砂泥互層）・中部層（シルト・粘土層）・上部層（灰白色の軽石質砂・砂礫層）・最上部層（泥砂礫層）と大きく5層に区分される。平野内では、古狩野川の影響による自然堤防・中州状微高地・旧河道跡などが微地形として所々で観察できる。住宅地はこの中に自然堤防・丘陵の縁辺部等の微高地に集中する。低地では水田の他、畠のビニールハウス栽培などが営まれている。今回の調査地点は旧地形では微高地であることが、従来の山木遺跡の調査から判明している。この微高地は、龍城山から北へと広い範囲で伸びていることも明らかとなっている。

狩野川に関しては、現在の流路の不自然さや平野内にみられる微地形等から、幾度も流路が変更していると考えられている。このことに関して、多くの研究者が流路の変遷について論じている。その中に挙げられている流路のひとつとして、韮山町南条からまっすぐ北上して龍城山の西側を通るルートがある。これは蛭ヶ小島の位置比定と結び付いている見解である。一方で、戦前の条里地割の乱れが少なく、また低地の遺跡が地表面から浅いところで良好な状態で確認されることが多い等から、流路の大きな変化はなかったとする見解もある。いずれにせよ、韮山の歴史や景観を論じる際には、狩野川の流路のあり方は大きな意味を持つため、流路の変遷が明らかになるのを期待したい。

第2節 歴史的環境

韮山の地には旧石器時代から人々が住んでいたことが、遺物から判明している。しかし韮山では、現段階では明確な遺構の検出例はなく、資料としては表採による遺物しかない。縄文時代には、韮山はいわゆる縄文海進のため、低地は湾であったと思われる。集落もおそらく台地上に営まれていたのだろう。この時期の遺跡としては神崎遺跡（17）等が調査されている。各遺跡で出土する遺物は、前期の関山式、諸識式、中期の勝坂式、加曾利E



第1図 位置図



第2図 周辺遺跡地図 (1 : 25,000)

国土地理院「蔵山 (1 : 25,000)」に加筆

式等、葦山は縄文時代全般にわたって関東と中部の影響下にあったといえる。

弥生時代に入ると、全国各地で農耕が営まれるようになる。葦山でもこの時期の水田遺跡が存在する。山木遺跡（2）、奈古谷低地遺跡群（4）、蛭ヶ島遺跡（32）、内中遺跡（39）、宮下遺跡（42）等である。これら遺跡は低地部に位置する弥生時代後期から古墳時代にかけての水田遺跡である。しかし、この時期の集落については、おそらく丘陵の縁辺部や自然堤防上に存在するものと推定されるのであるが、調査例は神崎遺跡で5軒、山木遺跡で1軒、奈胡谷神社遺跡で3軒しかなく、集落の全貌を明らかにできる資料はない。なお、弥生後期から古墳時代前期にかけての墓について、土坑墓は伊勢平遺跡での検出例がある。その他に、神崎遺跡、宮原遺跡（12・13）、芋ヶ窪遺跡（18）等で方形周溝墓が、また神崎遺跡で円形周溝墓が確認されている。これら大部分は古墳時代前期に属する。以上の調査成果から弥生時代から古墳時代の葦山は、平野の低地部で水田を営み、丘陵の縁辺部に集落を構え、集落のそばに墓域を形成していたといえる。しかし不明な点も多く、今後の調査事例の増加により詳細が明らかになるのを期待したい。

古墳時代になると古墳が築造されるようになるが、伊豆地方に遺されている古墳は、古墳時代後期のものが多い。葦山においても同様である。葦山町内では大きく、台古墳群（43）、花ヶ崎遺跡（9）、大塚古墳群（21）を中心にして、古墳が集中する。古墳時代中・後期の集落については、花ヶ崎遺跡で6軒の中期と思われる住居が確認されたのみである。

葦山における奈良・平安時代に関しては、田方条里に関する研究が特筆される。山木遺跡では数次にわたる調査の結果、平安後期頃の水田跡が確認され、埋没条里的境界線が明らかにされた。また表層条里に関しても、昭和35年施行の耕地整理で消滅したものの、耕地整理以前は良好な状態を留めていたとのことで、加藤雅功氏によると、葦山町ではN-21°~22°-Wの条里水田が広範囲にみられたという（加藤1976）。原茂光氏の御教示によると、この耕地整理以前の表層条里と、発掘調査で検出された埋没条里

No.	遺跡名	時期	No.	遺跡名	時期
1	葦山城跡	中世	2 6	荒真木遺跡	古墳
2	山木遺跡	弥生（後）・古墳（前）	2 7	魂之洞遺跡	縄文～古墳
3	城ヶ下遺跡	縄文・弥生（後）・古墳	2 8	太閤陣場古墳	古墳
4	奈古谷低地遺跡群	弥生・古墳	2 9	下向山遺跡	中世
5	狐塚古墳	古墳	3 0	山木下町（下町）遺跡	弥生・古墳
6	神明原遺跡	弥生	3 1	山木館	中世
7	浜井場古墳群	古墳	3 2	経ヶ島（経ヶ小島）遺跡	弥生・古墳
8	浮名古墳群	古墳	3 3	兵衛ノ森遺跡	弥生・古墳
9	花ヶ崎遺跡	縄文（前）・弥生・古墳	3 4	道下遺跡	中世
10	伽藍塚遺跡	縄文～古墳	3 5	光熙寺	中世・近世
11	伽藍沢（花ヶ崎）古墳群	古墳	3 6	御所之内遺跡	弥生（後）・古代・中世
12	宮原A（宮ヶ原）遺跡	縄文～古墳	3 7	守山（守山城）砦	中世
13	宮原B（宮ヶ原）遺跡	縄文～古墳	3 8	頼成就院跡	古代・鎌倉・室町・江戸
14	花立遺跡	縄文～古墳	3 9	内中遺跡	縄文～古墳
15	国清寺北古墳群	古墳	4 0	山田古墳群	古墳
16	国清寺	中世・近世	4 1	宮ノ後遺跡	縄文・弥生
17	神崎遺跡	旧石器～古代	4 2	宮下遺跡	弥生（後）・古墳
18	芋ヶ窪遺跡	縄文～古墳	4 3	台古墳群	古墳
19	芋ヶ窪古墳群	古墳	4 4	長者ケ原（中ノ台）遺跡	旧石器～古墳・中世
20	妹ヶ久保遺跡	弥生・古墳	4 5	菅沢日向古墳	古墳
21	大塚古墳群	古墳・中世	4 6	菅沢低地遺跡	弥生・古墳
22	熊野神社	弥生～古代	4 7	坂本遺跡	弥生～古代・近世
23	長崎神社	弥生	4 8	大間剥古墳群	古墳
24	原木下町遺跡	弥生	4 9	荒ヶ台（荒久台）遺跡	縄文（早・中）
25	荒木神社	古墳	5 0	秦邸堂洞D遺跡	縄文（中）・古代

第1表 周辺遺跡地名表

が一致することも明らかにされていることである。

中世における葦山は、源頼朝の旗揚げから後北条氏の滅亡まで、日本史の中で重要な位置を占めている。そのため遺されている中世史跡も非常に多い。源頼朝が流された蛭ヶ小島（32）、室町時代後期の堀越公方の居館である堀越御所（御所之内遺跡 36）、後北条氏の支城である葦山城（1）あるいは国清寺（16）や願成就院（38）等の寺院というように、枚挙にいとまがない。更に、近年の調査により堀越御所の下から鎌倉北条氏の居館が出土したのが特筆されよう（『円成寺遺跡』1995）。ただし、蛭ヶ小島に関しては発掘調査の結果、中世の遺構・遺物は出土せず、弥生・古墳時代の遺跡であることが明らかとなっている。

ここで中世後期の葦山について少し触れておきたい。長禄元年（1457年）、関東へ下向してきた足利政知が鎌倉入りを果たせず堀越に御所を構えた。これが堀越公方である。政知は延徳3年（1491年）に没し、その子茶々丸が跡を継いだ。これを伊勢新九郎長氏（北条早雲）が滅ぼし、伊豆を平定して葦山城を本拠地としたのである。堀越御所の所在した守山周辺は、堀越御所を始めとして願成就院・守山答（37）・北条館等、国史跡に指定されるような重要史跡が集中する。このことから、中世葦山の中心地が守山周辺にあったのは容易に想像できる。しかし北条早雲は居城を守山に置かず、葦山城を居城としている。

その後、後北条氏は小田原城を本拠地として関東に進出するが、天正18年（1590年）に豊臣秀吉によって滅ぼされる。この間の葦山城の変遷については次節で解説する。

近世の葦山は天領として、代官江川氏が治めた。江川氏に関連する史跡として、江川邸や反射炉などがある。今回の調査地点周辺に関しては、江戸時代を通して堀が農業用水池的な利用をされたようである。寛文7年（1667年）の葦山城周辺の絵図によると、城跡の北側には水溜りらしい表現と水門が記されていることからも、葦山城の堀がそのまま農業等の用水として利用されたことが伺える。

明治維新後、明治5年（1872年）には学制の施行により葦山中学校（現葦山高等学校）が発足した。葦山城のふもとは葦山中学校に関連する施設が建てられ、幾度かの改築の変遷を辿っている。今回の調査地点には官舎が建設されたりしているが、状況を詳しく知り得る図面は残っていない。その後、昭和39年にはプールが建設され、現在に至っている。

第3節 葦山城の変遷

葦山城が歴史の表舞台に登場するのは、興國寺城主伊勢新九郎長氏（北条早雲）が堀越御所にて足利茶々丸を滅ぼした時である。この堀越御所攻めは通説では延徳3年（1491年）とされているが、近年は明応2年（1493年）という説も提唱されている。この後、早雲は拠点を興國寺城から葦山城に移すのであるが、早雲入城以前に葦山城が存在していたかどうかについては諸説ある。『北条五代記』には、堀越公方の家臣外山豊前守が葦山城の城主であり、長享2年（1488年）に早雲が入城したとある。一方、『増訂豆州志稿』では田中内膳が在城していたとある。どちらの説も信憑性が低いが、いずれにせよ早雲入城以前に葦山城があったとみるのが適当であろう。

ところで、早雲がなぜ守山に居城を置かなかったかについては、伊禮正謙氏の論考（伊禮1987）や『葦山町史』（第10巻 1995）に詳しい。『町史』によると、堀越御所が城の構えではなく館の構えであったことと、茶々丸を滅ぼした際に堀越御所が完全に焼けてしまったことの2点をあげて、早雲が堀越御所の跡地を自分の本拠地に選ばなかったとしている。そして葦山城を本拠地とした理由として伊禮氏は次の5点をあげている。

①旧為政者（この場合は堀越公方）の本拠地の近くに自分の本拠地を置くのが有利と考えたこと。

- ②蘿山は西へは1里で海に達することができること。
- ③狩野川が峡谷を脱して平野部になるあたりは、伊豆一国の政治的中心地としてふさわしいこと。
- ④蘿山城は対武田氏の戦略上、興國寺城と結んで強力な防衛線となること。
- ⑤眺望が良いため、東海道まで見渡すことができること。

以上の理由から、早雲は蘿山に居城を構えたとしている。

早雲はその後、小田原城を攻略して相模国にも進出するに到ったが、終生蘿山城を居城とし、永正16年（1519年）に88歳で没した。

早雲の没後、蘿山城はいわゆる伊豆衆によって守られていたとされる。この間、蘿山は終始平穏であったわけではない。天文年間に今川氏との関係が悪化し、北条氏綱は駿河に攻め入っている。いわゆる「河東一乱」である。永禄12年（1569年）から元亀元年（1570年）にかけては、蘿山城は武田信玄によって攻められている。また、天正8年（1580年）頃も武田勝頼との緊張関係から、北条氏政は清水康英に蘿山城を堅固に守るよう命じている。これら危機の度に、蘿山城の重要性がクローズアップされたことは想像に難くない。

その後天正15年（1587年）頃、豊臣秀吉と後北条氏との関係が悪化すると、蘿山城は山中城と共に対豈山の最前線拠点としてさらに重要性を持つようになり、北条氏規が城主として蘿山城に入城するに到る。氏規は永禄12年から元亀2年（1571年）までと、天正8年から天正13年（1585年）までの2時期に、蘿山城に城将として在城している（小和田1992）。そして天正16年（1588年）頃から天正18年（1590年）まで蘿山城主となるのである。その後、天正18年の小田原攻めの際には3ヶ月の籠城のち、徳川家康の勧告により蘿山城を開城している。この時の籠城は、豊臣方4万余に対し守備兵は3600人程度であったとされている。

後北条氏の滅亡後、蘿山城には家康の家臣である内藤信成が入城する。内藤は蘿山城在城中、検地等を実施し、荒廃した伊豆の復興に努めている。関ヶ原の合戦後の慶長6年（1601年）、内藤は転封となり蘿山城は廃城となるのである。

このような歴史を持つ蘿山城であるが、縄張りに関しては蘿山城絵図（カラー図版3）が寛政5年（1793年）に描かれており、また多くの城郭研究者によって現況調査が行われている。それによると蘿山城は、大きく本城部分と背後の支城群、および平地部の御座敷に分けられる。支城群は最頂部である天ヶ岳砦の他に、江川砦、土手和田砦、和田島砦があり、本城の東南側に尾根続きで控える（第3図）。本城部分は曲輪が南北に並ぶ連郭式城郭である（第4図）。絵図によると、南から「本丸」「二ノ丸」「櫛現曲輪」「三ノ丸」となっている。本城の西側には「御座敷」と記されているが、城主の居住地であったと思われる。三ノ丸の周囲には内堀があり、その外側に曲輪らしき表現がみられる。更にその外側には「深田」の記述がある。おそらく泥田状の湿地が広がっていたと思われる。本城の北側には大手口が存在する。今回の調査地点は大手口の東側に位置する曲輪の部分である（第5図）。調査地点の周辺は、絵図に示されている道路や塙跡が現在も良好な状態で観察できる（第6図）。蘿山城の遺構は概して遺存状態良好であり、城池をはじめとして本城の土壘や堀、背後の支城群等を現況である程度観察することができる。

蘿山城周辺の字名にも、城に関連する名称をみつけることができる（第7図）。本城部分に「天主」「御座敷」「塩倉」「外池」の字名が残り、調査区付近には「大手」「揚土」の字名が残る。また、「外池」の西側には「土手前」の字名が残る。興味深いのは「太閤陣場」の字名である。秀吉の小田原攻めに関連した地名であろうか。なお、「芳池」の西側に「屋敷田」の字名が、城の北側に「丸ノ内」「土手内」「西土手」「東土手」の字名が、城の南側に「上土手」「下土手」「北壁敷」「屋敷田」の字名がみえるが、蘿山城との関連は不明である。



第3図 蕪山城縄張り図 『蕪山町史』第三巻下より



第4図 蕪山城縄張り図(本城) 『蕪山町史』第三巻下よりである。『町史』(第3巻下 1987)では、天正13年

ここで確認しておかなければならないのは、現在観察できる城跡は庵城時の姿であるということである。城絵図も庵城時の姿が描かれている上に近世城郭の概念が入っているため、早雲創建時の蕪山城の構造とその変遷に関しては全く不明であるといえる。100年以上も存続した城があるので、城が機能していた間に何度かの普請が実施されたと考えるのが普通であろう。『町史』(第3巻下 1987)によると、普請が確認できる史料として次のようなものがある。

- ・永禄元年(1558年) 3月21日付「水口文書」、山木御大方(北条氏綱の娘)から水口氏宛の書状で、蕪山城の普請に際し、滝山(現蕪山町山木東方の山中)に普請人足の賦課があたっているが、滝山が散作で百姓は1人もいないため、人足が出せないと書かれている。
- ・天正13年(1585年) 3月17日付「森文書」、蕪山城の普請に際し、桑原郷(現在の函南町)の百姓1人を築城の人足として徴発する虎印判状で、4月12日に鍬と箕を持って蕪山へ集まり、翌13日から普請にかかるとあり、正味10日の労役に就くことを命じている。なお1日欠如すると、過失として5日余分に働かされたことが分かる。
- ・天正14年(1586年) 2月3日付「森文書」、蕪山城の普請に際し、桑原郷の百姓1人を築城の人足として徴発する虎印判状で、2月9日に鍬と箕を持って蕪山へ集まり、翌10日から普請にかかるとある。なお1日遅参すれば5日余分に働かなければならぬとしている。
- ・天正17年(1589年) 12月7日付「平岡文書」、清水太郎左衛門(康英)宛の虎印判状で、武具の調達と共に「普請道具持たるべき事」とあり、普請人足の徴発を命じている。清水康英宛ということから、蕪山城の普請を示していると思われる。これら記録から、永禄元年と天正13年から14年にかけてと、天正17年に蕪山城の普請があったことが分かる。また永禄元年の史料に、以前にも人足を出していないという記述がみられることから、永禄元年以前にも普請が行われたことが伺える。なお、このうち天正13~14年と同17年の普請は、関東に進出してきた豊臣秀吉に対抗した普請であることは明白

には小田原城も修築され、とくに小田原城と、北条氏規の在城する蘿山城の修築に力がそそがれたようであると述べており、この年の普請がかなり大がかりであったことを示唆している。

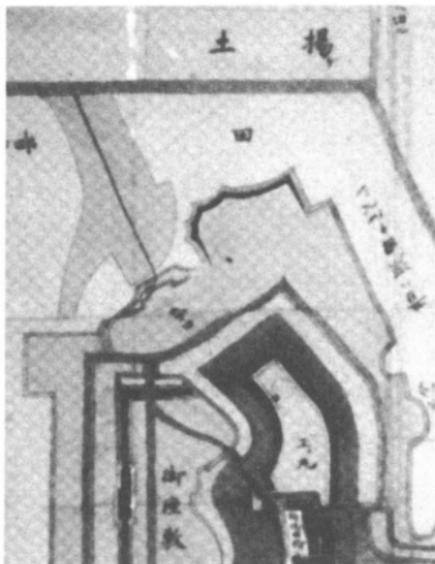
なお、これら史料は普請の事実だけではなく、普請人足の微発の様子や、百姓の欠落や逃散といった逃亡などについても貴重な情報を提供しているが、ここでは本旨から外れるので触れないこととする。

記録に残っているもの以外に普請が行われた可能性があるとすれば、次の4段階が考えられる。

- ①早雲が蘿山城に入城した時
- ②天文年間のいわゆる河東一乱の時
- ③永禄12年～元亀元年の武田信玄侵攻時
- ④内藤信成が蘿山城に入城した時

また、天正8年頃も武田氏との緊張関係から普請を行った可能性が考えられる。しかし、城の詳細な構造や変遷に関しては、文献史料からは伺い知ることができない。特に平地である場所の構造に関しては全く不明である。後北条氏が何時、どのように改修や城域の拡張を行ったのかは考古学的調査によって解明されていくものと思われる。実際、近年の発掘調査により、芳池（蘿山中学校近辺）や城池周辺に、今まで知り得なかった家臣や職人等の居住地が存在したことが明らかにされている。

最後に、平成2年に行われた発掘調査について少し触れておきたい（及川・望月1991他）。この時の調査地点は絵図に「御座敷」と記されている場所で、調査の結果、調査区中央よりやや西寄りで「中堀」を、調査区西端で「外堀」を検出している。いずれも南北方向に走る堀である。「中堀」は幅約15mで検出面からの深さは2.5m、東側法面に土壠あるいは土塁の可能性を持つ杭列が築かれている。「外堀」は東側法面のみの確認である。この堀は絵図に記されている「深田」に相当するものと思われる。なお、絵

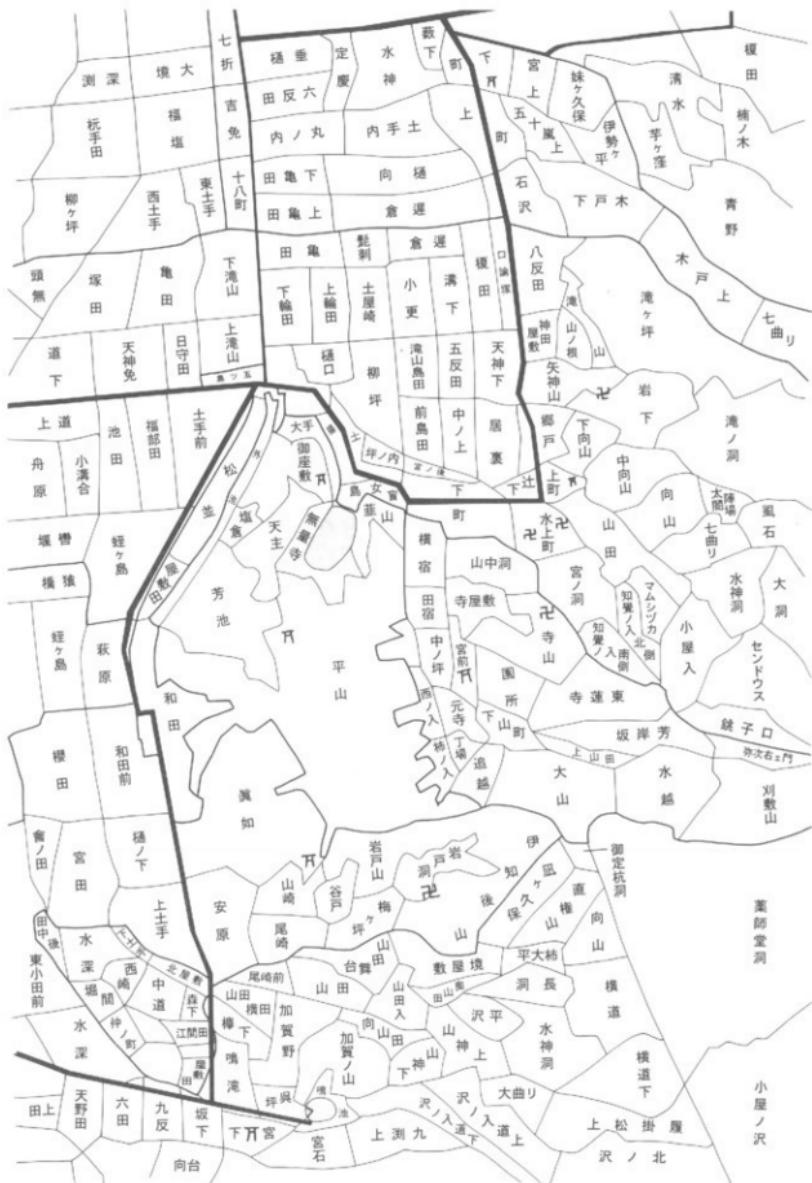


第5図 蘿山城絵図（拡大）

江川文庫所蔵



第6図 蘿山城調査区周辺図



第7図 蓼山城周辺地籍図

蓼山村地番反別入地図（昭和7年）をもとに作成

団によると龍城山を巡るかたちで堀が描かれているが、この堀は検出されなかった。担当者によると、「調査区東端と山裾の間隔は10m足らずとさほど広くないため、或は『内堀』は存在しなかった可能性もある」とのことである。堀の他には井戸跡と思われる遺構（径約4.5m、検出面からの深さ3m以上）や園池状遺構（東西約15m、南北約10m）が確認されている。両遺構とも「御座敷」内に存在することになる。しかし、この時の調査では居館跡とみられる遺構は検出されなかった。遺物としてはかわらけの他に、陶磁器・漆挽・下駄・箸・陶磁器・小札・鉄砲玉等が出土しており、調査地点が居住地域であったことを示している。

<第1章 参考・引用文献>

- 蓮山町 『蓮山町史』第1巻～第11巻
- 静岡県立蓮山高等学校 1973 『蓮高百年』
- 田方郡 1918 『田方郡誌』
- 村山修 1987 『図説 中世城郭辞典2 中部・近畿1』
- 新人物往来社 1979 『日本城郭大系9 静岡・愛知・岐阜』
- 静岡県教育委員会 1994 『蓮山城跡』『静岡県埋蔵文化財年報(平成2年度)』
- 静岡県教育委員会 1981 『静岡県の中世城跡』
- 蓮山町教育委員会 1973 『蓮山』
- 蓮山町教育委員会 1985 『御所之内遺跡発掘調査報告書 予備調査～第3次調査』
- 蓮山町教育委員会 1995 『伊豆蓮山円成寺遺跡』
- 蓮山町教育委員会 1981 『山木遺跡第6次調査報告書』
- 蓮山町教育委員会 1979 『蛭ヶ島 調査報告書』
- 及川司・望月保宏 1991 『蓮山高校校舎建て替えに伴う埋蔵文化財発掘調査速報』『龍城論叢』第14号 静岡県立蓮山高等学校
- 斎藤宏 1986 『蓮山城・山中城の火網銃と鉄砲玉』『蓮山町 町史の栄』第10集
- 斎藤宏 1996 『北条流連城術の粋—蓮山城と山中城—』『蓮山町 町史の栄』第20集
- 原茂光 1995 『伊豆蓮山門遺跡について』『歴史手帖』第23巻9号
- 原茂光 1993 『史跡伝遞越御所跡、北条政館跡及び蓮山城跡関連遺跡における遺物の様相』『歴史手帖』第21巻1号
- 伊禮正雄 1987 『蓮山城をめぐる若干の問題』『蓮山町史』第3巻下
- 加藤雅功 1976 『静岡県東部の条里遺構について』『沼津市歴史民俗資料館紀要』1
- 大原美芳 1989 『蓮山城と江川家』『伊豆の郷土研究』第14集 田方地区文化財保護審議委員会連絡協議会
- 鎌木在泰 1976 『蓮山城攻守城戦の研究原案』『蓮山町 町史の栄』第1集
- 閑樹省治 1989 『内藤信成と蓮山』『蓮山町 町史の栄』第13集
- 小和田哲男 1992 『北条氏親に関する基礎的研究』『蓮山町 町史の歴』第16集
- 小和田哲男 1996 『北条氏親と豊臣秀吉』『蓮山町 町史の栄』第20集

第II章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

今回調査の対象となった県立葦山高等学校のプールは、昭和39年の竣工からおよそ30年が経過しているため、その老朽化が顕著となってきた。そのため、このプールを解体して同じ場所に新たに建て替えることとなった。だが今回の調査対象地を含む葦山高校の敷地は後北条氏の支城である葦山城跡の範囲内であり、また水田遺跡として著名な山本遺跡と隣接している場所である。実際に平成2年度の葦山高校校舎改築に伴う発掘調査が実施された際、葦山城の遺構や古墳時代まで遡る多様な遺物が検出された。

前回のプール建設の際には発掘調査が実施されなかつたため、プールによって既に遺跡が破壊されている可能性もあったが、さきのような状況から、今回の改修工事に際しても、埋蔵文化財の調査の必要性があると考えられた。そこで県教育委員会文化課・体育保健課・沼津上木事務所で協議を行った結果、改修前に発掘調査を実施することが決定された。現地調査はプール改修工事の都合上、平成7年度の上半期に実施することとなった。調査は県教育委員会文化課の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行うこととなった。

発掘調査を実施するということが決定された後、平成7年3月にプールの解体が重機によって行われた。これと併せて、調査区内で既に遺跡が破壊されている箇所も同時に、重機によって削平することとなった。そのため、遺跡の残存している箇所を削平しすぎないように、当研究所職員が隨時、この掘削工事に立ち会った。

削平の最中、プールサイド（以下、本草中ではPSと略す）部分において遺物が大量に出土する土層が存在することが判明した。そのため、PS部分でもシャワー・水道等のプール付属構築物によって明らかに破壊されている箇所を除き、北東側・東側および南側の一部のPS部分は重機での掘削を行わず、調査を実施することにした。それ以外の部分（PS部分で擾乱が深く及ぶ箇所や、プール本体部分など）は先に述べたとおり、構築物や擾乱層がほぼ撤去しきれるレベル（標高約13.2m、地表面から約1.5mの深さ）まで重機によって掘削された。平成7年3月に掘削は完了し、翌4月から発掘調査が開始された。

実際に調査を行ったところ、葦山城跡に関する遺構・遺物と、山本遺跡につながる遺構・遺物が出土した。そこでこの2遺跡について、簡単ではあるが過去の調査の経緯について触れておきたい。なお、第2・3表及び第8・9図は、葦山町教育委員会の御厚意により掲載できたことを記しておく。

＜葦山城跡調査歴＞

戦国大名である後北条氏やその城郭は、多くの文献史学者や城郭研究者の研究対象となっている。その中で葦山城に関しては、伊禮正雄氏（「葦山城をめぐる若干の問題」『葦山町史』第3巻下 1987）や斎藤宏氏（「葦山城・山中城の火縄銃と鉄砲玉」『葦山町史の菜』第10集 1986、他）等の論考が代表的研究として挙げられよう。

ところで葦山城の構造を光明する際に、現況踏査と絵図を基にした研究のみでは自ずと限界が存在する。現在の城跡の状態は廃城時のものであるし、今に遺されている葦山城の絵図（カラー図版3）は江戸時代に作成されたものであるため、これも廃城後の姿であると考えられるからである。葦山城は北条早雲が入城してから約1世紀近く存続した城であり、文献で改修の記録が遺されているにもかかわらず、近年まで考古学的調査が実施されてこなかったため、存続していた間の経緯は全く不明なのである。

しかし近年の緊急発掘調査の急増という状勢の中で、葦山城に対する考古学的調査も行われるようになってきた。平成2年には県教育委員会文化課によって龍城山の西側平地にあたる地点で調査が実施された。絵図では御座敷とされている地点である。調査によって検出された城の遺構として「中堀」と「外

堀」がある。他に園池状遺構や井戸状遺構、更に古墳時代の祭祀遺構等を検出している。しかし、絵図に描かれている「内堀」は検出されなかった。

また、遺跡名は異なるが城池の東側に位置する無量寺遺跡や、龍城山の南側に位置する芳池遺跡、土手和田砦付近に位置する和田遺跡では、葦山城に係わる武士や職人の居住域が確認された。これら遺跡名は地籍名で便宜的に付けられたものであるが、明らかに葦山城に関連する遺跡である。この中でも芳池遺跡の第1次調査は、石積み水路や堀・掘立柱建物・井戸等を検出し、屋敷地が石積み水路や堀・道路により区画されていることを明らかにした点で特筆される。他にも和田遺跡で検出された道路跡や無量寺で検出された掘立柱建物等、葦山城が一乘谷朝倉氏遺跡と同じように城と屋敷群がセットで捉えられる遺跡であるだけでなく、良好な遺存状態で埋蔵されていることは明白である。その点で葦山城跡とその関連遺跡が、中世城郭研究の中で重要な遺跡となり得るのではないかと思われる。

葦山城に関する今後の研究課題としては、①城域の改修・改築等の変遷、②居住域における屋敷割等の2点の解明を軸に、後北条氏の支配体制や後北条氏領国下における葦山の位置付け等を明らかにしていくことが挙げられるだろう。現状ではまだ調査事例の蓄積の段階であると思われる。

＜山木遺跡調査歴＞

山木遺跡は昭和25年に、排水路工事により発見された。後藤守一氏により試掘調査及び第1次調査が実施され、弥生時代の水田跡であるという結論に達した（註：報告書「葦山村山木遺跡」では、試掘調査を第1次調査、本調査のことを第2次調査としている）。丁度その頃は登呂遺跡の発掘調査が実施されていた頃であり、どちらも弥生の水田遺跡として広く知られるようになった。山木遺跡の調査で特筆されるのは、生活具・農工具や建築部材といった木製品の大量出土である。当時は登呂遺跡を凌ぐ出土量として喧伝された。これら木製品のうち、生活用具239点は一括して国の重要民俗文化財に指定され、建築部材にいたっては登呂遺跡の高床倉庫復原の基礎資料として活用された。

第2次調査は昭和42年に、八幡一郎氏を団長として実施された。調査の結果、山木遺跡が弥生時代よりもむしろ古墳時代前期が主体の水田遺跡であることが指摘された。また、一方が2.3mの方形堅穴遺構の出土も重要である。四隅のうち3箇所で柱穴が検出され、また炭化材が遺構内から出土したこと等から、最終的には堅穴住居跡ではないかとの結論に達している。更に、弥生～古墳時代の畦畔とは方位が明らかに異なる杭列が2列検出された。概報では律令期の条里制遺構ではないかと報告されているが、この遺構が田方条里として層位的に確定するのはまだ後のことである。

第3次調査では、遺跡の範囲が第1次・第2次調査地点よりも西へ広がることが確認された。更に山木遺跡の範囲確認を目的として実施された第4次調査により、遺跡がかなり広範囲に広がることが判明した。また旧地形が明らかとなり、旧地形では龍城山の北方に微高地が広がっていること等が判明した。第4次調査では1基の柱穴が検出され、この柱穴と堅穴遺構が微高地に位置することも明らかとなった。

近年の調査では、第9次調査が最も注目されるものである。この調査において初めて条里畦畔が層位的に確認された。第10次・第13次調査においても条里畦畔が検出され、第2次調査の杭列も含めたこれらの方位が全て一致することも確認された。山木遺跡は現在までに13次を数える調査が実施されている。

現在までの調査の結果、山木遺跡が広域に広がる遺跡で、弥生時代後期から古墳時代前期を主体とする水田跡と、平安時代後期頃の条里制水田跡を主体とする遺跡であることが判明している。居住域に関しては第4次の範囲確認調査等で明らかにされた旧地形の所見からおよその見当がつけられており、実際に堅穴住居跡と思われる堅穴遺構1基（第2次調査）と柱穴1基（第4次調査）が検出された。しかし集落の全容を解明するまでは到っていない。しかも墓域は全く不明の状態である。これら集落跡・墓跡を明らかにしていくのが当面の課題であろう。（註：第1次調査の調査地点は地番が明確ではないため、第9回に掲載した位置は若干ずれている可能性がある。その旨了解して図を参照して頂きたい。）



第8図 荘山城跡関連調査地点位置図（1：10000）

	調査年	所在地	調査主体	担当者	調査原因	検出遺構	出土遺物
1	莊山城跡 第1次	莊山229 荘立 莊山高等学校内	静岡県教委 及川用司 望月保宏	莊山高等学校校舎 改築	奈良道標（古墳時代）、築 跡・園道状遺構・井戸状遺 構・杭跡・柱穴（中世）	土器・陶輪器（弥生～戰國）、木簡 （中世）、木製品（田下駄）、曲物、箸、 建材他、金良、平田～戰國）、金屬製 品（鉄製鎧兜、鉄鏡、鎧兜、奈良、平 安～戰國）、その他	
2	莊山城跡 第2次	莊山229 荘立 莊山高等学校内	（財）静岡県 埋蔵文化財 青木 修	莊山高等学校ブー ル改築	石積み遺構（戰國時代）、築 跡・壁居跡・獨立社跡・道路 （弥生後期～古墳前期）等	土器・陶輪器（弥生～戰國）、土製品 、石製品、金屬製品、木製品（形代、 唐器、鏡面、杜根他、弥生～戰國）等	
3	芳池遺跡 第1次	莊山莊山字芳池 521地	莊山町教委	原 茂光	莊山中学校テニス コート建設	陶器、曲物、漆器	
4	芳池遺跡 第2次	莊山莊山字芳池 393	莊山町教委	原 茂光	莊山中学校テニス コート建設	陶器、水田跡（古墳）	
5	芳池遺跡 第3次	莊山莊山字芳池 395-43	莊山町教委	原 茂光	莊山中学校ブール 建設	木山跡（莊町 弥生後期～ 古墳前期）、溝（中世）、 水路（古墳）	
6	芳池遺跡 第4次	莊山莊山字芳池491- 1、492	莊山町教委	原 茂光	個人住宅建設	溝、土坑、柱穴、屋敷跡	
7	無量寺 遺跡	莊山莊山13-1地	莊山町教委	原 茂光	公園造成	屋敷跡	
8	和田遺跡	上手和田字和田 171	莊山町教委	原 茂光	地区公民館建設	測量を行ふ道路	

第2表 荘山城跡及び関連遺跡調査一覧表



第9図 山木遺跡関連調査地点位置図（1：10000）

	調査年	所在地	調査主体	担当者	調査原因	検出遺構	出土遺物
1	山木道跡 第1次	1950	山木村	後藤守一	河川改修	岐阜、田河直	土器（陶土器・土師器）、木製品（皿・高杯・櫻型・鏡など）、植物葉材
2	山木道跡 第2次	1967	山木町教委	八幡一郎	バイパス建設	水田畦跡、水路、住居跡（土師・脚部）	多量の土器、木製品
3	山木道跡 第3次	1975	四日町字山塊305-1他	山木町教委 小野真一	山木町庁舎建設	水田畦跡	木製品（田下駄・有柄棒など）
4	山木道跡 第4次	1976～ 1977	山木町教委	小野真一	糞廻査調査	水路跡	土器（陶土器・土師器など）、木製品（大足・櫻・口口など）
5	山木道跡 第5次	1978	山木字龟田29	山木町教委 秋本真澄	農協米穀倉庫建設	水路跡、畦跡	木製品（手斧木質部・田下駄ほか多数）
6	山木道跡 第6次	1980	四日町字山塊231他	山木町教委 小野真一	マンション建設	水田畦跡、溝状遺構	土器、木製品（田下駄・把手付盆・桶子など）
7	山木道跡 第7次	1982	四日町290	山木町教委 原 茂光	商工会館建設	舟戸（現代）	环形土器
8	山木道跡 第8次	1984	山木字龟田28、 29	山木町教委 原 茂光	農協ライセンタービル建設	岐跡	土器、弦、田下駄
9	山木道跡 第9次	1993	山木町字龟田 6、7	山木町教委 原 茂光 安井敏博	J A野菜集・出售 所建設	水田跡（岐跡）	瓦輪陶器・土師器、青磁、因縫陶器、 大足・田下駄・机
10	山木道跡 第10次	1994	山木字井先68 他	山木町教委 原 茂光	その他開発（駐車場）	水田跡（古墳及び平成）・ 溝（弥生～古墳）	土器（弥生～中世）・陶器、木製品（ 大足・大足の櫻木・桶子等）・銅鏡2 点他
11	山木道跡 第11次	1995	山木字五ツ島9 他	山木町教委 原 茂光	岐道試掘	舟戸（中世）	土器（古墳～中世）。宝鏡印塔
12	山木道跡 第12次	1996	四日町字山塊 236 1	山木町教委 原 茂光	個人住宅建設	岐跡（古墳・平安）	土器（古墳～中世）。铁劍玉、馬ぬ
13	山木道跡 第13次	1996～ 1997	四日町字山塊 245-1他	山木町教委 原 茂光	福祉保健センター 建設	岐跡（古墳・平安）	土師器、青磁、因縫陶器、かわらけ、 木製品（田下駄・有柄杯・桶子・柱・ 大足・曲物・弓）、鍛冶系・鍛冶物
14	兵衛の森 道跡	1981	四日町字上手前 210-3、211-1	山木町教委 原 茂光	山木町森林環境 美化センター建設	石積み遺構（岐田時代）・ 聖火住居跡・獨立柱住跡 (發生後期～古墳前期)	土器・陶器（弥生～戰国）、木製品 ・石製品、全圓形品、木製品（現代）、 漆器、骨器、瓦生・鉢形等
15	山木城跡 第2次	1995	山木229 竜立 (附)静岡県 埋蔵文化財 青木 修	小川正夫 山木高等學校内	山木高等學校ブー ル改修	石積み遺構（岐田時代）・ 聖火住居跡・獨立柱住跡 (發生後期～古墳前期)	土器・陶器（弥生～戰国）、木製品 ・石製品、全圓形品、木製品（現代）、 漆器、骨器、瓦生・鉢形等

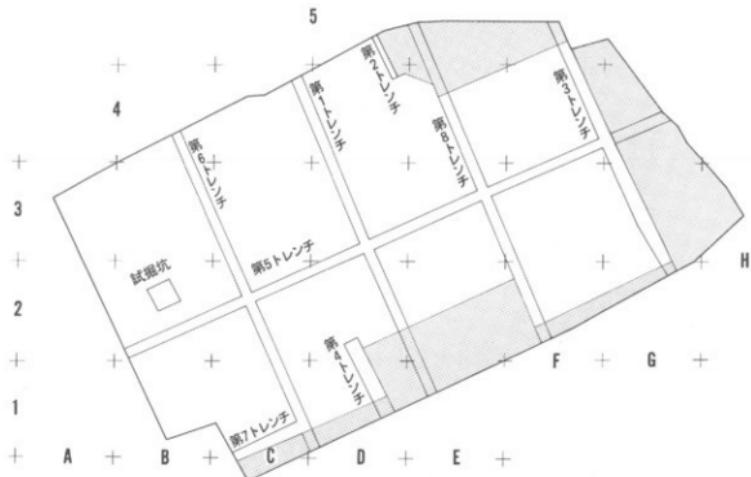
第3表 山木遺跡及び関連遺跡調査一覧表

第2節 調査の方法

調査対象区域には調査の便宜上、国家座標（平面直角座標VII系）の軸線を基準に、10mメッシュを設定した。メッシュには南北方向に南から北へ0・1・2・・、東西方向に西から東へA・B・C・・と数字およびアルファベットを順に付けていった。各グリッドはこれらの組み合せによりA-0・B-1というように表記することとし、遺構や遺物の記録は全てこのグリッドを基準として行った。現地では、メッシュの交点に基準となる杭を打設し、各グリッドの南西隅の杭をもって、そのグリッドを表すこととした。調査区南西隅に設定されたA-0グリッド杭の国家座標は、X=-104,940、Y=41,830である。同時にベンチマークを調査区東側隅にH=14.600mで設定し、各グリッド杭にもそれぞれの杭上面に打ちれた釘頭部の標高を杭側面に記し、遺跡調査時にレベルやポイントの測定等に利用した。

調査は大きく分けて、①土層確認—②歴史時代第1遺構面の調査—③歴史時代第2遺構面の調査—④歴史時代の補足調査—⑤弥生時代～古墳時代の調査—⑥弥生時代～古墳時代の補足調査と実施していく。調査は原則として手掘りで、各層ごとに遺構・遺物検出を実施していく。P S部分に残存していた表土は、①の段階で重機（バックホー）を利用して掘削した。また③—④の段階および⑤—⑥の段階においても重機を利用して調査区全体を掘り下げた。この際、遺物が出土した時即座に対処できるようするため、重機掘削の場に作業員を配置し、遺構・遺物の出土を監視した。排土処理に関しては、調査区南東部に排土置き場を設定して、一定量がここに溜る毎に10tダンプカーで土捨て場へ搬出した。

調査区の南側に、道路を挟んで池が存在するため、調査中は常に湧水で悩まされた。特に城の調査中は、城の遺構が調査区南側に遍在していたために、南側に充分な排水溝を掘削することができなかつた。そこで全8箇所にものぼるトレンチを設定し、湧水に備え、同時にここで土層堆積も観察した。なお、トレンチ以外に試掘坑も1箇所設定し、土層堆積の把握に努めた。城の調査が終了した後は、調査区の



第10図 グリッド及びトレンチ設置図

四周に排水溝を、そして調査区東北隅に集水枡を設定し、更に第1・5トレンチをそのまま利用して排水処理を行った。なお、第2・3・4・6・8トレンチは、集落面の調査段階では消滅するように、深掘りをしなかった。本調査区はプール跡地であるため、排水自体はプールが機能していた時に使われていた排水管をそのまま利用し、水中ポンプで水を汲み上げて行った。なお、調査区境の土壁が脆弱なため、法面を階段状に掘削して、崩落の危険に備えた。

遺物の取り上げにあたってはトータルステーションを使用して、原則として1点ずつ出土ポイント及びレベルを計測して取り上げた。ただし土器片は、残存状態の良好な遺物以外は、各グリッド毎の出土層位別に一括して取り上げるか、遺構を単位として取り上げた。遺物番号は、遺物を遺跡から取り上げた直後に付番し、以降この番号を利用して遺物調査を行えるようにした。原則として遺物1点毎に遺物番号を付けたが、グリッド或は遺構一括で取り上げた土器片は、取り上げた単位で番号を付けていった。

遺物・遺構の記録には、写真による記録と実測図による記録を併用し、遺構や遺物の状況に応じて使い分けた。写真撮影には中型カメラ（6×7版黑白）、小型カメラ（35mm黑白・35mmカラーネガ・35mmカラースライド）を使用した。高所からの撮影には、3段のローリングタワー やハイライダー等を利用した。実測図はトータルステーションや平板等を利用するものもあったが、大方は水糸を張り巡らして作図した。原則として、平面図および土層断面図は1/20で、遺物出土状態図は1/10で作成したが、必要に応じて縮尺をかえて作図した。なお、蘿山城石積遺構および集落遺構面に関しては、㈱シン技術コンサルに図面作成を委託し、写真実測で1/20の図を作成した。

＜遺構・遺物の保存措置＞

今回遺構として保存することができたのは、S X-4（蘿山城石積み遺構）である。この遺構の位置は丁度P Sの真下にあたるため、関係各機関で協議した結果、盛土することによって工事に影響なく保存できることが判明し、幸いにも後世に遺すことができた。しかし、遺構の上部がわずかに保存標高の基準よりもオーバーするため、調査区埋め戻しの直前に遺構の上部をわずか2cm前後であるが削り取った。この削平は石積み遺構自体には影響がないことを確認した上で実施した。そして石積み遺構の周囲に均一に細砂をかぶせ、遺構の養生を図った。

出土遺物の保存処理方法についても簡単に記しておく。木製遺物及び種子等の自然遺物に関しては、取り上げて洗浄した後は、0.5%ホウ酸・ホウ砂水溶液に浸漬して一時保管した。遺物調査の後、出土木製品の大部分を占める含水率の低い遺存状態の良好な遺物は、当研究所で既に実績をあげているPEG冷温合浸法を使用して恒久的保存処理を施した。それ以外の本製造物は、状態に応じてPEG（加熱）合浸法や真空凍結乾燥法を使用した。種子は洗浄した後、アルコール脱水を実施した。また、木質部分が消失した漆製品や取り上げの困難な遺物は、周囲の土ごと取り上げて冷蔵庫に一時保管した後、アクリル樹脂（商品名：パラロイドB72）やポリシロキサン樹脂（商品名：ビフォロン）を使用して強化処理を施した。劣化した獸骨は、パラロイドB72を用いて強化処理を施した。金属製造物に関しては、付着した土を軽く払い落としてエタノールで洗浄した後、シリカゲルを入れたプラスチック容器に密封して一時保管した。グラインダーやメスを使用した鏽落しを行った上で遺物の調査を実施し、調査が終了した後、鉄器はオートクレープによる脱塩処理と、MV1の減圧合浸による強化処理を施し、銅製品はベンゾトリアゾール・パラロイドB72・キシレン溶液の減圧合浸で安定化処理を施した。

第3節 調査の経過

本遺跡の現地発掘調査は、平成7年4月1日に開始して10月31日に終了した。調査面積は表面積で約1,700m²である。本章第1節に記述したとおり、昨年度の段階で既にプールは解体され、プールが設置されていた高さ（地表面から約1.5mの深さ）まで、重機によって掘削されていた。ただし、PS部分はプール本体部分ほど深く破壊されていないと思われたので、明らかに破壊されている箇所を除いた北東側・東側及び南側のPS部分は掘削せずに、表土も残した状態から調査を開始した（第10回撤掛け部分）。

4月 最初の週は資材搬入および調査の事前準備を行った。11日に仕事始め式及び地鎮祭を執り行い、調査を開始した。当初は10人に満たない人数で開始された。本地点は試掘調査を行っていないため、先ず層序の把握から始めた。遺跡中央部に擾乱（排水管の敷設跡）の掘り込みがあったため、これを南北に延ばして第1トレーニングとし、擾乱部分は特に深く掘り下げた。同時に、調査区西側にあった擾乱の掘り込みを利用して、ここにも2.5m四方の試掘坑を設定し、層序の把握に努めた。その結果、葦山城に伴う土層の遺存状態が余り良くないことと、葦山城より下層は良好な遺存状態であることが判明した。また、第1トレーニングにおいて礎板を伴う柱穴が確認され、本遺跡内に集落が存在することが推定された。

上記以外にも第2～第4トレーニングを設定し、土層堆積及び遺構の把握に努めた。このうち第4トレーニングから面取りされた約40cm大の石が検出された。土層や出土遺物から葦山城に関する何らかの遺構である可能性を考えたが、これがSX-4石積み遺構の一部であることが判明したのは6月のことである。この月は雨天で調査順延になる日が多く、人員不足もあって作業は思うように進まなかった。

5月 この月から増員等により、本格的に調査が開始された。第1週目に、昨年度重機で掘削しなかったPS部分の表土剥ぎを実施した。その結果、PS部分にもかなり広い範囲で、浅い擾乱が存在することが明らかとなった。しかし、これら擾乱の合間でSX-1やSF-1、柱穴群といった遺構を検出することができた。

また、調査区の層序把握のため第5～第7トレーニングの掘削も並行して行い、本遺跡における基本的な層序を確定した。この際、第6トレーニングから、4月に検出した石列につながると思われる南北の石列が検出された。

6月 引き続き歴史時代の柱穴及びSX-1・SX-3などの調査を行った。また、第4・第6トレーニングにて確認されていた石列の調査も実施した。これにより、この遺構が単なる石列ではなく、石垣状に積み上げられていることや、石列の南側が城内らしいということなどが判明した。そのため、この遺構を葦山城石積み遺構（SX-4）という名称にすることを決定した。

他に層序把握のため、第8トレーニングの掘削も実施した。また、排水対策のため、調査区周溝の掘削も開始した。これらトレーニング・周溝の掘削により、調査区南側に東西へ伸びる杭列（SA-1）が存在することが確認された。この杭列が畦畔である可能性も考えられたので、21日に水田土壤の確認と古環境の調査のため、土壤サンプルの採取を実施し、花粉・珪藻分析などを行うこととした。

本月末は実測等の記録作業を優先し、精査及び遺構の掘り下げは（SX-3を除き）一旦停止した。7月 第1週目は先月に引き続いて記録作業を行った。その後、SX-4および杭列の存在する南側を除いた調査区全体を、重機を使用してIV層上面まで掘削した。この段階で精査を行ったが、遺構は確認されなかった。そのため、人力によりVFa層上面まで掘削し、ここで再び精査を実施することとした。なお、28日には本遺跡にて県教育委員会等主催の埋蔵文化財発掘体験教室が開催され、30人の小中学生の参加を得た。

8月 本月は学校が夏休みということもあり、多くの地域中学校生徒の発掘参加があった。また5日に

は現地説明会を開催し、約200人の参加を得た。調査に関しては、先月末に開始したVa層上面の精査・集落遺構の確認を継続して実施した。この際に、中世前後の遺構の補足調査もあわせて実施し、SF-2やSF-3、SD-1などを確認し、調査を実施した。

一方集落関連遺構は、非常に多くの遺構が重複しているにも関わらず、明確にプランの把握できるものが少なく、溝状遺構数条と柱穴数10基程度しか検出できなかった。そのため、本レベルで確認し得た遺構を完掘した後、南側を除いた調査区全体を更に約20cm程掘り下げ、このレベルで集落遺構の本格的な調査を行うこととした。この掘削の段階で土器集中出土地点の調査などを行い、非常に多くの遺物を検出した。

SX-4に関しては、盛土による保存が関係機関によって本格的に検討されるようになったので、22日に写真測量を実施した後、SX-4の保存区域を設定した。そして、7月に重機で掘削しなかった調査区南側（保存区域を除く）の掘り下げを人力で行った。これは本月中に完了した。この時、IIe層中から銅製鏡が出土した。

9月 一部残っていた中世～近世の遺構の調査を上旬に完了させた。調査区南側については、IV層の除去が終了した後、杭列の調査を開始した。しかし、水田とする有力な所見は得られなかったため、記録をとった後、調査区北側と同じレベルまで調査区南側も振り下げて、集落関連遺構の調査に入った。

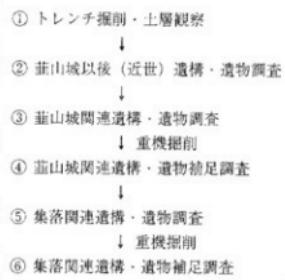
集落面の調査に関して、プランの確認された柱穴は、切り合ひを確認して新旧関係を把握したものから順次完掘していく。礎板の出土した柱穴に関しては、すべて写真撮影を実施し、また礎板の劣化を防ぐため、出土から時間を置かないように、迅速に実測と取り上げを行った。竪穴住居跡は、各々のプランを確認した後、本月中旬頃から振り下げを開始した。

10月 先月から引き続いて集落面の調査を実施した。7日に宮本長二郎先生が来跡し、礎板に転用されている建築部材および検出された掘立柱建物跡についての御教示を頂いた。また、同日に集落面の写真測量を実施した。しかしこの段階ではまだ調査区東側の一部が未調査であったので、写測後に調査区東側の精査を実施した。これにより3軒の竪穴住居跡と柱穴群を検出したので、これら遺物の取り上げおよび遺構の写真撮影・実測作業を行った。16日から補足調査として、調査区全体を重機により遺構検出面から更に約20cm振り下げて、検出漏れした遺構の確認を行った。その結果、予想以上の数の柱穴を検出した他、竪穴住居跡2棟と溝状遺構1条を検出した。これら遺構は検出したものから順に完掘していく、記録作業を実施していく。この間、17日には古環境等の調査のため、土壤サンプルの採取を実施し、花粉・珪藻分析などを行うこととした。23日に調査を完了し、埋め戻しを開始した。31日には現地での作業を全て完了し、現地を業者に引き渡した。

室内整理・報告書作成の概要 平成7年11月から室内整理作業を本格的に開始した。先ず、現地で作成した実測図や写真測量図の編集作業と、現地調査中から実施していた遺物洗浄・分類作業を実施した。

図面整理作業に関して、平成7年12月に遺構図の編集作業が終了して遺跡全体図がほぼ完成した。この際、図面資料を検討することによって、新たに5棟の掘立柱建物跡の存在を確認した。翌8年1月に報告書挿図版作成・トレース作業等を開始し、平成8年度の上半期に完了した。

遺物整理作業に関して、遺物の洗浄作業を平成8年2月まで実施した。3月からは遺物の注記作業などを実施し、平成8年4月から遺物の接合・復元・実測・写真撮影を開始した。同年11月から報告書挿図版作成・トレース作業等を開始し、平成9年3月に完了した。



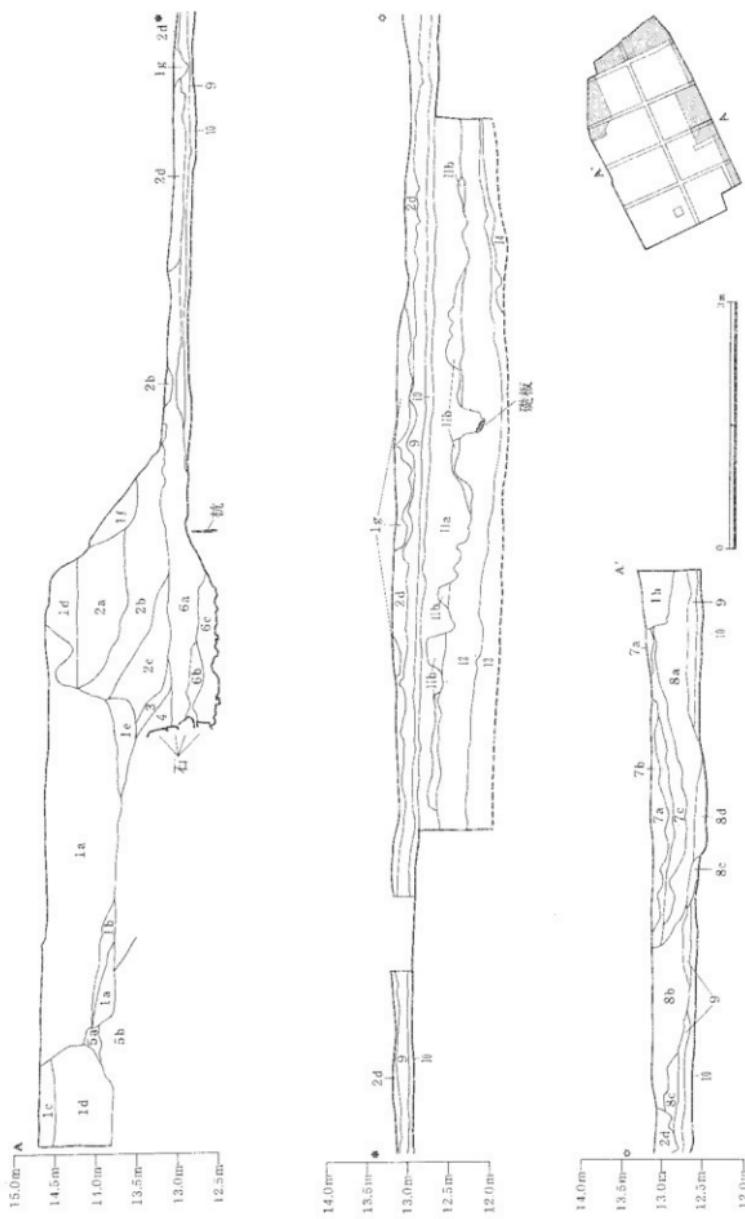
第4表 調査工程略表

第III章 基本層序

本調査区において設定した第1～第8トレーナーのうち、調査区中央で南北方向に設定した第1トレーナーで確認された上層が、本調査区における最も標準的と思われる堆積であった。それ故第1トレーナーの中央部分を更に深掘りして無遺物層まで確認し、基本層序を設定した。なお、深掘りした中央部分以外は、11a層の上面までの土層について確認した。第1トレーナーの土層堆積については、次のとおりである。

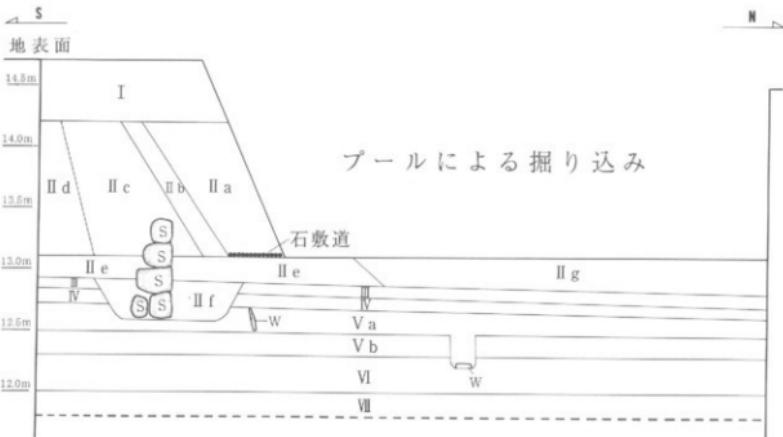
- 1a層 褐色土 しまりなし。コンクリート片や礫を含む。今回のプール解体工事に伴う擾乱である。
- 1b層 緑灰色土 1a層中に混入する。下層の焼き上げ土と思われる。
- 1c層 褐色土 青灰色粒子が密に入り、極めて硬くしまっている。現代の整地層である。
- 1d層 褐色土 極めて硬くしまっている。現代の瓦が大量に混入する整地層である。
- 1e層 褐色土 橙褐色土や緑灰色土のブロックを多く含む。擾乱である。
- 1f層 褐色土 しまりはない。10cm～20cm大の石が本層下辺に敷き詰めるように並べられている。現代の瓦やガラス片を含む。東西方向に溝状に広がる擾乱である。
- 1g層 暗褐色土 大型の礫を含み、かたくしまる。プール造成に伴う擾乱である。
- 1h層 褐色土 現代の瓦を含む。擾乱である。
- 2a層 檗褐色土 灰色土・橙褐色土・黄褐色土（いずれもブロック状 $\phi 20\text{mm}$ 程度）主体で構成される。
- 2b層 檻褐色土 2a層と類似しているが、土層を構成するブロックの径が $30\text{~}50\text{mm}$ と大型であり、ち密である。粘性が少しある。
- 2c層 檻褐色土 ブロック状の檻褐色土が主体であるが、檻褐色土と灰色褐色土が縞状に互層となっている。礫の境は判然としない。
- 2d層 檻褐色土 白色粒（ $\phi 3\text{mm}$ 程度）を多く含む。ブロック状の土で構成されている。2a、2b、2c層と違い、縞状に堆積している。
- 3層 暗褐色土 しまりはない。 30mm 程度の褐色土ブロックが縞状に混入している。また、 $5\text{~}10\text{mm}$ 程度の炭化物が多く含まれる。
- 4層 緑灰色土 砂質でほろほろと崩れやすい。しまりはない。粘性なし。
- 5a層 茶褐色土 ブロック状の茶褐色土で構成されており、かたくしまっている。
- 5b層 茶褐色土 ブロック状の茶褐色土で構成されるが、暗褐色土が縞状に入り、少し粘性がある。
- 6a層 灰色粘土 しまりあり。炭化物がわずかに含まれる。本層中に酸化マンガンが発達する。
- 6b層 緑灰色土 砂質であり、構成粒子の粒径は5層よりも少し大きい。白色粒子・黄色粒子（いずれも $\phi 1\text{mm}$ ）や炭化物がわずかにみられる。
- 6c層 灰黒色粘土 土質は密で粘性は高い。白色・黄色粒子がわずかに散在している。一部に 20mm 程度の橙色パミス状のブロックが含まれる。 2mm 程度の炭化物がわずかに含まれる。下層の11a層との境は耕作痕跡の様な亂れがみられる。
- 7a層 淡黄褐色土 淡黄褐色シルト・灰色シルト・黒色粘土がブロック状に混ざりあって構成されるが、その中で淡黄褐色シルトの存在比率が特に高い。炭化物を小量含む。
- 7b層 黒灰色土 淡黄褐色シルト・灰色シルト・黒色粘土がブロック状に混ざりあって構成されるが、その中で黒色粘土の存在比率が特に高い。炭化物も含む。
- 7c層 黑褐色土 粘性あり。黄褐色粒（ $\phi 1\text{~}2\text{mm}$ ）・白色粒子（ $\phi 0.5\text{~}1\text{mm}$ ）・橙色粒子（ $\phi 0.5\text{~}2\text{mm}$ ）を多く含む。また、炭化物や 5mm 程度の黄褐色土も少し含まれる。
- 8a層 灰褐色土 粘性は少しあるが、しまりなし。黄褐色粒（ $\phi 1\text{mm}$ 前後）・黄褐色土（ $\phi 10\text{mm}$ 前後）

第11図 第1トレーン土層断面図



を含む。また、炭化物も含む。

- 8b層 灰褐色土 粘性はなく、しまりはあまりない。8a層よりも黄褐色粒（ $\phi 1 \sim 4\text{ mm}$ ）・黄褐色土（ $\phi 5 \sim 10\text{ mm}$ ）が多く含まれる。また、青白色粒子（ $\phi 1 \sim 2\text{ mm}$ ）も多く含まれる。
- 8c層 灰褐色土 粘性少しあり。8b層に近似しているが、黄褐色粒や黄褐色土が大きめ（ $\phi 2 \sim 10\text{ mm}$ ）であり、量的には少なめである。
- 8d層 灰色粘土 粘性は高い。青白色粒子（ $\phi 1 \sim 2\text{ mm}$ ）・黄褐色粒（ $\phi 1 \sim 3\text{ mm}$ ）・炭化物（ $\phi 10\text{ mm}$ 以下）が含まれるが多くはない。6a層（灰色粘土）とは別層である。
- 9層 灰黑色土 層厚が約5cm～15cmで、黄褐色粒・茶褐色粒・白色粒子（いずれも $\phi 4\text{ mm}$ 以下）を多く含む。また、炭化物（ $\phi 4\text{ mm}$ 大）も含まれる。土器細片を含む。
- 10層 黒色粘土 やや暗青色がかっている。層厚が約10cm程度で、黄褐色粒・茶褐色粒・白色粒子（いずれも $\phi 3\text{ mm}$ 以下）を含むが、9層よりも少ない。土器細片を多く含み、酸化鉄が発達する。
- 11a層 灰褐色シルト 場所によってはやや青味を帯びる。層厚が約20cm～40cm以上で、葦管状斑紋が多く発達する。植物遺存体や黒灰色土が多く入り込む。本層から大量の弥生土器・土師器等が出土し、柱穴等の掘り込みもみられる。10層との層界は明瞭である。11b層の土壤化した層であると思われる。また、本トレンチでSB-20の土層断面が確認できる（第V章参照）。なお、付編Iにおいて記されている「灰褐色砂混じシルト層」は本層のことである。
- 11b層 浅黄褐色シルト 管鉄・植物遺存体・白色粒子の包含状態は11a層と同様であるが、炭化物は含まれておらず、土器片も確認できない。11a層との境は明瞭ではない。
- 12層 浅黄褐色粘土 無遺物層で、自然堆積層と思われる。下層はグライ化しており、青色化する。
- 13層 青色砂 自然堆積層で、カワゴ平バミスを小量含むほかは均質な層である。グライ化している。無遺物層である。
- 14層 赤褐色砂 自然堆積層で、13層よりも砂が大粒である。カワゴ平バミスを小量含むほかは均質な層である。無遺物層である。
- 1a～1h層はすべて近・現代の掘り込み等であり、2a～8d層までは葦山城に伴う整地土であると考えら



第12図 土層堆積模式図

れる。このうち7a～7c層・8a層・8d層は土坑あるいは溝状の掘り込みと思われたが、平面精査を行ったところ、遺構は確認されなかった。2a～2d層の橙褐色土は、背後の三ノ丸の地山を掘削したものである。4層の緑灰色土は、調査区南側に分布する岩体（変朽安山岩）の風化したものである。7a～8d層は、下層（9層以下）の土を搔き掻げた土層であると思われる。

10層以下に関しては、山木遺跡の他地点の調査においても確認されている土層である。本調査区においても、これら土層は全域に広がっていた。13層より下層は河川の影響によるものと考えられ、これより更に下の土層も粘土層と砂層の互層となるようである。遺物は1層から11層まで出土している。遺構を検出したのは、2a～6a層上面と11a～11b層上面である。

また、地下水位の影響により、調査区全体にグライ化がみられた。場所によって高低があるが、上から順に酸化マンガン集積、酸化鉄集積、グライ化と生成しているのが確認された。

このような所見から、本調査区における基本層序を示すと、次のとおりとなる。

- I層 表土層である。プール建設や近・現代の造成等による堆積である。1a～1h層がこれにあたる。
II層 莖山城の造成に伴う土層である。2a～8d層がこれにあたる。城の普請による堆積は細かく分層することができるが、プール建設による掘削等により土層がかなり削平されていたため、各層の関係を明確にできなかったところが多かった。その中で、遺存状態が良好であり、土層・堆積状況が把握できた造成土をそれぞれ、IIa層（橙褐色土 2a～2d層）・IIb層（暗褐色土 3層）・IIc層（緑灰色土 4層）・IId層（茶褐色土 5a・5b層）・IIe層（灰色粘土 6a層）・IIIf層（灰黒色粘土 6c層）とした。これら層は広域に分布し、新旧関係が明白であるうえ、土質・色調等が全く異なるので、それぞれ堆積の時期は異なると思われる。一方、IIa～IIIf層以外の造成土（7a～8d層他）は、調査区全体としては層序が判然としない部分があるが、各層とも下層を搔き掻げた土である等、土層の傾向が類似しているため、一括してIIg層（莘山城造成土）とした。時期はIIa層と同じと思われる。
- III層 9層の灰黒色土である。従来の調査では中世という年代観が与えられている。しかし、今回の調査ではII層と時期的差異が確認できなかった。本層は従来の調査で確認された灰黒色土層とは別層の可能性がある。
- IV層 10層の黒色粘土である。従来の調査では10世紀代という年代観が与えられている。本遺跡ではこれを遺物から確認することはできなかったが、同一層とみて問題ないであろう。
- V層 古墳時代前期を主体とする集落面である。11a層の灰褐色シルト（Va層）と11b層の浅黄褐色シルト（Vb層）がこれにあたる。Va層はVb層が土壤化したものである。
- VI層 12層の浅黄褐色粘土である。本層は本調査区内外では大部分がグライ化しており、青色粘土として分布している。今回の調査では、遺物が検出されなかった。
- VII層 自然堆積の砂層である。13層の青色砂と14層の赤褐色砂がこれにあたる。

本調査地点におけるIV層以下の堆積は、基本的に今までの山木遺跡の調査で確認された土層と一致する。上層堆積に関しては、従来の調査の中では第4次調査で詳しく調査されており、この中でE-2地点が今回の調査地点に最も近く、土層も類似している。すなわち、今回の基本層序中のIV層はE-2地点での黒色土層（IIIb層）に相当し、Va層は灰褐色シルト層（IV層）に相当し、VII層は青色砂層（VII層）に相当する。しかし、III層が第4次調査で確認された灰黒色土層（IIIa層）に相当するかは、今後の検討課題である。

第Ⅳ章 歴史時代

第1節 遺構

中世以後の遺構・遺物は、今回解体したプールの、プールサイド部分にあたる調査区南隅および東隅に集中して出土した。遺構は土坑2基、竪穴状遺構1基、石組暗渠1基、溝状遺構1条、不明遺構、石積み遺構、枕列と柱穴群がある。これらは大きく葦山城に関連する遺構であるか、廃城後の近世遺構であるかに分けられる。

遺構の検出は、まず表土および擾乱層を除去した状態で実施した。この段階でIIa層上面の柱穴群、SX-1、SX-3、SF-1を検出した。その後IIa層等を除去してSX-4の検出を実施し、最後にVa層まで下がった段階で柱穴群、SD-1、SF-2、SF-3、SX-7、SA-1を検出した。これら遺構の検出面は大きく第1遺構面と第2遺構面に分けられる。

1. 第1遺構面

第1遺構面はIIa層～IIg層上面が基本検出面である。検出された遺構は、SF-1、SX-1、SX-3とE-2グリッド付近の柱穴群である（第13図）。なお、SF-2はVa層上面で検出したが、第1遺構面の他の遺構と時期的に近いため、第1遺構面に属するものとした。

(1) 竪穴状遺構 SX-1（第15図、図版4）

C-0・C-1・D-1グリッドで検出された。主軸方向はN-67°-Eであり、現在の地割とほぼ同じである。東西方向は壁面の立ち上がりが確認された。西壁の大部分は擾乱によって破壊されていたが、幸うじて一部が残存していた。しかし、南側は調査区の外に続き、北側はプールにより削平されていたので、どちらも壁の立ち上がりが確認できなかった。そのため、本遺構の南北長は不明である。規模は東西方向が約4.6m、南北方向が残存長で約2.3m、検出面からの深さは25cm前後である。本遺構の上層堆積は次のとおりである。

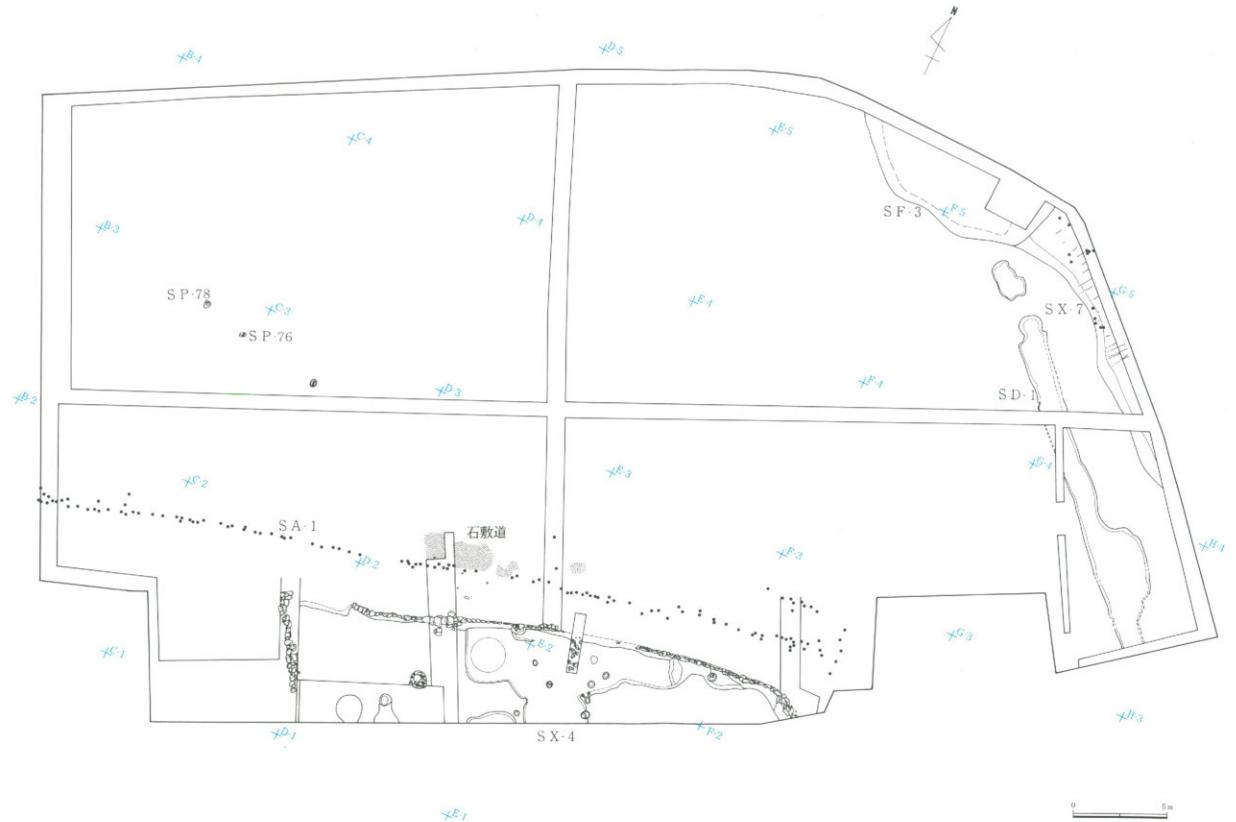
- ①層 ブロック状（φ10mm前後）の黄褐色土で構成される。かたくしまる。白色粒（φ5mm）を含む。
- ②層 青白色粒子（φ1～2mm）で構成される。部分的に褐色土が入り込む。
- ③層 褐色土 白色粒子（φ1～2mm）、黄褐色粒子（φ2mm）の他、ブロック状の灰色土（φ5～20mm）を含む。
- ④層 褐色土 しまりあり。白色粒子（φ1mm）、黒色粒子（φ2mm）、ブロック状の黄褐色土（φ3～10mm）などを少し多めに含む。
- ⑤層 褐色土 白色粒子、黒色粒子、ブロック状の黄褐色土の混入は④層と同様だが、これに加えブロック状の明灰褐色シルト（φ20mm前後）を多く含む。また、礫もいくらか入り込む。
- ⑥層 褐色土 しまりはない。白色粒子（φ1mm）、黄褐色粒子（φ1mm）を含むが、量的には多くない。

遺構の底面は全体的にかたくしまっていたが、住居の床の硬化とは状態が異なるものであった。本遺構内で柱穴がP1～P4まで4基、確認された。このうちP1とP3は底部から石が出土した。この4基は建物の柱として関連を持つ可能性があるが、これら4基の軸と本遺構の主軸が一致しないことから、4基の柱穴とSX-1とは無関係ではないかと思われる。

遺物は、瀬戸・美濃の摺鉢（5）と志戸呂の小皿（6）と釘（272）が出土している他はほとんど出土



第13回 調査区全体図（歴史時代 第1遺構面）



第14図 調査区全体図（歴史時代 第2遺構面）

していない。遺構の時期は、IIa層に掘り込まれているということと出土遺物から、17世紀前半かあるいはそれ以降であると考えられる。遺構の性格については不明である。

(2) 土坑

S F - 1 (第15図、図版4)

E - 2 グリッドで検出された。平面楕円形で、長径1.6m・短径1.2mであり、検出面からの深さは1.1mである。上部を擾乱によって削平されているため、実際はより深いものであったと思われる。土坑内の堆積は次のとおりである。

- ①層 茶褐色土 しまりあり。青白色粒子 ($\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$) を含む。
- ②層 褐色土 しまりなし。緑灰色土 (IIc層) や橙褐色土 (IIa層) を非常に多く含む。また、礫と多量の炭化物も含む。
- ③層 褐色土 しまりなし。粘性あり。炭化物 ($\phi 2 \sim 3 \text{ mm}$) を少量含む。
- ④層 褐色土 しまりはあまりない。緑灰色土 (IIc層) や橙褐色土 (IIa層) を少量含む。
- ⑤層 褐色土 しまり・粘性ともになし。緑灰色土 (IIc層) や橙褐色土 (IIa層) を少景含む。炭化物を多く含む。
- ⑥層 褐色土 しまりはあまりない。粘性あり。ブロック状の黒色粘土を含む。

土坑の下半部は水の影響でグライ化しており、調査中も湧水が絶えなかった。これは調査区南側の龍城山方面から染みだしてくる水によるものであろう。遺物は志戸呂の製品(1)、摺鉢底部(2)、凹石(266)、鉛製品(270)等が出土しているが、量的には少ない。出土遺物から、時期は幕末か明治頃であると思われる。遺構の性格については不明である。なお、底の方から石が数点出土したが、これはS X - 4 と関連する石であり、本遺構とは無関係である。

S F - 2 (第15図、図版4)

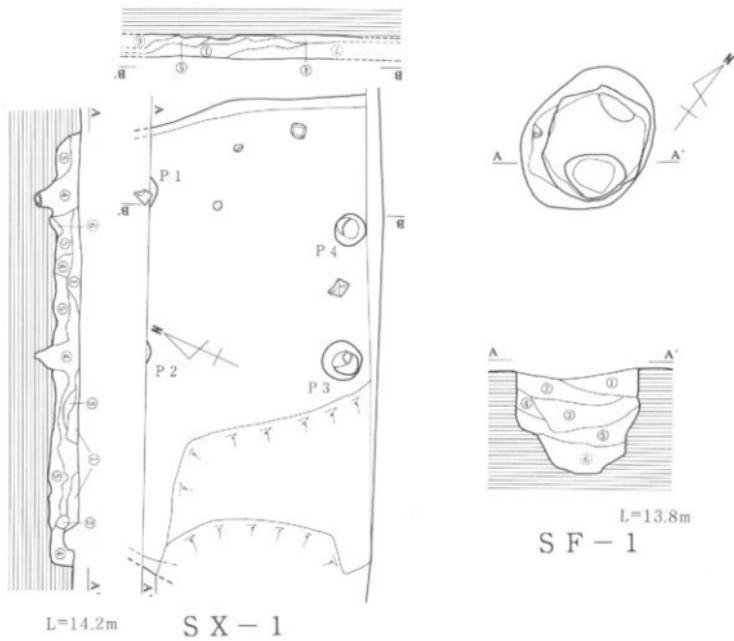
C - 3 グリッドで検出された。Va層上面で確認したが、おそらくそれより上面から掘り込まれていたと思われる。主軸方向はN - 65° - E であり、現在の地割方向とほぼ同じである。平面形は不整長方形で長軸5.3m・短軸1.9mであり、断面箱型である。各コーナー部分には角がつけられている。検出面からの深さは25cm前後であり、実際はこれよりも深いと思われる。底部はほぼ平坦につくりだされていた。土坑内の堆積は次のとおりである。

- ①層 暗褐色土 粘性少しあり。白色粒子 ($\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$) ・黄色粒 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) を含む。②層の土も部分的に入る。他に炭化物・木片・石など、多くの混入物を含む。腐ったような土である。
- ②層 黒色粘土 粘性が高い。しまりはややゆるめである。青白色粒子 ($\phi 1 \sim 2 \text{ mm}$) を多く含む。
- ③層 暗褐色土 粘性少しあり。しまりはややゆるめである。粒状の黄褐色土 ($\phi 1 \sim 5 \text{ mm}$) ・黒褐色土 ($\phi 5 \text{ mm}$ 程度) を多く含む。腐ったような土である。

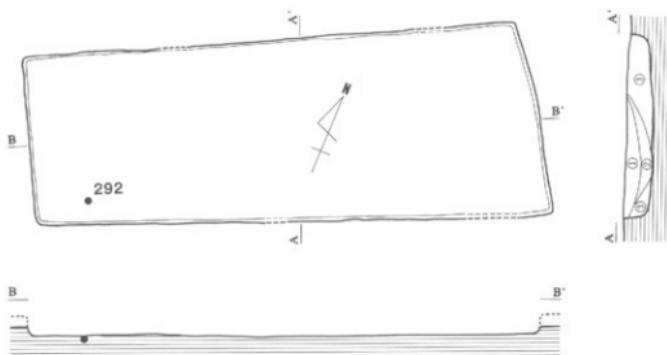
遺物は瀬戸・美濃製品(3)、肥前系丸碗(4)、下駄の木製品(292)、獸骨等が出土した。これ以外にも遺物は出土しているが、殆どが混入であり、遺存状態も良くない。出土遺物から、本遺構の時期は古くても19世紀前後と思われるが、覆土の様子から、更に新しい時期の土坑である可能性が高い。ごみ捨て穴であったのであろうか。

(3) 石組暗渠跡 S X - 3 (第16図、図版5)

G - 3 + G - 4 グリッドで検出された。遺構の西側はブルーにより削平されていた。東側は調査区の外に続いていると思われるが、擾乱による遺構の破壊が著しく、石組として残存しているのは、遺構



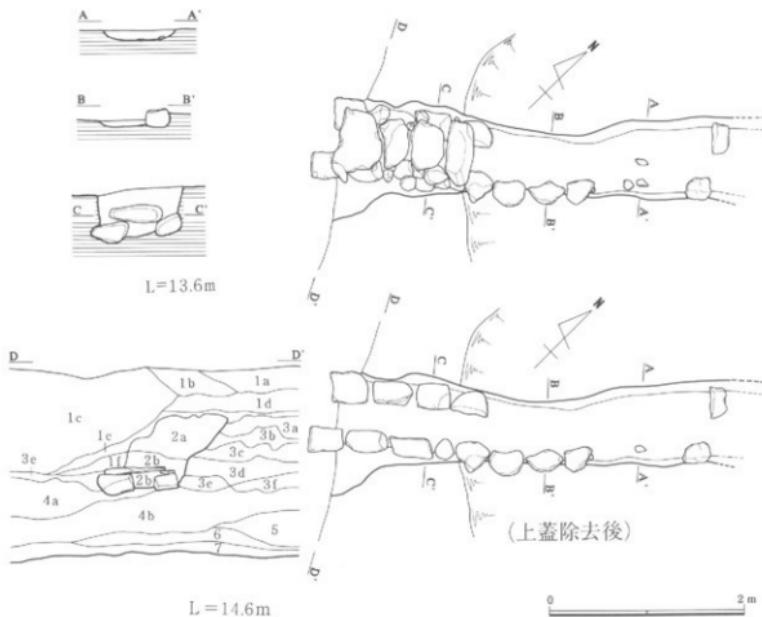
$L = 13.8\text{m}$
S F - 1



$L = 12.8\text{m}$

0 2 m

第15図 S X - 1 • S F - 1 • S F - 2 実測図



第16図 SX-3 実測図

して確認できた全長4.4mのうちの1.8m程度しかない。検出面からの深さも最大で50cm程確認したのが、擾乱によって遺構の上部が破壊されている箇所は10cm程度の深さしか溝が残存せず、石も一部を除いて上蓋・側石とも取り去られていた。遺構はN-44°-Eの方向に向いている。石は溝を掘り込んだ後に据えていた。

本遺構の堆積状況は第3トレンチ(D D')で確認できた。SX-3とその周囲の土層堆積については次のとおりである。

1a層	茶褐色土	1b層	暗灰色土	1c層	茶褐色土	1d層	暗茶褐色土
1e層	暗茶褐色土	1f層	茶褐色土	2a層	褐色土	2b層	明褐色土
3a層	淡灰褐色土	3b層	暗褐色土	3c層	淡灰褐色土	3d層	暗灰色土
3e層	黒灰色粘土	3f層	褐色土	4a層	暗灰褐色土	4b層	灰黑色土
5層	黄褐色土	6層	灰黑色土	7層	黑色粘土		

このうち、1層は近・現代の擾乱である。3層・5層は基本層序のIIg層に該当する。5層はIIa層に類似しているが、別層である。4層はSD-1の覆土である。6層は基本層序のIII層、7層は基本層序のIV層である。SX-3の覆土は2層であり、この層の詳細な記述は次のとおりである。

2a層 褐色土主体であるが、ブロック状($\phi 5\sim 25\text{mm}$)の淡灰褐色土・黒色土・黄褐色土・灰色土などを非常に密に含む。かたくしまり、粘性がない。白色粒子($\phi 1\text{mm}$ 程度)・橙色粒($\phi 2\sim 5\text{mm}$)

を多く含む。また、炭化物（ $\phi 10\text{mm}$ 程度）も少し含む。

2b層 明褐色土主体であるが、ブロック状（ $\phi 5\text{~}25\text{mm}$ ）の淡灰褐色土・黒色土・黄褐色土・灰色土などを非常に密に含む。かたくしまり、粘性がない。白色粒子（ $\phi 1\text{mm}$ 程度）・橙色粒（ $\phi 2\text{~}5\text{mm}$ ）を多く含む。土色は2a層よりも明るめである。

覆土は一見すると城の造成土と思われるような、各上層のブロックによって構成されているような感がある。

溝の底の土は薄く赤褐色を呈しており、酸化鉄が形成されているようであった。おそらく本遺構が機能していた当時はここを水が流れていたのであろう。しかし溝底のレベルが一定の方向に傾斜しておらず、検出長自体が短いこともあって、水の流れる方向を特定することはできなかった。

使用された石材は、ほとんどが安山岩か玄武岩であり、他には凝灰岩・砂岩・プロビライトが用いられていた。おそらく狩野川の川原石を使用しているのであろう。部位による石材の使い分けはされていないと思われる。

この遺構はSD-1よりも新しく、IIg層を掘り込んで設置されていることから、蓮山城が機能していた時期か、あるいは庵城後に構築されたと思われる。本調査地点は江戸時代には農業用水池として利用されたという記録が残っていることから、近世の農業用水路の可能性を考えてもよいと思われる。

出土遺物は、混入と思われる土器の細片が小量出土しているのみであるので、図示できなかった。

2. 第2遺構面

第2遺構面はIId層～Ie層～Ie層上面が基本検出面であるが、補足調査でVa層上面から検出された遺構もこれに含めた。検出された遺構は、SD-1、SF-3及びSX-7、SX-4、SA-1とVa層上面で検出した柱穴群である（第14図）。

①溝状遺構 SD-1（第17図、図版6）

F-4・G-3・G-4グリッドで検出された。Va層上面で確認したが、第5トレンチの土層観察では、更に上面から掘り込まれていた。溝の軸方向はN-46°Wであり、現在の地割とはほぼ同じである。全長約21mで幅は1.2～2.9mであるが、底部付近の検出であるため、実際は南北方向に溝が続いているものと思われる。検出面からの深さは10cm程度であるが、第5トレンチの観察から、深さは1.3mはあったことがわかる。

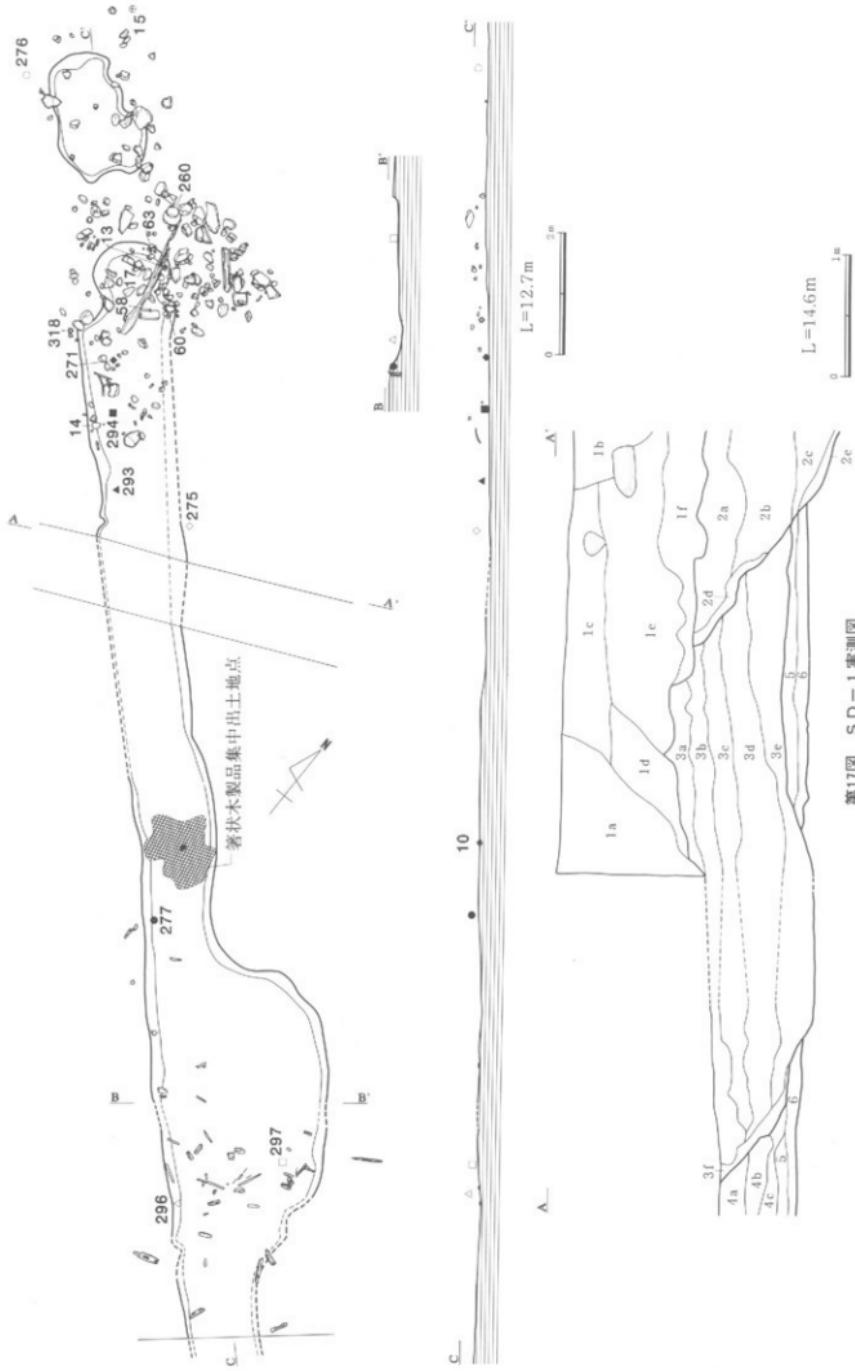
第5トレンチ（A A'）で確認できた、SD-1とその周囲の土層堆積については次のとおりである。

1a層	褐色土	1b層	暗褐色土	1c層	褐色土	1d層	褐色土	1e層	褐色土
1f層	褐色土	2a層	暗褐色土	2b層	暗灰褐色土	2c層	灰黑色土	2d層	淡灰褐色土
2e層	黒色粘土	3a層	淡灰褐色土	3b層	淡灰褐色土	3c層	黒灰色土	3d層	灰黑色土
3e層	灰黑色土	3f層	暗灰褐色土	4a層	灰褐色土	4b層	黄褐色土	4c層	淡灰黑色土
5層	灰黑色土	6層	黑色粘土						

このうち、1層は近・現代の擾乱である。2層はSX-7の覆土である。このことから、SD-1はSX-7よりも古いことが分かる。4層は基本層のIIg層に、5層はIII層に、6層はIV層にそれぞれ該当する。SD-1の覆土は3層であり、この層の詳細な記述は次のとおりである。

3a層 淡灰褐色土 シルト質であり、3b層と土質がよく似ている。白色粒子（ $\phi 2\text{mm}$ 程度）を部分的に含む。炭化物（ $\phi 1\text{mm}$ 程度）も含む。酸化鉄と思われる斑が全体に散在する。

3b層 淡灰褐色土 しまりあり。粘性なし。シルト質であり、3a層と土質がよく似ている。炭化物（ $\phi 3\text{mm}$ 程度）を僅かに含む。ブロック状の黒灰色土が部分的に混入している。酸化鉄と思われる斑が全体に散在する。



第17図 SD-1測測図

- 3c層 黒灰色土 非常にしまりがよく、粘性が高い。白色粒子・黄色粒子が全体に散在し、炭化物（ ϕ 2mm程度）も含む。ブロック状を呈した3b層の土が、多く混入している。
- 3d層 灰黒色土 しまりがよく、粘性が高い。層の上部に10mm程度の炭化物を多く含む。白色粒子・黄色粒子が全体に散在し、ブロック状の褐色土（ ϕ 20mm程度）が部分的に入り込む。250mmの大礫を部分的に多く含み、5mm程度の炭化物を全体に多く含む。木片などを部分的に含む。
- 3e層 灰黒色土 しまりがあり。粘性あり。シルトが少し混入している。白色粒子（ ϕ 0.5～2mm）を多く含む。炭化物（ ϕ 5mm程度）も部分的に含む。また、ブロック状の灰黒色土（ ϕ 50mm程度）も一部含む。
- 3f層 暗灰褐色土 しまりがよく、粘性が少し感じられる。白色粒子が多く散在する。他にブロック状の黄色土（ ϕ 10mm程度）。炭化物（ ϕ 2mm程度）を部分的に含む。

本遺構からは大量の遺物が出土した。図示した遺物は陶磁器（10～16）、かわらけ（58～64）、こね鉢（260）、釘（271）、銭貨（275～277）、木製品（293～317）である。特に著状木製品に関しては、遺構の中央付近で集中的に出土した。他に獸骨や貝殻の圧痕や大量の種子などが出土した。時期はIIa層よりも古いため、16世紀全般としたい。とするとSD-1は葦山城が存続している段階の遺構である可能性が高いということになる。本遺構は出土遺物の所見等から流路的な性格を持っているものと思われるが、葦山城との関連に関しては不明である。

なお、SD-1からは常滑の大甕が16以外にも多く出土しているが、いずれも胴部の破片であり、年代も同時期と思われる。

(2)性格不明遺構 SF-3 及び SX-7 (第18図、図版7)

調査区東側で検出された。SF-3はE-4・E-5・F-4・F-5グリッドに位置し、SX-7はF-4・F-5・G-4グリッドに位置している。共に調査区隅で検出され、調査区外にまで続いているため、全容が明らかにはならなかった。また、集水枡が丁度SF-3の内部に設置されてしまい、湧水も著しく、また壁面の崩壊の恐れが強かったため、SF-3は完掘できなかった。

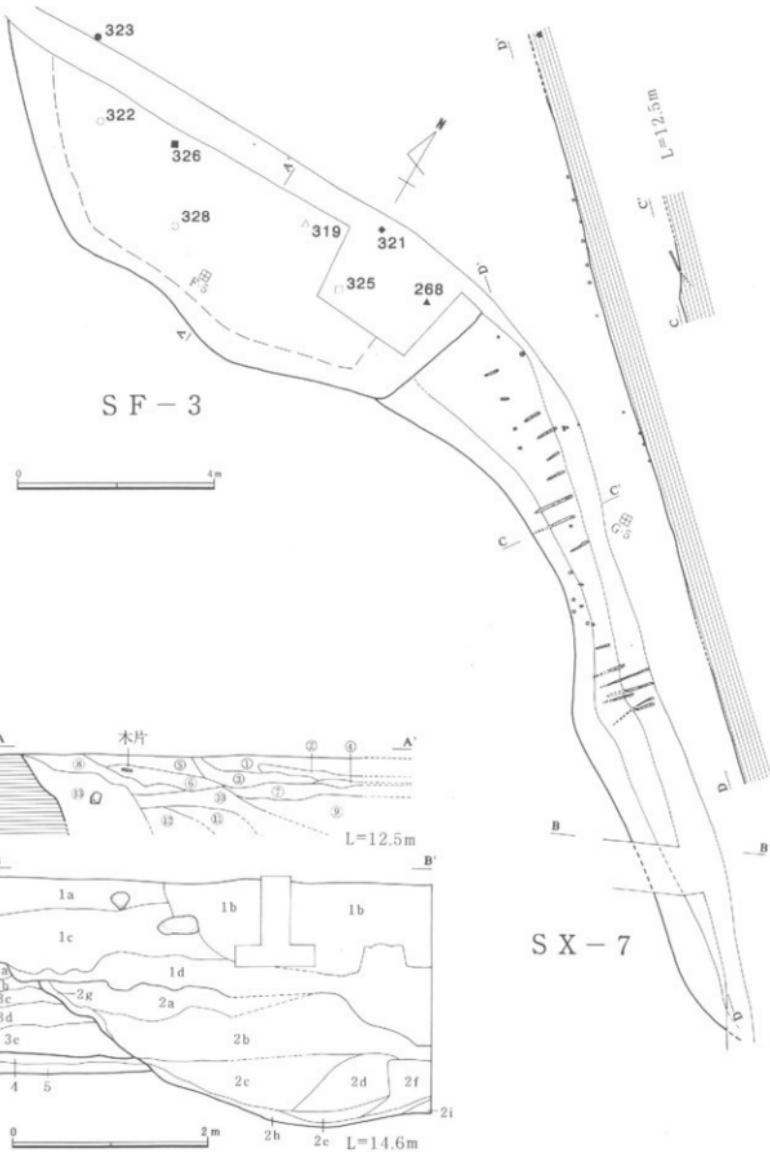
両遺構とも、Va層上面で確認したが、SX-7を第5トレントの土層を観察した結果では、かなり上面から掘り込まれているようである。

第5トレント（B-B'）で確認できた、SX-7とその周囲の土層堆積については次のとおりである。

- | | | | | | | | | | |
|-----|-------|-----|------|-----|-------|-----|-------|-----|-------|
| 1a層 | 褐色土 | 1b層 | 暗褐色土 | 1c層 | 褐色土 | 1d層 | 褐色土 | 2a層 | 暗褐色土 |
| 2b層 | 暗灰褐色土 | 2c層 | 灰黑色土 | 2d層 | 淡灰褐色土 | 2e層 | 青灰色土 | 2f層 | 灰黑色土 |
| 2g層 | 淡灰褐色土 | 2h層 | 黒色粘土 | 2i層 | 灰黑色土 | 3a層 | 淡灰褐色土 | 3b層 | 淡灰褐色土 |
| 3c層 | 黒灰色土 | 3d層 | 灰黑色土 | 3e層 | 灰黑色土 | 4層 | 灰黑色土 | 5層 | 黒色粘土 |

このうち、1層は近・現代の擾乱である。3層はSD-1の覆土である。この所見から、SX-7はSD-1より新しいことが分かる。4層は基本層序のⅢ層で、5層は基本層序のⅣ層に該当する。SX-7の覆土は2層であり、この層の詳細な記述は次のとおりである。

- 2a層 暗褐色土 非常にしまっている。暗褐色土と黒褐色土が縞状に堆積する。白色粒子（ ϕ 5mm程度）を非常に多く含む。炭化物（ ϕ 2～10mm）も少し含む。
- 2b層 暗灰褐色土 しまりあり。20mm程度のブロック状の灰色土を少し含む。また、白色粒子（ ϕ 2mm程度）を多く含む。炭化物（ ϕ 1～10mm）も含む。
- 2c層 灰黑色土 しまり悪くぼろぼろと崩れる。10mm程度のブロック状の灰黑色粘土と黒灰色粘土が一部に混入している。炭化物（ ϕ 1mm程度）も含む。
- 2d層 淡灰褐色土 粘性あり。黒色土や灰黑色土や淡灰褐色土が縞状に混合している。白色粒子（ ϕ 0.5mm）や黑色粒子（ ϕ 2mm）が散在する。



第18図 SF-3・SX-7 実測図

- 2e層 青灰色土 粘性がきわめて高いが、粘土に比べ若干粒子が粗い。黒色粒子（ $\phi 1 \sim 3\text{ mm}$ ）が部分的に含まれる他は、混入物はみられない。
- 2f層 灰黒色土 粘性あり。白色粒子（ $\phi 0.5\text{ mm}$ ）や黄褐色粒子（ $\phi 3\text{ mm}$ ）を少量含む。
- 2g層 淡灰褐色土 シルト質で、白色粒子（ $\phi 2\text{ mm}$ ）と炭化物（ $\phi 1\text{ mm}$ 程度）をわずかに含む。
- 2h層 黒色粘土 粘性はきわめて高く、しまりあり。白色粒子（ $\phi 1\text{ mm}$ ）を含む。全体的に酸化鉄が集積している。
- 2i層 灰黒色土 2f層よりも色調は明るい。粘性はあまりない。部分的に淡灰褐色土（ $\phi 10 \sim 40\text{ mm}$ ）を含む。黒色粒子（ $\phi 2\text{ mm}$ 程度）も含む。

S X - 7 は、もし溝状遺構だとすれば東側の肩が調査区の外となってしまうため、今回の調査のみでは溝と断定できない。あるいは東に向かって傾斜しているのかもしれない。S X - 7 のもう一つの特徴として、ほぼ等間隔に横たわる杭の出土が挙げられる。これら横たわった杭のレベルはそれぞれ違つており、また垂直に立った状態で腐食した杭も多かったため、杭はもとから横たえられていたのではなく、地面に垂直に立てられたものが腐食か何かで倒れたものである可能性が高いといえる。これら杭の樹種を同定した結果、アカマツ・クロマツ・クリ・ヤナギ属・コナラ節であることが分かった。

一方、S F - 3 であるが、その土層堆積（A-A'）は次の通りである。

- ①層 灰褐色土 しまりあり。粘性なし。砂状の黄褐色粒子（ $\phi 2\text{ mm}$ 以下）を多く含む。炭化物（ $\phi 5\text{ mm}$ 以下）を少し含む。わずかであるが、ブロック状の青灰色粘質土（ $\phi 20\text{ mm}$ ）も含む。②層の赤褐色砂が所々に混入している。
- ②層 赤褐色砂 しまりあり。①層中に混入している赤褐色砂のみで構成されている層である。
- ③層 青灰色粘土 しまりはややゆるい。わずかな量であるが、④層や⑦層の砂が本層下辺に混入する。木屑を層中に多く含む。層の大部分がグライ化している。
- ④層 褐色砂 しまりあり。⑦層よりも砂の粒径が小さい。木屑を少し含む。
- ⑤層 褐色土 しまりはややゆるい。粘性なし。褐色土と赤褐色砂（ $\phi 0.5\text{ mm}$ 以下）が縞状に、交互に堆積する。縞の厚さは 10 mm 程度である。木屑を多く含む。
- ⑥層 褐色砂 しまりあり。褐色砂（粒径は⑤層中の砂よりも大きめで、⑦層の砂よりも小さめである）と暗青灰色粘質土が縞状に、交互に堆積する。縞の厚さは、褐色砂が 30 mm 程度で、暗青灰色粘質土が 5 mm 程度である。木屑を多く含む。
- ⑦層 暗黃褐色砂 しまりあり。砂の粒径は $\phi 2 \sim 3\text{ mm}$ であり、④層よりも大きめである。青灰色の粘質土が縞状に数条、本層中に水平に入り込んでいる。縞の厚さは $2 \sim 4\text{ mm}$ である。
- ⑧層 青灰色粘質土 しまりはあまりない。木屑を含む他、植物の腐食土が部分的に入り込んでいる。また、ブロック状（ $\phi 20\text{ mm}$ 以下）の明灰褐色土・黄褐色土や炭化物・白色粒・黄褐色粒子（いずれも $\phi 3\text{ mm}$ 以下）なども小量含む。層の大部分がグライ化している。
- ⑨層 青灰色砂 しまりはあまりない。砂の粒径は小さく、シルトに近い。部分的に粘質土や、粒径が大きめの砂の塊が入り込む。木屑も含む。グライ化している。
- ⑩層 青灰色粘質土 ⑧層に非常に類似した層である。だが混入物が多く、黄褐色粒（ $\phi 5\text{ mm}$ ）や砂の塊を含む。木屑も含む。グライ化している。
- ⑪層 青灰色粘質土 色調は⑨層よりも明るめである。しまりはあまりない。粘性あり。植物遺存体と思われる黒色味を帯びた土が含まれる。グライ化している。
- ⑫層 青灰色粘質土 色調は⑨層に似ており、⑪層よりも暗めである。しまりあり。黄褐色粒（ $\phi 2\text{ mm}$ 主体）などの混入物を多く含む。炭化物（ $\phi 3 \sim 4\text{ mm}$ ）も少し含む。グライ化している。
- ⑬層 青灰色土 しまりややゆるいが、⑧層よりはしまっている。砂質土だが粘性あり。ブロック状（ $\phi 20\text{ mm}$ 以下）の明灰褐色土・黄褐色土を多く含む他、炭化物・白色粒・黄褐色粒子（いずれも ϕ

3mm以下)なども多く含む。混入物が非常に多い層である。層の大部分がグライ化している。堆積の特徴としては、土壤のグライ化が著しいということと、砂質と粘質が交互に堆積しているという点である。SF-3は当初、土坑という認識で調査を始めたが、この堆積からは、流路の可能性が高いといえる。遺構の大半は調査区外となってしまうため、断定はできない。

出土遺物として、陶磁器(7~9)、かわらけ(65・66)、鎌(268)、木製品(318~328)がある。いずれもSF-3からの出土であり、SX-7からは図示できる遺物は出土しなかった。

この両遺構は検出状態から、何らかの関連を持っているものと思われる。流路とその護岸用杭列という見方でもできるが、遺構の検出状況からすると、まだ検討の余地が大きいといえよう。遺構の性格は不明としておきたい。時期に関しては、出土遺物から近世の可能性が高いといえる。第1遺構面で検出された遺構と時期的に近いと思われる。

(3)石積み遺構 SX-4 (第19~20図、図版8~11)

調査区南側で検出された。東西の方向に約30m程、石の列が連なる。東側端部は緩やかなカーブを描いて南に曲がり、調査区の外へと続いている。西側端部は調査区内で終了しているが、この辺りから南へ一直線に続いている石列があり、これも調査区の外へと続いている。石列は2箇所ほど途切れる場所(第20図中の(B)と(C))がある。石は変形安山岩であり、ほとんどの石は露出している部分が面取りされていた。石列の北側には面取りされた石が多く散乱していた。石は垂直に3~4段ほど積まれており、積まれた石の南側に土が盛られている。また、第8トレンチ及びサブトレンチでは、盛土を留めるための杭が検出された。石が積まれている部分は、浅いながらも下層の土が掘り進められていた。なお、(A)の区画はその東側や南側に比べて約70cm程低くなっているが、これはブル造成によって破壊されたためである。

石列が途切れることについて、面取りした石が石列の北側に散乱していることと併せて、石積みが崩壊あるいは破壊されたのではないかと考えた。そこで第1トレンチの東側に1箇所サブトレンチを設定して掘削したのであるが、石が崩壊された状況は確認されなかった。また、2次造成の為の破壊としても、根石自体も無く、かわりに杭が検出されたことから、当初から石積みがなかったという結論に落ち着いた。しかし、なぜこの場所に石が据えられなかったのかは不明である。普請の際の搬入出路という見方でもできるが、(C)はその可能性があるのに対し、(B)では石積みのための掘り込みがあるため、搬入出路とは考えにくいだろう。

また、サブトレンチを設定した石積みの途切れる場所を境にして、その東側と西側とでは石の積み方が違うことが確認できた。(B)の東側は側面形が細長い楕円形を呈する石をきれいに積みあげているが、(B)と(C)の間は、側面形が方形を呈する石を比較的の乱雑に積み上げている。おそらく作業区分が違うのであろう。すると、石がない部分は作業分担の境ということになるかもしれない。

西側の南北に連なる石列は、1段のみの出土であり、石列の北端には隅石と思われる平面形が方形を呈する面取りされた石が据えられていた。

また、石積みから北へ約4mのところで敷石が確認された。平均して7~10cm大の石が、石積みや杭列と同じ方向で敷設してある。ところどころ石が欠如しているが、幅は約1.5~2mで、およそ9mの長さが残存していた。当時はもっと伸びていたと思われる。石敷道であったと思われる。

SX-4の盛土やその上層の堆積は、各トレンチにて確認できる。第4トレンチおよび第7トレンチの土層堆積は次のとおりである。

1a層 褐色土	1b層 褐色土	1c層 緑灰色土	2a層 黄褐色土
2b層 褐色土	2c層 褐色土	2d層 褐色土	3層 褐色土

4a層	橙褐色土	4b層	橙褐色土	4c層	明赤褐色土	4d層	橙褐色土
4c層	橙褐色土	4f層	橙褐色土	4g層	橙褐色土	4h層	褐色土
5a層	暗褐色土	5b層	暗褐色土	6層	綠灰色土	7a層	灰色土
7b層	褐色土	7c層	茶褐色土	7d層	褐色土	7e層	褐色土
7f層	褐色土	7g層	褐色土	7h層	茶褐色土	7i層	明黃褐色土
7j層	褐色土	7k層	茶褐色土	7l層	茶褐色土	7m層	褐色土
7n層	青白色土	7o層	明褐色土	7p層	褐色土	8a層	灰色粘土
8b層	綠灰色土	8c層	灰色粘土	8d層	灰色粘土	9層	灰黑色粘土
10層	黑色粘土						

このうち、2a～2d層はS X - 1の覆土であり、3層はS P - 77の覆土である。遺構の覆土である2a～3層以外は基本層序に対応させることのできる土層である。それぞれ1a～1c層はI層に、4a～4h層はIIa層に、5a～5b層はIIb層に、6層はIIc層に、7a～7p層はIId層に、8a～8d層はIIe層に、9層はIf層に、10層はIV層に、それぞれ該当する。

これら土層の新旧関係は堆積した順に、IV層→IIf層→IIe層→IId層→IIc層→Ib層→IIa層→I層となる。このうち中世の堆積層であるII層を同時期の堆積を考慮して記すと、IIf層・IIe層・IId層・IIc層→Ib層→IIa層という3段階の堆積が考えられる。最初の段階（IIf層～IIc層）は当然のことながら石積みが構築された段階である。このうちIIc層の分布は、積み石に対応しているようである。積み石の裏込め土として使われたのであろうか。IIc層は安山岩の岩体が風化した上であり、石積みの石はIIc層と同じ岩体から切り出された石であるので、非常に興味深い事実である。

次の段階（Ib層）について、Ib層の裾部に石敷道が広がっていることから、これらは同時期であると思われる。また、西側の石列が1段しかないことから、西側の石積みはこの段階で破壊されたと思われる。更に、IIc層が石積みを覆うように崩れていますことや、石積みの北側で面取りした石が散乱していたことからも、この段階である程度の石積みの破壊があったことを裏付ける（この所見によると、石積みと石敷道は別時期ということになるが、第19図はスペースの都合上、同時に掲載している）。

最後の段階（IIa層）について、IIa層は人為的な造成土であり、調査区に広域に広がっていることから、曲輪の造成土であると考えらる。同時期の堆積と思われるIig層を併せてると、調査区全体が曲輪に造成されたと考えてよいと思われる。

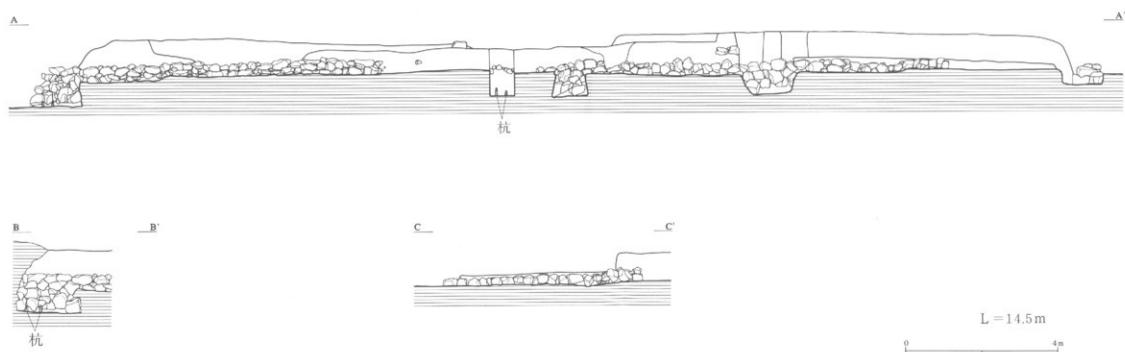
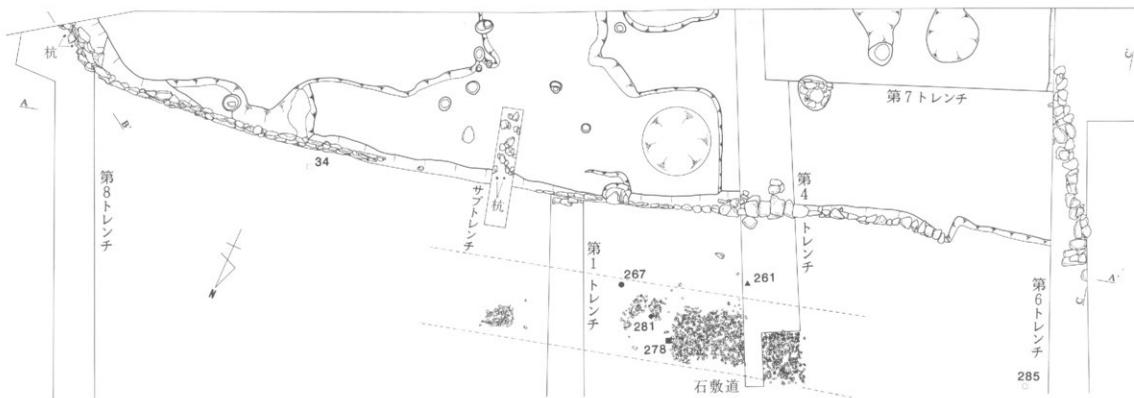
遺物は遺構全体から大量に出土しており、IIa層～Iig層で取り上げている。そのうち摺鉢（34）は、崩落した石と石積みの間に挟まれた状態で出土した。

(4)杭列 SA - 1 (第21図、図版11)

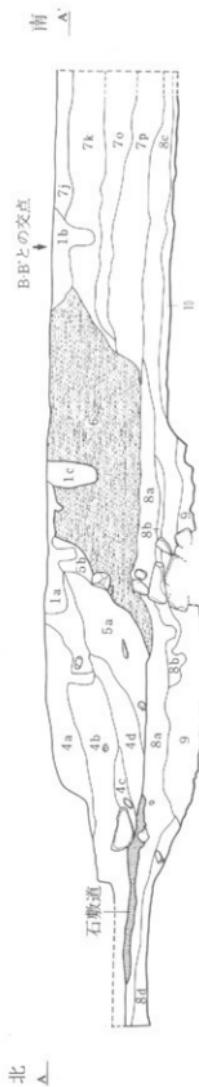
調査区南側で検出された。東西に伸びており、東端・西端とも調査区の外へ続いている。杭列の方向はN - 73° - Eであり、S X - 4の石積みとはほぼ同じ方向である。杭列の位置は、石積みより北へ約3 m離れたところである。杭列は1列であるが、下層に土器集中出土地点3の存在する場所のみ、約2 mの間隔で2列つくられている。おそらく下層の地盤が軟弱だからであろう。

大多数の杭は、上部が南に傾斜している。また上端はちょうどVa層上面より上方が欠損している。これは、城の石積みを構築する段階で上部が削平されたからではないかと考えられる。これら杭のうち、代表的な10点（329～338）を図示した。

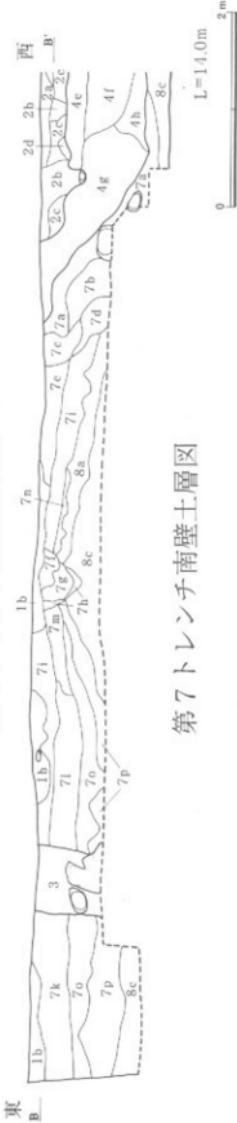
この杭列は、山木遺跡の過去の調査で検出された田方条里の坪界線に方向・間隔とも一致することから、条里があるいは条里を跨襲した畦畔（あるいは道）の可能性が考えらる。杭列に関連する遺物が出土しなかったので時期は不明であるが、杭の加工方法等から古代末から中世であると思われる。



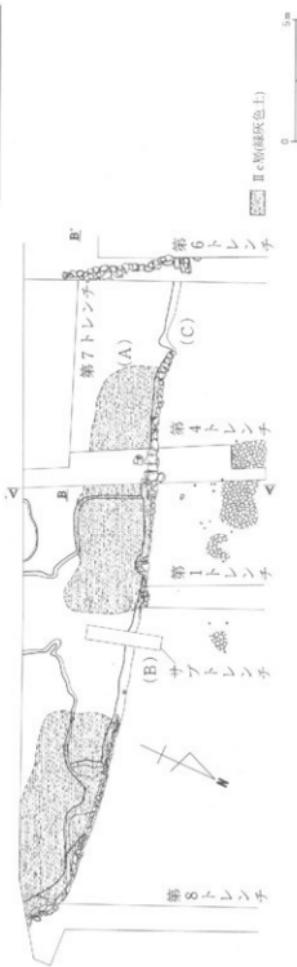
第19図 SX-4 実測図



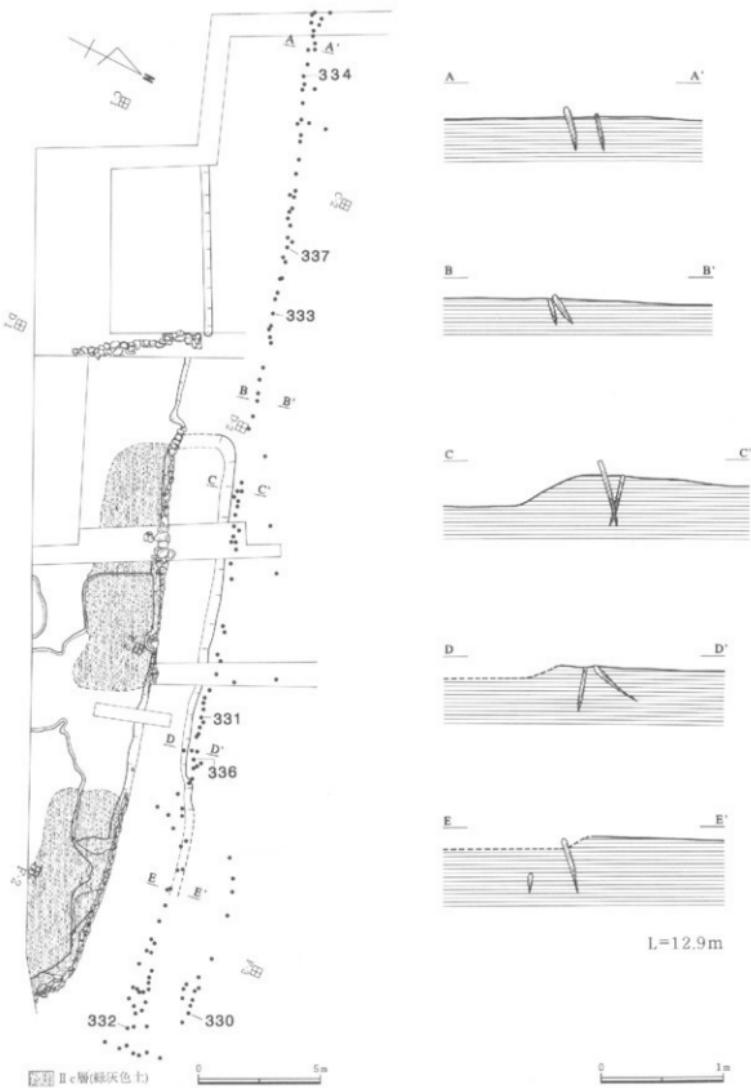
第4トレンチ東壁土層図



第7トレンチ南壁土層図



第20図 S-X-4 土層断面図



第21図 SA-1 実測図

第2節 遺物

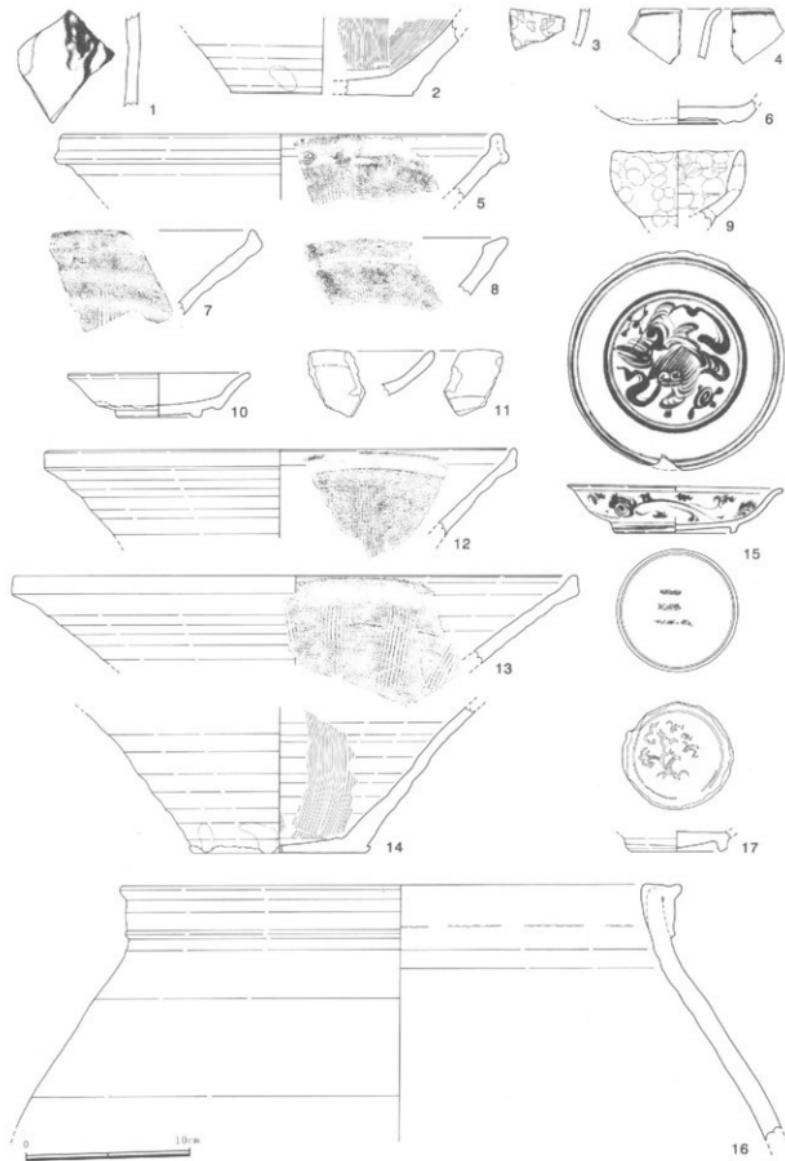
(1)陶磁器等

今回の調査で出土した歴史時代の土器のうち、かわらけを除いた陶磁器・土師質土器などの出土量はコンテナにして3箱分と、決して多くはない。ここではこれらのうち、遺存状態が良好な遺物全57点を図示した。

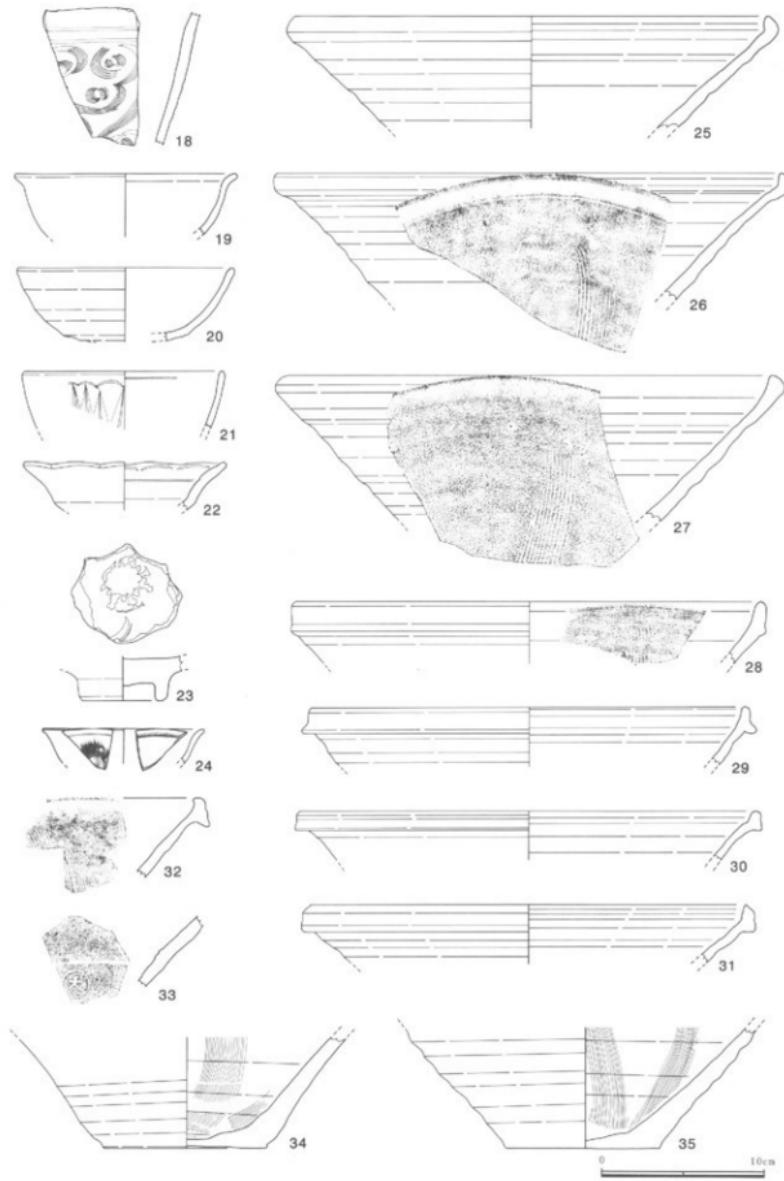
陶磁器が出土した遺構は、S F - 1 (1・2)、S F - 2 (3・4)、S X - 1 (5・6)、S F - 3 (7~9)、S D - 1 (10~16)、S P - 4 (17)である。1は18世紀第3四半期の志戸呂の鉄釉陶器である。2は摺鉢の底部である。幕末から明治頃に位置づけられる。3は17世紀前半の瀬戸・美濃の鉄釉陶器である。4は肥前系の磁器で、端反碗である。口縁内外面には界線が巡る。18世紀後半~19世紀前半に属する。5は瀬戸・美濃の大窯III~IV段階の摺鉢である。6は17世紀前半の志戸呂の小皿である。底部は削り込んでおり、酸化鉄の化粧がけが施される。7・8は瀬戸・美濃の摺鉢である。7は大窯I段階、8は大窯II段階に属する。9は碗形の手づくね土器である。底部に高台状の高まりが存在する。年代は不明である。10~14は瀬戸・美濃の製品である。10は大窯I段階の灰釉小皿である。口縁部には破片を漆で接合した跡が確認できる。11は古瀬戸後期III~IV段階の縁釉皿である。12・13は大窯II~III段階の摺鉢である。14も大窯期の摺鉢である。15は貿易陶磁で、染付皿である。見込みには玉取り獅子、外面には牡丹唐草が描かれる。高台内は酸化鉄が化粧がけされている。また墨書きが書かれており、「三」と読める。16世紀後半に位置づけられる。16は常滑の大甕である。口縁部断面形はN字状を呈する。15世紀後半から16世紀前半に位置づけられる。17は16世紀代の貿易陶磁で、青磁の碗か皿である。高台内は酸化鉄が化粧がけされており、蛇の目状に釉剥ぎがされている。また、見込みに印花文が施されている。

包含層から出土した陶磁器は、18から55までである。18~24は貿易陶磁である。18は龍泉窯系の青白磁で、梅瓶であると思われる。12世紀末から13世紀初頭に位置づけられる。19は15世紀代の青磁碗である。口縁が強く外反する。20は16世紀前半の青磁丸碗である。21は15世紀から16世紀前半の青磁丸碗である。体部に蓮弁文が施されている。また、口縁内側に界線が巡る。22は15世紀から16世紀前半頃の青磁桜花皿である。外面胴中央部に稜をもち、口縁はゆるやかに外反する。胴部内面には界線が巡る。23は16世紀代の青磁である。碗か皿であろう。高台内は蛇の目状に釉剥ぎがされており、見込みに印花文が施されている。24は16世紀代の染付碗である。外面には宝珠が描かれており、口縁内側には界線が巡る。なお、以上に示した貿易陶磁の年代は、消費地における使用年代である。

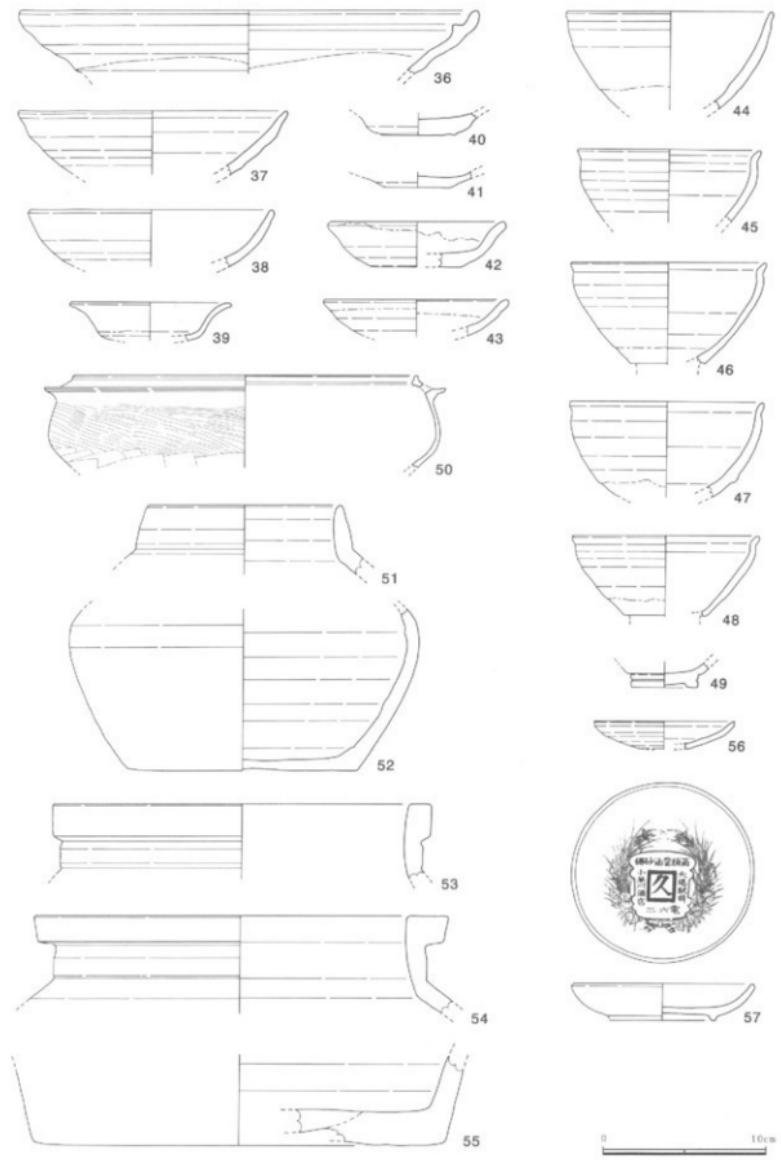
25~35は瀬戸・美濃の摺鉢である。25・26・27はいずれも古瀬戸後期IV段階に位置づけられると思われる。また28は大窯III段階、29~31は大窯III~IV段階、32は大窯III段階、33は近世の連房もしくは本業焼の段階にそれぞれ位置づけられよう。このうち、29と30では、30の方が時期的に若干新しいと思われる。34・35は大窯期である。34はS X - 4 の石積みと、崩落したと思われる石に挟まれた状態で出土している。36は瀬戸・美濃の折縁深皿である。口縁部の灰釉は白色化している。古瀬戸後期IV段階に位置づけられると思われる。37~43は瀬戸・美濃の灰釉皿である。37・38は平碗、39は端反皿、40・41は底部のみで詳細は不明、42・43は縁釉皿である。いずれも古瀬戸後期IV段階に属する。44~49は瀬戸・美濃の犬目碗である。いずれの天目碗も露胎に酸化鉄の化粧がけが施されている。44は他と比べ口縁がほとんど外反しない。45は二次的に火を受けた痕跡がある。49は削り出し高台で、高台部外側に1条の沈線が巡る。年代観であるが、44~46は古瀬戸後期IV~大窯I段階にかけて、47は大窯II~III段階、48は大窯IV段階に位置づけられると思われる。また、49は大窯II~III段階に属する。50~52は在地の土師質土器である。50は羽釜である。器壁は薄く、口縁部の下端には円孔が施されている。破片資料であるた



第22図 陶磁器等実測図 1



第23図 陶磁器等実測図 2



第24図 陶磁器等実測図 3

第5表 陶磁器等一覧表

掲載番号	神戸版番号	図版番号	遺物番号	GRID	出土層位 ・遺構	種類	产地	法量(cm)			備考
								口径	底径	器高	
1	22	15	P175	E-2	SF 1	擂鉢	志戸呂				
2	22	13	P107	E-2	SF 1	擂鉢		(11.1)	4.7		
3	22	15	P463	C-3	SF 2	繩反碗	瀬戸・美濃				
4	22	15	P463	C-3	SF 2	肥前					
5	22	13	P110	C-1	SX 1	擂鉢	瀬戸・美濃	(26.7)	14.0		
6	22	15	P110	C-1	SX 1	小皿	志戸呂	5.8	1.5		
7	22	13	P716	F-5	SF 3	擂鉢	瀬戸・美濃				
8	22	13	P279	F-5	SF 3	擂鉢	瀬戸・美濃				
9	22	15	P559	F-5	SF 3	手づくね		(7.9)	4.7		
10	22	14	P683	G-3	SD 1	小皿	瀬戸・美濃	(11.0)	5.0	2.7	
11	22	14	P652	G-2	SD 1	小皿	瀬戸・美濃				
12	22	13	P702	G-3	SD 1	擂鉢	瀬戸・美濃	(28.6)	14.9		
13	22	13	P663	F-4	SD 1	擂鉢	瀬戸・美濃	(34.6)	15.3		
14	22	13	P657	F-4	SD 1	擂鉢	瀬戸・美濃	(10.5)	8.9		
15	22	12	P529	F-4	SD 1	染付皿	中国	13.3	7.2	3.0	
16	22	12	P662	F-4	SD 1	大甌	常滑	(34.3)	15.8		
17	22	12	P67	D-1	SP 4	青磁碗	中国		5.5	1.2	
18	23	12	P294e	C-3	Hg層	青白磁瓶	中国				
19	23	12	P390	C-1	Hg層	青磁丸瓶	中国	(13.5)	13.7		
20	23	12	P534	C-1	Hg層	青磁丸瓶	中国	(13.1)	14.5		
21	23	12	P61	D-2	Hg層	青磁丸瓶	中国	(12.1)	13.6		
22	23	12	P550	D-2	Hg層	青磁模花皿	中国	(12.2)	13.0		
23	23	12	P155	C-1	Hb層	青磁碗	中国		4.8	2.7	
24	23	12	P291	B-3	Hg層	染付瓶	中国	(9.9)	12.2		
25	23	13	P209	D-2	Hg層	擂鉢	瀬戸・美濃	(29.0)	16.9		
26	23	13	P199	E-2	Hg層	擂鉢	瀬戸・美濃	(31.2)	17.8		
27	23	13	P656	D-2	Hg層	擂鉢	瀬戸・美濃	(29.7)	18.9		
28	23	13	P170	F-3	Hg層	擂鉢	瀬戸・美濃	(28.6)	13.8		
29	23	13	P142	D-1	Ha層	擂鉢	瀬戸・美濃	(26.8)	13.6		
30	23	13	P159	B-2	Ha層	擂鉢	瀬戸・美濃	(28.0)	13.0		
31	23	13	P20	D-4	Hg層	擂鉢	瀬戸・美濃	(26.8)	13.5		
32	23	13	P170	F-3	Hg層	擂鉢	瀬戸・美濃				
33	23	13		表探		擂鉢	瀬戸・美濃				
34	23	13	P198	E-2	Hg層	擂鉢	瀬戸・美濃	9.8	6.8	写真同版11.2	
35	23	13	P645c	E-2	Hg層	擂鉢	瀬戸・美濃	9.4	7.4		
36	24	14	P523	F-4	Hg層	折縁深皿	瀬戸・美濃	(28.1)	13.9		
37	24	14	P547	C-2	Hg層	平碗	瀬戸・美濃	(16.5)	14.0		
38	24	14	P142	D-1	Ha層	平碗	瀬戸・美濃	(14.9)	13.5		
39	24	14	P698	G-3	Hg層	端反皿	瀬戸・美濃	(9.6)	12.4		
40	24	14	P1482	D-3	Hg層	小皿	瀬戸・美濃		4.5	1.4	
41	24	14	P80	C-2	Ha層	小皿	瀬戸・美濃		4.0	1.0	
42	24	14	P190	D-2	Hg層	小皿	瀬戸・美濃	(10.6)	5.4	2.8	
43	24	14	P315	C-2	Hg層	小皿	瀬戸・美濃	(11.2)	12.3		
44	24	14	P170	F-3	Hg層	天目碗	瀬戸・美濃	(12.5)	6.0		
45	24	14	P159	F-2	Ha層	天目碗	瀬戸・美濃	(11.0)	14.5		
46	24	14	P158	D-2	Ha層	天目碗	瀬戸・美濃	(12.0)	16.2		
47	24	14	P245	C-2	圓層	天目碗	瀬戸・美濃	(11.9)	15.9		
48	24	14	P259	F-4	Hg層	天目碗	瀬戸・美濃	(11.3)	14.9		
49	24	14	P560	C-3	Hg層	天目碗	瀬戸・美濃	4.1	11.6		
50	24	15		表探		羽釜	在地系	(21.0)	15.7		
51	24	15	P194	E-2	Hb層	茶釜形土器	在地系	(11.8)	14.3		
52	24	15	P198e	E-2	Ha層	茶釜形土器	在地系		14.2	11.0	
53	24	15	P291	B-3	Hg層	瓢箪	在地系	(23.0)	14.6		
54	24	15	P419		Hg層	風炉	在地系	(25.3)	6.0		
55	24	15	P246	C-3	Hg層	風炉	在地系	(25.3)	5.5		
56	24	15		表探		铁輪小皿		(8.6)	11.7		
57	24	12		搅乱		小皿		10.9	6.4	2.3	

め、円孔は1箇所しか確認できないが、反対側にも対の円孔が存在するものと思われる。胴部外面にはススが付着している。51・52は茶釜形土器である。53～55は在地の瓦質土器である。おそらく風炉か手あぶりであろう。55には成形時に底部に粘土塊を充填した痕跡がみられる。50～55はいずれも中世後期に属するものである。

56・57は搅乱からの出土である。56は鉄釉小皿であり、18世紀末～19世紀初頭に属する。57は小皿である。戦前のものであろう。本調査地点からはこれ以外にも近世・近現代の陶磁器が多く出土しているが、ほとんどが小片である。なお、今回は図示しなかったが、7～8世紀の杯や平安後期の長頸瓶など、奈良・平安時代の須恵器・灰釉土器も多く出土している。ただしその殆ど全てが小片である。おそらく近隣の遺跡から混入したものであろう。

(2)かわらけ

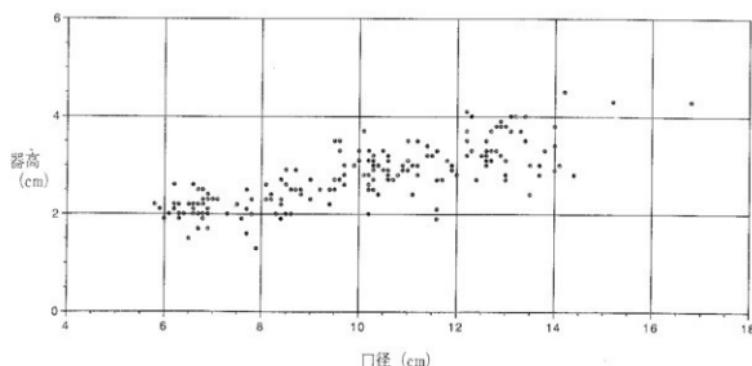
本調査地点において出土したかわらけの総量はコンテナにして約50箱ほどである。この出土量は歴史時代の全遺物の中で9割以上と、圧倒的な比率を占める。今回図示したのは、遺存状態の良好な199点である。

出土したかわらけの特徴について、次の3点を全体的な傾向としてあげることができる。

- ①ほとんどのかわらけは色調が橙褐色で胎土は密であり、焼成はやや甘い。
- ②出土したかわらけの全点がクロ成形品であり、手づくね成形のかわらけは1点も出土していない。
- ③底部の切り離しはほとんどが回転糸切りで、回転方向は右回転のみである。

中にはこの傾向と異なる胎土や技法を持つかわらけも存在するが、それらはごく少数派であり、圧倒的多数はこの3点の特徴を持っている。また、比較的多数のかわらけに見られる特徴として、次の3点もあげることができる。

- ①底部にスノコ状压痕が残るかわらけが多い。
- ②体下部をナデて丸みを持たせるものが多い。また、高台状の高まりをつくりだすものも多い。
- ③口縁部が外反するかわらけは、成形の際に口縁部をつまむようにしてつくりだしている。また、口縁部が内湾するかわらけも、成形方法自体は口縁部が外反するかわらけと同じであると思われる。



第25図 かわらけ法量分布

これは、外反するかわらけは体中央部から外へ開くのに対し、内湾するかわらけは体上部から内へ入り込むという特徴を持っているためである。

以上3点の特徴について、①は乾燥時についた干し台痕であると思われる。②はこの地方のかわらけとして特徴的な形態であると思われる。また③について、大きさは異なっても成形技法自体はひとつの共通する製作方式（親指で口縁部内面を、人差指の第2関節辺りで体中央部をロクロナデで調整）があるものと思われる。

出土したかわらけは、口径および器高から特小形・小形・中形・大形の4種類に分類できる。分類の基準は次のとおりである。

特小形・・・口径が7cm以下で、器高が1.5cm～2.5cmのかわらけ

小形・・・口径が7cm～9cm程度で、器高が1.5cm～3cmのかわらけ

中形・・・口径が9cm～12cm程度で、器高が2cm～4cmのかわらけ

大形・・・口径が12cm以上で、器高が2cm以上のかわらけ

この中で、大形品は口径が14cm以上のグループと14cm以下のグループで分類できる可能性があるが、資料の絶対数が少なく、不明な点が多いので、今回は一括して分類した。この4分類はそれぞれ形態的には非常に類似している。また各々のグループで数値のばらつきが多いが、焼成時の歪み等がなければ、数値のまとまりがよりはっきりと看取できると思われる。以上のことから、かわらけには一定の規格が存在すること、そして少なくとも4種類の異なるサイズのかわらけが存在すること等、かわらけの量産的な生産方式を伺い知ることができる。

全体的な特徴としては以上のとおりである。次に、個別のかわらけの特徴的な事柄について解説しておきたい。

今回の調査では、歴史時代の遺構からはほぼ例外なくかわらけが出土しているが、図示したのはSD-1から出土した7点(58～64)とSF-3から出土した2点(65・66)のみである。両遺構とも、これ以外にもかわらけの破片が多く出土しているが、小片であり図化できなかった。

58は小形品であるが、形態的には本遺跡の他のかわらけと系統的に異なるものと思われる。後述する253に類似したかわらけである。59～61はそれぞれ小形・中形・大形の典型的な形態である。59は体部や内湾気味、60・61は口縁部が外反する。62は見込みに同心円状の沈線が4条巡っている。同様の沈線は242のかわらけにもみられる。63・64は底部に穿孔が施される。65・66は灯明皿として使用されたかわらけである。両方とも中形である。

67～107は、特小形のかわらけである。このうち73～85は糸切り後に底部を指で押しナデて窪ませるという技法が共通するかわらけである。87は灯明皿である。また98～107は見込みの縁を指でナデて椀状につくりだしている。106は底部に穿孔が施される。107は見込みに線刻が残る。以上の特小形は後述する小形・中形・大形のかわらけとは若干成形技法が異なるようである。

108～134は、小形のかわらけである。成形技法は基本的には中形・大形と変わらない。全体的に、見込みの高まりを残すもの(112・113・121など)と、見込みを平坦にして丁寧に調整するもの(109・120・134など)と、見込みの高まりを指で強くナデ消したため窪んでしまったもの(108・128など)とに分けられる。このサイズでは、底部に穿孔が施されるものや灯明皿として使用されたものは確認できなかつた。

135～198は、中形のかわらけである。成形技法は基本的には小形・大形と変わらない。見込みの特徴に関しては小形と同様であるが、高まりをそのまま残すタイプは少ない。137・138・174・185・191・192・195は灯明皿である。このサイズが最も灯明皿として使用されている。165は底部に棒状工具の刺突痕が残る。179・186は底部に穿孔が施される。

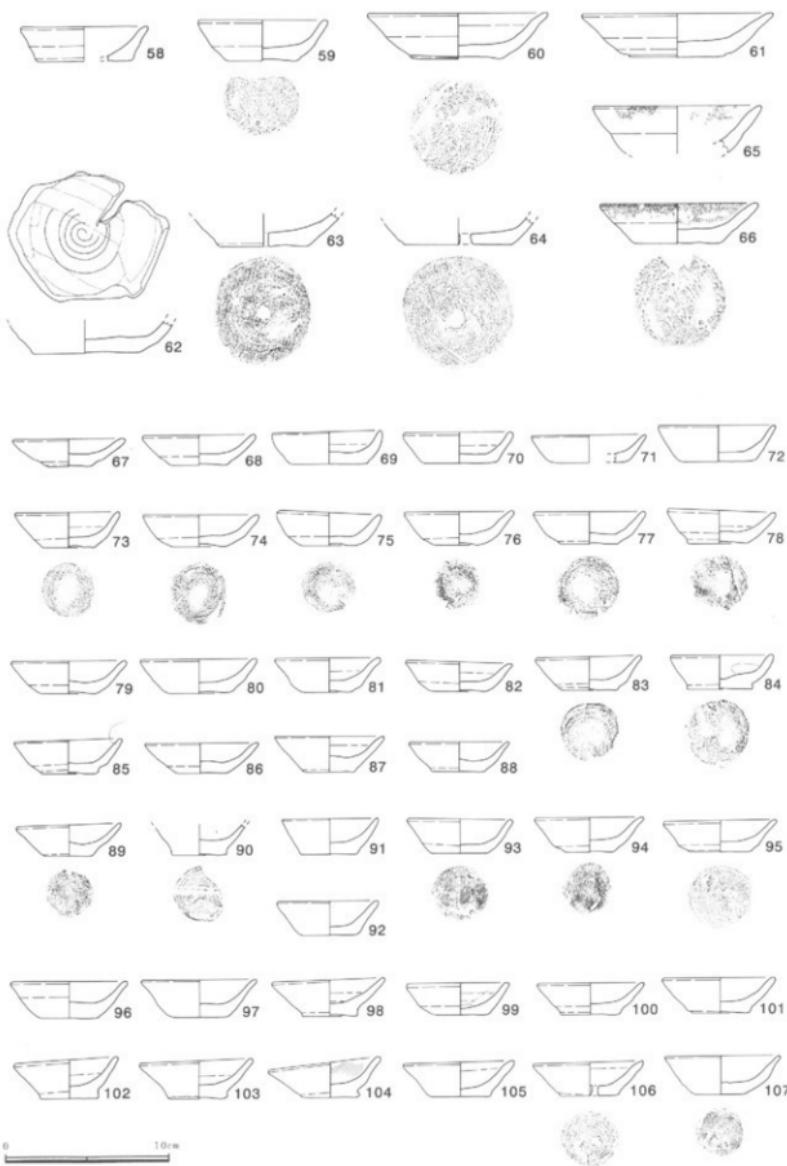
199～248は、大形のかわらけである。成形技法は基本的には小形・中形と変わらない。見込みの特徴に関して、高まりをそのまま残すタイプは存在せず、むしろナデで窪んでしまったものが多い。199・200は浅いつくりをしており、口縁部が外反する。他のかわらけに比べて薄手である。206は灯明皿である。242は見込みに同心円状の沈線が巡っている。同様の沈線は62のかわらけにもみられる。243は内面が縦ハケで調整されている。

249～256は、形態・技法が他のかわらけと著しく異なるグループである。249はいわゆる耳皿である。内側に折り曲げた右側体部に3箇所穿孔し、そのうち真中の1箇所は非貫通で残り2箇所は貫通している。左側は欠損のため不明である。250は非常に強い熱を二次的に受けている。胎土は暗褐色で硬質である。埴塙として使用されたかわらけと思われる。埴塙の可能性のあるかわらけはこの1点のみである。251と252は非常に浅いかわらけである。251の胎土は赤褐色を呈しており、硬質である。252の焼成は良好である。どちらも他のかわらけと胎土が異なる。253は58と同様のかわらけであり、本遺跡の他のかわらけと系統的に異なるものと思われる。254・255ともに胎土・形態が本遺跡の他のかわらけと系統的に異なる。時期的に遡る可能性が考えられる。256はいわゆる白かわらけである。胎土は密で、焼成は良好である。今回の調査で出土した白かわらけはこの1点のみである。

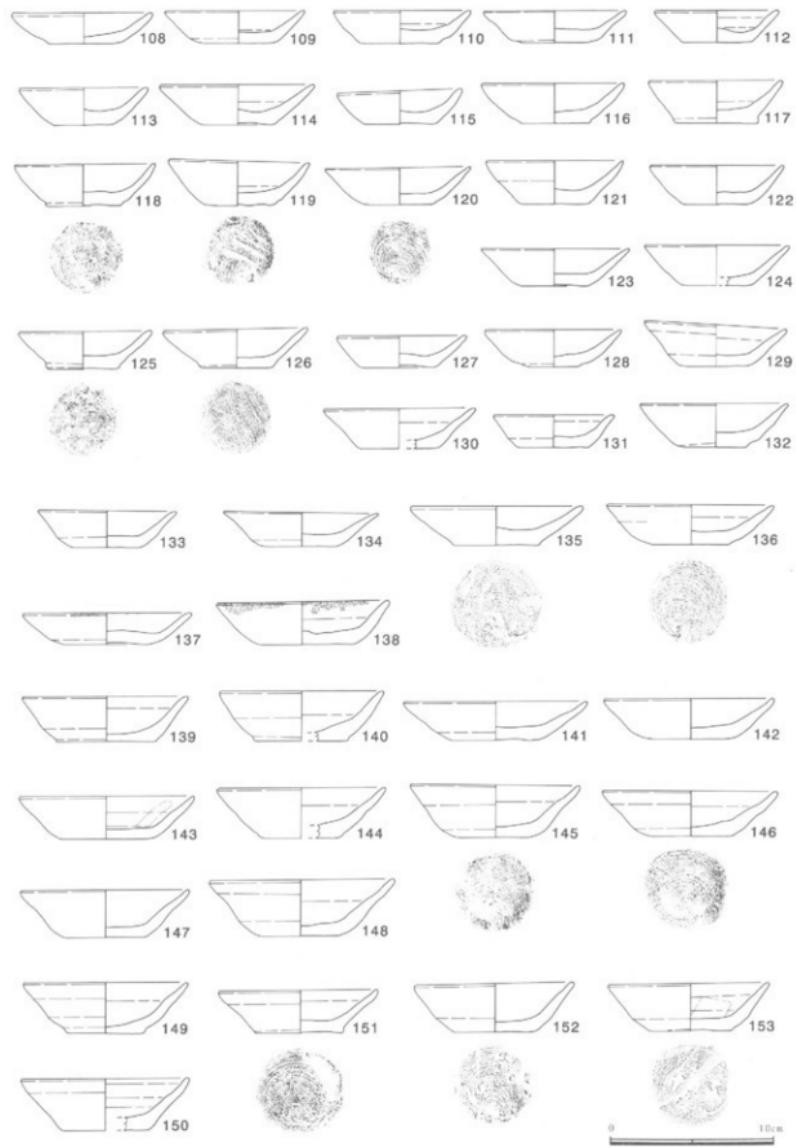
かわらけの年代について、静岡県内では後藤健一氏が遠江で出土したかわらけに関して編年を試みている（後藤1987）他、足立順司氏（足立1991）や松井一明氏（松井1993）も遠江のかわらけ編年を試みている。一方で、小田原で出土したかわらけに関しては山口剛志氏（山口1991・1994）が編年を試みている。今回調査を行った蘿山城跡の所在地である北伊豆に関しては、原茂光氏が御所之内遺跡から出土したかわらけをもとに、12世紀から16世紀にかけてのかわらけ編年を提示している（原1985）。このうちで、松井氏の論考に蘿山城跡から出土したかわらけについて記述した箇所があるので、引用してみたい。氏によると、蘿山城で出土したかわらけのうち16世紀前半代のものは「すべてロクロ成形」であり、「口径15cm前後で体部は丸く作られ口縁が少し外反するやや大形品、口径12cm前後で口縁が少し外反する中形品、口径9cm前後で口縁を外反する小形品の3種類からなる組み合わせとなっている」と述べている。そしてこの組み合わせが「駿府城の組み合わせと比較すると形態・組み合わせとともに合致し、伊豆北部域は駿河地域と同じかわらけの地城色をもった地区と理解され」るとしている。ここで検討に使用されている資料は、おそらく平成2年度の蘿山城跡の調査で出土した資料ではないかと思われる。法量でみると、今回の調査で出土したかわらけに比べて大きめであるといえる。

御所之内遺跡で出土したかわらけでは、ロクロ成形品は口径5～7cmの特小形品、口径6cm～9cmの小形品、口径9～13cmの中形品、口径12～14cmの大形品、口径15cm以上の特大形品と法量分解を行っている。この分類は今回行った分類と極めて近いが、御所之内遺跡出土かわらけの時期幅は約5世紀にわたるため、分類をそのまま比較検討するわけにはいかないだろう。

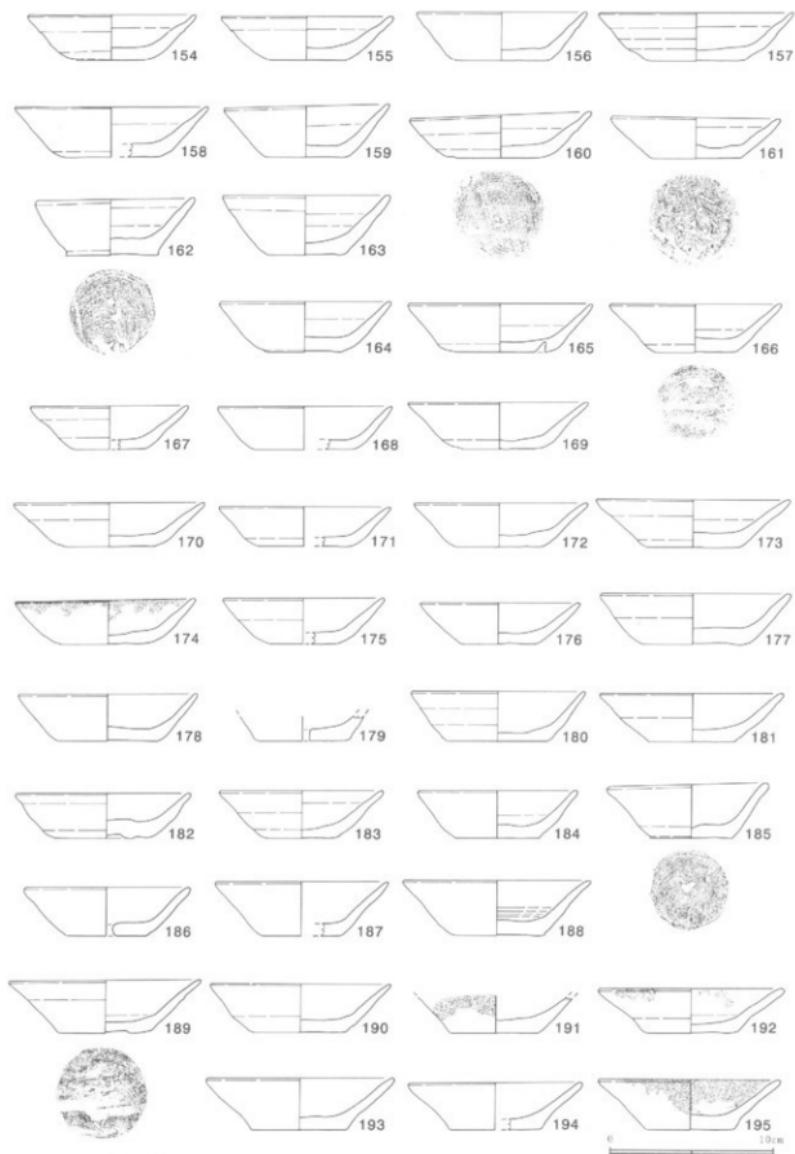
蘿山とその周辺のかわらけ編年に関しては、以上のように研究が進展している段階であるといえよう。今回の調査で出土したかわらけの時期は、原氏の編年によると大半がX期（15世紀末頃）かそれ以降になると思われる。遺構や他の遺物の所見からも、16世紀という所見が妥当であると思われる。その中で、58と253は山口氏の編年によるI期（15世紀初頭～末）にあたると思われ、小田原方面からの搬入品の可能性がある。また199と200に関しても、山口編年のIIa期にあたる可能性がある。いずれにせよ、今回出土したかわらけについては、時期の細分化と、系統の異なるかわらけのより詳細な位置付けが今後の課題であろう。



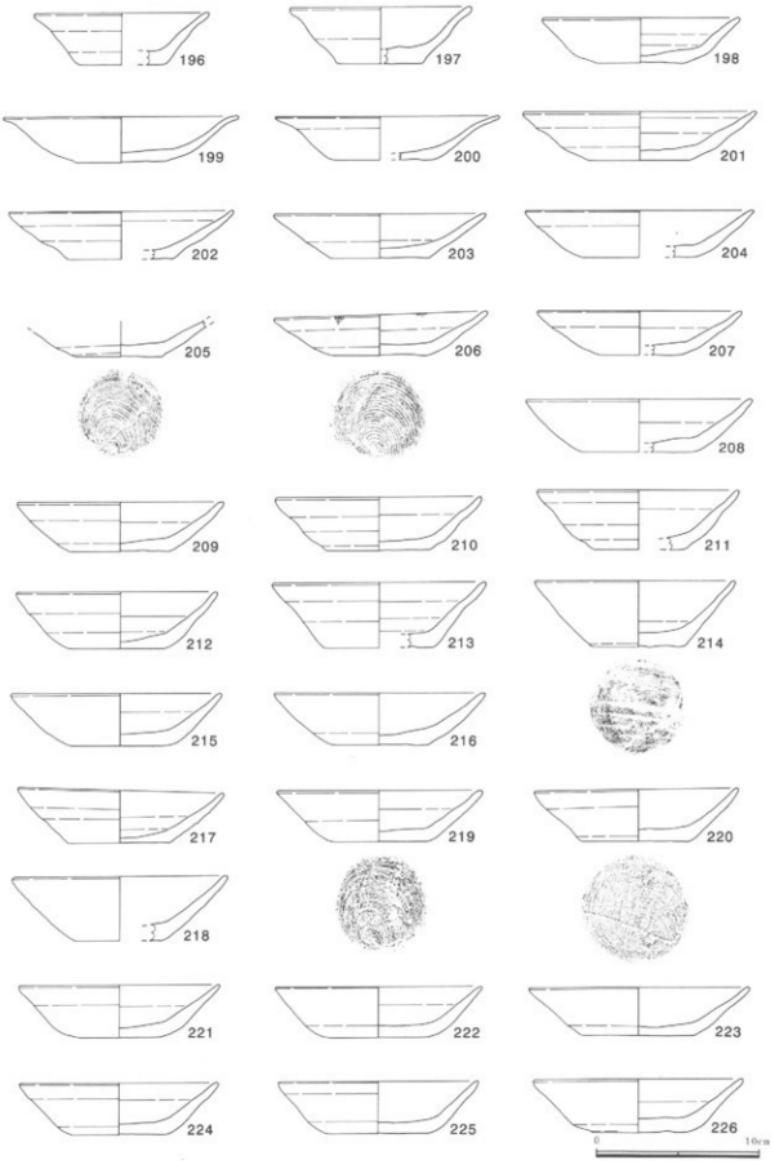
第26図 かわらけ実測図 1



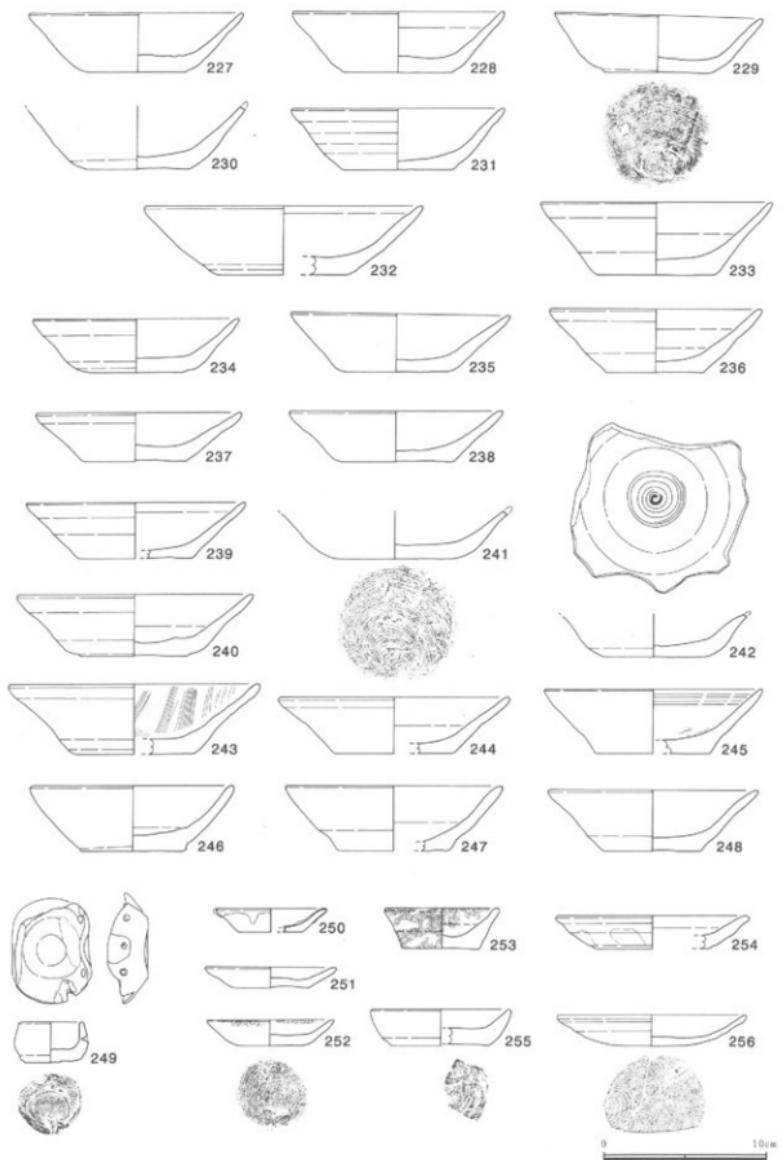
第27図 かわらけ実測図 2



第28図 かわらけ実測図 3



第29図 カワラケ実測図 4



第30図 かわらけ実測図 5

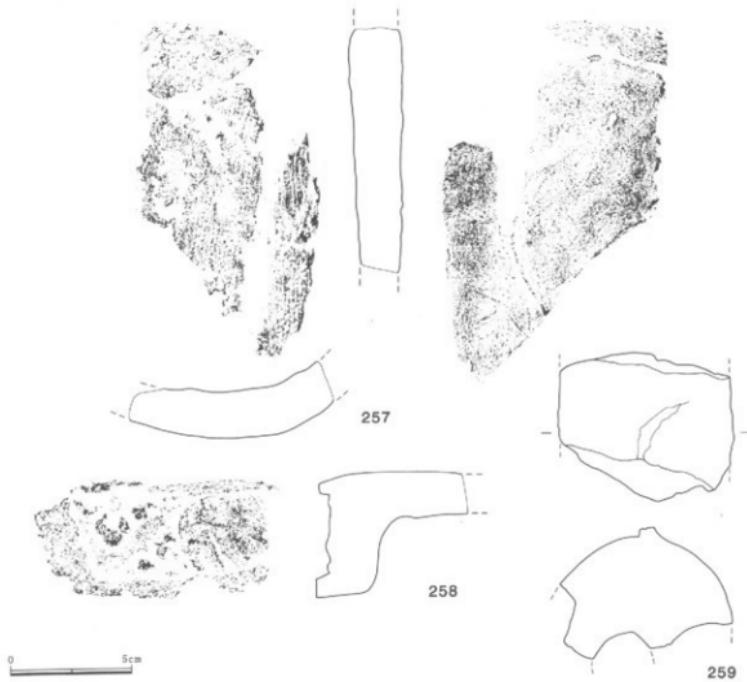
第8表 かわらけ一覧表(1)

番号	種類	器版	備考	出土層位				法寸(cm)	備考	
				番号	番号	遺物番号	GRID			
58	26	P-667	F-4	SD-1	(7.7)	5.7	2.1			
59	26	P-675	F-4	SD-1	(7.7)	4.2	2.5			
60	26	16P-664	F-4	SD-1	(10.9)	5.6	2.5			
61	26	P-652	G-1	SD-1	(11.7)	6.0	2.7			
62	26	16P-652	G-2	SD-1	6.5	12.1	見込み縫隙			
63	26	P-661	F-4	SD-1	5.4	12.0	底部穿孔			
64	26	P-702	G-3	SD-1	6.7	11.7	底部穿孔			
65	26	P-557	F-5	SF-3	(10.2)	7.9	灯明皿			
66	26	16P-557	F-6	SF-3	(9.5)	5.1	2.5	灯明皿		
67	26	P-213	F-1	IIa層	6.7	2.7	1.7			
68	26	P-559	D-2	IIa層	6.8	3.5	1.9			
69	26	16P-152	F-4	IIa層	6.6	4.7	2.1			
70	26	16	表鉢		6.4	4.6	2.0			
71	26	P-117	B-3	IIa層	(6.9)	(4.5)	1.7			
72	26	P-117	B-3	IIa層	(7.1)	4.2	2.3			
73	26	16P-126	F-2	IIa層	6.3	3.2	2.3			
74	26	16P-690	C-1	IIa層	6.7	3.1	2.0			
75	26	16P-689	C-1	IIa層	6.2	3.3	2.2			
76	26	16P-685	C-1	IIa層	6.6	2.9	2.0			
77	26	16P-123	D-1	IIa層	6.7	3.6	2.0			
78	26	16P-563	D-2	IIa層	6.6	3.8	2.2			
79	26	P-550	D-2	IIa層	(5.9)	3.5	2.0			
80	26	P-156	D-1	IIa層	(6.9)	(3.7)	2.1			
81	26	16P-392	C-1	IIa層	(6.2)	3.0	2.1			
82	26	16P-145	H-1	IIa層	6.3	3.5	1.9			
83	26	16P-458	A-2	IIe層	6.3	3.5	2.2			
84	26	16P-123	D-1	IId層	(6.2)	4.0	2.1			
85	26	16P-123	D-1	IId層	6.5	3.4	2.2			
86	26	16P-377	C-1	IIg層	6.8	3.0	1.9			
87	26	16P-71	D-2	IIa層	(6.6)	3.2	2.3	灯明皿		
88	26	16P-419	IIg層		6.0	3.2	1.9			
89	26	16P-148	D-2	IIa層	6.3	2.9	2.0			
90	26	P-306	B-3	II層		3.4	1.9			
91	26	16P-190	D-2	IIc層	(5.8)	3.4	2.2			
92	26	16P-611	F-2	IIg層	5.9	3.6	2.1			
93	26	16P-662	D-2	IIg層	6.2	3.4	2.2			
94	26	16P-565	C-1	IIe層	6.5	3.0	2.2			
95	26	16P-664	D-2	IIg層	6.8	3.8	2.0			
96	26	16P-634	C-1	IIg層	(7.0)	3.6	2.3			
97	26	P-369	C-1	IIg層	(6.9)	3.6	2.2			
98	26	16P-123	D-1	IId層	6.8	3.4	2.3			
99	26	16P-688	C-1	IIg層	6.1	3.4	2.0			
100	26	16P-188	E-2	IIa層	(6.4)	3.6	2.0			
101	26	P-550	D-2	IIg層	(6.8)	3.4	2.2			
102	26	16P-123	D-1	IId層	6.2	3.5	2.6			
103	26	16P-155	C-1	IIb層	6.7	3.6	2.5			
104	26	16P-183	D-1	IIa層	6.7	3.3	2.5			
105	26	16P-256	C-3	II層	6.7	3.6	2.2			
106	26	16P-575	D-1	IIe層	6.6	3.4	2.1	底部穿孔		
107	26	16P-576	D-1	IIe層	(6.9)	3.1	2.4	見込み縫隙		
108	27	17P-419	IIg層		5.4	4.0	1.9			
109	27	P-550	D-2	IIg層	(5.6)	4.0	2.0			
110	27	17P-291	B-3	IIa層	(6.3)	4.8	2.0			
111	27	17P-183	D-1	IIa層	8.6	4.1	2.0			
112	27	P-534	C-1	IIg層	(7.6)	4.3	1.9			
113	27	P-155	C-1	IIb層	(2.8)	3.7	2.3			
114	27	P-156	D-1	IIb層	(9.4)	4.4	2.5			
揭露番号	掉出番号	回版番号	回版番号	出土層位番号	出土層位番号	出土層位番号	出土層位番号	法寸(cm)	備考	
115	27	17	P-117	B-3	IIa層			7.5	4.4 2.2	
116	27		P-148	D-2	IIa層	(8.6)	4.3	2.6		
117	27		P-550	D-2	IIa層	(8.1)	5.1	2.6		
118	27		P-650	D-2	IIa層	(8.5)	4.6	2.6		
119	27	17	P-156	D-1	IIa層	8.5	4.3	2.9		
120	27	17	P-156	D-1	IIa層	8.8	3.8	2.4		
121	27		P-156	D-1	IIa層	(8.4)	4.2	2.7		
122	27	17	P-155	C-1	IIb層	(8.2)	4.0	2.4		
123	27	17	P-156	D-1	IIb層	(9.0)	4.0	2.3		
124	27		P-147	D-1	IIa層	(8.8)	4.2	2.5		
125	27		P-453	D-2	IIa層	8.1	4.3	2.3		
126	27	17	P-147	D-1	IIa層	8.7	4.3	2.5		
127	27	17							鉢底	
128	27		P-286	B-2	IIg層	(8.2)	3.1	2.3		
129	27	17	P-156	D-1	IIb層	8.7	4.0	2.9		
130	27		P-650	D-2	IIa層	(9.2)	4.7	2.6		
131	27		P-390	C-1	IIa層	7.3	4.1	2.0		
132	27		P-550	D-2	IIa層	(9.0)	3.9	2.7		
133	27	17	P-156	D-1	IIb層	8.4	4.2	2.3		
134	27	17	P-156	D-1	IIb層	9.4	4.4	2.2		
135	27		P-155	C-1	IIb層	(10.4)	5.3	3.4		
136	27	17	P-156	D-2	IIa層	10.2	4.7	2.5		
137	27		P-163	F-3	IIa層	(10.2)	5.0	2.0	灯明皿	
138	27	17	P-69	B-1	IIa層	10.5	6.5	2.9	灯明皿	
139	27	17	P-264	G-3	IIg層	10.1	6.1	2.8		
140	27		P-156	D-2	IIb層	10.0	5.8	3.1		
141	27		P-291	B-3	IIg層	(11.1)	(5.4)	2.4		
142	27	17	P-156	C-1	IIb層	(10.3)	4.8	2.5		
143	27		P-377	C-1	IIg層	(10.7)	(5.3)	2.7		
144	27		P-143	B-1	IIa層	(10.2)	(4.6)	3.1		
145	27	17	P-687	C-1	IIb層	10.2	4.7	3.3		
146	27	18P-692	C-1	IIb層	10.6	5.0	2.9			
147	27		P-692	C-1	IIb層	(10.3)	4.9	2.9		
148	27	18P-456	D-1	IIg層	(11.2)	4.8	3.5			
149	27		P-404	C-1	IIg層	(10.0)	(4.6)	3.1		
150	27		P-148	C-1	IIa層	(10.3)	(5.3)	3.2		
151	27		P-148	D-2	IIb層	(9.6)	5.4	2.7		
152	27	18P-292	C-2	IIg層	9.6	4.9	3.3			
153	27	18P-194	E-2	IIb層	9.7	4.9	3.0			
154	28	18P-156	D-1	IIb層	10.2	4.2	2.8			
155	28	P-156	D-1	IIb層	(10.3)	4.7	2.7			
156	28	P-390	C-1	IIg層	(10.9)	5.5	3.0			
157	28	P-158	D-2	IIb層	(11.9)	(5.8)	3.0			
158	28	18P-390	C-1	IIg層	11.8	5.4	3.1			
159	28	18P-156	D-1	IIb層	10.0	4.8	3.3			
160	28	18P-691	C-1	IIb層	11.0	4.9	2.9			
161	28	18P-301	B-3	IIg層	10.2	5.6	2.6			
162	28	18P-152	C-1	IIa層	9.6	5.6	3.5			
163	28	18P-692	C-1	IIb層	10.1	4.7	3.7			
164	28	P-146	C-1	IIa層	(10.3)	(4.6)	3.1			
165	28	P-265	B-4	IIg層	(11.2)	5.6	3.0	底部剥突		
166	28	18P-156	D-1	IIb層	(10.4)	4.9	3.0			
167	28	P-147	D-1	IIa層	(10.6)	(4.3)	2.7			
168	28	P-159	E-2	IIa層	(10.6)	(6.0)	2.7			
169	28	18P-188	E-2	IIa層	(10.9)	4.9	2.9			
170	28	P-227	F-2	IIa層	(11.6)	(5.6)	2.7			
171	28	P-156	D-1	IIb層	(10.4)	(5.6)	2.4			

第6表 かわらけ一覧表(2)

機動番号	坪目番号	図版番号	出土層位	法量(cm)			備考
				GRID	遺物番号	口径 底径 器高	
172	28	P-146	C-1 IIa層	(10.6)	5.3	2.7	
173	28	P-544	C-1 IIa層	(11.9)	5.8	2.9	
174	28	18P-146	C-1 IIa層	10.8	5.5	2.8	光明期
175	28	P-155	C-1 IIa層	9.7	3.6	2.8	
176	28	P-550	D-2 IIa層	9.7	4.5	2.6	
177	28	18P-163	F-3 IIa層	(11.5)	6.3	3.2	
178	28	P-72	B-1 IIa層	10.9	(6.2)	2.9	
179	28	P-680	G-3 IIg層		5.4	(1.5)	底部穿孔
180	28	P-404	C-1 IIg層	(10.6)	(6.2)	3.1	
181	28	P-156	D-1 IIa層	(11.1)	5.3	3.0	
182	28	18P-523	F-4 IIg層	(10.6)	6.0	2.8	
183	28	P-193	D-2 IIa層	(9.9)	4.4	3.0	
184	28	P-291	B-3 IIg層	(9.7)	5.2	3.0	
185	28	18P-395	C-1 IIg層	9.6	5.0	3.5	光明期
186	28	P-680	G-3 IIg層	(9.9)	(4.9)	3.0	底部穿孔
187	28	P-130	B-1 IIa層	(10.5)	(4.6)	3.5	
188	28	18P-198	E-2 IIa層	11.4	5.5	3.4	
189	28	18P-550	D-2 IIg層	11.6	5.6	3.3	
190	28	18P-193	D-2 IIg層	(10.9)	5.6	3.0	
191	28	P-130	B-1 IIa層		5.5	(2.2)	光明期
192	28	18P-193	D-2 IIa層	11.2	5.6	2.8	光明期
193	28	P-158	D-2 IIa層	11.4	5.9	3.2	
194	28	P-390	C-1 IIg層	(10.6)	(6.5)	2.9	
195	28	18P-242	C-2 IIg層	(11.0)	5.4	3.1	光明期
196	29	P-213	F-3 IIg層	(10.6)	(6.2)	3.2	
197	29	P-358	C-1 IIg層	(11.0)	5.1	3.5	
198	29	P-404	C-1 IIg層	12.0	5.3	2.8	
199	29	P-286	B-2 IIg層	(14.4)	5.6	2.8	
200	29	18P-390	C-1 IIg層	(13.7)	6.4	2.8	
201	29	18P-111	C-3 IIa層	(14.1)	6.1	3.0	
202	29	P-155	C-1 IIa層	(13.7)	(6.5)	3.0	
203	29	18P-245	C-2 IIg層	13.0	6.1	2.8	
204	29	18P-404	C-1 IIg層	14.0	6.8	2.9	
205	29	18P-292	C-2 IIg層		5.5	(2.2)	
206	29	19P-105	C-1 IIa層	13.0	5.7	2.7	光明期
207	29	P-156	D-1 IIb層	(12.4)	(4.7)	2.7	
208	29	P-404	C-1 IIg層	(13.8)	(6.7)	3.3	
209	29	19P-126	C-1 IIa層	(12.6)	(6.2)	3.1	
210	29	P-534	C-1 IIa層	(12.6)	(6.3)	3.3	
211	29	P-155	C-1 IIb層	(12.2)	(5.4)	3.7	
212	29	19P-156	D-1 IIb層	(12.2)	5.6	3.5	
213	29	P-534	C-1 IIa層	(13.1)	(6.7)	4.0	
214	29	P-534	C-1 IIg層	(12.2)	5.7	4.1	

機動番号	坪目番号	図版番号	出土層位	法量(cm)			備考	
				GRID	遺物番号	口径 底径 器高		
215	29	P-146	C-1 IIa層			(12.6)	5.4	3.3
216	29	19P-358	C-1 IIg層			12.9	5.9	3.2
217	29	19P-35e	B-1 IIa層			12.6	6.4	3.5
218	29	P-390	C-1 IIg層			(13.1)	(6.8)	4.0
219	29	19P-68	B-1 IIc層			12.6	5.7	3.2
220	29	19P-336	C-3 IIg層			12.3	6.6	3.3
221	29	19P-35	B-2 IIa層			(12.2)	4.8	3.2
222	29	P-404	C-1 IIg層			(12.7)	(6.0)	3.1
223	29	19P-242	C-2 IIg層			13.5	7.0	3.0
224	29	19P-390	C-1 IIg層			12.6	5.8	3.2
225	29	P-159	E-2 IIa層			(12.2)	(6.1)	3.2
226	29	19P-72	B-1 IIa層			(12.7)	5.6	3.3
227	30	19P-390	C-1 IIg層			(13.1)	6.0	3.7
228	30	P-390	C-1 IIg層			(12.9)	(6.6)	3.8
229	30	19P-35e	B-1 IIa層			12.7	6.8	3.7
230	30	P-534	C-1 IIg層			12.9	6.3	(3.9)
231	30	P-98	C-1 IIa層			(13.0)	(6.8)	3.8
232	30	P-146	C-1 IIa層			(16.8)	(9.0)	4.3
233	30	P-390	C-1 IIg層			(14.2)	7.2	4.5
234	30	P-72	B-1 IIa層			(12.6)	5.4	3.3
235	30	19P-561	C-1 IIg層			13.3	6.6	3.7
236	30	19P-692	C-1 IIg層			(12.9)	(6.0)	3.9
237	30	19P-145	C-1 IIa層			(12.6)	6.4	3.0
238	30	19P-390	C-1 IIg層			(13.0)	6.8	3.1
239	30	P-196	D-1 IIb層			(13.4)	(6.9)	3.5
240	30	P-291	B-3 IIg層			(14.0)	6.5	3.8
241	30	19P-123	D-1 IIb層			7.0	(3.0)	
242	30	19P-146	C-1 IIa層			6.1	(2.6)	見込み層
243	30	P-78	D-1 IIa層			(12.5)	(7.2)	4.3
244	30	P-698	G-3 IIg層			14.0	7.2	3.4
245	30	P-145	C-1 IIa層			(13.4)	(7.0)	4.0
246	30	P-146	C-1 IIa層			(12.3)	6.4	4.0
247	30	P-390	C-1 IIg層			13.2	6.8	4.0
248	30	19P-534	C-1 IIg層			(12.8)	6.0	3.8
249	30	19P-532	G-4			6.6	3.7	2.6 耳皿
250	30	P-698	G-3 IIg層			(5.5)	4.0	1.5
251	30	P-291	B-3 IIg層			(7.9)	4.5	1.3
252	30	19P-693	C-2 IIg層			7.7	4.0	1.6 灯明期
253	30	19P-321	C-2 IIg層			6.6	4.7	2.6 灯明期
254	30	P-572	G-4	IIg層		(11.6)	6.9	2.1
255	30	P-340	C-4	IIg層		(8.4)	6.0	2.2
256	30	P-541e	F-4	IIa層		(11.6)	5.7	1.9 白かわらけ



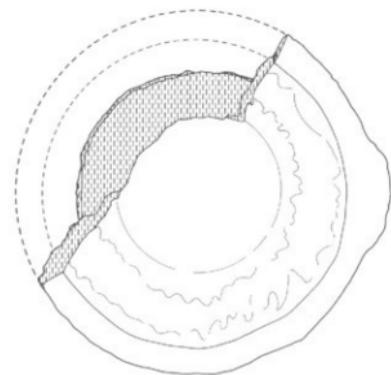
第31図 土製品実測図（歴史時代）

(3)土製品

全部で7点出土しており、そのうち3点を図示した。257は平瓦である。内面に布目痕が確認できるが、外面に調整痕は確認できない。灰色を呈しており、焼成は甘く摩滅が著しい。258は軒平瓦である。右側半分は欠落している。暗青灰色を呈しており、焼成は良好である。内区の紋様は半裁花文であり、製作時に紋様の一部をナデてつぶしたような痕跡が確認できる。瓦の上部を砥石に転用している。同様の瓦は頤成就院跡でも出土しており、12世紀頃のものであると思われる。本調査地点から出土した瓦は以上の2点であるが、蘿山城と関連しない遺物であると思われる。259は輪羽口の破片である。他にも羽口の破片は3点出土している。いずれも包含層からの出土であるため混入の可能性もあるが、坩埚として使用したと思われるかわらけやスラッグも今回の調査で出土したことから、蘿山城内あるいは城下における鍛冶工房に関連する遺物ではないかと考えている。なお今回の調査では、歴史時代の包含層から完形の土錐が5点出土しているが、弥生～古墳時代の土錐が混入した可能性も考えられるため、Va層から出土した土錐と併せて第V章に掲載したので、そちらを参照していただきたい。

第7表 土製品（歴史時代）一覧表

掲載番号	掲図番号	出土層位	種類	法量(cm)			備考
				長さ	幅	厚さ	
257	31	20 Pt-7e	F-2 Ⅲ層	平瓦			136.55
258	31	20 Pt-13	C-2 Ⅱg層	軒平瓦			282.33
259	31	20 Pt-12	B-2 Ⅱf層	輪羽口			163.55

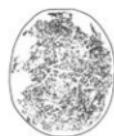


260



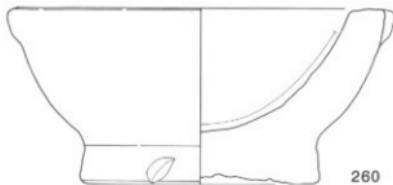
262

263

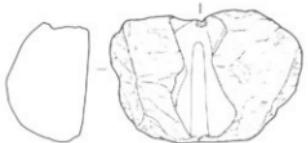


264

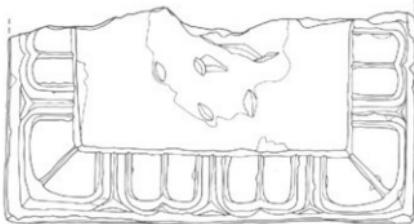
0 5cm



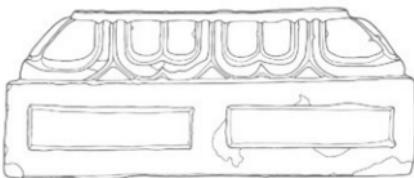
260



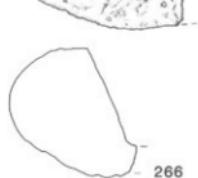
265



261



0 10cm



266

0 10cm

第32図 石製品実測図（歴史時代）

4) 石製品

遺構から出土した石製品は、260 (S D-1) と266 (S F-1) である。260は鉢の形をしている。1/2程欠落している。口縁部に取っ手状の張り出しが付けられている。内面が摩耗していることから、おそらくこね鉢として使用されたのではないかと思われる。また、底部には墜式工具の痕跡が残っている。261は宝鏡印塔の反花座である。1/2程欠落している。反花は中二弁式で、弁間には三角形の予弁が表現されている。半肉彫りである。上面は鑿状工具によりやや掘り進められている。宝鏡印塔に関しては、「並山町史 第4巻 (1988)」で並山町周辺に所在する宝鏡印塔反花座の編年が試みられている。編年は13世紀第3四半期から近世初頭までをV期に区分しており、261は第Ⅳ期 (14世紀第4四半期~15世紀第2四半期) に属するものと思われる。262~264は円盤である。いずれも丸形あるいは完形に近く、正面・裏面・側面を磨いている。264は文字らしき線刻がみられる。「竹廣」と書かれていると思われる。264は歴史時代の遺物であろうが、262・263の時期は不明である。265は用途不明品である。輕石で作られており、1/2程度欠落しているものと思われる。上下方向に穴があけられている。穴は貫通しており、両側から穿孔している。浮子であろうか。266も用途不明品である。これも1/2程度欠落している。輕石で作られており、上部に大きな穴があけられている。穴の形は円錐形であり、穿孔時の工具痕が残っている。穴は貫通していない。御所之内遺跡でもこれと同様の遺物が出土している。凹石として報告しておきたい。

5) 金属製品

遺構から出土した金属製品は、268 (S F-3) ・270 (S F-1) ・271 (S D-1) ・272 (S X-1) である。これ以外は包存層からの出土であり、出土状態からいずれも廃棄あるいは混入であると思われる。

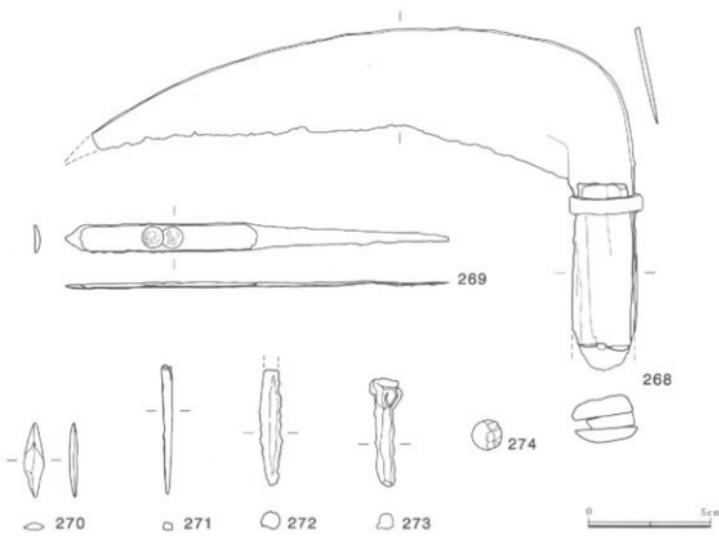
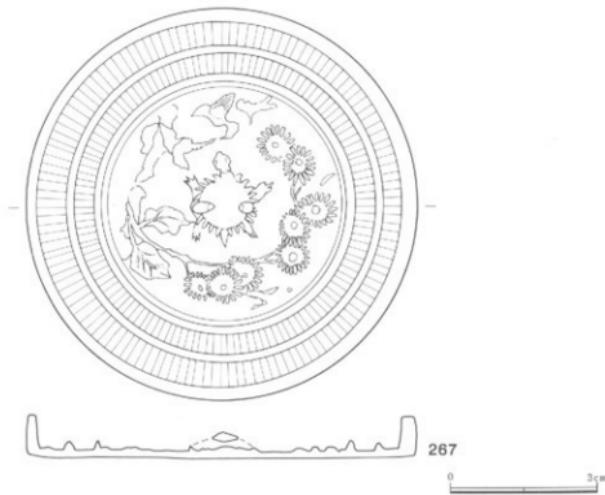
267は完形の利鉈である。直径は8cmである。縁は0.9cmと高く、2条の界隈で内区が区画されている。内区の紋様は鶴をかたどった鉈の周囲を菊花が取り巻く構図であり、上部に鶴を2羽配している。いわゆる菊花双鶴鏡である。268は鎌である。刃部は鉄製で、木製の柄も一部残存する。刃部の幅は4.1cmで、厚さは0.2cmである。刃部は柄に鉄製の口刺しで留められており、さらに鉄製の切端によって固定されて

第8表 石製品 (歴史時代) 一覧表

掲載 番号	押印 番号	圆版	出土層位	種類	材質	法量(cm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
260	32	20	S-85	F-4	SD-1	こね鉢	緑色凝灰岩	30.0 11.6 13.4	6692.8	
261	32	20	S-5	D-2	IIa層	宝鏡印塔	輝石安山岩	33.6 19.1 14.0	12746.8	圆版11.1
262	32	20	S-142	F-4	IIg層	円盤	玄武岩	4.4 1.1	16.42	
263	32	20	S-141	E-5	IV層	円盤	輝石安山岩	4.5 1.1	15.10	
264	32	20			推測	円盤?	輝石安山岩	5.2 4.3	34.77	
265	32	20	S-133	E-2	IIc層	浮子?	流紋岩質軽石	5.4 7.9	4.1	53.90
266	32	20	S-23	E-2	SF-1	凹石	流紋岩質軽石	11.2 10.6	8.1	351.90

第9表 金属製品 (歴史時代) 一覧表

掲載 番号	押印 番号	圆版	出土層位	種類	材質	法量(cm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
267	33	20	M-18	D-2	IIe層	鏡	銅		90.70	
268	33	21	M-12	F-5	SF-3	鏡	銅		193.23	
269	33	21	M-13	C-2	IIg層	笄	銅	15.7 1.1 0.2	13.64	
270	33	21	M-8	E-2	SF-1	用途不明	銅	3.1 0.8 0.3	3.05	
271	33	21	M-29	F-4	SD-1	釘	銅	5.3 0.4 0.3	1.67	
272	33	21	M-5	G-1	SX-1	釘	銅	4.8 0.8 0.7	4.74	
273	33	21	M-4	B-1	IIa層	釘	銅	4.4 0.7 0.6	5.99	
274	33	21	M-1	E-2	IIa層	鍛鉄玉	銅		9.65	



第33図 金属製品実測図（歴史時代）

いる。目刺しは端部が敲打により平坦になっている。切端は厚さが0.2cmである。269は笄である。貝の内が欠損している以外は、道存状態は良好である。胴部の両端は木瓜形および眉形で、中には円形の紋様が中央に2つ若干重なって並ぶ。總先は細く、薄くなる。(笄の名称に関しては、筆問良彦『図録日本の甲冑武具辞典(1981)』による)。270は鉛製品である。菱形をしている。用途は不明であるが、装飾品の可能性がある。271は鉄釘である。銑鉄であり、道存状態が良好な遺物である。表面は赤褐色(ヘマタイトと思われる)を呈しており、二次的に火を受けた可能性が考えられる。頭部付近が歪んでおり、この釘が使用されたことを示している。頭部は欠落している。272・273も鉄釘と思われるが、271と異なり道存状態は劣悪である。

274は鉄砲玉である。鉛製であり、直徑は1.2cmである。球表面の片側半分に著しい凹凸が観察できる。一度射出された玉の可能性がある。鉄砲玉に関しては、近隣地域では山中城跡の調査で多数出土している(斎藤1986)。山中城跡の調査結果では、鉄砲玉の出土量は鉛青銅製が圧倒的に多く、次いで鉛製、鉄製の順となっている。鉛は融点が低いため、鉛玉は戦場等で急造するのに適している。その鉛玉よりも鉛青銅玉の方が山中城跡で多く出土した理由として斎藤氏は、鉛玉は殺傷能力が低いため、殺傷能力が高い鉛青銅製の鉄砲玉が多く生産されたと述べている。しかし一方で、鉛青銅玉の製造は高度の知識や技術を必要とするとも述べている。葦山城においてはまだ出土数が少ないので、山中城跡など近隣の他の城跡との鉄砲玉に関する比較研究は今後の課題のひとつである。

なお、267と269に関しては、X線透過撮影装置を使用した調査も実施した。撮影された2点のうち、267は図版20に掲載した。

(6) 錢貨

錢貨は近現代の貨幣を含め、全部で17枚出土した。遺構から出土した錢貨は、275~277(SD-1)である。275は開元通寶である。背文字が無く縁も狭いため、武徳4年(621年)初鋳のものとした。276は太平通寶である。277~280は皇宋通寶である。281は嘉祐通寶である。282は治平元寶である。283・284は熙寧元寶である。285は元符通寶である。286は鉄錢である。錢文は腐食により残存しない。287は崇寧通寶の当十銭であり、駒輪されていない。288・289は寛永通寶である。いずれも四文銭で背面は十一波

第10表 錢貨一覧表

掲載番号	捕獲番号	国版番号	遺物番号	GRID	出土層位・遺構	種類	初鋳年代	法量(cm)			備考
								外径	内径	厚さ	
275	34	21	M-26	G-4	SD-1	開元通寶	唐 621年	2.4	0.7	0.10	1.86
276	34	21	M-24	F-4	SD-1	太平通寶	北宋 976年	2.4	0.7	0.12	2.92
277	34	21	M-27	G-3	SD-1	皇宋通寶	北宋 1038年	2.4	0.10	1.44	真書
278	34	21	M-21	D-2	IIe層	皇宋通寶	北宋 1038年	2.5	0.7	0.13	0.97 真書
279	34	21	M-22	E-2	IIg層	皇宋通寶	北宋 1038年	2.4	0.8	0.11	1.49 笔書き
280	34	21			便瓦	皇宋通寶	北宋 1038年	2.4	0.8	0.14	2.46 真書
281	34	21	M-20	D-2	IIe層	嘉祐通寶	北宋 1056年	2.4	0.8	0.11	1.74 真書
282	34	21	M-15	D-2	IIg層	治平元寶	北宋 1064年	2.4	0.7	0.11	1.94 真書
283	34	21	M-17	C-1	IIg層	熙寧元寶	北宋 1068年	2.4	0.7	0.11	1.97 真書
284	34	21	M-2	B-1	IV層	熙寧元寶	北宋 1068年	2.3	0.7	0.13	2.60 真書
285	34	21	M-19	C-2	IIe層	元符通寶	北宋 1098年	2.4	0.7	0.10	1.64 行書
286	34	21	M-25	D-2	IIf層	鉄錢		2.1	0.8	0.03	0.54
287	34	21			表探	崇寧通寶	北宋 1103年			0.21	1.29 真書 当十
288	34	21			復亂	寛永通寶	日本 1769年	2.8	0.7	0.14	5.14 四文銭(十一波)
289	34	21			復亂	寛永通寶	日本 1769年	2.9	0.7	0.10	3.75 四文銭(十一波)
290	34				表探	1銭貨幣		2.2		0.13	3.65
291	34				擅亂	50円貨幣		2.5		0.16	5.46



275



276

277

278

279



280

281

282

283

284



序



285

286

287

288

289



290

291

第34図 錢貨拓影

である。290・291は共に近現代の貨幣である。290は1銭青銅貨である。291は50円ニッケル貨である。

本遺跡から出土した銭貨の大部分は北宋錢である。入出整三氏は、国内から出土した渡来銭の中で特に出土量の多い銭貨として、「元豐通寶」「皇宋通寶」「熙寧元寶」「開元通寶」「元祐通寶」の5種を挙げている（入田1930）。昭和5年の集計であるが、現状でも大量出土銭の銭種組成は同様の傾向を示しており（鈴木1992）、中世日本で普遍的に流通していた銭種であるといえよう。今回の調査結果でも、中世遺跡としては標準的な出土傾向を示している。

なお銭貨の調査法のひとつとして、X線透過撮影装置を使用した調査も実施した。撮影された銭貨の一部は図版21に掲載した。

(7)木製品

歴史時代の木製品は、箸状木製品が236点、S A - 1 に伴う杭材が245点、その他が45点出土した。これらのうち47点を図示した。出土した遺構はそれぞれ、S F - 2 (292) • S D - 1 (293~317) • S F - 3 (318~328) • S A - 1 (329~338) である。

292は連櫛下駄の未製品であると思われる。正面の歯の位置に目処線と思われる刃先痕がみられる。一般的には木表が上面にくるのであるが、これは木裏が上面にくる。サイズから子供用と思われるが、失敗作なのであろうか。駿府城でも鼻緒の穴があけられていない下駄の未完成品が出土している。

293~295は形代である。293は弓と思われるが、小形であるため実用ではないと判断した。黒漆の上に更に赤漆を重ね塗りしている。294は何を模しているかは不明である。木取りは板目取である。295は脇差しを模していると思われる。木取りは板目取である。直刀であり、切刃造である。先端部分は焼痕が残っており、その先は欠落している。刃部の根元に鍔らしきものもつくりだしている。柄の部分に細かい線刻が確認できる。三角形にみえるが、意図的なものかどうかは不明である。296・297の用途ははつきりしないが、輪カンジキ型円下駄の一部ではないかと考えている。2点とも木取りは板目取である。296は4ヶ所の穿孔と、左右側面の上・下部に切込みが入れられている。297は下半分が欠落しているが、左右側面上部に切込みが入れられていることから、下側にも同様の切込みがあったことが推定できる。

298~317は箸状木製品である。今回の調査で出土した箸状木製品は、包含層から出土した若干数を除き、S D - 1 から集中的に出土している。298~312は側面が面取りされており、断面形が三角形あるいはそれ以上の多角形であり、断面の縦横比が1対1に近いものである。これらはいずれも上下両端を細く加工するが、端部は尖らないように調整されている。313~317は断面が長方形を呈し、正面及び裏面は木目で割り剥いでおり、特に面取りはされていない。いずれも木取りは板目取である。これら箸状木製品の用途であるが、箸としての実用品と考える他に、祭祀に関する遺物として報告されることも多い。県内では三島市の御殿川流域遺跡群で大量の箸状木製品が出土している。調査者によると、集中的な出土状態や強度的な面で実用に耐えられないものも多く含まれていること等から、祭祀の可能性が考えられるという。298~312の形状のものは実用としては若干長いものが多いが、実用の箸として使用されていた可能性は考えられる。一方、313~317はこのような形態であるため、箸としての機能は考えにくい。箸状木製品がS D - 1 という溝状遺構の底部から集中的に出土しているということも併せて考えると、祭祀に使用された可能性が高いと思われる。

318~323は漆器の椀である。318は赤漆で「五十」の文字と、それを取り囲むように円が描かれている。319は体部に薄繪が描かれている。絵柄は不明である。320・321は体部が内湾して立ち上がる。320は高台内に「×」印の線刻が認められる。322・323は底部の素地が薄手で、体部は下位に稜をつくって立ち上がる。これら漆椀の時期は近世であると思われる。なお、包含層からも15点の漆椀が出土しているが、全て木質部が腐食していて漆のみしか残存していない状態であり、強化処理を施したもののが化し得る

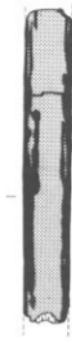
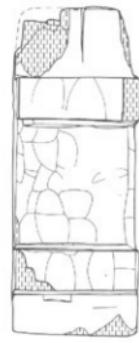
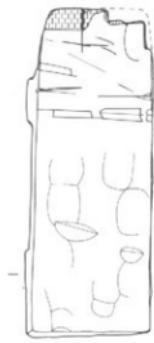
状態ではないため、ここでは図示しなかった。

324・325は円板である。324の木取りは板目取、325の木取りは柾目取である。どちらも曲物の底板ではないかと思われる。326は曲物の側板である。出土した状態では、直径が11.3cm（2／3残存）であった。327は竹製の用途不明品である。正面中央には、上下方向に凹状の窪みがみられる。裏面には細かい線状痕が無数に存在する。328は板の周間に小孔が8ヶ所穿たれている。そのうち1ヶ所には木釘が遺存している。箱状木製品の一部ではないかと考えられる。

329～338はS A-1を構成している杭である。329の樹種はシキミである。330の樹種はアカマツである。329・330とも丸太の先端を尖らせて杭として使用したものである。331～338はスギの割材である。いずれも先端を尖らせて杭として使用したものである。出土した杭材の大部分はこのようなスギの割材である。このうち335は正面を手斧で加工している。今回出土した杭材の中には、明らかに二次転用と判断できるものは存在しなかった。

(8)自然遺物

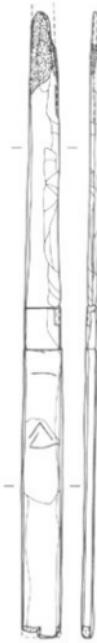
自然遺物としては、SD-1から獸骨（ニホンジカの大腿骨・中足骨とウマの基節骨）、大量の種子、貝殻圧痕（サザエ・アワビ等）、木片等が出土した。SF-2からは種子の他に、イヌの上腕骨とイルカの下顎骨が出土した。また、包含層から珊瑚の出土もあった。



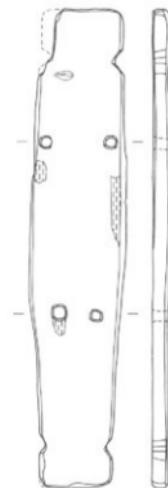
292

朱漆

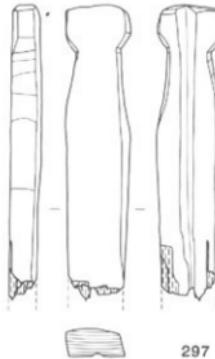
294



295



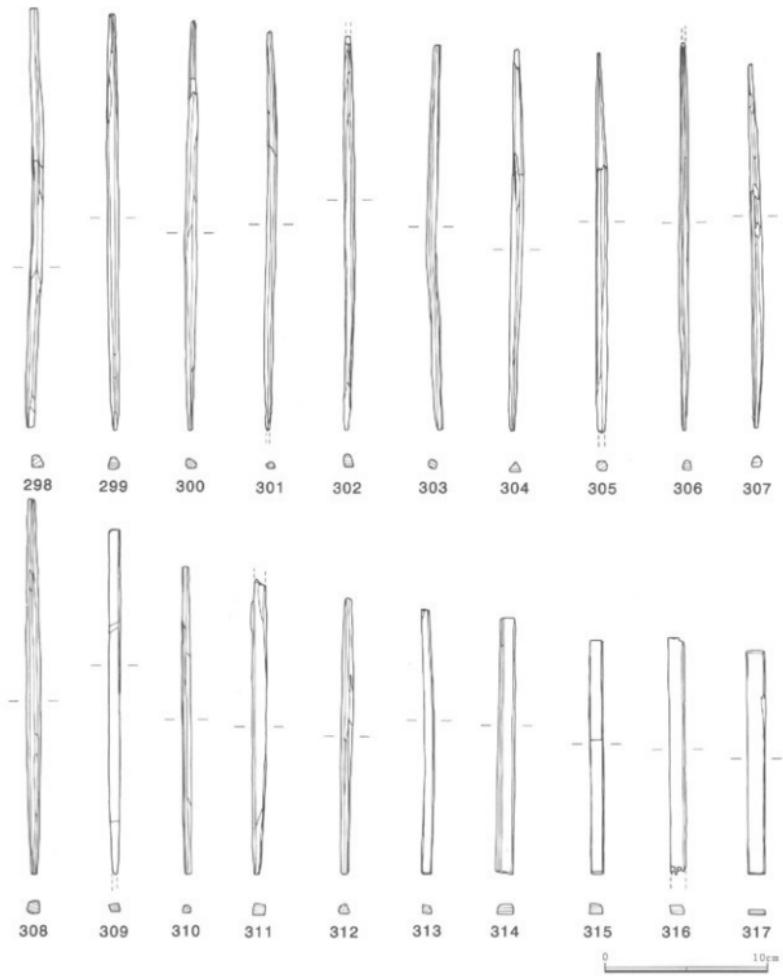
296



297

0 10cm

第35図 木製品実測図（歴史時代）1



第36図 木製品実測図（歴史時代）2



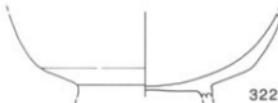
318



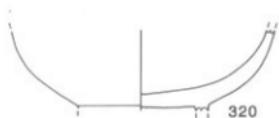
321



319



322

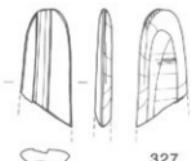


320

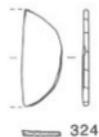


323

0 5cm



327



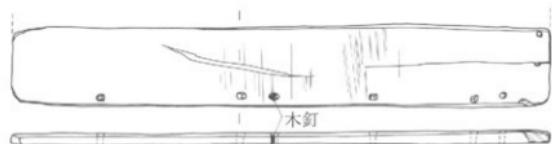
324



325



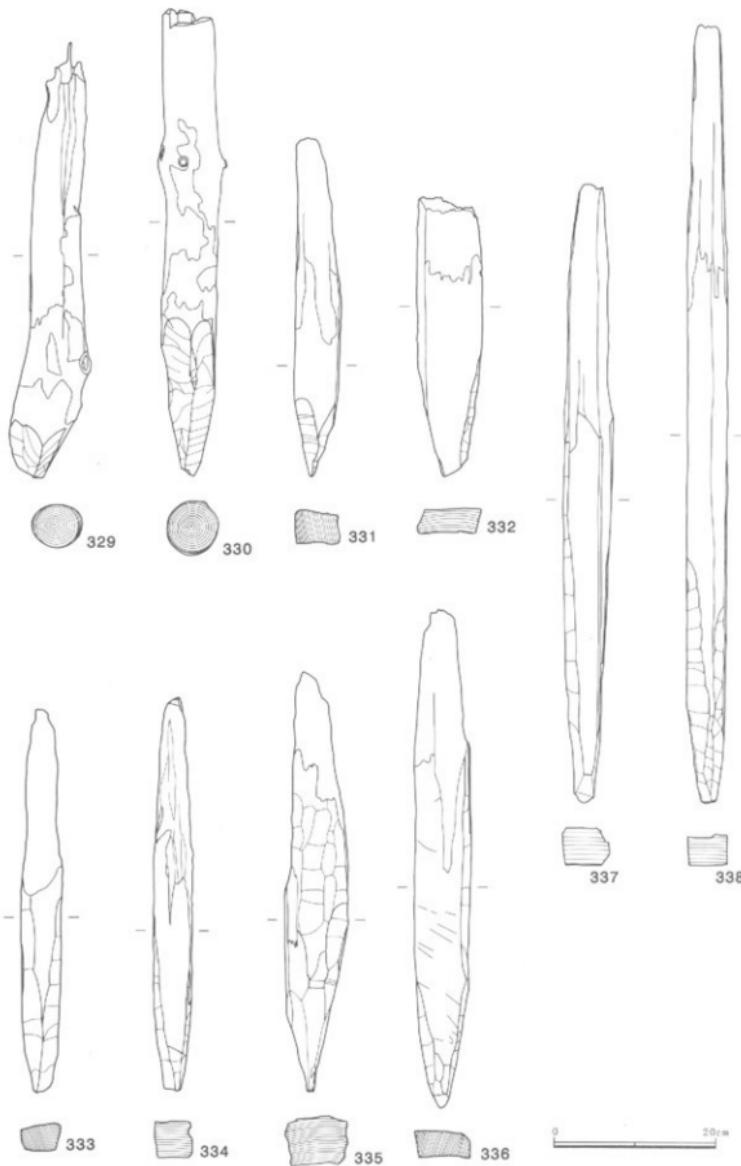
326



328

10cm

第37図 木製品実測図（歴史時代）3



第38図 木製品実測図（歴史時代）4

第11表 木製品(歴史時代)一覧表

掲載番号	種別番号	図版番号	遺物番号	GRID	出土層位・遺構	種類	樹種	法量(cm)			備考
								長さ	幅	厚さ	
292	35	22	W-45	C-3	SF-2	下駄?	サクラ	20.1	7.8	3.7	
293	35	22	W-50	F-4	SD-1	形代(弓)	ヒノキ	19.2	2.9	0.9	
294	35	22	W-59	F-4	SD-1	形代	スギ	22.9	2.5	3.5	
295	35	22	W-62	F-4	SD-1	形代(刀)	スギ	38.0	2.5	0.6	
296	35	22	W-263	G-3	SD-1	田下駄?	スギ	29.2	5.9	1	
297	35	22	W-55	G-3	SD-1	田下駄?	スギ	[18.0]	4.1	1.7	
298	36	22	W-58	F-4	SD-1	著状木製品	スギ	25.5	1.3	0.75	
299	36	22	W-49	G-4	SD-1	著状木製品	スギ	25.3	0.8	0.8	
300	36	22	W-51	G-3	SD-1	著状木製品	スギ	29.9	0.9	0.6	
301	36	22	W-49	G-4	SD-1	著状木製品	スギ	[24.3]	0.8	0.5	
302	36	22	W-51	G-3	SD-1	著状木製品	スギ	[25.0]	0.7	0.8	
303	36	22	W-49	G-4	SD-1	著状木製品	スギ	23.5	0.9	0.6	
304	36	22	W-51	G-3	SD-1	著状木製品	スギ	23.3	0.9	0.6	
305	36	22	W-49	G-4	SD-1	著状木製品	スギ	[23.1]	0.7	0.6	
306	36	22	W-49	G-4	SD-1	著状木製品	スギ	[23.6]	0.7	0.6	
307	36	22	W-49	G-4	SD-1	著状木製品	スギ	22.1	0.9	0.7	
308	36	22	W-58	F-4	SD-1	著状木製品	スギ	22.9	0.9	0.8	
309	36	22	W-49	G-4	SD-1	著状木製品	スギ	[21.0]	0.8	0.5	
310	36	22	W-49	G-4	SD-1	著状木製品	スギ	18.7	0.6	0.5	
311	36	22	W-51	G-3	SD-1	著状木製品	スギ	[18.0]	0.9	0.7	
312	36	22	W-58	F-4	SD-1	著状木製品	スギ	16.8	0.7	0.6	
313	36	22	W-49	G-4	SD-1	著状木製品	スギ	16.1	0.9	0.55	
314	36	22	W-58	F-4	SD-1	著状木製品	スギ	15.7	1.1	0.6	
315	36	22	W-49	G-4	SD-1	著状木製品	スギ	14.2	0.9	0.65	
316	36	22	W-51	G-3	SD-1	著状木製品	スギ	[13.4]	1.1	0.5	
317	36	22	W-51	G-3	SD-1	著状木製品	スギ	18.6	1.2	0.35	
318	37	23	W-52	F-4	SF-3	漆桶	ケヤキ	器高 [2.4]	0.45	内外面黒漆、文字赤漆	
319	37	23	W-48	F-5	SF-3	漆桶	ホウノキ	器高 [2.9]	0.70	高台外径5.95、内径4.85 外面黒漆、萬絵赤漆 内面赤漆	
320	37	23	W-48	G-8	SF-3	漆桶	トチノキ	器高 [3.3]	0.65	高台外径5.45、内径4.70 内外面赤漆	
321	37	23	W-23	F-5	SF-3	漆桶	ケヤキ	器高 底径 3.65 5.85	0.55	口径(10.65)、高台外径5.70、 高台内径4.60、高台高0.65 内外面赤漆	
322	37	23	W-57	E-5	SF-3	漆桶	ミズキ	器高 [3.4]	0.60	高台外径5.45、内径4.40 内外面黒漆	
323	37	23	W-24	E-5	SF-3	漆桶	トチノキ	器高 底径 4.15 5.4	0.85	高台外径5.35、内径4.65、 高台高0.80、内外面赤漆	
324	37	23	W-30	F-5	SF-3	円板	ヒノキ	[5.9] [2.4]	0.3		
325	37	23	W-21	F-5	SF-3	円板	スギ	[9.4] [3.4]	0.4		
326	37	23	W-56	E-5	SF-3	壺物側板	ヒノキ	11.3	[4.9]	0.1	
327	37	23	W-66	F-5	SF-3	用途不明品	タク	[7.2]	3.1		
328	37	23	W-61	E-5	SF-3	箱状木製品	ヒノキ	33.0	5.1	0.8	
329	38	23	W-772	SA-1		杭	シキミ	53.0	6.1		
330	38	23	W-693	SA-1		杭	アカマツ	57.6	6.7		
331	38	23	W-651	SA-1		杭	スギ	41.3	5.9	4.2	
332	38	23	W-716	SA-1		杭	スギ	34.8	8.2	3	
333	38	23	W-610	SA-1		杭	スギ	46.7	5.1	3.5	
334	38	23	W-583	SA-1		杭	スギ	48.1	5.0	4.4	
335	38	23	W-783	SA-1		杭	スギ	51.2	7.7	6	
336	38	23	W-659	SA-1		杭	スギ	62.3	7.1	3.3	
337	38	23	W-603	SA-1		杭	スギ	72.2	6.2	4.6	
338	38	23	W-785	SA-1		杭	スギ	89.6	5.1	3.6	

<第IV章 参考・引用文献>

- 及川司・望月保宏 1991 「基山高校校舎建て替えに伴う埋蔵文化財発掘調査速報」『龍城論叢』第14号 静岡県立蔚山高等学校
- 中井均 1994 「織豊系城郭の特質について—石垣・瓦・礎石建物—」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
- 中井均 1990 「織豊系城郭の初期一礎石建物・瓦・石垣の出現—」『中世城郭研究論集』新人物往来社
- 蒲原町教育委員会 1997 『蒲原城』
- 加藤雅功 1976 『静岡県東部の桑尾遺構について』『沼津市歴史民俗資料館紀要 1』
- 小野正敏 1991 「城館出土の陶器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会
- 藤澤良祐 1991 「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯跡群II—古瀬戸後期様式の偏年—」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 X』
- 亀井明徳 1986 『日本貿易陶磁史の研究』同朋舎
- 後藤健一 1987 「遺物の年代とその相関」『長谷元星殿敷跡』湖西市教育委員会
- 足立順司 1991 「カワラケと内耳鍋について」『原川遺跡IV』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 松井・明 1993 「東海地域のかわらけ偏年について」『久野城IV』袋井市教育委員会
- 山口剛志 1991 「小田原城とその城下出土のかわらけについて」『小田原市郷土文化館研究報告』No.27 小田原市郷土文化館
- 山口剛志 1994 「小田原城出土のかわらけについて」『江戸在地系土器の研究II』江戸在地系土器研究会
- 坂詰秀一 1991 『図録・歴史考古学入門辞典』柏書房
- 榎間良彦 1981 『図録 日本の甲冑武具辞典』柏書房
- 斎藤宏 1986 「基山城・山中城の火縄銃と鉄砲玉」『基山町 町史の某。第10集
- 入田整三 1930 「発掘銭に就ての考察」『考古学雑誌』20・12 日本考古学会
- 鈴木公雄 1992 「出土備蓄銭と中世後期の銭貨流通」『史学』61・3・4 三田史学会
- 四柳嘉章 1994 「三島市御殿川流域遺跡群出土漆器の塗膜分析」『御殿川流域遺跡群II』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 織豊期城郭研究会 1996 『織豊城郭 特集・織豊期城郭の石垣』第3号
- 兵庫埋蔵文化財研究会 1996 『日本出土銭総覧』
- 横浜市歴史博物館 1996 「鉄製品の生産・流通と武士團—西ノ谷遺跡の検討を中心に—』研究会記録集
- 基山町 1988 『基山町史』第4巻
- 静岡県教育委員会 1994 『基山城跡』『静岡県埋蔵文化財年報(平成2年度)』
- 三島市教育委員会 1985 『史跡 山中城跡』
- 三島市教育委員会 1994 『史跡 山中城跡II』
- 長泉町教育委員会 1982 『長久保城址・大平遺跡』
- 基山町教育委員会 1996 『平成7年度町内遺跡発掘調査報告書』
- 基山町教育委員会 1985 『御所之内遺跡発掘調査報告書 予備調査～第3次調査』
- 静岡県教育委員会 1994 『駿府城三の丸跡・駿府城内遺跡』
- 穴水町教育委員会 1987 『西川島 能登における中世村落の発掘調査』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 『御殿川流域遺跡群I』

第V章 弥生時代～古墳時代

第1節 遺構

この時期の遺構は、Va層「灰褐色シルト層」で検出された。当初は層上面で遺構の検出を試みたが、プランが確認できる遺構が少なかった。そのため、一気に層下面まで下げるで遺構を検出するということを検討したが、それでは住居跡を削平してしまう可能性があったため、少しずつ精査して下げていき、確認された遺構から順次調査していくという方法をとった。そして、住居が検出しきれた段階で一旦記録し、最後に層下面まで下げ、調査漏れした遺構を検出していくという手順で調査を実施した。結果として遺構検出段階も層上面、層中位面、層下面の3段階に分かれてしまい、これら3面で重複する遺構も多くてきた。調査を実施したのが別の検出面であっても、遺構としては同一図に掲載しなければならないものが多くあるため、本報告書では検出段階毎に第1段階（層上面）を緑線、第2段階（層中位面）を黒線、第3段階（層下面）を赤線で識別したが、これは主に遺構検出順を示すもので、かならず

遺構番号	GRID	主軸方位	平面形	長軸(m)	短軸(m)	掘り方標高(m)	床	床面標高(m)	炉	炭化物	他SB-SHとの重複
SB-1	B-2,B-3 C-3	N-41°-W	隅丸長方形	5.13	4.72	12.40	有	12.47	有	有	SB-21
SB-2	C-3,C-4	N-4°-E	方形	6.66	6.56	12.45	有	12.50		有	SB-11,SB-12,SB-14 SB-15,SH-11
SB-3	A-2,B-2	N-25°-W	隅丸長方形	4.98	[4.18]	12.25	有	12.38		有	SB-21
SB-4	C-2	N-35°-W	隅丸方形	(3.68)	(3.44)	12.45	有	12.58		有	SB-7,SH-2,SH-6 SH-9
SB-5	B-2,C-2	N-40°-W	隅丸長方形	4.88	(4.58)	12.50	有	12.57	有	有	SB-21,SH-1
SB-6	C-2,D-2	N-20°-W	隅丸方形	(5.29)	5.28	12.67				有	SH-4
SB-7	B-1,B-2 C-1,C-2	N-64°-W	隅丸長方形	5.70	5.28	12.56				有	SB-4,SH-1,SH-2
SB-8	D-4	N-50°-W	隅丸方形	6.03	6.01	12.30					SB-9,SH-3,SH-12
SB-9	D-4,E-3 E-4	N-40°-E	隅丸方形	7.68	7.58	12.32			有	有	SB-8,SH-10,SB-18 SH-3,SH-8,SH-13
SB-10	E-4,E-5	N-14°-W	隅丸方形	5.75	[5.50]	12.44				有	SB-9
SB-11	C-3,C-4 D-3,D-4	N-36°-W	隅丸長方形	[4.15]	[2.50]	12.30					SB-2,SB-12,SB-13 SB-20,SH-11
SB-12	C-3	N-14°-W	隅丸長方形	4.15	[2.93]	12.55	有	12.55	有		SB-2,SB-11,SB-13 SB-14,SB-15,SB-20
SB-13	C-3	N-36°-W	隅丸方形	[4.31]	[1.51]	12.60	有	12.63			SB-11,SB-12,SB-14 SB-20
SB-14	C-3	N-37°-E	隅丸方形	4.21	4.18	12.55	有	12.61	有	有	SB-2,SB-12,SB-13 SB-15,SH-11
SB-15	C-3	N-44°-E	隅丸長方形	[2.83]	[1.12]	12.43	有	12.54			SB-2,SB-12,SB-14 SH-11
SB-16	D-4,D-5	N-22°-W	不明	4.09	[1.53]	12.21	有	12.35			
SB-18	D-3,D-4 E-3,E-4	N-16°-E	隅丸長方形	6.83	[4.35]	12.15				有	SB-9,SH-3,SH-13
SB-20	C-3,C-4 D-3,D-4	N-36°-W	隅丸長方形	7.90	7.50	12.40					SB-11,SB-12,SB-13
SB-21	B-2,B-3	N-35°-W	隅丸方形	4.79	[4.39]	12.40	有	12.50		有	SB-1,SB-3,SB-5
SB-28	E-3,F-3	N-8°-W	隅丸方形	5.05	4.79	12.37	有	12.52			SH-7
SB-29	F-3	N-9°-W	隅丸方形	4.98	4.65	12.32					SH-7
SB-30	F-3,F-4 G-3,G-4	N-1°-E	隅丸方形	4.65	4.33	12.27	有	12.33	有		SB-31
SB-31	F-4,G-4	N-1°-W	隅丸長方形	4.95	4.53	12.07					SB-30,SB-32
SB-32	F-4	N-20°-W	楕円形	7.55	5.38	12.22					SB-31,SH-8

第12表 積穴住居跡一覧表



第39図 調査区全体図（弥生時代～古墳時代）

しも遺構の新旧を表しているとは限らない。また遺構図について、本層においては遺構、特に竪穴住居跡のプランの把握が困難であったため、当該遺構に関連するもの以外にも重複する遺構等も図示し、検出遺構をできるだけ掲載することにした。このため、なるべく見やすい図を心がけたが、やむを得ず分かりにくくなっている部分もあることを断わっておく。

(1)竪穴住居跡

検出された竪穴住居跡は全部で24軒である。うち23軒は平面形態が隅丸方形あるいは方形を呈しており、1軒は楕円形を呈している。竪穴住居跡の全体的な傾向として、①主柱穴が4基の住居が圧倒的に多い。②床は貼床であり、掘り方から床面までは余り高くはない。③床には炉跡の他に、炭化物が薄く広がっていることが多く、特に住居の中心付近や炉跡の周囲に存在する、等が挙げられる。

このうち②に関して、床面が確認できなかった住居は11軒である。床面が確認できた住居は、床付きの状態で平面図及びエレベーション図を作成し、土層断面図は掘り方までの土層堆積を図示した。一方床面が確認できなかった住居は、平面図・エレベーション図共に掘り方の状態で作成し、土層断面図は特に掲載しなかった。

また③に関して、検出された炭化材はできる限りサンプリングした上で、樹種の分析をパリノ・サーゲイ博士に依頼した。しかし同定が可能であったのはSB-1で検出された炭化材を始めとする遺存状態の良好な6試料のみであった。

他に、竪穴住居跡の覆土及び床土についても記しておきたい。各住居とも覆土あるいは床下の土には次に示すような類似した傾向がみられた。覆土は暗灰褐色シルトであり、白色粒子（φ1mm前後）や炭化物を多く含むという傾向が観察できた。同時期の他の遺構もほとんどはこの土壤である。一方で床土は暗灰褐色シルトだが覆土よりも明るく、白色粒子（φ1mm前後）や炭化物を含むものの覆土よりも少なく、ブロック状になったVb層を多く含むという傾向が観察できた。

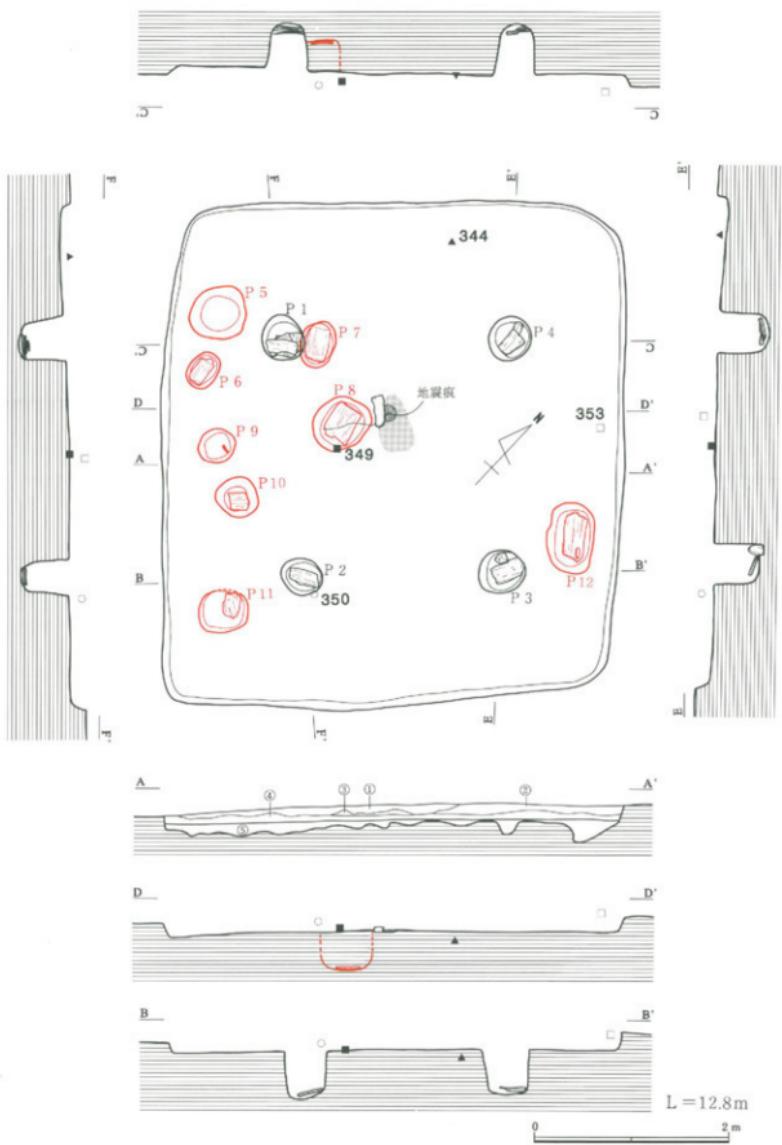
なお竪穴住居跡の時期であるが、良好な出土状態を呈している遺物が少ないため、時期を限定するには難しいが、出土遺物や住居の平面形等からSB-3-2を除く23軒は古墳時代前期に属すると思われる。SB-3-2はその平面形から、弥生時代後期まで遡る可能性があると思われるが、出土遺物が乏しいため、詳細は不明である。

SB-1（第40図、図版25）

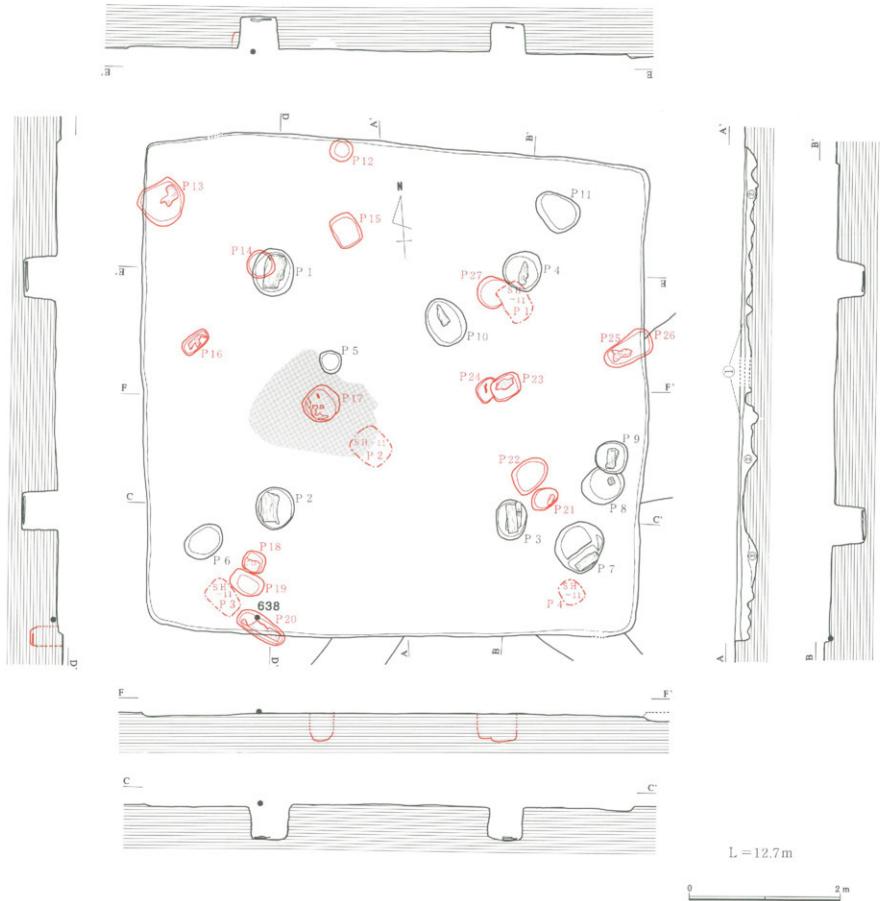
調査区の西側に位置する。本遺跡調査において、最初に検出・調査された住居である。SB-2-1と切り合っているが、本住居完掘後にSB-2-1の存在が確認されたため、新旧関係は不明である。本住居は床面が遺存していた。土層断面図中の①層～④層は住居の覆土であり、⑤層は床土である。検出面から床面までの深さは約15cmである。他に炉と思われる焼土が住居中央よりやや北側寄りで出土し、その西隣りに炉石と思われる石も出土した。この炉石は、焼土と接する部分が焼けて赤化していた。焼土の周りには炭化物が薄く広がっていた。樹種を同定した結果、材はクリであることが確認できた。焼土は噴砂により切られていた。主柱穴はP1～P4であろう。いずれの柱穴からも礎板が出土した。またP3からは直立した木も出土しているが、腐食が激しいため柱であるかは不明である。出土した遺物として、S字口縁台付甕の口縁部（344・345）および脚台部（346）の他、甕（341・342）がある。これらのうち344と349は、床面直上の出土である。

SB-2（第41図、図版26）

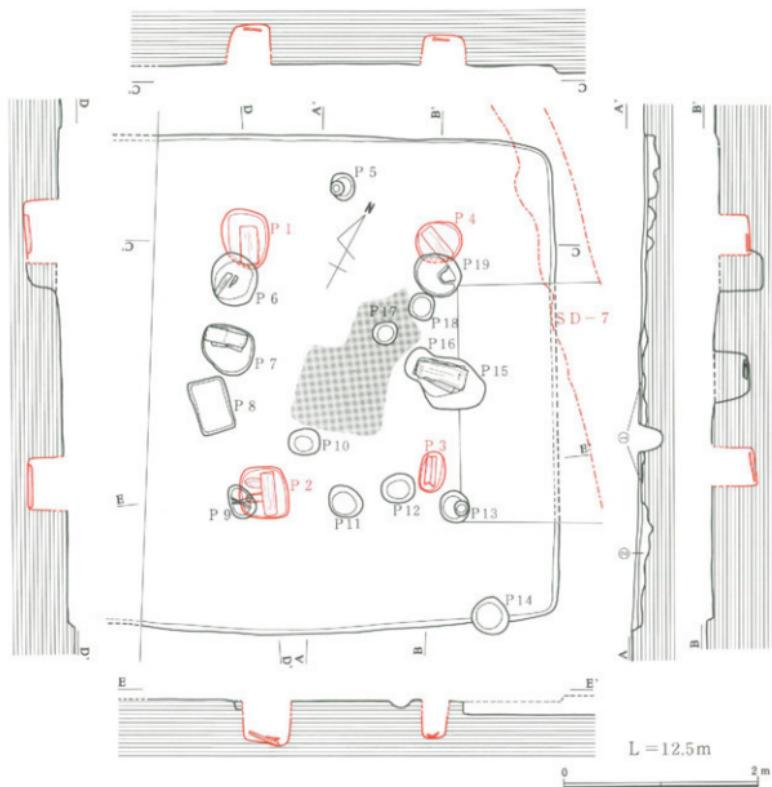
調査区の中央北寄りに位置する。SB-1・SB-3・SB-4と共に、最初の段階で検出された住



第40図 SB-1 実測図



第41図 S B - 2 実測図

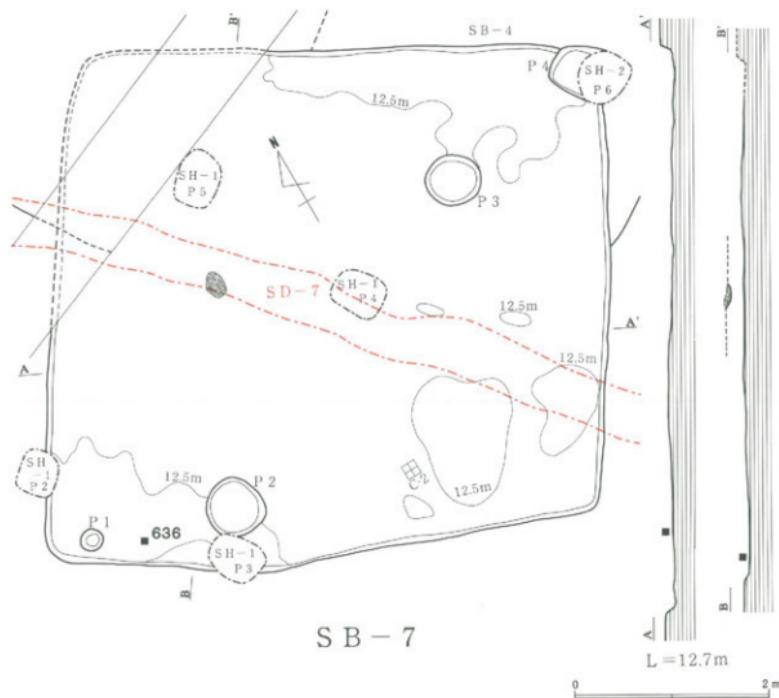
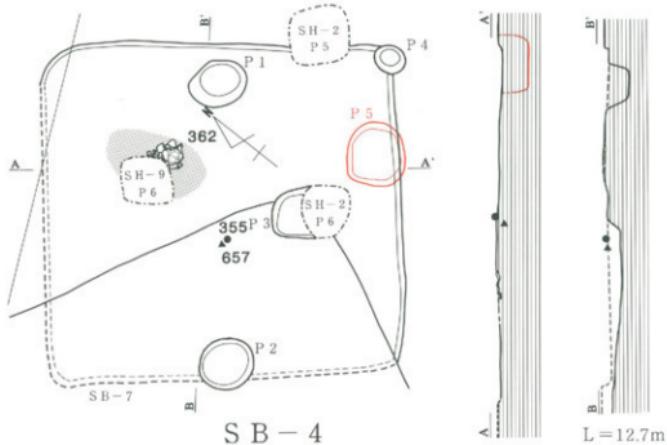


第42図 SB-3 実測図

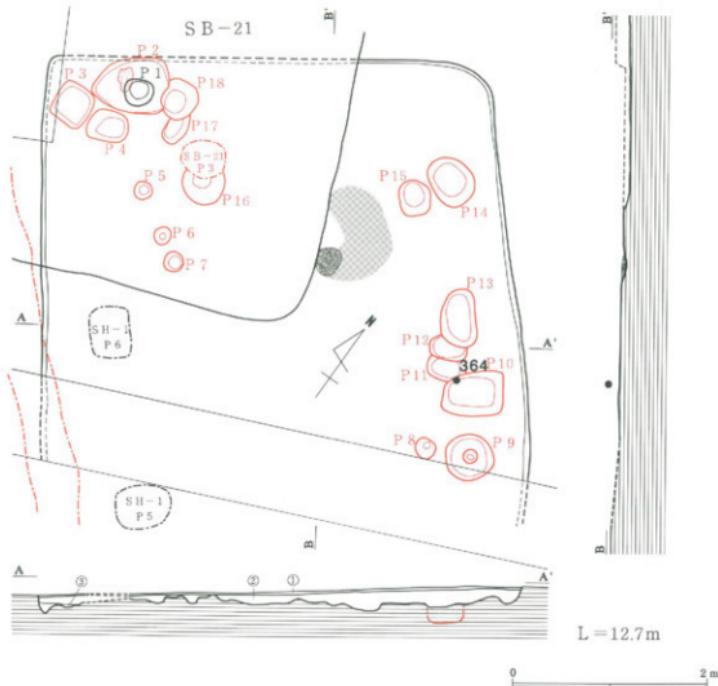
居である。SB-11・SB-12・SB-14・SB-15・SH-11と切り合っているが、新旧関係は不明である。また、SB-20とも重複している可能性がある。床面は検出面とほとんどかわらないレベルで確認された。土層断面図中の①層は覆土であり、②層・③層は床下の土である。住居中央付近一帯の床面には炭化物の薄い広がりがみられたが、遺存状態が悪く、樹種を同定することはできなかつた。また、炉は確認されなかつた。主柱穴はP1～P4の4基である。いずれの柱穴からも礎板が出土した。遺物は、S字状口縁台付甕の肩部(354)と壺の口縁部及び底部(356・357・358)、磁石(638)等が出土した。

SB-3 (第42図、図版26)

調査区の西側隅に位置する。SB-1・SB-2・SB-4と共に、最初の段階で検出された住居である。SB-21・SD-7と切り合っている。床面は検出面とほとんどかわらないレベルで確認され



第43図 SB-4・SB-7実測図

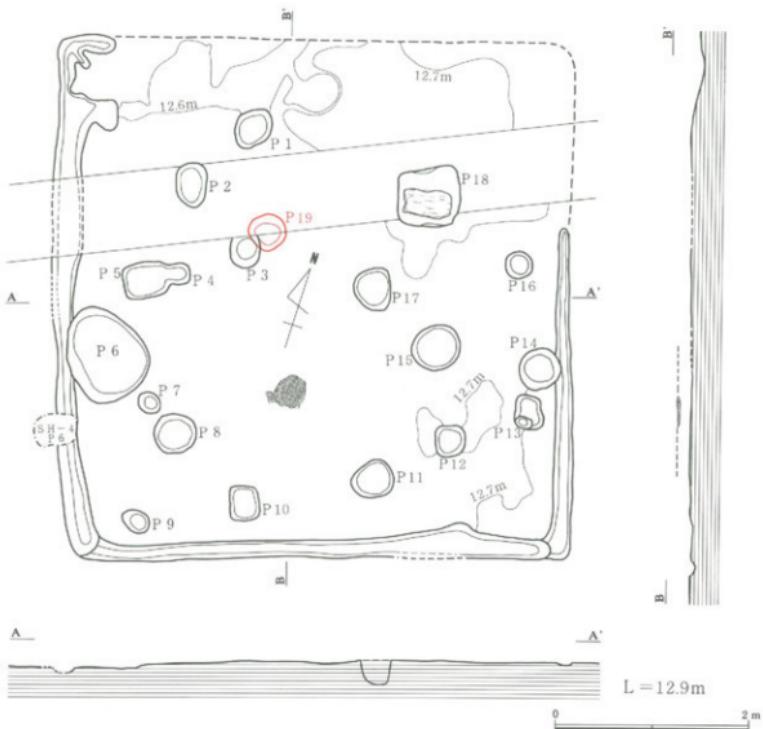


第44図 SB-5 実測図

た。土層断面図中の①層は覆土であり、②層は床土である。住居中央付近一帯の床面には炭化物の薄い広がりが見られたが、遺存状態が悪く、樹種を同定することはできなかった。また、炉は確認されなかつた。主柱穴はP1～P4であろう。いずれの柱穴からも礎板が出土した。P2の礎板は、丸太状の材を縦に2分割したものを並行に敷き、その上に板を横たわすという構造であった。同様の例はSH-5のP3やSH-9のP1にもみられる。出土した遺物は多くなく、図化できたのはS字状口縁台付壺(360)と高壺(361)のみである。なお、P13からは壺の脚台部(403)が出土している。

SB-4 (第43図、図版27)

調査区の西側に位置する。SB-1・SB-2・SB-3と共に、最初の段階で検出された住居である。SB-7・SH-2・SH-6・SH-9と切り合っている。新旧関係は不明である。また、SB-5とも重複している可能性がある。床面は検出面とほとんどかわらないレベルで確認された。住居中央付近一帯の床面には炭化物の薄い広がりが見られたが、遺存状態が悪く、樹種を同定することはできなかつた。また、炉は確認されなかつた。本住居内には何基かの柱穴が検出されたが、主柱穴らしき遺構は確認できなかつた。なお、貼床の深さは約5cmである。出土遺物であるが、住居中央の床面炭化物中から、壺(362)が潰れた状態で出土した。他に、用途不明の青銅製品(657)が出土した。



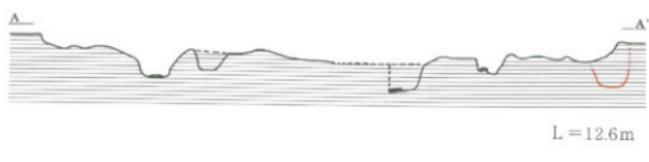
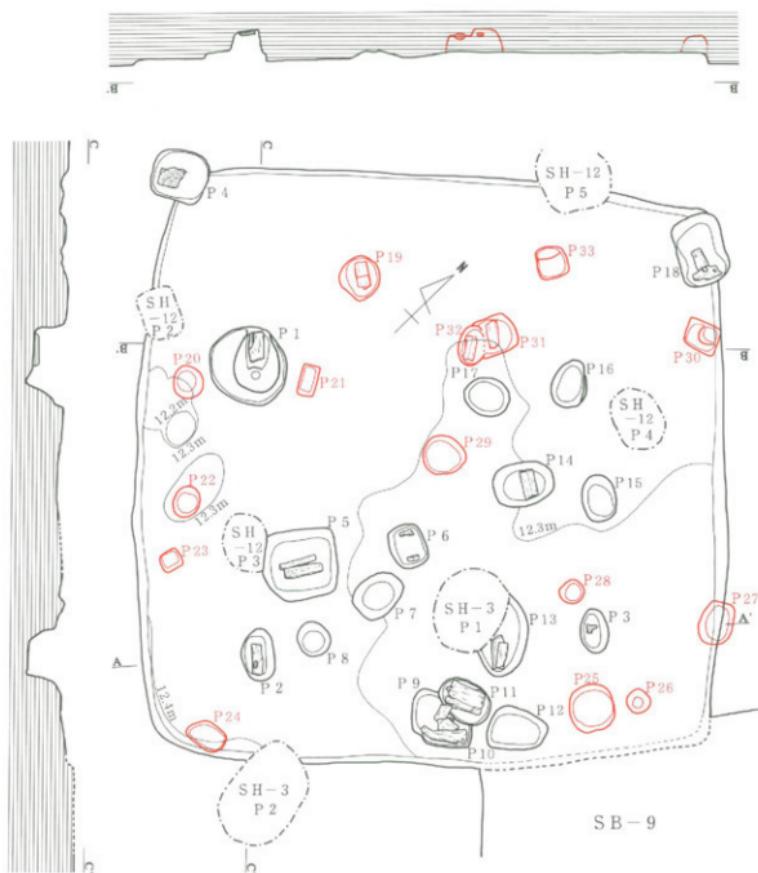
第45図 SB-6 実測図

S B - 5 (第44図、図版27)

調査区の西側に位置する。SB-1・SB-2・SB-3・SB-4を調査する段階で既に本住居の存在は確認されていたが、遺構の輪郭の確定が難しく、結局南壁は検出されなかった。しかし、試掘坑内で本住居の壁のコーナーを確認することができた。SB-21・SH-1と切り合っている。また、SB-4・SB-7と重複している可能性がある。床面は検出面とほとんどかわらないレベルで確認された。土層断面図中の①層は覆土であり、②層・③層は床下の土である。住居中央やや北側寄りに焼土が出土した。焼土の周囲に炭化物の薄い広がりがみられた。しかし、炭化物は遺存状態が悪く、樹種を同定することはできなかった。本住居内には何基かの柱穴が検出されたが、主柱穴らしき遺構は確認できなかった。出土した遺物は少なく、図化できたのは高杯(364)のみである。

S B - 6 (第45図、図版28)

調査区の中央南寄りに位置する。本住居は壁溝を検出したことによって、一応住居と認定した遺構であるが、床面等を確認していない。ただし、本住居の検出面より約15cm高いレベルで焼土が検出されて



第46図 SB-8 実測図

おり、これが本住居の炉であると仮定すれば、この高さに床面があったことになる。実際には、そのレベルでは住居の輪郭や床硬化面が確認されなかった。もし住居であるとすると、本遺構は掘り方も僅かしか残存していなかったことになる。重複関係であるが、SH-4と切り合っているが、新旧関係は不明である。また、SH-6と本住居は近接しているため、同時存在の可能性は極めて低いといえよう。柱穴は多く確認されたものの、主柱穴と明らかに判断しうる遺構は検出されなかった。遺物も土器細片が小量出土するに留まり、図化できるものが無かった。そのため、本住居の時期の特定は困難である。

S B - 7 (第43図、図版28)

調査区の西側に位置する。本住居は当初は検出されず、SB-4完掘後に検出された住居である。SB-4・SH-1・SH-2・SD-7と切り合っているが、新旧関係は不明である。SB-5とともに重複している可能性が高い。床は残存せず、掘り方での検出となった。しかし、本住居の検出面より約20cm高いレベルで焼土が検出されており、これが本住居の炉であると仮定すれば、この高さに床面があったことになる。実際には、そのレベルでは住居の輪郭や床硬化面が確認されなかったので、焼土検出時には住居と認定しなかった。住居の輪郭に関しては、SB-4の掘り方より下面から、本住居の掘り方が検出され、規模を明らかにすることができた。本住居内には何基かの柱穴が検出されたが、主柱穴らしい遺構は確認できなかった。出土遺物として、砥石(636)がある。床下からの出土となる。他に出土した遺物としては、壺(365)がある。しかし、土器の出土は多くない。

S B - 8 (第46図、図版29)

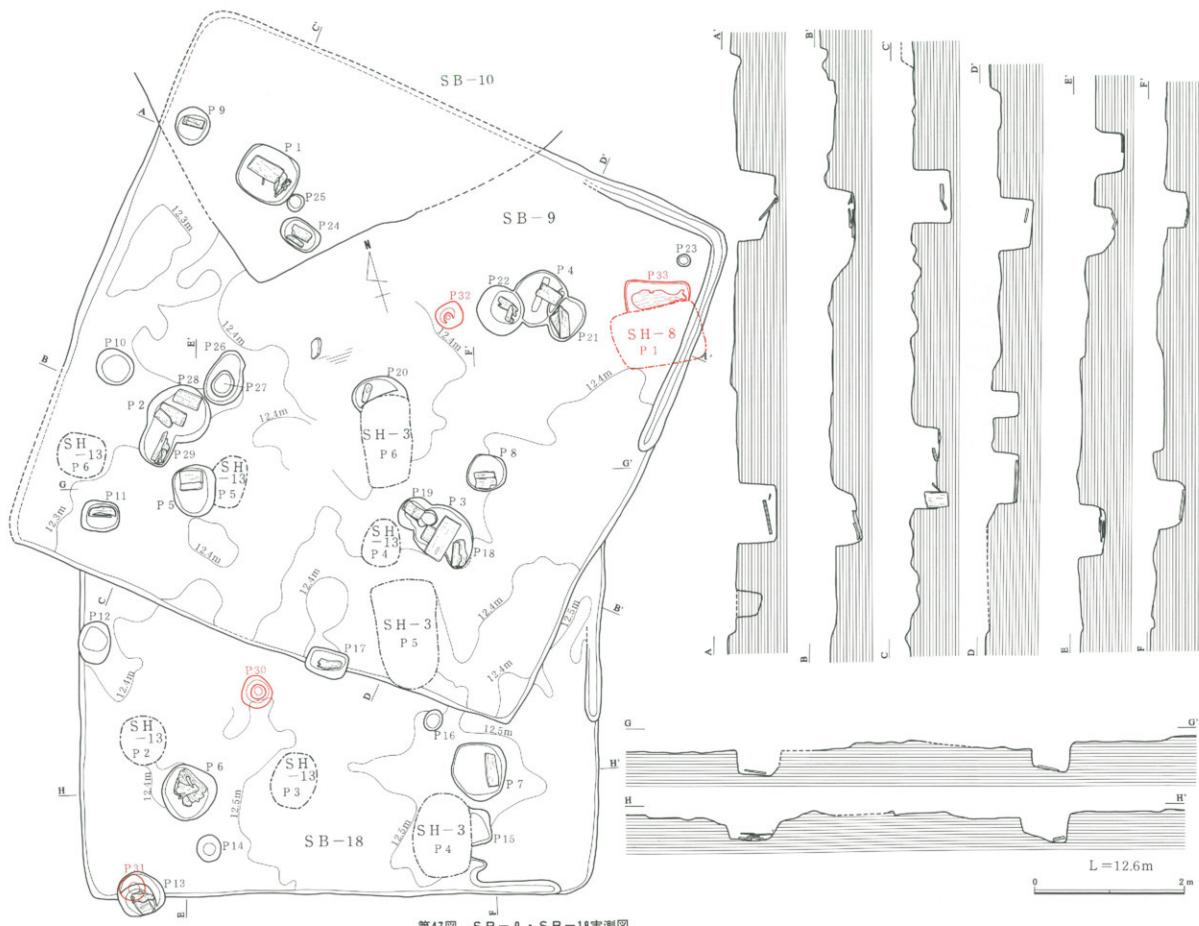
調査区の中央北寄りに位置する。SB-9・SB-10と同時に検出された。SB-9・SH-3・SH-12と切り合っているが、新旧関係は不明である。床は残存せず、掘り方での検出となった。主柱穴はP1～P3であると思われる。いずれも、住居の主軸方向と同方向に、礎板が据えられていた。また、北東寄りにもう1基主柱穴が存在したものと思われるが、検出できなかった。出土した遺物には壺の口縁部と底部(366・367・368)がある。

S B - 9 (第47図、図版29)

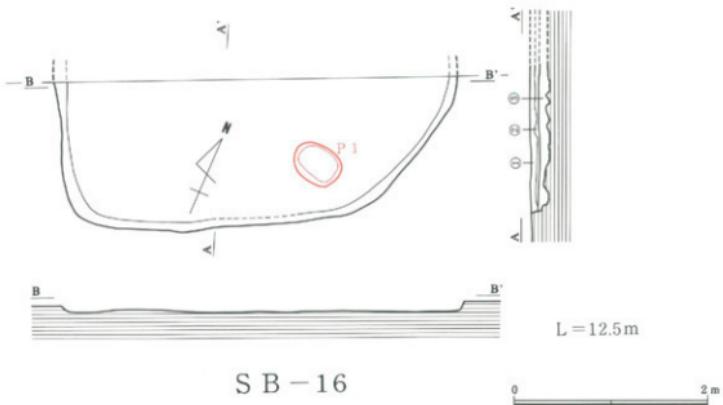
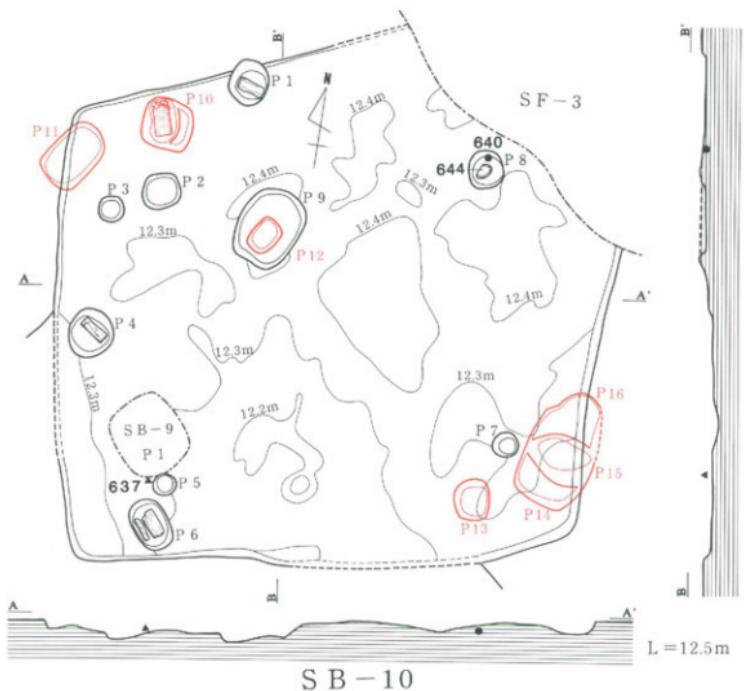
調査区の東寄りに位置する。SB-8・SB-10と同時に検出された。SB-8・SB-10・SB-18・SH-3・SH-8・SH-13と切り合っているが、新旧関係は不明である。本住居は床面が検出できなかった。しかし、住居中心部分に炉石と思われる石が出土し、石の下側に炭化物が検出されたことから、石の下のレベルが床面ではなかったかと考えられる。この炭化物の樹種を同定したところ、クリであることが分かった。主柱穴は、P1～P4である。P2はP28・P29と重複しており、P3はP18・P19と重複し、またP4はP21・P22と重複している状況から、本住居は3回の建て替え、あるいは修築があった可能性がある。遺物は壺の頸部(369)とS字状口縁台付壺(370)が出土している。また、P28からは、S字状口縁台付壺(404)が出土している。

S B - 1 0 (第48図、図版30)

調査区の東側に位置する。SB-8・SB-9と同時に検出された。SF-3に住居北東隅を切られている。SB-9と切り合っている。床は検出されず、掘り方のみの検出となった。住居内のごく一部に炭化物の広がりが確認されたが、これが床であるとの確証を得ることはできなかった。しかし、一部床面が遺存していた可能性も捨てられない。この炭化物の樹種を同定したところ、コナラ属アカガシ亜属であった。柱穴は住居内に多く検出され、P2・P5・P7・P8が位置的には適当であるが、いず



第47図 SB-9・SB-18実測図



第48図 SB-10・SB-16実測図

れも規模が小さく、浅いピットであり、主柱穴と認定するに躊躇してしまう遺構である。P 8からは、蔽石（644）と砥石（640）が出土したが、他のP 2・P 5・P 7からは礎板を始めとして遺物は出土しなかった。住居内出土遺物としては、複合口縁壺の口縁部（371）と壺の底部（372）がある。

S B - 1 1 （第49図、図版30）

調査区の中央に位置する。S B - 2 0 と同時に検出された。S B - 2 ・ S B - 1 2 ・ S B - 1 3 ・ S B - 2 0 と切り合っている。新旧関係は不明である。住居の東北隅の壁のみの検出であり、南壁・西壁は検出されなかった。しかし、S B - 2 0 南壁溝の北側（S D - 6 南側）に、東西に伸びる溝が検出され、これが本住居の南壁溝になる可能性がある。床面は検出されず、掘り方の調査となった。しかし、S B - 2 0 との掘り方の明瞭な差はみられなかった。主柱穴も確定できないが、P 6・P 7・P 26・P 32が立ち並ぶと思われ、これが本住居の主柱穴である可能性がある。ただし本住居とは無関係の、掘立柱建物あるいはプランの検出できなかった住居の可能性もある。出土した遺物は少なく、図化できたものは無い。

S B - 1 2 （第50図、図版31）

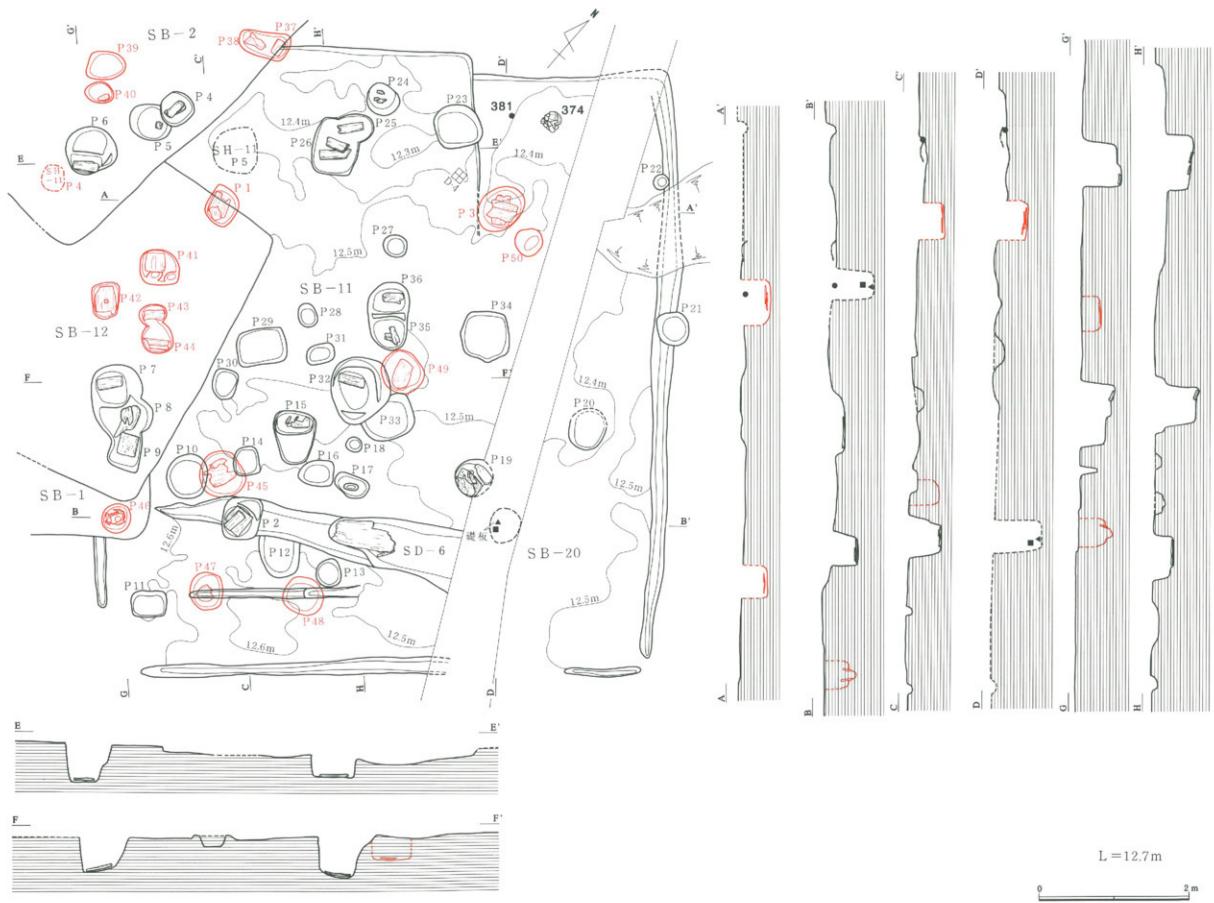
調査区の中央に位置する。S B - 1 3 ・ S B - 1 4 ・ S B - 1 5 と同時に検出された。S B - 2 ・ S B - 1 1 ・ S B - 1 3 ・ S B - 1 4 ・ S B - 1 5 ・ S B - 2 0 と切り合っている。また、S H - 1 1 とも重複している可能性がある。床面は、検出面から約5cmの深さで出土した。掘り方までの深さは約5cmである。土層断面図中の⑥層は覆土であり、⑦層は床下の土である。住居中心付近には炉と思われる焼土が検出された。この焼土はS F - 2 によって切られていた。また、焼土が2層検出された。住居内に柱穴が何基も出土しているが、主柱穴と認定できるピットが存在しない。P 17が主柱穴のひとつ可能性があるが、確証はない。出土した遺物は少なく、図化できたのは鉢（373）のみである。

S B - 1 3 （第50図、図版31）

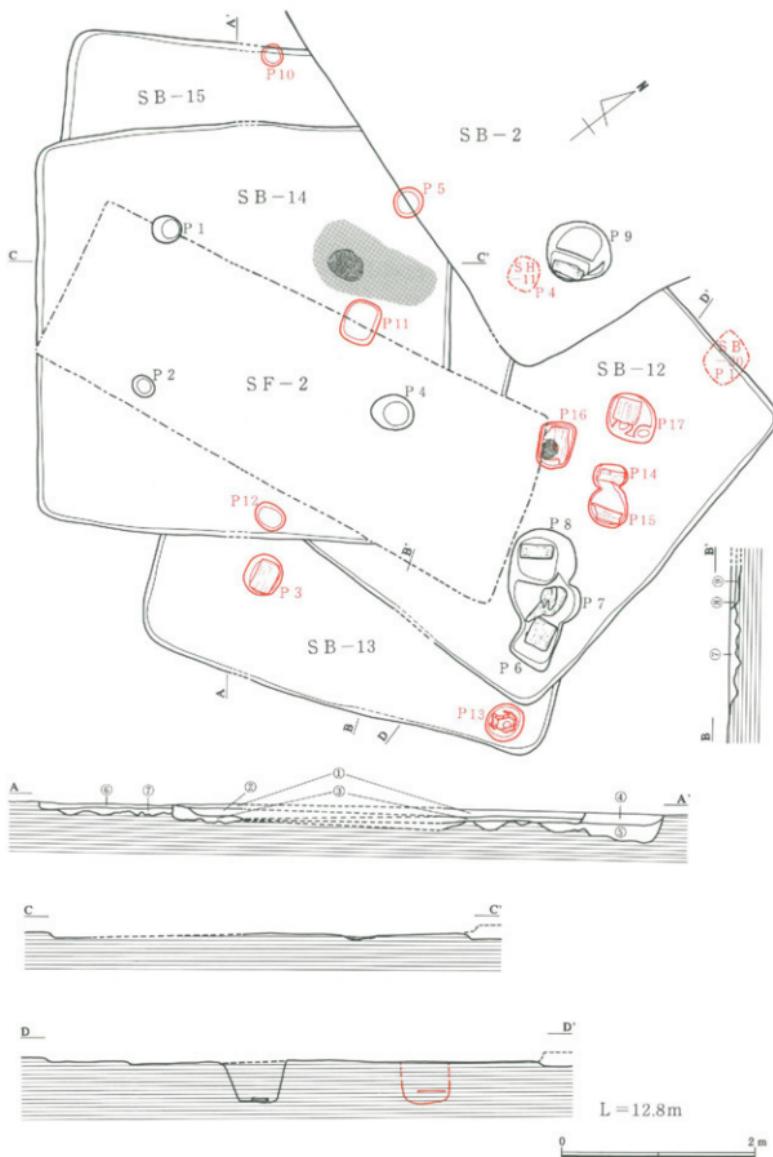
調査区の中央に位置する。S B - 1 2 ・ S B - 1 4 ・ S B - 1 5 と同時に検出された。S B - 1 1 ・ S B - 1 2 ・ S B - 1 4 ・ S B - 2 0 と切り合っている。床面は、検出面から数cmの深さで出土した。掘り方までの深さは約10cmである。土層断面図中の⑥層は覆土であり、⑦層は床下の土である。本住居の主柱穴について、P 3 が主柱穴のひとつであると考えて良いだろう。しかし、他に主柱穴となりうるピットは検出できなかった。出土した遺物は少なく、図化できたものは無い。

S B - 1 4 （第50図、図版31）

調査区の中央に位置する。S B - 1 2 ・ S B - 1 3 ・ S B - 1 5 と同時に検出された。S B - 2 ・ S B - 1 2 ・ S B - 1 3 ・ S B - 1 5 と切り合っている。また、S H - 1 1 とも重複していると思われる。床面は、検出面から約5cmの深さで出土した。掘り方までの深さは約5cmである。土層断面図中の①層は覆土であり、②層・③層は床下の土である。住居内から炉と思われる焼土が検出された。焼土の位置は北側のコーナーに寄ったところにある。また、焼土の周囲には炭化物の薄い広がりが確認された。この炭化物の樹種を同定したところ、クリであることがわかった。主柱穴はP 1 ではないかと思われる。この柱穴は礎板を伴わないピットである。また、S B - 1 5 の主柱穴としたP 2 が、S B - 1 4 の主柱穴の可能性もあるのではないかと考えられる。なお、東側の主柱穴は確認できなかった。出土した遺物は少なく、図化できたものは無い。



第49図 SB-11・SB-20実測図



第50図 SB-12・SB-13・SB-14・SB-15実測図

S B - 1 5 (第50図、図版31)

調査区の中央に位置する。S B - 1 2 • S B - 1 3 • S B - 1 4 と同時に検出された。S B - 2 • S B - 1 2 • S B - 1 4 • S H - 1 1 と切り合っている。また、S B - 1 3 とも重複している可能性がある。床面は、検出面から約12cmの深さで出土した。土層断面図中の④層は覆土であり、⑤層は床下の土である。主柱穴はP 2 • P 4 • P 5 ではないかと思われる。この3基の柱穴は、いずれも礎板を伴わないピットである。このうち、P 2 はS B - 1 4 の主柱穴の可能性もある。なお、西北側の主柱穴は確認できなかった。出土した遺物は少なく、図化できた遺物は無い。

S B - 1 6 (第48図、図版31)

調査区の北側隅に位置する。その規模・平面形状等から住居とするのに躊躇したが、土層堆積を観察したところ、床面と思われる約1cmの炭化物の堆積（②層）が確認されたため、堅穴住居と判断した。本遺構は、他のS B • S Hとの重複関係は無い。床面は検出面から約7cmの深さで出土した。掘り方までの深さは約10cmである。土層断面図中の①層は覆土であり、②層は炭化物の集積である。③層は床下の土である。本住居からは主柱穴は検出されなかった。本遺構は調査区外に統いており、詳細は不明である。出土した遺物は少なく、図化できたのはS字状口縁台付甕の肩部（380）のみである。

S B - 1 8 (第47図、図版31)

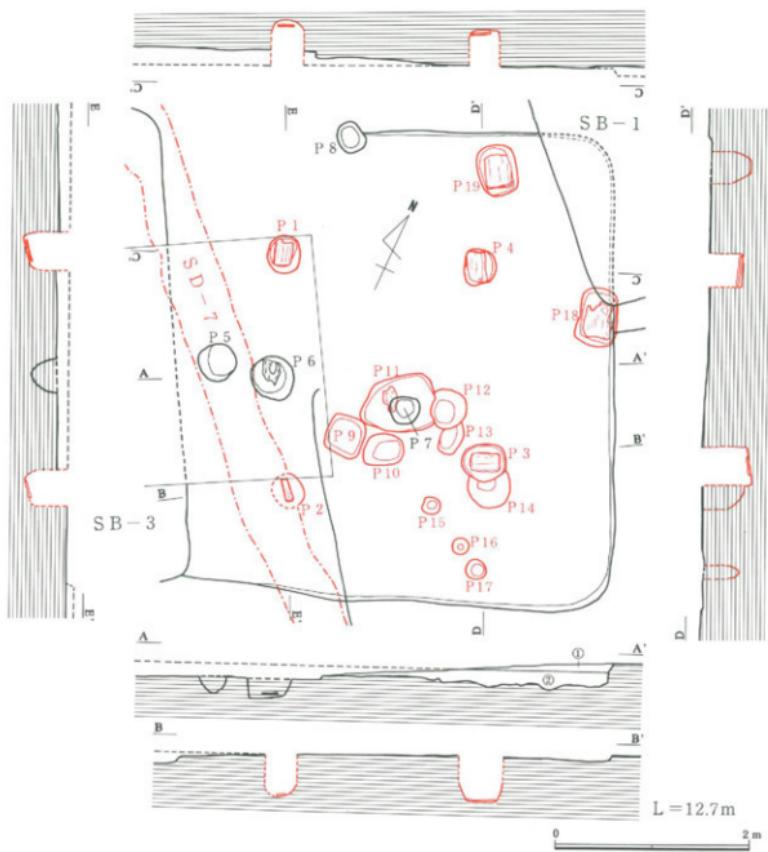
調査区の中央東寄りに位置する。本住居は当初は検出されず、S B - 9 完掘後に検出された住居である。そのため、S B - 9 との新旧関係は不明である。重複関係は、前述したS B - 9 の他、S H - 3 • S H - 1 3 と切り合っているが、新旧関係は不明である。住居内のごく一部に炭化物の広がりが確認されたが、これが床であるとの確証を得ることはできなかった。しかし、一部床面が遺存していた可能性も捨てられない。この炭化物の樹種を同定したところ、クリであることがわかった。主柱穴はP 5 ~ P 8 であろう。この柱穴と検出された住居の輪郭を基にして本住居の規模を推定すると、おそらく7m四方であったのではないかと考えられる。出土した遺物は少なく、図化できたものは無い。

S B - 2 0 (第49図、図版30)

調査区の中央に位置する。第1トレチにかかっているが、調査当初の土層観察では床面が確認できず、これを住居と判断できなかった。しかし、周囲に溝が確認され、また溝の内部はまだに覆土が残存していたので、この遺構を住居と認定し、既に掘り方が露出しているものと解釈した。S B - 1 1 • S B - 1 2 • S B - 1 3 と切り合っている。また、S B - 2 やS H - 1 1 とも重複している可能性がある。S D - 6 とも重複しているが、新旧関係は不明である。床は既になくなってしまっており、掘り方のみの調査となった。しかし、S B - 1 1 との掘り方の明瞭な差はみられなかった。主柱穴はP 1 • P 2 • P 3 である。南東隅の柱穴は検出されなかったが、おそらく第1トレチにかかっていたと思われる。第1トレチ掘削時に板材（図中■と▲）が出土しているが、おそらく本住居の東南隅柱穴の礎板なのである。遺物は甕（374）と器台の脚部（375）、ミニチュア壺（381）が出土している。374は口縁部を下にして、上からの圧力で潰れた状態で出土した。381も374と同様に、口縁部を下にして出土した。

S B - 2 1 (第51図、図版32)

調査区の西側に位置する。調査開始当初における試掘坑の土層調査時には、本住居は確認出来ず、S B - 1 • 3 完掘後に本住居が検出された。S B - 1 • S B - 3 • S B - 5 と切り合っているが、新旧関

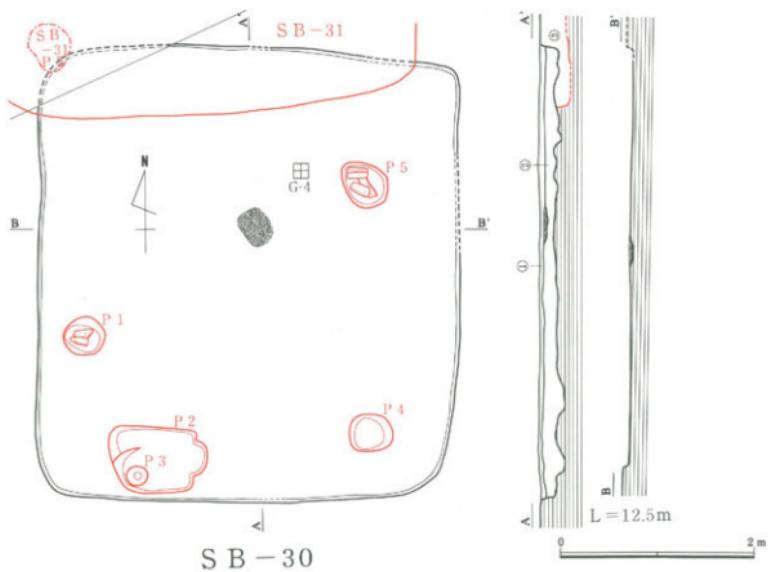
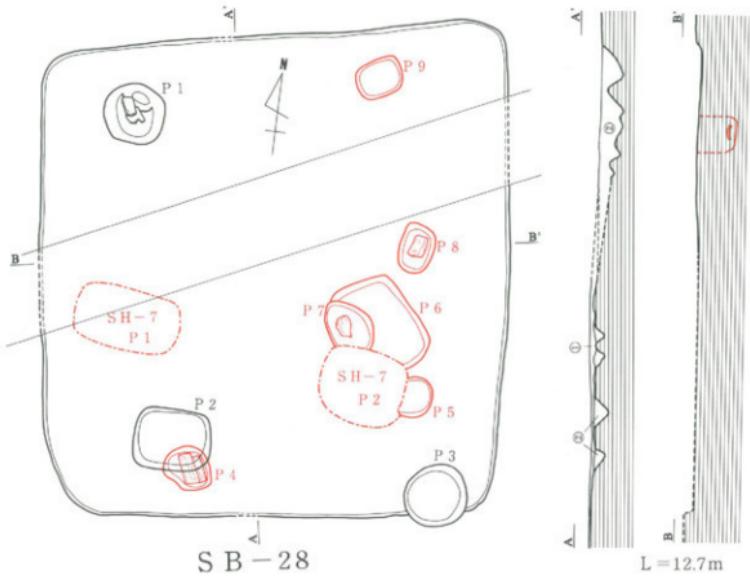


第51図 SB-21実測図

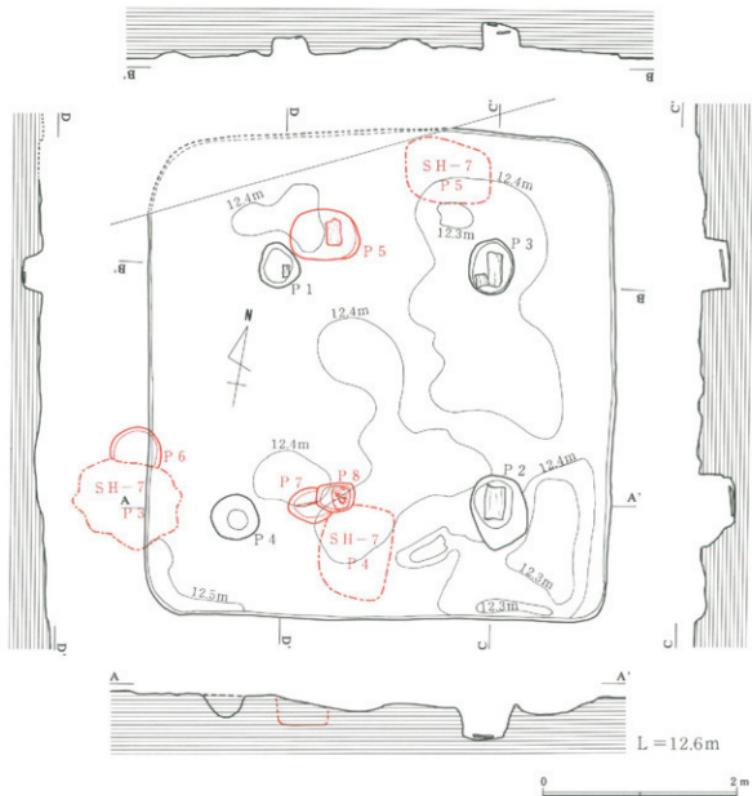
係は不明である。床面が住居東側に一部残存しており、床の高さを明らかにすることができた。土層断面図中の①層は覆土であり、②層は床下の土である。床面には薄い炭化物が広がっていたが、あまりまとまっておらず、図示し得なかった。しかし樹種を同定したところ、スギとケヤキの2種が判明した。主柱穴はP 1～P 4の4基であろう。いずれの柱穴からも礎板が出土した。炉は検出されなかった。出土した遺物は少なく、図化できたものは無い。

SB-28 (第52図、図版32)

調査区の東側に位置する。SB-29・SB-30と同時に検出された。SH-7と切り合っているが新旧関係は不明である。床面は、トレンチ北側では本住居確認面からわずか数cmのところで検出され



第52図 SB-28・SB-30実測図

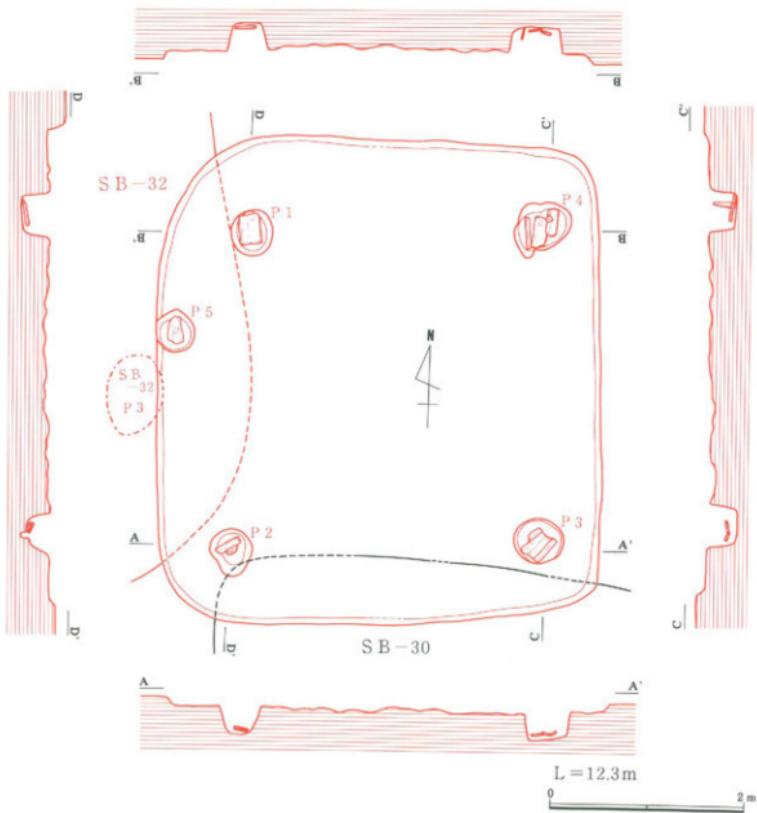


第53図 SB-29実測図

たが、トレンチ南側では検出できなかった。土層断面図中の①層は覆土であり、②層は床下の土である。炉に関しては、検出されなかった。また、柱穴はSH-7以外の柱穴も何基か確認されたものの、主柱穴と思われる遺構は検出されなかった。なお、本住居の主軸は、SB-29・SB-30とほぼ同じである。出土した遺物は少なく、図化できたものは無い。

SB-29 (第53図、図版32)

調査区の東側に位置する。SB-28・SB-30と同時に検出された。SH-7と切り合っているが、新旧関係は不明である。床面は残存せず、掘り方での検出となった。主柱穴はP1～P3であると思われる。南西寄りにもう1基主柱穴が存在したものと思われるが、検出できなかった。いずれの柱穴からも礎板が出土した。礎板は南北方向に据えられており、住居の主軸と一致していた。なお、本住居



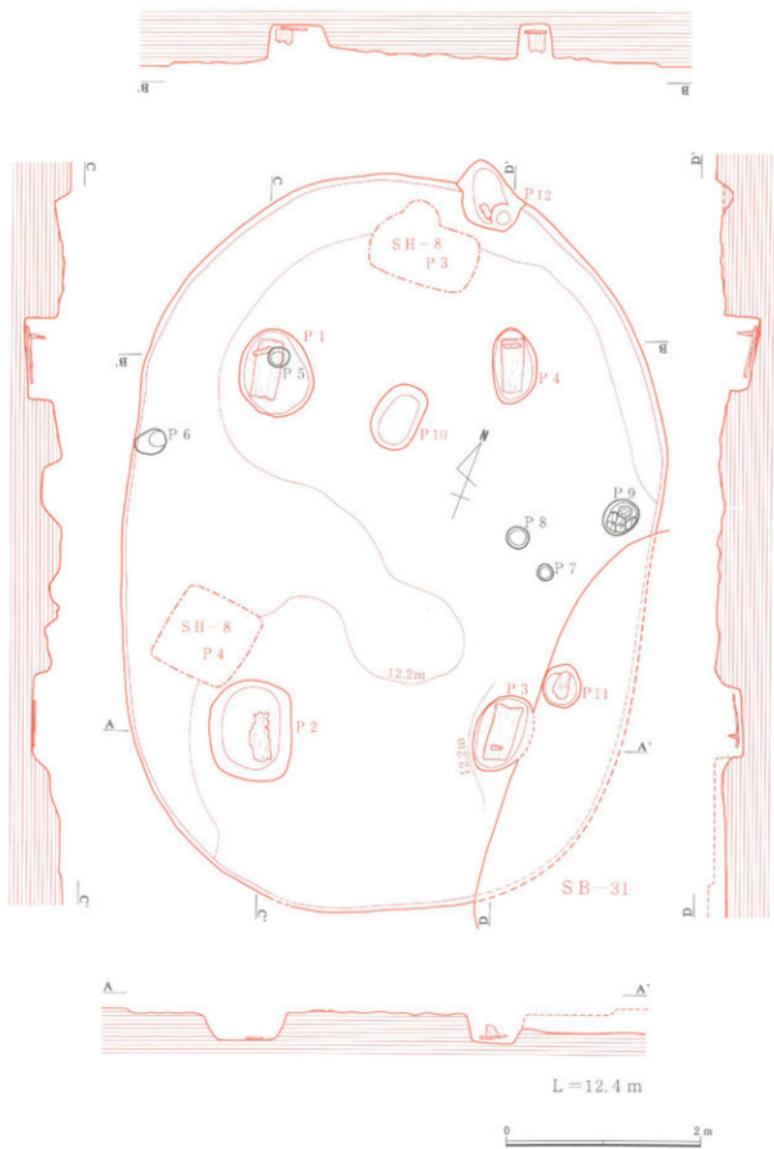
第54図 SB-31実測図

の主軸は、SB-28・SB-30とほぼ同じである。遺物は壺（376）と甕（377）が出土している。

SB-30 (第52図、図版33)

調査区の東側に位置する。SB-28・SB-29と同時に検出された。SB-31と切り合っている。床面が遺存しており、本住居確認面から約8cmの深さで検出された。土層断面図中の①層は覆土であり、②層は床下の土である。また③層はSB-31の床下の土である。焼土が住居中央や北側寄りに出土した。また、柱穴は何基か確認され、P4が位置的に適当と思われるものの、明らかに主柱穴と判断できるピットは検出されなかった。なお、本住居の主軸は、SB-28・SB-29とほぼ同じである。遺物はS字状口縁付甕（378）と甕（379）が出土している。

SB-31 (第54図、図版33)



第55図 SB-32実測図

調査区の東側隅に位置する。本住居は第2段階では確認されず、SB-3-2とともに第3段階で検出された。SB-3-0・SB-3-2と切り合っている。床面は検出されず、掘り方のみの調査となった。主柱穴はP1～P4の4基であると思われる。いずれも住居の四隅付近、壁から余り離れていない場所に位置する。いずれの柱穴からも礎板が出土した。P4は柱と思われる木が直立した状態で出土した。P2は礎板が斜めに傾いており、柱穴の底面に四角の凹みが存在していた。柱の重みにより、土中の礎板が傾き、柱が礎板からずり落ちてしまったのだろうか。なお、P5は横断面が円形の柱根が傾いた状態で検出されたが、この柱穴が本住居に関係するものかどうかは不明である。遺物は壺の口縁部(384)と甕の口縁部(385・386)が出土している。

SB-3-2 (第55図、図版34)

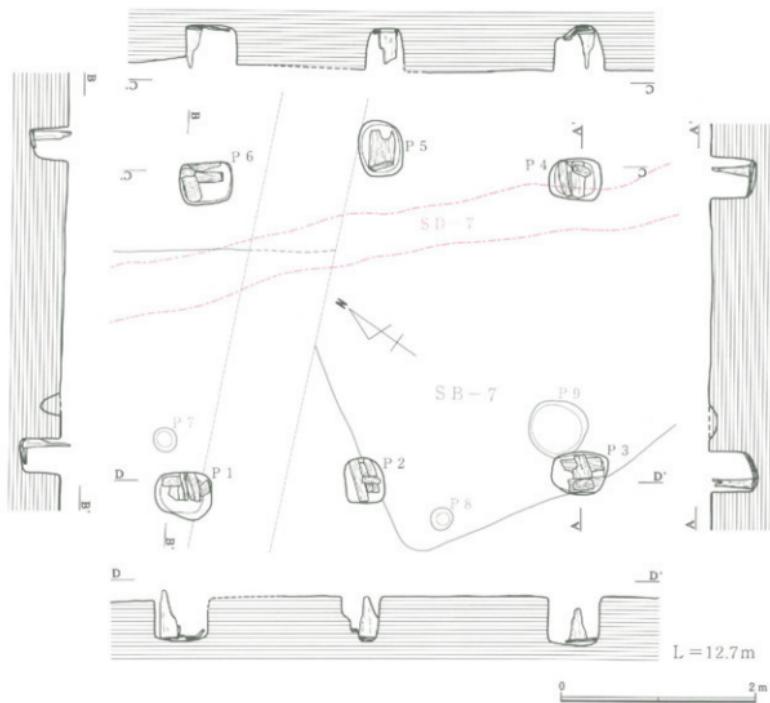
調査区の東側隅に位置する。本住居はSB-3-1とともに第3段階で検出された。SB-3-1・SH-8と切り合っているが新旧関係は確認できなかった。平面形は梢円形を呈している。本調査区内で検出された窓穴住居のなかで平面梢円形のものは、本住居のみである。床面は検出されず、掘り方のみの調査となった。主柱穴はP1～P4の4基であろう。いずれの柱穴も、平面形は隅丸民方形であり、住居の軸方向に長い。4基の柱穴とも礎板が出土した。4基の柱穴の礎板はいずれも一枚板を使用しており、他の建物のように複数枚の礎板を設置するようなまねをしていない。板の設置方向は住居の軸方向と一致している。また3基の柱穴から、柱根が検出された。かなり劣化しているが、横断面が長方形のものであり、長辺は住居の軸方向と直交する。柱根間の距離は、東西方向に約5.4m、南北方向に約7.6mである。なお、P1は横断面が円形の柱根が傾いた状態で検出されたが、この柱穴が本住居に関係するものかどうかは不明である。P9は横断面が円形の柱根と、柱根の下及び側面に柱を支えるように石が積められていたが、本住居とは無関係であろうと考えている。遺物は壺の口縁部(382)と甕の脚台部(387)が出土している。また、P8からは甕の口縁部(406)が出土している。

(2)掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物は全部で13棟である。検出された掘立柱建物のうち、SH-7を除く12棟は2間×1間であり、SH-7のみ3間×1間である。また桁行と梁行の長さを比較すると、梁行よりも桁行が若干長い建物が多い。中にはSH-3のように梁行の方が桁行よりも長い例もある。掘立柱建物を構成する柱穴の大部分は、底部に礎板が据えてあった。礎板の規模は様々であり、複数枚を重ねている

遺構番号	GRID	主軸方位	桁行(n)	梁行(n)	府美比率	検出面積(m ²)	面積(m ²)	他SB-SHとの重複
SH-1	R1.B-2.C-2	N-36°W	4.10	3.25	1.26	12.57	13.33	SB-5.SB-7
SH-2	C-1.C-2	N-57°E	3.68	3.20	1.15	12.63	11.78	SB-4.SB-7.SH-4.SH-6.SH-9
SH-3	D-3.D-4.E-3.E-4	N-6°E	5.82	6.37	0.91	12.91	37.07	SB-6.SB-9.SB-18.SH-13
SH-4	C-2.D-2	N-25°W	3.45	2.92	1.18	12.63	10.07	SB-6.SB-2.SH-6.SH-9
SH-5	D-2.D-3.E-2	N-42°E	4.00	3.82	1.08	12.75	15.28	SH-10
SH-6	C-2	N-68°E	4.35	3.10	1.40	12.63	13.49	SH-4.SH-2.SH-4.SH-9
SH-7	D-3.E-4.F-3	N-82°W	7.40	4.20	1.76	12.59	31.08	SB-28.SB-29
SH-8	E-4.F-4	N-87°W	6.07	4.37	1.39	12.53	26.53	SH-9.SH-32
SH-9	C-2	N-53°E	3.75	3.07	1.22	12.63	11.51	SH-4.SH-2.SH-4.SH-6
SH-10	D-2.D-3.E-2.E-3	N-57°E	5.47	3.97	1.38	12.73	21.72	SH-6
SH-11	C-3.C-4	N-45°E	5.47	3.35	1.63	11.96	18.32	SB-2.SB-11.SB-14.SB-15
SH-12	D-4	N-65°W	5.25	4.27	1.23	12.43	22.42	SB-8
SH-13	D-3.D-4.E-3.E-4	N-55°W	4.25	3.42	1.24	12.40	14.54	SB-9.SB-18.SH-3

第13表 掘立柱建物跡一覧表



第56図 SH-1 実測図

例も多くあった。礎板を重ねるのは、柱の高さ調節が理由のひとつに考えられる。なお、柱穴の覆土は竪穴住居跡と類似した土層である。

SH-1 (第56図、図版35)

調査区の西側隅に位置する。柱穴はP1～P6である。SB-5・SB-7・SD-7と切り合っているが、新旧関係は不明である。6基全ての柱穴から柱根が検出された。いずれも断面が約17cm×約8cmの長方形を呈している。柱根は建物の主軸方向に長い部分を合わせている。柱の間隔は梁間3.3m、桁間2.1mであり、どの柱間も正確である。P2は1枚の礎板に柱が据えられていたのであるが、建物の重みによって礎板が割れて柱根が沈んでいる。P3は建物の主軸に並行な礎板の上に、主軸に直交する礎板を敷き、更にその上に主軸に並行な礎板を敷いて柱を据えている。礎板にかかる重量を分散させるためであろうか。また、柱とこれら礎板を釘状のもので固定したと思われる穴も確認された。どの柱根も柱穴の隅に据えられており、柱穴の中央に据えられた柱は存在しない。その位置をみると、P1・P4・P6は柱穴の東壁に、P3・P5は柱穴の西壁に接して据えられている。おそらく柱穴の隅に意図的に据えることによって、柱の傾くのを防いだのではないかと思われる。柱穴から出土した遺物については、礎板・柱根以外に図化できるものは無かった。

S H - 2 (第58図、図版36)

調査区の西側に位置する。柱穴はP 1～P 6である。P 7はP 6と、P 8はP 1と重複しており、本建物と関連する可能性もある。本建物はS B - 4 およびS B - 7・S H - 4・S H - 6・S H - 9と切り合っているが、新旧関係は不明である。いずれの柱穴も、1枚の板を礎板として使用している。礎板はP 3のものを除き、遺存状態は良好であった。各柱穴内の礎板は1枚据えられているのみであり、P 2・P 5・P 6の礎板は良好な遺存状態を呈しているが、P 1・P 3・P 4の柱穴は劣化が進んでいる。柱穴から出土した遺物については、礎板以外に図化できるものは無かった。

S H - 3 (第57図、図版37)

調査区の中央東寄りに位置する。柱穴はP 1～P 6である。いずれの柱穴も、長径が平均113cm、短径が平均80cmと大きな隅丸長方形の平面形を呈している。P 7はP 1と、P 19はP 6と重複しており、本建物と関連する可能性もある。一方P 14はP 3と、P 16はP 4と重複するが、こちらは検出状況等から、本建物とは無関係と考えられる。桁行と梁行の長さを比較すると、桁行は5.82mで梁行は6.37mと、梁行の方が長い。しかし、梁の間には支柱とおぼしき痕跡は確認できなかった。本建物はS B - 8・S B - 9・S B - 1 8 およびS H - 1 3と切り合っているが、新旧関係は不明である。本建物の柱穴にて検出された礎板も大型品が多く、P 2・P 3・P 5・P 6からは建築材を転用したということが明かな礎板が出土している。また、礎板が重ねられている状況もみられ、特にP 2は3枚、P 3は5枚もの礎板が重ねられていた。すべての礎板が遺存状態良好であった。柱穴から出土した遺物については、礎板以外に図化できるものは無かった。

本建物はS H - 7やS H - 8と主軸が直交するように建てられている。またこの3棟の建物は適度な間隔で建てられていることからも、3棟が同時に建っていた可能性が高いと考えられる。

S H - 4 (第58図、図版36)

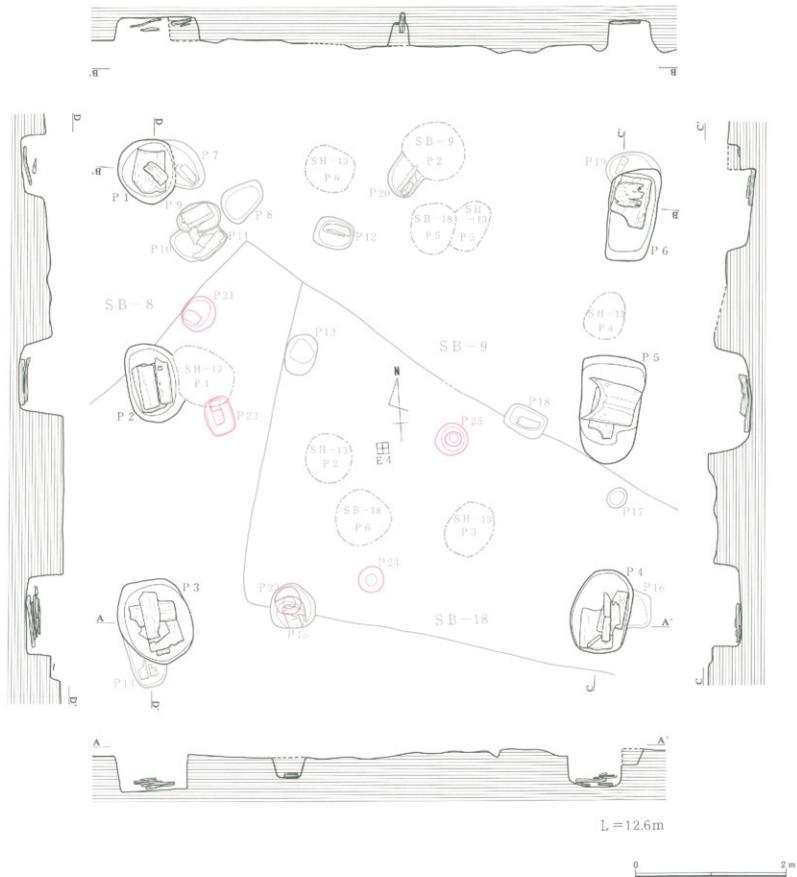
調査区の西側に位置する。柱穴はP 1～P 6である。S B - 6 およびS H - 2・S H - 6・S H - 9と切り合っているが、新旧関係は不明である。P 4・P 5を除く他の柱穴からは礎板が出土している。いずれも長方形の板を1枚、底に据えている。遺存状態は良くない。P 1・P 2・P 3の礎板は建物の主軸方向に並行して据えられているが、P 6の礎板は直交する方向に据えられている。柱穴から出土した遺物については図化できるものは無かった。

S H - 5 (第59図、図版38)

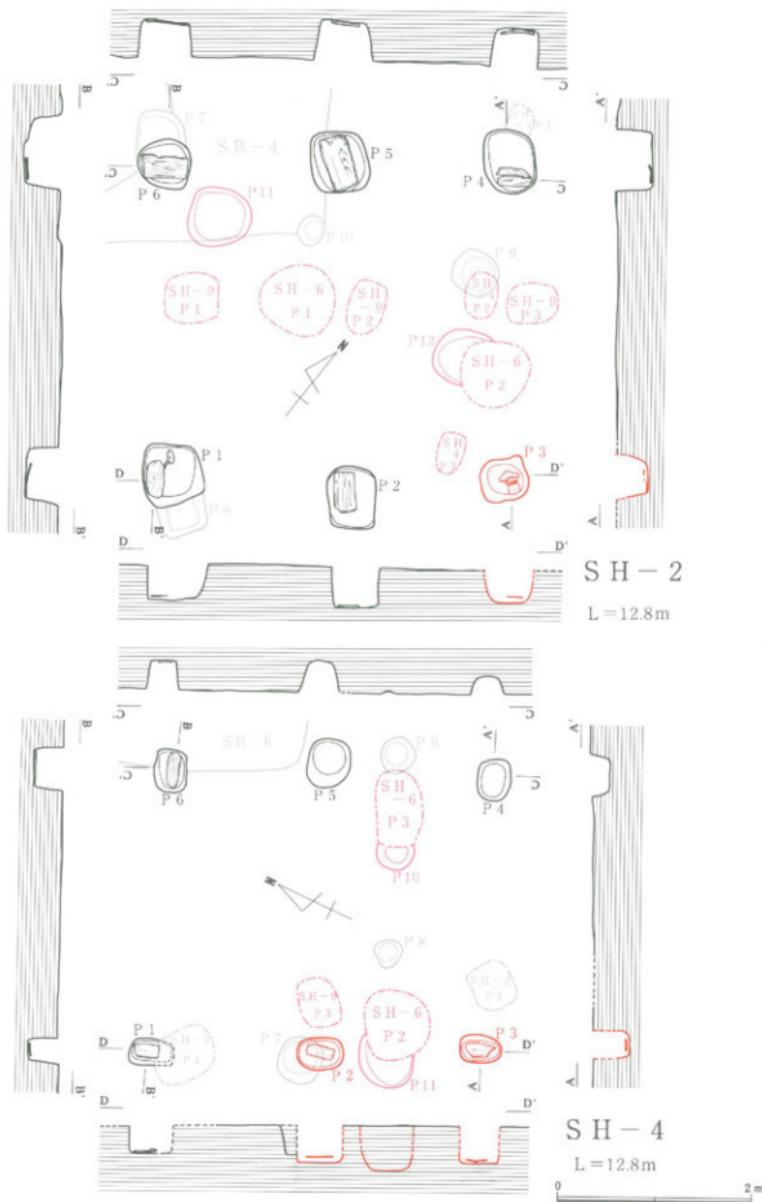
調査区の中央南寄りに位置する。柱穴はP 1～P 6である。S H - 1 0と切り合い、P 4はP 16とS H - 1 0のP 2と重複している。いずれの柱穴にも底に礎板が据えられており、礎板の遺存状態は良好である。P 3は板の下に更に2枚、上の板と直交するように板が敷かれている。建物の重力を分散させる為であろう。同様の例はS B - 3のP 2やS H - 9のP 1にもみられる。また、P 2には柱の痕跡が礎板の上に残っていた。痕跡は14cm×9cmの長方形であった。礎板は柱の痕跡を中心にV字に折れている。建物の盛みによって礎板が折れたのであろう。基本的に、礎板は建物の主軸方向に並行に据えられている。柱穴から出土した遺物については、礎板以外に図化できるものは無かった。

S H - 6 (第60図、図版38)

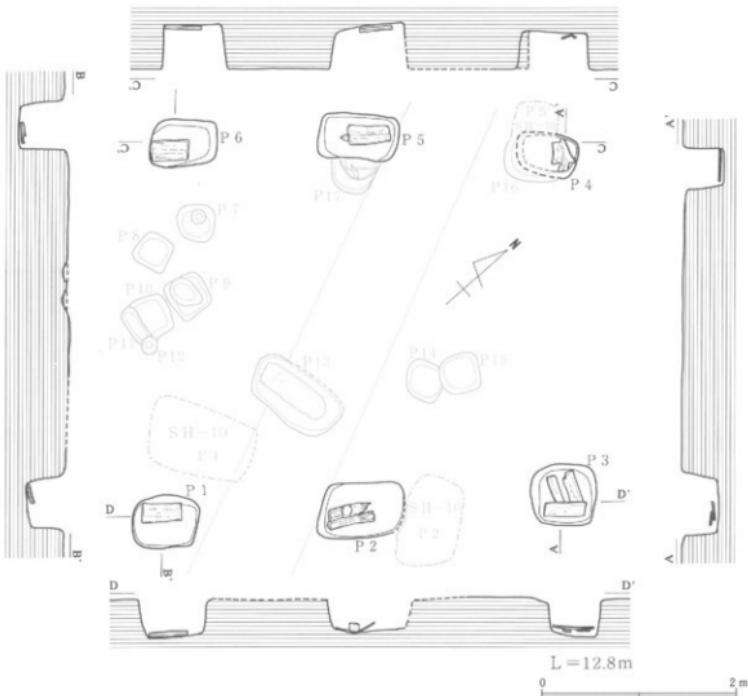
調査区の西側に位置する。本建物は第2段階では確認されず、第3段階にて検出された。柱穴はP 1～P 6である。P 5とP 6の2基は、第2段階で検出していた。P 11はP 3と、P 10はP 2と重複する。



第57図 SH-3実測図



第58図 SH-2 + SH-4 実測図

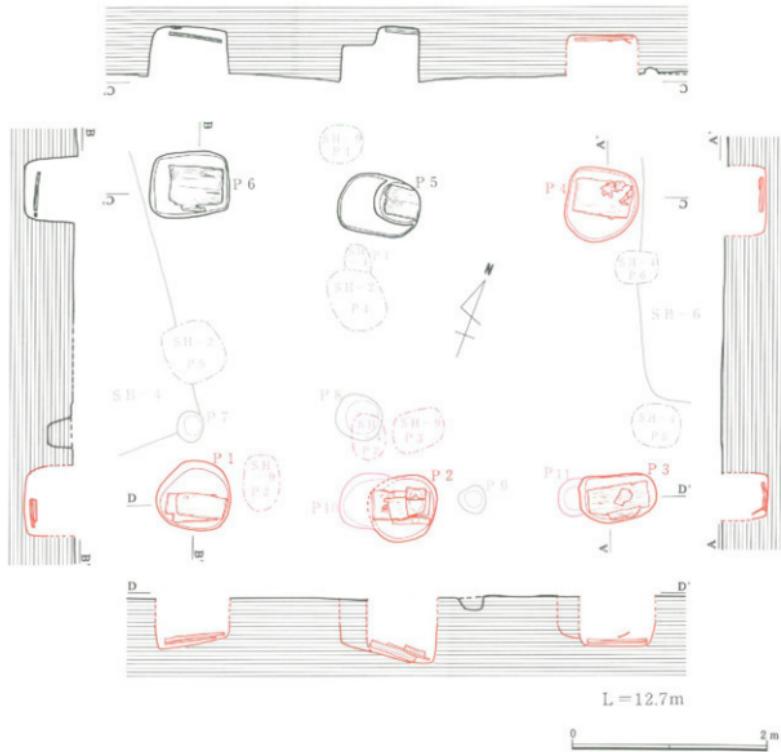


第59図 SH-5 実測図

この2基の柱穴は本建物と関連する可能性がある。SH-4・SH-2・SH-4・SH-9と切り合っているが、柱穴の重複がないため、新旧関係は不明である。また、SB-6と本建物は近接しているため、同時存在の可能性は極めて低いといえよう。本建物の柱穴に据えられている礎板はいずれも頑丈な一枚版であり、遺存状態も良好なものばかりである。基本的に、礎板は建物の主軸方向に並行に据えられている。柱穴から出土した遺物については、礎板以外に図化できるものは無かった。

SH-7 (第61図、図版38)

調査区の東側に位置する。本建物は第2段階では確認されず、第3段階にて検出された。柱穴はP1～P8と思われるが、P1～P3とP6～P8の2間×1間の可能性も考えられる。P8のみ第2段階で検出された。SB-28・SB-29と切り合っており、新旧関係ははっきりとはしないが、SB-28・SB-29が上層で検出されている。全ての柱穴内に大型の礎板が据えられており、また2枚・3枚と礎板が重ねられている例が多いことから、据えられた建物は大規模なものであったのではないかと思われる。基本的に、礎板は建物の主軸方向に並行に据えられているが、P4のみ直交するように据えられている。柱穴から出土した遺物については、礎板以外に図化できるものは無かった。



第60図 SH-6 実測図

本建物はSH-8と主軸がほぼ並行し、SH-3とは直交するように建てられている。

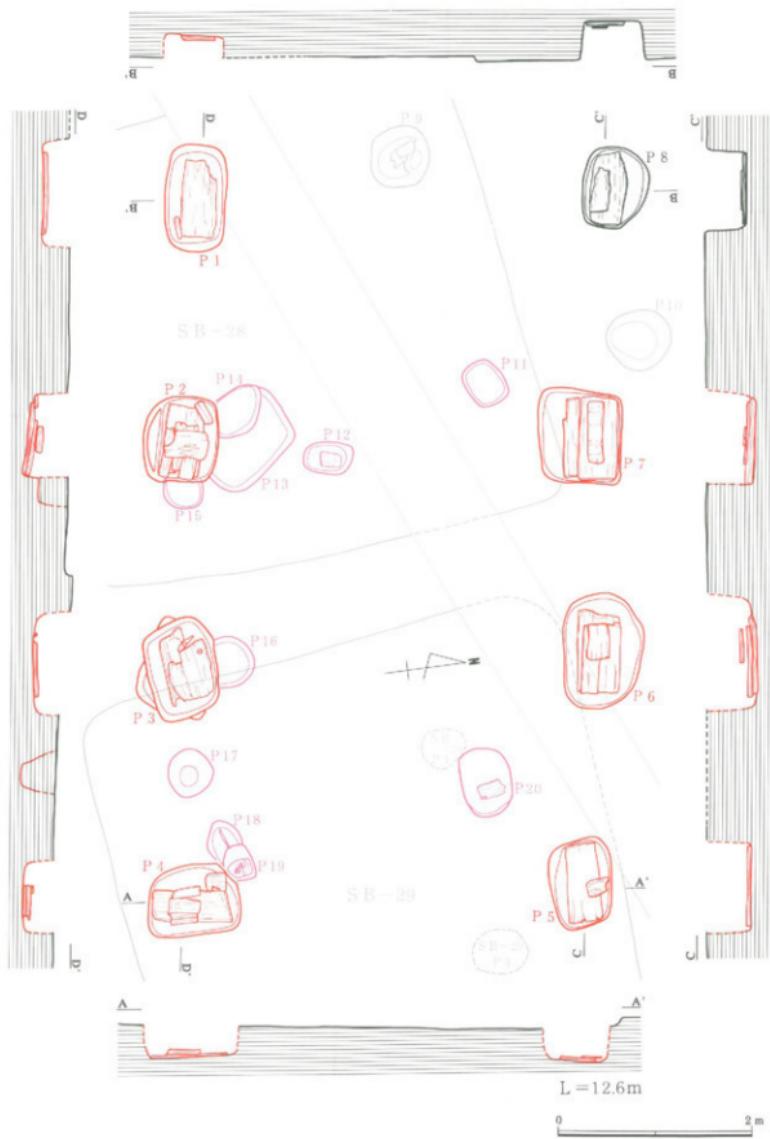
SH-8 (第62図)

調査区の東側に位置する。本建物は第2段階では確認されず、第3段階にて検出された。柱穴はP1～P6である。付帯する遺構（P16・P17・P28・P23・P24など）と本遺構との関係は不明である。SB-9・SH-3と切り合っているが、新旧関係ははっきりとはしない。基本的に、礎板は建物の主軸方向に並行に据えられているが、どの柱穴も礎板を複数枚重ねている。遺物については、礎板以外にはP3から鉢（407）が出土している。

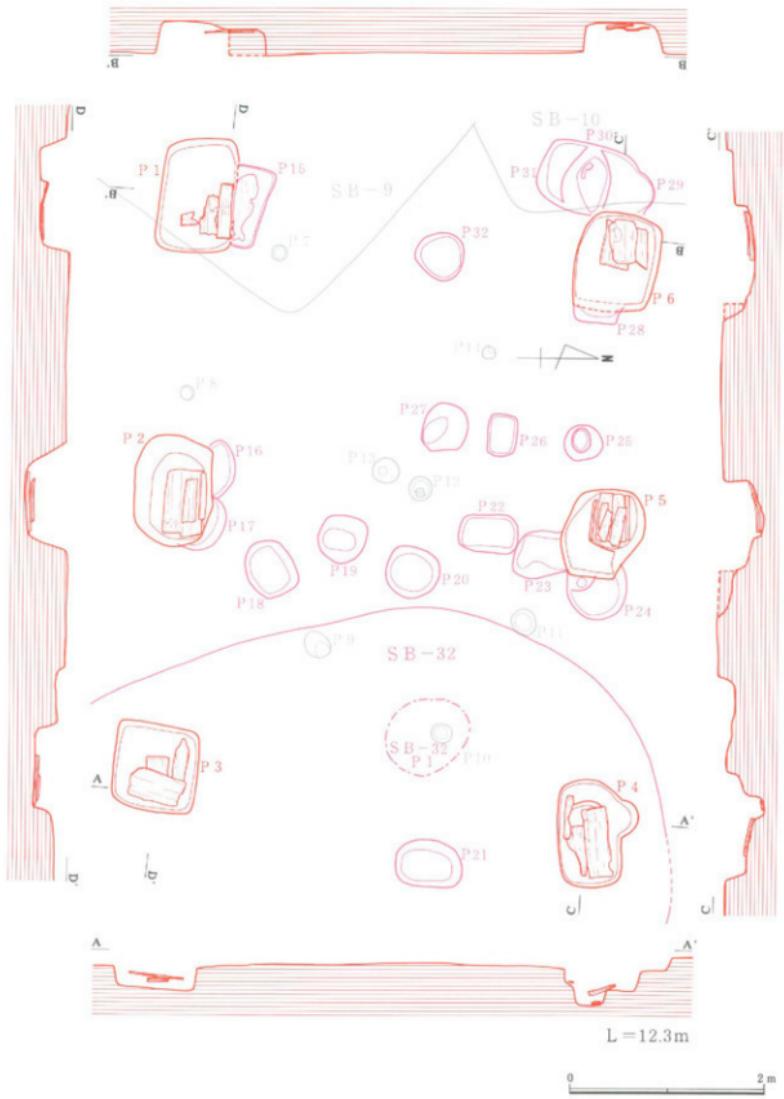
本建物はSH-7と主軸がほぼ並行し、SH-3とは直交するように建てられている。

SH-9 (第63図)

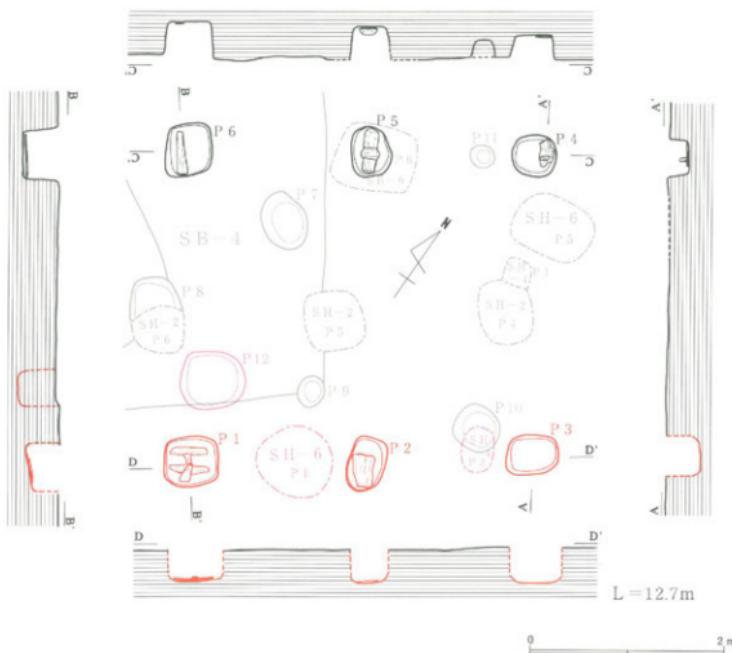
調査区の西側に位置する。現地調査終了後の図面調査で、本建物の存在が確認された。柱穴はP1～P6である。SB-4・SH-2・SH-4・SH-6と切り合っているが、新旧関係は不明である。また、SH-7とは近接しているため、同時存在はなかったと思われる。SH-2と本遺構は主軸方向



第61図 SH-7 実測図



第62図 SH-8 実測図

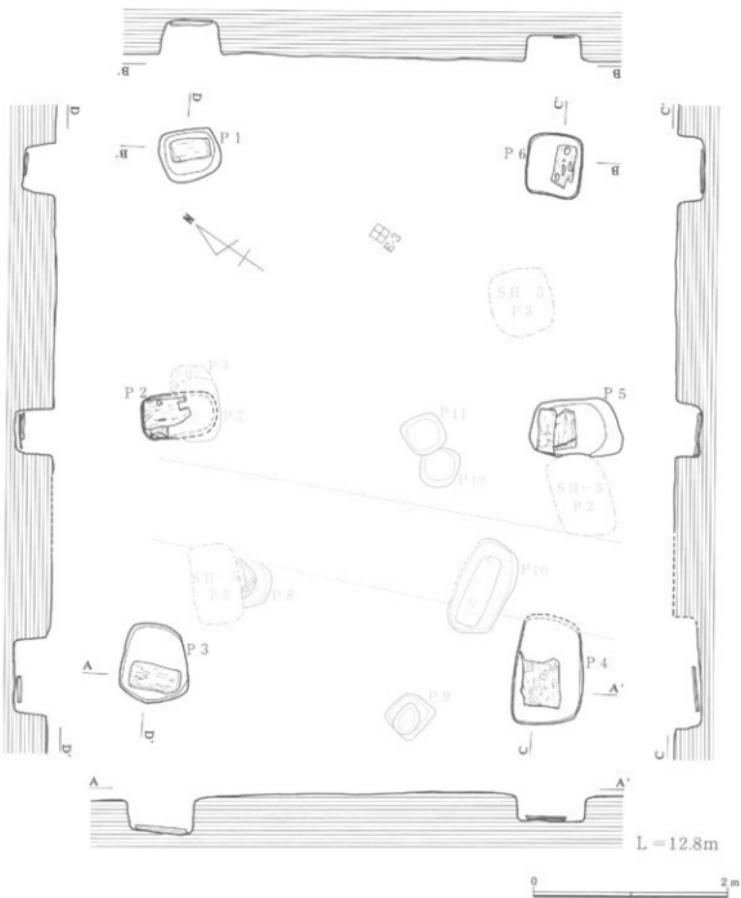


第63図 SH-9 実測図

がほぼ同じであるので、建て替えではないかと思われる。P 1 の礎板は主軸方向に 2 枚の板を並行に敷いた上に、直交する 1 枚の板を敷いて、重力の分散を図ろうとしているのが分かる。同様の例は SB-3 の P 2 や SH-5 の P 3 にもみられる。また、P 4 では垂直に立った木片が出土しているが、柱根といえるかどうかは微妙である。一方、P 5 の礎板の上に長軸約 22cm × 短軸約 13cm の土塊が遺存していた。礎板の中央に位置していることからも、柱の痕跡ではないかと思われる。P 3 からは礎板が検出されていない。基本的に、礎板は建物の主軸方向に直交する方向で据えられている。柱穴から出土した遺物については図化できるものは無かった。

SH-10 (第64図)

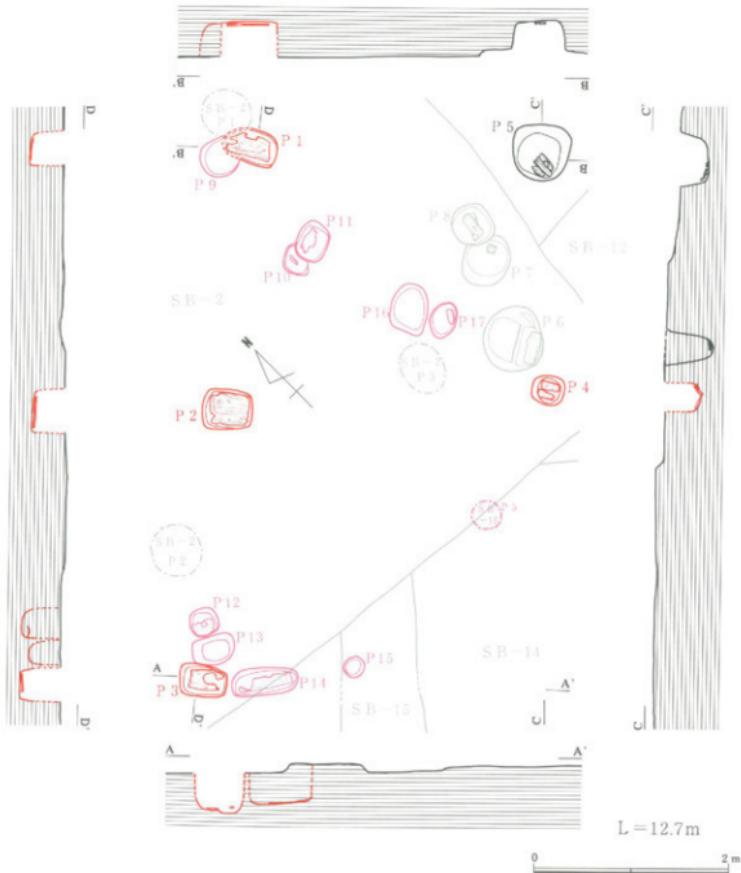
調査区の中央南寄りに位置する。現地調査終了後の図面調査で、本建物の存在が確認された。柱穴は P 1 ~ P 6 である。全ての柱穴が第 2 段階で検出された。SH-5 と切り合っている。P 2 は P 7 と SH-5 の P 4 と重複している。据えられている礎板の長軸方向は統一されていない。柱穴から出土した遺物については、礎板以外に図化できるものは無かった。



第64図 SH-10実測図

SH-11 (第65図)

調査区の中央北寄りに位置する。現地調査終了後の図面調査で、本建物の存在が確認された。柱穴はP 1～P 5であるが、P 4の南側にも柱穴が存在したと思われる。P 5は第2段階で検出されたが、P 1～P 4は第3段階で検出された。SB-2・SB-11・SB-14・SB-15と切り合っている。また、SB-12・SB-20とも重複している可能性がある。これら建物との新旧関係は不明である。何れの柱穴も大きくはなく、礎板は柱穴に丁度収まる大きさである。P 4は1枚が割れて中央が陥没している。建物の重量により礎板が割れたのであろう。柱穴から出土した遺物については図化できるものは無かった。



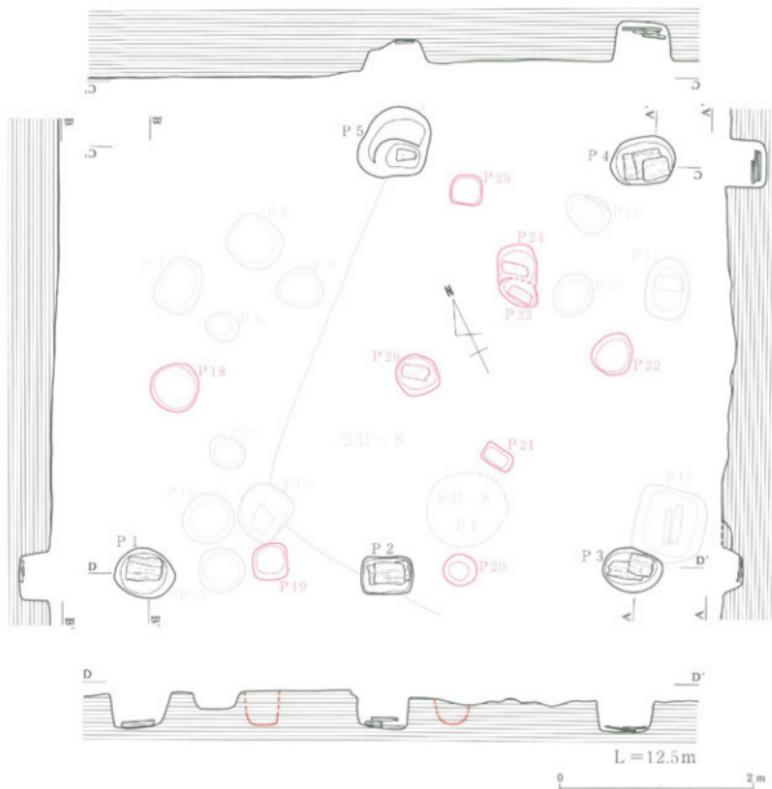
第65図 SH-11実測図

SH-12 (第66図)

調査区の北側に位置する。現地調査終了後の図面調査で、本建物の存在が確認された。柱穴はP1～P5である。P5の北西側にも柱穴が存在したと思われる。柱穴は全て第2段階で検出された。SB-8と切り合っているが、新旧関係は不明である。礎板は建物の主軸に並行して、複数枚据えられる傾向がある。何れの柱穴も大きくはなく、礎板は柱穴にきっちり収まる大きさである。柱穴から出土した遺物については、礎板以外に図化できるものは無かった。

SH-13 (第67図)

調査区の中央東寄りに位置する。現地調査終了後の図面調査で、本建物の存在が確認された。柱穴は



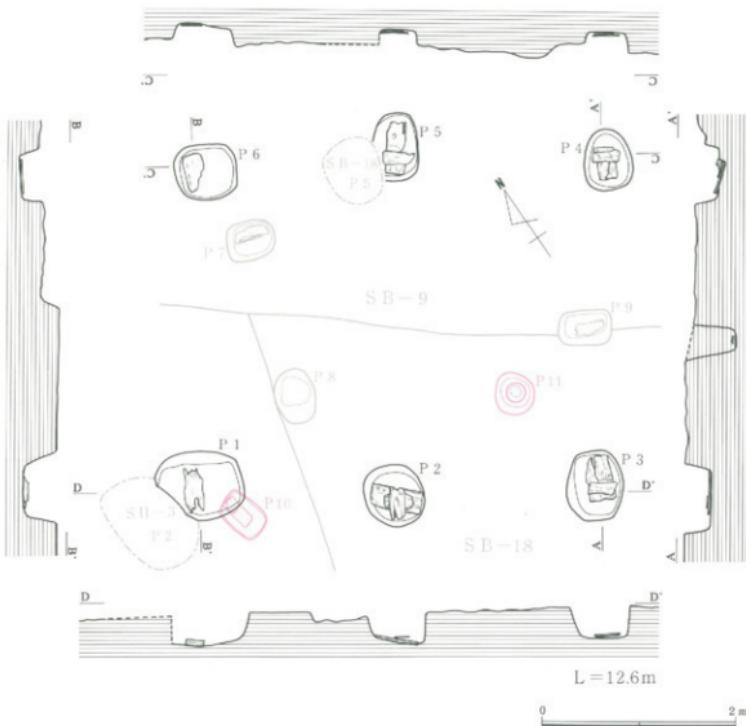
第66図 SH-12実測図

P 1～P 6 である。柱穴は全て第2段階で検出された。SB-9・SB-18・SH-3と切り合っているが、新旧関係は不明である。柱穴内には礎板が複数枚据えられたりしているが、いずれも遺存状態は良くない。柱穴から出土した遺物については図化できるものは無かった。

(3)溝状遺構

SD-2 (第68図、図版39)

C-1グリッドで検出された。第1段階で出土した。浅い溝である。遺構の南側が中世の掘り込みによって削平されており、全長は不明である。最大幅は56cm、残存長は約3.6m、検出面からの深さは最大で12cmである。溝底部の高低差がなく、傾斜はしていない。これは単に検出長が短いために傾斜が確認できないものと思われる。覆土は黒色土で同時期の他の遺構と異なり、明灰色や黒色の混入物を非常に多く含む。これら混入物は灰や炭化物であろう。



第67図 SH-13実測図

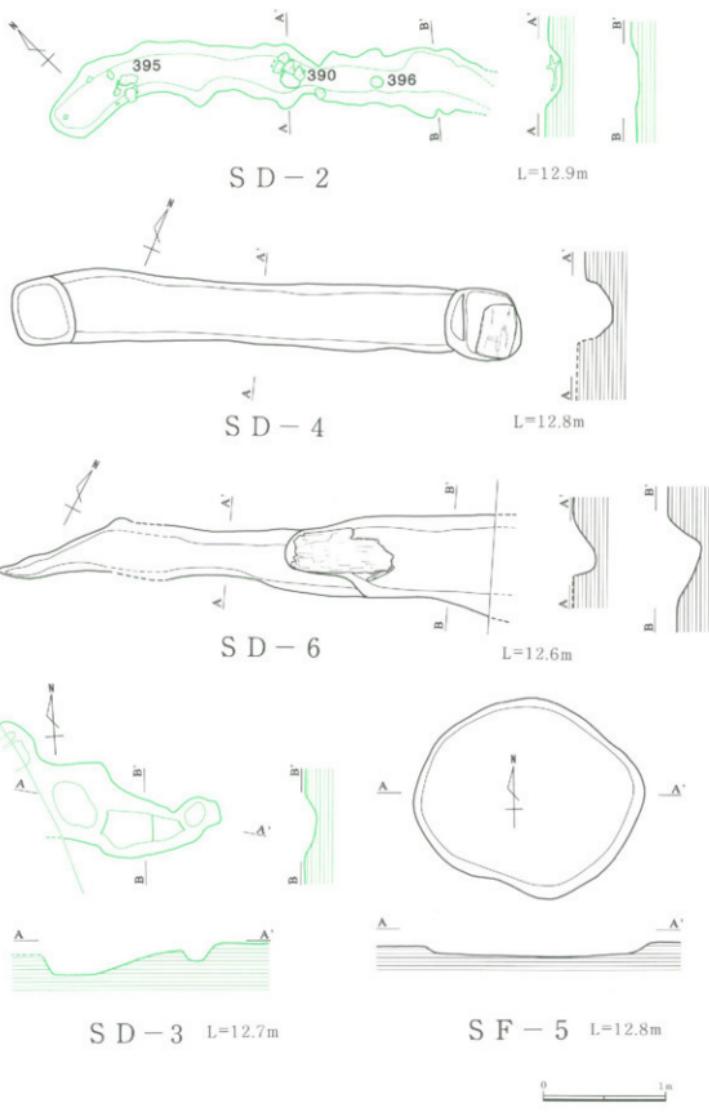
遺物は壺(388)や甕(389・390・392~397)などが出土した。特に台付甕の脚台部が多く出土した。遺構の性格は不明であるが、祭祀に関係するものではないかと考えられる。則ち、方形周溝墓の可能性を考えたのであるが、他の区画溝が検出されることはない。ところで、本溝は後述するSD-7と軸が全く同じである。これは、SD-7のラインをSD-2が踏襲しているものと思われるが、詳細は不明である。

SD-3 (第68図、図版39)

B-1グリッドで検出された。第1段階で出土した。底部のレベルが一定していない溝である。遺構の西側が周溝によって切られているが、遺構自体は調査区外へと続いている。幅は約50cmだが一定せず、残存長は約1.5m、検出面からの深さもおよそ15cmであるが一定しない。覆土は同時期の他の遺構とほぼ同じ土である。本遺構の性格は不明である。遺物は土器片が出土しているが、図化できるものはなかった。

SD-4 (第68図、図版40)

D-2グリッドで検出された。第2段階で出土した。溝の両端に柱穴が存在する。東側の柱穴は平面



第68図 SD-2・SD-3・SD-4・SD-6・SF-5実測図

形が65×61cmの隅丸方形である。西側の柱穴は平面形が54×50cmの隅丸方形である。溝の最大幅は約56cm、溝のみの長さは約3.1m、検出面からの深さは約25cmである。溝底部は高低差がなく、フラットである。溝の断面は箱状である。覆土は同時期の他の遺構とほぼ同じ土である。東西両端の柱穴と本溝との関連は、はっきりしない。本遺構の性格については不明である。しかし溝と2基の柱穴が関連するならば、柱間の辦的なものかもしれない。遺物は土器片が出土しているが、図化できたのは壺の口縁部（398・399）2点のみであった。

SD-6 (第68図、図版40)

C-3・D-3グリッドで検出された。SB-2-0掘り方の調査中に、掘り方の一部が溝状になっていることが分かり、溝状遺構として調査を行うことになった。溝の東側は第1トレンチに切られており、トレンチよりも東側には溝が続いていない。最大幅は84cmで、残存長は約4.1m、検出面からの深さは最大で30cmである。溝の幅や深さは、西から東にいくにつれ、広く深くなる。覆土はSB-2-0の覆土と差異がなかった。溝は1ヶ所、ピットによって切られている。また、板が溝と同じ方向で据えられているが、これは本溝に伴う遺物ではなく、柱穴の礎板であると思われる。本遺構の性格については明らかにし得なかつたが、やはりSB-2-0の掘り方である可能性が高い。遺物は土器片が出土しているが、図化できるものはなかった。

SD-7 (第69図、図版40)

C-1グリッドからB-3グリッドにかけて検出された。本遺構は第2段階では確認されず、第3段階で検出された。幅は約50cm、残存長は約21m、検出面からの深さは溝中央付近で約35cmである。覆土は同時期の他の遺構とほぼ同じ土である。底部は南側から北へ行くにつれて深くなる。南端は溝が途切れているが、実際にはもっと南へ伸びると思われる。また、北側は覆土と地山が混ざるような状態で、明確な遺構の輪郭を捉えることができなかつた。おそらく自然と溝がなくなるような状態であったのではないかと思われる。

また、SD-2と本溝は位置的に重複している。本溝の上層をSD-2として調査した可能性はあるが、覆土や遺物の出土状況が全く異なるため、SD-2はSD-7のラインを踏襲しているとみた方が良いであろう。

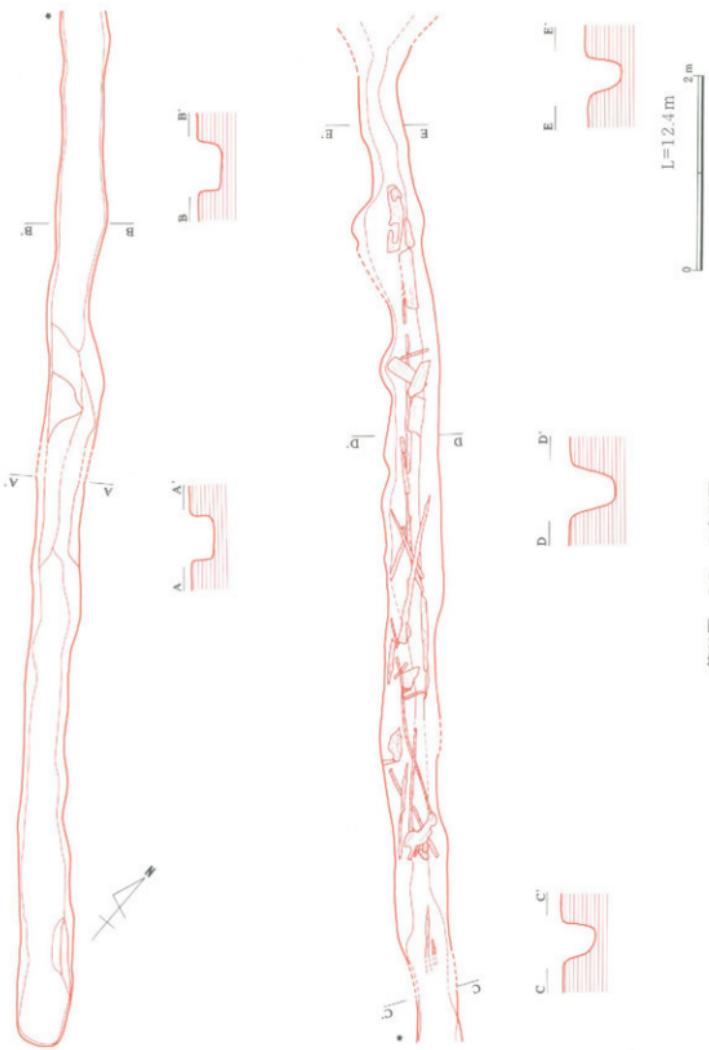
遺物としては土器の他に、自然木や加工された細長い木材が、溝の方向に沿って多く検出された。このうち図化できたのは、壺（400・401）の2点のみである。

遺構の性格として、当時溝中に水が流れるような水路的な用途を考えらる。溝北端の、溝がなくなる辺りは泥炭帯が溜っている部分であり、遺物や木片が大量に出土する場所である。故に、龍城山の麓から湧き出た水が、この流路を通って調査区北西隅の湿地帯に流れ込むようになっていたのではないかと考えられる。あるいは、集落の区画溝（あるいは環濠）という考え方もあるが、溝の位置や住居跡の重複状況等から、可能性は低いと思われる。

(4)土坑 SF-5 (第68図、図版40)

C-2・C-3グリッドにて検出された。第2段階で検出された。ほぼ円形であり、約1.9m×1.6mである。確認された深さは10cmと浅い。覆土は同時期の他の遺構とほぼ同じ土であるが、土壤化した炭化物がかなり多く混じっていた。

本遺構は1基の柱穴と重複しているが、本遺構の方が新しい。遺物は土器片が出土しているが、図化できたのは壺の底部（402）のみである。遺構の性格については不明である。



第69図 SD-7 実測図



第70図 土器集中出土地点3実測図

(5)土器集中出土地点（第70図、図版41）

本調査区の中で、調査区の西北隅と東南隅から大量の遺物が集中して出土した。これらは第1段階で調査が行われた。

調査区西北隅はVa層がゆるやかに低くなっている、Va層が泥炭化した状態で堆積していた。ここからは土器片の他にも多くの木片が出土した。その中でも特に遺物が集中的に出土した場所を「土器集中出土地点1」として記録した。この場所から、窪穴住居跡や柱穴等の遺構はほとんど出土しなかった。なお後述する土器集中出土地点3と違い、窪地状にはなっていなかった。

調査区東南隅は窪地状に深くなっている、泥炭がラミナ状に堆積していた。特にここからは非常に大量の遺物が出土した。これを「土器集中出土地点3」と名付けた。第70図はその窪地と遺物の出土状態であるが、窪地は第70図より東側へも続いている。本窪地は平面形が一定せず、堆積状況もいわゆる埋土とは異なるため、土坑ではなく窪地であると判断した。なお窪地の北側には、Va層中ではあるが遺物が集中して出土する場所があった。これを「土器集中出土地点2」として記録した。

出土した遺物は非常に大量であるが、このうち土器集中出土地点1から出土した土器（408～411）と土器集中出土地点2から出土した土器（412～417）を図化した。また土器集中出土地点3から出土した遺物は、土器（418～500）・土製品（624・633）・石製品（642・643・645・646）・ガラス製品（654）

を図化した。

これら遺物集中出土地点は、当時集落内に点在したと思われる窪地状の湿地で、ごみの廃棄場ではなかったかと思われるが、果して集落内に泥炭が発達するような湿地が点在していたのだろうか、という疑問は残る。

第14表 柱穴一覧表(1)

建物番号	掲載番号	被覆(cm)			底部標高(m)	平面形状	電板		備考	
		長軸	短軸	深さ			枚数	上部標高(m)	掲載番号	
SB-1	P1	SP-279	48	43	45	11.95	円形	4	12.05	
	P2	SP-282	44	36	49	11.99	円形	1	12.06	741
	P3	SP-281	49	46	45	12.05	円形	1	12.10	735
	P4	SP-280	46	44	52	11.95	円形	3	12.06	
	P5	SP-482	58	56	26	11.98	円形	0		
	P6	SP-480	38	28	18	12.07	橢円形	1	12.11	
	P7	SP-661	48	36	9	12.12	橢円形	1	12.15	
	P8	SP-559	57	53	16	12.09	円形	1	12.12	
	P9	SP-479	38	30	19	12.06	円形	1	12.10	
	P10	SP-478	44	40	15	12.13	円形	1	12.15	
	P11	SP-477	50	43	20	12.06	楕丸方形	4	12.13	707
	P12	SP-654	72	48	22	12.08	橢円形	1	12.12	
SB-2	P1	SP-199	60	56	40	12.05	円形	1	12.09	
	P2	SP-405	54	54	44	12.05	円形	1	12.09	
	P3	SP-414	52	36	40	12.08	橢円形	3	12.12	688
	P4	SP-205	50	50	40	12.11	円形	1	12.15	
	P5	SP-198	28	26	11	12.44	円形	0		
	P6	SP-194	43	33	22	12.35	橢円形	0		
	P7	SP-383	68	63	44	12.03	円形	1	12.08	
	P8	SP-427	50	50	30	12.21	円形	1	12.23	SP-397と切り合う
	P9	SP-397	44	44	33	12.14	円形	2	12.20	SP-427と切り合う
	P10	SP-200	56	44	30	12.19	橢円形	1	12.24	
	P11	SP-201	60	44	9	12.40	橢円形	0		
	P12	SP-500	30	30	16	12.06	円形	0		
	P13	SP-493	48	42	16	12.05	橢円形	1	12.09	
	P14	SP-513	26	36	18	12.24	円形	0		
	P15	SP-499	45	35	9	12.10	楕丸長方形	0		
	P16	SP-493	40	18	16	12.04	楕丸長方形	1	12.12	
	P17	SP-498	47	43	9	12.16	円形	1	12.18	
	P18	SP-487	30	30	12	12.14	円形	1	12.22	
	P19	SP-488	45	30	20	12.08	楕丸長方形	0		
SB-3	P20	SP-490	68	28	5	12.20	楕丸長方形	1	12.21	
	P21	SP-502	37	23	24	12.04	橢円形	1	12.12	
	P22	SP-503	50	38	21	12.06	楕丸長方形	0		
	P23	SP-504	40	32	12	12.15	楕丸長方形	1	12.20	SP-505と切り合う
	P24	SP-505	30	25	7	12.19	楕丸長方形	1	12.21	SP-504と切り合う
	P25	SP-512	38	28	12	12.18	楕丸長方形	1	12.20	SP-611と重複
	P26	SP-511	38	30	14	12.12	橢円形	1	12.16	SP-512と重複
	P27	SP-507	39	38	13	12.16	円形	0		SP-508と切り合う
	P28	SP-462	63	52	36	11.95	楕丸長方形	1	12.02	
	P29	SP-461	65	52	42	11.95	楕丸方形	3	12.10	
SB-4	P30	SP-464	40	26	24	11.98	橢円形	1	12.04	
	P31	SP-463	45	45	28	12.06	円形	1	12.08	
	P32	SP-184	25	25	10	12.20	円形	0		
	P33	SP-92	50	50	30	12.04	円形	3	12.06	
	P34	SP-277	55	42	34	11.98	橢円形	3	12.07	
	P35	SP-93	55	85	17	12.22	長方形	0		
	P36	SP-91	35	25	8	12.32	橢円形	0		
	P37	SP-90	32	27	26	12.13	橢円形	0		
	P38	SP-276	34	31	9	12.30	円形	0		
	P39	SP-99	32	30	35	12.05	円形	0		
SB-5	P40	SP-286	37	37	20	12.20	円形	0		
	P41	SP-444	38	38	9	11.93	円形	0		
	P42	SP-134	63	53	28	12.10	橢円形	0		SP-272と重複
	P43	SP-272	33	33	40	12.01	楕丸長方形	3	12.06	694,730,731 SP-134と重複
	P44	SP-274	26	25	14	12.25	円形	0		
SB-5	P45	SP-273	27	25	26	12.17	円形	0		
	P46	SP-88	48	42	21	12.03	橢円形	0		
	P47	SP-186	60	48	29	12.34	橢円形	0		
	P48	SP-307	58	53	13	12.37	円形	0		
	P49	SP-187	130	53	32	12.30	楕丸長方形	0		SP-188と切り合う
SB-5	P50	SP-82	31	26	25	12.36	橢円形	0		
	P51	不規	30	27	21	12.33	円形	0		SP-663内にある
	P52	SP-663	80	58	8	12.16	楕丸長方形	1	12.20	SP-663と重複
	P53	SP-470	20	19	21	12.06	円形	0		
	P54	SP-471	40	32	18	12.12	楕丸長方形	0		
SB-5	P55	SP-472	20	19	14	12.16	円形	0		

第14表 柱穴一覧表(2)

種類番号	規格番号	規 格(cm)			底面形状	窓 板		備 考
		長軸	短軸	深さ(m)		枚数	上部高さ(m)	
SB-5	P6 SP-473	18	18	10	12.20	円形	0	
	P7 SP-474	20	20	15	12.15	円形	0	
	P8 SP-598	24	22	11	12.15	円形	0	
	P9 SP-597	52	48	18	12.18	円形	0	
	P10 SP-596	63	45	18	12.20	隅丸長方形	0	SP-669と切り合う
	P11 SP-669	40	30	7	12.28	椭円形	0	SP-669と重複
	P12 SP-533	38	30	11	12.28	椭円形	0	SP-533,596と切り合う
	P13 SP-534	60	36	19	12.17	椭円形	0	SP-533と切り合う
	P14 SP-531	52	42	14	12.20	椭円形	0	
	P15 SP-532	40	32	14	12.20	椭円形	0	
	P16 SP-530	48	38	22	12.11	椭円形	0	SP-725と切り合う
	P17 SP-664	36	21	14	12.14	隅丸長方形	0	SP-662と切り合う
	P18 SP-662	41	40	19	12.06	隅丸長方形	0	SP-663と重複 SP-664と切り合う
SB-6	P1 SP-195	40	38	38	12.42	円形	0	
	P2 SP-449	46	36	10	12.10	椭円形	0	
	P3 SP-156	[34]	30	20	12.49	椭円形	0	SP-567と切り合う
	P4 SP-268	125	23	10	12.58	隅丸方形	0	SP-267と重複
	P5 SP-267	148	38	15	12.53	隅丸方形	0	SP-268と重複
	P6 SP-298	98	83	20	12.42	椭円形	0	
	P7 SP-151	23	23	18	12.44	円形	0	
	P8 SP-442	43	40	18	12.48	円形	0	
	P9 SP-285	30	23	17	12.50	円形	0	
	P10 SP-443	35	30	23	12.45	隅丸長方形	0	
	P11 SP-152	43	40	11	12.58	円形	0	
	P12 SP-146	33	30	17	12.52	円形	0	
	P13 SP-260	46	44	6	12.63	円形	0	
	P14 SP-261	43	40	11	12.58	円形	0	
	P15 SP-154	48	48	6	12.63	円形	0	
	P16 SP-155	28	28	35	12.34	円形	0	
	P17 SP-288	58	52	34	12.44	椭円形	0	
	P18 SP-448	64	60	40	12.28	隅丸長方形	1	12.34
	P19 SP-557	38	38	24	12.20	円形	0	SP-156と切り合う
SB-7	P1 SP-60	23	23	7	12.40	円形	0	
	P2 SP-441	60	60	6	12.42	円形	0	SP-62と切り合う
	P3 SP-307	58	53	13	12.37	円形	0	
	P4 SP-187	[30]	53	32	12.30	隅丸長方形	0	SP-188と切り合う
SB-8	P1 SP-382	80	80	32	11.98	円形	1	12.10 684
	P2 SP-388	54	34	36	12.02	椭円形	1	12.06
	P3 SP-372	44	30	12	12.14	椭円形	1	12.13
	P4 SP-451	58	50	30	12.06	隅丸方形	2	12.10
	P5 SP-392	76	71	38	12.00	方形	2	12.02
	P6 SP-390	44	36	38	11.85	隅丸長方形	2	11.96
	P7 SP-391	52	41	17	12.06	椭円形	0	
	P8 SP-389	36	33	24	12.12	円形	0	
	P9 SP-429	[48]	[16]	24	12.00	椭円形	0	SP-430と切り合う SP-421と重複
	P10 SP-421	[50]	[33]	28	11.95	椭円形	3	12.18
	P11 SP-430	56	41	16	11.94	椭円形	3	12.00 722
	P12 SP-373	48	35	25	12.01	隅丸長方形	0	SP-421,429と切り合う
	P13 SP-361	150	50	不明	不明	椭円形	2	不明 683
	P14 SP-359	63	45	36	11.98	椭円形	1	12.04 662
	P15 SP-360	47	34	32	12.01	椭円形	0	
	P16 SP-358	48	32	12	12.18	椭円形	0	
	P17 SP-416	38	31	6	12.18	椭円形	0	
	P18 SP-364	57	40	32	12.07	隅丸長方形	2	12.08
	P19 SP-575	46	41	30	11.97	椭円形	1	12.04
	P20 SP-569	32	30	11	12.09	円形	0	
	P21 SP-576	32	18	20	12.20	隅丸長方形	0	
	P22 SP-565	32	27	10	12.03	円形	0	
	P23 SP-570	19	19	16	12.01	方形	0	
	P24 SP-589	40	26	10	12.03	隅丸長方形	0	
	P25 SP-579	48	48	20	11.94	円形	3	11.98
	P26 SP-580	25	24	15	11.86	円形	0	
	P27 SP-604	44	35	20	11.98	椭円形	0	
	P28 SP-578	27	26	15	11.98	円形	0	
	P29 SP-577	44	44	9	12.10	円形	0	
	P30 SP-585	35	29	14	12.10	隅丸長方形	0	
	P31 SP-583	[34]	40	18	12.04	隅丸長方形	1	12.12 682
								SP-661と重複

第14表 柱穴--観表(3)

施設番号	掲載番号	長軸 短軸 深さ(m)	床面標高(m)	平面形状	確認板			備考
					枚数	上部深さ(m)	掲載番号	
SB-8	P32	SF 651	43 [27]	10 12.08	楕円形	1	12.16	SP-583と重複
	P33	SP 584	32 30	31 11.93	楕丸形	0		
SB-9	P1	SP-366	79 70	51 11.79	楕丸長方形	6	11.94	712
	P2	SP-412	83 [70]	34 11.96	円形	2	12.02	715
	P3	SP-404	68 [63]	35 12.04	楕円形	2	12.12	714
	P4	SP-386	76 [63]	38 11.90	楕円形	2	11.96	713
	P5	SP-393	68 58	34 12.02	楕円形	1	12.04	SP-387と切り合う
	P6	SP-417	71 70	34 12.16	楕丸方形	7	12.12	703,704,705
							706,750	
	P7	SP-379	78 73	34 12.10	楕丸長方形	1	12.16	749
	P8	SP-376	51 48	28 12.06	円形	2	12.00	717
	P9	SP-369	50 45	29 12.00	楕円形	1	12.03	
	P10	SP-446	50 45	12 12.11	楕円形	0		
	P11	SP-402	50 40	24 12.12	楕丸長方形	1	12.16	
	P12	SP-415	58 44	51 12.25	楕円形	0		
	P13	SP-447	69 60	26 12.18	円形	2	12.32	
	P14	SP-587	35 33	20 12.05	円形	0		
	P15	SP-378	49 28	36 12.12	楕丸長方形	0		SP-377と切り合う
	P16	SP-437	30 25	21 12.38	楕円形	0		
	P17	SP-398	54 35	46 12.22	楕丸長方形	1	12.04	
	P18	SP-407	59 [45]	34 12.05	楕円形	2	12.08	719,727
	P19	SP-409	45 [30]	30 12.09	楕円形	1	12.07	SP-404,409と重複
	P20	SP-315	66 [38]	16 12.12	楕円形	1	12.15	SP-275と切り合う
	P21	SP-357	59 53	38 11.86	楕円形	2	11.89	SP-386,420と重複
	P22	SP-420	65 60	36 11.93	楕円形	3	12.02	SP-357,386と重複
	P23	SP-405	18 18	11 12.27	円形	0		
	P24	SP-368	55 36	28 11.90	楕円形	2	12.02	
	P25	SP-367	23 23	14 12.14	円形	0		
	P26	SP-431	75 51	6 12.14	楕丸長方形	0		
	P27	SP-403	34 28	27 11.92	楕円形	0		SP-431内にある
	P28	SP-411	[45] [33]	36 11.92	楕円形	1	11.96	745
	P29	SP-413	[50] 44	44 11.84	楕円形	1	11.98	柱根残存 SP-412と重複
	P30	SP-571	43 40	22 12.06	円形	0		
	P31	SP-588	34 34	22 12.09	円形	0		
	P32	SP-625	38 33	32 11.88	楕円形	0		
	P33	SP-636	86 [43]	25 12.00	楕丸長方形	1	12.04	SP-635と重複
SB-10	P1	SP-571	46 40	32 12.04	楕円形	1	12.06	
	P2	SP-204	32 28	14 12.19	楕丸長方形	0		
	P3	SP-399	21 20	10 12.25	円形	0		
	P4	SP-369	50 45	29 12.06	楕円形	1	12.03	
	P5	SP-367	23 23	14 12.14	円形	0		
	P6	SP-368	55 36	28 11.90	楕円形	2	12.02	
	P7	SP-183	21 21	4 12.25	円形	0		
	P8	SP-400	30 28	6 12.25	円形	0		石あり
	P9	SP-370	80 63	4 12.33	楕丸長方形	0		
	P10	SP-608	52 50	12 12.10	円形	1	12.12	
	P11	SP-607	70 47	13 12.11	楕丸長方形	0		
	P12	SP-609	36 24	8 12.16	楕丸長方形	0		
	P13	SP-623	42 36	20 12.01	楕丸長方形	0		
	P14	SP-644	66 [24]	12 12.11	楕丸長方形	0		SP-643,645と重複 SP-645と切り合う
	P15	SP-645	70 52	25 11.99	楕丸長方形	1	12.00	SP-643,644と重複 SP-644と切り合う
	P16	SP-643	[40] [23]	71 12.15	楕円形	0		SP-644,645と重複 SP-646と切り合う
SB-11	P1	SP-564	48 40	6 12.15	楕丸形	3	12.22	
	P2	SP-214	66 58	48 12.12	万形	2	12.18	SD-6上にある
	P3	SP-567	68 52	8 12.10	楕円形	3	12.18	
	P4	SP-397	44 44	33 12.14	円形	2	12.20	SP-427と切り合う
	P5	SP-427	50 50	30 12.21	円形	1	12.23	SP-397と切り合う
	P6	SP-383	68 63	44 12.03	円形	1	12.08	
	P7	SP-422	65 [55]	44 12.10	楕円形	1	12.16	SP-434,438と重複
	P8	SP-434	78 [58]	32 12.19	楕円形	3	12.26	SP-422,438と重複
	P9	SP-435	[50] 46	34 12.20	万形	1	12.23	SP-422,434と重複
	P10	SP-432	58 [55]	11 12.39	円形	0		SP-561と切り合う
	P11	SP-119	46 38	19 12.42	万形	0		
	P12	SP-147	[58] 53	14 12.48	楕円形	0		SD-6と切り合う
	P13	SP-217	35 35	16 12.44	円形	0		
	P14	SP-207	38 33	8 12.49	円形	0		SP-561と切り合う
	P15	SP-213	72 56	32 12.22	楕円形	5	12.25	

第14表 柱穴一覧表(4)

通物番号	掲載番号	規格(cm)	底部標	底板			備考				
				長軸	短軸	高さ	平面形状	枚数	上部標高(m)	掲載番号	
SP-11	P16	SP-192	48 36	21	12.38		隅丸方形	0			
	P17	SP-191	48 28	12	12.41		隅丸方形	0			
	P18	SP-176	20 20	31	12.45		円形	0			
	P19	SP-211	48 [48]	28	12.12		円形	10	12.22	667,733	
	P20	SP-133	55 48	14	12.21		円形	0			
	P21	SP-450	48 33	26	12.29		円形	0			
	P22	SP-428	20 20	20	12.15		円形	0			
	P23	SP-424	60 60	8	12.25		隅丸方形	0			
	P24	SP-436	42 42	22	12.12		円形	3	12.19		
	P25	SP-433	150 36	26	12.08		椭円形	1	12.12		SP-426と重複
	P26	SP-426	74 60	28	12.06		方形	2	12.10		SP-433と重複
	P27	SP-208	30 28	21	12.36		円形	0			
	P28	SP-116	30 25	19	12.36		円形	0			
	P29	SP-145	65 48	11	12.44		方形	0			
	P30	SP-144	40 33	8	12.42		椭円形	0			
	P31	SP-115	38 25	41	12.40		隅丸方形	0			
	P32	SP-218	88 80	54	12.00		円形	1	12.04		SP-219,524と切り合う
	P33	SP-219	73 [58]	10	12.39		椭円形	0			SP-218と切り合う
	P34	SP-435	68 68	14	12.41		隅丸方形	0			
	P35	SP-203	46 44	42	12.12		円形	2	12.18		SP-100と重複
	P36	SP-100	54 40	34	12.20		椭円形	1	12.22		SP-203と重複
	P37	SP-511	38 [30]	14	12.12		椭円形	1	12.15		SP-512と重複
	P38	SP-512	38 28	12	12.18		隅丸方形	1	12.20		SP-511と重複
	P39	SP-503	50 38	21	12.06		隅丸方形	0			
	P40	SP-502	37 25	24	12.04		椭円形	1	12.12		
	P41	SP-523	50 50	22	12.10		円形	1	12.21		
	P42	SP-520	48 34	12	12.26		隅丸方形	1	12.32		
	P43	SP-522	36 [24]	14	12.29		椭円形	1	12.32		SP-521と重複
	P44	SP-521	39 [34]	20	12.14		椭円形	1	12.18		SP-522と重複
	P45	SP-561	62 56	6	12.22		円形	3	12.30	726	SP-207,432と切り合う
	P46	SP-528	42 38	20	12.16		円形	7	12.36		柱を囲むように、柱と柱穴との隙間に擬板が差し込まれている
	P47	SP-562	50 44	0	12.37		円形	1	12.38		
	P48	SP-563	52 48	16	12.11		円形	0			
	P49	SP-524	58 56	9	12.24		円形	1	12.22		SP-218と切り合う
	P50	SP-568	36 34	12	12.04		円形	0			
SP-12	P1	SP-380	28 28	5	12.38		円形	0			
	P2	SP-419	25 20	8	12.35		椭円形	0			
	P3	SP-525	41 38	20	11.98		円形	1	12.22	734	
	P4	SP-205	43 36	20	12.24		椭円形	0			
	P5	SP-518	30 30	21	12.10		円形	0			
	P6	SP-438	[50] 46	34	12.20		方形	1	12.23		SP-422,434と重複
	P7	SP-434	78 [58]	32	12.19		椭円形	3	12.26		SP-422,438と重複
	P8	SP-422	65 [55]	44	12.10		椭円形	1	12.16		SP-434,438と重複
	P9	SP-383	68 63	44	12.03		円形	1	12.08		
	P10	SP-516	23 23	16	12.12		円形	0			
	P11	SP-517	42 38	18	12.18		隅丸方形	0			
	P12	SP-494	30 28	14	12.11		円形	0			
	P13	SP-528	42 38	20	12.16		円形	7	12.36		柱を囲むように、柱と柱穴との隙間に擬板が差し込まれている
	P14	SP-521	39 [34]	20	12.14		椭円形	1	12.18		SP-522と重複
	P15	SP-522	36 [24]	14	12.20		椭円形	1	12.32		SP-521と重複
	P16	SP-520	48 34	12	12.26		隅丸方形	1	12.32		
	P17	SP-523	50 50	22	12.10		円形	1	12.21		
SP-16	P1	SP-601	53 38	29	11.90		椭円形	0			
SP-21	P1	SP-668	34 30	14	12.04		円形	1	12.12	720	
	P2	SP-726	35 31	13	12.11		円形	1	12.13	742	SD-7に切られる
	P3	SP-725	45 34	24	12.05		椭円形	1	12.09		SP-530と切り合う
	P4	SP-475	36 32	12	12.15		隅丸方形	1	12.18		
	P5	SP-84	36 35	25	12.11		円形	0			SD-7上にある
	P6	SP-83	49 46	20	12.17		円形	1	12.22		
	P7	SP-340	28 26	19	12.33		円形	0			
	P8	SP-58	33 26	6	12.26		円形	0			
	P9	SP-470	20 19	21	12.06		円形	0			
	P10	SP-471	40 32	15	12.12		隅丸方形	0			
	P11	SP-663	80 58	8	12.16		隅丸方形	1	12.20		SP-662と重複
	P12	SP-662	41 40	19	12.06		隅丸方形	0			SP-663と重複 SP-664と切り合う

第14表 柱穴一覧表(5)

建物番号	掲載番号	横機筋番号	規格(cm)			底部標高(m)	平面形状	基礎			備考
			長軸	短軸	深さ			枚数	上部標高(m)	掲載番号	
SB-21	P13	SP-664	36	21	14	12.14	楕丸長方形	0			SP-662と切り合う
	P14	SP-530	48	38	22	12.11	楕円形	0			SP-725と切り合う
	P15	SP-472	20	19	14	12.16	円形	0			
	P16	SP-473	18	18	10	12.20	円形	0			
	P17	SP-474	20	20	15	12.15	円形	0			
	P18	SP-667	61	41	12	12.16	楕丸長方形	1	12.19		
	P19	SP-476	53	40	21	12.06	楕丸長方形	1	12.12		
	P21	SP-418	66	62	40	12.10	円形	2	12.21		
	P22	SP-352	80	63	21	12.34	楕丸長方形	0			SP-703と切り合う
SB-28	P23	SP-254	65	65	34	12.24	円形	0			
	P24	SP-705	48	44	16	12.14	円形	1	12.18	721	SP-352と切り合う
	P25	SP-637	40	[34]	11	12.24	楕円形	0			SP-638と切り合う
	P26	SP-639	104	86	24	11.94	楕丸長方形	0			SP-648,638と切り合う
	P27	SP-648	64	44	18	12.19	楕円形	1	12.22		SP-639,638と切り合う
	P28	SP-628	50	34	12	12.11	楕円形	1	12.22		
	P29	SP-634	48	38	18	11.96	楕丸長方形	0			
	P30	SP-460	46	42	20	12.28	方形	1	12.29		
	P31	SP-468	76	58	26	12.02	楕丸長方形	2	12.06	744	
SB-29	P32	SP-467	58	46	17	12.10	楕円形	2	12.18		
	P33	SP-741	48	48	24	12.06	円形	0			
	P34	SP-691	70	50	12	12.06	楕円形	1	12.18		
	P35	SP-682	52	[36]	5	12.26	楕円形	0			SP-681と切り合う
	P36	SP-710	46	35	20	12.19	楕円形	1	12.23		SP-695,696と切り合う
	P37	SP-695	41	30	20	12.15	楕円形	1	12.17		SP-696,710と切り合う
	P38	SP-689	32	30	22	12.02	円形	0			
	P39	SP-699	109	68	14	12.14	楕丸長方形	0			SP-699内にある
	P40	SP-692	24	22	11	12.02	円形	0			
SB-30	P41	SP-702	44	40	16	12.12	円形	0			
	P42	SP-708	56	42	36	11.90	楕円形	3	11.96		
	P43	SP-721	48	41	26	11.82	円形	1	11.84	746	
	P44	SP-701	47	40	30	11.80	楕円形	1	11.90	739,740	
	P45	SP-717	52	48	30	11.78	円形	2	11.88		
	P46	SP-718	60	46	20	11.82	楕円形	3	11.86	710,732	
	P47	SP-733	42	42	16	12.00	円形	1	12.10		
	P48	SP-735	90	74	30	11.82	楕円形	2	11.88	758	
	P49	SP-734	102	82	16	11.92	楕丸長方形	1	11.94		
SB-31	P50	SP-732	80	57	16	11.90	楕円形	1	11.98		
	P51	SP-728	78	46	36	11.78	楕円形	2	11.90	748,757	
	P52	SP-347	20	20	18	12.36	円形	0			
	P53	SP-423	33	24	35	12.15	楕円形	0			
	P54	SP-456	16	16	3	12.37	円形	0			
	P55	SP-457	22	20	7	12.38	円形	0			
	P56	SP-459	38	33	2	12.15	楕円形	0			
	P57	SP-684	70	48	14	12.00	楕丸長方形	0			
	P58	SP-733	42	42	16	12.00	円形	1	12.10		
SB-32	P59	SP-737	76	55	22	11.96	楕円形	1	11.96		
	P60	SP-89	56	48	36	12.10	楕丸長方形	2	12.14	725,753	柱根残存
	P61	SP-59	46	40	46	12.09	楕丸方形	2	12.12	754	柱根残存
	P62	SP-62	56	42	48	12.08	楕丸長方形	1	12.14	755	柱根残存 SP-441と切り合う
	P63	SP-70	54	42	66	12.10	楕丸長方形	3	12.18	752	柱根残存
	P64	SP-278	56	44	43	12.17	楕円形	1	12.20	723,756	柱根残存
	P65	SP-225	52	42	34	12.14	楕丸方形	1	12.18	724,751	柱根残存
	P66	SP-97	19	19	22	12.29	円形	0			
	P67	SP-60	23	23	7	12.40	円形	0			
SH-1	P68	SP-441	60	60	6	12.42	円形	0			SP-62と切り合う
	P69	SP-308	65	61	34	12.29	楕丸長方形	1	12.34		SP-309と切り合う
	P70	SP-269	65	49	38	12.22	楕丸長方形	1	12.24	708	
	P71	SP-149	50	43	33	12.28	楕丸長方形	1	12.35		
	P72	SP-73	65	54	40	12.28	楕丸長方形	1	12.33		柱根残存 SP-64と切り合う
	P73	SP-81	63	60	39	12.22	楕丸方形	1	12.27	747	
	P74	SP-188	55	48	34	12.24	楕丸方形	1	12.28		SP-187と切り合う
	P75	SP-187	[30]	53	52	12.30	楕丸長方形	0			SP-188と切り合う
	P76	SP-309	50	[34]	17	12.43	楕丸長方形	0			SP-308と切り合う
SH-2	P77	SP-150	48	43	29	12.34	楕円形	0			SP-544と切り合う
	P78	SP-82	31	26	25	12.36	楕円形	0			
	P79	SP-540	65	58	16	12.20	楕円形	0			
	P80	SP-547	54	[50]	24	12.14	楕円形	0			SP-548と切り合う

第14表 柱穴一覧表(6)

建物番号	掘削番号	規格(cm)			底部厚 長軸(高さ) 幅(高さ)(m)	平面形状	壁板			備考
		長軸	短軸	深さ			枚数	上部構高(m)	掘削番号	
SH-3	P1 SP-362	84	[40]	26	11.96	椭円形	2	12.12	685	SP-361と重複
	P2 SP-311	108	[70]	53	11.90	椭円形	2	12.04	668,678,693	SP-310と切り合う
	P3 SP-410	118	93	48	12.02	椭円形	5	12.20	674,675,676 681	SP-131と切り合う
	P4 SP-377	110	77	38	12.11	椭円形	4	12.18		SP-378と切り合う
	P5 SP-381	141	84	53	11.97	隅丸長方形	2	12.08	669,679	
	P6 SP-275	116	66	38	11.92	隅丸長方形	2	12.03	680,711	SP-315と切り合う
	P7 SP-361	[50]	[50]	不明	不明	椭円形	2	不明	683	SP-362と重複
	P8 SP-373	48	35	25	12.01	隅丸長方形	0			
	P9 SP-430	56	41	16	11.94	椭円形	3	12.00	722	SP-421,429と切り合う
	P10 SP-429	[48]	[16]	24	12.00	椭円形	0			SP-430と切り合う SP-421と重複
	P11 SP-421	[50]	[33]	28	11.96	椭円形	3	12.18		SP-430と切り合う SP-429と重複
	P12 SP-402	50	40	24	12.12	隅丸長方形	1	12.16		
	P13 SP-415	58	44	5	12.25	椭円形	0			
	P14 SP-131	78	47	14	12.34	隅丸長方形	1	12.36		SP-410と切り合う
	P15 SP-447	60	60	26	12.18	円形	2	12.32		
	P16 SP-378	49	28	36	12.12	隅丸長方形	0			SP-377と切り合う
	P17 SP-437	30	25	22	12.38	椭円形	0			
	P18 SP-398	54	36	46	12.22	隅丸長方形	1	12.04		
	P19 SP-315	[66]	[38]	16	12.12	椭円形	1	12.15		SP-275と切り合う
	P20 SP-413	[50]	44	44	11.84	椭円形	1	11.98		柱根残存 SP-412と重複
	P21 SP-572	47	44	16	11.98	円形	1	12.01	743	
	P22 SP-573	49	34	11	12.08	隅丸長方形	2	12.26		SP-310と切り合う
	P23 SP-588	34	34	22	12.00	円形	0			
	P24 SP-587	35	33	20	12.05	円形	0			
	P25 SP-571	43	40	22	12.06	円形	0			
SE-4	P1 SP-64	35	28	33	12.30	隅丸長方形	0			柱根残存 SP-73と切り合う
	P2 SP-546	48	32	8	12.30	椭円形	1	12.32		SP-510と切り合う
	P3 SP-649	44	28	10	12.18	椭円形	1	12.30		
	P4 SP-249	43	35	16	12.50	椭円形	0			
	P5 SP-233	50	44	21	12.33	椭円形	0			
	P6 SP-232	44	36	32	12.34	隅丸長方形	1	12.36		
	P7 SP-150	48	43	29	12.34	椭円形	0			SP-546と切り合う
	P8 SP-193	29	29	13	12.51	円形	0			
	P9 SP-262	36	34	15	12.51	円形	0			
	P10 SP-554	[38]	[28]	14	12.24	円形	0			SP-553と切り合う
	P11 SP-547	54	[50]	24	12.14	椭円形	0			SP-548と切り合う
SE-5	P1 SP-334	66	52	38	12.36	隅丸長方形	1	12.38		
	P2 SP-356	83	57	42	12.38	隅丸長方形	1	12.42		SP-212と切り合う 柱根残存
	P3 SP-455	68	62	30	12.41	隅丸方形容	2	12.44		
	P4 SP-294	42	[28]	36	12.37	椭円形	1	12.38		SP-292,293と重複
	P5 SP-265	81	[46]	28	12.26	隅丸長方形	1	12.30	736	SP-297と切り合う
	P6 SP-264	70	58	44	12.24	隅丸長方形	1	12.30		
	P7 SP-249	38	38	12	12.64	椭丸方形容	0			
	P8 SP-259	35	35	14	12.60	隅丸方形容	0			
	P9 SP-295	43	40	33	12.45	方形容	0			
	P10 SP-284	45	[33]	11	12.68	隅丸方形容	0			SP-158,283と切り合う
	P11 SP-158	[38]	[18]	18	12.61	隅丸長方形	0			SP-283,284と切り合う
	P12 SP-283	18	16	14	12.65	円形	0			SP-158,284と切り合う
	P13 SP-454	102	56	30	12.37	隅丸長方形	1	12.44		
	P14 SP-239	40	38	10	12.65	隅丸方形容	0			SP-238と切り合う
	P15 SP-238	41	41	14	12.61	隅丸方形容	0			SP-239と切り合う
	P16 SP-292	[50]	[30]	34	12.33	隅丸長方形	1	12.43		SP-293,294と重複
	P17 SP-297	48	[34]	14	12.38	椭円形	2	12.40		SP-265と切り合う
SE-6	P1 SP-542	78	70	22	12.17	円形	2	12.28	716	
	P2 SP-548	66	[50]	40	11.98	椭円形	3	12.14	664,697,709	SP-547と切り合う
	P3 SP-553	76	48	20	12.19	隅丸長方形	3	12.26	691	SP-554と切り合う
	P4 SP-556	76	74	10	12.24	円形	2	12.30	728	
	P5 SP-67	84	60	59	12.12	椭円形	1	12.18	698	
	P6 SP-75	66	40	50	12.12	方形容	2	12.26		
	P7 SP-82	31	26	25	12.36	椭円形	0			
	P8 SP-180	48	43	29	12.34	椭円形	0			SP-546と切り合う
	P9 SP-193	29	29	13	12.51	円形	0			
	P10 SP-547	54	[50]	24	12.14	椭円形	0			SP-548と切り合う
	P11 SP-554	38	[28]	14	12.24	円形	0			SP-553と切り合う
SH-7	P1 SP-630	108	62	5	12.26	隅丸長方形	2	12.31		
	P2 SP-638	86	75	20	12.08	隅丸長方形	3	12.28	673,677,692	SP-637,639,648と切り合う

第14表 柱穴一覧表(7)

逐個 番号	掘削 番号	規格(cm)	底部厚 高さ(cm)	平面形状	端板		備考				
					枚数	上部標高(m)					
SH-7	P3	SP-681	112	90	15	13.20	丸九長方形	4	12.26	663	SP-682と切り合う
	P4	SP-696	94	72	13	12.12	丸九長方形	4	12.24		SP-693,710と切り合う
	P5	SP-690	87	66	10	12.06	丸九長方形	2	12.11		
	P6	SP-633	116	82	20	12.08	丸九長方形	3	12.20	737	
	P7	SP-632	96	84	14	12.04	円形	3	12.08	672	
	P8	SP-385	24	52	40	12.14	楕円形	3	12.20		
	P9	SP-418	66	52	40	12.19	円形	2	12.21		
	P10	SP-166	66	50	23	12.32	円形	0			
	P11	SP-634	48	38	18	11.98	丸九長方形	0			
	P12	SP-628	50	34	12	12.11	楕円形	1	12.22		
	P13	SP-539	104	86	24	11.96	丸九長方形	0			
	P14	SP-648	64	44	18	12.19	円形	1	12.22		SP-639,638と切り合う
	P15	SP-637	40	[34]	11	12.24	円形	0			SP-638と切り合う
	P16	SP-682	52	[35]	5	12.26	楕円形	0			SP-681と切り合う
	P17	SP-741	48	48	24	12.06	円形	0			
	P18	SP-710	46	35	20	12.19	楕円形	1	12.23		SP-695,696と切り合う
	P19	SP-695	41	30	20	12.15	楕円形	1	12.17		SP-696,710と切り合う
	P20	SP-691	70	50	12	12.06	楕円形	1	12.18		
SH-8	P1	SP-635	116	[76]	28	11.96	丸九長方形	2	12.04		SP-636と重複
	P2	SP-541	112	80	41	11.83	丸九長方形	3	11.92	699,700	SP-640,642と重複
	P3	SP-680	86	86	20	11.92	円形	3	12.00	670	
	P4	SP-583	110	84	28	11.89	丸九長方形	0	11.98	666	
	P5	SP-677	92	64	43	11.82	楕円形	6	11.90	701,702	SP-676,675と切り合う
	P6	SP-646	[94]	83	30	11.93	丸九長方形	3	12.00	665	SP-643,644,645と切り合う SP-671と重複
	P7	SP-406	18	18	11	12.27	円形	0			
	P8	SP-406	14	14	25	12.21	円形	0			
	P9	SP-473	33	24	35	12.15	楕円形	0			
	P10	SP-347	20	20	18	12.36	円形	0			
	P11	SP-318	28	28	21	12.36	円形	0			
	P12	SP-319	25	23	29	12.14	円形	0			
	P13	SP-520	30	25	43	12.10	円形	0			
	P14	SP-478	14	14	35	12.15	円形	0			
	P15	SP-636	85	[43]	25	12.00	丸九長方形	1	12.04		SP-635と重複
	P16	SP-640	158	[22]	不明	不明	丸九長方形	0			SP-641,642と重複
	P17	SP-642	60	[16]	不明	不明	円形	0			SP-640,641と重複
	P18	SP-622	60	50	17	12.08	楕円形	0			
	P19	SP-679	48	48	22	12.06	円形	0			
	P20	SP-621	52	46	22	12.02	円形	0			
	P21	SP-684	70	48	14	12.00	丸九長方形	0			
	P22	SP-615	62	57	13	12.12	丸九長方形	0			
	P23	SP-676	152	42	13	12.13	丸九長方形	0			SP-677と切り合う SP-678と重複
	P24	SP-678	62	[55]	16	12.10	円形	0			SP-677と切り合う SP-676と重複
	P25	SP-612	44	30	14	12.10	丸九長方形	0			
	P26	SP-612	40	38	12	12.12	円形	0			
	P27	SP-614	50	43	23	12.03	円形	0			
	P28	SP-671	44	[22]	21	12.09	丸九長方形	0			SP-646と重複
	P29	SP-643	140	[23]	7	12.15	楕円形	0			SP-644,645と重複 SP-646と切り合う
	P30	SP-645	70	52	25	11.99	丸九長方形	1	12.00		SP-643,644と重複 SP-646と切り合う
	P31	SP-644	66	[24]	12	12.12	丸九長方形	0			SP-643,645と重複 SP-646と切り合う
	P32	SP-647	50	48	26	11.97	円形	0			
SH-9	P1	SP-529	53	53	9	12.20	丸九長方形	2	12.34		
	P2	SP-543	68	38	10	12.29	楕円形	1	12.31		
	P3	SP-545	53	41	8	12.30	丸九長方形	0			
	P4	SP-63	43	40	24	12.44	丸九長方形	1	12.46		柱根残存
	P5	SP-66	58	40	31	12.32	楕円形	1	12.40		SP-75内にある
	P6	SP-186	106	74	36	12.26	楕円形	1	12.28		
	P7	SP-186	60	48	29	12.34	楕円形	0			
	P8	SP-187	[30]	53	32	12.30	丸九長方形	0			SP-188と切り合う
	P9	SP-82	31	26	28	12.36	楕円形	0			
	P10	SP-180	48	43	29	12.34	楕円形	0			SP-646と切り合う
	P11	SP-71	25	23	19	12.44	円形	0			
	P12	SP-540	55	58	15	12.20	楕円形	0			
SH-10	P1	SP-266	62	52	32	12.36	丸九長方形	1	12.40		
	P2	SP-293	44	[40]	38	12.32	丸九長方形	2	12.46		SP-292,294と重複
	P3	SP-290	80	66	32	12.34	丸九長方形	1	12.41	686	
	P4	SP-329	[102]	72	22	12.47	丸九長方形	1	12.53		

第14表 柱穴一覧表(8)

建物番号 番号	柱番号 通構番号	規格(cm) 長幅(幅) 案寸(高さ)(m)	底盤 平面形状	壁板			備考
				枚数	上部厚さ(m)	掲載番号	
SH-10	P5 SP-212	91 [56] 23 12.49	隅丸長方形	2	12.50	687,696	SP-356と切り合う
	P6 SP-226	64 56 23 12.47	隅丸長方形	1	12.50		
	P7 SP-292	150 [30] 34 12.33	隅丸長方形	1	12.43		SP-253,294と重複
	P8 SP-297	48 [34] 14 12.38	隅円形	2	12.40		SP-265と切り合う
	P9 SP-295	43 40 33 12.45	方形	0			
	P10 SP-454	102 56 36 12.37	隅丸長方形	1	12.44		
	P11 SP-238	41 41 14 12.61	隅丸長方形	0			SP-239と切り合う
	P12 SP-239	40 38 10 12.65	隅丸長方形	0			SP-238と切り合う
	P13 SP-239	40 38 10 12.65	隅丸長方形	0			SP-237と切り合う
	P14 SP-239	40 38 10 12.65	隅丸長方形	0			SP-238と切り合う
	P15 SP-239	40 38 10 12.65	隅丸長方形	0			SP-237と切り合う
	P16 SP-239	40 38 10 12.65	隅丸長方形	0			SP-238と切り合う
SH-11	P1 SP-508	48 36 8 12.19	隅丸長方形	1	12.22		
	P2 SP-497	52 42 8 12.19	隅丸長方形	1	12.24		
	P3 SP-489	50 32 10 12.14	隅丸長方形	1	12.14		
	P4 SP-519	34 30 16 12.16	円形	1	12.20		
	P5 SP-202	65 67 51 12.12	隅丸長方形	1	12.16		
	P6 SP-383	58 63 44 12.03	円形	1	12.08		
	P7 SP-427	50 50 30 12.21	円形	1	12.23		SP-397と切り合う
	P8 SP-397	44 44 33 12.14	円形	2	12.20		SP-427と切り合う
	P9 SP-507	39 [38] 13 12.16	円形	0			SP-508と切り合う
	P10 SP-505	30 25 7 12.19	隅丸長方形	1	12.21		SP-504と切り合う
	P11 SP-504	40 32 12 12.15	隅丸長方形	1	12.20		SP-505と切り合う
	P12 SP-487	30 30 12 12.14	隅丸長方形	1	12.22		
	P13 SP-488	45 30 20 12.08	隅丸長方形	0			
	P14 SP-490	68 28 6 12.20	隅丸長方形	1	12.21		
	P15 SP-516	23 23 16 12.12	円形	0			
	P16 SP-503	50 38 21 12.06	隅丸長方形	0			
	P17 SP-502	37 21 24 12.04	隅円形	1	12.12		
SH-12	P1 SP-53	60 48 30 12.04	隅円形	2	12.12		
	P2 SP-376	46 36 26 12.10	隅丸長方形	1	12.14		
	P3 SP-396	61 43 28 12.02	隅円形	2	12.08		SP-192と切り合う
	P4 SP-69	66 49 44 11.92	隅円形	3	12.08	729	
	P5 SP-365	83 70 36 12.08	隅丸長方形	1	12.11		
	P6 SP-127	58 53 12 12.30	隅丸長方形	0			
	P7 SP-125	68 44 12 12.32	隅丸長方形	0			
	P8 SP-124	35 30 9 12.33	隅円形	0			
	P9 SP-140	38 33 11 12.31	隅円形	0			
	P10 SP-142	38 33 6 12.32	隅丸長方形	0			
	P11 SP-123	54 54 14 12.26	円形	1	12.23		
	P12 SP-451	58 60 30 12.06	隅丸長方形	2	12.10		
	P13 SP-126	46 45 14 12.22	円形	0			
	P14 SP-392	76 71 38 12.09	万形	2	12.02		SP-396と切り合う
	P15 SP-369	63 48 36 11.98	隅円形	1	12.04	662	
	P16 SP-416	38 31 6 12.18	隅円形	0			
	P17 SP-358	48 32 12 12.18	隅円形	0			
SH-13	P18 SP-583	50 50 11 12.09	円形	0			
	P19 SP-582	37 35 17 12.04	隅丸長方形	0			
	P20 SP-569	32 30 11 12.09	円形	0			
	P21 SP-576	32 18 20 12.20	隅丸長方形	0			
	P22 SP-577	44 44 9 12.10	円形	0			
	P23 SP-651	43 [27] 16 12.08	隅円形	1	12.16		SP-583と重複
	P24 SP-583	34 40 18 12.04	隅丸長方形	1	12.12	682	SP-651と重複
	P25 SP-584	32 30 31 11.93	隅丸長方形	0			
	P26 SP-675	46 43 30 11.97	隅円形	1	12.04		
	P27 SP-310	87 72 33 12.12	隅丸長方形	2	12.20		
	P28 SP-313	66 53 28 12.20	円形	2	12.26		
	P29 SP-312	73 60 36 12.24	隅丸長方形	2	12.28		
	P30 SP-314	63 50 26 12.12	隅円形	2	12.20		
	P31 SP-387	79 46 15 12.14	隅円形	2	12.16		SP-393と切り合う
	P32 SP-408	63 58 22 12.06	隅丸長方形	1	12.10		
	P33 SP-402	50 40 24 12.12	隅丸長方形	1	12.16		
	P34 SP-415	58 44 5 12.25	隅円形	0			
	P35 SP-398	54 38 46 12.22	隅丸長方形	1	12.04		
	P36 SP-573	49 34 11 12.08	隅丸長方形	2	12.26		SP-210と切り合う
	P37 SP-571	43 40 22 12.06	円形	0			

第2節 遺物

(1) 弥生土器・土師器

本調査地点において出土した弥生土器・土師器の総量はコンテナにして約100箱ほどである。今回図示したのは、このうちの279点である。

今回の調査では、遺構から出土した土器は量的に少なく、出土状態が良好な一括資料も恵まれなかつた。このうち遺構から出土した土器は339から407までの68点で、掲載した土器の大部分は包含層から出土したものである。なお遺構出土の土器について、出土状態について記述のないものは覆土資料である。

また、掲載した土器の観察事項に関しては、第15表に観察表としてまとめたので、ここでは特徴的な事柄についてのみ記述したい。

(ア) 積穴住居跡出土遺物

S B - 1 339と340は壺である。349は頸部が屈曲し、口縁部は直線的に開く。胴部は球形を呈すると考えられる。340はドーナツ状に凹む底部であるが、底面の接地面には木葉痕が残る。341から343は壺である。頸部の屈曲が緩やかな341はこの遺構の時期より若干時期の遅るものと考えられる。342と343は頸部がくの字状に屈曲する。344から346はいずれも在地の土器と同じ胎土を持つS字状口縁壺である。このうち344と346は床面直上から出土した。344と345はC類の口縁部と考えられる（赤塚1986・1990）。346はS字状口縁壺の胴下半部から脚部である。347と348は高杯である。347は杯部下位の縁が不明瞭である。349と350は器台である。351は指頭により調整された底部、352は皿形、353は塊形の手づくね土器である。

S B - 2 354はS字状口縁壺の肩部である。356と357は折り返し口縁壺である。358は壺の底部である。359は浅い塊形の高杯である。

S B - 3 360はA類のS字状口縁壺（赤塚1986・1990）に非常に類似した口縁を持つ壺である。砂粒の多く混じった淡い色調の胎土を持つ。361は壺部の深い高杯である。

S B - 4 355は小型の鉢である。全体的に粗雑な造りである。362は遺構検出面から出土した台付壺である。363は平底壺である。

S B - 5 図化したのは364の高杯1点のみである。直線的に大きく開く杯部を持つ。

S B - 7 図化したのは365の壺の口縁部1点のみである。廻間II式並行期の中でも古い形態である可能性が高い。

S B - 8 366と367は折り返し口縁壺である。366は粗く、淡い色調の胎土を持つことから遠江地方からの搬入品である可能性が高い。368は平底壺の底部である。

S B - 9 369は壺の肩部である。肩部に断面三角形の粘土帯を巡らし、さらにヘラで刻みを施した特異な形態を呈する。370は砂粒の多く混じった淡い色調の胎土を持つC類占段階のS字状口縁壺である。

S B - 1 0 371は所謂大鄭式期（渡井1994）、すなわち廻間II式並行期に出現する大型の複合口縁壺である。372は壺の底部である。

S B - 1 2 図化したのは373の鉢1点のみである。胴部は凹凸が多く、全体的に粗雑な形状である。

S B - 1 6 図化したのは380のS字状口縁壺の肩部破片1点のみである。砂粒の多く混じった淡い色調の胎土を持つ。

S B - 2 0 374は平底壺である。口径や脚部径に比して底部の小さな個体である。375は器台の脚部である。381は小型の平底壺である。非常に丁寧に作られた個体である。

S B - 2 9 376は小型で、無花果形の胴部形態を呈する壺の胸部である。377は壺の口縁部である。とともに廻間II式並行期の中でも古い形態である可能性が高い。

S B - 3 0 378は在地の胎土を持つB類のS字状口縁壺である（赤塚1986・1990）が、外面口縁部下段の押し引き刺突紋など、前段階の様相が残る個体である。379は壺である。頸部はくの字状に屈曲し、外面口縁部は横ナデを施すが、内面口縁部は横ハケが残る。

S B - 3 1 384は折り返し口縁を持つ壺である。口縁部が大きく外反し、口唇部に面取りを施している。385は口縁部が内湾する壺である。386は胸部の張りが小さく、口縁部の開きも小さい壺である。

S B - 3 2 382は折り返し口縁を持つ壺である。387は台付壺の脚台部である。

(イ) 溝出土遺物

S D - 2 388は二重口縁壺である。形態は421とほぼ同じであると考えられる。389と390・392～397は壺である。391は鉢である。

S D - 4 398と399は壺である。ともに頸部はくの字状に屈曲する。

S D - 7 400と401は壺である。ともに頸部の屈曲が非常にゆるやかで、400は外面のみ、401は外内面とも口縁部に横ナデを施す。

S F - 5 図化したのは402の壺の底部1点のみである。

(ウ) 柱穴出土遺物

S P - 2 8 6 (第42図 P 3) 403は低脚の台付壺の脚部である。

S P - 4 1 1 (第47図 P 28) 404はC類古段階のS字状口縁壺である。砂粒の多く混じった淡い色調の胎土を持つ。

S P - 4 6 0 405はA類のS字状口縁壺に非常に類似した口縁を持つ壺である。搬入品で、内面胴部にハケが多く残る。

S P - 4 5 7 (第55図 P 8) 406は壺である。頸部が太く、その位置も高い個体である。

S P - 6 8 0 (第62図 P 3) 407は鉢である。体部はゆるやかに開き、口唇部は強い面取りを施している。

S P - 7 1 5 383は壺の口縁部破片である。外面の強いナデにより口縁部を折り返し口縁状に作り出している。

(エ) 土器集中部出土遺物

上器集中部1 408は壺の、409は平底壺の底部である。410は台付壺の脚台部である。411は高壺の壺部である。壺部下位の形態などから見て、庄内式期（米田1994）のものである可能性が高い。

上器集中部2 412は大型の壺の底部である。413は高壺の脚部である。低脚で、裾部が大きく広がる個体である。414から417は壺である。414と416は頸部が屈曲し、口縁部は横ナデを施している。415は折り返し口縁を持つ台付壺で、富士宮市月の輪上遺跡溝状遺構20から出土したものとほぼ同形態である（富士宮市教委1981）。417は頸部がくの字状に屈曲し、口縁部が内湾気味に開き、胴部形態は球形を呈する。

土器集中部3 418から425は壺である。418は単純口縁、419は折り返し口縁を持つが、ともに頸部が伸び、口縁部が外反して開く個体である。420は頸部に屈曲が見られ、口縁部は短く、直立気味に開く。胴部は球形を呈するものと考えられる。421は二重口縁壺である。形態は388とほぼ同じであると考えられ、口縁下部にごく浅い刻みを施している。422と423は複合口縁壺である。422は棒状浮紋を貼り付け、口唇部内面に粘土帯の見られない個体、423は口唇部内面に断面四角形の粘土帯を貼り付ける個体である

が、ともに大型で、口縁下部内面は直線的である。424と425は胴部である。424は廻間II式並行期より前の時期のものである可能性が高い。425は球形を呈する。

426から455は甕である。426から430は、全体にハケによる調整を施し、頸部の屈曲が比較的ゆるやかで、口唇部の面取りが顕著な台付甕である。このうち429と430は口縁部のハケの上から横ナデを施した後、口唇部下端にヘラによる刻みを入れている。また、430は底部に粘土の充填が見られる。431は大型の台付甕である。432から439は口縁部の横ナデが顕著な個体である。440から442は台付甕の脚台部である。443から445は小型の甕である。形態は432から439に準じる。446から448は小型の平底甕である。448の胴下半部のハケ目は畿内系のタタキ甕を模倣したものと考えられる。タタキ甕を模倣したハケ目調整の甕は、主に房総半島で多くの出土例が認められるが、これらとは若干異なる可能性が高い（西川1991）。449は砂粒の多く混じた淡い色調の胎土を持つB類のS字状口縁甕であるが、外面口縁部下段の押し引き刺突紋など、前段階の様相が残る個体である。450は在地の胎土を持つC類のS字状口縁甕である。451は在地の胎土を持つS字状口縁甕の脚台部である。452は小型の台付甕である。胴部外面をヘラケズリ調整した薄手の個体で、在地のS字状口縁甕を模倣して成形したものと考えられる（加納1990）。453から455は畿内系のタタキ甕である。453は庄内甕（米田1994）を模倣した在地産の甕、454は尖底の庄内甕の底部、455はV様式系の甕である（大阪府文化財調査研究センター・市村慎太郎氏のご教示による）。

456から464は高杯である。456はハの字状に開く脚部である。457は下位にぶい稜を有し、直線的に開く杯部と、ハの字状に開く脚部を持つ。458は廻間II式並行期相当のものと考えられる。459と460は浅い塊形の杯部を持ち、脚裾部は外反して開く。461から463の脚裾部が大きく外反する脚部で廻間II式並行期相当のものと考えられる。464は杯部が深く直線的で、脚部は柱状で裾部がハの字状に開く。前掲の3点と同じく廻間II式並行期相当のものと考えられる。同形態の土器は長泉町下長澤上野遺跡や菊川町三沢西原遺跡などで出土例が認められる。（長泉町教委1979・菊川町教委1984）。

465から470は器台である。器受部の形態は、口唇部付近が屈曲し外反して開く465と466、大きく開く467と468、鼓形を呈する469に大別できる。

471から479は鉢である。体部の形態は、直線的に大きく開く471から474、開きの小さい476と477、深い体部を持つ475と479、塊形を呈する478の4形態に大別できる。このうち471と472は片口を持つ。

480は壺である。481は壺の底部である。482は非常に丁寧に作られた把手状の土器であるが、その用途については不明である。483と484は小型の甕、485は小型の鉢で、ともに指頭による調整を施している。486は弥生時代中期後葉の白岩様式の壺の胸部である（中嶋1993）。487と488は複合口縁壺の口縁部破片である。487が内面に断面四角形の粘土帯を貼り付け、外面に棒状浮紋を模した沈線を施す大廓式期のものであるのにに対し、488は捺りがそれほど細かくない羽状繩紋の残る古い様相を呈している。489は在地系の壺の肩部、490と491は畿内第V様式系のタタキ甕の肩部である。492から494は弥生時代中期後葉に出現する低脚の台付甕の脚台部である。495は小型の壺の底部である。496はミニチュアの台付甕の脚台部である。非常に丁寧な作りで、小型精製土器と同じ胎土を使用している。467から500は手づくね土器で、497から499は鉢、500は平底甕である。

(オ) 包含層出土遺物

501から523と525は壺である。このうち、頸部の屈曲がゆるやかな個体と推定されるものは501から516、521から523、525である。中でも501と507は胴部の張りが小さく、やや長胴氣味であることから弥生時代後期中葉のものと考えられ、その他の個体は弥生時代後期末から古墳時代初頭のものと考えられる。頸部が屈曲し、胴部が球形を呈する古墳時代前期のものと考えられる個体は517から520である。503、504、506、507、509から511、516は口縁部内面または頸部から肩部に施紋しているが、直線紋や波状紋、刺突

紋など櫛を用いた紋様が多いのが当遺跡の特徴である。

524、526、529から575、599、611、612は壺である。526と529は平底壺の底部である。529は前掲の448と同様、胴下部のハケ目は畿内系のタタキ壺を模倣したものと考えられる。532と536は全体にハケ目による調整を施し、頸部がゆるやかに屈曲し、口唇部を面取りする個体で、台付壺と推定される。533から535、537と538は口縁部に横ナデを施した台付壺である。539から545、599は球形の胴部を持ち、頸部がくの字状に屈曲し、口縁部に横ナデを施す台付壺である。546から548は古墳時代中期の平底壺と推定される。549と550は在地のC類のS字状口縁壺、551は砂粒の多く混じった淡い色調の胎土を持つB類のS字状口縁壺である。552は砂粒の多く混じた淡い色調の胎土を持つS字状口縁壺の脚台部である。553から555は畿内系の壺である。553と555はV様式系壺、554は庄内壺と考えられるが、いずれも在地の模倣品である。556から574、611、612は台付壺の脚台部である。このうち575は畿内の影響を受け、外面にタタキを施した台付壺の脚部で、相模や房総半島での出土例が認められる。(西川1991)。611は弥生時代中期末の低脚の台付壺の脚台部である。

527、528、593、594、597、598は壠である。このうち527、528、593、598は平底である。これらの形態は、球形の胴部を持ち、口縁部が大きく開く528、胴部から口縁部が鉢状に大きく開く594と598、口縁部が直立気味に開く593と597に大別される。

576から587は高壺である。576は壺部下位が広く、体部が直立気味に開く廻間II式並行期の個体である。577、578、583は壺部下位ににぶい棱を持ち、直線的に大きく開く形態、579と580は浅い塊型の形態を呈する。581は口縁部が大きく伸び、壺部下位に断面三角形の突起を持つ高壺である。582と584から586はハの字状に開く脚部、587は裾部が大きく外反する脚部である。

588から591は器台である。器受部の形態はバリエーションに富むが、591は東海系の器台である(赤塚1990・1993)。

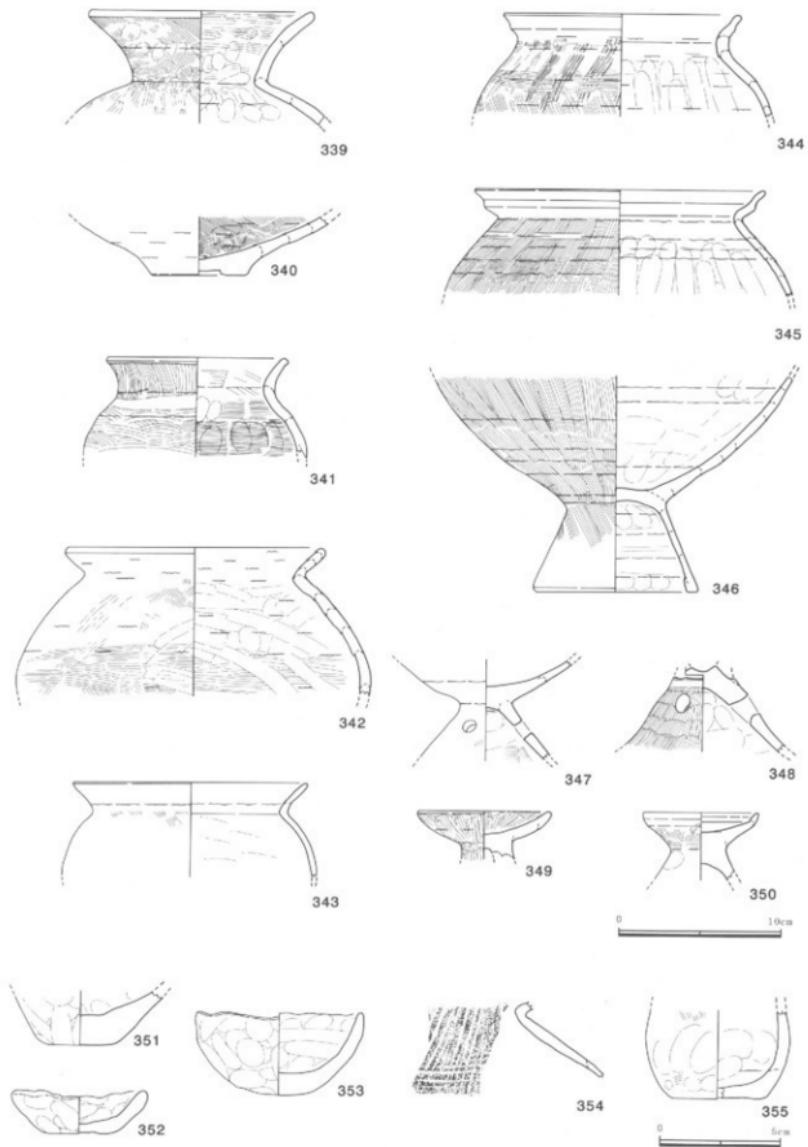
592、595、596は鉢である。592は清水市長崎遺跡などで出土例が認められる把手の付いた鉢である(静埋文研1995)。595は体部が直立気味に開き、596は深く、開きの小さい体部を持つ。

600は蓋のつまみ、601は鬼高式の壺である。602と603は小型の平底壺である。604は折り返し口縁壺、605と606は複合口縁壺の口縁部破片である。607から609はいずれも櫛による施紋を施した壺の胴部破片である。610は格子状の線刻が施された壺の胴部破片である。613は小型の鉢、614は壠である。615から618は高壺または器台の脚部である。619から621は小型壺の底部、622は手づくね土器である。

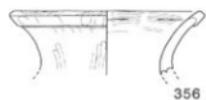
(か) 小結

ここに掲載した遺物の時期は弥生時代中期末から古墳時代後期にまで及ぶが、B類のS字状口縁壺を伴う廻間II式並行期のものと、C類のS字状口縁壺を伴う廻間III式前半並行期のものがその大半を占める。

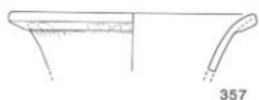
廻間II式並行期に相当すると考えられる豎穴住居跡はSB-3、SB-7、SB-8、SB-10、SB-12、SB-29、SB-30、SB-31であり、廻間III式前半並行期に相当すると考えられる豎穴住居跡は、床面でC類のS字状口縁壺が出土したSB-2をはじめ、SB-5、SB-9、SB-20である。これは平面プランから見た豎穴住居跡の変遷とほぼ一致する。溝状構造は、頸部がゆるやかに屈曲する台付壺が主体であるSD-2とSD-7が土器集中部3に、頸部がくの字状に屈曲する壺が主体であるSD-4が廻間III式前半並行期に相当すると考えられる。土器集中部は、庄内式系の高壺411が出土した土器集中部1、折り返し口縁を持つ台付壺415などが出土した土器集中部2、大型の複合口縁壺や台付壺、畿内系のタタキ壺や脚裾部が大きく外反した高壺などが出土した土器集中部3と、いずれも廻間II式並行期に相当する。



第71図 弥生土器・土師器実測図 1



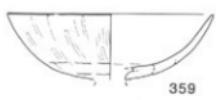
356



357



358



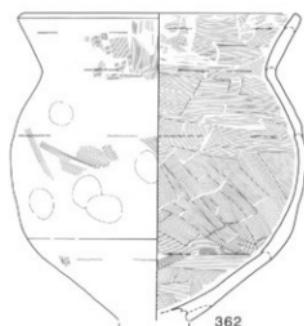
359



360



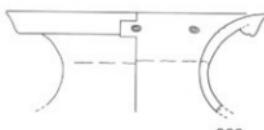
361



362



363



364



365



366



367



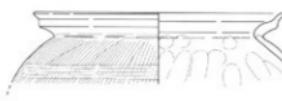
368



369



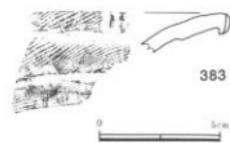
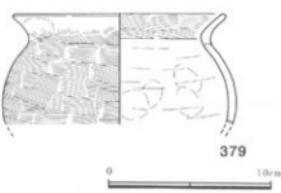
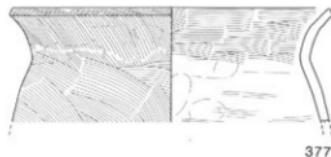
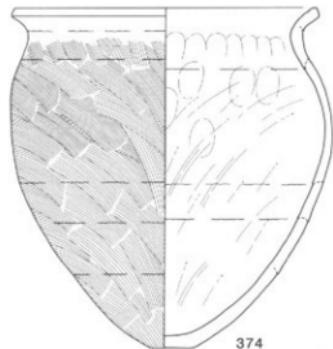
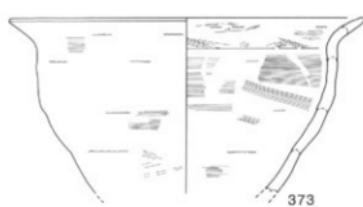
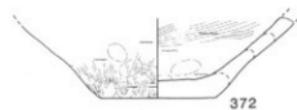
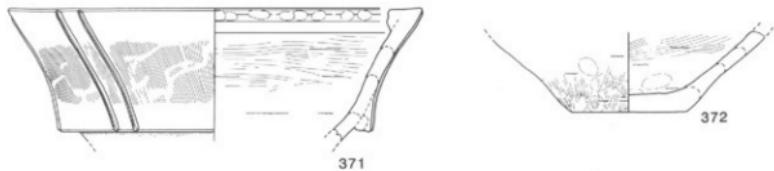
364



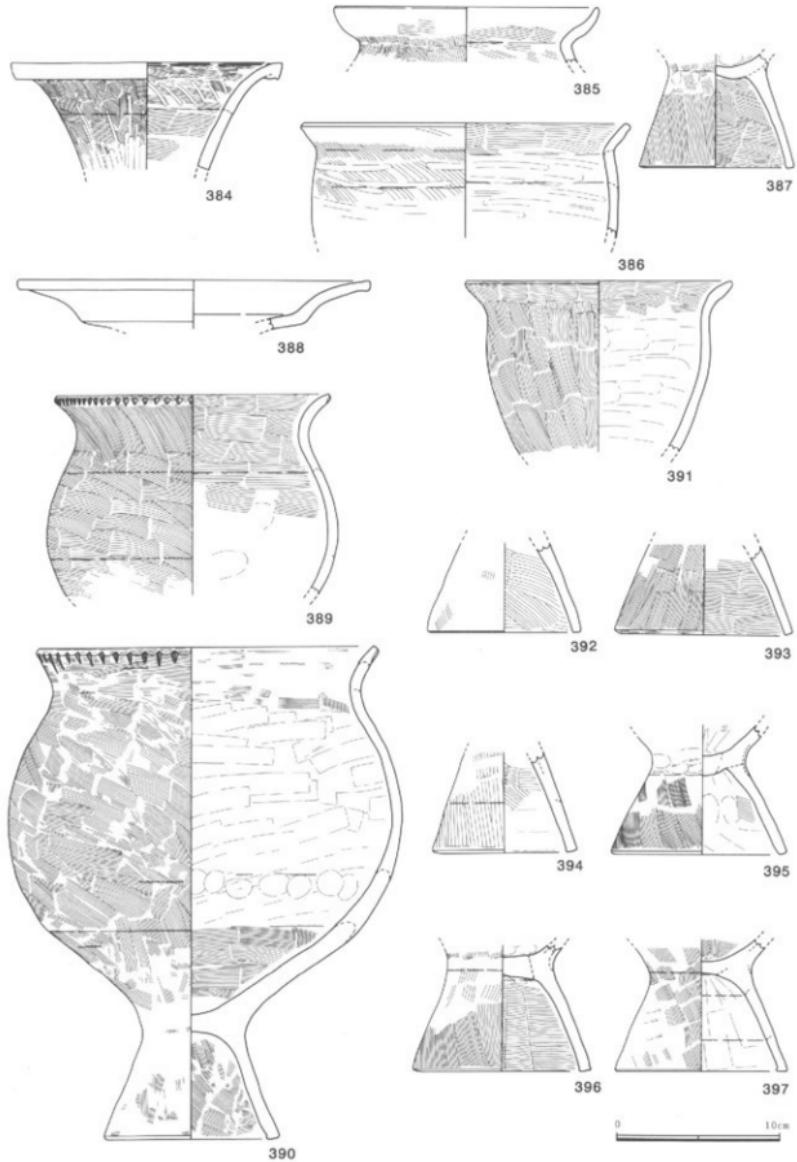
370

0 10cm

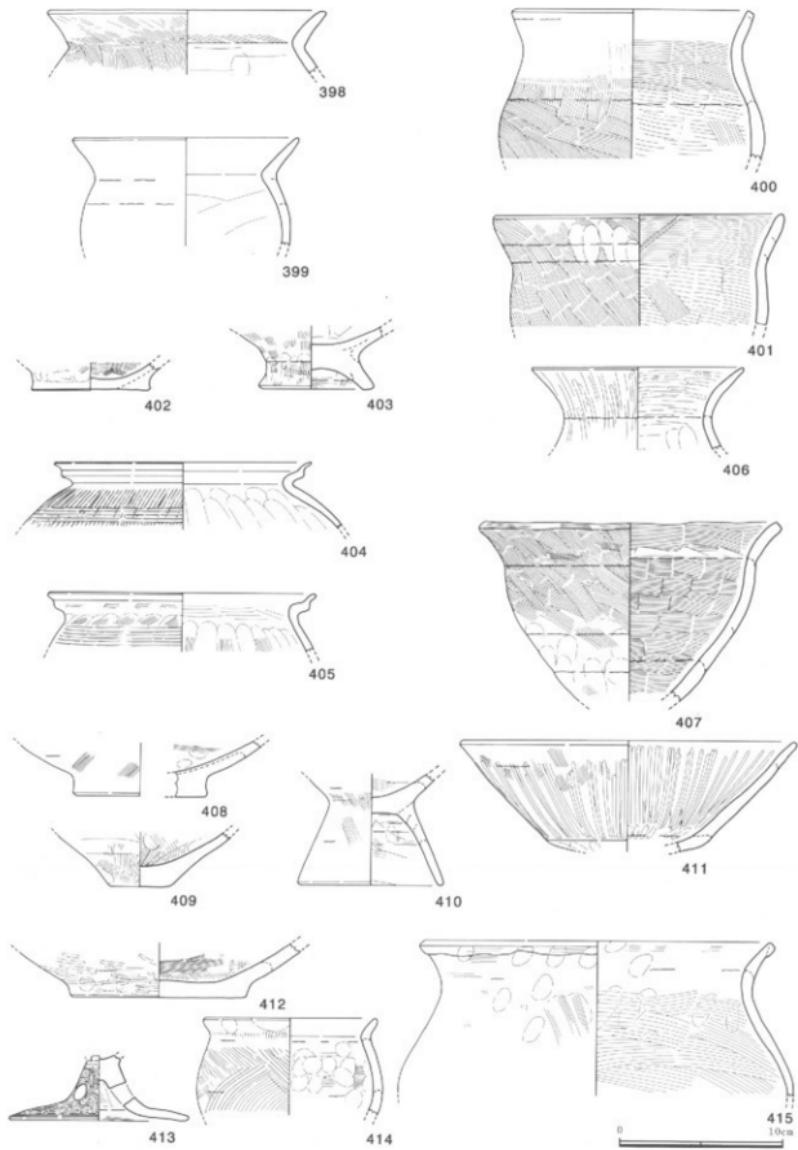
第72図 弥生土器・土師器実測図 2



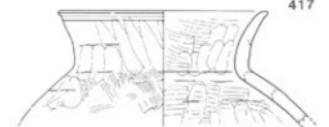
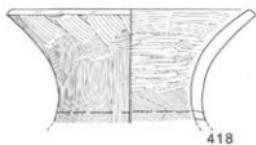
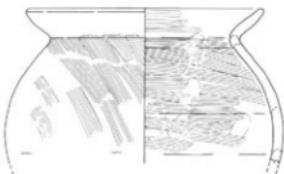
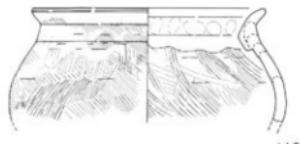
第73図 弥生土器・土師器実測図 3



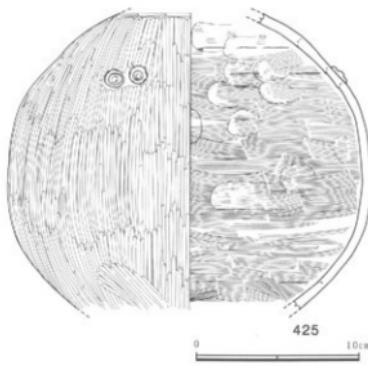
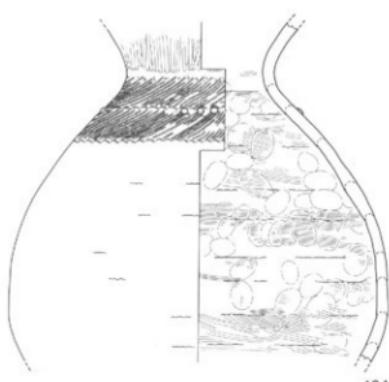
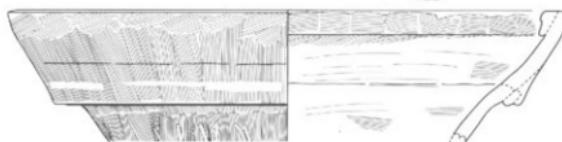
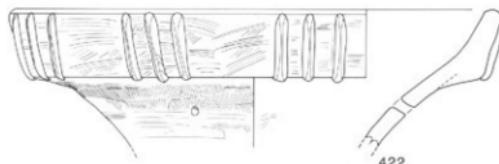
第74図 弥生土器・土師器実測図 4



第75図 弥生土器・土師器実測図 5

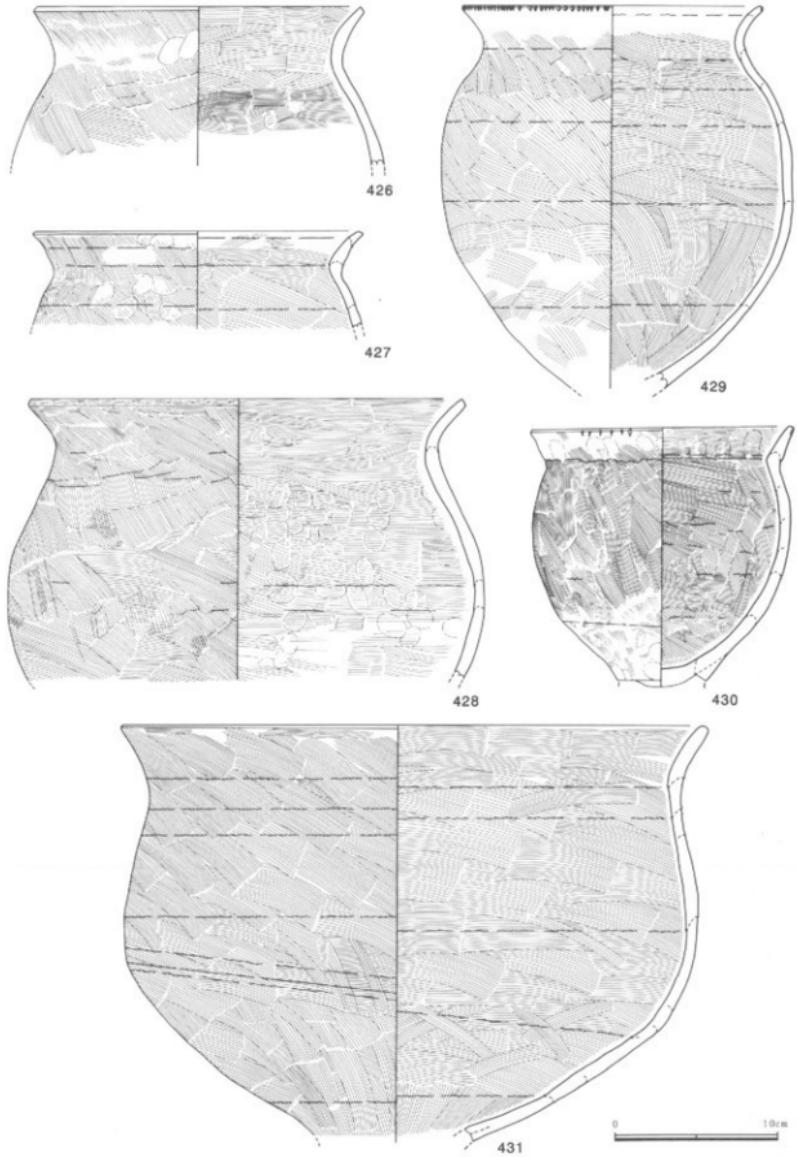


421

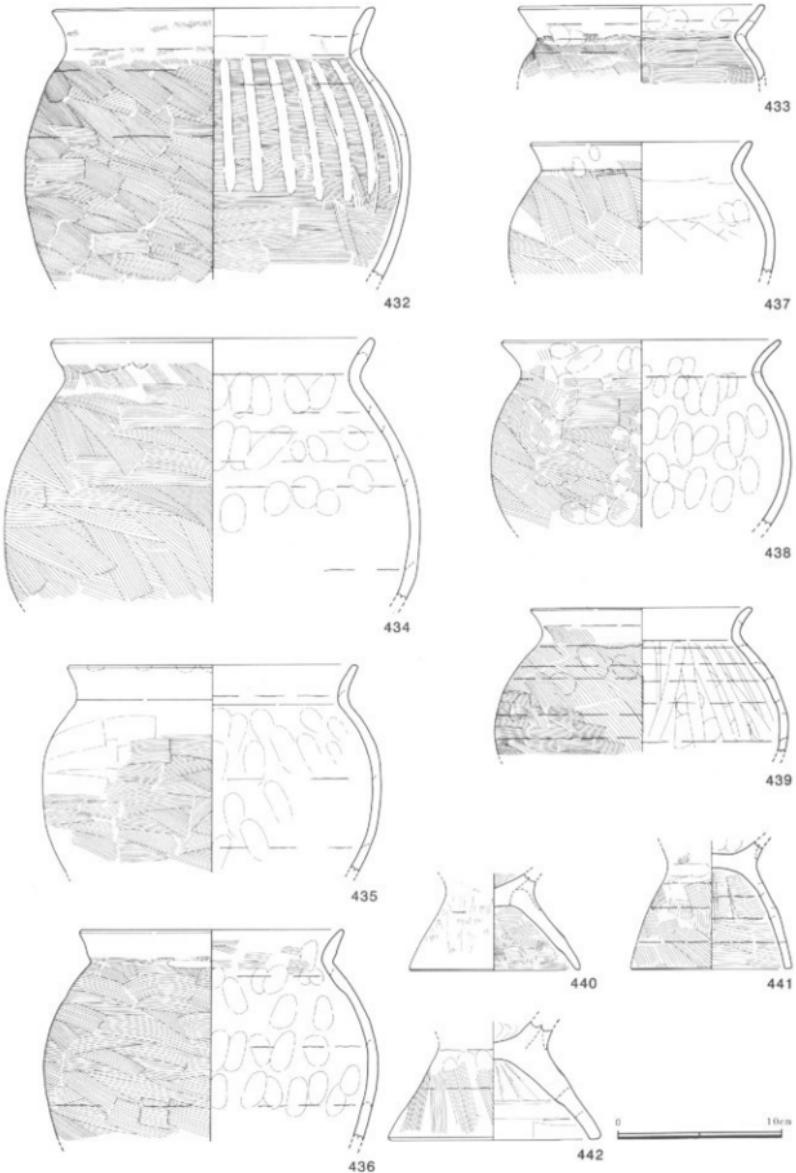


0 10mm

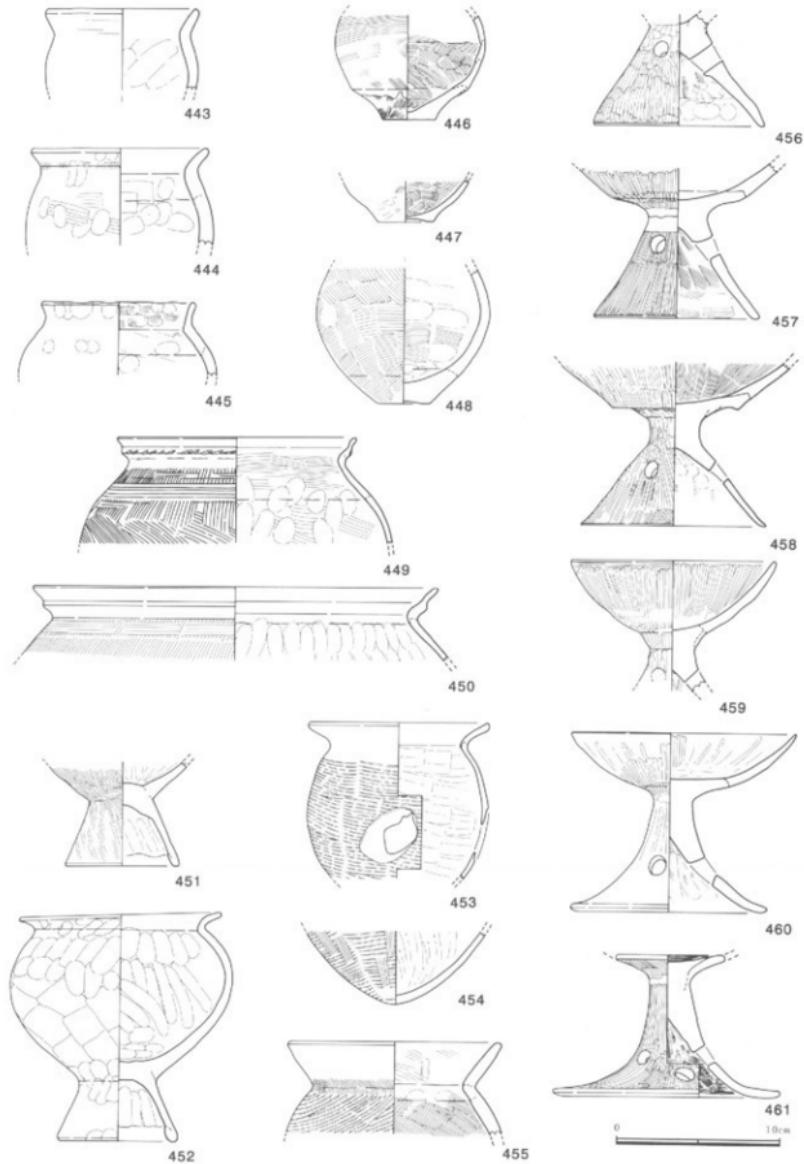
第76図 弥生土器・土器実測図 6



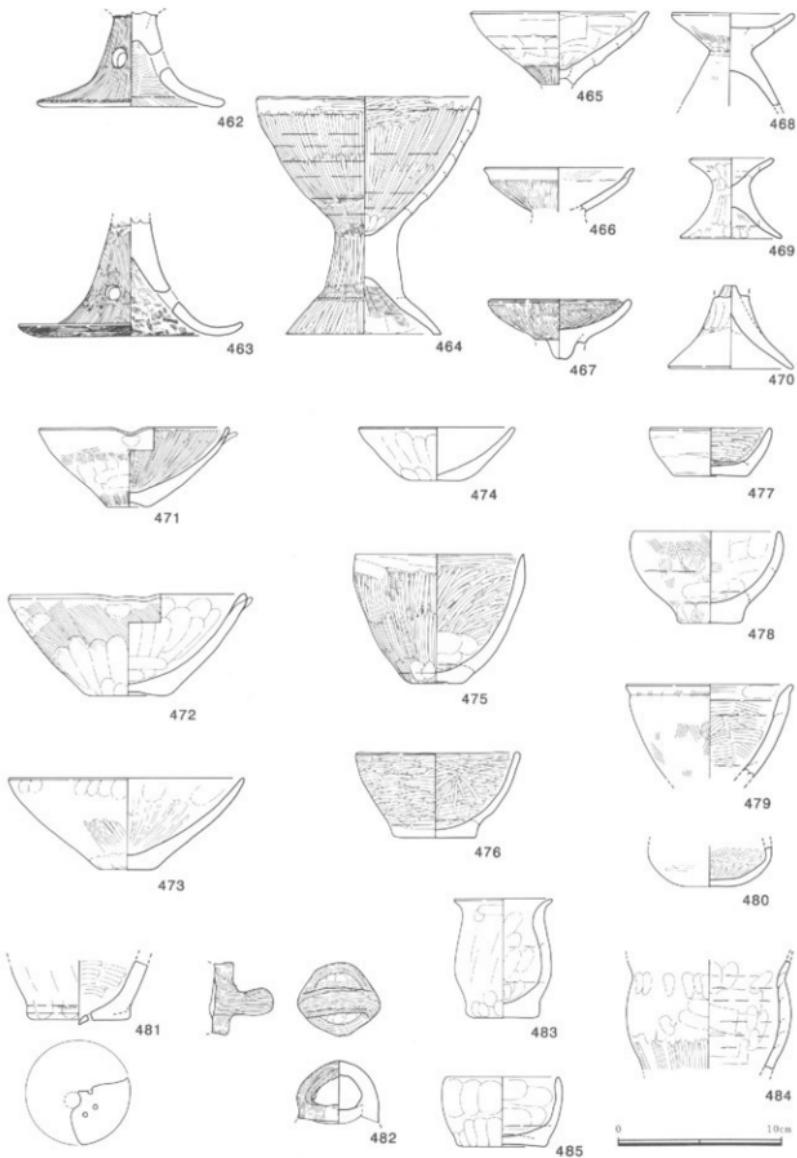
第77図 弥生土器・土器実測図 7



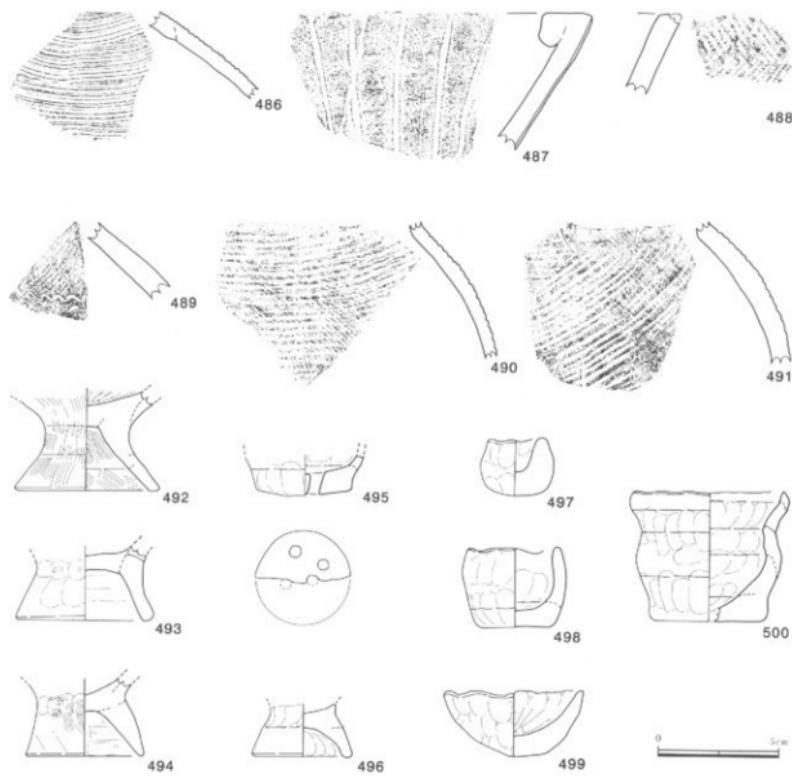
第78図 弥生土器・土師器実測図 8



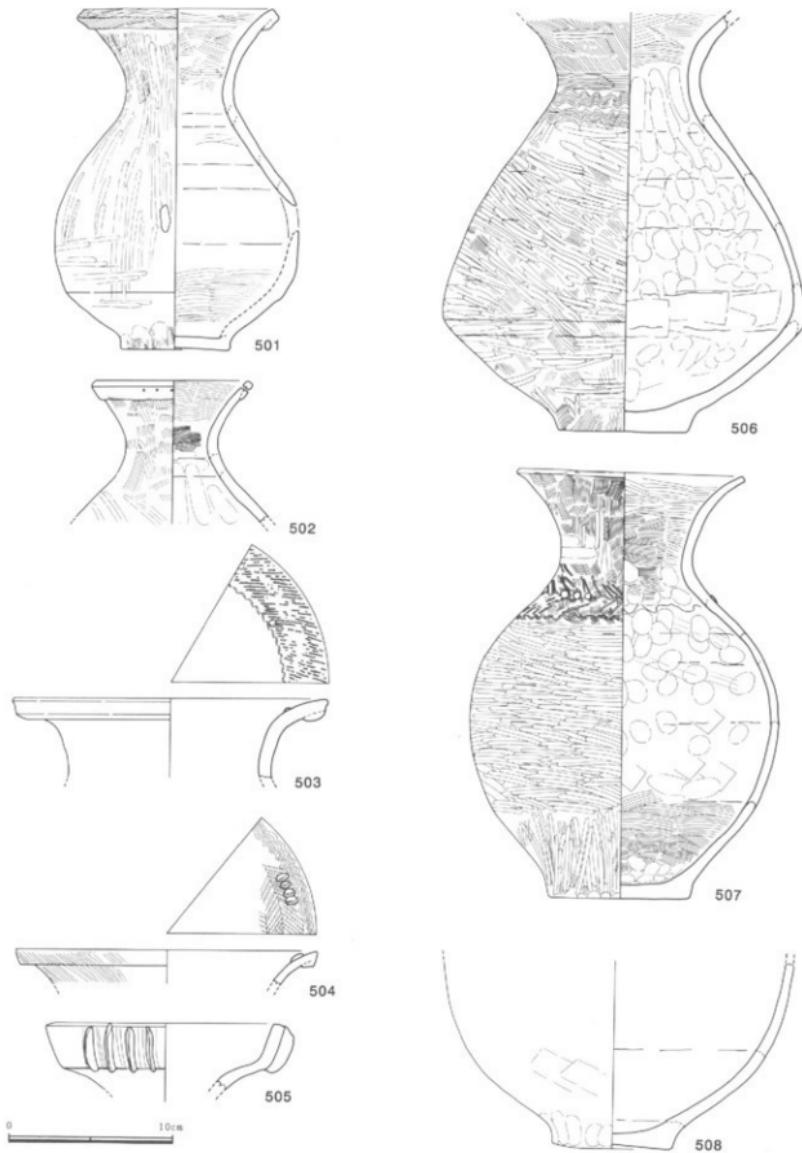
第79図 弥生土器・土師器実測図 9



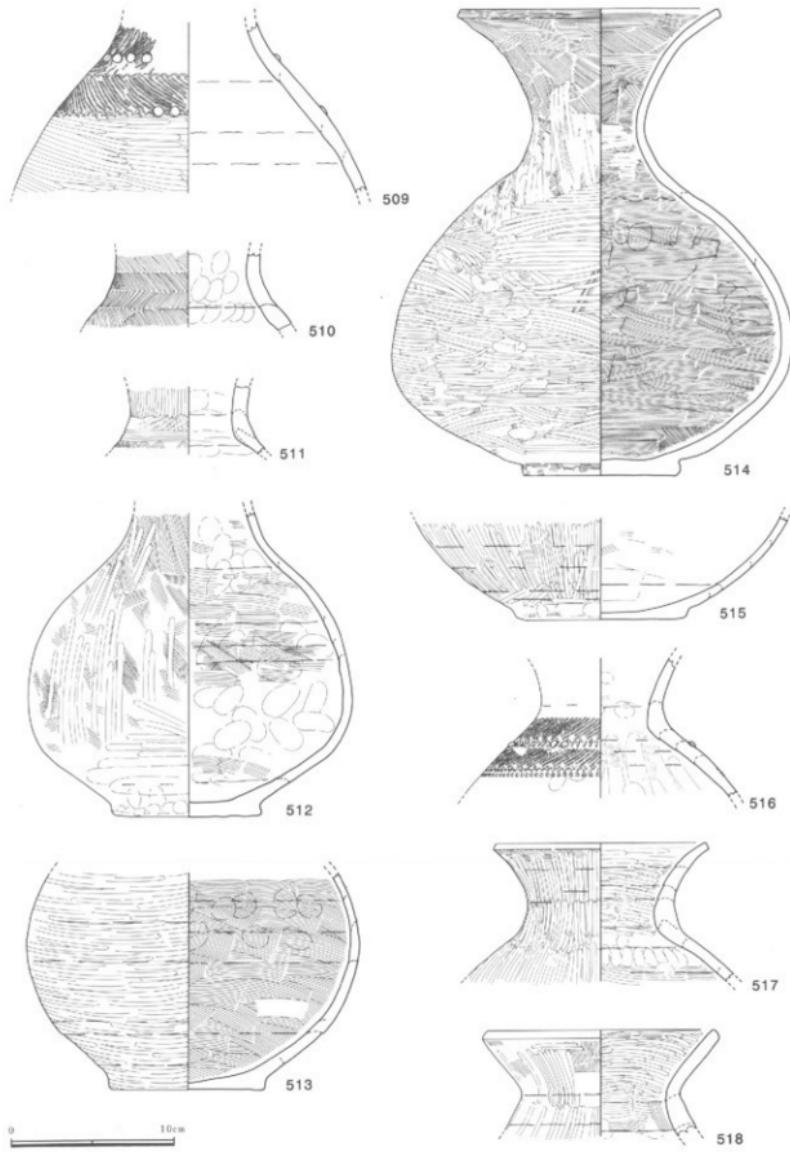
第80図 弥生土器・土師器実測図10



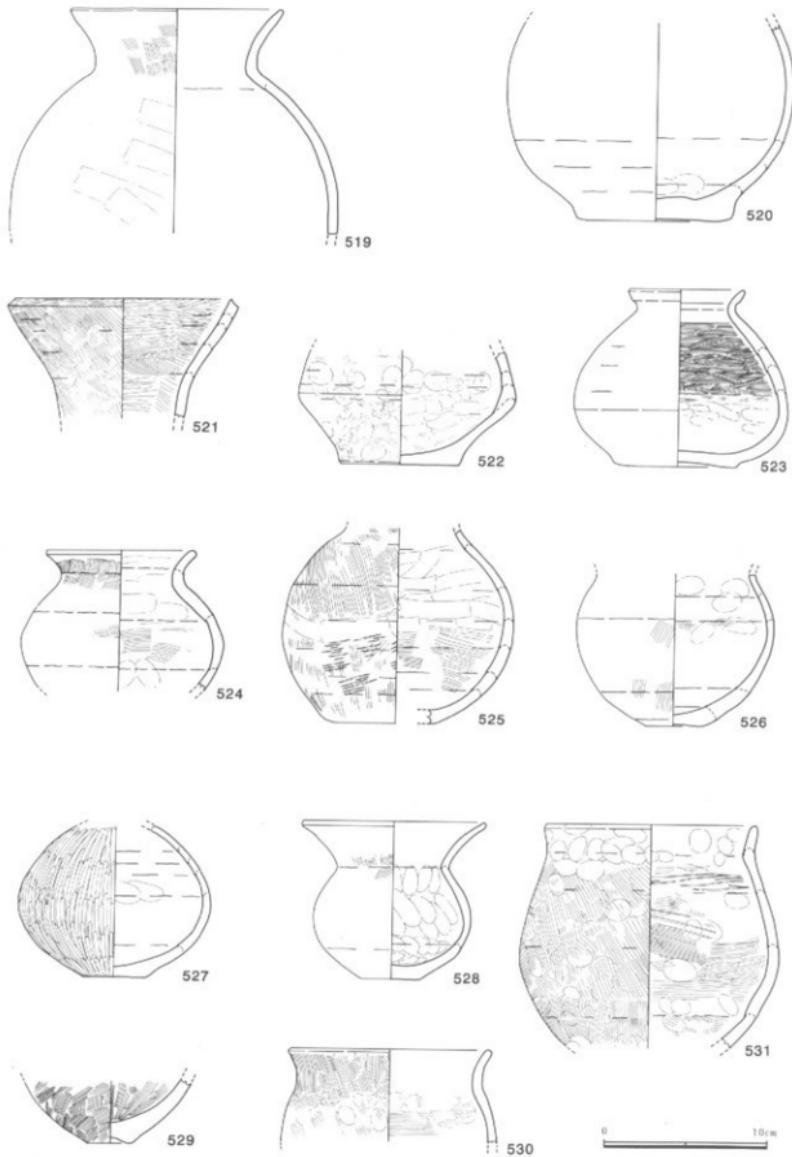
第81図 弥生土器・土師器実測図11



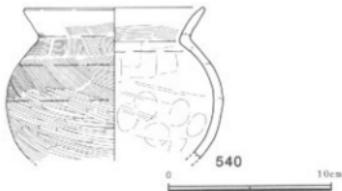
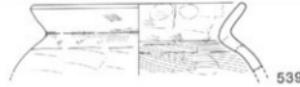
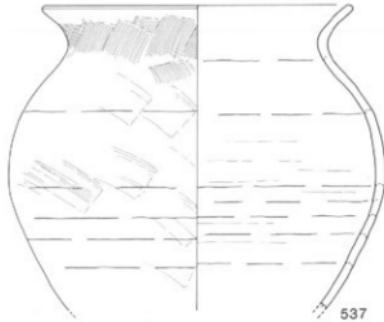
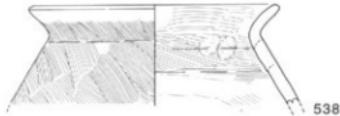
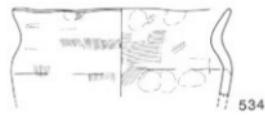
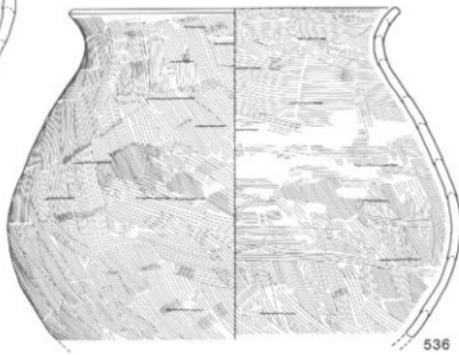
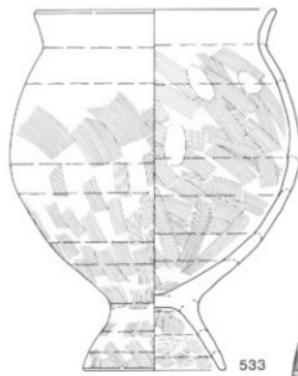
第82図 弥生土器・土篩器実測図12



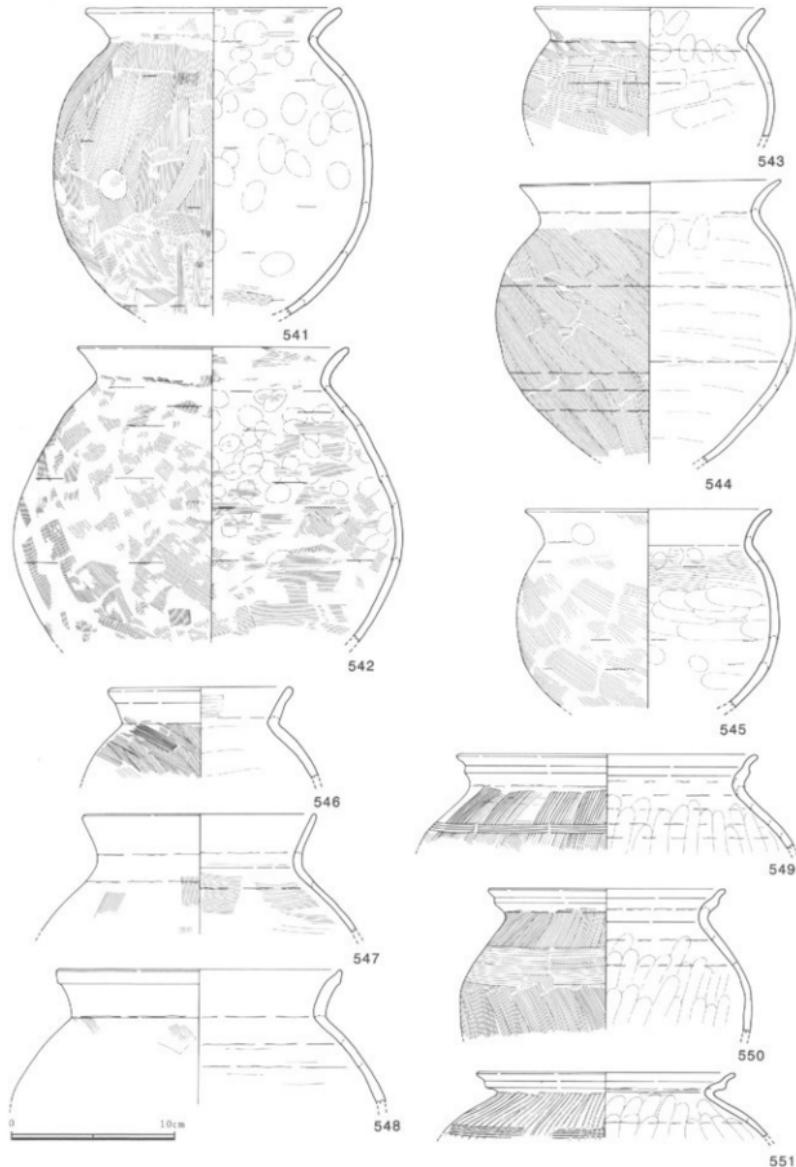
第83図 弥生土器・土師器実測図13



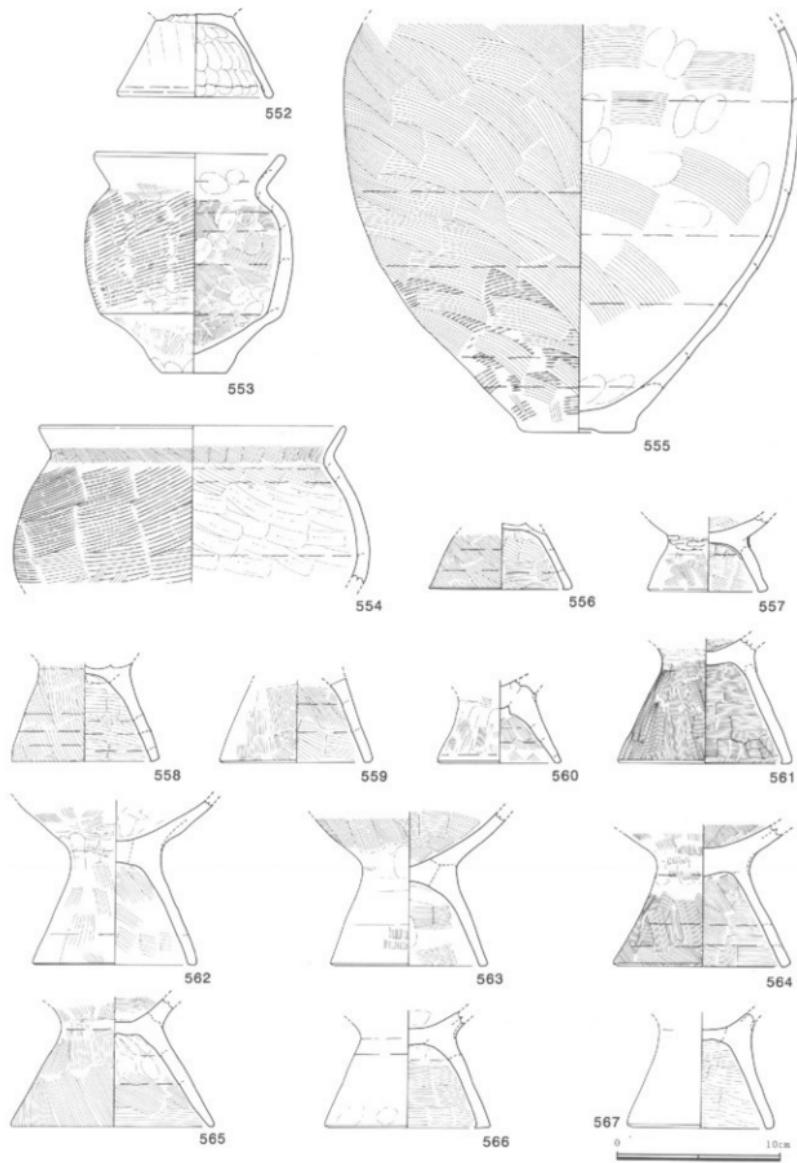
第84図 弥生土器・土師器実測図14



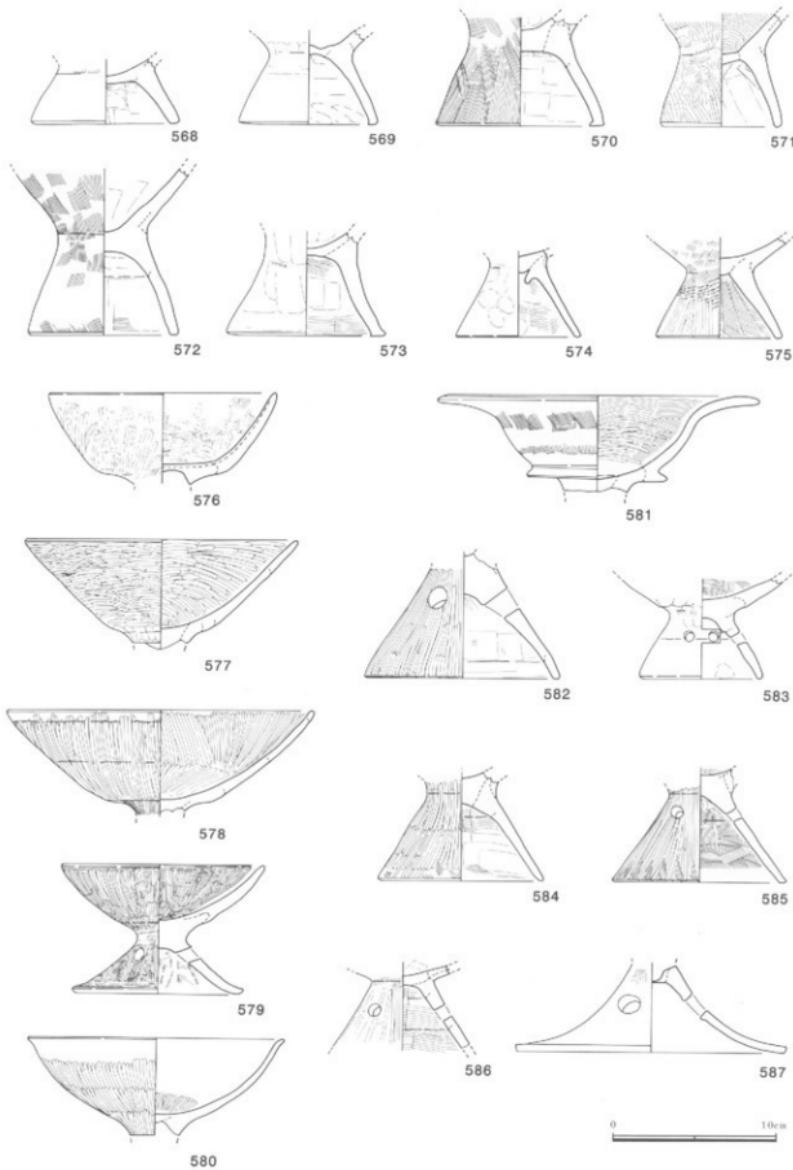
第85図 弥生土器・土師器実測図15



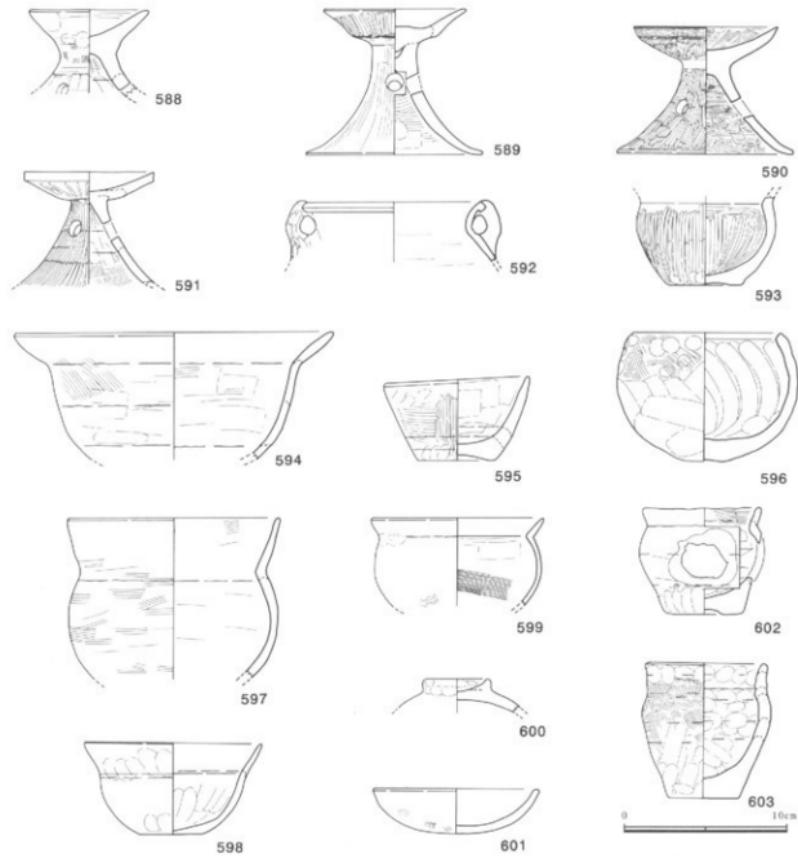
第86図 弥生土器・土師器実測図16



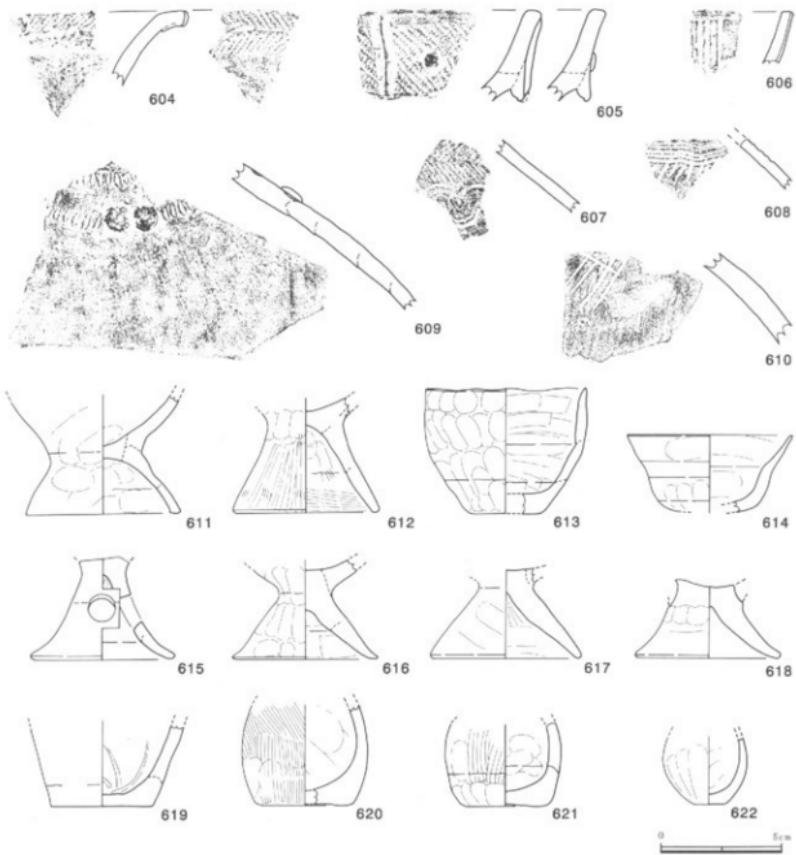
第87図 弥生土器・土師器実測図17



第88図 弥生土器・土師器実測図18



第89図 弥生土器・土師器実測図19



第90図 弥生土器・土師器実測図20

第15表 弥生土器。土師器観察表(1)

規格番号	遺物番号	GIRD 等級	種類	形態の特徴	柱法の特徴	①外面 ②内面	法基 (cm)	胎 土 色 焼 成	備 考
339 第71回 図版42	P-475e B-3 SB-1	直	縦部は直角、口縁部は斜度して窓く。 側部は壁状、口唇部には鋸く突取り。	口縫部堅版ハケ付、底ナメ。肩上部 堅版ハケ付。全体的に西国江東が残 る。①口縫部堅版ハケミタガ。肩上部 堅版ハケ付ナメ。	口縫部堅版ハケ付、底ナメ。肩上部 堅版ハケ付。全体的に西国江東が残 る。①口縫部堅版ハケミタガ。肩上部 堅版ハケ付ナメ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	17.0 17.0 9.8 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 岩 (石英・白色粒子 白色粒子・黑色粒子 黑石合 有) 普通 燒成 色調 7.5YR6/4 に近い-橙	口縫部1/2、腰上 部2/3焼成 存
340 第71回	P-476e B-3 SB-1	直	底部はドーナツ底。	口縫部が縦部に木彫り感が残る。地は摩擦 のため白泥。②吹抜状のハケ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	10.5 10.5 9.8 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 岩 (石英・赤色粒子合 有) 普通 燒成 色調 SYK6/6 棕	加士-底部2/3焼 成存	
341 第71回	P-491 B-3 SB-1	直	縦部には少くやかに窓し、口縁部は斜仄 で窓く。口唇部には鋸く突取り。	口縫部堅版ハケ。肩上部堅版ハケ。 縫部には窓ゲザ。①口縫部堅版ハケ 身ナメ。肩上部堅版ハケ付。縫部堅版 ハケ残る。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	10.5 10.5 9.2 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 普通 (石英・白色粒子 赤色粒子・黑石合有) 普通 燒成 色調 SYK6/6 棕	口縫部-肩上部 1/2焼成 存	
342 第71回	P-491 B-3 SB-1	直	縦部はくの字形に窓し、口縫部は直縫部。 縫部には窓ゲザ。口縫部は窓く突取り。 縦部はなまめ。肩上部は窓く突取り。 側部は壁状。	口縫部窓ゲザ。縫部は窓ゲザ。縫部には 窓ゲザ。①口縫部窓ゲザ。縫部は窓 ゲザ。②口縫部窓ゲザ。縫部は窓 ゲザ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	15.0 15.0 9.2 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 普通 (石英・黑色粒子 赤色粒子・黑石合有) 普通 燒成 色調 10YR6/2 底黄褐	口縫部1/4、腰部 1/8焼成 存	
343 第71回	P-469 B-3 SB-1	直	縦部はくの字形に窓し、口縫部は直縫部。 縫部には窓ゲザ。側部は斜仄。全体的に 側部は窓く。	口縫部窓ゲザ。堅版ハケだが堅版のため 窓ゲザ。②口縫部窓ゲザ。堅版は窓 ゲザ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	14.5 14.5 9.8 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 普通 (石英・白色粒子 白色粒子・黑石合有) 普通 燒成 色調 7.5YR6/3 に近い-褐	口縫部1/2、腰上 部1/10焼成 存	
344 第71回 図版42	P-471e B-3 SB-1	直	S字型。口縫部の突出は小さく、直縫部の 底も無い。全体的に透感が薄い。	口縫部窓ゲザ。肩上部堅版窓ナメ。窓位ハ ケ付ナメ。堅版は窓位ハケ付。堅版は窓 位ハケ付ナメ。口縫部窓ゲザ。堅版は窓 位ハケ付ナメ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	14.7 14.7 9.8 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 岩 (石英・白色粒子 赤色粒子・合有) 普通 燒成 色調 SYR6/4 に近い-褐	口縫部口窓セラミ、 肩上部一部焼成 地	
345 第71回 図版42	P-468 B-3 SB-1	直	S字型。口縫部は大きく突出する。全体的に 窓ゲザ。	口縫部窓ゲザ。堅版ハケ。②口縫部窓ナメ。 堅版は窓ハケ付。堅版は窓位ハケ付。 堅版は窓位ハケ付ナメ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	10.5 10.5 9.8 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 普通 (石英・白色粒子 赤色粒子・黑石合有) 普通 燒成 色調 7.5YR5/4 に近い-褐	口縫部1/4、腰上 部1/8焼成 存	
346 第71回 図版42	P-468 B-3 SB-1	直	S字型の剖面・脚部。側部は底部から内側 側部に立ち上る。脚部側部はハサ字形に窓 めりに窓き、底部と内側に對り立す。	脚部は窓ハケ付。脚部上部堅版ハケ。脚部 は窓位ハケ付。脚部側部窓ゲザ。	脚部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	10.2 10.2 10.9 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 普通 (砾石・石英・白 色粒子・赤色粒子・黑石合有) 普通 燒成 色調 SYR6/4 に近い-褐	脚部1/4横焼、脚 部底完全	
347 第71回	P-469 B-3 SB-1	高环	縦部はくの字形に窓く。側部はハサ字形に窓 めりに窓き。	脚部は窓ハケ付。脚部上部堅版ハケ。脚部 は窓位ハケ付。脚部側部窓ゲザ。	脚部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	9.8 9.8 10.5 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 普通 (砾石・石英・白 色粒子・赤色粒子・黑石合有) 普通 燒成 色調 10YR5/2 に近い-褐	脚部底-脚中環 部1/2焼成 存	
348 第71回	P-476 B-3 SB-1	高环	縦部はくの字形に窓めりに窓き、側部はハ サ字形に窓がれ。	脚部は窓ハケ付。堅版は窓位ハケ付。脚部 は窓位ハケ付。脚部側部窓ゲザ。	脚部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	14.2 14.2 9.8 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 岩 (石英・赤色粒子 白色粒子・合有) 普通 燒成 色調 2.5YR5/3 に近い-褐	脚部1/3焼成 存	
349 第71回 図版42	P-771 B-3 SB-1	塔台	堅部は内側下のみに窓く、口縫部は底部 口縫部4つ入。	口縫部ハクシタギタガ。堅版は窓位ハ ケ付ナメ。②堅版は窓位ハケ付ナメ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	11.5 11.5 9.8 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 普通 (石英・白色粒子 白色粒子・合有) 普通 燒成 色調 2.5YR6/3 に近い-褐	山脚部には窓セラ ミ、腰上部1/2焼成 存	
350 第71回 図版42	P-489 B-3 SB-1	直	口縫部は直角的に大きく開き、口縫部は内 側に側板模を残して直縫部に立ち上る。	口縫部堅版ハケ。脚部底感のため不規 則ハクシタギタガ。堅ナメ。②堅版は窓 位ハケ付ナメ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	17.0 17.0 9.8 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 新削 (石英・白色粒子 白色粒子・合有) 普通 燒成 色調 7.5YR6/6 既燒成	口縫部1/2焼成 存	
351 第71回	P-480 B-3 SB-1	直	底部は小さく、側部は直縫的に立ち上るが 側部は直縫に開く。	口縫部は窓位ハケ付。脚部底感のため不規 則ハクシタギタガ。堅ナメ。②堅版は窓 位ハケ付ナメ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	17.0 17.0 9.8 3.8 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 岩 (石英・白色粒子 白色粒子・合有) 普通 燒成 色調 10YR7/4 に近い-黃棕	腰下部1/2焼成 存	
352 第71回	P-782 B-3 SB-1	直	手づくね上輪。底部は半ちにづくりだし。 体部は直縫に開く。	①堅版は窓位ハケ付。②堅版は窓位ハ ケ付ナメ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	5.5 5.5 4.8 3.8 5.5 5.5 5.5 5.5 5.5 5.5	加士 岩 (石英・白色粒子 白色粒子・合有) 普通 燒成 色調 2.5Y7/3 透青	口縫部-体部-底 部2/3焼成 存	
353 第71回 図版42	P-432 B-3 SB-1	鉢	手づくね上輪。底部は丸く立ち上がり、中位 に暴太腹を持つ。	口縫部は窓位ハケ付。脚部底感のため不規 則ハクシタギタガ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	6.8 6.8 5.5 3.8 6.8 6.8 6.8 6.8 6.8 6.8	加士 岩 (石英・白色粒子 白色粒子・合有) 普通 燒成 色調 10YR6/4 に近い-黃棕	口縫部-底部-腰 部-脚部1/2焼成 存	
354 第71回	P-1028 C-3 SB-2	直	S字型の有部。底部は窓く。	口縫部ハケ後、腰位ハケ。②堅版は窓 位ハケ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	11.5 11.5 9.8 5.0 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 普通 (石英・黑色粒子 黑色粒子・合有) 普通 燒成 色調 10YR7/2 に近い-黃棕	口縫部-脚部1/2 焼成存	
355 第71回 図版42	P-922 C-2 SB-4	鉢	小型の跡で、体部は丸く立ち上がり、中位 に暴太腹を持つ。	口縫部は窓位ハケ後、腰位ハケ。②堅版は窓 位ハケ。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	3.6 3.6 3.5 3.8 3.6 3.6 3.6 3.6 3.6 3.6	加士 普通 (石英・黑色粒子 黑色粒子・合有) 普通 燒成 色調 7.5YR7/3 透青	口縫部-脚部1/2 焼成存	
356 第72回	P-1029 C-3 SB-2	直	折り返し口縫部。縫部にゆるやかに屈曲し て窓く。口唇部は底取り。	口縫部堅版ハケ後、堅版ハクシタギタガ。 口縫部はゆるやかに反曲して窓く。口縫 部は底取り。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	11.5 11.5 9.8 5.0 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 普通 (石英・白色粒子 白色粒子・合有) 普通 燒成 色調 7.5YR7/4 に近い-褐	口縫部-脚部1/2 焼成存	
357 第72回	P-1000 C-3 SB-2	直	折り返し口縫部。口縫部はゆるやかに屈曲し て窓く。口唇部は底取り。	①折り返し部に指標底が残るが、底感 のため焼成不好。②堅ナメだが、底感 のかみ解剖不。	口縫部 底 高 基 厚 身 底 高 基 厚 身	15.0 15.0 9.8 3.6 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9 10.9	加士 普通 (石英・白色粒子 白色粒子・合有) 普通 燒成 色調 SYR6/4 に近い-褐	口縫部1/4焼成 存	

第15表 弥生土器・土師器観察表(2)

通観番号 標識番号 取扱番号	出土番号 GRID 地點	形態の特徴	技法の特徴	外観 ①外面 ②内面	法盤 (cm)	粘 土 或 成 分	備考
358 第72回 5572回	P-1029 C-3 SR-2	直腹江戸型。	小腹見ハタ。口不完全円のハケだが、裏 面のため詳細不明。	直径 (30) 高さ (30)	粘土・普通 (石英・白色粘土 ・白色粒子・白色粒子・黑色 ・黑色・褐色 色調 7.5YR 4/2 混入・褐色)	直部1/2残存	
359 第72回 5572回	P-1029 C-3 SR-2	耳形は内側にして聞く。口唇部はやや尖る。	直腹江戸型ハタミタガタ。底膨張のため前縁不 規則。亂刷に沿った底座が持続する。	直径 (32.7) 高さ (41)	粘土・普通 (石英・灰色粘土 ・白色粒子・白色粒子・白色 ・黑色・褐色 色調 5YR 6/6 明る褐色)	底部1/4残存	
360 第72回 5572回 5566回	P-1340 E-2 SR-2	S字彫り。口輪部の中央へ下向するS字彫りは 直面と直面はむすびで突出する。口唇部はや やく弧をもつ。	口輪部横溝ハタ。口輪部から横溝S字彫り。 斜め突起 (左一右)。斜上半円突起 (左一右)。 ノックハタ。横見ハタ。(口輪)乱刷模様。底 部見ハタ。	直径 (33.0) 高さ (33.1)	粘土・普通 (石英・玉髄砂 ・黑色古青) 底部・普通 色調 10YR 1/1 白灰	口輪部1/8残存	
361 第72回 5572回	P-803 E-3 SR-3	底盤は深く、内腹気味に聞く。口唇部はや やく弧をもつ。	口輪部横溝ハタ。口輪部横溝アズキ彫刻ア ラミタガ。口輪部横溝ハタ。底盤用アラ ミタガ。	直径 (34.0) 高さ (48.0)	粘土・普通 (石英・黑色粒子 ・白色粒子・白色粒子・白色 ・黑色・褐色 色調 SYW//6 程)	底部1/5残存	
362 第72回 5572回 5542回	P-1366 C-2 SR-4	直腹はくの字形に屈曲し、口輪部は外側を 聞く。口唇部は耳形で、下腹にいくほど 腰をつくる。	口輪部横溝ハタ。口輪部横溝アズキ彫刻ア ラミタガ。口輪部横溝ハタ。底盤用アラ ミタガ。	直径 (35.0) 高さ (48.0)	粘土・普通 (石英・黑色粒子 ・白色粒子・白色粒子・白色 ・黑色・褐色 色調 SYW//4 に混入・褐色)	直部1/3残存 底盤2/2	
363 第72回 5572回 5542回	P-1366 C-2 SR-4	直腹はくの字形に屈曲し、口輪部は外側を 聞く。口唇部は耳形で、下腹にいくほど 腰をつくる。底盤は耳形で、上腹にいくほど 腰をつくる。	口輪部横溝ハタ。口輪部横溝アズキ彫刻ア ラミタガ。口輪部横溝ハタ。底盤用アラ ミタガ。	直径 (35.4) 高さ (38.0)	粘土・普通 (石英・薄石含有 ・黑色古青) 底盤 (35.3) 色調 10YR 7/3 黒灰	直部2/3・直部 1/2残存底盤1/1 残存	
364 第72回 5572回	P-1466 C-2 SR-5	直腹は直腹形に大きく聞く。口唇部はや やく弧をもつ。	口輪部横溝ハタ。口輪部横溝アズキ彫 刻アラミタガ。口輪部横溝ハタ。	直径 (35.4) 高さ (44.0)	粘土・普通 (石英・白色粒子 ・白色古青) 底盤 (35.2) 色調 10YR 7/2 に混入・褐色	直部6/6・底盤1/8 残存	
365 第72回	P-1222 C-2 SR-7	直腹はゆるやかに傾き、口輪部はむずか く聞く。口唇部は耳形。	口輪部横溝ハタ。口輪部横溝アズキ彫 刻アラミタガ。	直径 (31.2) 高さ (36.0)	粘土・普通 (石英・白色粒子 ・黑色古青) 底盤 (35.0) 色調 10YR 6/3 に混入・褐色	直部1/6残存	
366 第72回	P-1008 D-4 SR-8	折り返し・口縁部。底盤はゆるやかに傾きし 。口輪部は大きくなりて聞く。直面は 底盤は折れ三脚形。口唇部を強く腰をくる。	直腹のため小窓。口輪部横溝アズキ彫 刻アラミタガ。底盤は折れ三脚形。	直径 (31.9) 高さ (36.1)	粘土・普通 (石英・淡灰泥灰 ・白色粒子・梅石含有) 底盤・普通 色調 10YR 6/3 淡灰泥灰	直部・底盤1/4 残存	
367 第72回	P-1129e C-4 SR-8	折り返し口縁部。底盤はくの字形に屈曲し 。口輪部は直角的聞く。口唇部は耳形で 腰をつくる。	直腹のため小窓。口輪部横溝アズキ彫 刻アラミタガ。底盤は耳形で、上腹にいくほど 腰をつくる。	直径 (34.5) 高さ (43.0)	粘土・普通 (石英・淡灰泥灰 ・黑色古青) 底盤・普通 色調 5YR 4/4 に混入・褐色	直部6/6・底盤1/4 残存	
368 第72回	P-982 D-4 SR-8	底盤は耳形。	直腹・耳形底盤ハタミタガタ。底盤にハケ がある。底盤ハタ。	直径 4.3 高さ (2.9)	粘土・普通 (石英・白色古青 ・薄石古青) 底盤・普通 色調 10YR 6/3 に混入・褐色	底盤1/7残存	
369 第72回	P-1037 L-4 SR-9	直腹はゆるやかに腰をくる。	口輪部ハタ。直腹に背面三脚形の粘土 棒をもつ。直腹に腰をくる。口縁部を耳形で 腰をつくる。	直径 (32.9) 高さ (38.0)	粘土・普通 (石英・薄石含有) 底盤・普通 色調 10YR 6/3 に混入・褐色	底盤1/8残存	
370 第72回	P-1098 F-4 SR-9	△字彫。直輪部下面に把手し、突出する。	口輪部ハタ。脚部に背面三脚形の粘土 棒をもつ。直腹に腰をくる。口縁部を耳形で 腰をつくる。	直径 (32.5) 高さ (44.0)	粘土・普通 (石英・薄石含有 ・白色粒子・梅石含有) 底盤・普通 色調 10YR 6/2 手取柄	直部2/3残存 底盤1/2	
371 第73回	P-1010 E-4 SR-10	縦目付腰彫。口輪部は底盤。口輪部は内 面に背面三脚形の粘土棒を貼りつけてから 出来り。内腹口縁下辺は縦目付。	口輪部横溝ハタ。上輪部及び下輪部 脚部に背面三脚形の粘土棒をもつ。直腹に腰 をつくる。口縁部を耳形で、上腹にいくほど 腰をつくる。口縁部を耳形で、上腹にいくほど 腰をつくる。	直径 (32.0) 高さ (32.2)	粘土・普通 (石英・薄石含有 ・白色粒子・梅石含有) 底盤・普通 色調 10YR 7/4 に混入・褐色	直部6/6・底盤1/2 残存	
372 第73回	P-1010 E-4 SR-10	底盤は平底。	口輪部横溝ハタ。口輪部横溝アラミタガ ル。底盤のため縦目付。口縁部は耳形で、上 腹に腰をつくる。口縁部を耳形で、上腹にいくほど 腰をつくる。	直径 (37.1) 高さ (35.0)	粘土・普通 (石英・薄石含有 ・白色粒子・梅石含有) 底盤・普通 色調 10YR 7/2 に混入・褐色	直部1/4・底盤1/3 残存	
373 第73回	P-1271 C-3 SR-12	口縁が側面を渡して側部。底盤はゆるやかに 腰をくる。口輪部は耳形で、腰をつくる。口縁部は耳 形で、腰をつくる。底盤は耳形で、上腹に腰をつ くる。	口輪部横溝ハタ。側面側部横溝アラミタガ ル。底盤横溝アラミタガ。口縁部横溝アラ ミタガ。底盤は耳形で、上腹に腰をつくる。	直径 (32.7) 高さ (30.0)	粘土・普通 (石英・黑色粒子 ・白色粒子・白色粒子含有) 底盤・普通 色調 7.5YR 7/4 に混入・褐色	直部2/2・底盤1/3 残存	
374 第73回 5543回	P-1252 D-4 SR-20	底盤は折れ三脚形を上腹に持つ。口縁部は耳 形で、腰をつくる。口縁部は耳形で、腰をつくる。底 盤は耳形で、上腹に腰をつくる。	口輪部横溝アラミタガ。側面側部横 溝アラミタガ。底盤横溝アラミタガ。口縁部横 溝アラミタガ。底盤は耳形で、上腹に腰をつ くる。	直径 (18.6) 高さ (21.0)	粘土・普通 (石英・黑色粒子 ・白色粒子・白色粒子含有) 底盤・普通 色調 7.5YR 6/3 に混入・褐色	直部1/2・底盤1/2 残存底盤1/1 残存	
375 第73回	P-1281 D-4 SR-20	底盤はハの字形に聞き。底盤はややねじら れていて、底盤は耳形で、腰をつくる。	口縁部横溝アラミタガ。底盤横溝アラ ミタガ。口縁部横溝アラミタガ。底盤横 溝アラミタガ。底盤は耳形で、上腹に腰をつ くる。	直径 (18.6) 高さ (21.0)	粘土・普通 (石英・黑色粒子 ・白色粒子・白色粒子含有) 底盤・普通 色調 2.5YR 6/3 に混入・褐色	直部1/6残存	
376 第73回 5543回	P-1304 F-3 SR-29	小字の腰で、底盤は△に蓋入縫合で腰をつ くる。底盤は平面で突出する。	口縁部横溝アラミタガ。中腹部の△に蓋入縫 合アラミタガ。口縁部横溝アラミタガ。	直径 7.7 底盤 (12.0)	粘土・普通 (石英・薄石含有 ・白色粒子・薄石含有) 底盤・普通 色調 7.5YR 5/3 に混入・褐色	直部1/2残存、底 盤は△に蓋入	

第15表 弥生土器・土器類觀察表(3)

規範番号 準規範番号 因版番号	文物番号 GRID 因版番号	種類	形態の特徴	技法の特徴 ①外面 ②内面	法量 (cm)	胎 土 焼 成 色	備考
377 第73回	P-1365 P-3 SB-29	要	縦縫はやくに垂直し、口縫部は外反しで開き、口部は最も深く腹なり。胴部は直角的で深く。	①口縫部横径ハケ。口縫部横径ハケ。斜め縫合。斜め縫合。②口縫部横径ハケ。胴上半部横径ハケ後。胴底横径ハケ。	口径 (19.5) 器高 (7.0)	胎土 灰白色 (石英・長石含有) 白色粘土・赤色粘土含有 焼成 薄青 色調 SYR6.6 緑	口縫部～胴底基部 1/6焼成
378 第73回 因版56	P-1352 P-3 SB-30	要	中腹。口縫部は上端部が突出する。全体的に背屈は浅い。	①口縫部横径ハケ。口縫部横径ハケ。斜め縫合。斜め縫合。②口縫部横径ハケ。胴上半部横径ハケ後。胴底横径ハケ。	口径 (12.0) 器高 (2.3)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土含有 焼成 薄青 色調 7.5YR7.3に近い緑	口縫部～胴底 1/3焼成
379 第73回	P-1352 P-3 SB-30	要	縫合はくす字状に直角し、口縫部は外反して開き、口部は最も深く腹なり。胴部は直角的で深く。	①口縫部横径ハケ。口縫部横径ハケ。斜め縫合。斜め縫合。②口縫部横径ハケ。胴上半部横径ハケ後。胴底横径ハケ。	口径 (12.0) 器高 (6.6)	胎土 黄土 (石英・長石含有) 白色粘土・赤色粘土含有 焼成 薄青 色調 3.5YR4.1に近い緑	口縫部～胴底上部 1/3焼成
380 第73回	P-980 C-4 SB-16	要	S字型の肩部。底部に溝がある。	小縫合ハケ後。横位ハケ。深縫合横位ハケ。	器高 (1.3)	胎土 白 (石英・白色粘土含有) 白色粘土含有 焼成 良好 色調 10YR6.1 暗緑	胴部～底盤台
381 第73回 因版43	P-1251 D-4 SB-20	要	小型の壺。脚部は中央が最大となるように脚部のみをつぶし、腹部は輪郭を保つ。腹面は直角的で深く、口部は最も深く腹なり。底部は丸く腹なり。	①口縫部横径ハケ。脚部横径ハケ。②内ナメ。	口径 (4.6) 器高 (3.8) 底径 (4.2) 脚高 (4.9)	胎土 青白 (石英・白色粘土含有) 白色粘土含有 焼成 良好 色調 2.5YR6.3に近い黄	口縫部1/2焼成、底盤台に残存
382 第73回	P-1426 F-4 SB-32	要	折り返し口縫部。口縫部は外反して開き、口部は強く張り出る。	①審査のため不明。②審査のため不明。	器高 (3.0)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土含有 焼成 青白 色調 7.5YR8.4に近い緑	胎土
383 第73回 因版56	P-1469 ST-715	要	口縫部は大きく張り出る。口縫部は強く曲曲して開き、口部は最も深く。	①口縫部横径ハケ後。その上に横縫合跡と横位合跡。口縫部横径ハケ後。下段をくわで強く捻りを張り取り。腰部を厚くする。②横位ハケ。	器高 (1.6)	胎土 青白 (石英・白色粘土含有) 白色粘土含有 焼成 青白 色調 7.5YR6.3に近い緑	口縫部1/2焼成、底盤台に残存
384 第74回	P-1444 F-4 SB-31	要	折り返し口縫部。口縫部はやかに外反して開き。口部は最も深く。	①口縫部横径ハケ後。部分的に腰部を厚くする。②横位ハケ。	口径 (16.0) 器高 (16.0)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土含有 焼成 薄青 色調 7.5YR6.2/2 灰青	口縫部1/10、底盤台 1/3焼成
385 第74回	P-1443 F-4 SB-31	要	縫合はくす字状に直角する。口縫部は内凹し、口部は最も深く。	①口縫部横径ハケ後。一端は横位ハケ。腰部は上半部横径ハケ後。②口縫部横径ハケ後。頭部は横位ハケ。	口径 (14.6) 器高 (3.6)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土含有 焼成 青白 色調 7.5YR6.4に近い緑	口縫部1/6焼成、底盤台
386 第74回	P-1443 F-4 SB-31	要	脚部はくす字状に直角的に開く。脚部は直角的に開く。口縫部は直角的に開く。	①口縫部横径ハケ。脚上半部横径ハケ後。腰部は直角的に開く。②口縫部横径ハケ後。頭部は横位ハケ。	口径 (19.0) 器高 (7.1)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土・赤色粘土含有 焼成 青白 色調 10YR6.1 暗緑	口縫部1/16焼成
387 第74回	P-1462 F-4 SB-32	要	脚台部はくす字状に直角的に開く。	①脚部横径ハケ。脚上半部横径ハケ後。腰部は直角的に開く。②脚部横径ハケ。	口径 (19.0) 器高 (7.0)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土含有 焼成 青白 色調 7.5YR6.4に近い緑	脚台部1/2焼成
388 第74回	P-747 C-1 SD-2	要	二重脚台。口縫部は大きく外反して開く。口部は最も深く。	①口縫部横径ハケ。脚上半部横径ハケ後。腰部は直角的に開く。②脚部横径ハケ。	口径 (21.5) 器高 (3.0)	胎土 グリセ (石英・白色粘土含有) 白色粘土含有 焼成 青白 色調 SYR6.6 緑	脚台部1/8焼成
389 第74回	P-860 C-1 SD-2	要	縫合はくす字状に直角して開く。口縫部は外反して開く。脚部は直角して開く。脚部は最も深く。腰部は直角で深く。	①口縫部横径ハケ後。口縫部横径ハケ後。斜め縫合。斜め縫合。②口縫部横径ハケ後。腰部は直角で深く。腰部は直角で深く。腰部は直角で深く。腰部は直角で深く。	口径 (16.7) 器高 (12.3)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土・赤色粘土含有 焼成 青白 色調 10YR7.2/1.5に近い緑	口縫部～脚部 1/4焼成
390 第74回 因版43	P-785c C-1 SD-1	要	縫合はくす字状に直角して開く。口縫部は外反して開く。脚部は直角して開く。脚部は最も深く。腰部は直角で深く。	①口縫部横径ハケ後。口縫部横径ハケ後。斜め縫合。斜め縫合。②口縫部横径ハケ後。腰部は直角で深く。腰部は直角で深く。腰部は直角で深く。	口径 (20.5) 器高 (30.0)	胎土 家 (石英・長石含有) 白色粘土含有 焼成 青白 色調 10YR7.3に近い緑	口縫部1/1、腰部 1/2焼成、底盤台 脚部先端
391 第74回	P-785 C-1 SD-2	要	口縫が斜めをほどいて開く。縫合はくす字状に直角して開く。口縫部は外反して開く。腰部は直角で深く。腰部は直角で深く。	①口縫部横径ハケ (左→右) 後。脚部横径ハケ。②口縫部横径ハケ後。脚部横径ハケ。斜下脚部横径ハケ。斜下脚部横径ハケ。	口径 (16.3) 器高 (10.0)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土含有 焼成 青白 色調 7.5YR6.4 淡青緑	脚部～脚部1/3 焼成
392 第74回	P-785 C-1 SD-2	要	脚台部はくす字状に直角的に開く。	①口縫が斜めをほどいて開く。縫合はくす字状に直角して開く。口縫部は外反して開く。腰部は直角で深く。腰部は直角で深く。	底径 (9.4) 器高 (5.8)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土含有 焼成 青白 色調 7.5YR6.4 淡青緑	脚台部1/4焼成
393 第74回	P-785 C-1 SD-2	要	脚台部はくす字状に直角的に開く。	①口縫部横径ハケ (左→右) 後。脚部横径ハケ。	口径 (11.0) 器高 (5.9)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土含有 焼成 青白 色調 7.5YR6.3 淡青緑	脚台部1/2焼成
394 第74回	P-785 C-1 SD-2	要	脚台部はくす字状に直角的に開く。	①口縫ハケ。②底位ハケ (左→右) 。脚部横径ハケ。	底径 (8.9) 器高 (5.2)	胎土 青白 (石英・長石含有) 白色粘土含有 焼成 青白 色調 10YR7.3に近い青緑	脚台部1/4焼成

第15表 弥生土器・土器類観察表(4)

遺物番号 測定番号 回収番号	遺物番号 GRID 測定番号	地盤	形態の特徴	技法の特徴	①外周 ②内面	法量 (cm)	拾 十 成 色 調	備考
395 第74区 回収43	P-869 C-1 SD-2	泥	齊台部はハの字状に直線的に開く。	丁継打削鉋形ナガハ。刃江は直線的な不規則な凹凸がある。底盤はナガハだが、底盤の内側は直線的で、底盤の外側はハの字状に開いており、底盤部斜面には、斜面斜面ハナツク、斜面斜面ナガハ。	直江 (20.0) 底盤 (7.9)	土手・普通 (石英・泥灰岩片) 赤色粘子・薄石合有 底盤 色調 5Y9/6 G 棕	齊台部1/2残存 回収39.3	
396 第74区 回収43	P-868 C-1 SD-2	泥	齊台部はハの字状に直線的に開く。	丁継打削鉋形ナガハ。底盤斜面ハナツク。	直江 (19.9) 底盤 (7.8)	土手・普通 (石英・泥灰岩片) 赤色粘子・薄石合有 底盤 色調 5Y9/7.1 G 棕	齊台部保存	
397 第74区 回収43	P-747 C-1 SD-2	泥	齊台部はハの字状に直線的に開く。	丁継打斜面ハナツク。底盤斜面ハナツク。	直江 (10.4) 底盤 (8.1)	土手・普通 (石英・泥灰岩片) 赤色粘子・薄石合有 底盤 色調 7.5Y9/7.4 G 棕	齊台部2/3残存	
398 第75区 回収44	P-870 D-2 SD-4	泥	底板はハの字状に直線的に開く。	丁継打斜面ハナツク後、横ナギナガハ。丁継打斜面ハナツク後、斜面斜面ハナツク。	口徑 底盤 (6.6) 底盤 (8.1)	土手・普通 (石英・泥灰岩片) 赤色粘子・薄石合有 底盤 色調 10Y9/5.2 G 黄褐	口継打1/6残存	
399 第75区 回収44	P-876 D-2 SD-4	泥	底板はハの字状に直線的に開く。	丁継打斜面ハナツク後、横ナギナガハ。丁継打斜面ハナツク後、斜面斜面ハナツク。	口徑 (3.8) 底盤 (4.7) 底盤 (3.0)	土手・普通 (石英・泥灰岩片) 赤色粘子・薄石合有 底盤 色調 8Y9/5.1 G 棕	口継打1/6残存	
400 第75区 回収44	P-1441 B-2 SD-7	泥	底盤はやや左に傾き、口縁部は直線的に開く。	丁継打斜面ナガハ。底盤は右側が高く、斜面は左側が高く、丁継打斜面ナガハ。丁継打斜面ナガハ。斜面は左側が高く、丁継打斜面ナガハ。斜面は左側が高く、丁継打斜面ナガハ。	口徑 (14.2) 底盤 (19.2) 底盤 (16.4)	土手・普通 (石英・白色粘子) 底盤 色調 7.5Y9/6.1 G 棕	口継打～底盤1/3残存 回収39.4	
401 第75区 回収44	P-1441 B-2 SD-7	泥	口縁部が斜めで傾く。底盤は左側が高く、口縁部は右側が高く、斜面は左側が高く、丁継打斜面ナガハ。	丁継打斜面ハナツク後、横ナギナガハ。丁継打斜面ナガハ。斜面は左側が高く、丁継打斜面ナガハ。斜面は左側が高く、丁継打斜面ナガハ。斜面は左側が高く、丁継打斜面ナガハ。	口徑 (17.6) 底盤 (36.9)	土手・普通 (石英・白色粘子) 底盤 色調 7.5Y9/6.2 G 棕	口継打1/4残存	
402 第75区 回収44	P-1040 C-2 SP-5	泥	底盤は平底。	丁継打斜面ハナツク。底盤は木本集落が残る。	口徑 (2.9) 底盤 (11.7)	土手・普通 (石英・黑色粘子) 底盤 色調 2Y9/4 G 棕	底盤1/2残存	
403 第75区 回収44	P-1053 P-2 SP-286	泥	齊台部は低く、ハの字状に開く。	丁継打斜面ハナツク後、横ナギナガハ。丁継打斜面ハナツク後、斜面斜面ハナツク。	口徑 (11.5) 底盤 (31.0)	土手・普通 (石英・黑色粘子) 底盤 色調 10Y9/5.2 G 黄褐	底盤～齊台部結合 回収42.0 P-13	
404 第75区 回収44	P-1149 E-2 SP-411	泥	S字型。口縁部は大きく突出する。全体的に底盤は薄いが、口縁部上部は厚に溝を持つ。	丁継打斜面ナガハ。斜面上半部底面ハナツク後、斜面斜面ナガハ。丁継打斜面ナガハ。	口徑 (13.7) 底盤 (14.1)	土手・普通 (石英・金雲母・ 白色粘子・薄石合有) 底盤 色調 10Y9/5.2 G 黄褐	口継打1/4欠損 底盤1/2上部1/6 回収41.0 P-28	
405 第76区 回収56	P-1350 B-2 SP-460	泥	S字型。口縁部は上段と下段が突出する。底盤は木本集落で構成される。	丁継打斜面ナガハ。斜面上半部底面ハナツク後、斜面斜面ナガハ。丁継打斜面ナガハ。	口徑 (16.3) 底盤 (3.8)	土手・普通 (石英・黑色粘子) 底盤 色調 7.5Y9/8.2 G 棕	口継打1/10残存	
406 第75区 回収44	P-1336 F-4 SP-457	泥	底盤はやや左に傾きし、口縁部は厚く、外張して開く。口縁部は左側が低い。	丁継打斜面ナガハ。斜面上半部底面ハナツク後、斜面斜面ナガハ。丁継打斜面ナガハ。	口徑 (12.8) 底盤 (10.1)	土手・普通 (石英・黑色粘子) 底盤 色調 2Y9/7.4 G 棕	口継打2/3 残存 底盤5.5回 P-8	
407 第75区 回収44	P-1455 F-4 SP-680	泥	口縁部が斜めで傾く。口縁部は直線的に開く。当面は左側が高く、下位部は内溝底面に底盤へ続く。	丁継打斜面～斜上半部底面ハナツク後、横ナギナガハ。斜面斜面ナガハ。丁継打斜面ナガハ。	口徑 (12.0) 底盤 (11.5)	土手・普通 (石英・黑色粘子) 底盤 色調 2.5Y9/6.6 棕	口継打～齊台部1/3 残存 第62回 P-3	
408 第75区 七集1	P-344 C-3 七集1	泥	底盤は平底。	丁継打斜面ナガハ。斜面上半部底面ハナツク後、斜面斜面ナガハ。丁継打斜面ナガハ。	口徑 (7.8) 底盤 (3.5)	土手・普通 (石英・黑色粘子) 底盤 色調 5Y9/1.2 G 棕	鋼部1/3 鋼部1/2 残存	
409 第76区 土集1	P-344 C-3 土集1	泥	底盤はS字型で、斜面は直線的に立ち上る。	丁継打斜面ナガハ後、斜面斜面ナガハ。斜面斜面ナガハ。斜面斜面ナガハ。	口徑 (3.6) 底盤 (3.4)	土手・普通 (石英・黑色粘子) 底盤 色調 10Y9/7.2 G 棕	鋼部1/2 残存、底 盤部1/2	
410 第75区 七集1	P-344 C-3 七集1	泥	齊台部はハの字状に直線的に開く。	丁継打斜面ナガハ後、斜面斜面ナガハ。斜面斜面ナガハ。斜面斜面ナガハ。斜面斜面ナガハ。	口徑 (10.6) 底盤 (13.4)	土手・普通 (石英・黑色粘子) 底盤 色調 2.5Y9/6.4 棕	底盤4/5・齊台部 1/2残存	
411 第75区 七集1	P-344 C-3 七集1	泥坏	底盤は薄く、下位にひびきを持ち、直線的に開く。口縁部は直線的に開く。	丁継打斜面ナガハ後、斜面斜面ナガハ。斜面斜面ナガハ。斜面斜面ナガハ。斜面斜面ナガハ。	口徑 (20.4) 底盤 (10.8)	土手・普通 (石英・白色粘子) 底盤 色調 5Y9/6.6 棕	底盤1/2 残存	
412 第75区 七集2	P-684 F-3 七集2	泥坏	底盤は平底。	丁継打斜面ナガハ後、斜面斜面ナガハ。底盤 斜面 (10.6) 底盤 (13.4)	土手・普通 (石英・赤色粘子) 底盤 色調 5Y9/7.3 G 棕	鋼部1/3・底盤2/3 残存		
413 第75区 回収44	P-684 F-3 七集2	泥坏	底盤は低く、外側3/4に開き、瓶底は比較的大きな底がある。器底は厚い。	丁継打ハナツク後、斜面斜面ナガハ。	口徑 (10.9) 底盤 (14.0)	土手・普通 (石英・黑色粘子) 底盤 色調 5.5Y9/8.1 淡黄褐	底盤完存	

第15表 弥生土器・土師器観察表(5)

複数番号 辨別番号 四段番号	遺物番号 GRN3 種類	形態の特徴	技法の特徴	①外觀 ②内窓	法量 (cm)	胎 土 燒 成 色	考
414 第75回 上巻2	F-684 F-3 土巻2	縁部は直角で、口縁部は短く直角的に、側面は斜めで直角。腹部はやや直角で、最大径を中位に持つ。	口縁部斜面ハサ後、口縁部斜子。腹部 斜面ハサ後。口縫接縫テナ。底端直窓が 側面に残る。	口径 (10.4) 器高 (6.0) 内窓 直窓 底窓 色調 SYR8.4 橙褐	胎土 磨石(米黄・褐色)粘土 器身 (白灰) 底窓 (白色) 内窓好 色調 SYR8.4 橙褐	口縫接ハサ後 器身1/4厚	
415 第75回 上巻2	F-684 F-3 土巻2	縁部は直角で、側面にはやや直角に屈曲し て、側縫に凹凸して開く。口外唇は直角で、 底窓はなじ育す。	口縫接斜面ハサ後、腰部直窓ハサ2箇 が、底窓から腰窓に移る。腰窓ハサ2箇。 底窓に腰窓と側窓とが、口縫接直窓 の方の窓跡不規。	口径 (21.3) 器高 (9.8) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.6 橙	胎土 不规则 (石灰・火山岩) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 7.0SYR6.6 橙	口縫接ハサ後 器身1/2 偏斜 上巻1/3焼作	
416 第76回 上巻2	F-684 F-3 土巻2	縁部は直角で、口縁部は外傾して開く。 側部はやや直角で、底窓は中位に持つ。	口縫接斜面ハサ後、腰部直窓ハサ2箇 が、底窓から腰窓に移る。腰窓ハサ2箇。 底窓に腰窓と側窓とが、口縫接直窓 の方の窓跡不規。	口径 (14.2) 器高 (9.5) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.6 橙	胎土 黒 (石灰) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.6 橙	口縫接ハサ後 器身1/4 偏斜 底窓 外側1-1/3スリ 色帶	
417 第76回 上巻2	F-684 F-2 土巻2	縁部はくの字状に屈曲し、口縫接はわずか に内傾して、底窓に直角。口外唇は直角で、 底窓は中位に持つ。	口縫接斜面ハサ後、腰部直窓ハサ (左上、 右下) 2箇。腰窓接縫ハサ (左上) 2箇。 腰窓ハサ2箇。窓キレ有窓作。	口径 (14.8) 器高 (9.5) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.4 橙	胎土 不规则 (石灰有) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.4 橙	口縫接ハサ後 器身1/2 偏斜 上巻1/3焼作	
418 第76回 底巻44	P-1310 F-3 土巻3	縁部はやや直角で、口縫接は外傾して 開く。口外唇は直角。	口縫接斜面ハサ後、斜窓ハサ、腰部直窓 ハサ。口縫接斜面ハサ後、斜窓ハサ後、 腰窓ハサ2箇。	口径 (14.0) 器高 (6.9) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.3 橙	胎土 白 (石灰・褐色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.3 橙	口縫接ハサ2箇 底巻	
419 第76回 上巻3	F-1187 E-2 土巻3	折合し口縫接。口縫接は大きく外傾して 開く。口外唇は直角で、口外唇に斜窓を 持つ。	口縫接斜面ハサ後、腰窓ハサ2箇。腰 窓下斜窓ハサ。口縫接斜面2箇に腰窓 下斜窓ハサ。口縫接斜面ハサ後、腰窓 ハサ2箇。腰窓下斜窓ハサ2箇。腰窓 ハサ2箇。腰窓ハサ2箇が、底窓のため 詳細不明。	口径 (15.8) 器高 (8.7) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.2 黄褐	胎土 白 (石灰・白色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.2 黄褐	口縫接ハサ2箇 器身1/4焼作	
420 第76回 底巻44	P-1186 F-2 土巻3	縁部は直角で、口縫接は直角で、底窓は すこかに開く。口外唇はやや尖ら。	口縫接斜面ハサ後、腰窓ハサ2箇。腰 窓下斜窓ハサ2箇。腰窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇。腰窓下斜窓ハサ2箇。腰窓 ハサ2箇。腰窓ハサ2箇が、底窓のため 詳細不明。	口径 (12.6) 器高 (7.4) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.2 橙	胎土 白 (石灰) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.2 橙	口縫接ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR7.2 橙	
421 第76回 上巻3	P-1190 E-2 土巻3	直口縫接。口縫接は人さし外傾して開く。 口外唇は直角。	口縫接斜面ハサ後、腰窓ハサ2箇。腰 窓下斜窓ハサ2箇。腰窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇。腰窓下斜窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇。腰窓ハサ2箇が、底窓のため 詳細不明。	口径 (19.0) 器高 (8.4) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.4 橙	胎土 白 (石灰・黄色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.4 橙	口縫接ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR7.4 橙	
422 第76回 底巻44 四段26	P-1194 E-2 土巻3	複合口縫接。口縫接は外傾して開く。 口外唇は直角で、口外唇に斜窓を 持つ。内窓口縫接下部は 古燒跡。	口縫接斜面ハサ2箇。腰窓ハサ2箇。口 縫接テナ。口縫接斜面2箇。腰窓ハサ2箇。 腰窓ハサ2箇。腰窓下斜窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇。腰窓下斜窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇。腰窓ハサ2箇が、底窓のため 詳細不明。	口径 (29.0) 器高 (8.4) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.4 橙	胎土 白 (石灰・白色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.4 橙	口縫接ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR7.4 橙	
423 第76回 上巻3	F-1321 F-3 土巻3	複合口縫接。口縫接は直角的に開く。口 外唇は直角で、口外唇に斜窓を 持つ。内窓口縫接下部は 古燒跡。	口縫接斜面ハサ2箇。腰窓ハサ2箇。口 縫接テナ。口縫接斜面2箇。腰窓ハサ2箇。 腰窓ハサ2箇。腰窓下斜窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇。腰窓下斜窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇。腰窓ハサ2箇が、底窓のため 詳細不明。	口径 (32.0) 器高 (8.3) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.4 橙	胎土 白 (石灰・白色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.4 橙	口縫接ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR7.4 橙	
424 第76回 底巻44	P-1182e E-2 土巻3	腰窓はあるやかに屈曲する。底部はなじ 育す。軸部は直角で、腰窓は直角で、底 窓は斜めで直角。	腰窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。 腰窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。	器高 (23.3) 腰窓 底窓 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.3 黄褐	胎土 白 (石灰) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.3 黄褐	腰窓斜面ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR7.3 黄褐	
425 第76回 上巻3	P-1190e E-2 土巻3	腰窓は丸みを呈する。	腰窓ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。	口径 (19.8) 器高 (8.4) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR6.6 橙	胎土 白 (石灰・白色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR6.6 橙	腰窓ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR6.6 橙	
426 第77回 上巻3	P-1182e E-2 土巻3	腰窓はやや直角で、口縫接は直角で、 底窓は直角。	腰窓ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。	口径 (19.8) 器高 (8.4) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR6.6 橙	胎土 白 (石灰・白色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR6.6 橙	腰窓ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR6.6 橙	
427 第77回 土巻3	P-1321 P-3 土巻3	腰窓は丸みを呈す。口縫接は直角に開く。 口外唇は直角。	口縫接斜面ハサ2箇。腰窓ハサ2箇。 腰窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。	口径 (19.3) 器高 (8.4) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.3 黄褐	胎土 白 (石灰・白色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.3 黄褐	腰窓ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR7.3 黄褐	
428 第77回 土巻3	P-1181e P-3 土巻3	腰窓はやや直角で、口縫接は直角に開く。 口外唇は直角。	口縫接斜面ハサ2箇。腰窓ハサ2箇。 腰窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。	口径 (26.7) 器高 (17.2) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.3 黄褐	胎土 白 (石灰・白色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.3 黄褐	腰窓ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR7.3 黄褐	
429 第77回 底巻44	P-1321e P-3 土巻3	腰窓はあるやかに屈曲し、口縫接は外傾 して開く。口外唇は直角。	口縫接斜面ハサ2箇。腰窓ハサ2箇。 腰窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。	口径 (18.3) 器高 (7.3) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR6.6 橙	胎土 白 (石灰・白色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR6.6 橙	腰窓ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR6.6 橙	
430 第77回 底巻45	P-1345 P-3 土巻3	腰窓は丸みを呈す。口縫接は外傾して開く。 口外唇は直角。腰窓はやや直角で、底 窓は直角で、最大径を中位に持つ。 腰窓は丸みを呈す。腰窓は中位で上巻に持つ。 内窓気泡は底窓へ傾く。	口縫接斜面ハサ2箇。腰窓ハサ2箇。 腰窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。	口径 (18.9) 器高 (16.3) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR6.6 橙	胎土 白 (石灰・白色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR6.6 橙	腰窓ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR6.6 橙	
431 第77回 底巻45	P-962e C-4 土巻3	大輪の花。胎部は中心から周囲へ向いて、 口縫接は直角に開く。口外唇は直角。 腰窓はやや直角で、底窓は直角で、 腰窓は直角に持つ。腰窓は土台の輪郭線を複数。 腰窓は花葉形に持つ。	口縫接斜面ハサ2箇。腰窓ハサ2箇。 腰窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。腰 窓斜面ハサ2箇と、腰窓ハサ2箇。	口径 (35.8) 器高 (25.6) 内窓 直窓 腰窓 底窓 色調 SYR7.4 黄褐	胎土 白 (石灰・白色) 器身 (白色) 底窓 内窓好 色調 SYR7.4 黄褐	腰窓ハサ2箇 腰窓 内窓好 色調 SYR7.4 黄褐	

第15表 弥生土器・土師器観察表(6)

両面番号 律版番号 図版番号	遺物番号 GRID番号	種類	形態の特徴	技法の特徴 ①外面 ②内面	径量 (cm)	胎 土 焼 成 色 調	備考
432 第78回 図版45	F 1345 F 3 土器3	甕	縁部はややくに屈曲し、口縁部は直線的で直角に切られ、側面部は膨らみ、最大径を中央に持つ。	①口縁部傾斜ハケ後、側ナギ、側部側面 -側柱ナギ。②口縁部側面、側柱側面 -側柱ナギ。側柱部に底足付ナギ。・長脚 型ナギ。	口径 19.5 器高 [16.6]	胎土 青褐色 (石英、黒色粘土) 器底 白色粘土含有 地皮 黄褐色 色調 7.5YR6/1 墓底	口縫目～脚上部 2/3程度
433 第78回	F 1321 F 3 土器3	甕	腹壁はくの字形に屈曲し、口縁部は直線的に開く。口部部は軽く屈り、側部は膨らみで最大径を中央に持つ。	①口縁部傾斜ハケ後、側ナギ、側部側面 -側柱ナギ。②口縁部側面、側柱側面 -側柱ナギ。側柱部に底足付ナギ。・長脚 型ナギ。	口径 [14.9] 器高 [14.0]	胎土 青褐色 (石英、黑色粘土) 器底 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 3YR6/6 墓底	口縫目1/2程度
434 第78回	P 1185e E 2 土器3	甕	腹壁はややくに屈曲し、口縁部は直線的に開く。口部部は軽く屈り、側部は膨らみで最大径を中央に持つ。	①口縁部傾斜ハケ後、側ナギ、側部側面 -側柱ナギ。②口縁部側面、側柱側面 -側柱ナギ。側柱部に底足付ナギ。・長脚 型ナギ。	口径 [11.9] 器高 [11.1] 脚径 25.6	胎土 青褐色 (石英、輝石、安 山岩等)・白色粘土・赤色粘土含有 地皮 青褐色 色調 2.5YR2/1 墓	口縫目1/4、脚上 部1/4程度 外縫全面にスス付 者
435 第78回	P 1180 E 2 土器3	甕	腹壁は屈曲し、口縁部はわずかに外反して開く。口部部は軽く屈り、側部は膨らみで最大径を中央に持つ。	①口縁部傾斜ナギ。側部側面側柱ナギ後、 側柱側面ナギ。②側柱側面ナギ。側柱 部に底足付ナギ。・長脚型ナギ。	口径 [12.0] 器高 [11.5] 脚径 [20.6]	胎土 青褐色 (石英、黑色粘土、白 色粘土・赤色粘土含有) 地皮 青褐色 色調 7.5YH7/2.5 にぶい-暗	口縫目・側面1/3 程度
436 第78回	F 1177 E 2 土器3	甕	腹壁は屈曲し、口縁部は直線的に開く。口部部は軽く屈り、側部は膨らみで最大径を中央に持つ。	①口縁部傾斜ナギ。側部側面側柱ナギ後、 側柱側面ナギ。②側柱側面ナギ。側柱 部に底足付ナギ。・長脚型ナギ。	口径 [11.9] 器高 [12.0] 脚径 [20.4]	胎土 中性粘土 (石英、黑色粘土、白 色粘土含有) 地皮 青褐色 色調 3YR6/4 にぶい-暗	口縫目～脚上部 1/3程度
437 第78回	P 1181e E 2 土器3	甕	腹壁はややくに屈曲し、口縁部は直線的に開く。口部部は軽く屈り、側部は膨らみで最大径を中央に持つ。	①口縁部傾斜ハケ後-縦旋ハケ (↓→) → 側柱側面ナギ。②側柱側面ナギ。側 柱部に底足付ナギ。	口径 [13.4] 器高 [13.0] 脚径 [24.4]	胎土 中性粘土 (石英、白色粘 土含有) 地皮 青褐色 色調 2.5YR2/4 にぶい-暗	口縫目2/5、脚上 部1/4程度
438 第78回	P 1177e E 2 土器3	甕	腹壁はくの字形に屈曲し、口縁部は外反して開く。口部部は軽く屈り、側部は膨らみで最大径を中央に持つ。	①口縁部傾斜ナギ。側部側面側柱ナギ後、 側柱側面ナギ。②側柱側面ナギ。側柱 部に底足付ナギ。	口径 [16.9] 器高 [11.5] 脚径 [24.4]	胎土 青褐色 (石英、黑色粘土、白 色粘土含有) 地皮 安山岩片 含有 地皮 青褐色 色調 3YR7/3 にぶい-暗	口縫目～脚上部 1/3程度
439 第78回 図版45	P 1323 F 3 土器3	甕	腹壁はややくに屈曲し、口縁部は直線的に開く。側部部は軽く屈り、側部は膨らみで最大径を中央に持つ。	①口縁部側面ナギ。側部側面側柱ハケ法、中央 部に底足付ナギ。②口縁部側面ナギ。側 柱側面ナギ。	口径 [13.5] 器高 [12.0] 脚径 [24.0]	胎土 青褐色 (石英、白色粘 土含有) 地皮 青褐色 色調 7.5YR3/3 にぶい-暗	口縫目1/4、脚上 部1/2程度
440 第78回 図版45	F 1186 E 2 土器3	甕	腹壁はくの字形に直線的に開く。	①ナガナギ。壺蓋のため詰め難い不規 則ハケ。脚部に底足付ナギ。	口径 [10.2] 器高 [16.0] 脚径 [24.4]	胎土 中性 (石英、黑色粘土含有) 地皮 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 10YR7/2 にぶい-葉緑	脚部には瓦片 2/3程度
441 第78回 図版45	P 1229 F 2 土器3	甕	腹壁はくの字形を呈し、底部はわずかに内反する。 内縫目。	①口縁部側面ナギ。側部側面側柱ハケ法、中央 部に底足付ナギ。②口縁部側面ナギ。側 柱側面ナギ。	口径 [10.0] 器高 [22.1] 脚径 [24.0]	胎土 中性粘土 (石英、黑色粘土含有) 地皮 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 7.5YR6/3 にぶい-暗	脚部完全
442 第78回 図版45	F 1325 F 3 土器3	甕	腹壁部はしきりとしたくつきで、くの字形に大きく開く。	①腰部側面ナギ。脚部側面側柱ナギ。	口径 [12.8] 器高 [8.6] 脚径 [24.0]	胎土 中性粘土 (石英、黑色粘土含有) 地皮 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 2.5YR6/1 黄灰	脚部完全
443 第79回	P 1181 E 2 土器3	甕	小型の甕。腹壁はややくに屈曲し、口縁部は直線的に開く。口部部は軽く屈り、側部は膨らみで最大径を中央に持つ。	①口縁部側面ナギ。側部側面側柱ナギ。側柱側面ナギ。	口径 [8.1] 器高 [8.0] 脚径 [24.0]	胎土 中性粘土 (石英、黑色粘土含有) 地皮 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 7.5YR6/2 にぶい-暗	口縫目・脚部1/2 程度
444 第79回 図版46	P 1182e E 2 土器3	甕	腹壁は屈曲し、口縁部は直線的に開く。口部部は丸く、基部は厚く、側部は長脚。	①口縁部側面ナギ。基部側面側柱ナギ。②口縁部側面ナギ。側柱側面ナギ。指捺痕が認められる。	口径 [10.6] 器高 [8.6] 脚径 [24.0]	胎土 中性 (石英、黑色粘土含有) 地皮 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 7.5YR7/6 暗	口縫部・脚部1/2 程度
445 第79回	P 1321 F 3 土器3	甕	腹壁は屈曲し、口縁部は直線的に開く。口部部は圓筒形で、側部は直角に開く。	①腰柱ナギ。腰柱側面側柱ナギ。②腰柱側面ナギ。腰柱側面側柱ナギ。腰柱側面側柱ナギ。	口径 [14.5] 器高 [14.0] 脚径 [24.0]	胎土 中性粘土 (石英、黑色粘土含有) 地皮 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 10YR6/1 墓底	口縫部1/2程度 墓底にスス付
446 第79回	P 1181 E 2 土器3	甕	腹壁は屈曲で、最大径を中央に持つ。側部部は直角に開く。	①腰柱側面側柱ナギ。腰柱側面側柱ナギ。腰柱側面側柱ナギ。	口径 [12.2] 器高 [8.6] 脚径 [24.0]	胎土 青褐色 (石英、オレンジ 色粘土含有) 地皮 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 10YR6/1 墓底	口縫部欠損、脚部 1/2程度
447 第79回	P 1195 E 2 土器3	甕	全体的に腰壁は直角で、最大径を中央に持つ。	①腰柱側面側柱ナギ。腰柱側面側柱ナギ。腰柱側面側柱ナギ。	口径 [3.4] 器高 [3.0] 脚径 [24.0]	胎土 青褐色 (石英、黑色粘土含有) 地皮 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 10YR7/4 にぶい-葉緑	口縫部欠損、脚部 1/2程度
448 第79回 図版46	P 1186e E 2 土器3	甕	腹壁は直角で、最大径を中央に持つ。	①腰柱側面側柱ナギ。腰柱側面側柱ナギ。腰柱側面側柱ナギ。	口径 [2.5] 器高 [19.3] 脚径 [15.7]	胎土 中性粘土 (石英、黑色粘土含有) 地皮 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 10YR8/7.5 にぶい-葉緑	脚部全帶にスス付 者
449 第79回 図版46	F 1133 E 2 土器3	甕	S字型。口縁部は上段が突出する。全体的に器底に落着。	①口縁部側面ナギ。口縫目は引けた側 面ナギ。腰柱側面側柱ナギ。腰柱側面側柱ナギ。	口径 [14.7] 器高 [16.1] 脚径 [24.0]	胎土 中性粘土 (石英、黑色粘土含有) 地皮 白色粘土含有 地皮 青褐色 色調 10YR6/1 黄灰	口縫部1/2程度

第15表 弥生土器・土師器観察表(7)

苗範番号 傳承番号 既製登録番号	遺物番号 GHD 既製登録番号	種類	形態の特徴	技法の特徴 ①外面 ②内面	直径 (cm)	地 土 成 色 調	備考
450 第70回 既製40	F-1187 E-2 土集3 甕	土器	口縁部は大きく突出する。全体的に輪郭は薄いが、口縁部上部に更に薄くなっている。	口縫接ぎ手ナメ。胴部不規則なハク体。輪郭は薄い。口部縁構成ナメ。胴上部斜面ナメ。	口径 (34.7) 基高 (4.4)	粘土・重泥 (石英・黑重石) 黑色粒子・白色粒子・赤色粒 子・深灰色石	口縫接ぎ手ナメ
451 第75回 既製46	F-1196 E-2 土集3 甕	土器	5字變の脚台部。脚台部はへの字形に輪郭的に開く。輪郭は内側に折り返す。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はへの字形に輪郭的に開く。輪郭は内側に折り返す。	口径 6.2 基高 (6.2)	粘土・重泥 (石英・黑色粒子) 黑色粒子・白色石 既製・普通 色調 2.5YR6/3 にぶい・黒	脚台部・脚台部現 存
452 第70回 既製46	F-1226 P-2 土集3 甕	土器	脚部はぐく字形に屈曲し、口縁部は大きく反復してある。口唇部は丸い。輪郭は内側に開き、輪郭は上部を持ち、口縁部は丸い。輪郭は内側に開き、輪郭は上部を持ち、脚部はハク。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚下部斜面斜面ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚下部斜面斜面ナメ。脚台部脚台部はハク体。	口径 12.3 基高 (4.8)	粘土・小介橙 (砾石・石灰) 白色粘土 (含)	口縫接ぎ手ナメ
453 第75回 既製56	F-1173 E-2 土集3 甕	土器	口縫接ぎ手ナメで直筒。輪郭はへの字形に輪郭的に開く。輪郭は内側に折り返す。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚下部斜面斜面ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚下部斜面斜面ナメ。脚台部脚台部はハク体。	口径 (10.9) 基高 (9.7)	粘土・重泥 (砾石・石英・金 星玉・砾石合) 既製・脚台 既製 11.2	口縫接ぎ手ナメ 1/3既存
454 第79回 既製56	F-1321 P-2 土集3 甕	土器	脚部は直角で直筒。輪郭はへの字形に開く。輪郭は内側に折り返す。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚下部斜面斜面ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚下部斜面斜面ナメ。脚台部脚台部はハク体。	口径 10.5 基高 (6.9)	粘土・重泥 (砾石・石英・金 星玉・砾石合) 既製・普通 色調 10YR5/3 に黄褐色	部部一部欠損。 既存
455 第79回 既製53	F-1182 P-2 土集3 甕	土器	脚部は直角し、口縫部は直線的に開く。口縫部は直角し、脚部は直角で直筒。輪郭は比較的ゆるめである。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚下部斜面斜面ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚下部斜面斜面ナメ。脚台部脚台部はハク体。	口径 (12.4) 基高 (5.6)	粘土・重泥 (石英・黑色粒子) 白色粒子 (含) 既製・普通 色調 2.5YR7/3 にぶい・黒	口縫接ぎ手ナメ 既存
456 第70回 既製46	F-1134 P-2 土集3 高杯	脚部はハの字形に開き、輪郭はやや内側を持つ。	口下部をタケ後、部分的に輪郭ハケ。②脚部をタケ後、輪郭ハケ。	口径 10.5 基高 (6.9)	粘土・重泥 (砾石・石英・金 星玉・砾石合) 既製・普通 色調 10YR5/3 に黄褐色	脚部既存	
457 第70回 既製46	F-1315 P-2 土集3 高杯	脚部は直角し、脚部を伴つ。脚部はハの字形に開き、大きくなっている。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚部は直角で、輪郭は内側に開き、輪郭は丸く多くある。脚部は直角で、輪郭は内側に開き、輪郭は丸く多くある。	口径 10.3 基高 (9.2)	粘土・重泥 (石英・黑色粒子) 白色粒子 (含) 既製・普通 色調 2.5YR7/4 にぶい・黒	既存既存、輪郭 既存・脚部既存	
458 第70回 既製46	P-1228 P-2 土集3 高杯	輪郭は下部に脚を持つ。脚部はハの字形に開き、大きくなっている。	口下部をタケ後、輪郭は直角で、輪郭は内側に開き、上位部は丸く多くある。脚部は直角で、輪郭は内側に開き、上位部は丸く多くある。	口径 11.6 基高 (10.0)	粘土・重 (砾石・白色粒子) 白色粒子 (含) 既製・普通 色調 5YR8/4 横程	下部脚部既存、 輪郭・脚部既存	
459 第79回 既製46	F-1195 P-2 土集3 高杯	輪郭は直角で大きく開く。口唇部は丸い。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚部は直角で、輪郭は内側に開き、上位部は丸く多くある。	口径 (12.5) 基高 (8.0)	粘土・重 (石英・黑色粒子) 白色粒子 (含) 既製・普通 色調 10YR7/4 にぶい・黒	既存既存、輪郭 既存・脚部既存	
460 第70回 既製47	F-1184 P-2 土集3 高杯	輪郭に輪郭以下部で、輪郭は直角で、輪郭部で更に大きくなっている。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚部は直角で、輪郭は内側に開き、上位部は丸く多くある。	口径 11.3 基高 (11.0)	粘土・重 (砾石・黑色粒子) 白色粒子 (含) 既製・普通 色調 5YR7/4 にぶい・黒	脚部既存	
461 第79回 既製47	F-1182 P-2 土集3 高杯	脚部は外反形状に開き、輪郭部までに大きくなっている。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。輪郭は丸く多くある。脚部は直角で、輪郭は内側に開き、上位部は丸く多くある。	口径 6.5 基高 (14.0)	粘土・重 (石英・白色粒子) 白色粒子 (含) 既製・普通 色調 10YR6/3 2脚	脚部外反、輪郭 既存	
462 第80回 既製47	F-1329 P-2 土集3 高杯	脚部は外反形状に開き、輪郭部で更に大きくなっている。	脚部はハクボリ。脚部は直角で、輪郭は内側に開き、上位部は丸く多くある。	口径 11.6 基高 (5.7)	粘土・重泥 (砾石・黑色粒子) 白色粒子 (含) 既製・普通 色調 2.5YR6/6 横	脚部既存	
463 第80回 既製47	F-1132 P-2 土集3 高杯	脚部は直角で、輪郭は内側に開き、輪郭部で更に大きくなっている。	脚部はハクボリ。脚部は直角で、輪郭は内側に開き、上位部は丸く多くある。	口径 13.9 基高 (7.0)	粘土・重 (石英・黑色粒子) 白色粒子 (含) 既製・普通 色調 3.5YR7/4 にぶい・黒	既製既存、輪郭 既存・脚部既存	
464 第80回 既製47	F-1323 P-2 土集3 高杯	脚部は直角で、輪郭は内側に開き、輪郭部で更に大きくなっている。	脚部はハクボリ。脚部は直角で、輪郭は内側に開き、上位部は丸く多くある。	口径 13.5 基高 (14.6)	粘土・重泥 (砾石・黑色粒子) 白色粒子 (含) 既製・普通 色調 2.5YR6/4 12.4H 横	脚部既存、輪郭 既存	
465 第80回 既製47	F-1521 P-2 土集3 丸杯	内唇はハの字形に開き、口縁部は丸い。口唇部は尖る。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。下部基底は2段の上位部は丸く多くある。环状の脚台部合口部ハク。脚部不正方向ハク。上部脚部ハク。	口径 10.7 基高 (4.5)	粘土・重泥 (砾石・黑色粒子) 白色粒子 (含) 既製・普通 色調 5YR6/4 にぶい・黒	脚部既存、輪郭 既存	
466 第80回 既製47	F-1194 P-2 土集3 高杯	内唇はハの字形に開き、口縁部は丸い。口唇部は尖る。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。下部基底は2段の上位部は丸く多くある。环状の脚台部合口部ハク。脚部不正方向ハク。上部脚部ハク。	口径 (12.0) 基高 (3.7)	粘土・重泥 (石英・白色粒子) 白色石 既製・普通 色調 2.5YR7/4 にぶい・黒	脚部既存、既存	
467 第80回 既製47	F-1186 P-2 土集3 高杯	内唇はハの字形に開き、口縁部は丸い。	口縫接ぎ手ナメ。脚台部脚台部はハク体。下部基底は2段の上位部は丸く多くある。环状の脚台部合口部ハク。脚部不正方向ハク。上部脚部ハク。	口径 11.5 基高 (3.7)	粘土・重泥 (石英・黑色粒子) 白色石 既製・普通 色調 2.5YR7/4 にぶい・黒	脚部既存、既存	

第15表 弓生土器・土師器観察表(8)

地蔵番号 種類番号 図版番号	遺物番号 GRID 図版番号	種類	形態の特徴	技術的特徴	①外裏 ②内面	法蓋 (cm)	施 工 焼 成 色 調	備 考
468 第80回 図版45	F-1195 F.2 土塗3	鉢	器部は半平田で、底部は直線的に大きくなっている。口部部は丸く、脚部はハサ字に開き不規則。法蓋面のため不規則。	器部を削ぎ抜きハサ字、脚部は底面のため削ぎ不規則。法蓋面のため不規則。	口徑 (7.4) 底径 (5.6)	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (7.4) 底面 (5.6) 色調 10R 6/6 にぶい-褐色	口部 (7.4) 底面 (5.6) 色調 10R 6/6 にぶい-褐色
469 第80回 図版45	F-1196 E.1 土塗3	器台	器部は外側が深く、中央が広む。器部は外側が深く開き、器部で更に大きくなる。	器部を削ぎ抜きハサ字、脚部は底面のため削ぎ不規則。中間部を斜めに削ぎ下げる。脚部は底面のため削ぎ不規則。	口徑 (4.9) 底径 (6.3) 高さ 2.0	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (4.9) 底面 (6.3) 色調 7.5V R 8/6 褐色	口部 (4.9) 底面 (6.3) 色調 7.5V R 8/6 褐色
470 第80回 図版48	F-1481 E.2 土塗3	器台	器部は底面が深く開き、器部で更に大きくなっている。	器部を削ぎ抜きハサ字、脚部を削ぎ下げる。中間部を斜めに削ぎ下げる。底面は円柱形。	口徑 (7.8) 底径 (5.2)	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (7.8) 底面 (5.2) 色調 7.5V R 8/6 褐色	口部 (7.8) 底面 (5.2) 色調 7.5V R 8/6 褐色
471 第80回 図版48	F-1321 D.3 土塗3	鉢	体部は直線的に立ち上がり、口部部は丸く内側が深くなる。口部部は丸く、口部部を削ぎ下げる。中間部を斜めに削ぎ下げる。注ぎ口をつくる。	体部が直線的に立ち上がり、口部部は丸く内側が深くなる。口部部は丸く、口部部を削ぎ下げる。中間部を斜めに削ぎ下げる。注ぎ口をつくる。	口徑 (1.6) 底径 (2.7) 高さ 4.9	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (1.6) 底面 (2.7) 色調 7.5V R 8/6 褐色	口部 (1.6) 底面 (2.7) 色調 7.5V R 8/6 褐色
472 第80回 図版48	F-1190 E.2 土塗3	鉢	器部は内側が深く立ち上がる。口部部は丸く、口部部を削ぎ下げる。注ぎ口をつくる。底面は円柱形。	器部は内側が深く立ち上がる。口部部は丸く、口部部を削ぎ下げる。注ぎ口をつくる。	口徑 (14.7) 底径 (4.5) 高さ 6.2	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (14.7) 底面 (4.5) 色調 7.5V R 8/6 褐色	口部 (14.7) 底面 (4.5) 色調 7.5V R 8/6 褐色
473 第80回 図版48	F-1243 E.2 土塗3	鉢	体部は内側が深く立ち上がる。口部部は丸く、口部部を削ぎ下げる。	器部をハサ字とカギと見れるが、底面のため削ぎ不規則。脚部は底面が残る。脚部はハサ字とカギと見れるが、底面のため削ぎ不規則。	口徑 (3.4) 底径 (3.5) 高さ 5.7	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (3.4) 底面 (3.5) 色調 7.5V R 8/6 褐色	口部 (3.4) 底面 (3.5) 色調 7.5V R 8/6 褐色
474 第80回 図版48	P-1232 E.2 土塗3	鉢	体部は直線的に立ち上がる。口部部は丸く、底面は平底。	口部を削ぎ抜きするが、掌状のため削ぎ不規則。	口徑 (0.4) 底径 (3.0) 高さ 2.0	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子・赤色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (0.4) 底面 (3.0) 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色	口部 (0.4) 底面 (3.0) 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色
475 第80回 図版48	P-1320 F.3 土塗3	鉢	体部はやや内側が深く立ち上がる。口部部は丸く、口部部を削ぎ下げる。	口部をハサ字とカギと見れるが、底面のため削ぎ不規則。脚部は底面が残る。脚部はハサ字とカギと見れるが、底面のため削ぎ不規則。	口徑 (10.2) 底径 (2.3) 高さ 3.1	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子・赤色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (10.2) 底径 (2.3) 高さ 3.1 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色	口部 (10.2) 底径 (2.3) 高さ 3.1 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色
476 第80回 図版48	P-1324 F.3 土塗3	鉢	体部は内側が深く立ち上がる。口部部は丸く取り立てる。底面は平底。	口部をハサ字とカギと見れるが、底面のため削ぎ不規則。底面はハサ字とカギと見れるが、底面のため削ぎ不規則。	口徑 (19.4) 底径 (5.2) 高さ 5.3	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子・赤色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (19.4) 底径 (5.2) 高さ 5.3 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色	口部 (19.4) 底径 (5.2) 高さ 5.3 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色
477 第80回 図版48	P-1220 上塗3	鉢	体部は器壁が薄く、やや内側がある。口部部は丸く、底面は平底。	体部は器壁が薄く、やや内側がある。口部部は丸く、底面は平底。	口徑 (7.4) 底径 (4.6) 高さ 3.0	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子・赤色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (7.4) 底径 (4.6) 高さ 3.0 色調 7.5V R 8/6 にぶい-褐色	口部 (7.4) 底径 (4.6) 高さ 3.0 色調 7.5V R 8/6 にぶい-褐色
478 第80回 図版48	F-1181 E.2 土塗3	鉢	体部は内側で立ち上がる。口部部は丸く、底面は平底。	口部を削ぎ抜きハサ字とカギと見れるが、底面のため削ぎ不規則。底面はハサ字とカギと見れるが、底面のため削ぎ不規則。	口徑 (0.9) 底径 (4.0) 高さ 0.7	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (0.9) 底径 (4.0) 高さ 0.7 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色	口部 (0.9) 底径 (4.0) 高さ 0.7 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色
479 第80回 図版56	P-1181 E.2 土塗3	鉢	体部は内側が深く立ち上がる。口部部は丸く、底面は平底。	口部を削ぎ抜きハサ字とカギと見れるが、底面のため削ぎ不規則。底面はハサ字とカギと見れるが、底面のため削ぎ不規則。	口徑 (11.0) 底径 (5.8) 高さ 10.6	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子・赤色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (11.0) 底径 (5.8) 高さ 10.6 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色	口部 (11.0) 底径 (5.8) 高さ 10.6 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色
480 第80回 図版56	P-1244 P.2 土塗3	壺	底面は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。	底面は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。口部部は丸く、底面は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。	口徑 (3.0) 底径 (2.4)	施士 壁 (石英・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (3.0) 底径 (2.4) 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色	口部 (3.0) 底径 (2.4) 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色
481 第80回 図版56	P-1224 E.2 土塗3	壺	底面は平底で、中央に穿孔 (縫合穿孔1cm) があり、その周囲に小穴 (縫合穿孔の3cm) が複数存在する。	底面は平底で、中央に穿孔 (縫合穿孔1cm) があり、その周囲に小穴 (縫合穿孔の3cm) が複数存在する。	口徑 (6.4) 底径 (3.4)	施士 壁 (石英・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (6.4) 底径 (3.4) 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色	口部 (6.4) 底径 (3.4) 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色
482 第80回 図版56	P-1319 F.3 土塗3	壺	底面は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。	底面は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。口部部は丸く、底面は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。	口徑 (13.0)	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (13.0) 底径 (12.0) 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色	口部 (13.0) 底径 (12.0) 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色
483 第80回 図版56	F-1481 E.2 土塗3	壺	底部は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。	底部は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。口部部は丸く、底面は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。	口徑 (5.9) 底径 (4.4) 高さ 7.4	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (5.9) 底径 (4.4) 高さ 7.4 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色	口部 (5.9) 底径 (4.4) 高さ 7.4 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色
484 第80回	P-1188 E.2 土塗3	壺	底部は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。最大径を中央に持つ。	底部は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。口部部は丸く、底面は丸底で、胴部はやや内側が深く立ち上がる。	口徑 (6.8) 底径 (5.2)	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (6.8) 底径 (5.2) 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色	口部 (6.8) 底径 (5.2) 色調 10Y R 8/6 にぶい-褐色
485 第80回 図版48	F-1481 E.2 土塗3	鉢	体部は垂直底面に、わずかに内側で立ち上がる。口部部は丸く、底面は平底。	体部は垂直底面に、わずかに内側で立ち上がる。口部部は丸く、底面は平底。	口徑 (8.9) 底径 (5.6) 高さ 14.3	施士 壁 (石英・黑色粒子・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (8.9) 底径 (5.6) 高さ 14.3 色調 7.5V R 8/6 にぶい-褐色	口部 (8.9) 底径 (5.6) 高さ 14.3 色調 7.5V R 8/6 にぶい-褐色
486 第81回 図版56	F-1481 P.3 土塗3	壺	底部は垂直底面に、わずかに内側で立ち上がる。	底部は垂直底面に、わずかに内側で立ち上がる。	口徑 (13.6)	施士 壁 (石英・白色粒子含有) 底面 (白色含有)	口部 (13.6) 底径 (12.0) 色調 7.5V R 8/6 にぶい-褐色	口部 (13.6) 底径 (12.0) 色調 7.5V R 8/6 にぶい-褐色

第15表 弥生土器・土師器観察表(9)

遺物番号 16番番号 区分番号 部位番号 部位番号	GRID 種類	形態の特徴	技法の特徴 ①外面 ②内面	法量 (cm)	土 色 焼 成	備 考
487 第81回 上層3	P-1321 F-3 上層3	複合口縁部。口縁部は外側的にひらく。口 縁部内側は内側に前角部の點々を盛り立 てからら出張り。	口縁部ハラ、口縁部内側は前角部の點々を盛り立 てからら出張り。 斜面底部が盛り立ち、底部に施錆痕ハラ 。底付底部が盛り立ち、底付底部のため不明。	高さ [13.4]	赤土 灰 (石英・黑色粒子・赤色粒子含有) 焼成 清透 色調 10YR 6/3 にぶい・黄褐	
488 第81回 上層3	P-1321 F-3 上層3	ハの字状に廣くと彫られた口縁部。口内部 は面取り。	ハの字状に廣くと彫られた口縁部。口内部は 面取り。	高さ [13.4]	赤土 灰 (石英・全透青・黑 色含有) 焼成 清透 色調 10YR 6/3 にぶい・黄褐	
489 第81回 P-1210e F-3 上層3	土層3		①S字状底部の下し調紋。底付ハラ 。	高さ [13.1]	赤土 青透 (白灰子・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 7.5YR 7/4 にぶい・黄褐	
490 第81回 底付56	P-1321 F-3 上層3	裏	①底付底部ハラ、斜面上斜斜削底ハラ後。 平行タキ。②底部斜削底ハラ(左)。 斜削底部斜削底ハラ後。斜削底ハラ。	高さ [0.7]	赤土 青透 (白色粒子・黑色 粒子・白色粒子含有) 焼成 清透 色調 10YR 6/2 (灰)	
491 第81回 底付56	P-1298 E-2 土層3	裏	①底付底部ハラ、斜面上斜斜削底ハラ後。 左しおりタキ。②斜削底ハラ。斜削底 ハラ。	高さ [0.7]	赤土 青透 (石英・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 3YR 7/3 にぶい・青	
492 第81回 底付49	P-1321 F-2 上層3	裏	小型で低い脚台部。ハの字状に廣く。	高さ [6.0] 直径 [3.6] 底付 [1.8]	赤土 普通 (石英・白色粒子 含有) 焼成 清透 色調 3YR 7/3 にぶい・青	底付ハラ2段分、脚 台部1/2残存
493 第81回 底付49	P-1281 F-2 上層3	裏	小型で低い脚台部。ハの字状に廣く。	高さ [5.3] 直径 [3.3]	赤土 普通 (石英・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 10YR 6/1 (灰)	脚台部・脚部底付 底付ハラ
494 第81回 底付49	P-1181 F-2 上層3	裏	小型で低い脚台部。ハの字状に廣く。斜 削底ハラが、底部へいくつれ、深くなる。	高さ [4.8] 直径 [3.2] 底付 [1.9]	赤土 灰 (石英・黑色粒子含有) 焼成 清透 色調 7.5YR 6/4 にぶい・灰	脚台部は完全存 在
495 第81回 底付56	P-790 F-2 土層3	裏	底部は平底で、小孔 (直径約0.4cm) の内 部は直角、穿孔される。側面部は器形が薄く、 やわらか。	高さ [4.0] 直径 [1.7]	赤土 青透 (石英・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 10YR 7/3 にぶい・青	底付ハラ2段分
496 第81回 底付49	P-1227 F-2 上層3	裏	小型の脚台部で、ハの字状に廣く。	高さ [4.1] 直径 [2.7]	赤土 灰 (石英・黑色粒子含有) 焼成 清透 色調 7.5YR 7/3 にぶい・青	脚台部完全存 在
497 第81回 底付49	P-1253 F-2 土層3	裏	極小型のミニチュア上器。船上溝の中央に 指を押し込み、内部をつくりだす。	口径 3.5 底径 2.5 高さ 2.5 側壁 3.0	赤土 青透 (石英・白色粒子 含有) 焼成 清透 色調 7.5YR 7/4 にぶい・青	先存
498 第81回 底付49	P-1253 F-2 土層3	鉢	体部は垂直直角に立ち上がる。口唇部は方 い。底部は平底。	口径 3.7 底径 3.1 高さ [3.3]	赤土 青透 (石英・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 7.5YR 7/3 にぶい・青	脚台部底付 底付ハラ
499 第81回 底付49	P-1191 E-2 土層3	鉢	体部は内渦状に立ち上がる。口唇部は方 い。底部は丸底。	口径 3.5 底径 2.8	赤土 青透 (石英・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 2.5YR 7/4 にぶい・青	先存
500 第81回 底付49	P-1221 F-2 土層3	壺	底部はやや中に傾斜し、口縁部は斜め 付近まで削して聞く。口唇部は尖る。側面部 はやや斜面削形で、最大径を中位に持つ。底 部は平底。	口径 (6.1) 底径 (4.8) 高さ [5.3] 側壁 (6.0)	赤土 灰 (石英・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 7.5YR 7/3 にぶい・青	口縁部1/4、脚部 -底付1/2残存
501 第82回 底付49	P-617 G-4 V字層	壺	折り返し口縁部。口縁部は外反して聞く。 口縁部は内側に傾斜し、底付底部で、側面部 に凹凸する。側面部は斜面削形で、最大径を中 位に持つ。底部は平底。	口径 11.6 底径 6.8 高さ [21.0] 側壁 14.9	赤土 灰 (石英・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 3.5YR 6/6 青	先存
502 第82回 底付49	P-1374 G-4 V字層	壺	折り返し口縁部。口縁部は外反して聞く。 折り返しには厚い。口唇部は直張り。肩部は内 側と直張りた。	口径 (9.3) 底径 (8.7) 高さ [19.0]	赤土 青透 (石英・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 3YR 6/6 青	口縁部1/3、脚部 -底付1/6残存
503 第82回 底付49	P-1350 G-4 V字層	壺	折り返し口縁部。口縁部は外反して聞く。 折り返しには厚い。口唇部は直張り。	口径 [10.2] 底径 [4.9]	赤土 灰 (石英・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 10YR 8/6 にぶい・青	脚部1/4、脚部 -底付1/3残存
504 第82回 底付56	P-413 C-2 V字層	壺	折り返し口縁部。口縁部は外反して聞く。 折り返しには厚い。口唇部は直張り。	口径 [11.4] 底径 [2.2]	赤土 青透 (白色粒子含有) 焼成 清透 色調 7.5YR 6/4 にぶい・青	先存
505 第82回	P-1370 B-3 V字層	壺	複合口縁部。口縁部は直立式形に立ち上 がる。口縁部は直張り。内面下縁部は活潑 する。	口径 (13.8) 底径 [4.2]	赤土 青透 (石英・黑色粒子 含有) 焼成 清透 色調 10YR 6/3 にぶい・青	脚部1/3残存

第15表 弥生土器・土器類觀察表(10)

通號番号 博内番号 図版番号	遺物番号 GRID 個数	種類	形態の特徴	技法の特徴	①外層 ②内層	法量 (cm)	胎 燒成 色	備考
506 第82回 図版50	P-112 B-2 V-a層	亞	底部はややくぼに削り、口縁部は外反して厚く、側部は内反して薄く、側部には無花彫刻で、下部に接つ。底部は平底。	口縁部が削り、側部が内反して薄く、側部には無花彫刻で、下部に接つ。底部は平底。	口縁部が削り、側部が内反して薄く、側部には無花彫刻で、下部に接つ。底部は平底。	12.0 7.6 25.7	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部・底部1/2焼成
507 第82回 図版50	P-1392 G-3 V-a層	亞	口縁部は大きく外反して厚く、口部は内反して薄く、腹部は細長く、中ややくに屈曲する。底部は平底。	口縁部は大きく外反して厚く、口部は内反して薄く、腹部は細長く、中ややくに屈曲する。底部は平底。	口縁部が削り、側部が内反して薄く、側部には無花彫刻で、下部に接つ。底部は平底。	13.5 8.5 22.0	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部2/5欠損
508 第82回 図版50	P-552 E-4 V-a層	亞	側部は球形を呈する。底部は平底。	側部は球形を呈する。底部は平底。	側部は球形を呈する。底部は平底。	7.4 11.5	胎土 やや粗 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部1/2焼成、底 部生存
509 第83回 図版50	P-871 B-2 V-a層	亞	肩部はなで肩。	口縁部が削り、底部はなで肩。	口縁部が削り、底部はなで肩。	10.0 26.3 18.4	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部2/5欠損
510 第83回 図版50	P-18 2 V-a層	亞	肩部はなで肩。	口縁部はなで肩で、その下にへうで口の輪郭線をもつ。その下にへうで口の輪郭線をもつ。(しかし時代通り) なで肩部が多く残る。	口縁部はなで肩で、その下にへうで口の輪郭線をもつ。(しかし時代通り) なで肩部が多く残る。	9.4	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部3/4焼成
511 第83回 図版50	P-275 D-2 V-a層	亞	側部はややくぼに屈曲する。	側部はややくぼに屈曲する。	側部はややくぼに屈曲する。	10.0 29.0	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部1/3焼成
512 第83回 図版50	P-1436 B-2 V-a層	亞	肩部はなで肩。側部は無花彫刻で、最大径を1/2位に持ち、腰下部に直線へくぼみで、底部から側・子部が直線的。底部は平底。	口縁部が削り、底部はなで肩で、最大径を1/2位に持ち、腰下部に直線へくぼみで、底部から側・子部が直線的。底部は平底。	口縁部が削り、底部はなで肩で、最大径を1/2位に持ち、腰下部に直線へくぼみで、底部から側・子部が直線的。底部は平底。	9.0 18.7 30.0	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	口縁部欠損
513 第83回 図版50	P-1426 F-3 V-a層	亞	側部は球形を呈する。底部は平底。	口縁部が削り、底部はなで肩。	口縁部が削り、底部はなで肩。	9.7 31.3 30.0	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部1/2焼成、底 部3/4焼成、腹部 1/2焼成
514 第83回 図版50	P-1435 F-3 V-a層	亞	口縁部は外反して薄く、口部は内反して厚く、側部は内反して薄く。腹部は直線的。	口縁部が削り、底部はなで肩で、最大径を1/2位に持ち、腰下部に直線へくぼみで、底部から側・子部が直線的。底部は平底。	口縁部が削り、底部はなで肩で、最大径を1/2位に持ち、腰下部に直線へくぼみで、底部から側・子部が直線的。底部は平底。	10.8 28.7 25.0	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部2/3焼成
515 第83回 図版50	P-552 E-4 V-a層	亞	丸みを持って2つも上がる副部。底部は平底。	口縁部が削り、底部はなで肩。	口縁部が削り、底部はなで肩。	10.5 30.2	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部1/2焼成、 底部はなで肩
516 第83回 図版50	P-497 E-3 V-a層	亞	側部はややくぼに屈曲する。肩部はなで肩。	口縁部が削り、底部はなで肩。	口縁部が削り、底部はなで肩。	10.5 30.2	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部1/2焼成、 底部はなで肩
517 第83回 図版50	P-401 B-3 V-a層	亞	側部は心ややくぼに屈曲し、外反して薄く。口部は薄く突起り。	口縁部が削り、底部はなで肩。	口縁部が削り、底部はなで肩。	12.0 38.1	胎土 やや粗 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部1/2-1/3焼 成、底部生存
518 第83回 図版50	P-365 A-3 V-a層	亞	側部は削りし、口縁部は瘦く、わずかに外反して薄く。口部は厚く、側部は薄く。	口縁部が削り、底部はなで肩。	口縁部が削り、底部はなで肩。	12.9 36.1	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部1/2-1/3焼 成、底部生存
519 第84回 図版51	P-552 E-4 V-a層	亞	側部は削りし、口縁部は瘦く、わずかに外反して薄く。口部は厚く、側部は薄く。	口縁部が削り、底部はなで肩。	口縁部が削り、底部はなで肩。	12.9 36.8	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部1/2-1/3焼 成、底部生存
520 第84回 図版51	P-926 C-2 V-a層	亞	側部は球形で、最大径を中央位に持つ。底部は平底。	口縁部は削りし、側部は球形で、最大径を中央位に持つ。底部は平底。	口縁部は削りし、側部は球形で、最大径を中央位に持つ。底部は平底。	9.5 12.2 17.7	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部1/2-1/3焼 成、底部生存
521 第84回 図版51	P-1423 E-3 V-a層	亞	側部は球形でハバの字状に彫り、口部は強く盛り起り。	口縁部が削りし、側部は球形でハバの字状に彫り、口部は強く盛り起り。	口縁部が削りし、側部は球形でハバの字状に彫り、口部は強く盛り起り。	7.3 12.0 13.4	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	口縁部・口縁部 1/2-1/3焼成、底 部生存
522 第84回 図版51	P-552 D-2 V-a層	亞	側部は最も厚く、口縁部はハバの字状に彫り、口部は強く盛り起り。	口縁部が削りし、側部は球形でハバの字状に彫り、口部は強く盛り起り。	口縁部が削りし、側部は球形でハバの字状に彫り、口部は強く盛り起り。	7.3 12.0 10.8	胎土 磨痕 (石英) 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟 白色粘土 雪舟	側部1/3-2/3焼 成、底部生存

第15表 弥生土器・土師器観察表II

規範番号 器種番号 固版番号	器物番号 GND 固版番号	種類	形態の特徴	残物の特徴	①外側 ②内側	法量 (ml)	始 上 成 色 期	備考
523 第84回 固版51	P-713 C 3 Vn層	亞	頭部はおもに円錐形。口縁部は外反する。外表面の後方に横アーチで横縫合を施させる。口縁部は幅広く、直角的に向外する。腹部は丸い。底部は平底。	小頭部のたれ形。口縁部は幅広く、横アーチで横縫合を施させる。口縁部は幅広く、直角的に向外する。腹部は丸い。底部は平底。	口縁 脚部	7.0 7.6 10.5 13.3	動土 帆(石英・白色粒子 赤色粒子・輝石含有) 焼成 普通 色調 SYR8/4 淡褐色	口縫部/1/残存。 樂樂・深軽立身
524 第84回 固版51	P-1376 E 2 Vn層	要	頭部はおもに円錐形。口縁部は幅広く、直角的に向外する。腹部は丸い。底部は平底。	小頭部缺け(下)。側部は直角的に向外する。腹部は丸い。底部は平底。	口縁 脚部	9.0 8.6 (12.6)	動土 貝(灰青・石灰・安山岩片・白色粒子・輝石含有) 焼成 普通 色調 SYR4/6 淡褐色	山麓部2/3・標高 標高4-5 車中越1/6 残存
525 第84回 固版51	P-1339 F 4 Vn層	亞	頭部は球形で、最大径を中位に持つ。	小頭部・斜傾ハケ後、中央部のみ内反する。下位は平行サテナギ腰窓。上位は半球形腰窓ナゲ(心型)。下位は斜傾腰窓ナゲ。	口縁 脚部	12.0 (14.2) 6.0	動土 帆(石英・黑色粒子含 有) 焼成 普通 色調 10YR7/2 に赤い黄	脚部1/2 残存
526 第84回 固版51	P-500 D 4 Vn層	要	頭部はおもに円錐形。口縁部は幅広く、直角的に向外する。腹部は球形で、最大径を中位に持つ。底部は平底。	小頭部缺けだが、底部のため辨識不能。小頭部缺けだが、底部のため辨識不能。	口縁 脚部	13.3 23.6 (13.3)	動土 帆(石英・黑色粒子 白色粒子・赤色粒子・白 色含有) 焼成 普通 色調 7.5YR7/3 に赤い黒	脚部2/3 残存。底 部完全
527 第84回 固版51	P-254 C 3 Vn層	埋	頭部は球形だが、中位からやや狭くなる。腹部は中位に持つ。	口縁部は直角に膨張する。頭部は球形で、中位に持つ。底部は平底。	口縁 脚部	5.9 19.2 11.9	動土 帆(石英・黑色粒子 白色粒子・赤色粒子含 有) 焼成 おもじ好 色調 7.5YR5/4 に赤い黒	脚部2/2・底盤5/6 残存
528 第84回 固版51	P-442 B 3 Vn層	埋	頭部はおもに球形で、口縁部は外反する。口縁部は直角に向外する。腹部は球形で、最大径を中位に持つ。底部は平底。	口縁部花彫ナゲ。頭部缺けのため不明。 口縁部腰窓ナゲ。頭部花彫ナゲ。	口縁 脚部	11.1 9.6 9.7 3.5	動土 帆(石英・黑色粒子 白色粒子・白色含有) 焼成 普通 色調 2.5YR 5/6 明赤褐	脚部1/2残存。底 部完全
529 第84回 固版51	P-792 B 3 Vn層	要	器壁は厚く、やわらぎを持ちながら立ち上がりが顯著。底部は平底。	口縫下半球形斜傾ハケ。底部ハケ。4脚部 ハケ(下)。	口縁 脚部	2.8 (7.3)	動土 帆(石英・黑色粒子 白色粒子・赤色粒子含 有) 焼成 普通 色調 7.5YR6/6 暗	第84回2/3残存。 底部1/5完全
530 第84回	P-851 C 1 Vn層	要	頭部はあるにやけに屈曲し、口縁部は幅広く、直角的に向外する。腹部は球形で、最大径を中位に持つ。底部は平底。	小頭部・斜傾ハケ。頭部斜窓が残る。 口縫部腰窓ナゲ。頭部半球形斜傾ハケ。頭部 直角が残る。	口縁 脚部	12.5 [5.7]	動土 帆(石英・白色岩石片) 焼成 普通 色調 10YR7/4 に赤い黒	口縫部1/4残存。 割頂1/5残存
531 第84回	P-670 C 1 Vn層	要	頭部は非常に中心に屈曲し、口縁部は幅広く、直角的に向外する。腹部は球形で、最大径を中位に持つ。底部は平底。	口縫部腰窓ナゲ。頭部半球形斜傾ハケ。頭 部斜窓が残る。頭部直角が残る。腹部は球形で、 最大径を中位に持つ。底部は平底。	口縁 脚部	12.0 [13.7]	動土 帆(石英・白色岩石片) 焼成 普通 色調 7.5YR7/4 に赤い黒	口縫部1/3残存。 割頂1/5残存
532 第85回	P-409 B 2 Vn層	要	頭部はおもに円錐形で、口縁部は外反する。腹部は球形で、最大径を中位に持つ。口縁部は直角に向外する。	口縫部花彫ナゲ。頭部斜窓が残る。頭部 斜窓が残る。頭部ハケ。頭部斜窓ナゲ。頭部 斜窓が残る。	口縁 脚部	13.3 [8.6]	動土 帆(石英・白色粒子 赤色粒子・輝石含有) 焼成 やや灰質 色調 SYR7/4 暗	口縫部1/4 残存。 頭部1/6 残存
533 第85回	P-787 D 2 Vn層	要	頭部はおもに円錐形で、口縁部は幅広く、直角的に向外する。口縁部は直角に向外する。腹部は球形で、最大径を中位に持つ。底部は平底。	口縫部花彫ナゲ。頭部斜窓ハケ。頭部直 角ハケ。頭部斜窓ナゲ。頭部斜窓ハケ。頭部 斜窓ナゲ。頭部ハケ(右-左)。底部は平底。	口縁 脚部	14.6 8.9 72.1 17.9	動土 帆(石英・白色粒子 赤色粒子・輝石含有) 焼成 普通 色調 7.5YR7/4 暗	口縫部1/4 残存。 頭部2/4 残存。 頭部1/1 残存
534 第85回	P-787 D 2 Vn層	要	頭部はあるにやけに屈曲し、口縁部は幅広く、直角的に向外する。腹部は球形で、最大径を中位に持つ。口縁部は直角に向外する。	口縫部花彫ナゲ。頭部斜窓ハケ。頭部直 角ハケ。頭部斜窓ナゲ。頭部斜窓ハケ(右-左)。 頭部斜窓ナゲ。頭部斜窓ハケ(右-左)。	口縁 脚部	13.3 [5.7]	動土 帆(石英・黑色粒子 赤色粒子・不含) 焼成 普通 色調 10YR3/4 暗	口縫部1/2 残存
535 第85回 固版52	P-433 B 2 Vn層	埋	頭部はあるにやけに屈曲す。頭部は球形で、最大径を中位に持つ。口縁部は直角に向外する。	口縫部花彫ナゲ。頭部斜窓ハケ。頭部直 角ハケ。頭部斜窓ナゲ。頭部斜窓ハケ(右-左)。 頭部斜窓ナゲ。	口縁 脚部	19.3 [34.4]	動土 帆(石英・武政岩片) 焼成 普通 色調 7.5YR7/4 に赤い黒	固版52/4 残存
536 第85回 固版52	P-816 B 2 Vn層	要	頭部はあるにやけに屈曲す。頭部は球形で、最大径を中位に持つ。口縁部は直角に向外する。	口縫部花彫ナゲ。頭部斜窓ハケ。頭部直 角ハケ。頭部斜窓ナゲ。頭部斜窓ハケ(右-左)。 頭部斜窓ナゲ。	口縁 脚部	20.0 [20.0] 11.8 23.2	動土 帆(石英・黑曜岩片) 焼成 普通 色調 10YR3/3 に赤い黒	口縫部1/1・頭部 1/1 残存
537 第85回	P-1203 D 4 Vn層	要	頭部はあるにやけに屈曲す。頭部は幅広く、直角に向外する。腹部は球形で、最大径を中位に持つ。	口縫部花彫ナゲ(右-左)。頭部斜窓ハ ケ。頭部斜窓ナゲ。頭部斜窓ハケ。頭部直 角ハケ。頭部斜窓ナゲ(右-左)。頭部斜 窓ナゲ。	口縫部 脚部	13.8 [13.8] 23.2	動土 帆(石英・黑色粒子 白色粒子・不含) 焼成 普通 色調 7.5YR4/2 灰暗	口縫部-胸中部 1/2 残存
538 第85回	P-1422 R 3 Vn層	要	頭部は球形で、口縫部は直角的に向外する。口縫部は直角に向外する。	口縫部斜窓ハケ後、横ナギ。頭部斜窓 ハケ。頭部斜窓ナゲ。頭部斜窓ハケ。頭部 斜窓ナゲ。	口縫部 脚部	14.3 [16.2]	動土 帆(石英・黑色粒子 白色粒子・不含) 焼成 普通 色調 SYR7/4 に赤い黒	口縫部1/6 残存
539 第85回	P-1376 B 2 Vn層	要	頭部はおもに球形で、口縫部は直角的に向外する。頭部は球形で、最大径を中位に持つ。	口縫部斜窓ハケ後、横ナギ。頭部斜窓 ハケ。頭部斜窓ナゲ(右-左)後、横ナギ。頭部 斜窓ナゲ。頭部斜窓ナゲ(右-左)後、横ナギ。 ②口縫部斜窓ハケ(右-左)後、横ナギ。	口縫部 脚部	[12.8] [4.3]	動土 帆(石英・黑色粒子 白色粒子・不含) 焼成 普通 色調 5.5YR5/6 明赤褐	口縫部1/5 残存
540 第85回 固版52	P-757 P 4 Vn層	要	頭部はおもに球形で、口縫部は直角的に向外する。頭部は球形で、最大径を中位に持つ。	口縫部斜窓ハケ後、横ナギ。頭部斜窓 ハケ。頭部斜窓ナゲ(右-左)後、横ナギ。	口縫部 脚部	[11.0] [9.3] [13.3]	動土 帆(石英・黑色粒子 白色粒子・不含) 焼成 普通 色調 7.5YR4/1 灰暗	口縫部1/2 残存

第15表 弥生土器・土師器観察表(1)

地城番号 種類番号 国版番号	遺物番号 G100 種類	形態の特徴	柱法の特徴 ①外面 ②内面	注量 (cm)	胎 土 燒 成 色	後 考
541 第86回 図版52	P-316 E 4 V-a層 變	縁部はくの字状に弧曲し、口縁部は直線的 に開く。口部底はく面取り。腹部は球形 で、最大径を中位に持つ。側部は直線的 にひざみ。	①口縁部底はく後、横テグ。側上干部 横テグ。側下干部は不規則な横テグ。 側壁はカク。側ドリボは不定方向。側壁 は厚め。側壁は側面に凹み。側部は側面に ひざみだが、腹底の内側は直線的。底面は 丸味がある。	口径 (15.5) 身高 (18.5) 基部 (18.3)	胎土 磁青 (石英・白色石英 合有)、赤色粘子合有 底面 灰青 色調 SYR6/4 オホイ-青	口縁部は丸味。 側上部は直線的。 側部は2段有
542 第86回 図版52	P-354 C 3 V-a層 變	縁部はくの字状に弧曲し、口縁部は直線的 に開く。口部底はく面取り。腹部は球形で、最 大径を中位に持つ。	①口縁部底カク、側横テグ。側上干部 横テグ。側下干部後、横テグ。側部横テグ。底 部上半部に圓滑な直線性。	口径 16.9 身高 (18.3)	胎土 やや粗 (石英・黑色粘子 合有)、白色石英・赤色粘子合有 底面 灰青 色調 SYR6/4 オホイ-青	口縁部は丸味。 側上部に圓滑な直線性。
543 第86回 図版52	P-433 B 2 V-a層 變	縁部はくの字状に弧曲し、口縁部は直線的 に開く。口部底はく面取り。腹部は球形で、最 大径を中位に持つ。	①口縁部底カク、側横テグ。側上干部 横テグ。側下干部後、横テグ。側部横テグ。底 部上半部に圓滑な直線性。	口径 (14.0) 身高 (27.3) 基部 (15.6)	胎土 磁青 (石英・白色石英 合有)、赤色粘子合有 底面 灰青 色調 SYR6/4 オホイ-青	口縁部は丸味。 側上部は直線的。 側部は2段有
544 第86回 図版52	P-499 D 3 V-a層 變	縁部はくの字状に弧曲し、口縁部は直線的 に開く。口部底はく面取り。腹部は球形で、最 大径を中位やや下部に持つ。	①口縁部底カク、側横テグ。側上干部横テグ。 側下干部後、横テグ。側部横テグ。底 部上半部に圓滑な直線性。	口径 15.9 身高 (17.5) 基部 (26.7)	胎土 磁青 (石英・白色石英 合有)、赤色粘子・薄青合有 底面 灰青 色調 10YR6/3-2ホホイ-青	口縁部は下部直 線性有 側部全面に直線性
545 第86回 図版52	P-798 D 3 V-a層 變	直角に弧曲し、口縁部は外反して開く。口 部底はく。腹部は球形で、最大径を中位 に持つ。	①口縁部底カク、側横テグ。側上干部横テグ。 側下干部後、横テグ。側部横テグ。底 部上半部に圓滑な直線性。	口径 (13.1) 身高 (17.3)	胎土 やや粗 (石英・黑色粘子 合有)、白色石英・赤色粘子合有 底面 灰青 色調 7.5YR6/4-浅青	口縁部は下部直 線性有 側部全面に直線性
546 第86回 図版52	P-924 B 3 V-a層 變	縁部はくの字状に弧曲し、口縁部は直線的 に開く。口部底はく面取り。腹部は丸味。 腹底はくで、腹部は直線的。	①口縁部底カク、側横テグ。側上干部横テグ。 側下干部後、横テグ。側部横テグ。底 部上半部に圓滑な直線性。	口径 (10.5) 身高 (15.6)	胎土 磁青 (石英・黑色石英 合有)、赤色粘子・薄青合有 底面 灰青 色調 SYR6/4 オホイ-青	口縁部は丸味。 側上部は直線的。 側部は2段有
547 第86回 図版52	P-497 E 3 V-a層 變	縁部がゆるやかに弧曲し、口縁部はやや長 く、直角的に開く。口部底は丸味。	①口縁部底カク、側横テグ。側上干部横テグ。 側下干部後、横テグ。側部横テグ。底 部上半部に圓滑な直線性。	口径 (14.2) 身高 (17.1)	胎土 磁青 (石英・黑色石英 合有)、赤色粘子・薄青合有 底面 灰青 色調 SYR6/4 オホイ-青	口縁部は丸味。 側上部は直線的。 側部は2段有
548 第86回 図版52	P-1359 F 4 V-a層 變	縁部が弧曲し、口縁部は直線的に開く。外 口部唇部付近を取扱う。口部底は丸味。	①口縁部底カク、側横テグ。側上干部横テグ。 側下干部後、横テグ。側部横テグ。底 部上半部に圓滑な直線性。	口径 (17.3) 身高 (18.2)	胎土 磁青 (石英・黑色粘子 合有)、白色石英・赤色粘子・白色 粘子合有 底面 灰青 色調 7.5YR6/4-浅青	口縁部は丸味 側部全面に直線性
549 第86回 図版52	P-296 A 2 V-a層 變	S字彫。口縁部は上段が尖出する。全周的 に唇縁は厚い。	①口縁部底カク、側上干部横テグ・側下 干部横テグ。側上・側下干部後、横テグ。側 部横テグ。底上半部横テグ。	口径 (18.1) 身高 (18.1)	胎土 磁青 (黑石・石英、黑 色粘子)、白色粘子・赤色粘子・白 色粘子合有 底面 灰青 色調 7.5YR6/3-2ホホイ-青	口縁部は下部直 線性有 側部全面に直線性
550 第86回 図版52	P-514 E 4 V-a層 變	S字彫。口縁部は上段が尖出する。全周的 に唇縁は厚い。	①口縁部底カク。側上干部横テグ・側下 干部横テグ。側上・側下干部後、横テグ。側 部横テグ。底上半部横テグ。	口径 (14.4) 身高 (18.1)	胎土 磁青 (黑石・石英、黑 色粘子)、白色粘子・赤色粘子・白 色粘子合有 底面 灰青 色調 SYR6/4-2ホホイ-青	口縁部は下部直 線性有 側部全面に直線性
551 第86回 図版52	P-566 F 4 V-a層 變	S字彫。口縁部は大きく突出する。全周的 に唇縁は厚い。	①口縁部底カク。側上干部横テグ・側下 干部横テグ。側上・側下干部後、横テグ。側 部横テグ。底上半部横テグ。	口径 (15.7) 身高 (18.1)	胎土 やや粗 (石英・黑色粘子 合有)、白色粘子・赤色粘子・白 色粘子合有 底面 灰青 色調 7.5YR6/3-2ホホイ-青	口縁部は丸味。 側部全面に直線性
552 第87回 図版53	P-514 E 4 V-a層 變	S字彫の複合形。外側部に唇縁は薄く、側 部内側に唇縁は厚い。	①口縁部底カク。側上干部横テグ・側下 干部横テグ。側上・側下干部後、横テグ。側 部横テグ。底上半部横テグ。	口径 (9.3) 身高 (12.2)	胎土 やや粗 (石英・石英、黑 色粘子)、白色粘子・赤色粘子・白 色粘子合有 底面 灰青 色調 10YR6/3-2ホホイ-青	胎土部は丸味。 側部全面に直線性
553 第87回 図版53	P-365 A 3 V-a層 變	縁部は弧曲し、口縁部は直線的に開く。口 部底は丸味。縁部は球形で、最大径を中位 に持つ。底部は平底で、削平部は外反形状か に立ち上がり、削下部下端よりは厚壁をもつ くる。	①口縁部底カク。側横テグ。側上・側下 干部上部横テグ。側上・側下干部後、横テグ。側 部横テグ。底上半部横テグ。	口径 (13.6) 身高 (4.0) 基部 (11.3)	胎土 磁青 (石英・白色粘子 合有)、赤色粘子・白石英 底面 灰青 色調 SYR6/4-2ホホイ-青	口縁部は丸味。 側上部は直線的。 側下部は2段有
554 第87回 図版53	P-1337 G 3 V-a層 變	直角部は厚く、口縁部は直線的に開く。口 部底は丸味。縁部は球形で、最大径を中位 に持つと思われる。	①口縁部底カク。側横テグ。側上・側下 干部上部横テグ。側上・側下干部後、横テグ。側 部横テグ。底上半部横テグ。	口径 (18.7) 身高 (9.7) 基部 (21.9)	胎土 磁青 (石英・白色粘子 合有)、赤色粘子・白石英 底面 灰青 色調 7.5YR7/3-2ホホイ-青	口縁部は下部直 線性有 側部全面に直線性
555 第87回 図版53	P-498 B 3 V-a層 變	縁部は弧曲し、口縁部は直線的に開く。 底部は丸味。底部はテラコテ。	①口縁部底カク。側横テグ。側上・側下 干部上部横テグ。側上・側下干部後、横テグ。側 部横テグ。底上半部横テグ。	口径 (7.3) 身高 (25.1) 基部 (18.4)	胎土 磁青 (石英・黑色石英 合有)、赤色粘子合有 底面 灰青 色調 SYR6/4-2ホホイ-青	口縁部は下部直 線性有 側部全面に直線性
556 第87回 図版53	P-400 E 3 V-a層 變	縁部底は丸く、ハの字底に直線的に開く。	①口縁部底カク。側横テグ。側上・側下 干部上部横テグ。側上・側下干部後、横テグ。側 部横テグ。底上半部横テグ。	口径 (8.8) 身高 (9.4)	胎土 磁青 (石英・黑色粘子 合有)、赤色粘子合有 底面 灰青 色調 SYR6/6 鮎	口縁部は下部直 線性有 側部全面に直線性
557 第87回 図版53	P-589 F 4 V-a層 變	縁部底は丸く、ハの字底に直線的に開く。	①口縁部底カク。側横テグ。側上・側下 干部上部横テグ。側上・側下干部後、横テグ。側 部横テグ。底上半部横テグ。	口径 (7.4) 身高 (14.4)	胎土 磁青 (石英・白色石英 合有)、赤色粘子合有 底面 灰青 色調 10YR6/3-2ホホイ-青	口縁部は丸味。 側部全面に直線性
558 第87回 図版53	P-386 B 2 V-a層 變	縁部底は丸く、ハの字底に直線的に開く。	①口縁部底カク。側横テグ (右→左)。	口径 (8.8) 身高 (16.1)	胎土 磁青 (石英・黑色粘子 合有)、白色粘子・赤色粘子 底面 灰青 色調 SYR6/4 オホイ-青	縁部底は丸味。

第15表 弥生土器・土師器觀察表(13)

拘束番号 拘束番号 因数番号	遺物番号 GRID 因数番号 位番	種類	形態の特徴	技法の特徴 ①外観 ②内面	法量 (cm)	胎 土 焼 成 色 調	備考
559 第87回 因数53	P-645 F-4 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	口内後・腹足・脚台・脚部ハク。③脚部ハク後。脚部横拉ハタ。	底径 9.4 高さ [5.3]	動土・普通 (石英・黑色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 10YR7/2 にひい・黄褐	脚台部・脚部は完全	
560 第87回 因数53	P-372 C-2 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③脚部足端ナカ後、脚部横拉ハタ。④脚部ハク後。脚部横拉ナカ。	底径 7.6 高さ [4.2]	動土・やや粗 (石英・黑色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 7.5YR11/4 普通	脚台部・脚部は完全	
561 第87回	P-112 B-3 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③脚部足端ナカ後、脚部横拉ナカ。④脚部ハク後。脚部横拉ハタ・足端不完全のハタ。	底径 9.4 高さ [7.0]	動土・普通 (石英・オレンジ・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 2.5YR7/4 淡赤褐	脚台部のみ残存	
562 第87回 因数53	P-374 D-2 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③脚部下部ハタ・脚部横拉ハタだが、要減のため接觸不明。④脚部足端ナカ・脚部下部横拉ハタ・脚部下部脚部ハタが、要減のため接觸不明。	底径 10.2 高さ [10.1]	動土・普通 (石英・黑色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 SYR6/6 橙	脚台部のみ完全	
563 第87回	P-670 C-1 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③脚部下部横拉ハタ後、脚部横拉ナカ。④脚部横拉ナカ・脚部横拉ハタ・脚部横拉ハタ・脚部足端ナカ・脚部横拉ナカ・脚部足端ナカ。	底径 [9.1]	動土・普通 (石英・黑色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 2.5YR7/4 にひい・橙	脚台部1/2残存	
564 第87回 因数53	P-1425 F-3 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③脚部下部横拉ハタ後、脚部横拉ナカ。④脚部横拉ナカ・脚部横拉ハタ・脚部横拉ナカ・脚部足端ナカ。	底径 [10.3] 高さ [8.2]	動土・普通 (石英・黑色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 10YR6/6 黄褐	脚部は完全、脚台部・脚部1/2残存	
565 第87回 因数53	P-474 B-3 V-a層 要	直線的大型で、脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③脚部ハタ・④脚部下部横拉ハタ。脚部上部横拉ナカ・脚部横拉ナカ。	底径 [12.3] 高さ [8.0]	動土・やや粗 (石英・黑色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 SYR7/4 にひい・橙	脚台部1/3残存	
566 第87回 因数54	P-458 C-4 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③要減のため手削・④脚部横拉ハタが、要減のため接觸不明。脚部足端横拉ハタ後、上部横拉ナカ。	底径 [10.0] 高さ [6.2]	動土・普通 (石英・黑色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 10YR3/3 (未発見)	脚部は完全、脚台部1/3残存	
567 第87回	P-709 C-3 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③要減のため手削。	底径 9.0 高さ [6.6]	動土・やや粗 (石英・黑色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 10YR3/3 にひい・橙	脚台部のみ完全、脚部1/3残存	
568 第87回 因数54	P-1339 F-4 V-a層 要	脚台部は低く、ハの字状に直線的に聞く。	③脚部横拉ハタ・脚部横拉ナカ。	底径 9.3 高さ [3.8]	動土・やや粗 (石英・黑色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 2.5YR3/5 明赤褐	脚台部・瓶底1/4残存	
569 第88回 因数54	P-316 E-4 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③脚部横拉ナカ後、脚ナカ。脚部ナカナカ・脚部足端横拉ナカ・脚部横拉ナカ・脚部足端横拉ナカ。	底径 [8.6] 高さ [5.3]	動土・やや粗 (石英・黑色粒子・白色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 7.5YR7/2 明赤褐	脚台部・瓶底1/2残存	
570 第88回 因数54	P-745 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③脚部横拉ハタ後。④脚部指ナカ・脚部横拉ナカ (左・右)。	底径 10.4 高さ [6.7]	動土・普通 (石英・黑色粒子・白色粒子・白色粒子・白色粒子・薄石含有) 成形・普通 色調 SYR5/3 にひい・紫褐	脚台部完全	
571 第88回 因数54	P-533 V-a層 要	脚台部はの溝は小さく、直線的に聞く。 脚部下部から底部は直線的に立ち上がる。	③脚部下部横拉ハタ (右→左)・脚部下部横拉ナカ (左→右)・脚部横拉ナカ (右→左)。	底径 7.1 高さ [7.0]	動土・普通 (石英・白色粒子・薄石含有) 成形・やや好 色調 7.5YR6/4 にひい・紫褐	脚部・瓶底1/2残存 脚部・脚部1/2は完全	
572 第88回 因数54	P-747 C-1 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。 脚部は底面から直線的に立ち上がる。	③脚部横拉ハタ・脚部横拉ナカが、要減のため接觸不明。脚部足端横拉ナカ・脚部横拉ナカ・脚部足端横拉ナカ。	底径 [3.3] <td>動土・普通 (石英・白色粒子・白色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 10YR7/3 にひい・橙</td> <td>脚部・瓶底1/3残存 脚部は完全</td> <td></td>	動土・普通 (石英・白色粒子・白色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 10YR7/3 にひい・橙	脚部・瓶底1/3残存 脚部は完全	
573 第88回	P-1378 F-4 V-a層 要	脚台部はハの字状にやや外径気味に聞く。	③脚部横拉指ナカ (右→左)・④脚部横拉ナカ (右→左)・⑤脚部横拉ナカ (右→左)・⑥脚部横拉ナカ (左→右)。	底径 9.8 高さ [6.4]	動土・普通 (石英・黑色粒子・白色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 3.5YR7/1 淡白	脚台部・瓶底1/2残存 外縁にスス付着	
574 第88回	P-502 B-3 V-a層 要	器壁は比較的低い小形の脚台部で、ハの字状に直線的に聞く。	③要減のため手削。	底径 [7.6] 高さ [5.3]	動土・普通 (石英・黑色粒子・白色粒子・白色粒子各含有) 成形・普通 色調 SYR7/6 橙	脚台部は完全	
575 第88回	P-721 R-3 V-a層 要	脚台部はハの字状に直線的に聞く。	③脚部下部斜削ハタ。脚部上部脚部ハタ後。右上カリナカ。脚部下部横拉ハタヘリガタ。④脚部横拉ハタ (左→右)・脚部横拉ナカ。	底径 [7.6] 高さ [5.3]	動土・普通 (石英・黑色粒子・白色粒子・薄石含有) 成形・普通 色調 7.5YR6/4 橙	脚台部完全	
576 第88回	P-552 S-4 V-a層 高杯	全体下部は平底で、唇を持ち、上半部は直線的に聞く。口部部は丸い。	③脚部ハタヒガタ後。口縁横指ナカ。④脚部横拉ナカ。	口径 [13.9] 高さ [5.7]	動土・普通 (石英・黑色粒子・白色粒子・白色粒子・薄石含有) 成形・やや良好 色調 7.5YR7/4 にひい・橙	脚部1/2残存 環状部は完全	

第15表 弥生土器・土師器観察表(1)

測定番号 標印番号 回収番号	遺物番号 GNID 回収番号	種類	形態の特徴	技法の特徴		法量 (cm)	胎土 焼成 或 色調	備考
				①外面	②内面			
577 第88回 回収54	P-1376 E-2 Va層	高环	环部は裏面的に大きく聞く。口唇部は丸い。 口唇部は裏面的に大きく聞く。口唇部は丸い。	①环部裏面はラミガキ。裏面は環状に凹凸する。 ②环部裏面はラミガキ。	口径 高さ	16.6 16.7	胎土：やや粗（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子合有 焼成：普通 色調：SYR5/4 に近い赤褐色	河原1/3残存
578 第88回	P-789 D-2 Va層	高环	环部は下部に僅に持ち、裏面的に大きく聞く。 口唇部は丸い。	①环部裏面はラミガキ。口唇部裏面ナマ。 ②环部裏面はラミガキ。 。	口径 高さ	18.6 16.5	胎土：やや粗（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子・白色 粒子合有 焼成：普通 色調：ZTR6/6 暗	河原4/5残存
579 第88回 回収54	P-129 A-2 Va層	高环	环部は下部に二つに幅を持ち、やや内側に向いて聞く。 口唇部は丸い。脚部はハバ字状に開き、輪郭は無気力。	①口唇部裏面ナマ後、环部下部を輪郭にて持つ。 ②环部裏面ナマ後、脚部裏面ナマ後。 。丁寧な輪郭はラミガキ。脚部裏面ナマ後。 脚部上部には輪郭の透かし。 环部下部は輪郭ナマ後、环部裏面ナマ後。 脚部裏面ナマ後。环部下部はラミガキ。 脚部裏面ナマ後。	口径 高さ	13.0 8.9 7.9	胎土：石英（石英等） 烧成：普通 色調：SYR7/4 に近い暗褐色	河原1/2残存、 河原部、輪郭充てん
580 第88回 回収54	P-483 D-3 Va層	高环	环部は内青灰釉に附す。口輪部はわずかに内凹する。口唇部は丸い。	①内青灰釉ナマ。环部裏面はラミガキ。 ②环部裏面ナマ後、环部下部を輪郭にて持つ。	口径 高さ	16.0 16.0	胎土：やや粗（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子合有 焼成：普通 色調：ZTR7/5 暗	河原1/4残存
581 第88回 回収54	P-237 D-2 Va層	高环	环部は内青灰釉に附す。环部は内青灰釉に ぶら下垂をもって大きく外反する。环部は 裏面三角形の輪郭を持つ。	①口唇部裏面ナマ後。环部裏面はラミガキ後、輪 郭ナマガキ。环部裏面は輪郭にて持つ。 ②环部裏面ナマ後、环部下部輪郭ナマガキ。	口径 高さ	18.0 16.0	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子合有 焼成：普通 色調：SYR4/6 赤褐色	河原1/4残存、 河原部に近い部分 内面全面にスヌス付 着
582 第88回 回収54	P-1221 P-2 Va層	高环	脚部はハバ字状に開き、底部が内青灰釉に 附がる。	①脚部裏面ナマ後、脚部上部に3箇所の 窓あけ。	口径 高さ	12.0 17.7	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子合有 焼成：普通 色調：ZTR6/6 暗	河原1/4残存
583 第88回 回収54	P-589 F-4 Va層	高环	脚部は丸く、ハバ字状に開く。	①脚部裏面ナマ後及び2段目。 ②环部裏面ナマ後、脚部裏面ナマ後（ハ バ字）。	口径 高さ	12.7 16.1	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子合有 焼成：普通 色調：SYR6/6 暗	河原1/2・河原1/3 残存
584 第88回	P-720 C-3 Va層	高环	脚部はハバ字状に直線的に聞く。	①ハバ字後、脚部裏面ナマガキ。 ②环部裏面ナマ後、脚部裏面ナマ後（ハ バ字）。	口径 高さ	12.0 16.7	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子合有 焼成：普通 色調：ZTR7/7 沈水性	河原1/2・河原1/3 残存
585 第88回	P-1423 E-3 Va層	高环	脚部はハバ字状に直線的に聞く。	①脚部裏面ナマガキ後、脚部裏面ナマ後。 脚部裏面3箇所の窓あけ。 ②环部裏面ナマ後。	口径 高さ	10.0 17.0	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子・白色 粒子合有 焼成：普通 色調：ZTR7/1 沈水性	河原1/2残存
586 第88回	P-496 D-3 Va層	高环	脚部はハバ字状に直線的に聞く。	①脚部裏面ナマガキ。裏面は環状に凹凸する。 ②环部裏面ナマ後と上部に3箇所の窓あけ。 ③环部裏面ナマ後。	口径 高さ	10.0 16.0	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子合有 焼成：普通 色調：ZTR7/7 暗	河原1/4残存
587 第85回 回収55	P-961 C-1 Va層	高环	脚部は丸く、底部は大きめ外反して広がる。 脚部裏面は油垢跡。	①脚部裏面ナマ後、脚部上部に3箇所の窓あけ。 ②环部裏面ナマ後。	口径 高さ	16.5 16.0	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子・白色粒子合有 焼成：普通 色調：SYR7/6 暗	河原1/5残存、脚部 内面全面に油垢
588 第89回 回収55	P-1231 F-4 Va層	器台	器受部は直線的に聞く。口唇部は丸い。	①器受部裏面ナマ。窓に脚部裏面が残る。 ②环部裏面ナマ後。	口径 高さ	11.0 14.8	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子・黑色 粒子合有 焼成：普通 色調：SYR7/3 に近い暗褐色	器受部1/2残存
589 第89回 回収55	P-316e E-4 Va層	器台	器受部は直線的に聞く。脚部裏面は丸い。	①器受部裏面ナマ。脚部裏面はハバ字状に開く。 ②环部裏面ナマ後。	口径 高さ	8.6 10.0 9.0	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子・黑色 粒子合有 焼成：普通 色調：ZTR9/3 に近い暗褐色	器受部1/2・脚部 1/4残存
590 第89回 回収55	P-698 G-3 Bg層	器台	器受部は丸く広がり、口唇部外縁に棱をつくる。 脚部裏面は直線的に聞く。	①器受部裏面ナマ後。器受部裏面はラミガキ。 ②环部裏面ナマ後。	口径 高さ	10.0 10.0 7.8	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子・赤色粒子・白色 粒子合有 焼成：普通 色調：ZTR7/6 暗	河原1/2・脚部 1/4残存
591 第89回	P-514 E-4 Va層	器台	器受部は丸く広がり、口唇部は直線的に聞く。 脚部裏面は外気泡跡に開く。	①器受部裏面ナマ後。器受部裏面はラミガキ。 ②环部裏面ナマ後。	口径 高さ	7.0 7.0	胎土：普通（石英・白色粒子） 白色粒子・赤色粒子合有 焼成：普通 色調：SYR4/4 に近い赤褐色	器受部1/3・脚部 1/4残存
592 第89回 回収55	P-723 C-4 Va層	鉢	折り返し口縁部。脚部はハバ字状に開く。 口唇部は直線的に聞く。口唇部は直線的に 開き、輪郭はやや内凹して広がる。	①脚部裏面ナマ。他是輪郭のハバ字状。 ②环部裏面ナマのため不規則。脚部裏面ナマ。 脚部裏面ナマ後。	口径 高さ	11.0 10.0 9.0	胎土：やや粗（石英・白色粒子） 白色粒子・赤色粒子・白色 粒子合有 焼成：普通 色調：10YRE/2 次實地	河原1/12残存
593 第89回	P-121 C-1 Ja層	鉢	器受部は直線的に聞く。底部は縦縫で、底盤に付す。 底盤に縦縫。	①器受部裏面ナマ。他是輪郭のハバ字状。 ②环部裏面ナマ。	口径 高さ	4.7 5.5 3.6	胎土：普通（石英・黑色粒子） 白色粒子 焼成：普通 色調：SYR 6/6 暗	器受部1/3・底盤 1/2残存

第15表 弥生土器・土師器觀察表(15)

地點番号	遺跡番号	GRID	種類	形態の特徴	技法の特徴	⑤外縁 ⑥内縁	法量 (cm)	拾 土 燒 成 色	備考
594 第89回 図版55	F-1376 P-2 V-a層	鉢	底盤は円筒型、口部を平とする。腹壁はややくわに膨張し、口部部は非常に大きくなっている。	口縁脚付鉢で、底丸の脚付上部が有る。体部脚付ナット、腹上部に斜面ハゲが残る。口部は脚付ナット、体部脚付板ナット。口部に脚付ハゲが残る。	口縁脚付鉢で、底丸の脚付上部が有る。体部脚付ナット、腹上部に斜面ハゲが残る。口部は脚付ナット、体部脚付板ナット。	口径 19.5cm 器高 17.5cm	粘土 大木楓 (石英・黑色粒子 白色粒子・赤色粒子・輝 石・磁青・青) 燒成 色調 色調 7.5YR7/3 に近い深	口縁脚付鉢中 1/4段存	
595 第89回 図版65	P-787 D-2 V-a層	鉢	底盤は直線的に開く。口唇部は平たい。底盤には凹部。	口縁脚付鉢ナット。体部脚付及び脚付ヘッドナット。腹部外方に指紋压痕が残る。口部に脚付板ナット。	口径 8.5cm 器高 4.8cm 基盤 5.2cm	粘土 半済 (石英・白色粒子 赤色粒子・青) 燒成 色調 色調 2.5YR8/4 に近い赤	口縫合・全体形 13/12浅腹、底部 窓穴		
596 第89回 図版55	P-270 C-4 V-a層	鉢	口縁部は円筒型で、口部部は直面形。最大径を中位に持つ。底盤には底面。	口縁上半部脚付ナットで、指紋压痕が残る。口部に脚付板ナット (左上→右下)。 口縫合脚付板ナット (下→上)。	口径 9.5cm 器高 2.7cm 基盤 7.5cm	粘土 小木楓 (石英・黑色粒子 白色粒子・赤色粒子・青) 燒成 色調 色調 2.5YR8/4 に近い赤	粘土・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		
597 第89回	P-440 C-3 V-a層	壺	底盤は扁平形、口部部は直面形で、底盤は中央に持つ。底盤には底面。	口縁脚付板ナット。体縫合脚付ナット。口縫合脚付ナット後、体縫合ナット。	口径 13.0cm 器高 9.5cm	粘土 半済 (石英・薄色粒子 白色粒子・赤色粒子含有) 燒成 色調 色調 10YR7/4 に近い黄褐	口縫合・全体形1/3 残存 全体部分にスス 付着		
598 第89回 図版55	P-500 D-4 V-a層	壺	底盤は柱状あるやかに屈曲し、口部部は直面形で、底盤は中央に持つ。底盤には底面。	口縫合脚付ナットが残るが、これは脚付部のため脚付形。口縫合脚付ナット、腹上半部脚付ナット (左→上)。	口径 10.9cm 器高 3.9cm 基盤 5.7cm	粘土 大木楓 (石英・黑色粒子 白色粒子・赤色粒子含有) 燒成 色調 色調 2.5YR7/4 に近い赤	口縫合・全体形/ 底部窓穴 存		
599 第89回	P-428 C-4 V-a層	壺	底盤はくの字形に屈曲し、口部部は直面形で、底盤は中央に持つ。底盤には底面。	口縫合脚付ナット。脚縫合脚付ナット。体縫合ナットのため脚付形。口縫合脚付ナット、腹上半部脚付ナット (左→上)。	口径 10.4cm 器高 5.5cm 基盤 10.2cm	粘土 半済 (石英・黑色粒子 白色粒子・赤色粒子含有) 燒成 色調 色調 2.5YR8/6 司馬港	口縫合・全体形/ 底部窓穴 存		
600 第89回	P-413 C-2 V-a層	壺	底盤に中央部が瘤むづみを有する。	口縫合ナット。2つ目み縫合脚付ナット。体縫合ナットの板ナット。	口径 4.0cm 器高 3.2cm	粘土 神浦 (石英・黑色粒子 白色粒子・赤色粒子含有) 燒成 色調 色調 7.5YR8/4 に近い赤	えみ上部には泥存 在 外縁部分にスス 付着		
601 第89回 図版55	P-566 P-1 V-a層	壺	体縫合内火透して立ち上がる。口部部は直面形で、底盤は丸型。	口縫合脚付ナット。体縫合ナットが残る。底盤のため内火透。底盤のため小火透。	口径 10.3cm 器高 2.8cm	粘土 大木楓 (石英・黑色粒子 白色粒子・赤色粒子含有) 燒成 色調 色調 2.5YR8/6 横	口縫合・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		
602 第89回 図版55	P-571 P-4 V-a層	壺	底盤は扁平形で、口部部は直面形で、底盤は丸型。底盤には底面。	口縫合ナット。底部縫合脚付ナット。底盤部に脚付孔。口縫合脚付ナット。	口径 7.1cm 器高 4.8cm 基盤 6.6cm	粘土 小木楓 (石英・黑色粒子 白色粒子・白色粒子含有) 燒成 色調 色調 7.5YR8/4 横	口縫合・全体形 1/2段存		
603 第89回 図版55	P-1376 P-2 V-a層	亞	底盤は扁平形で、口部部は直面形で、底盤は丸型。底盤には底面。	口縫合脚付ナットで、底盤部に脚付孔。口縫合脚付ナット。底盤部に脚付孔。口縫合脚付ナット。底盤部に脚付孔。	口径 7.1cm 器高 4.3cm 基盤 6.1cm	粘土 半済 (黑色粒子含有) 燒成 色調 色調 7.5YR8/4 に近い赤	口縫合・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		
604 第90回	P-778 D-2 V-a層	壺	折ち立蓋式。口縫合は外取式。口縫合部は直面形で、底盤は丸型。	口縫合脚付ナット。口縫合部に脚付孔のうえに豆足状の脚付孔。その上に豆足状の脚付孔。口縫合部に脚付孔。	器高 13.0cm	粘土 半済 (黑色粒子含有) 燒成 色調 色調 7.5YR8/2 黒褐	口縫合・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		
605 第90回 図版55	P-275 D-2 V-a層	壺	複合口縫合。口縫合は直面形で立ち上がり。口縫合部は直面形。	口縫合脚付ナット。口縫合部に脚付孔のうえに豆足状の脚付孔。口縫合部に脚付孔。	器高 13.0cm	粘土 半済 (心貝・白色粒子 黑色粒子) 燒成 良好 色調 2.5YR8/3 に近い黄	口縫合・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		
606 第90回 図版55	P-448 C-2 V-a層	壺	復合口縫合。口縫合部は直面形で立ち上がり。口縫合部は直面形。	口縫合脚付ナットで、口縫合部に脚付孔のうえに豆足状の脚付孔。口縫合脚付ナット。	器高 12.2cm	粘土 豊浦 (石英・白色粒子 黑色粒子含有) 燒成 良好 色調 7.5YR8/4 に近い赤	口縫合・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		
607 第90回	P-778 B-2 V-a層	壺	折ち立蓋式。口縫合部は直面形で立ち上がり。口縫合部は直面形。	口縫合脚付ナットで、口縫合部に脚付孔のうえに豆足状の脚付孔。口縫合脚付ナット。	器高 12.0cm	粘土 豊浦 (石英・白色粒子 黑色粒子含有) 燒成 良好 色調 7.5YR8/4 に近い赤	口縫合・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		
608 第90回	P-282 D-2 V-a層	壺	口縫合脚付ナット。脚突起。口縫合部は直面形で脚付孔。	口縫合脚付ナット。脚突起。	器高 12.0cm	粘土 半済 (石英・黑色粒子 白色粒子) 燒成 良好 色調 10YR8/2 黑褐	口縫合・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		
609 第90回	P-114 A-2 V-a層	壺	底盤はヘリ形で、ハケ付孔とともに内火透がある。内火透は内火透のみである。	口縫合脚付ナット。ハケ付孔とともに内火透がある。内火透は内火透のみである。	器高 10.5cm	粘土 半済 (石英・黑色粒子 白色粒子含有) 燒成 良好 色調 7.5YR8/6 明褐	口縫合・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		
610 第90回 図版55	P-6 C-4 V-a層	壺	底盤はハリ形で、ハケ付孔とともに内火透がある。	口縫合脚付ナット。底盤部に脚付孔がある。	器高 6.3cm 器高 14.0cm	粘土 大木楓 (石英・黑色粒子 白色粒子) 燒成 良好 色調 7.5YR8/6 明褐	口縫合・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		
611 第90回	P-746 C-2 V-a層	壺	底盤はハリ形で、ハケ付孔とともに内火透がある。	口縫合脚付ナット。底盤部に脚付孔がある。	器高 6.3cm 器高 14.0cm	粘土 大木楓 (石英・黑色粒子 白色粒子) 燒成 良好 色調 5YR8/6 棕	口縫合・側面窓 体上半部1/3残存 体下部・底部窓穴 存		

第15表 弥生土器・土器師観察表(6)

実戦番号	遺物番号 標因番号 伝承番号	植物	性状の特徴	技法の特徴 ①外觀 ②裏面	法寸 (cm)	胎上 被成 色	備考
612 第90回	F-501 A 3 Va層	高環	小型で、鋤部はハの字状に直線的に削る。	①縫合接合ナダ。②輪郭鋸歯ハナケ。③下側 面特に鋸歯ハナケ。④鋤部はハの字状に削る。 ⑤胎部は丸い。	法寸 底径 身高 4.11	胎土、やや白（石英、白色粘子 白色粒子、赤色粘子、緑 石英有） 被成、普通 色調 7.5785/4 にぶい緑	直線11/16切分、鋤 部1/4斜存
613 第90回 図版55	F-787 D 2 Va層	鉢	直線から棒棒にかけてハの字状に削る。更 に口縁部にかけて直と並み立ち上がり。 口唇部は尖る。底部は平底と思われる。	①耐候接合ナダ（左上・右下）。②指揮注 がが多く残る。③横位置ナダ、横位置ナダ 。	法寸 底径 身高 16.16 15.21 6.67	胎土、普通（石英、黄色粘子 白色粘子、白色粒子、白色 粒子有） 被成、普通 色調 7.5785/2 にぶい緑	口縫1-2強1/2 薄存 内外面全体的にス スリ留着
614 第90回	F-366 B 1 Va層	皿	小型で全体的に唇後に高い。胎部は縁を得 てゆるやかに延長し、①縫合部は大きくな く。②唇部は高い。体部は斜状に内凹する。	①唇ナダ。②唇ナダ。	法寸 底径 身高 13.2	胎土、普通（石英、黄色粘子 白色粘子、白色粒子、赤色 粘子有） 被成、普通 色調 5.0785/3 にぶい緑	口縫1/10、体部 1/2残存
615 第90回	F-697 E 2 Va層	高環	小型の鉢。鋤部はハの字状に削る。底部は 唇後で広がる。	①底部のため不明。縫合部に2重削の 跡があり、底部頂部に残り痕。胎は堅膜の ため不明。	法寸 底径 身高 15.9 14.0	胎土、普通（石英、陳石英有） 被成、普通 色調 10YR7/3 にぶい黄	縫合1/4斜存
616 第90回 図版55	F-727 D 5 Va層	小型の鉢。鋤部はハの字状に直線的に削 る。	①唇ナダ。②當時推定力のため不明。③縫 合位置ナダ。	法寸 底径 身高 16.0 14.0	胎土、普通（石英、白色粘子 白色粘子有） 被成、普通 色調 7.5787/1 にぶい緑	縫合1/17完全	
617 第90回 図版55	F-434 D 3 Va層	高環	小型の鉢。鋤部はハの字状に直線的に削く。 底部は唇後して広がる。	①唇ナダ。②縫合接合ナダ。③縫合部に残り 痕。	法寸 底径 身高 13.0	胎土、普通（石英、白色粘子 白色粘子有） 被成、普通 色調 7.5787/4 にぶい緑	縫合1/2残存
618 第90回 図版55	F-417 D 3 Va層	高環	小型の鉢。鋤部はハの字状に削る。底部は 唇後して広がる。	①縫合接合ナダ。②縫合接合ナダ。③縫合部の ため不明。	法寸 底径 身高 13.0	胎土、普通（石英、黄色粘子 白色粘子、白色粒子、赤色 粘子有） 被成、普通 色調 5.0785/1 にぶい赤緑	縫合1/17完全、 縫合2/3残存
619 第90回	F-1283 F 4 Va層	壺	新規に直線的に立ち上がり。底部は平底。	①底部のため不明。②深い板ナダ（下→ 上）。	法寸 底径 身高 6.2 5.3	胎土、普通（石英、陳石英有） 被成、普通 色調 7.5787/3 にぶい緑	縫合2/3残存、底 部完全
620 第90回	F-473 A 3 Va層	瓶	小型の壺。鋤部はエンタシス状を呈すると 思われる。底部は平底と思われる。	①縫合接合ハナケ。②下半部底端ハナケ 部、半ナダ。③縫合ナダ。	法寸 底径 身高 4.0 3.2	胎土、やや白（石英、黄色粘子 白色粘子有） 被成、普通 色調 7.5786/6 にぶい緑	縫合部～底部1/4斜 存
621 第90回	F-430 A 3 Va層	壺	小型の壺。鋤部はエンタシス状を呈すると 思われる。底部は平底がやや膨らむ。	①底部ハナケ。②縫合痕が残る。③底部左 側が多く残る。	法寸 底径 身高 3.5 4.8	胎土、普通（石英、白色粘子 白色粘子、赤色 粘子有） 被成、普通 色調 7.5786/4 にぶい緑	縫合1/3残存、底 部完全
622 第90回	F-396 B 3 Va層	亞	中程度で、全体的に胎壁は薄い。鋤部は丸 くを落す。最大径を中軸に持つ。底部は平 底。	①唇ナダ。②唇ナダ。	法寸 底径 身高 1.3 1.8	胎土、普通（石英、白色粘子 白色粘子有） 被成、普通 色調 10YR6/3 にぶい黃綠	縫合部～底部3/4残 存

(2)土製品

全部で21点出土しており、うち17点は土錘である。今回図示したのは土錘以外の土製品と、遺存状態の良好な土錘の計11点である。

623～625は土製勾玉である。623は左側表面が一部欠落している他は完形である。624は完形である。625は前2点と比べ大型であるが、下半部が欠落している。3点とも色調は淡黄褐色で、焼成は良好である。指頭圧痕が残るが、特に625は著しい。また、3点とも孔に紐の擦痕と思われる跡が残っている。626は土製紡錘車と思われる。色調は淡黄褐色で、焼成は良好である。半分程欠落しているが、中央の孔は確認できる。孔は両側から穿孔されている。表面には指頭圧痕が残る。627も土製紡錘車と思われる。高壊あるいは器台の接合部を転用したものである。色調は淡黄褐色で、焼成は良好である。全面的に摩滅しているが、壊部あるいは器受部の接合痕は確認できる。また、脚部のあった下側は打ち欠いて成形しているようである。中央部に2ヶ所、穿孔の痕跡がある。1ヶ所は貫通し、もう1ヶ所は非貫通である。非貫通孔は下側から、貫通孔は主に上側から穿孔している。両側から貫通させようとして失敗したのかかもしれない。

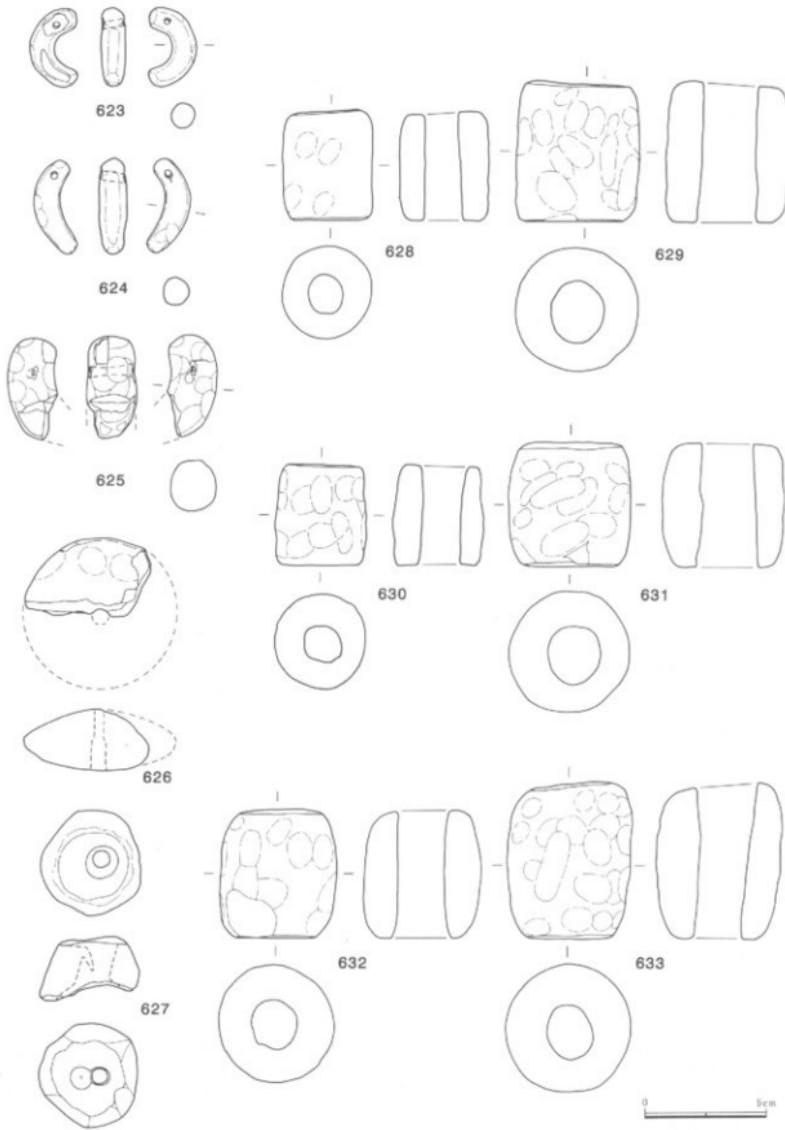
628～633は土錘である。6点とも完形または完形に近い残存状態である。いずれも円筒形で側面形態は長方形あるいは正方形に近く、外面には指頭圧痕が無数に残存し、孔の内面には棒状の工具を回しながら引き抜いた痕跡が見られる。おそらく棒に粘土を巻き付けて指で外面を調整し、その後棒を引き抜いたのであろう。また、632・633以外は上面及び下面が平らであり、意図的に平坦面を作りだしていると思われる。色調に関しては628～632は淡桃色で、633は褐色である。焼成に関しては6点とも良好であるが、628～632は硬くしまっている。

これら土錘は寸法や重量から大きく、①長さ4cm程度で重量60g前後の土錘、②長さ5～6cmで重量150g程度の土錘、と2つのパターンに分かれる。土錘の出土点数が少ないため、今回は傾向を示すのみに留まるが、上錘にある一定の規格が存在する可能性がある。なお、どちらの場合でも内孔の径は1.5cm前後が最も多い。

土錘の年代観についてであるが、633は出土層位から弥生時代～古墳時代で問題ないが、628～632は歴史時代の土層・遺構からほぼ完形の状態で出土していることや、同じ土錘でも633とは焼成が異なるということから、中世の遺物であるという見方ができる。しかし古墳時代の土錘は円筒形を呈し、古代～中世の上錘は紡錘形を呈するというのが一般的である。北部東京湾岸で出土した土錘の研究例があるが（谷口1991）、ここでも円筒形の土錘は古墳時代前期に東海地方から伝播してきたと結論づけている。今回の調査で出土した上錘は、弥生時代～古墳時代の遺物が歴史時代の包含層や遺構に混入したとみるのが無難であろう。

第16表 土製品（弥生時代～古墳時代）一覧表

掲載番号	押印番号	図版番号	遺物番号	GRID	出土層位・遺構	種類	法量(cm)			備考
							長さ	外径	孔径	
623	91	57	Pt-14	B-2	Va層	勾玉	3.2	1.0	0.2	4.91
624	91	57	Pt-22	F-2	土集3	勾玉	3.9	1.1	0.2	4.92
625	91	57	Pt-29	C-2	Va層	勾玉	4.2	2.1	0.2	15.13
626	91	57	Pt-5	A-3	Va層	紡錘車	[6.3]	2.5	(0.6)	28.56
627	91	57	Pt-44	E-4	Va層	転用土錘?	4.3	[2.8]	0.7	29.95 高壊の脚上部(転用前)
628	91	57	Pt-20	G-3	IV層	土錘	4.5	3.7	1.2	60.02
629	91	57	Pt-3	C-1	IIa層	土錘	5.8	5.1	1.5	144.40
630	91	57	Pt-19	G-3	IV層	土錘	4.1	3.8	1.7	55.83
631	91	57	Pt-4	D-1	IId層	土錘	5.1	5.1	1.7	115.42
632	91	57	Pt-18	G-3	SD-1	土錘	5.3	4.9	1.5	103.41
633	91	57	Pt-21e	E-2	土集3	土錘	6.4	5.2	1.7	132.91



第91図 土製品実測図（弥生時代～古墳時代）

(3)石製品

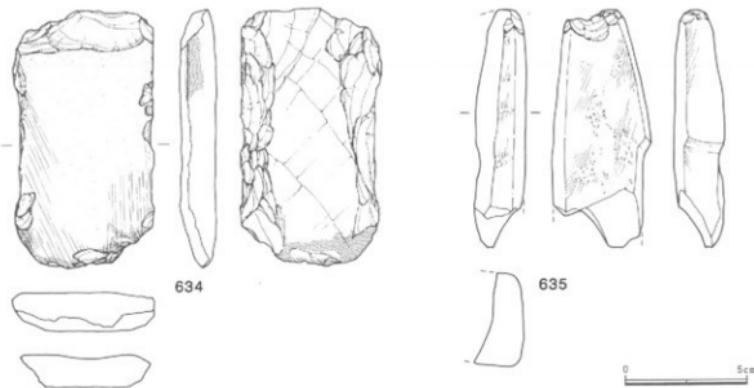
20点を図示した。634は打製石斧である。基礎部が欠損している。左右側面に縦縛痕が残っている。また、刃部に使用痕が確認できる。635は柱状片刃石斧の破片と思われる。全体の1/4しか残存していないと思われる。

636~643は砥石あるいは砥石と考えられる遺物である。636は上面及び下面が欠落しているが、それ以外の5面が使用されている。637は正面の1面のみ使用している。638は正面と裏面の2面を使用している。右側面は敲打痕が確認できる。完形である。639は左側面が磨り面である磨石の可能性がある。上部が欠損しており、右側面と下面の2面に敲打痕が確認できる。640は上面及び下面を除く4面が使用されている。完形である。641は正面2箇所と裏面・左側面の4面が使用されている。642は正面と右側面の2面が使用されている。643は正面2箇所が研ぎ面である可能性があるため、砥石として図示した。

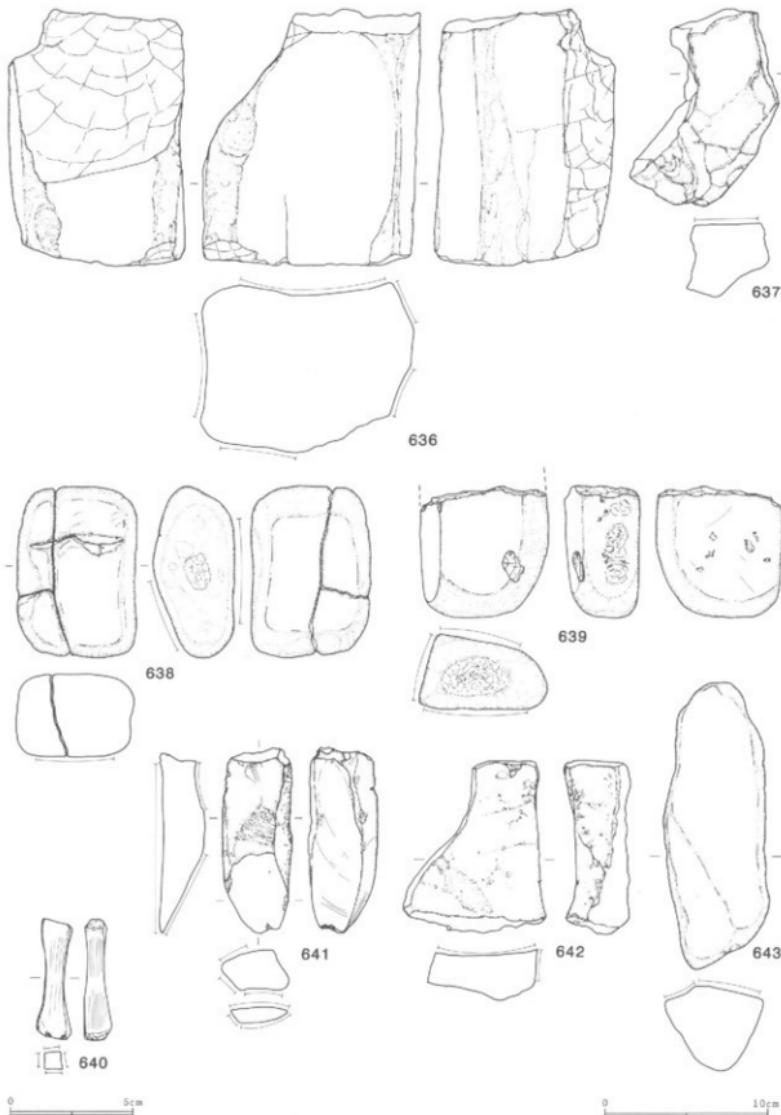
砥石はその大きさから、置き砥石と手持ち砥石に分けられる。また、研ぎの仕上げ段階で砥石を分類することができる。さらに石材によって、金属器を研いだのか、あるいは石器を研いだのかを知ることができる。今回図示した中では、636・638などが置き砥石であり、640・641などが手持ち砥石である。いずれも金属器の研ぎ用で、仕上げ砥である。

644~649は敲石である。644は裏面を除く5面を使用している。完形である。645は特に下面を使用している。上面は磨り面も見られる。完形である。646は上面が欠落している。左右側面と下面を使用しているが、主に下面を使用している。647は6面とも使用している。完形である。648は下面を使用している可能性があるため、図示した。649は歴史時代の遺構であるSP-7-6の礫石として出土した。そのため歴史時代の遺物の可能性があるが、単に敲石を使用したにすぎないと思われる。裏面を除く5面を使用している。完形である。

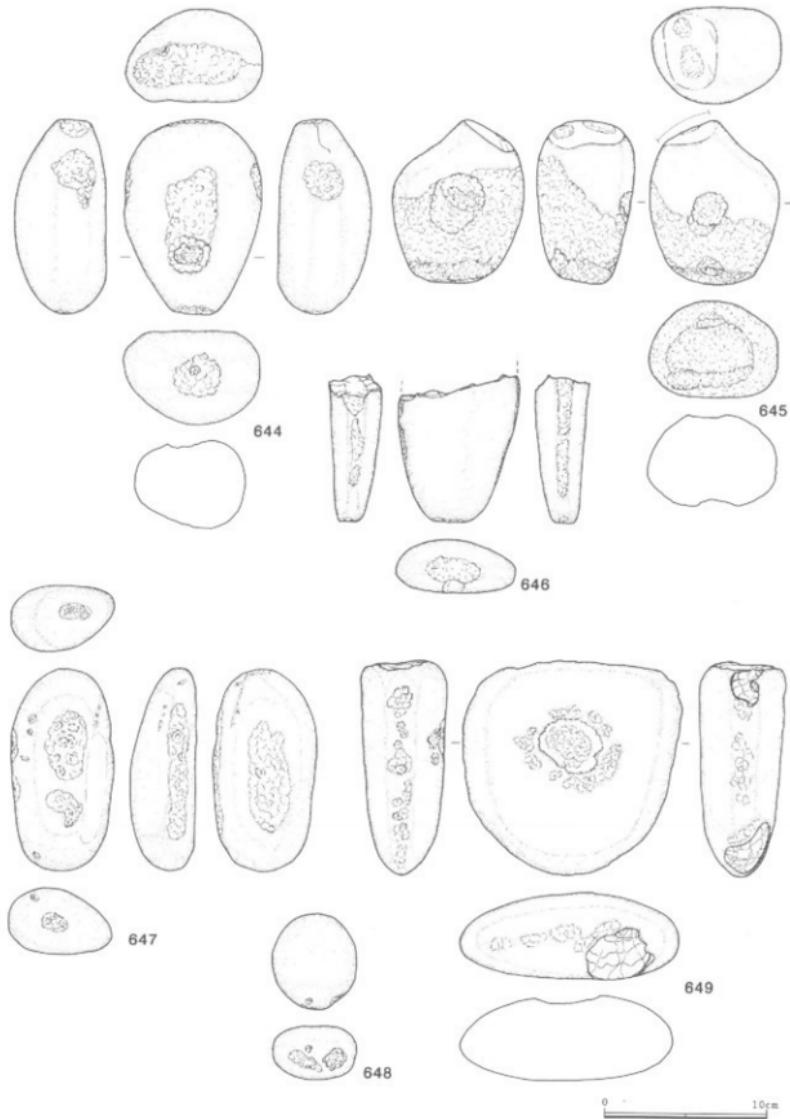
650は磨石である。正面が磨面である。他に上下左右の4面に敲打痕が残る。完形である。651も磨石と思われる。右側面が磨面である。下側に敲打痕が残っており、単なる敲石である可能性もある。652は黒耀石で作られている。黒耀石の剝片は多く出土したが、石器と判断できるものはこの1点のみであった。上端部及び右下端部が欠落している。遺物の用途・時期は不明である。653は管玉である。碧玉で作られており、孔は両側から穿孔されている。穿孔の孔径は約0.3cmである。今回の調査で出土した管玉はこの1点のみである。



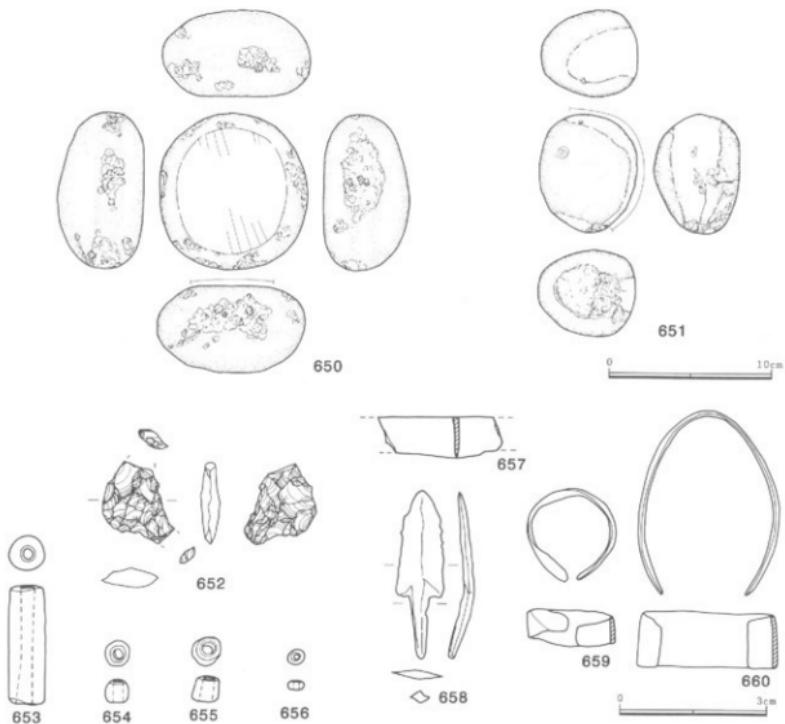
第92図 石製品実測図（弥生時代～古墳時代）1



第93図 石製品実測図（弥生時代～古墳時代）2



第94図 石製品実測図（弥生時代～古墳時代）3



第95図 石製品・ガラス製品・金属製品実測図（弥生時代～古墳時代）

(4)ガラス製品

全部で3点出土した。3点ともカリガラスである。654・655はコバルトにより青色に発色している。654は上面・下面が平らであり、側面形態は楕円形気味である。土器集中出土地点3から出土した。655は上面・下面が平らであり、側面形態は長方形である。656は銅により淡青色に発色している。側面形態は楕円形である。SD-1から出土しており、混入と考えられる。

(5)金属製品

全部で4点出土した。このうち遺構出土はSB-4から出土した657のみである。他の3点は包含層出土であるため、時期は弥生～古墳時代という幅でしか捉えられない。657は青銅製品である。左右両端が欠落している。下側が特に薄く、刀子状の製品の一部ではないかと考えている。658は銅鎌である。鎌身部の平面形は三角形であり、両鍛造であるが鎌はあまり明瞭ではない。逆刺は発達していない。茎部は断面菱形であり、鉄型のずれが観察できる。椿野遺跡や川合遺跡等で出土した銅鎌と形態的に類似しており、これらから類推すると、658の時期は弥生時代後期の可能性が考えられる。659は銅環である。銅板を折り曲げて円形を作りだしている。県内における銅環の出土例は、登呂遺跡・伊場遺跡など10数例しかなく、その大半が弥生後期の拠点遺跡からの出土である。660は用途不明品である。楕円形を呈して

おり、銅板を折り曲げて作りだしている。山木遺跡では、過去の調査において銅釧が出土している。660はこれとは全く異なる製品であり、銅釧の可能性はあるものの全体的に厚みがなく、別種の遺物としておきたい。

第17表 石製品（弥生時代～古墳時代）一覧表

掲載番号	拠図番号	図版番号	遺物番号	GRID	出土層位・遺構	種類	材質	法量(cm)			重量(g)	備考
								長さ	幅	厚さ		
634	92	57	S-15	A-3	Va層	斧	硬砂岩	10.5	5.8	1.6	143.70	
635	92	57	S-59	C-2	Va層	柱状片刃石斧	硬砂岩	9.8	4.1	2.1	108.32	
636	93	57	S-128	B-2	SB-7	砥石	石英安山岩	15.8	13.2	10.9	3040.09	図版28.3
637	93	57	S-113	E-4	SB-10	砥石	角閃石安山岩	13.0	9.2	4.5	512.95	
638	93	57	S-112	C-3	SB-2	砥石	矽石	10.5	7.3	5.0	708.60	
639	93	57	S-68	F-4	Va層	砥石	矽石	8.0	7.8	4.6	489.11	
640	93	57	S-109	E-4	SP-400	砥石	シルト岩	5.0	1.4	1.2	7.70	第48図(SB-10) P8
641	93	57	S-36	A-3	IV層	砥石	流紋岩	11.3	4.3	2.8	140.75	
642	93	57	S-118	E-2	土集3	砥石	流紋岩	10.6	8.7	4.1	289.88	
643	93	57	S-121	E-2	土集3	砥石	輝石安山岩	17.5	6.5	5.4	762.62	
644	94	58	S-131	E-4	SP-400	砥石	石英安山岩	11.9	8.4	5.7	928.55	第48図(SB-10) P8
645	94	58	S-124	E-2	土集3	砥石	辉石岩	10.0	8.0	6.9	740.67	
646	94	58	S-120	E-2	土集3	砥石	硬砂岩	9.1	7.4	3.2	265.02	
647	94	58	S-11	C-1	IV層	砥石	石英質砂岩	12.5	5.0	4.0	443.28	
648	94	58	S-58	B-2	SP-76	凹石	辉石安山岩	13.1	12.5	5.3	1272.66	
649	94	58	S-138	C-1	IIg層	敲石	石英安山岩	5.9	5.1	3.3	146.78	
650	95	58	S-22	C-1	SP-1	敲石	辉石安山岩	9.5	9.0	5.3	656.97	
651	95	58	S-25	F-4	Ⅲ層	敲石	流紋岩質鈍石	7.3	6.0	5.3	179.81	
652	95	58	S-3		Ⅳ層	用途不明	黑曜石	2.2	1.5	0.4	0.78	
653	95	58	B-3	B-3	Va層	管玉	碧玉	2.5	0.8		2.48	

第18表 ガラス製品一覧表

掲載番号	拠図番号	図版番号	遺物番号	GRID	出土層位・遺構	種類	材質	法量(cm)			重量(g)	備考
								長さ	外径	孔径		
654	95	58	B-4	F-2	土集3	ガラス小玉	カリガラス	0.5	0.5	0.2	0.15	
655	95	58	B-1	C-2	Va層	ガラス小玉	カリガラス	0.5	0.5	0.3	0.21	
656	95	58	B-2	F-4	SD-1	ガラス小玉	カリガラス	0.2	0.3	0.1	0.02	

第19表 金属製品（弥生時代～古墳時代）一覧表

掲載番号	拠図番号	図版番号	遺物番号	GRID	出土層位・遺構	種類	材質	法量(cm)			重量(g)	備考
								長さ	幅	厚さ		
657	95	58	M-31	C-2	SB-4	用途不明	青銅	2.6	0.9	0.1	0.99	
658	95	58	M-14	B-2	Va層	銅鑼	銅	3.5	0.9	0.2	1.86	
659	95	58	M-30	C-3	Va層	銅鏡	青銅	1.9	1.8	0.1	1.60	
660	95	58	M-28	E-2	Va層	用途不明	青銅	3.8	2.9	0.1	6.05	

(6) 础板・柱根

(?) 础板

础板は陥穴住居・掘立柱建物に伴う柱穴、プランは確認されていないが柱穴と考えられる小穴から全459枚が出土した。1つの柱穴が1枚から2、3枚の础板を伴う場合が多いが、5枚から10枚もの础板を持つ柱穴も見られた。础板の半数余りは劣化が著しく原形を留めていなかったが、残りの半数は残存状況が良好で、木製品中の含水率も非常に低かった。ここではそのうちの特徴的な形態を持つもの、加工痕が顕著であるものなど、90点(661~750)を第96図~第109図に示し、観察事項については第20表にまとめた。

661~664は下面側端部にホゾ状の突起を持つ板材である。擦痕が突起周辺に残存することから、これらは回転軸であったと考えられ、础板に転用される前は扉であったと推定される。いずれも上部に突起または穿孔がないことから、上部は二次加工・劣化によって失われている。また、突起のない側の側面も削られており、扉であった際の法量は不明である。661の下面には擦痕が著しく、扉として機能していた時期の使用痕と考えられる。661・663・664は追査日の板を使用し、表面は手斧(チョウナ)で調整する。662の表面には加工痕が認められないが、平坦に仕上げておらず、板目の材の一部を手斧(チョウナ)で仕上げられていたと推定される。直径12cmの円形に炭化した溝みについては、扉の加工とは考えられない。しかし、溝みのある面を下にして出土しているため、柱の座りを良くするための加工とも考えにくい。扉と础板との間に別の用途があったとも考えられる。

665~673は正面に段差が認められる材である。段差部分の頂部は割り剥がし、差はわずかとなっているが、転用前は梯子であったと推定される。段差は1箇所のみ残存しているものがほとんどであるが、672は2箇所残存し、673と接合したため、三段の梯子が復元された。672・673を接合した梯子は、全長117.5cm、幅16.3cm、段の長さは上から18.5cm、32cm、30.5cm、36.5cmと30cm前後である。上端は中央部が凸状で、これは山木遺跡の調査において出土した梯子に多く見られる形状である。上部は裏面側に傾き、下端は丁寧に調整されている。大部分が炭化していることから、火災に遭った建物の残材を础板に利用したことがわかる。この材を础板に使用したSII-7は火災後、建てられたと考えられる。665・666・668・670には段窓の上部に擦痕が残り、梯子の使用痕と推定される。このうち、665・666・670はSH-8の柱穴から出土しており、接合しないものの、同一の梯子を分割し础板に転用した可能性がある。さらに668も同一の梯子であったとすると、668の出土したSH-3はSH-8とほぼ同時期に建てられた可能性が出てくる。この4点については側面が削られており、梯子として使用された際の法量は不明である。残存する幅が21.7~30.5cmで、672・673を接合した梯子よりもかなり広い幅を持つと考えられる。667は裏面に三箇所の小孔が認められる。いずれも非貫通で、底部は炭化している。669は段が右端で削り取られている。幅は残存値で36.5cmあり、かなり幅の広い梯子であったと考えられる。上端左を弧状に切り欠いていることから、梯子として使用された後、二次加工を受け、別の用途で使用、础板として三次加工を受けている可能性がある。671はやや厚い板目材の梯子で、中央に段跡が残る。下端は段から約30cmで、下段の直上で切り取ったと推定される。上部には段の下の部分の盛り上がりや加工が見られないことから、この部分は梯子の上端であったと推定される。段差は割り剥がされているが、全面手斧(チョウナ)で加工されていたと考えられる。

674~681は上部に弧状の切り欠きを持つ材である。674・675は孔を持つ柵目材で、表面は手斧(チョウナ)で平坦に仕上げる。表面に擦痕が認められるが、础板が重なって出土しているため、これは上の础板の圧痕である。676は板目材の上部をさらに細かく手斧(チョウナ)で削り、下半部よりもやや薄く仕上げる。手斧(チョウナ)幅は下半部が5cm前後に対し、上半部は2~3cmと狭い。削りの1単位の長さも下半部が5cmに対し、上半部2cm前後と短い。左側縁部に上下から切り込んだ溝みが残る。677は

劣化が著しいものの、上部に弧状の切り欠きが認められる。弧の角度がやや大きい。678は正面に寄りに幅約4cmの溝を切る。679と形状が似るため、679と同様のものを割ったと考えられる。679は上部が半円形に切る。この部分に柱があたっていたと推定される（東京国立文化財研究所 宮本長二郎氏の御教示による）が、切り欠き部分の幅が55cmあり、径が55cm以上もある大型の柱材があたっていたかは不明である。裏面を上にして出土したため、裏面の圧痕は柱によるものと推定される。680と681はそれぞれの側面に互いに対応する孔を持つ。ここで緊縛し、接合して使用されたと考えられる。接合した際の弧状の切り欠きは径50cm前後の半円形となる。681の表面加工は676に似る。

682～684はカヤの芯持材である。それぞれ出土地点が近く、方形状に並ぶことから、同一建物の礎板であった可能性が高く、また、同一の材を割って使用している可能性がある。いずれも表面は手斧（チョウナ）で加工している。

685は樹皮が残存することから材料となった原木がかなり細いことがわかる。材に対し、やや大きめの孔を持つ。

686と687は材を横断するようにV字状の溝を切っている。上端はいずれも丁寧に切断し、下端は粗く切断することから上端は当初からの加工、下端は礎板にする際の加工と考えられる。686は正面の右下部を粗く削り取っており、当初はこの部分がやや厚みを持っていたと考えられる。687は左側を割っているため、やや幅のある板材であったと考えられる。

688～690は上部に穿孔のある方形の板材である。688は上端の角を斜めに切る。上端は当初からの加工で、下端部分で切断して礎板に用いたと考えられる。689は粗い穿孔であり、上下の切断痕も粗いことから、上下に長大な材を割ったものと考えられる。690は上下で切断方法が異なる。上端は斧状の工具で、下端は鋸と推定され、礎板に転用する際に下端を切断したと考えられる。孔は上端から約9cmの部位にあり、両側面が割れて幅が不明であるが、屋根板材の上端部分の可能性がある。

691、692は厚さ5cm前後、大型の板材である。691は上下が粗く切断されており、残存する以上に大型の部材であったことがわかる。また、692も劣化により上下端の加工が不明となっているが大型の材である。いずれも他の部材と組み合わせたと推定される穿孔がある。

693は方形のやや大きい孔を持つ板材である。下端は鋸による切断で、礎板に転用する際の加工と考えられる。上下それぞれに方形孔をもつ細長い板に形状が似る。

694は上部に横長の長方形孔を持つ板材である。厚さ1.5cmの柾目板で、かなり薄い材と言える。長方形の孔は上端から約9cmの部位に穿ち、薄い材ではあるが屋根板材の可能性がある。

695は横長方形の孔のある薄い板材である。孔のある右側がやや薄くなる。

696は右側縁に2つの孔を持つ板材である。右側縁中央にあるやや大きめの孔は右側に擦痕が認められ、この部分を緊縛していたことがわかる。また、動かしていたと推定すると、扉や蓋などの用途が考えられる。

697と698は非常に厚い板で、斜めに孔を穿つ。双方とも形状がよく似るため、同じ部材であった可能性が高い。いずれもSH-6より出土している。

699～702は接合した結果、全長222.4cmの長い板材となった。側縁に孔を穿ち、直交する材や隣の材と緊縛したと考えられる。上部の孔は上端から12cmの部位に穿ち、中に木釘が残存する。側縁の小孔は699と702に目処線が残り、直交する材との関係で穿孔していると考えられる。702は右側縁を欠損しているが、左側縁に対応する小孔があったと考えられる。左側縁の小孔は上端から上の孔までが51cm、次の孔までの孔間が34cm、次の孔間が54cm、次の孔間が48cm、下の孔から下端までが36cmである。この材は屋根板材または壁板材の可能性がある。

703～706は同一の材と考えられる。このうち704～706は接合し、83.2cmの長い板材となった。703は接

合しなかつたが、木取り・木目が似ており、右側縁が704～706に対応するように割れていることから同じ材と考えた。位置的には図が上下逆の可能性もある。

707は薄い長方形の板材で、上端から右側縁上部にかけてL字状に小孔を穿つ。また、左側縁上部の割れている部分にも3つの小孔痕が認められる。形状から、礎板として使用される前は別の部材であった可能性が高い。礎板とするには非常に薄く小さいため、高さの調節を目的として柱穴に入れられている可能性がある。

708は699～702に加工方法が似る。同様の材であったと推定される。

709は厚い材に粗い穿孔が見られる。表面に大きな円形の圧痕が見られる。径20cm前後の円柱が上に立てられていた可能性がある。

710は方形の切り欠きを持ち、左側縁中央部に小孔を穿つ。左側面は手斧（チョウナ）で丁寧に加工され、同様の部材を並べて繋結した可能性がある。

711は幅広の薄い板材である。劣化が著しいため、形状がよくわからないが、橢円形状をしている。

712～715はS-B-9の4つの主柱穴より出土し、接合された材である。接合長82.5cm、幅13.9cmで、右側縁部下方に小孔がある。上方の切り欠きは同様の孔痕と考えられ、孔間は63cmである。表面には6cmもの幅広い手斧（チョウナ）痕が残る。

716は上端10cm前後の部位に約1cmの段差を持つ。表面は手斧（チョウナ）で加工し、段を割り削がした痕跡は認められないことから、梯子ではなく、別の部材と組み合わせるために薄く削ったものと考えられる。右側縁には楕円孔があり、非常に丁寧な穿孔をしている。

717・718と719はコの字状の切り欠きを持つ材である。切り欠きは角をまず穿孔し、周囲を切り取るという方法で欠かれている。717・718は接合長62.3cm、表面調整は木目で割り、出ている部分を手斧（チョウナ）で削って平坦に仕上げている。719はほとんど調整痕が認められない。似た形状の材ではあるが、717・718は平坦であることが求められる部材であり、719は平坦でなくとも板状であれば構わないという船材であったと考えられる。また、719は右下端に弧状の切り欠きを有するため、柱材に関連する部材の可能性がある。

720・721は方形の切り欠きを持つ板材である。720は表面を手斧（チョウナ）で丁寧に加工しているのに対し、721は手斧（チョウナ）を使用するがやや粗い加工である。

722は下端に大型の方形孔を持っていた板材と考えられる。これを孔に向かって斜めに切り、あたかも、下端を尖らせるように切っている。矢板を意識して切断した可能性があるが、最終的に礎板として利用されたものか。

723～725は接合した結果、中央部に径3.5cmの円孔を持つ、全長81.5cmの細長い板であることが判明した。上部は切断もしくは欠損していると考えられる。723の上端は劣化しているが、穿孔のあった可能性が高い。いずれもS-II-1の柱穴から出土している。

726は楕円形の板材である。左側縁部にやや大型の孔を穿つ。孔を持つ板材を別の用途に使用する目的で楕円形に二次加工をしたとすれば、礎板としての利用は三次利用である。しかし、柱穴の形を意識して楕円形に削り、礎板として二次利用をしたという可能性もある。

727は右側縁に2箇所の切り欠きを持つ板材である。大部分が切り取られているが、板目材であり、2箇所の切り欠きを孔痕と見ると、長方形の板状田下駄の破片である可能性がある。

728は手斧（チョウナ）で表面調整を行なっている大型の板材である。厚さから696や712～715の接合材に形状が似ると考えられる。左側面中央部の切り欠きは孔痕と推定される。下部は粗く削り取り、右側を割り取っていると考えられ、二次加工を受ける前はかなり大きな部材であったと推定される。

729は正面と左側面に手斧（チョウナ）痕が見られ、裏面と右側面は割っていると考えられる。このた

め、元は柱材または横架材などの角材であった可能性が高く、二次加工の結果、やや厚い板状となつたと推定される。下部の切り欠きは別の部材を組み合わせた孔と考えられる。

730と731も正面と両側面には手斧（チョウナ）痕が残り、裏面は割り取られているため、元は柱材、もしくは横架材であったと推定される。後述する柱根に幅が類似する。いずれも上部に他の部材と組み合わせたと考えられるホゾ孔を持つ。同じ柱穴（S P - 2 7 2）からの出土で、手斧（チョウナ）痕や木目から同じ材を割ったものと考えられるが、接合しなかつた。

732～733は下端を矢板状に切断している材である。732は下端中央に孔を持ち、両側から孔にむかって下端が尖るように切り込む。これは722の下端の加工に似る。733は上部に段差を持ち、716に形状が似る。

734は全周に手斧（チョウナ）痕の見られる板材である。左側面下部を弧状に切り欠いている。下端は粗く切断されており、側面に長い弧状の切り欠きを持つ細長い板材であったと推定される。

735は下端を正面から刃を入れて削り落としている板材である。正面・裏面は手斧（チョウナ）で平坦に加工し、両側面は割り剥がしている。4.1cmの厚みがあり、梯子の上端部の可能性がある。

736は補修痕の残る板材である。一枚の板であったものが、補修されている部分で割れ、補修をしなければ困る部材であったことがわかる。補修は破断面に小孔を穿ち中に直交する棒を入れる方法と、かすがいで留める方法の2つの方法で行なわれている。補修の順は、棒を後から挿入することが不可能であるため、最初に直交する棒を入れ、次に外側にかすがいを打って板を留めたと考えられる。板がきちんと接合する面と接合痕は若干ずれるが、これは直交する棒を入れる孔を穿つ際にずれたためであると考えられる。

737はV字状の溝を正面と裏面に刻む。溝は上から下まで刻む長いものと、10cm前後の短いものがある。溝はややずれるものの、正裏それぞれ対応するように刻む。

738は厚い材の下半を削り取っている。この削りはやや粗く、製品として仕上げるための削りではなく切断を意識した削りである可能性がある。削りの途中に刃物痕が認められるのも、中途で何度も切断しようとした痕跡と考えられる。

739は右側面中央にに小孔を2つ穿つ。いずれも深さ0.4cmで、木釘やホゾ等を差し込めるような深さではない。右側面上端には材を割り取る際にいたと考えられる楔痕が残る。正面以外は割っており、元は角材であった可能性がある。

740～746は長方形状の板である。740は正面のみに手斧（チョウナ）の調整痕が残り、他の面は削り剥がしている。また、743・744・746は裏面を木目に沿って削っている。これらは角材を割ったという可能性がある。745は全周を削り剥がし、正面以外はあまり平坦ではない。正面には柱の圧痕が残る。

747は正面中央やや右寄りに径14cm前後の窪みを削る。窪みは上下から削り込んで成形されている。窪みのある面を下にして出土しているため、柱のすわりを良くするという目的での加工ではない。上下は鋸で直線的に切断されているが、礎板としての切断であるかは不明である。

748は正面下部に柱の圧痕が残る。両側面は加工されていると考えられ、幅約25cmの板材であったと考えられる。

749と750は接合した結果、長さ74.9cmの板材となった。750の下端は粗く切断されており、下に長く統一していたと考えられる。

樹種は667がヒノキ、682～684がカヤである以外はすべてスギであった。

上述のように形状の確認できた礎板のほとんどが加工を受けており、また、ホゾ穴や切り欠きの存するものが多かったことから、当初から礎板としての使用目的で据えたものではなく、大部分が転用材であると思われる。木製品の利用形態としては建築材等の大型の材としての利用が一次利用で、礎板としての利用は二次利用あるいは三次利用である。このため、礎板に認められる加工痕は一次加工と二次加工

とに分けることができる。一次加工と思われる加工痕の顕著な例としては表面の手斧（チョウナ）痕が挙げられる。手斧（チョウナ）痕は非常に細かいものと、1単位の間隔は広いが全面を平滑に調整するものなど多様であるが、大部分は手斧（チョウナ）痕をあたかも装飾の如く残すという点で共通している。手斧（チョウナ）痕の中で最も幅の広いものが幅6cmであり、手斧（チョウナ）の幅は大きなもので6cm以上ということがわかる。一方、幅が2~3cmという細かい手斧（チョウナ）痕もあるが、手斧（チョウナ）痕の一部を重ねるようにして次の手斧（チョウナ）列を作っており、これを手斧（チョウナ）の道具幅と考えることはできない。また、木目に沿って板状に割り取り、手斧（チョウナ）で突出する部分のみを削り平坦にする方法も見られる。二次加工以降の例としては割れ痕や切断痕がある。割れ痕とは楔などを打ち込み、割れ目を引き剥がすようにして割る痕跡であり、板目の場合は木目に沿って割れる。木目で割れた場合、比較的平坦に割れるが、一次加工と異なり手斧（チョウナ）による加工は見られない。礎板は、ある程度平坦であれば良いので、手斧（チョウナ）で削るような微調整をする必要がないと思われる。割れ痕は繊維方向である正面・裏面・両側面には多く見出されるが、繊維方向に垂直な上面・下面では見られない。切断痕は斧状の工具によって繊維方向を繊維方向を分断する特徴がある。切断方法は面に対して垂直に刃を入れて切断する方法のほか、斜めに刃を入れる方法がある。斜めに刃を入れた場合、断面がM字状を呈するものと、A字を呈するものの両方が見られる。これは長い板材を切断した際の切断部分に見られる。切断は片面のみからの切断も若干存するが、大半は正面と裏面の両面から刃を入れて切断している。厚みのある材の場合は両側から刃を入れ、間を割り取ることによって分割する。

また、礎板には圧痕の残るものがあり、これは柱の痕跡と考えられるが、礎板が複数入れられた柱穴においては上に置いた礎板の圧痕が残るものもある。柱や礎板の抜き取りを考えると上に礎板が残存していないかったとしても柱の圧痕とは断定できない。

今回検出された柱穴の中には大型の礎板を持つ建物となるものが見られた。SH-3とSH-6である。SH-3は規模が大きく、かなり太い柱を建てたことが考えられる。上端を弧状または半円状に切る板材が多く出土しており、同様の材がSH-7より出土しているため、2つの建物の同時代性が考えられる。SH-6は規模に対し、礎板が大型で厚い材を使用している。

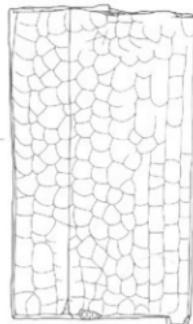
(イ) 柱根

柱根は柱穴の中に直立する形で21点出土した。柱根は全て礎板を伴っていた。大半は取り上げることができないほど劣化していたが、第110図に図示した8点は残存状況が比較的良好であった。個々の観察事項については第20表に礎板とともにまとめた。図示した柱根は全て断面が長方形であるが、出土した柱根の中には断面円形のものも存在する。

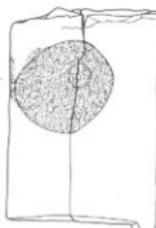
751~756はSH-1から出土したものである。各々が一直線上に並ぶように配され、1間×2間の建物となる。断面は長方形で、751や756は角面を取りし断面を隅丸長方形状にしている。752は下面に小孔が存するが、出土時に下の礎板に木釘で打ち付けられていた痕跡である。柱の幅は756が22.2cmとやや幅広である以外は、16~17cm前後となる。厚さは753が9.3cmである以外は7~8cm程度である。建物の柱としてはやや細く、SH-1はシンボル的な建物であった可能性がある。(宮本長二郎氏の御教示による)

757・758はSB-3.2から出土したものである。劣化のため形状が不明であるが、下面是平坦に加工され、断面長方形をしていたと考えられる。幅は20cm強、厚さは5cmで、木目に対し垂直方向の土圧でつぶれていますと推定される。

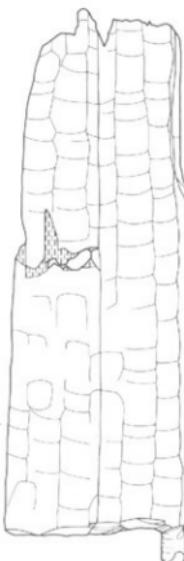
樹種は8点すべてがスギ材であった。



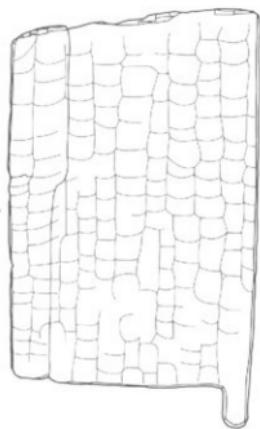
661



662



663



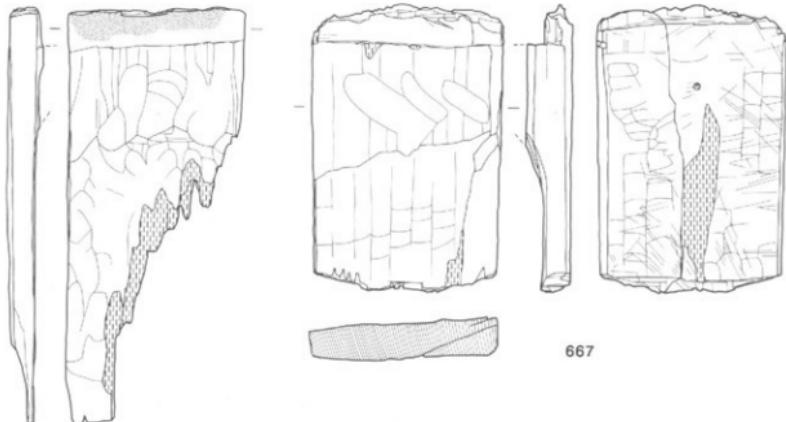
664

0 20cm



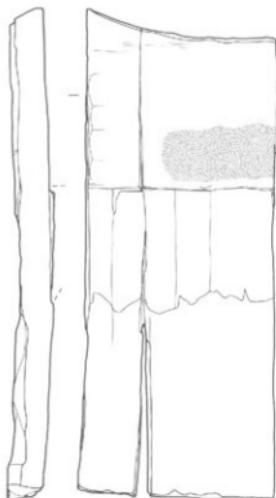
665

第96図 硅板実測図 1



667

666



668

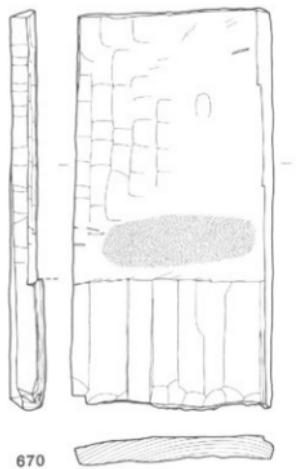
0

20cm

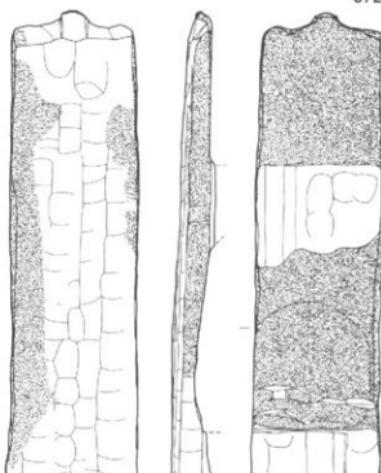
669



第97図 磁板実測図 2



670

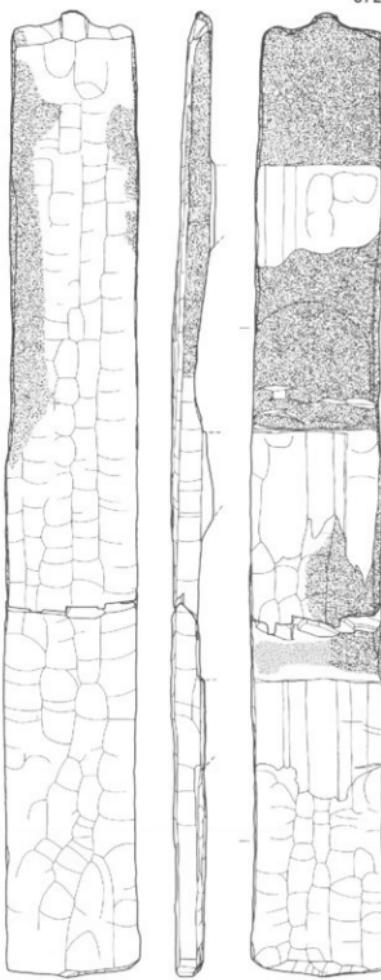


672



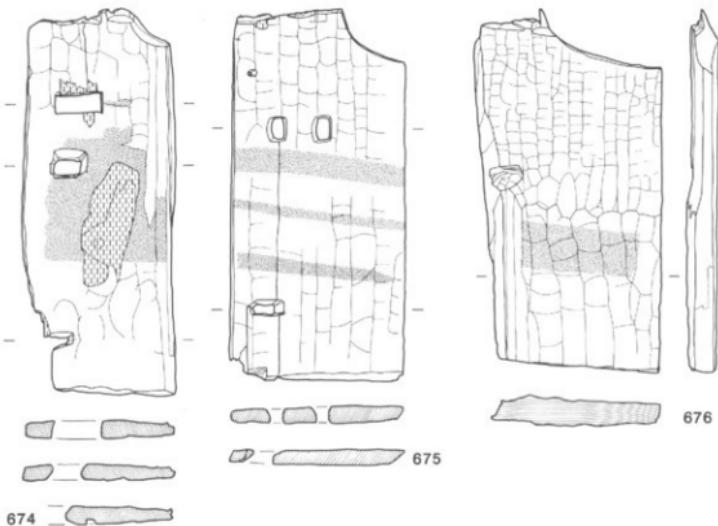
671

0 20cm

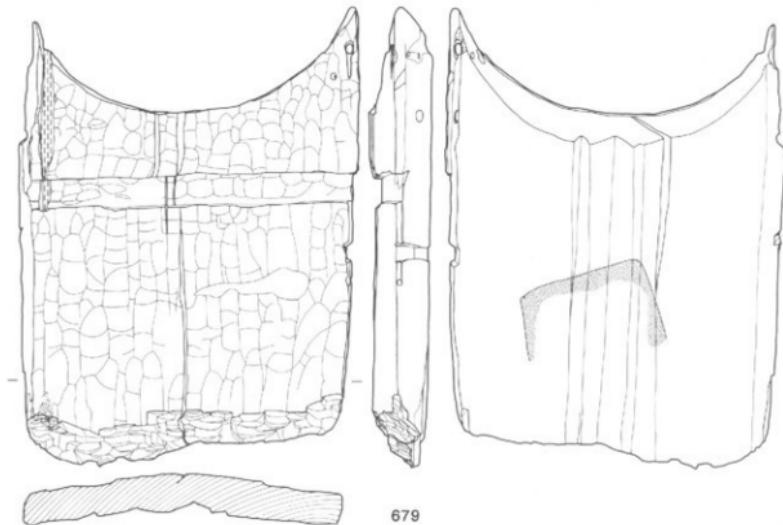


673

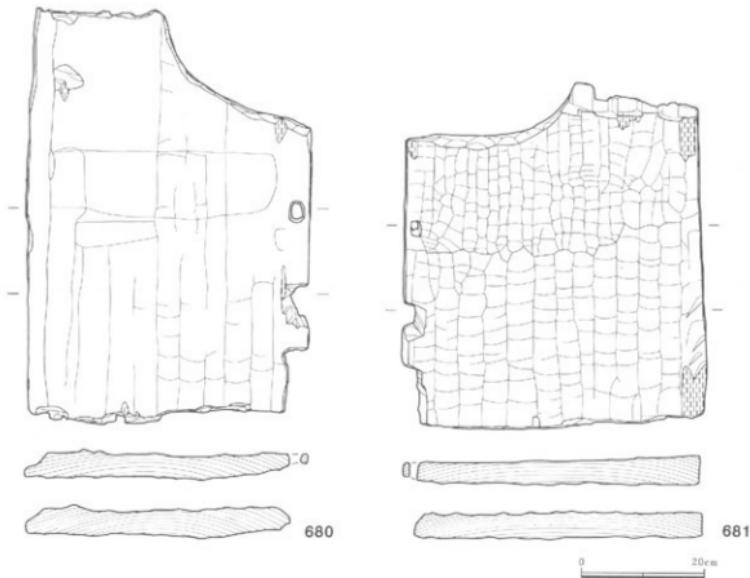
第98図 磁板実測図3



第99図 環板実測図4



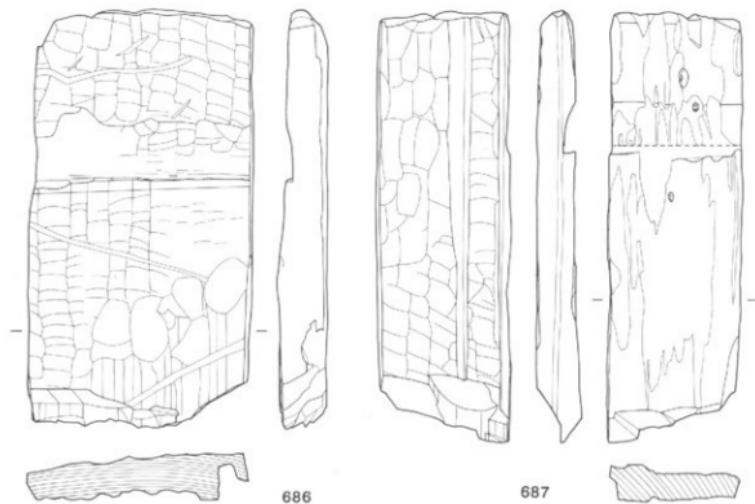
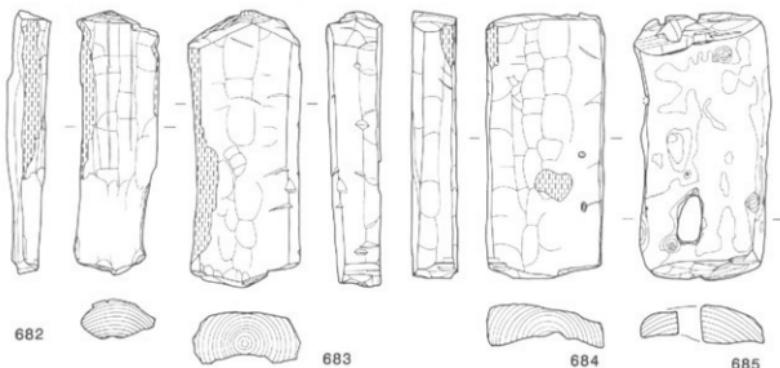
679



681

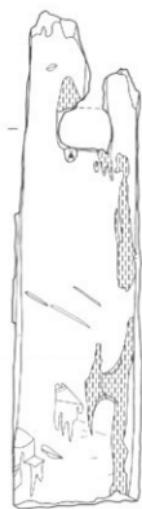
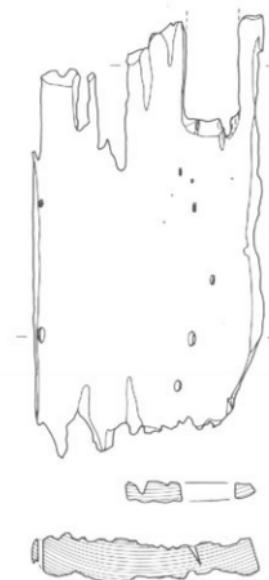
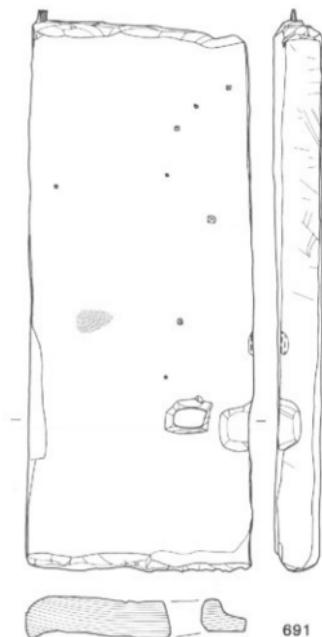
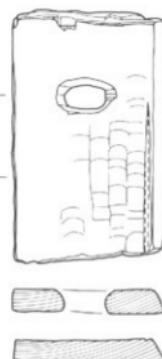
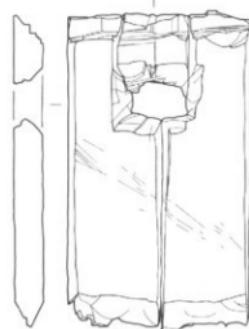
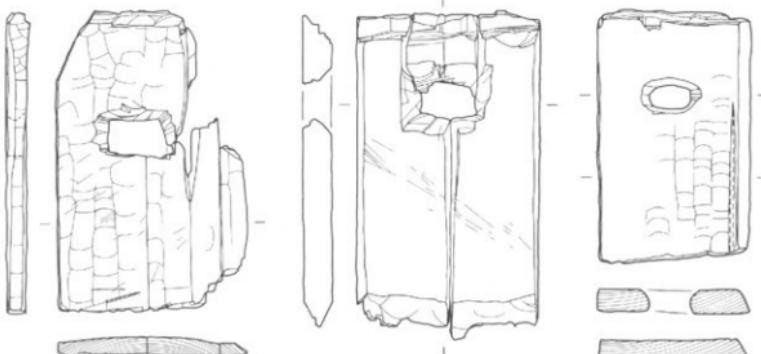
0 20cm

第100図 砧板実測図 5



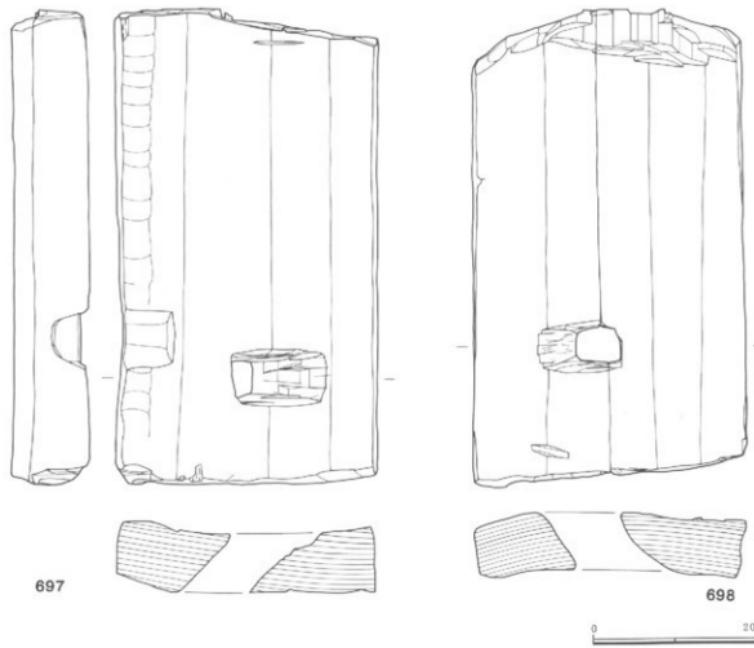
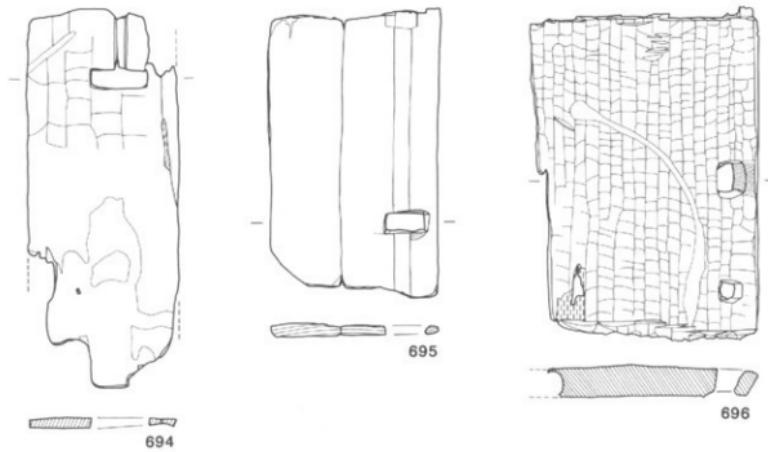
0 20cm

第101図 碳板実測図 6

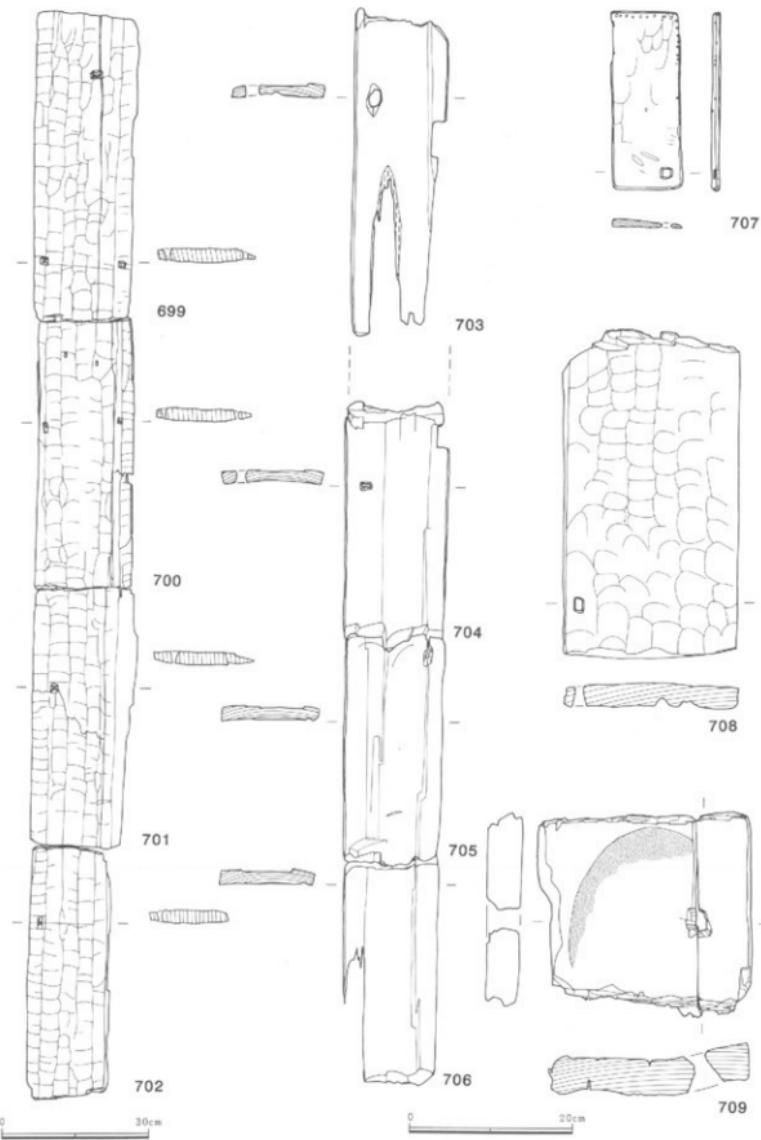


0 20cm

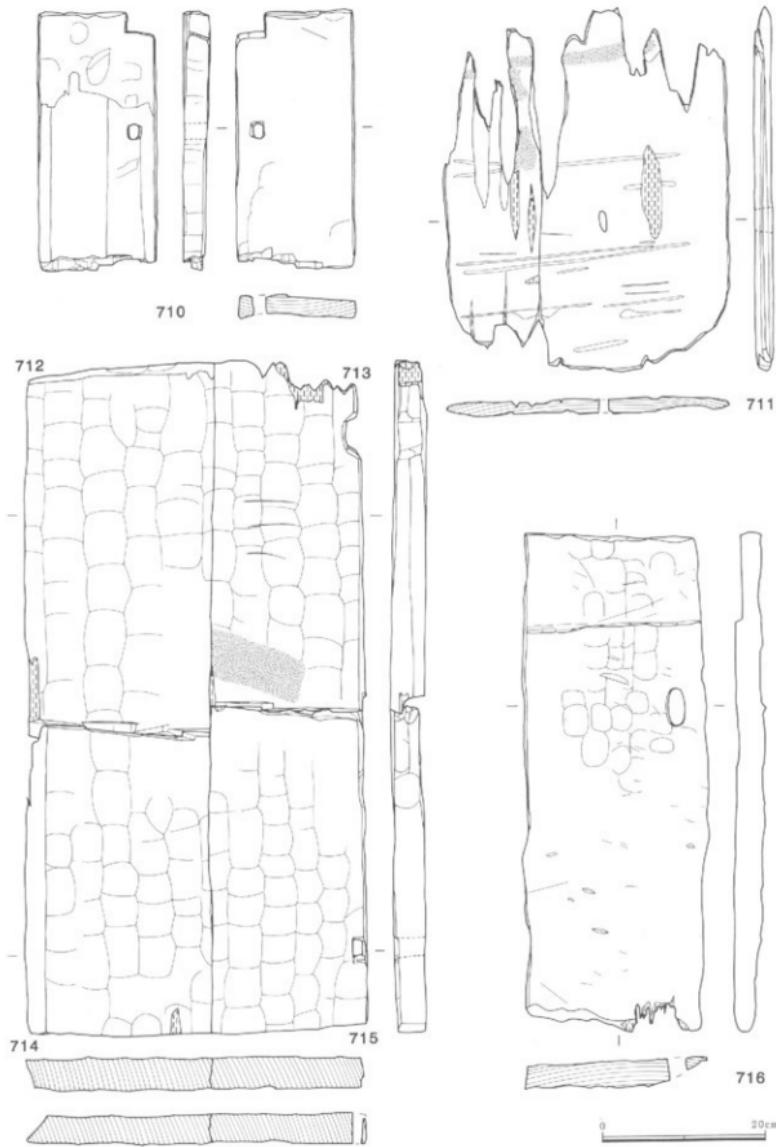
第102図 硬板実測図 7



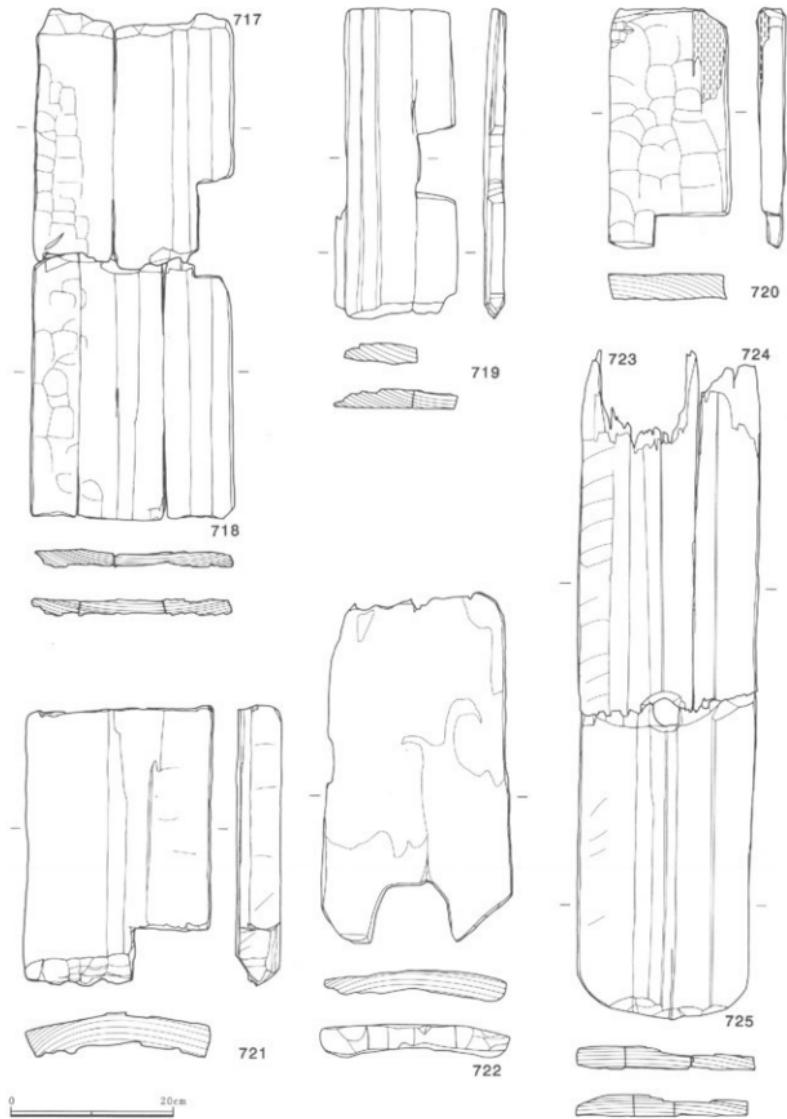
第103図 横板実測図 8



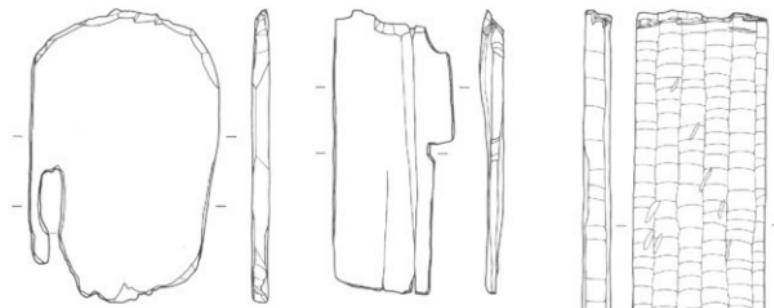
第104図 硬板実測図 9



第105図 硬板実測図10

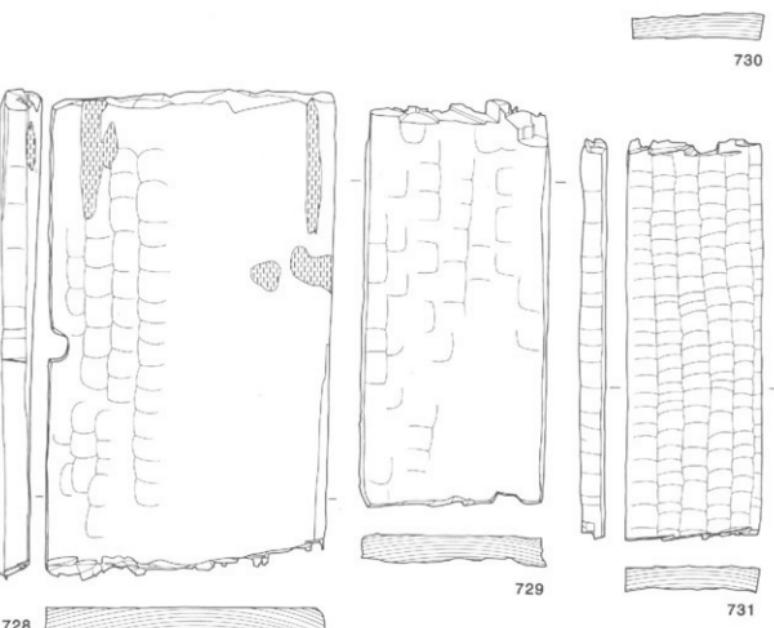


第106図 磁板実測図11



726

727



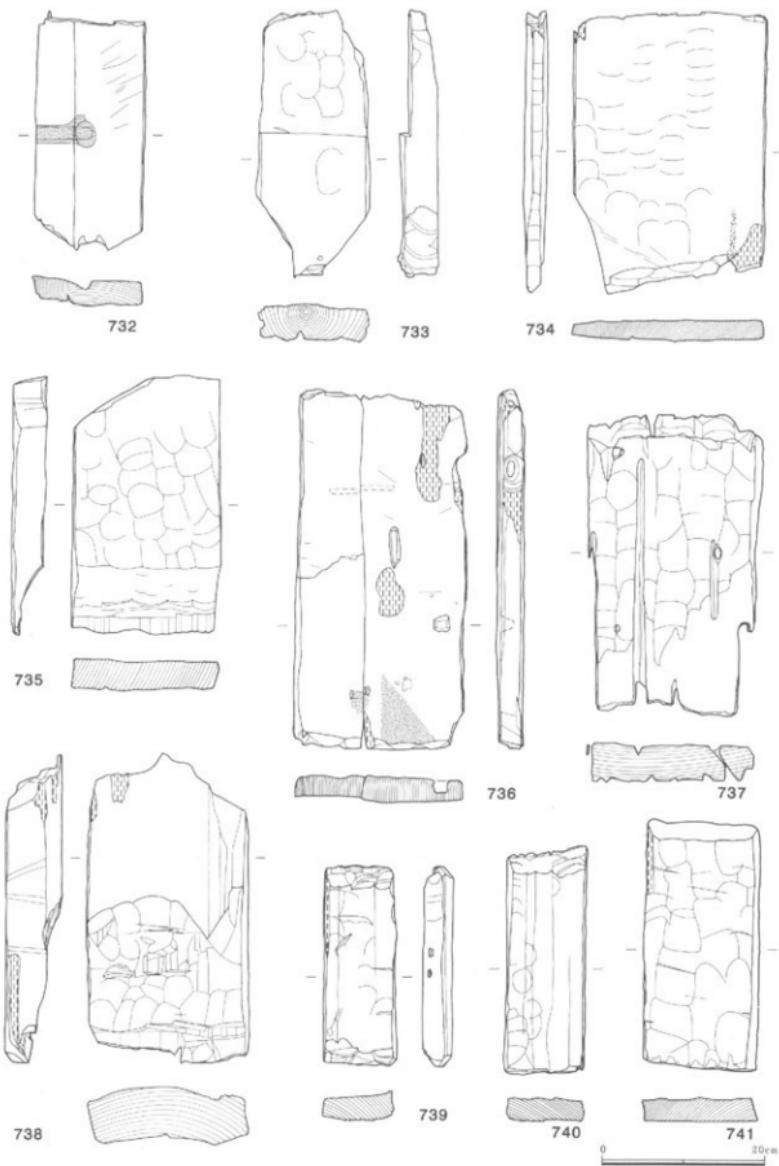
728

729

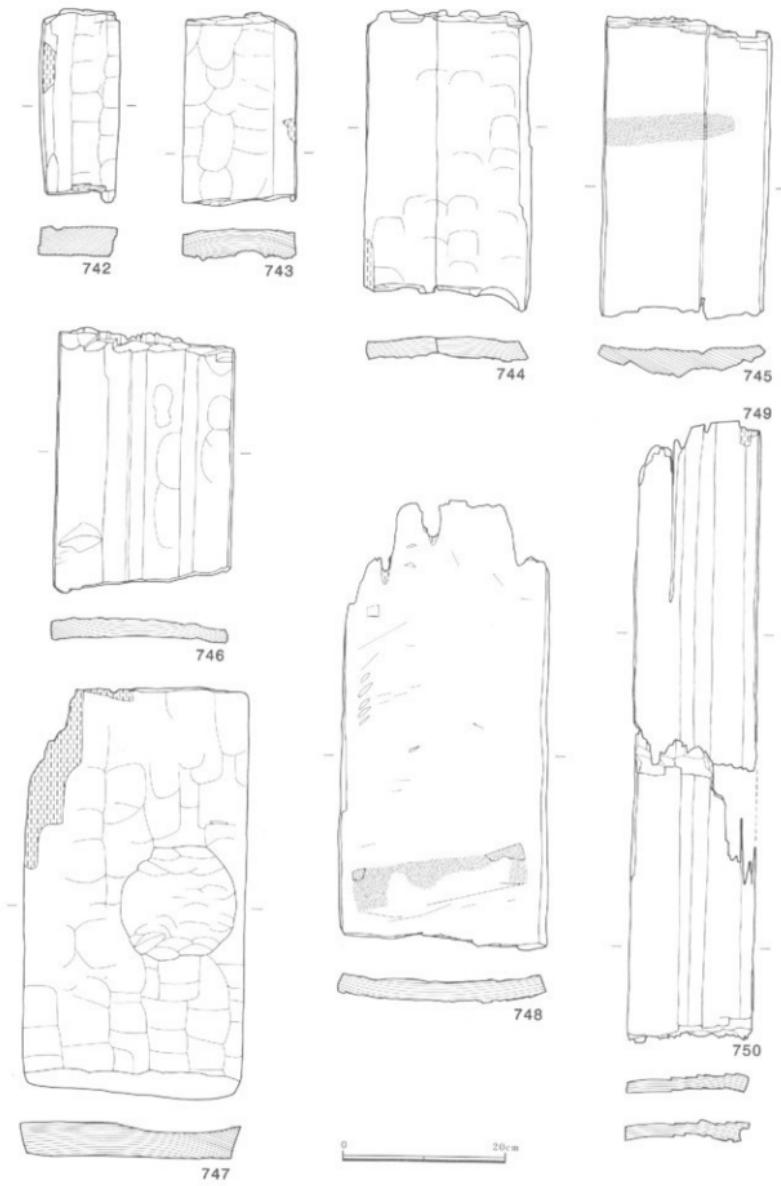
731

0 20cm

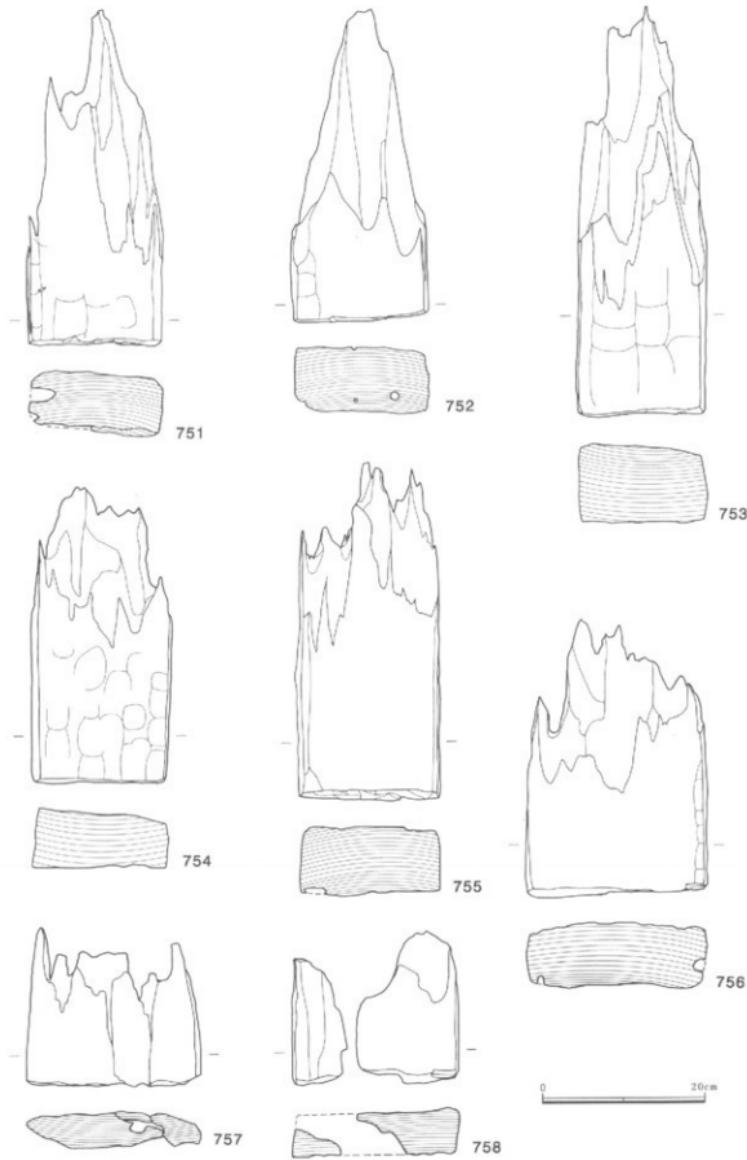
第107図 碳板実測図12



第108図 硬板実測図13



第109図 磬板実測図14



第110図 柱根実測図

第20表 碳板・柱根觀察表(1)

第20表 碼板・柱根觀察表(2)

第20表 梁板・柱規観察表(3)

規格番号 種類番号 因数倍率	遺物番号 GRID 因数倍率	種類 GRID 因数倍率	法量(cm) 幅 高さ 厚さ	形態の特徴	技法の特徴	正面 裏面 側面 底面 頂面 その他	直接同柱穴 隔壁等号
694 第103回 因数倍率62	W-149 B 2 SP-272	梁板 スギ 板目	長さ 46.2 幅 18.6 厚さ 1.5	手の材。右上寄りに横長の長方形孔 (7cm×2.3cm) を穿つ。	①斧等で平面に加工。下半分は劣化。②手斧等で加工が認められない。③刃先が刃先で刃先を削る。④刃先が刃先で刃先を削る。⑤刃先が刃先で刃先を削る。	第42回 P 16	
695 第103回 因数倍率62	W-538 B 2 SP-675	梁板 スギ 板目	長さ 35.3 幅 21.1 厚さ 1.5	手の材。右下寄りに横長の長方形孔 (4.9cm×2.1cm) を穿つ。左端部を切り欠く。	①木口で削り取ぐ。一部手斧で削る。②削り面。刃先が刃先で刃先を削る。③刃先が刃先で刃先を削る。④刃先が刃先で刃先を削る。⑤刃先が刃先で刃先を削る。	第39回	
696 第103回 因数倍率62	W-126 D 2 SP-212 (SH 10)	梁板 スギ 板目	長さ 40.8 幅 28.0 厚さ 3.7	中央右寄りと下寄りに4cm×2.1cm、2cm×1.9cmの方形孔を穿つ。上部の孔の右端部には漆垢が認められる。	①手斧で削り取ぐ。一部手斧で削る。②削り面。刃先が刃先で刃先を削る。③刃先が刃先で刃先を削る。④刃先が刃先で刃先を削る。⑤刃先が刃先で刃先を削る。	第64回 P 5	
697 第103回 因数倍率63	W-379 C 2 SP-548 (SH 6)	梁板 スギ 板目	長さ 58.2 幅 32.0 厚さ 8.2	手の材。右下寄りに横長の長方形孔 (4cm×4cm) を穿つ。孔は幾何方向に40°の角度で穿つ。孔の左端部に長さ6.8cm×幅0.5cm、深さ14cmの駆の状態のみがある。	①木口で削り取ぐ。一部手斧で加工。②木口で削り取ぐ。③刃先が刃先で刃先を削る。④刃先が刃先で刃先を削る。⑤刃先が刃先で刃先を削る。⑥刃先が刃先で刃先を削る。	第60回 P 2	
698 第103回 因数倍率63	W-163e C 2 SP-67 (SH 6)	梁板 スギ 板目	長さ 58.4 幅 33.3 厚さ 7.4	手の材。右側中央に7.3cm×4.2cmの横長の長方形孔を穿つ。刃先が刃先で45°の角度で穿つ。	①~④木口で削り取ぐ。⑤削り面。⑥加工面か。⑦斜状の工具で正裏面から刃削。⑧2箇所の方形孔は正裏面から斜削。刃削が認める。	第60回 P 5	
699 第104回 因数倍率62	W-517 E 4 SP-691 (SH 6)	梁板 スギ 板目	長さ 63.6 幅 21.2 厚さ 3.0	右側が複手となる材。上部中央に1.9cm×1cm、下部両端部に0.9cm×0.7cm、1.2cm×0.6cmの方形孔を穿つ。上部の刀削内には凹の跡がある。また、下部2箇所の方孔を穿ぶ右左方向に歯離を引く。下部の側縁の右側には右側が残る。	①~④木口で削り取ぐ。⑤削り面。⑥加工面か。⑦斜状の工具で正裏面から刃削。⑧刀削の工具で正裏面から刃削。⑨刀削の工具で正裏面から刃削。⑩2箇所の方孔はいずれも斜状工具で正裏面から斜削。刃削が認める。	第62回 P 2	
700 第104回 因数倍率62	W-517 E 4 SP-641 (SH 8)	梁板 スギ 板目	長さ 59.4 幅 20.0 厚さ 3.0	右側が複手となる材。背面中央に1cm×0.6cm、1.0cm×0.5cmの方孔を穿つ。右側端部中央に幅2cm、残存長1.1cmの方孔の切り欠きが残る。	①~④手斧で加工。⑤削り面か。⑥削り面。⑦~⑨斜状の工具で正裏面から刃削。⑩斧削の工具で正裏面から刃削。⑪刀削の工具で正裏面から刃削。⑫刀削の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具による穿孔か。上端は699、下端は701と接合する。	第62回 P 2	
701 第104回 因数倍率62	W-537 F 4 SP-677 (SH 8)	梁板 スギ 板目	長さ 53.7 幅 21.3 厚さ 3.0	右側が複手となる材。中央右寄りに0.9cm×0.5cmの方形孔を穿つ。	①~⑦手斧で加工。⑧削り面か。⑨削り面。⑩~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具による穿孔か。⑭刀削の工具による穿孔か。上端は700、下端は701と接合する。	第62回 P 5	
702 第104回 因数倍率62	W-535 F 4 SP-677 (SH 8)	梁板 スギ 板目	長さ 52.0 幅 16.8 厚さ 2.7	左上寄りに0.7cm×0.5cmの複手の方孔を穿つ。この孔から右側斜面に棘状に剥離して、危險線を引き、中央端部に幅2cm、残存長1.1cmの方孔の切り欠きを有する。	①~⑦手斧で加工。⑧削り面か。⑨削り面。⑩~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具で正裏面から刃削。⑭刀削の工具で正裏面から刃削。⑮斧削の工具による穿孔か。上端は699、下端は701と接合する。	第62回 P 5	
703 第104回 因数倍率63	W-228 D 2 SP-417 (SH 18)	梁板 スギ 板目	長さ 39.9 幅 11.7 厚さ 1.6	右側が複手となる材。中央左寄りに2.2cm×1.6cmの複手形孔を穿つ。中央右端部に幅4cm、残存長7cmの複手の方孔を穿つ。刃削内に凹の跡がある。右側斜面を引き、中央端部に幅2cm、残存長1.1cmの方孔の切り欠きを有する。	①~⑦手斧で加工。⑧削り面か。⑨削り面。⑩~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具で正裏面から刃削。⑭刀削の工具で正裏面から刃削。⑮斧削の工具による穿孔か。上端は700、下端は701と接合する。	第47回 P 6	
704 第104回 因数倍率63	W-227 D 3 SP-417 (SH 18)	梁板 スギ 板目	長さ 31.4 幅 12.7 厚さ 1.8	中央左寄りに1.1cm×0.4cmの横長の長方形孔を穿つ。右上端部に幅2cm、残存長1cmの複手の長方形孔の切り欠きを有する。	①~⑦手斧で加工。⑧削り面か。⑨削り面。⑩~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具で正裏面から刃削。⑭刀削の工具で正裏面から刃削。⑮斧削の工具による穿孔か。右側端部の切り欠きは丁寧に削りされている。	第47回 P 6	
705 第104回 因数倍率63	W-230 D 3 SP-417 (SH 18)	梁板 スギ 板目	長さ 28.4 幅 12.3 厚さ 1.9	右側の板状の材。	①木口で削り取ぐ。②手用の刀削のため鋸齒が不明。③削り面か。④手斧で加工。⑤~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具による穿孔か。上端は703、下端は704と接合する。	第47回 P 6	
706 第104回 因数倍率63	W-231 D 3 SP-417 (SH 18)	梁板 スギ 板目	長さ 28.2 幅 11.6 厚さ 1.9	右側の板状の材。左下端に2.2cm×1.6cmの複手形孔を穿つ。	①木口で削り取ぐ。②手用の刀削のため鋸齒が不明。③削り面か。④手斧で加工。⑤~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具による穿孔か。上端は703、下端は704と接合する。	第47回 P 6	
707 第104回 因数倍率62	W-479 B 2 SP-477	梁板 スギ 板目	長さ 21.5 幅 8.7 厚さ 1.0	複手の材。右下端に0.8cm×0.8cmの方孔を穿つ。右端部と上面に沿いでいくびらも僅に2cm×0.3cmの小孔があり多孔状。貫通孔は右下端と中央端間に位置する。中央や下寄りに4箇所。左端部に幅2cm×0.3cmの複手形孔を穿つ。左側端には3箇所の孔痕がある。	①~⑦手斧で加工。⑧削り面か。⑨削り面。⑩~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具による穿孔か。⑭刀削の工具による穿孔か。	第40回 P 11	
708 第104回 因数倍率63	W-150 C 2 SP-269 (SH 2)	梁板 スギ 板目	長さ 40.1 幅 21.7 厚さ 3.0	複手の材。左下端に1.7cm×1cmの方孔を穿つ。	①手削で平面に加工。②手削が劣化のため鋸齒が不明。③斧削か。④手斧で加工。⑤~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具による穿孔か。⑭刀削の工具による穿孔か。	第58回 P 2	
709 第104回 因数倍率63	W-378 G 2 SP-548 (SH 6)	梁板 スギ 板目	長さ 25.1 幅 26.4 厚さ 4.6	複手の材。中央右寄りに2.6cm×1.3cmの方孔を穿つ。	①木口で削り取ぐ。木口を複手形孔に削り取る。②手斧で加工。③削り面か。④手斧で加工。⑤~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具による穿孔か。⑭刀削の工具による穿孔か。	第60回 P 2	
710 第105回 因数倍率63	W-521 G 4 SP-718 (SB 31)	梁板 スギ 板目	長さ 31.6 幅 14.6 厚さ 3.1	複手の材。中央や下寄りに2.6cm×1.8cmの複手の方孔を穿つ。左上端に1.95cm×1.75cmの複手の複手形孔を穿つ。	①~⑦手斧で加工。⑧削り面か。⑨削り面。⑩~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具による穿孔か。⑭刀削の工具による穿孔か。	第54回 P 4	
711 第105回 因数倍率63	W-314 E 4 SP-275 (SH 3)	梁板 スギ 板目	長さ 44.3 幅 35.0 厚さ 1.9	複手の材。中央や下寄りに2.6cm×1.8cmの複手の方孔を穿つ。右上端に1.95cm×1.75cmの複手の複手形孔を穿つ。	①~⑦手斧で加工。⑧削り面か。⑨削り面。⑩~⑫斜状の工具で正裏面から刃削。⑬斧削の工具による穿孔か。⑭刀削の工具による穿孔か。	第57回 P 6	

第20表 碓板・柱根観察表(4)

被検番号	通査番号	植樹 GRID	樹種 木取	法皇(cm)	形態の特徴	技法の特徴	正方形 ②裏面 ③右側面 ④上面 ⑤左側面 ⑥手の他	虚構柱穴 掘削番号
712 第105回 岡版63	W 278 E 4 SP-366 (SB 9)	礎板 スギ 板目	長さ 46.8 幅 23.2 厚さ 4.1	長方形の掌手の板材。	①~⑤手斧で平面に加工。左側が丸く、③前面に 713と複合。④側面は、⑤掌手に加工されているが、 斧状の工具が3箇所に残る。⑥他の工具で正方形 面側から切削。713と複合。	①~⑤手斧で平面に加工。左側が丸く、③前面に 713と複合。④側面は、⑤掌手に加工されているが、 斧状の工具が3箇所に残る。⑥他の工具で正方形 面側から切削。713と複合。	第47回 P 1	
713 第105回 岡版63	W 297 E-4 SP-386 (SB 9)	礎板 スギ 板目	長さ 42.9 幅 19.7 厚さ 4.2	長方形の掌手の板材。右上端端面に幅5.3cm、奥行 約1.6cmの方形の切り欠きを有する。正面下部に長方 形の圧痕が残る。	①~⑤手斧で平面に加工。③前面に、本木に直す。 ④側面は、712と複合。⑤化粧のため不明。⑥他の工 具で正方形面から切削。715と複合。⑦右上端部の 方形の切り欠きは、劣化のため加工痕等不明。	①~⑤手斧で平面に加工。③前面に、本木に直す。 ④側面は、712と複合。⑤化粧のため不明。⑥他の工 具で正方形面から切削。715と複合。⑦右上端部の 方形の切り欠きは、劣化のため加工痕等不明。	第47回 P 4	
714 第105回 岡版63	W 277 E 4 SP-404 (SB 9)	礎板 スギ 板目	長さ 38.4 幅 23.6 厚さ 4.0	長方形の掌手の板材。	①~⑤手斧で平面に加工。③前面に、713と複合。④ 側面は、⑤掌手の工具で正面側面から切削。712と複 合。⑥側面は、その切跡か。	①~⑤手斧で平面に加工。③前面に、713と複合。④ 側面は、⑤掌手の工具で正面側面から切削。712と複 合。⑥側面は、その切跡か。	第47回 P 3	
715 第105回 岡版63	W 288 E-4 SP-412 (SB 9)	礎板 スギ 板目	長さ 40.0 幅 19.2 厚さ 4.0	長方形の掌手の板材。右側端下部に2cm×1.1cmの 長方形の長い孔を穿つ。	①~⑤手斧で平面に加工。③前面に、714と複合。⑥他の工 具で正面側面から切削。713と複合。⑦右上端部の長い孔は工具痕が残る。 また両側面の丸みが丸くなっている。	①~⑤手斧で平面に加工。③前面に、714と複合。⑥他の工 具で正面側面から切削。713と複合。⑦右上端部の長い孔は工具痕が残る。 また両側面の丸みが丸くなっている。	第47回 P 2	
716 第105回 岡版64	W 363 C 2 SP-542 (SB G)	礎板 スギ 板目	長さ 61.1 幅 29.7 厚さ 4.1	正面上面に段差を有し、上部が押ぐなる。段差は 0.6cmである。中央や右上寄りに長径4.3cm×短径 2.2cmの底の複円形孔を穿つ。右側縫隙がやや丸くな る。	①正面上面に段差を有し、上部が押ぐなる。段差は 0.6cmである。中央や右上寄りに長径4.3cm×短径 2.2cmの底の複円形孔を穿つ。右側縫隙がやや丸くな る。劣化のため丸みが丸くなっている。	①正面上面に段差を有し、上部が押ぐなる。段差は 0.6cmである。中央や右上寄りに長径4.3cm×短径 2.2cmの底の複円形孔を穿つ。右側縫隙がやや丸くな る。劣化のため丸みが丸くなっている。	第60回 P 1	
717 第106回 岡版64	W 1796 E-4 SP-375 (SB 18)	礎板 スギ 板目	長さ 31.6 幅 24.5 厚さ 2.4	右下端部に4.9cm×4.3cmの鉢底の切り欠きを有する	①右下端部に4.9cm×4.3cmの鉢底の切り欠きを有する 右下端部に4.9cm×4.3cmの鉢底の切り欠きを有する	①右下端部に4.9cm×4.3cmの鉢底の切り欠きを有する 右下端部に4.9cm×4.3cmの鉢底の切り欠きを有する	第47回 P 8	
718 第106回 岡版64	W 233 E 4 SP-393 (SB 18)	礎板 スギ 板目	長さ 31.7 幅 24.8 厚さ 2.1	右上端部に1.3cm×3.3cmの鉢底の切り欠きを有する	①右上端部に1.3cm×3.3cmの鉢底の切り欠きを有する 右上端部に1.3cm×3.3cmの鉢底の切り欠きを有する	①右上端部に1.3cm×3.3cmの鉢底の切り欠きを有する 右上端部に1.3cm×3.3cmの鉢底の切り欠きを有する	第47回 P 5	
719 第106回 岡版64	W 300 E-4 SP-407 (SB 1)	礎板 スギ 板目	長さ 37.9 幅 15.1 厚さ 2.6	左上端部に強めの切り欠きを有する。左中端部に 幅9.3cm、奥行4.0cmの方形の切り欠きを有する。	①左上端部に強めの切り欠きを有する。左中端部に 幅9.3cm、奥行4.0cmの方形の切り欠きを有する。	①左上端部に強めの切り欠きを有する。左中端部に 幅9.3cm、奥行4.0cmの方形の切り欠きを有する。	第47回 P 18	
720 第106回 岡版64	W 400 B-2 SP 668 (SB 21)	礎板 スギ 板目	長さ 29.2 幅 15.2 厚さ 3.5	右下端部に4.3cm×9.0cmの鉢底の切り欠きを有する	①~⑤手斧で平面に加工。③前面に、715と複合。 ⑥他の工具で正面側面から切削。713と複合。⑦右下端部の切り欠きの角に加工痕がある。	①~⑤手斧で平面に加工。③前面に、715と複合。 ⑥他の工具で正面側面から切削。713と複合。⑦右下端部の切り欠きの角に加工痕がある。	第51回 P 1	
721 第106回 岡版64	W-417 F-3 SP 705 (SB 21)	礎板 スギ 板目	長さ 34.1 幅 23.0 厚さ 4.5	丸形の掌手の材。右下端部に8.0cm×6.5cmの鉢底 の切り欠きを有する。	①~⑤木目で削り取る。③~④手斧で加工。⑤~⑥他の工 具で正面側面から切削。⑦右下端部の切り欠きに工具痕がある。	①~⑤木目で削り取る。③~④手斧で加工。⑤~⑥他の工 具で正面側面から切削。⑦右下端部の切り欠きに工具痕がある。	第52回 SD-28 P 4	
722 第106回 岡版64	W-334 D-1 SP-430 (SB 21)	礎板 スギ 板目	長さ 42.9 幅 23.2 厚さ 3.9	下端中央部に幅5.5cm、奥行3.10cmの方形の切 り欠きを有する。	①~⑤木目で削り取る。③~④手斧で加工。⑤~⑥他の工 具で正面側面から切削。717と複合。⑦外側の工具 で正面側面から切削。⑧右下端部の切り欠きの角に加工 痕がある。	①~⑤木目で削り取る。③~④手斧で加工。⑤~⑥他の工 具で正面側面から切削。717と複合。⑦外側の工具 で正面側面から切削。⑧右下端部の切り欠きの角に加工 痕がある。	第46回 P 11 第57回 P 9	
723 第106回 岡版64	W 108 B-2 SP 278 (SB 11)	礎板 スギ 板目	長さ 44.7 幅 14.5 厚さ 2.8	上面は幅10.5cmにわたって半円形に溝を有する。下 面には幅10.5cmにわたって半円形の切り欠きを有する。裏 面には幅10.5cmにわたって半円形の切り欠きを有する。	①正面で削り取る。②手斧で加工。③前面に、718と複合。 ④正面側面から切削。720と複合。⑤下面で加工。⑥正面 側面から切削。723と複合。⑦下下端部の切り欠きの半円 形の切り欠きは手斧の工具で加工。	①正面で削り取る。②手斧で加工。③前面に、718と複合。 ④正面側面から切削。720と複合。⑤下面で加工。⑥正面 側面から切削。723と複合。⑦下下端部の切り欠きの半円 形の切り欠きは手斧の工具で加工。	第56回 P 5	
724 第106回 岡版64	W 103 B-2 SP-225 (SB 11)	礎板 スギ 板目	長さ 43.1 幅 8.1 厚さ 2.0	細い板状の材。裏面下部に横長の長い方舟型の注溝を 残す。	①正面で削り取る。②手斧で加工。③前面に、719と複合。 ④正面側面から切削。724と複合。⑤下面で加工。⑥正面 側面から切削。725と複合。⑦木目で削り取る。⑧手斧で加工。	①正面で削り取る。②手斧で加工。③前面に、719と複合。 ④正面側面から切削。724と複合。⑤下面で加工。⑥正面 側面から切削。725と複合。⑦木目で削り取る。⑧手斧で加工。	第56回 P 6	
725 第106回 岡版64	W 110 B-2 SP 89 (SB 1)	礎板 スギ 板目	長さ 40.0 幅 21.7 厚さ 2.8	上端中央部に幅14cmの半円形の切り欠きを有する板 材。下端は角が丸みを帯びる。裏面中央附近に横筋 が残る。	①木目で削り取る。②手斧で加工。③前面に、720と複合。 ④正面側面から切削。726と複合。⑤下面で加工。⑥正面 側面から切削。727と複合。⑦木目で削り取る。⑧手斧で加工。	①木目で削り取る。②手斧で加工。③前面に、720と複合。 ④正面側面から切削。726と複合。⑤下面で加工。⑥正面 側面から切削。727と複合。⑦木目で削り取る。⑧手斧で加工。	第56回 P 1	
726 第107回 岡版64	W-410 C 3 SP 561 (SB 21)	礎板 スギ 板目	長さ 35.5 幅 23.3 厚さ 2.1	鉢形を呈する板材。左下寄りに長径7.5cm×短径 2.6cmの複円形孔を有つ。	①~⑤手斧で削り取る。③~④手斧で加工。⑤~⑥他の工 具で正面側面から切削。728と複合。⑦左下寄りの鉢孔 は手斧の工具で加工。	①~⑤手斧で削り取る。③~④手斧で加工。⑤~⑥他の工 具で正面側面から切削。728と複合。⑦左下寄りの鉢孔 は手斧の工具で加工。	第49回 P 43	
727 第107回 岡版64	W 299 E-4 SP 407 (SB 1)	礎板 スギ 板目	長さ 34.5 幅 14.9 厚さ 1.8	右上端部に鉢底の切り欠きを有する板材。右側端 部に幅4.0cm×2.0cm×2.8cmの方形の切り欠きを有する。	①~⑤木目で削り取る。③前面に、725と複合。④正面 側面から切削。⑤~⑥他の工具で正面側面から切削。⑦右 上端部と右側端部の切り欠きにはいずれも工具痕 がある。	①~⑤木目で削り取る。③前面に、725と複合。④正面 側面から切削。⑤~⑥他の工具で正面側面から切削。⑦右 上端部と右側端部の切り欠きにはいずれも工具痕 がある。	第47回 P 18	
728 第107回 岡版64	W 498 C 2 SP 556 (SB 6)	礎板 スギ 板目	長さ 60.2 幅 34.6 厚さ 4.5	長方形のやや厚手の材。左側面に幅2.1cm×高さ 約2.1cmの方形の切り欠きを有する。	①~⑤手斧で平面に加工。③前面に、726と複合。 ⑥前面で切削しているが劣化のため詳細不明。⑦他の工 具で切削しているが劣化のため詳細不明。	①~⑤手斧で平面に加工。③前面に、726と複合。 ⑥前面で切削しているが劣化のため詳細不明。⑦他の工 具で切削しているが劣化のため詳細不明。	第60回 P 4	
729 第107回 岡版64	W-219 D 2 SP 69 (SB 12)	礎板 スギ 板目	長さ 49.9 幅 23.0 厚さ 4.1	細い材。上面右寄りに0.6cm×3.3cmの深い方形の 切り欠きを有する板材。	①木目で平面に加工。②木目で削り取る。③前面に、 727と複合した材。	①木目で平面に加工。②木目で削り取る。③前面に、 727と複合した材。	第42回 P 16	
730 第107回 岡版64	W 162 B 2 SP 272 (SB 1)	礎板 スギ 板目	長さ 49.9 幅 16.6 厚さ 3.4	細い材。上面右寄りに0.6cm×3.3cmの深い方形の 切り欠きを有する。	①木目で平面に加工。②木目で削り取る。③前面に、 729と複合した材。	①木目で平面に加工。②木目で削り取る。③前面に、 729と複合した材。	第42回 P 16	

第20表 碳板・柱根観察表(5)

国際番号	種類番号	種類	法量(cm)	形態の特徴	接法の特徴	直面(左裏面 右前面) (左前面 (右)面 右前面) その他の 接法	追憶認証穴 接合部番号
731	W-159	直板	長さ 18.9	板状の材。上部中央に1.2cm×2.6cmの浅い方形の切り欠きを有する。下部と接合した所。	①手斧で平面に加工。②木口で削り欠く。③手斧で加工。④手工具で裏面側から切削。⑤右上端部の浅い方形の切り欠きは工具痕が残る。	第42回 P 16	
第107回 国際65	B-2	スギ 檜	幅 16.5				
	SP-272	板目	厚さ 3.2				
732	W-522	直板	長さ 29.3	下端は山型に切り、下端部中央は1.0cm×3.7cmの方形に切り欠く。半央に幅1.5cmの横筋の位置が残る。	①平面であるが、劣化した面粗細不明。②木口で削り欠く。③手工具の工具で正面裏面側から切削。④右上端部の浅い方形の切り欠きは工具痕が残る。	第53回 P 4	
第108回 国際65	G-4	スギ 檜	幅 13.4				
	SP-718 (SB 31)	板目	厚さ 3.0				
733	W-207	直板	長さ 32.5	下端は山型に切り欠く。正面中央に凹部がある。上部に幅1.5cm×厚さ1.0cm×深さ1.2cmの溝が残る。	①削り欠き。②一形多分で平面に加工。③正面裏面側から切削。④手工具で裏面側から切削。⑤左上端部を削り欠く。⑥右上端部を削り欠く。⑦中央端部は裏面側から切削。工具痕が残る。⑧床板の工具を用いる。	第49回 P 19	
第108回 国際65	D-3	スギ 檜	幅 13.9				
	SP-211	板目	厚さ 5.0				
734	W-415	直板	長さ 34.3	左下端部をやや弧状に切り欠く。	①~④手斧で正面に加工。⑤手工具で裏面側から切削。⑥手工具で正面裏面側から切削。⑦左下端部を削り欠く。	第50回 P 3	
第108回 国際65	C-3	スギ 檜	幅 23.8				
	SP-525 (SB 13)	板目	厚さ 2.5				
735	W-101	直板	長さ 31.4	正面下端部は手斧と思われる工具で削られる。左上端部を切り欠く。	①~④手斧で正面に加工。⑤手工具で裏面側から切削。⑥手工具で削り取られる。手斧か、⑦左上端部は削り欠き。	第40回 P 3	
第108回 国際65	B-3	スギ 檜	幅 18.5				
	SP-281 (SB 1)	板目	厚さ 4.1				
736	W-187	直板	長さ 43.8	板状の材。中央に4.1cm×0.6cmの延長の溝が、右下部に1.0cm×1.0cm、深さ1.5cmの方形の溝みを有する。板目	①~④手斧等で加工方法等不明。⑤~⑨手工具で裏面側から切削。⑩手工具より裏面側から切削。⑪新形状の工具により正面裏面側から切削。⑫3箇所の溝みは、工具等で削る。	第59回 P 3	
第108回 国際65	D-2	スギ 檜	幅 21.1				
	SP-265 (SB 5)	板目	厚さ 3.0				
737	W-512	直板	長さ 36.9	正裏面に上方向の深さ1.0cm程度のV字状の溝みを有する。また、正面に長さ3.8cm×幅約0.4cm、長径1.4cm×幅約0.8cmの複数個の孔を穿つ。	①手斧で削り欠いた所。②木口で削り欠く。③手工具で裏面側から削る。④手工具の工具で正面裏面側から削る。⑤新形状の工具による孔。	第61回 P 6	
第108回 国際65	F-3	スギ 檜	幅 21.6				
	SP-633 (SB 7)	板目	厚さ 4.5				
738	W-72	直板	長さ 37.7	厚手の材。下部は薄く削り取られる。	①木口で削り欠いた所。②手斧で薄く削り加工する。③木口で削り欠く。④手工具で裏面側から削る。⑤新形状の工具による削り。	第39回	
第108回 国際65	E-3	スギ 檜	幅 19.9				
	SP-241	板目	厚さ 6.1				
739	W-524	直板	長さ 24.4	右側面に1cm×0.5cm、深さ0.4cmの複数の丸形の溝みを2箇所に有する。私はいずれも木質である。	①手斧で削り欠いた所。②木口で削り欠く。③手工具で裏面側から削る。④新形状の工具による削り。	第54回 P 2	
第108回 国際65	F-4	スギ 檜	幅 9.2				
	SP-701 (SB 31)	板目	厚さ 3.1				
740	W-523	直板	長さ 27.9	長方形状の板状の材。	①削り面。一部を手斧で加工。②~④削り面。③新形状の工具で正面裏面側から切削。④他の工具で裏面側から切削。	第54回 P 2	
第108回 国際65	F-4	スギ 檜	幅 10.0				
	SP-701 (SB 31)	板目	厚さ 2.9				
741	W-118	直板	長さ 30.7	長方形状の板状の材。	①手斧で手斧に加工。②手斧が不均一なため削り欠く。③手工具で裏面側から削る。④手工具の工具で裏面側から削る。⑤新形状の工具で裏面側から切削。⑥裏面側の工具による削り。	第40回 P 2	
第108回 国際65	D-3	スギ 檜	幅 14.3				
	SP-282 (SB 1)	板目	厚さ 2.9				
742	W-402	直板	長さ 23.6	長方形状の板状の材。	①手斧で手斧に加工。②手斧が不均一なため削り欠く。③手工具で裏面側から削る。④手工具の工具で裏面側から削る。⑤新形状の工具で裏面側から削る。⑥裏面側の工具による削り。	第51回 P 2	
第109回 国際66	B-2	スギ 檜	幅 9.9				
	SP-726 (SB 21)	板目	厚さ 3.7				
743	W-424	直板	長さ 23.5	万能の板状の材。右上端部の角を切り欠く。	①手斧で手斧に加工。②木口で削り欠く。③手斧で加工。④削り面。⑤新形状の工具で裏面側から削る。⑥新形状の工具で裏面側から切削。⑦右上端部の切り欠きは新形状の工具による。	第57回 P 21	
第109回 国際66	D-4	スギ 檜	幅 14.0				
	SP-572	板目	厚さ 3.7				
744	W-544	直板	長さ 36.8	万能の板状の材。	①手斧で手斧に加工。②木口で削り欠く。一般底面が削られる。③~⑤削り面。⑥新形状の工具で裏面側から削る。⑦新形状の工具で裏面側から切削。	第53回 P 2	
第109回 国際66	F-3	スギ 檜	幅 20.5				
	SP-468 (SB 29)	板目	厚さ 2.6				
745	W-287	直板	長さ 36.6	万能の板状の材。正面中央上部に横筋の板状の材の位置が残る。	①~④削り面。⑤新形状の工具で裏面側から切削。⑥板状の工具で裏面側から切削。	第47回 P 28	
第109回 国際66	E-4	スギ 檜	幅 20.5				
	SP-411 (SB 9)	板目	厚さ 3.3				
746	W-520	直板	長さ 32.3	万能の板状の材。	①手斧で削り欠き。一部を手斧で加工。②木口で削り欠く。③削り面。④手斧で加工。⑤新形状の工具で裏面側から切削。⑥新形状の工具による削り。	第54回 P 1	
第109回 国際66	F-4	スギ 檜	幅 21.7				
	SP-721 (SB 31)	板目	厚さ 2.4				
747	W-157	直板	長さ 50.2	長方形状の板状の材。正面中央右寄りに幅13.8~15.1cm、深さ約1.0cmの円形の溝みを有する。左上端部は木質化のため欠損。	①~④手斧で手斧に加工。⑤木口で削り欠く。⑥削り面。⑦~⑨削り面による切削か。⑩正面中央右寄りの溝みは手斧による加工か。	第58回 SH-2 P 5	
第109回 国際66	C-2	スギ 檜	幅 27.3				
	SP-81 (SB 2)	板目	厚さ 4.3				
748	W-505	直板	長さ 54.4	長方形状の板状の材。下側端部に複数の板状の材の位置が残る。(手と上2箇所の角が缺損)。	①木口で削り欠く。部分的に刀刃が残る。②木口で削り欠く。③~⑤削り面か。使用工具等は不明。⑥木質化のため欠損。⑦側面で切削か。	第55回 P 4	
第109回 国際66	F-4	スギ 檜	幅 25.7				
	SP-728 (SB 32)	板目	厚さ 2.8				

第20表 墓板・柱根觀察表(6)

掲載番号 規格番号 通版番号 出上機種	遺物番号 GRHD	種類 樹種 木取	法量(cm)	形態の特徴	技法の特徴	①正面 ②裏面 ③右側面 ④左側面 ⑤上面 ⑥下面 ⑦その他	直横図社穴 掲載番号
749 第109回 国版66 (SB 18)	W 229 E 3 スギ 板目 厚さ	檜板 長さ 42.7 幅 15.2 厚さ 2.3		縦長い板状の材。	①～②木目で削り跡。③加工面が、④削り面。⑤切削か。⑥棒状の工具で正面側から切削。750と接合する。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	第47回 P 7
750 第109回 国版66 (SB 18)	W 226 D 3 スギ 板目 厚さ	檜板 長さ 38.3 幅 15.3 厚さ 2.5		縦長い板状の材。右下部は劣化のため欠損。	①～②木目で削り跡。③削り面か。劣化のため辺縁が不明。④削り面。⑤棒状の工具で正面側から切削。749と接合する。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	第47回 P 6
751 第110回 国版67 (SH 1)	W 102 B 2 スギ 板目 厚さ	柱板 長さ [41.0] 幅 10.8 厚さ 7.5		断面長方形の柱材。	①手斧で手削で加工。②平面に施してしているが工具痕が認められない。部分的に削がれています。③手斧による加工。劣化により広い範囲で欠損。④手斧で削る。⑤直角面から手削で切削。斜側の工具か。⑥角は丸取りされている。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	第56回 P 6
752 第110回 国版67 (SH 1)	W 84 C 2 スギ 板目 厚さ	柱板 長さ [38.0] 幅 17.8 厚さ 7.8		断面長方形の柱材。底面に径0.3cmと高0.9cmの穴。2を壁面。材と同じ方向に向かって穿つ。	①～②手斧で平面に加工。③～④手斧で加工。⑤平面に切削。鍬を使用か。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	第56回 P 4
753 第110回 国版67 (SH 1)	W 105 B 2 スギ 板目 厚さ	柱板 長さ [49.9] 幅 16.2 厚さ 9.6		断面長方形の柱材。	①～②手斧で平面に加工。③～④手斧で加工。⑤平面に切削。鍬を使用か。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	第56回 P 1
754 第110回 国版67 (SH 1)	W 86 B 2 スギ 板目 厚さ	柱板 長さ [26.1] 幅 17.2 厚さ 7.3		断面長方形の柱材。	①手斧で平面に加工。②平面に加工しているが工具痕が認められない。③～④手斧で加工。⑤直角～平面に切削後、手斧で加工。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	第56回 P 2
755 第110回 国版67 (SH 1)	W 85 B 2 スギ 板目 厚さ	柱板 長さ [41.2] 幅 17.8 厚さ 8.5		断面長方形の柱材。	①～②手斧で加工しているが工具痕が認められない。③～④手斧で加工。⑤平面に切削。斜側の工具を使用か。⑥角を丸取りする。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	第56回 P 3
756 第110回 国版67 (SH 1)	W 111 B 2 スギ 板目 厚さ	柱板 長さ [34.6] 幅 22.2 厚さ 7.6		断面長方形の柱材。	①～②手斧で加工しているが工具痕が認められない。③～④手斧で加工。⑤平面に切削。斜側の工具を使用か。⑥角を丸取りする。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	第56回 P 3
757 第110回 国版67 (SH 32)	W 506 F 4 スギ 板目 厚さ	柱板 長さ [19.6] 幅 21.3 厚さ 4.2		断面長方形の柱材だが、劣化が著しく中央が欠落する。	全體劣化のため使用工具、加工方法等一切不明。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	第55回 P 4
758 第110回 国版67 (SH 32)	W 502 F 4 スギ 板目 厚さ	柱板 長さ [18.6] 幅 (20.4) 厚さ 5.4		断面長方形の柱材だが、劣化が著しく中央が欠落する。	全體劣化のため使用工具、加工方法等一切不明。	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	第55回 P 1

(7)自然遺物

S B - 3・S B - 2 0 から種子が出土した。また、土器集中出土地点 3 からも種子が大量に出土した。これらの中には、モモの種子で核を取り出すために上部を削り取ったものなども含まれている。他に、昆虫化石も数点見つかっている。なお、調査区東北隅と土器集中出土地点 3 からは木片が多く出土した。

<第V章 参考・引用文献>

- 並山町 1979 『並山町史』第1巻
静岡県教育委員会 1994 『並山城跡』『静岡県埋蔵文化財年報(平成2年度)』
及川司・望月保宏 1991 『並山高校校舎建て替えに伴う理蔵文化財発掘調査速報』『龍城論叢』第14号
並山町教育委員会 1981 『山木遺跡第6次調査報告書』
静岡県考古学会 1995 『古墳時代の集落』静岡県考古学会シンポジウムⅧ
石野博信 1990 『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館
静岡市立豊呂博物館 1988 『特別展 静岡・清水平野の弥生時代—新出土品にみる農耕生活』
西川修一 1991 『関東のタタキ甕』『神奈川考古』27号
加納俊介 1990 『S字甕とS字甕もどき』『マージナル』10号
比田井克仁 1995 『二重口縁甕の東国波及』『古代』100号
米田敏幸 1994 『河内における庄内式土器の編年』『庄内式土器研究Ⅶ』庄内式土器研究会
赤塚次郎 1993 『東海系器台甕』『庄内式土器研究Ⅳ』庄内式土器研究会
赤塚次郎 1986 『『S字甕』覚書'85』『財団法人愛知県埋蔵文化財センター年報』
赤塚次郎 1986 『『S字甕』『久山式土器とその前後』』第3回東商埋蔵文化財研究会
財团法人愛知県埋蔵文化財センター 1990 『題間遺跡』
渡井英貴 1994 『東駿河における庄内式期の様相』『庄内式土器研究 VII』庄内式土器研究会
中嶋郁夫 1985 『弥生土器から土師器への画期—遠江地方を中心として—』『古墳時代の土師器』静岡県考古学会
中嶋郁夫 1988 『いわゆる『菊川式』と『飯田式』の再検討』『転機』2号
中嶋郁夫 1993 『東海地方東部における後期弥生土器の『移動』・『模倣』』『転機』4号
成田秀一郎 1984 『木の匠、木工の技術史』鹿島出版会
谷口栄 1991 『北部東京湾岸における上縁の様相』『竹鶴門』東京国立近代美術館遺跡調査委員会
小野千賀子 1995 『木製遺物にのこる人為的加工痕跡について—静岡市池ヶ谷遺跡—』『10周年記念論文集』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
三島市教育委員会 1996 『西大久保・奈良橋向遺跡』
菊川町教育委員会 1984 『三沢西原遺跡』
長泉町教育委員会 1979 『下長雀上野遺跡』
富士宮市教育委員会 1981 『月の輪遺跡群』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 『長崎遺跡(遺物・考察編)』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994・1996 『川合遺跡 遺物編3』
(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『瀬名遺跡V』

第VI章　まとめ

第1節　歴史時代

歴史時代の最大の調査成果は、寛政5年の葦山城絵図には記されていない石積み遺構（S X - 4）の検出である。以下、石積み遺構を中心として、明らかになった多くの事実に若干の考察を加えてまとめたい。

- ・石積み遺構は内堀に沿うかたちで構築されており、出土遺物等から城郭の一部であることが判明した。なお、石の積み方等の構築技法から、石垣というよりも石積みと呼称した方が適当であると判断した。
- ・石積みは約4段程垂直に積み上げられているが、このうち当時地表面に露出していたのは上側約2段分であったと思われる。また石積みは2箇所で途切れしており、それぞれのまとまりで石積みの構築方法が異なっていることから、石積みを築く際に作業分担が決められていた可能性が考えられる。なお、石積みの途切れる場所は作業時の搬入出路の可能性があるが、そのような痕跡は確認されなかった。
- ・葦山城の変遷については、石積み遺構周辺の土層（第4トレンチ等）の観察結果から、次の4段階が考えられる。

第1段階・・・杭列（S A - 1）が機能していた時期。葦山城築城以前と思われる。

第2段階・・・杭列を破壊し、石積み及び土塁が築かれた時期。

第3段階・・・石積みを破壊してその上に盛土し、盛土の北側法面に沿って石敷道を構築した時期。

第4段階・・・石敷道の上に盛土し、城域を拡張した時期。

- ・第1段階の杭列はN-73°-Eの方位を示しており、山木遺跡第2次調査や第9次調査等で検出された田方条里の坪界線と、方位・間隔共にほぼ一致する。故に杭列は田方条里の坪界線か、あるいはそれを踏襲したものであると考えられる（葦山町教育委員会原茂光氏の御教示による）。なお、坪界線と思われる杭列は1列のみの検出であるが、地盤が軟弱である土器集中出土地点3の近辺は2列になっていることから、畦畔（あるいは道か）の幅は約2mと推定できる。
- ・第2段階の葦山城は、石積みとその南側の盛土で曲輪を形成し、北側が城外であったと思われる。南側の盛土からは多くの柱穴が検出されたが、明確に建物あるいは塀となるような柱穴列や、土壘状の盛土の高まりが検出できなかった。また、杭列と石積みは並行することから、城が田方条里の方向性をある程度踏襲して造成されていることが伺える。実際、大手口の位置する場所は坪界線の交点にある。
- ・石積みの北側ではいわゆる堀が検出されなかったが、葦山城絵図に「昔ハ深田ナルベシ」と記されていることと、パリノ・サーヴェイの分析結果から、おそらく深い堀を構築せず、泥田状の湿地が一面に広がっていたのではないかと考えられる。
- ・第3段階に構築された石敷道を生活道路と考えるならば、石積みを破却（廃城？）した後に、従来の条里に伴う道路を石敷道として復活させたとみることができる。一方で、城の解体あるいは城域拡張時の作業道路として石敷道がつくられたという考え方もある。しかし、石敷道を作業用道路とみる所見はこの道が田方条里の方向性を踏襲していること、さらに石積みを被覆する法面の縁辺に沿っていることが疑問点として残る。
- ・第4段階の城域拡張時の造成土は、IIa層とIIg層である。これら土層の分布域と由来は次のとおりである。

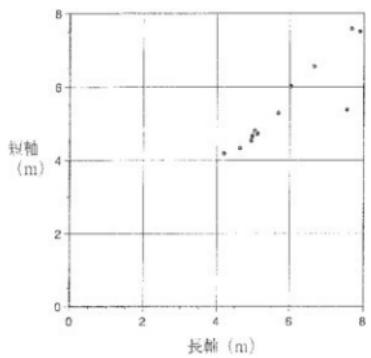
IIa層（橙褐色土）・・・調査区南側に分布、龍城山の地山に由来

- IIg層（淡黄褐色土や黒灰色土等）・・・調査区北側に分布、III層以下の堆積層に由来
これは、城の普請の際に、すぐ近くの土を使用して造成したことを示すものと考えられる。この造成土は調査区全体に広がっている。葦山城絵図によると、今回の調査地点の位置である大手口の東側には、平面形が長方形の曲輪が存在する。この曲輪は北側に突出したように造成されていることから、葦山城の最終段階の普請による曲輪の可能性が高い。これら所見から、第4段階の拡張によってつくられた曲輪は、絵図に見られる大手口東側の曲輪である可能性が高い。
- ・年代について、杭列は杭の加工方法から古代末～中世と思われる。また、石積み遺構は構築方法から16世紀後半と思われる。出土遺物は16世紀主体であるが、明確に時期を判断できる遺物が少ない。しかし、IIa層から大室IV段階頃の時期と考えらえる瀬戸・美濃の櫛鉢が2点出土している事実は、IIa層の堆積時期（第4段階）が後北条氏滅亡後であることを示している。
 - ・文献史料から、葦山城の大普請は天正13年から同14年にかけてと同17年頃を行ったことが分かっている。また、後北条氏滅亡後に入城した内藤信成（徳川家康の家臣）も、当時の状況から、普請を行った可能性が考えられる。以上のことから各段階の実年代を推定すると、それぞれ第1段階（中世）、第2段階（天正13年～同18年）、第3段階（後北条氏滅亡直後、天正18年）、第4段階（内藤信成入城から廃城までの時期、天正18年～慶長6年）の可能性が考えられる。年代を決定する要素が少ないため、あくまで一試案にすぎないが、根石の基部に何ら地業を設げずに低い石積みを構築する技法が、後北条氏に関わる蒲原城に見られることから、この石積みが天正13年から同18年の後北条氏に伴う可能性は高い。さらに、その後の石積み破却に伴う盛土は、この時期未だ石積み技法をもたない徳川氏の築城技法と符合する（註：本書の校正中に蒲原城の調査報告書が刊行された。これによると、蒲原城の石積みが後北条関連のものかどうかは、今後の検討課題であるとしている。）。
 - ・上述以外の遺構について、SD-1は第4段階以前の遺構と思われる。またSF-3及びSX-7、SF-2、SX-1、SX-3等は近世の遺構と思われる。特に暗渠であるSX-3は、廃城となつた葦山城の堀水の用水路である可能性が考えられる。

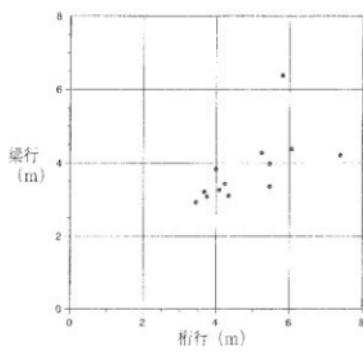
第2節 弥生時代～古墳時代

今回の調査では、竪穴住居跡24軒と掘立柱建物跡13棟が確認された。この集落の変遷については、以下のことが明らかとなった。

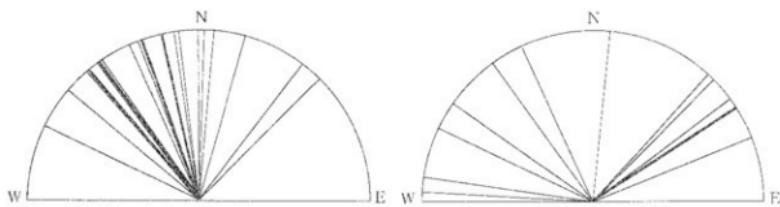
- ・ほとんどの竪穴住居跡、掘立柱建物跡は古墳時代前期に属する。しかし、SB-32は弥生時代後期の住居の可能性が高く、山木は弥生時代後期から古墳時代前期まで続いた集落であることがわかる。
- ・古墳時代前期の竪穴住居跡は、その規模から四方が約4～5m程度のものと約6～8m程度のものと、大きく2つのタイプに分けられる（第111図）。また掘立柱建物跡も、その規模から4m前後×3m前後のものと6m前後×4m以上のものと、大きく2つのタイプに分けられる（第112図）。これは、集落の2時期の存在を示していると思われる。
- ・小型の住居の時期（古段階と称す）は、大きく2時期に分かれると考えている。第1段階に属すると思われるのはSB-3・7・8・10・12・13・14・15・21とSH-2・4・5・6・9・10である。土器集中出土地点1もこの時期に属する。第2段階に属すると思われるのはSB-4・28・29・30・31とSH-1・11・12・13である。土器集中出土地点2・3もこの時期に属する。なお、SD-7は古段階に属するが、第1・第2段階のいずれかは不明である。これらは建物の重複関係から、更に時期が細分できる。
- ・古-第1段階は北側に竪穴住居跡が、南側に掘立柱建物跡が集中する傾向にある。一方、古-第2段階は北側に掘立柱建物跡が、南側に竪穴住居跡が集中する傾向にある。
- ・大型の住居の時期（新段階と称す）も、大きく2時期に分かれると考えている。第1段階に属すると思われるのはSB-1・2・5・6とSH-3・7・8である。第2段階に属すると思われるのはSB-9・20である。これらは建物の重複関係から、更に時期が細分できる。
- ・新-第1段階は西側に竪穴住居跡が、東側に掘立柱建物跡が集中する傾向にある。また、SH-3・7・8はその配置から同時に建てられていた可能性が高い。一方、新-第2段階は竪穴住居跡のみで掘立柱建物跡は検出されていない。
- ・全体的な傾向として、竪穴住居跡と掘立柱建物跡が同じ時期にほぼ同数並立している状況から、掘立柱建物跡が減少していく様相が見られる。
- ・建物の方位に関しては、建物の規模と相関関係が無く、位置の近い建物同士が同じ向きをしていることから、方位は建物の時期を示しているのではなく、立地に影響されているものと思われる（第113・114図）。
- ・調査区内に2箇所の窓地が存在する。どちらも泥炭が堆積しており、土器が集中して出土している。出土遺物から、調査区北西隅（土器集中出土地点1）は古-第1段階に相当する時期に堆積し、調査区南東隅（土器集中出土地点2・3）は古-第2段階に相当する時期に堆積したことが分かった。いずれも各段階の竪穴住居跡のそばであり、投棄場であったと思われる。
- ・遺構から出土した土器から、古段階の時期は廻間II式期に相当し、新段階の時期は廻間III式期に相当すると思われる。しかし、住居跡出土土器の大半は覆土中からの出土であるので、遺構の時期はおよその傾向を示す程度で考える必要がある。なお、SB-32は時期を特定する遺物が出土しなかった。



第111図 竪穴住居跡規模一覧

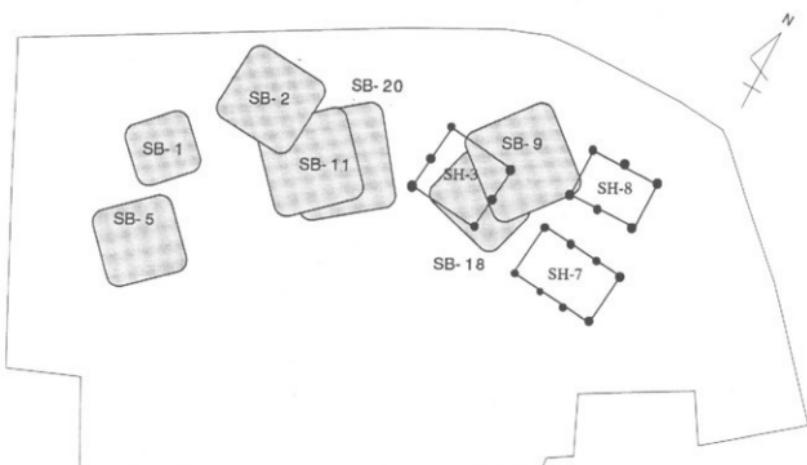
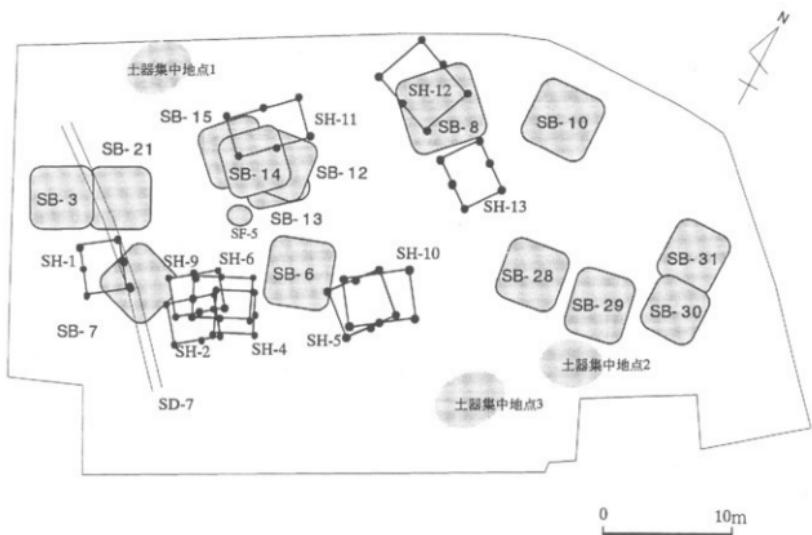


第112図 捜立柱建物跡規模一覧



第113図 竪穴住居跡方位集成

第114図 捜立柱建物跡方位集成



第115図 古墳時代集落変遷図

蘿山城周辺の古環境

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

蘿山城跡は、天城山に源を発する狩野川により形成された田方平野南部、天狗嶺からその下に広がる沖積低地にかけて位置する。蘿山城は、北条早雲の居城として1491年に築城され、伊豆および駿河方面の最大拠点であったとされている。しかし、豊臣秀吉の小田原征伐（1590年）により落城し、1600年に廃城された。

発掘調査の結果、本遺跡では、弥生時代～古墳時代の柱穴跡、その上位から杭列が検出されている。この杭列は、山木遺跡で確認された10世紀代の条里型水田と同じ方向性を示していることから、水田に伴う遺構である可能性が高いとされている。これらのことから、本遺跡は、集落から水田へと変化し、その後に蘿山城が構築されたと推定されている。

そこで、今回の自然科学分析調査では、弥生時代～古墳時代から蘿山城築城直前までの古環境変遷を推定するとともに、山木遺跡の条里型水田と本遺跡の関係を把握することを目的として、10世紀代に周辺で稻作が行われていたかどうかについて検証する。これらの目的のために、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析をそれぞれ実施した。

1. 試料

本遺跡の基本層序は、下位より灰褐色砂混じりシルト層、黒色粘土層とされている。この上位は、蘿山城構築時の盛り土、現造成土となっている。なお、調査区北西側に向かい傾斜しており、標高の低い場所では灰色が強く、グライ化している。また、灰褐色砂混じりシルト層と黒色粘土層の間に灰褐色シルト層が認められる。発掘調査の所見によると、灰褐色砂混じりシルト層が弥生時代～古墳時代の遺物包含層、黒色粘土層が10世紀代の水田層、灰黑色粘土層が中世水田層とされている。

試料は、1トレンチ・3トレンチ・5トレンチから長さ約20cmの柱状試料として採取した。これより目的に応じて分析試料を抽出し、微化石分析を実施した（図1）。

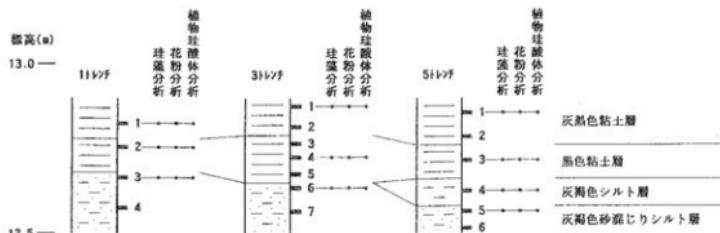


図1 試料採取地点の模式柱状図

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

湿重約6gの試料について過酸化水素水・塩酸処理、自然沈降法、傾斜法の順に化学・物理的な処理を施して珪藻化石を分離・濃集する。処理後の残渣を適当量計り取りカバーガラス上に滴下・乾燥させた後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。

種の同定は、K. Krammer abd lange - Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、K. Krammer (1992)などを用いる。同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。また、産出した化石が現地性の化石か他の場所から運搬・堆積した異地性の化石かを判断する目安として完形殻の出現率をもおめ考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたり、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応性に基づいて生態区分する。主な分類群について、主要珪藻化石群集の層位的分布図を作成する。堆積環境の解析にあたり、安藤(1990)の環境指標種群、伊藤・堀内(1991)などを参考とする。

(2) 花粉分析

湿重約10gの試料について水酸化カリウム処理、篩別(250 μ m)、重液分離(臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリリス処理(無水酢酸:濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的な処理を施して、花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位的分布図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基準とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(3) 植物珪酸体分析

湿重10g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタンクスチレン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入し永久プレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現する短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体を、近藤・佐藤(1986)の分類を参考にして同定・計数する。

結果は、検出された種類と個数の一覧表および植物珪酸体群集の層位的分布図で示す。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

3. 微化石の産状

(1) 珪藻化石

結果を表1・図2に示す。珪藻化石は全試料から豊富に産出する。完形殻の出現率は、40~70%まで変化し、各トレンドとも上部に向かい高くなる。産出種は大部分が淡水生種で構成される。産出分類群数は28属147種類である。産出種を水中に生育する水生珪藻と陸上:のコケの表面や土壤表面など多少の温りのある好気的な場所に生育する陸生珪藻に分けると、各トレンドとも最下部の試料で陸生珪藻が多産する。淡水生種の生態性(塩分、水素イオン濃度、流水に対する適応度合い)では、貧塩不定性種、真・好アルカリ性種、流水不定性種と真・好止水性種がそれぞれ多産する。以下に、各トレンドごとに

表1 珊藻分析結果(1)

種類	生長性	固有種	種別			1トレント	3トレント	5トレント
			1	2	3			
<i>Kittmeria feridensis</i> var. <i>salinarum</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus cavelii</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus crenulatus</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus exigua</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus exigua</i> var. <i>heterovalvata</i> Kraske	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus fuscus</i> (Mertz) Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus lanceolata</i> (Breb.) Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus limicola</i> Kraske	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus minutissima</i> Kuetzing	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus mortiana</i> Kraske	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus subulaeoides</i> Hustedt	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus tenuis</i> Kuetzing	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Mertz) J.V. Meurck	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus pedunculus</i> (Mertz) Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Anacardiella sphacelophora</i> (Kutz.) Pfitzer	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Aulacosira ambigua</i> (Grun.) Skoienova	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Aulacosira italicica</i> (Chr.) Skoienova	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Bacillaria paradoxa</i> Gmelin	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Caloneis aerophila</i> Rock	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Caloneis leptostoma</i> Kramer & Lange-Bertalot	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Caloneis siliculos</i> (Chr.) Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Caloneis siliculos</i> var. <i>intermedia</i> Mayer	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Caloneis siliculos</i> var. <i>minuta</i> (Grun.) Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Ceratium tenuicorne</i> -	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cocconeis disculus</i> Schumann	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cocconeis planula</i> (Chr.) Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cocconeis planula</i> var. <i>engyota</i> (Chr.) Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cocconeis planula</i> var. <i>lineata</i> (Chr.) Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cratitrichia ascendens</i> (Mertz) C. Mann	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cryptocella ambiguus</i> (Chr.) C. Mann	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cyclotella costata</i> (Ehr.) Kuetzing	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella aspera</i> (Chr.) Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella cuspidata</i> Kuetzing	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella minus</i> Nitzsch von Wubb.	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella nivalis</i> (Nitzsch) Auerwald	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella pellucida</i> Bischop	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella sinuata</i> Gregory	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella subaequata</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella tenuis</i> (Breb.) ex Mertz J.V. Meurck	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella turigdale</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella turigdale</i> var. <i>niponica</i> Skwirtzow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Cymbella</i> spp.	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Diatoma hyalea</i> var. <i>mesodon</i> (Ehr.) Kirchner	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Diploneis elliptica</i> (Mertz) Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse) Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Diploneis sericea</i> Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Eudoruca monodonta</i> Ehrenberg	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Eudoruca peristomata</i> var. <i>sinica</i> (Mertz) Habenhorst	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Eudoruca planula</i> undulata (Kutts.) Habenhorst	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Eudoruca praeusta</i> Ehrenberg	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Eudoruca praeusta</i> var. <i>bildens</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Eudoruca</i> spp.	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria brevistriata</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>gracilis</i> (Oestr.) Hustedt	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>wesolepta</i> (Kutts.) Habenhorst	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria cornuta</i> (Ehr.) Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria cornuta</i> fo. <i>binodos</i> (Ehr.) Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria cornuta</i> fo. <i>binodulata</i> Bechtel	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria cornuta</i> fo. <i>ventosa</i> (Ehr.) Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria deliciosa</i> (Kutz.) Smith-Lange-B.	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria exigua</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria leptocephala</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria parastictica</i> (Smith) Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria planata</i> Ehrenberg	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria planata</i> var. <i>lanceolata</i> (Schum.) Hustedt	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria vaucheri</i> (Kutz.) Petersen	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria virescens</i> Balfs	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Fragilaria virescens</i> var. <i>capitata</i> Oestrup	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.) De Toni	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gomphonema subnitens</i> Ehrenberg	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gomphonema affine</i> Kuetzing	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gomphonema angustatum</i> (Kutz.) Habenhorst	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gomphonema parvulum</i> Kuetzing	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gomphonema truncatum</i> Ehrenberg	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gomphonema</i> spp.	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gymnosira acuminata</i> (Kutz.) Habenhorst	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gymnosira scalpoides</i> (Rabb.) Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gymnosira speciosa</i> (Smith) Cleve	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Gymnosira</i> spp.	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.) Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Melosira varians</i> Agardh	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Navicula americana</i> Ehrenberg	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Navicula baltica</i> Ehrenberg	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Navicula brackmanni</i> Petersen	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Navicula confervacea</i> (Kutz.) Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1
<i>Navicula contorta</i> Grunow	水生	水生	1	1	1	1	1	1

表1 珪藻分析結果(2)

種	分類群	固形物	1トレンチ	3トレンチ	5トレンチ	%						
			al-l1	al-ph	ind	al-l1	al-ph	ind	al-l1	al-ph	ind	
<i>Navicula elonginalis</i> (Grev.) Ralfs	Ogb-ind	ind	U	-	-	1	1	-	2	1	1	
<i>Navicula elonginalis</i> var. <i>neglecta</i> (Krauss) Patrick	Ogb-ind	al-l1	r-ph	U	3	1	1	2	3	3	1	
<i>Navicula hasta</i> Pantossek	Ogb-ind	al-l1	l-ph	U	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula hasta</i> var. <i>gracilis</i> Skvortzow	Ogb-ind	al-l1	l-ph	U	1	-	-	1	-	-	-	
<i>Navicula ignota</i> Krasske	Ogb-ind	ind	88	-	-	-	-	-	-	-	2	
<i>Navicula ignota</i> Grunow	Ogb-ind	al-l1	ind	1	2	-	2	5	2	1	1	
<i>Navicula ignota</i> Grunow	Ogb-ind	al-l1	ind	1	-	-	1	-	-	-	1	
<i>Navicula laceriformis</i> fn. <i>fuscicula</i> (Desmarest) K. Kobayasi	Ogb-ind	al-l1	ind	1	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Navicula matica</i> Kuetzing	Ogb-ind	al-l1	ind	84.5	1	6	27	4	41	3	11	
<i>Navicula matica</i> var. <i>ventricosa</i> (Kuetz.) Cleve	Ogb-ind	al-l1	ind	81	-	1	-	-	-	-	-	
<i>Navicula maticoides</i> Hustadt	Ogb-ind	ind	81	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Navicula notata</i> Pantossek	Ogb-ind	al-l1	ind	10	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula oblongata</i> Hustadt	Ogb-ind	al-l1	ind	T	2	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula pupula</i> Kuetzing	Ogb-ind	ind	ind	S	-	-	1	-	-	1	2	
<i>Navicula pusilla</i> Cleve	Ogb-hob	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Navicula radiosa</i> Kuetzing	Ogb-ind	ind	ind	U	-	-	-	1	-	-	1	
<i>Navicula radiosa</i> fn. <i>nipponica</i> Skvortzow	Ogb-ind	al-l1	ind	T	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula reichenbachi</i> Grunow	Ogb-ind	al-l1	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula reticulata</i> Hustadt	Ogb-ind	al-l1	ind	81.0	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula tenuis</i> Hustadt	Ogb-ind	al-l1	ind	S	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogb-hil	ind	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rotundata</i> (Kuetz.) Cleve	Ogb-ind	al-l1	r-ph	X.U	3	-	-	-	-	-	-	
<i>Navicula</i> spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	1	1	-	-	-	2	-	
<i>Neidium alpinum</i> Hustadt	Ogb-unk	unk	ind	AA	-	-	-	-	-	-	2	
<i>Neidium amplissimum</i> (Ehr.) Kramer	Ogb-unk	ind	l-ph	-	1	-	1	-	-	-	-	
<i>Neidium irideum</i> (Ehr.) Cleve	Ogb-hob	sc-l1	l-bl	0	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogb-ind	al-bl	ind	S	5	-	-	-	1	6	1	
<i>Nitzschia brevisetosa</i> Grunow	Ogb-hil	al-bl	ind	BB.U	-	-	-	-	-	-	3	
<i>Nitzschia denticula</i> (Kuetz.) Grunow	Ogb-ind	al-bl	ind	NA.U	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Nitzschia hantzschiana</i> Schleiden	Ogb-ind	al-bl	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Nitzschia palustris</i> Hustadt	Ogb-ind	al-bl	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Nitzschia sinuata</i> (Grun.) Feragallo	Ogb-ind	al-bl	ind	AA	-	-	-	-	-	-	2	
<i>Nitzschia sinuata</i> var. <i>delegatii</i> (Grun.) Lange-Bertalot	Ogb-ind	al-l1	l-ph	U	3	1	8	6	7	7	-	
<i>Nitzschia</i> spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	1	
<i>Orthotricha rossiana</i> (Roth.) O'Meara	Ogb-ind	ind	ind	AA	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Pinnularia acrospheria</i> W. Smith	Ogb-ind	al-l1	l-ph	0	-	-	1	-	1	1	-	
<i>Pinnularia appendiculata</i> (Grg.) Cleve	Ogb-hob	ind	ind	BB	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogb-ind	ind	ind	NA	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia brevirostrata</i> Cleve	Ogb-hob	sc-l1	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia divergens</i> var. <i>elliptica</i> (Grun.) Cleve	Ogb-hob	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogb-ind	al-l1	ind	0	-	-	-	-	-	7	2	
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>lanceolata</i> Hustadt	Ogb-ind	al-l1	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>lanceolata</i> (Hust.) Cleve	Ogb-hob	al-l1	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia imperatrix</i> Wille	Ogb-hob	sc-l1	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia macilenta</i> (Ehr.) Cleve	Ogb-hob	sc-l1	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia nodosa</i> Ehrenberg	Ogb-hob	sc-l1	l-ph	0	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia rupestris</i> Hustadt	Ogb-ind	ind	ind	-	2	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia schomburgkii</i> Kramer	Ogb-ind	ind	ind	U	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia schroderae</i> (Roth.) Kramer	Ogb-ind	ind	ind	AA	1	1	2	-	-	2	2	
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.) Cleve	Ogb-ind	sc-l1	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia streptorapha</i> Cleve	Ogb-hob	sc-l1	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogb-ind	sc-l1	ind	BB.S	-	-	5	-	-	2	3	
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogb-ind	ind	0	-	-	-	-	1	1	-	-	
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogb-unk	unk	unk	-	1	2	-	-	-	-	-	
<i>Phalacrosiphonia abbreviata</i> (Ag.) Lange-Bertalot	Ogb-hil	al-l1	r-ph	X.T	-	2	-	-	1	-	-	
<i>Rhopalodia gibba</i> (Dr.) Müller	Ogb-ind	al-l1	ind	2	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Rhopalodia gibba</i> var. <i>lanceolata</i> (Grun.) H. & M. Persano	Ogb-ind	al-l1	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Rhopalodia gibba</i> var. <i>lanceolata</i> (Grun.) H. & M. Persano	Ogb-hil	al-l1	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Ehr.) Möller	Ogb-hil	al-l1	ind	5	3	-	2	-	8	-	-	
<i>Rhopalodia culiciformis</i> Sverdrup	Ogb-hil	al-l1	l-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis acuta</i> W. Smith	Ogb-ind	al-l1	l-ph	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis kriegeri</i> Patrick	Ogb-ind	ind	T	1	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Stauroneis legumen</i> var. <i>elliptica</i> M. Kobayashi	Ogb-hob	sc-l1	l-ph	1	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis nobilis</i> Schwemm	Ogb-hob	sc-l1	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerst	Ogb-ind	ind	BB	-	-	2	1	-	2	-	5	
<i>Spirotaenia ulna</i> (Kuetz.) Ehrenberg	Ogb-ind	al-l1	ind	U	-	1	-	-	-	-	1	
海水生種合計				0	0	0	0	0	0	0	0	
淡水～海水混生種合計				0	0	0	0	0	0	0	0	
淡水混生種合計				1	0	0	0	0	0	0	0	
淡水不適性種				208	203	105	205	204	135	201	207	209
海水不適性種				205	203	105	205	204	135	201	202	206

理塚的種群

T-ph: 下水性種群指標 K: 潮田浮遊性指標 C: 高沼泥底指標

Ogb-hil: 實藻好適性種

al-l1: 耐鹽性指標

ind: pH不適性種

Ogb-hob: 實藻適性指標

al-l1: 好酸性指標

r-ph: 好鹼性指標

Ogb-unk: 實藻不明確

unk: 淡水不適性

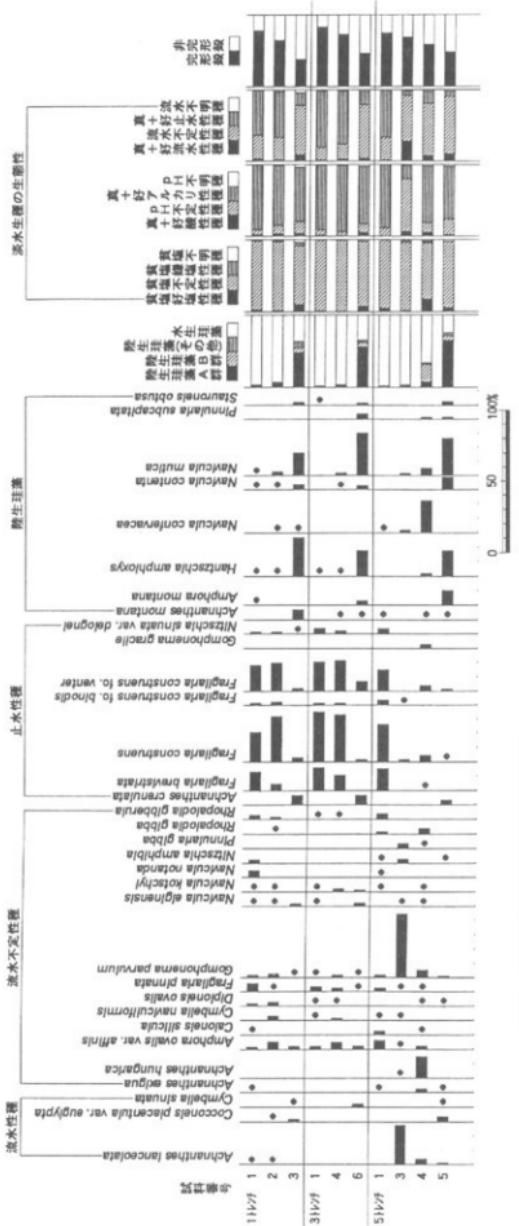


図2 主要珪藻化石集の層位的分布
各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の比率は淡水生種の合計を基数として
相対頻度で算出した。
なお、●は産出率1%未満の種類を示す。

結果を記す。

＜1 トレンチ＞

珪藻化石群集は、試料番号3と試料番号2・1で異なる。試料番号3は陸生珪藻の中でも耐乾性の強いA群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*が17~27%産出し、同じく陸生珪藻A群である *Navicula contenta*、未区分陸生珪藻の *Achnanthes montana*、好止水性種の *Achnanthes crenulata*が5~7%産出する。試料番号2・1は、好止水性種の *Fragilaria construens*、好止水性種で有機汚濁の進んだ富栄養水域に耐性のある好汚濁性種の *Fragilaria construens* var. *venter*が20~30%、好止水性種の *Fragilaria brevistriata*が3~12%産出する。この他、流水不定性種で好汚濁性種の *Fragilaria pinnata*、貧塩好塩性種の *Rhopalodia gibberula*が隨伴する。

＜3 トレンチ＞

珪藻化石群集は、1トレンチと同様な変化がみられ、試料番号6と試料番号4・1で異なる。試料番号6では、陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*が20~30%産出し、同じくA群の *Navicula contenta*、*Amphora montana*、好止水性種の *Achnanthes crenulata*、*Fragilaria construens* var. *venter*が2~7%検出される。試料番号4・1は、好止水性種の *Fragilaria construens*、好止水性種で好汚濁性種の *Fragilaria construens* var. *venter*が20~35%、好止水性種の *Fragilaria brevistriata*が10~15%が検出される。この他に、流水不定性種で好汚濁性種の *Fragilaria pinnata*、流水不定性種の *Amphora ovalis* var. *affinis*が隨伴する。

＜5 トレンチ＞

珪藻化石群集は、各試料で異なる。試料番号5は陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*が20~26%産出し、同じくA群の *Navicula contenta*、*Amphora montana*が10%、好流水性種の *Cocconeis placentula* var. *euglypta*、*Achnanthes crenulata*が数%産出する。試料番号4は、流水不定性種の *Achnanthes hungarica*、陸生珪藻B群であり好汚濁性種でもある *Navicula confervacea*が15~22%産出する。また、好流水性種の *Achnanthes lanceolata*、流水不定性種の *Gomphonema parvulum*、*Rhopalodia gibba*などを隨伴する。試料番号3は、流水不定性種の *Gomphonema parvulum*が約45%、好流水性種の *Achnanthes lanceolata*が約30%検出される。試料番号1では、好止水性種の *Fragilaria brevistriata*、*Fragilaria construens*、好止水性種で好汚濁性種の *Fragilaria construens* var. *venter*が15~25%産出する。

(2) 花粉化石

結果を表2・図3に示す。以下に、各トレンチごとに結果を記す。

＜第1 トレンチ＞

試料番号3・1では、花粉化石の保存状態が非常に悪く、しかも検出個体数が少ない。試料番号2では、スギ属が多産し、マキ属・モミ属・ツガ属・マツ属・コナラ属アカガシ亜属が検出される。草本花粉では、イネ科が多産し、次いでカヤツリグサ科・サナエタデ節ーウナギツカミ節が検出される。この他、サジオモダカ属・ミズアオイ属・ソバ属・ミズワラビ属・サンショウウモなどが検出される。

＜第3 トレンチ＞

花粉化石は、全体的に保存状態が悪い。木本花粉では、モミ属・ツガ属・マツ属・スギ属・アカガシ亜属が多産する。これらの種類は層位的に変化しており、上位に向かいスギ属・アカガシ亜属が減少し、マツ属が増加する。

草本花粉は出現傾向に著しい変化がなく、イネ科が多産し、次いでカヤツリグサ科が検出される。また、資料番号6でオモダカ属・ミズアオイ属、試料番号4・1でサナエタデ節ーウナギツカミ節・ミズワラビ属・サンショウウモが比較的多く検出される。

表2 花粉分析結果

種類	試料番号	1トレンド			3トレンド			5トレンド				
		1	2	3	1	4	6	1	3	4	5	
木本花粉												
マキ属		1	14	2	9	7	13	10	19	16	-	
モミ属		-	19	-	20	34	10	34	9	3	-	
ツガ属		-	25	-	34	39	7	44	12	7	-	
トウヒ属		-	2	-	2	1	-	2	2	-	-	
マツ属		-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	
マツ属		-	20	-	24	31	7	28	6	1	-	
マツ属		1	18	1	114	33	10	86	2	1	-	
コウヤマキ属		-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	
スギ属		1	65	6	26	79	118	26	86	162	-	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		-	1	-	2	6	1	2	7	-	-	
ヤマモモ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
サワグルミ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
クルミ属		-	-	-	1	-	1	-	3	-	-	
クマシデ属-アサダ属		-	7	-	5	4	5	6	3	14	-	
ハンノキ属		-	-	-	1	1	-	-	1	1	-	
ブナ属		-	1	-	4	4	4	1	2	2	-	
コナラ属		-	7	-	2	8	11	3	5	13	-	
コナラ属		1	20	5	2	18	39	12	21	44	-	
クリ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
シノヨキ属		-	1	-	-	1	-	1	1	-	-	
ニレ属-ケヤキ属		-	1	1	4	4	8	1	13	3	-	
エノキ属-ムクノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
ヤドリギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シキミ属		-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
ウルシ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
モチノキ属		-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	
ニシキギ属		-	-	-	-	-	-	-	4	1	-	
カエデ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
ブドウ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
ノブドウ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-
ツバキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
イボタクノキ属		-	-	-	1	-	1	1	1	-	1	-
トネリコ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
スイカズラ属		-	-	-	1	-	-	1	-	1	-	
草本花粉												
ガマ属		-	-	-	-	2	1	-	1	-	-	
サジオモダカ属		-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	
オセダカ属		-	-	-	2	-	4	1	1	5	-	
イネ科	1	72	6	215	221	246	165	84	181	-	-	
カヤツリグサ科		-	19	-	19	36	73	13	7	15	-	
ユクサ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
ミズアオイ属		-	1	-	-	1	5	-	2	10	-	
クワ科		-	-	-	1	1	3	-	4	5	-	
ギンギシ属		-	-	-	-	-	1	1	2	1	-	
サナエタデ属-ウナギツカミ属		17	-	17	16	2	15	26	8	-	-	
ソバ属		-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	
アカザ科		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
ナデシコ科		-	2	-	3	3	1	8	1	-	-	
キンポウゲ科		-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	
アブラナ科		-	1	-	1	1	-	8	4	-	-	
マメ科		-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	
フウソク属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
アカバナ属-ミズユキノシタ属		-	1	-	-	1	-	2	-	-	-	
セリ科		-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	
オオバコ属		-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	
ヨモギ属		-	2	-	-	4	6	2	2	31	-	
オナモミ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
信のオキナキ属		-	1	-	1	1	-	-	1	1	-	
タンボボ属		-	2	-	1	-	1	1	1	1	-	
不明花粉		-	2	-	2	4	4	4	-	1	-	
シダ類胞子												
ミズワラビ属		1	10	1	5	5	1	24	-	1	-	
サンショウモ		-	1	-	5	5	2	6	2	1	-	
アカウクサ属		-	-	1	-	1	-	6	2	1	-	
他のシダ類胞子	25	89	19	96	84	110	290	18	28	6	-	
合計		4	203	15	253	270	243	259	195	280	0	
木本花粉		1	120	6	262	287	348	219	140	263	0	
草本花粉		0	2	0	2	4	4	4	9	11	0	
不明花粉		26	100	21	106	95	113	326	22	31	6	
シダ類胞子		31	423	42	621	652	704	804	357	574	6	

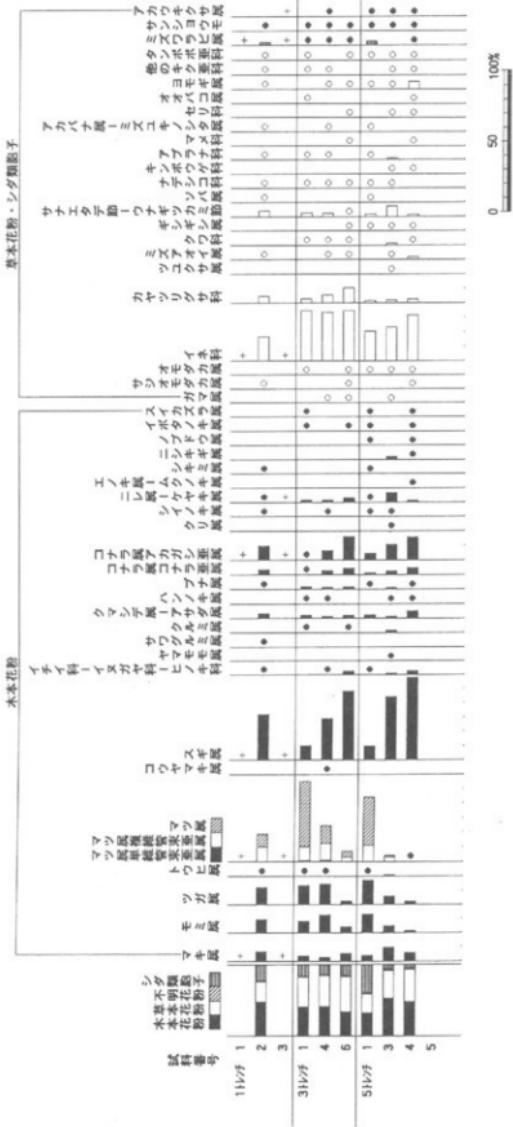


図3 主要花粉化石群集の層位的分布
出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基數として百分率で算出した。なお、○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

＜第5トレンチ＞

花粉化石は、全体的に保存状態が悪い。また、試料番号5では、検出個体数も少ない。木本花粉の出現傾向は、層位的に変化がみられる。下部ではスギ属が最も高率に出現し、次いでアカガシ亜属が検出される。これらの種類は、上位に向かい減少し、マツ属が増加する。また、試料番号3でマキ属、試料番号1でモミ属・ツガ属が多く検出される。

草本花粉では、イネ科が多産する。この他、オモダカ属・カヤツリグサ科・ミズアオイ属・サナエタデ節ーウナギツカミ節・ヨモギ属・ミズワラビ属・サンショウモ・アカウキクサ属などが検出される。また、試料番号1では、ソバ属が検出される。

(3) 植物珪酸体

結果を表3・図4に示す。以下に、各トレンチごとに結果を記す。

＜第1トレンチ＞

植物珪酸体群集は、試料番号3と試料番号2・1で異なる。試料番号3では、タケ亜科が多産する。この他、イネ属・ヨシ属・スキ属などを伴う。試料番号2・1ではイネ属が短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも増加・多産する。イネ属機動細胞珪酸体の出現率は、50%以上である。

＜第3トレンチ＞

植物珪酸体群集は、各試料で異なる。試料番号6では、タケ亜科が多産し、イネ属・ヨシ属・スキ属を伴う。試料番号4では、イネ属・ヨシ属が増加する。試料番号1になると、イネ属がさらに増加して多産する。

＜第5トレンチ＞

植物珪酸体群集は、試料番号5・4、試料番号3、試料番号1で異なる。試料番号5・4では、タケ亜科が多産し、イネ属・ヨシ属・スキ属を伴う。試料番号3では、タケ亜科が減少し、ヨシ属が多産する。試料番号1ではヨシ属が減少し、イネ属が多産する。

4. 花粉化石からみた遺跡周辺の森林植生

主な木本花粉の出現傾向を各地点ごとに比較すると次の通りである。灰褐色砂混じりシルト層ではスギ属が多産し、次いで暖温帯常緑広葉樹林の主要構成要素であるアカガシ亜属が検出される。上位に向かいこれらの種類が減少し、灰黒色粘土層になるとマツ属が多産する群集に変化する。このような傾向は、近隣の山木遺跡で実施された花粉分析結果(辻, 1977)、伊豆半島北部の丹那盆地で実施された花粉分析結果(東郷・橋尾, 1984)と同様な傾向を示している。したがって、今回本遺跡で得られた花粉化石群集は、本地域の普遍的な植生変化を反映していると考えられる。このことから、弥生時代~古墳時代の頃、本地域は暖温帯に属しており、主にスギとカシ類からなる植生が存在していたと考えられる。この他にも暖温帯を中心に分布するマキ属、暖温帯から冷温帯の移行帶(中間温帯)で森林を構成するモミ属・ツガ属などの針葉樹も森林構成種として存在していたと考えられる。やがて周辺ではマツ属が増加し、中世以降になるとマツ属を中心とする植生に変化したと考えられる。これは、後述するように低地で稲作や畠作などが既に行われており、その後葦山城が築かれるなど、周辺の植生が著しく破壊されてマツ二次林が存在していたことを反映していると考えられる。

5. 低地の環境変遷と稲作について

最下部の灰褐色砂混じりシルト層における植物珪酸体の出現状況は、各地点とも類似しており、タケ亜科が多産し、イネ属・ヨシ属・スキ属などを伴う。タケ亜科は、他のイネ科植物と比較して珪酸体の生産量が多く、しかも風化に対する抵抗性があるとされている(近藤, 1982; 杉山・藤原, 1986)。そ

表3 植物珪酸体分析結果

種類 試料番号	1トレンチ			3トレンチ			5トレンチ				
	1	2	3	1	4	6	1	3	4	5	
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	92	62	3	92	33	18	97	3	13	1	
タケ亜科ネザサ節	5	1	3	2	1	-	2	6	1	-	
タケ亜科	98	82	127	97	84	134	98	29	175	161	
ヨシ属	15	52	29	22	75	22	21	187	16	26	
ウシクサ族コブナグサ属	2	-	-	1	2	-	-	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属	11	12	26	11	27	30	15	9	10	15	
イチゴンキギ亞科	9	-	-	2	5	2	2	-	-	-	
不明キビ型	7	11	15	8	24	10	6	5	2	3	
不明ヒゲシバ型	11	16	18	12	21	12	6	4	5	4	
不明ダンチク型	11	6	14	6	15	11	8	1	2	4	
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	79	97	10	77	69	20	118	3	14	1	
タケ亜科ネザサ節	4	2	4	3	3	-	8	5	3	2	
タケ亜科	19	19	90	18	23	85	48	21	97	91	
ヨシ属	10	26	16	14	52	8	10	158	17	2	
ウシクサ族	12	7	15	11	9	6	9	2	7	3	
不明	3	5	10	15	19	10	3	3	5	7	
合計											
イネ科葉部短細胞珪酸体	261	242	235	253	287	239	255	244	224	214	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	127	156	145	138	175	129	196	192	143	106	
総計	388	398	380	391	462	368	451	436	367	320	
組織片											
イネ属頸珪酸体	-	3	1	6	5	1	1	-	4	1	
イネ属短細胞列	12	5	-	3	5	2	3	-	-	1	
イネ属機動細胞列	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	
タケ亜科短細胞列	1	-	-	1	-	-	-	-	2	-	

のため、タケ亜科の珪酸体は土壤中に残存しやすいと考えられ、当時の植生よりも過大評価されていると考えられる。花粉化石は、各地点とも基本的には保存状態が悪く、特に1トレンチおよび5トレンチでは検出個体数も少ない。一方、珪藻化石群集も近似しており、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*などの陸生珪藻A群が多産する。現在の陸生珪藻の分布調査によれば、陸生珪藻が全体の70~80%以上であれば、その試料が堆積した場所は水域ではなく陸上の好気的環境であるとされている（伊藤・堀内、1991）。各トレンチの陸生珪藻の割合は、この値に近いかその範囲内にある。以上のことを考慮すると、本層が堆積した弥生時代～古墳時代頃、調査地点の周辺は離水しており、好気的な場所であったと推定される。このような環境は、本地点が自然堤防などの微高地上に位置している（加藤、1977）ことやこの時期の集落が形成されていることと調和的な結果である。

その後、5トレンチでは、灰褐色シルトが堆積する。本層における植物珪酸体の出現状況は、下位と同様である。花粉化石では、イネ科が多産する。珪藻化石では、流水不定性の*Achnanthes hungarica*と、陸生珪藻B群であり好汚濁性種でもある*Navicula confervacea*が多産する。このうち、*Achnanthes*

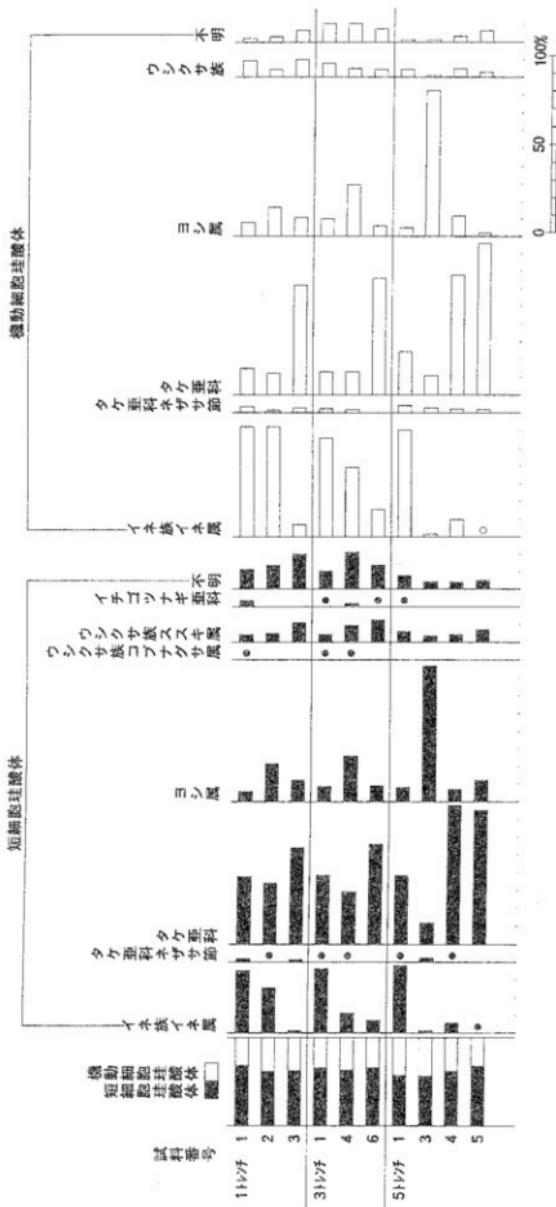


図4 植物珪酸体群集の層位的分布
出現率は、イネ科葉短鎖胞壁糖体、イネ科葉運動細胞壁糖体の總数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。

hungarica は、淡水から弱い汽水域まで分布し、とくにウキクサに好んで付着するとされる (Hustedt, 1959)。また、現在の水田から多産する種もある (Negoro and Higashino, 1986)。さらに *Navicula conferuacea* は、現在の乾田から多産する (伊藤, 1994)。以上のことから、5トレンチ側では、サジオモダカ属・オモダカ属・ミズアオイ属・ミズワラビ属・サンショウモ・アカウキクサ属などの水生植物が生育する水深の浅い富栄養沼沢地～湿地のような水域となっていたと考えられる。

黒色粘土層では、花粉化石では各地点ともほぼ同様な傾向を示し、イネ科が多産する。本層は、10世紀代の水田層の可能性があるとされている。イネ属機動細胞珪酸体の出現率は、1トレンチ・3トレンチと5トレンチで異なっている。1トレンチ・3トレンチでは、イネ属機動細胞珪酸体が30%以上である。これに対して、5トレンチではイネ属珪酸体の出現率が10%以下と低率であり、ヨシ属が最も高率に出現する。現在の稻作で10ha 当り500kgのイナワラを堆肥する作業を8年間続けた水田耕作土層では、イネ属機動細胞珪酸体の出現率が16%以上とされている。(近藤, 1988)。これと比較すると、5トレンチのみが現水田耕作土よりも低率である。一方、珪藻化石の出現傾向も1トレンチ・3トレンチと5トレンチで異なっている。1トレンチ・3トレンチでは、好止水性種の *Fragilaria construens*、*F. construens* var. *venter*、*F. brevistriata* が多産する。特に、*F. construens* var. *venter* は、有機汚濁の進んだ富栄養水域に耐性のある好汚濁性種とされている (Asai & Watanabe, 1995)。これに対して、5トレンチでは、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、好流水性で中～下流性河川指標種の *Achnanthes lanceolata* が多産し、中でも流水指標種が多産する点で大きく異なる。以上の諸点を総合すると、黒色粘土層が堆積した10世紀代の頃、1トレンチ・3トレンチ付近は富栄養な沼沢地のような環境であり、水田として稻作が行われていた可能性がある。このような水田の内部には、サジオモダカ属・ミズアオイ属・ミズワラビ属・サンショウモ・アカウキクサ属などが生育しており、水田雜草となっていた可能性がある。したがって、両トレンチ付近では微高地に位置する半乾半濕の湿地を利用して野本 (1977) も指摘しているような水田が構築されたと考えられる。このように考えると、急激な群集変化も開田という人為的な影響の反映として見ることが出来る。とくに好汚濁性種の出現は施肥などの影響も考えられる。これに対して5トレンチ側では、ヨシ属などのイネ科が繁茂しており、流水の影響が及んでいたと考えられ、非生産域であった可能性が高い。この点は、5トレンチ試料採取地点の標高が1・3トレンチよりやや低い点と調和的である。

灰黒色粘土層では、各トレンチともイネ属珪酸体が多産する。また、珪藻化石群集は、各トレンチとも好止水性種の *Fragilaria construens*、*F. construens* var. *venter*、*F. brevistriata* が多産する。これより、中世の周辺低地では、稻作が行われていたと推定される。また、各トレンチともイネ属がほぼ同様な出現率であることから、本遺跡内の全域が水田として利用されていたと考えられる。また、オモダカ属・ミズワラビ属・サンショウモ・アカウキクリ属などが水田雜草として生育していた可能性がある。

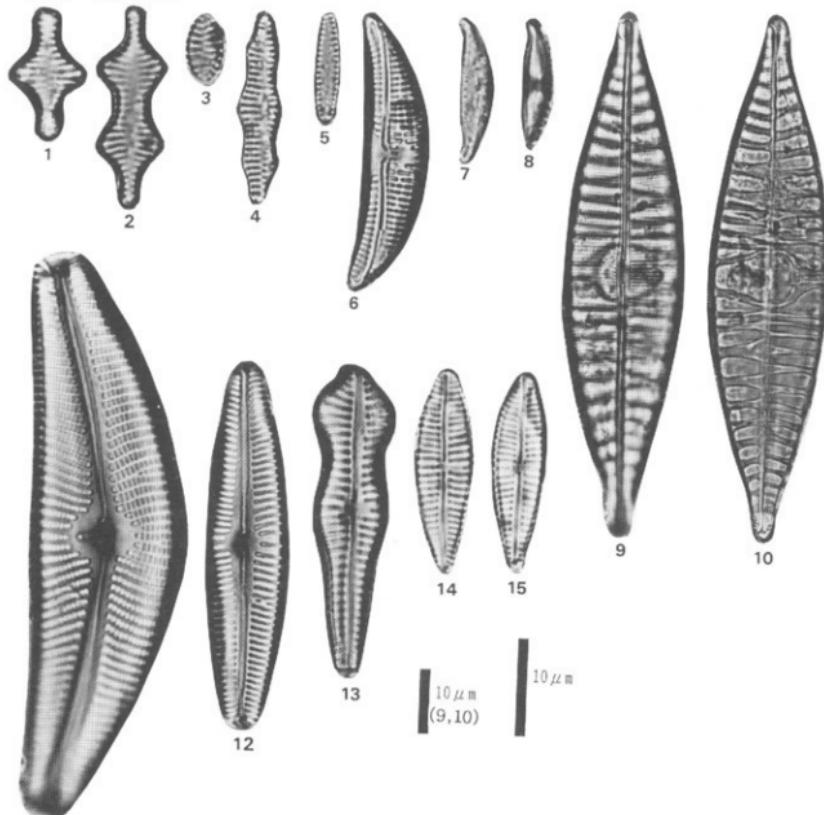
6.まとめ

以上より、山木遺跡で条里型水田が存在した10世紀代には、本遺跡1・3トレンチ付近でも水田が當まれ稻作が行われていたことが明らかとなった。一方、この頃5トレンチ付近のやや低い場所は流水の影響を受けた非生産域であったと考えられる。今回の発掘調査区全域が稻作地として水田化するのは、おそらく中世頃と考えられる。基山城北西に面する低地には、当初水田が広がっていたのである。その後、これらの水田は埋め立てられ城域が拡大するとともに、調査区北端に接する外堀が設けられたと考えられる。

<引用文献>

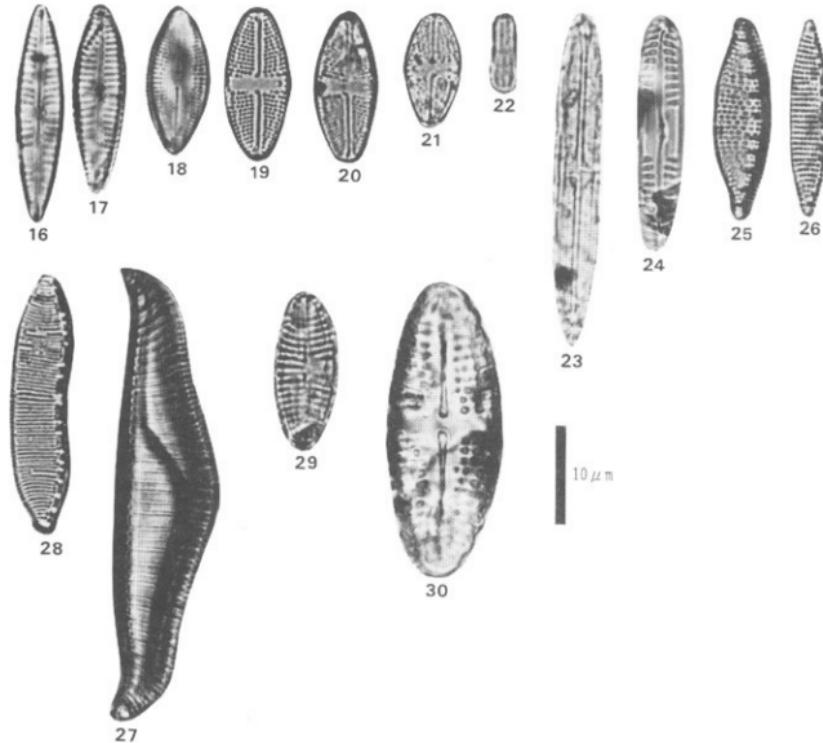
- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of E pilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 16, p. 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水帯珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6 p. 23-45.
- 伊藤良永 (1994) 乾田と畑の珪藻植生. 日本珪藻学会第14回研究集会講演要旨, 9, 珪藻学会誌, p. 103.
- 加藤雅功 (1977) 山木遺跡の地形地緯. 「山木遺跡第4次調査報告書」, p. 44-54. 益山町教育委員会.
- 近藤錦三 (1982) Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和56年度科学技術研究費（一般C）研究成果報告書, 32 p.
- 近藤錦三 (1988) 十二遺跡土壤の植物珪酸体分析. 「十二遺跡発掘調査報告書」, p. 377-383. 御代田町教育委員会.
- 近藤錦三・佐瀬 薩 (1986) 植物珪酸体分析. その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31-64.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae. Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876 p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Suriellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536 p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaccae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230 p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achanthaceae. Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lincolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248 p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p. 1-353, BERLIN + STUTTGART.
- Negoro, K. and M. Iigashino (1986) Diatom Vegetation of Paddy Fields in Japan. Report I. Diatom Vegetation of Paddy Fields in the Vicinity of Sakurai City, Nara Prefecture. *Diatom*, 2, p. 1-8.
- 野本孝明 (1977) 3. 遺跡の環境. 山木遺跡第4次調査報告書. 莲川町教育委員会 (石津英次・原茂光・野本孝明編), p. 7-12.
- 辻 誠一郎 (1977) 山木遺跡における花粉分析的検討. 「山木遺跡第4次調査報告書」, p. 64-66. 益山町教育委員会.
- 東郷正美・横屋光孝 (1984) 丹那盆地における完新世後半の環境変遷—花粉分析結果をもとにして—. 月刊地球, 6, p. 186-193.
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケシ科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学, 19, p. 69-84.

図版1 珪藻化石(1)



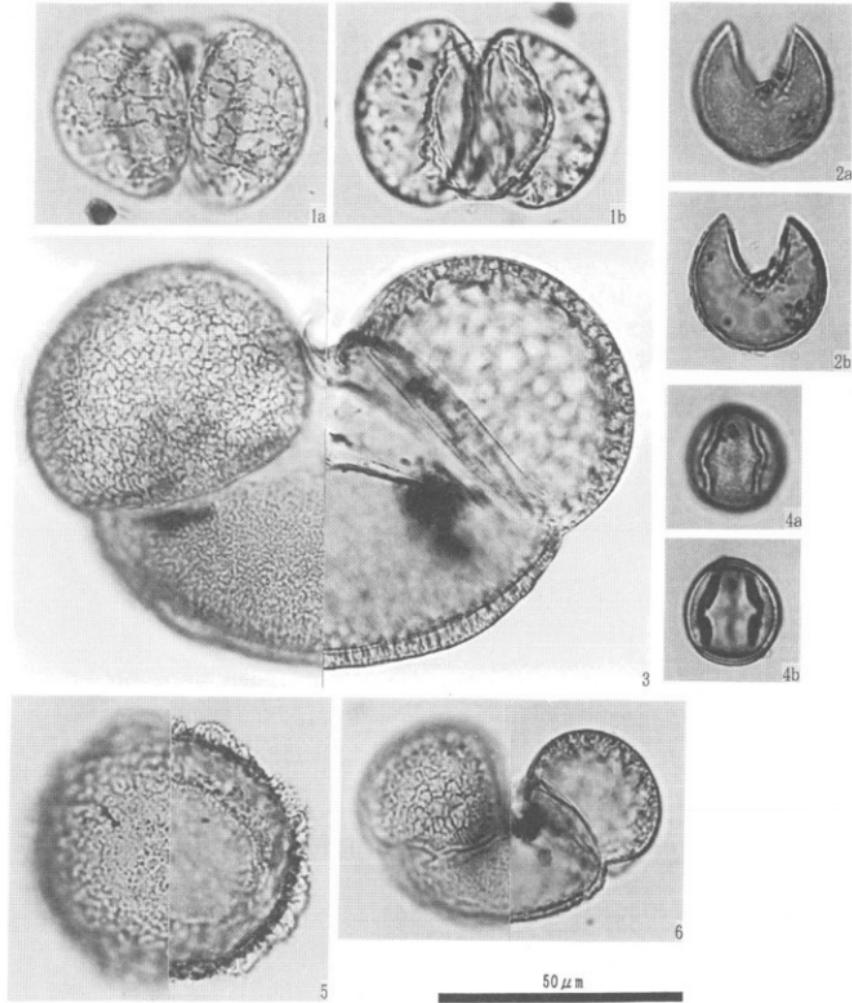
- 11 1. *Fragilaria construens* (Ehr.) Grunow (1トレンチ; 試料番号1)
2. *Fragilaria construens* fo. *binodis* (Ehr.) Grunow (1トレンチ; 試料番号1)
3. *Fragilaria construens* fo. *venter* (Ehr.) Grunow (1トレンチ; 試料番号1)
4. *Fragilaria construens* var. *triundulata* Reichelt (3トレンチ; 試料番号1)
5. *Fragilaria brevistriata* Grunow (1トレンチ; 試料番号1)
6. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) V. Heurck (5トレンチ; 試料番号4)
7. *Amphora montana* Krasske (5トレンチ; 試料番号5)
8. *Amphora montana* Krasske (5トレンチ; 試料番号6)
9. *Craticula ambigua* (Ehr.) D. G. Mann (3トレンチ; 試料番号4)
10. *Craticula ambigua* (Ehr.) D. G. Mann (3トレンチ; 試料番号4)
11. *Cymbella tumida* (Breb. ex Kuetz.) V. Heurck (3トレンチ; 試料番号4)
12. *Cymbella subaequalis* Grunow (3トレンチ; 試料番号4)
13. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg (5トレンチ; 試料番号4)
14. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (5トレンチ; 試料番号3)
15. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (5トレンチ; 試料番号3)

図版2 珪藻化石(2)



16. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (5トレチ; 試料番号3)
17. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (5トレチ; 試料番号3)
18. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (5トレチ; 試料番号3)
19. *Navicula mutica* Kuetzing (5トレチ; 試料番号5)
20. *Navicula mutica* Kuetzing (1トレチ; 試料番号3)
21. *Navicula mutica* Kuetzing (3トレチ; 試料番号6)
22. *Navicula contenta* Grunow (5トレチ; 試料番号5)
23. *Neidium alpinum* Hustedt (5トレチ; 試料番号5)
24. *Pinnularia subcapitata* Gregory (3トレチ; 試料番号6)
25. *Nitzschia sinuata* var. *delegnei* (Grun.) Lange-Bertalot (1トレチ; 試料番号1)
26. *Nitzschia amphibia* Grunow (5トレチ; 試料番号3)
27. *Rhopalodia gibba* var. *ventricosa* (Kuetz.) H. & M. Perag. (5トレチ; 試料番号4)
28. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (1トレチ; 試料番号3)
29. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (5トレチ; 試料番号3)
30. *Achnanthes crenulata* Grunow (5トレチ; 試料番号5)

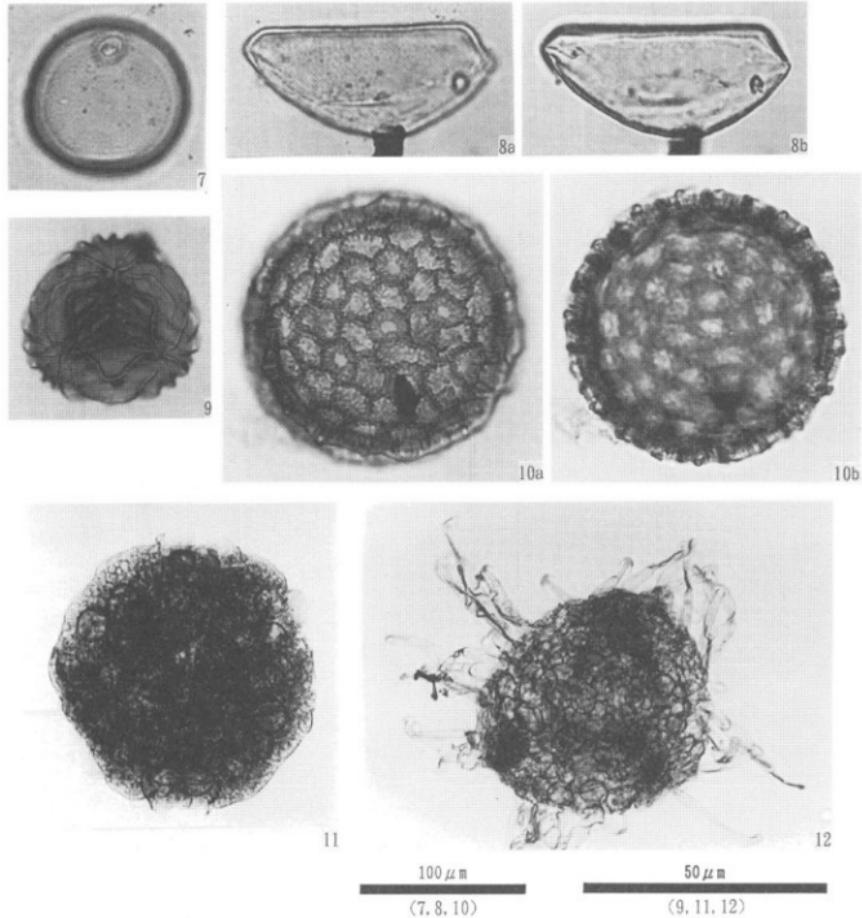
図版3 花粉化石(1)



1. マキ属 (3トレチ; 試料番号4)
3. モミ属 (3トレチ; 試料番号4)
5. ツガ属 (3トレチ; 試料番号4)

2. スギ属 (3トレチ; 試料番号4)
4. コナラ属アカガシ亜属 (3トレチ; 試料番号4)
6. マツ属維管束亜属 (3トレチ; 試料番号4)

図版4 花粉化石(2)



7. イネ科 (3トレン;試料番号4)

9. ミズワラビ属 (3トレン;試料番号4)

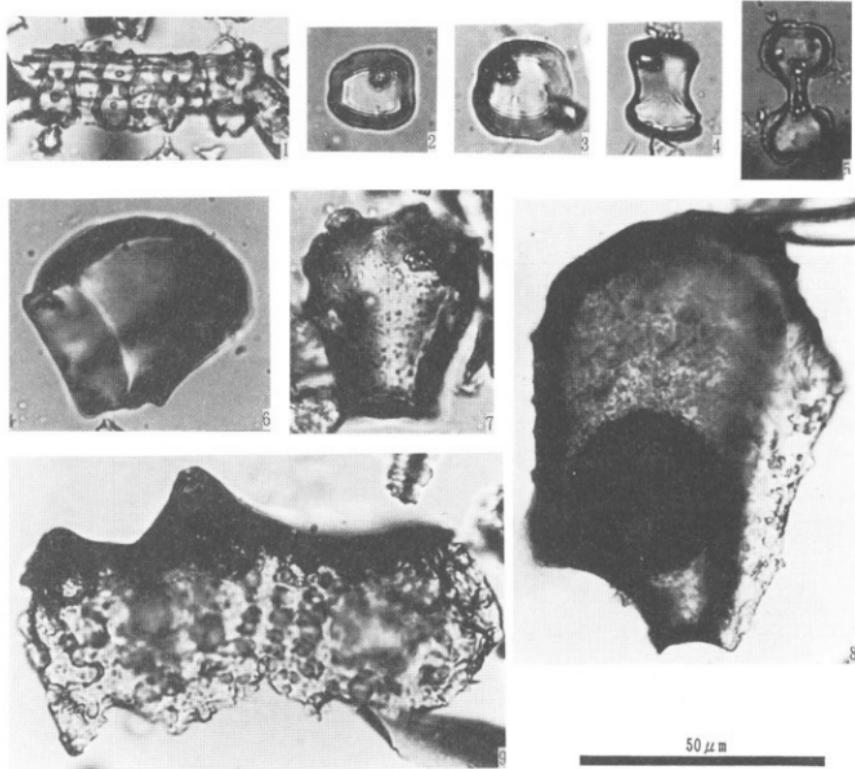
11. サンショウモ (3トレン;試料番号4)

8. ミズアオイ属 (3トレン;試料番号6)

10. サナエタデ節—ウナギノカミ節 (3トレン;試料番号4)

12. アカウキクサ (5トレン;試料番号1)

図版 5 植物珪酸体



1. イネ属短細胞列 (1トレン; 試料番号2)
3. ヨシ属短細胞珪酸体 (5トレン; 試料番号3)
5. ススキ属短細胞珪酸体 (5トレン; 試料番号3)
7. タケア科機動細胞珪酸体 (5トレン; 試料番号3)
9. イネ属顆粒珪酸体 (3トレン; 試料番号1)

2. ヨシ属短細胞珪酸体 (1トレン; 試料番号2)
4. タケア科短細胞珪酸体 (3トレン; 試料番号6)
6. イネ属機動細胞珪酸体 (1トレン; 試料番号2)
8. ヨシ属機動細胞珪酸体 (5トレン; 試料番号3)

葦山城跡における自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の調査区では、葦山城の石垣に沿って杭列が検出された。この杭列は、山本遺跡で確認された10世紀代の条里型水田と同じ方向性を示していることから、水田に伴う遺構である可能性があるとされていて。また、当社では、この杭列より北側の部分について珪藻・花粉・植物珪酸体分析を行い、10世紀代と中世の水田域について検証している（既報）。そこで、石垣と杭列に挟まれる溝状遺構の用途や遺構内で稲作が行われていたかどうかを検討するために、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を実施した。また、古墳時代前期の住居跡床面から燃料材あるいは住居構築材と推定される炭化材が検出されたので、その種類を明らかにした。

1. 溝状遺構の用途について

(1) 試料

溝状遺構は、下位より灰色砂質シルト（19層）、褐色シルト質粘土（17層）、褐色砂質シルト（5層）により埋積される。各層とも酸化鉄が沈着しており、上部の褐色砂質シルト層には、マンガン斑が認められている。試料は、この溝状遺構埋積物3層を対象に約5・連続で11点（上位より試料番号1～11）採取した（図1）。分析は、珪藻分析・植物珪酸体分析が試料番号8・6・2の3点、花粉分析が試料番号8・2の2点について実施した。

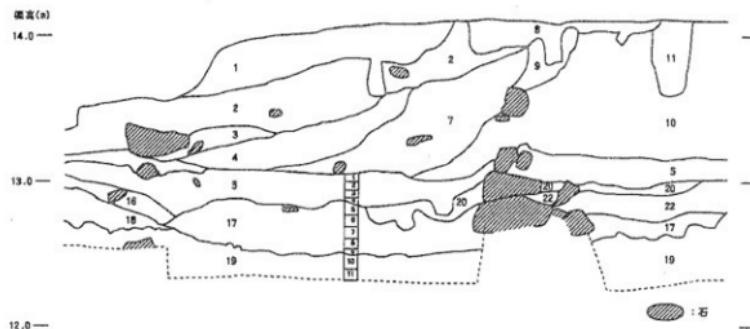


図1 試料採取地点の土層断面

(2) 分析方法

1) 珪藻分析

湿重約6gの試料について過酸化水素水・塩酸処理、自然沈降法、傾斜法の順に化学・物理的な処理を施して珪酸化石を分離・濃集する。処理後の残渣を適量計り取り、カバーガラス上に滴下、乾燥させた後にブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計算する。

種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)、K.Krammer (1992)などを用いる。同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。また、産出した化石が現地性の化石か他の場所から運搬・堆積した異地性の化石かを判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたり、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水生種、海水～汽水生種、淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応性に基づいて生態区分する。そして、主要な分類群について、主要珪藻化石群集の層位的分布図を作成する。堆積環境の解析にあたり、安藤 (1990) の環境指標種群、伊藤・堀内 (1991)などを参考とする。

2) 花粉分析

湿重約10gの試料について水酸化カリウム処理、篩別(250μm)、重液分離(臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸:濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的な処理を施して、花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。結果は同定・計数結果の一覧として表示する。

3) 植物珪酸体分析

湿重10g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタンクスチン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現する短細胞珪酸体および機動細胞珪酸体を、近藤・佐瀬(1986)の分類を参考にして同定・計数する。

結果は、検出された種類と個数の一覧表および植物珪酸体群集の層位的分布図で示す。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。なお、検出個数が短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞珪酸体で100個未満の試料は組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず、出現した種類を+で示すことにとする。

(3) 結果

1) 珪藻化石

結果を表1・図2に示す。珪藻化石はいずれの試料も豊富に産出する。完形殻の出現率も65~80%と高い。産出種の大部分は淡水生種で構成され、産出分類群数は27属110種類である。産出種を水中に生育する水生珪藻と陸上のコケの表面や土壤表面など多少の湿り気のある好気的な場所に生育する陸生珪藻とに分けると、試料番号2が水生珪藻と陸生珪藻がほぼ半々ずつ、試料番号8・6が水生珪藻が優占する。淡水生種の生態性(塩分、水素イオン濃度、流水に対する適応度合い)の特徴は、貧塩不定性種、真・好アルカリ性種、流水不定性種と真・好水性種がそれぞれ優占あるいは多産する。

表 1 珊藻分析結果(1)

種類	生長形態	環境	種類			2	6	8
			藻分	pH	鹽水	浮游植物		
<i>Nitzschia hungarica</i> Grunow	Meh	E1				9	13	10
<i>Nitzschia levidensis</i> var. <i>salinarum</i> Grunow	Meh					1	2	2
<i>Nitzschia forensiana</i> Grunow	Meh					-	1	-
<i>Achnanthes exigua</i> Grunow	Ogh-ind	cl-ii	ind	S		1	3	2
<i>Achnanthes hungarica</i> Grunow	Ogh-hil	al-ii	ind	U		4	1	-
<i>Achnanthes lanceolata</i> (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T		1	1	4
<i>Achnanthes minutissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-ii	ind	U		2	2	1
<i>Achnanthes rostrata</i> Oestrup	Ogh-ind	al-ii	r-ph	U		-	2	-
<i>Achnanthes subbadsonii</i> Hustadt	Ogh-ind	ind	r-ph	T		-	-	1
<i>Amphora fontinalis</i> Hustadt	Ogh-ind	al-ii	ind			-	1	-
<i>Amphora montana</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	24		10	2	1
<i>Amphora normannii</i> Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	23		-	1	-
<i>Amphora ovalis</i> var. <i>affinis</i> (Kuetz.)V.Hurck	Ogh-ind	al-ii	ind	U		5	3	4
<i>Aulacoseira ambigua</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-ii	l-bi	S		2	4	-
<i>Aulacoseira italica</i> (Grun.)Simonsen	Ogh-ind	al-ii	l-ph	U		-	2	1
<i>Bacillaria paradoxus</i> Gaelin	Ogh-hil	al-bi	l-ph	U		-	-	1
<i>Calomedes serophilus</i> Bock	Ogh-ind	al-ii	ind	23		1	-	-
<i>Calomedes bacillifer</i> (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-ii	r-ph	U		1	1	1
<i>Calomedes largnerstedtii</i> (Langerst.)Chodatky	Ogh-ind	al-ii	ind	S		-	-	1
<i>Calomedes leptosoma</i> Kramer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	BB		-	1	-
<i>Calomedes molaris</i> (Grun.)Kramer	Ogh-ind	ind	ind			-	1	1
<i>Calomedes tenuis</i> (Greg.)Kramer	Ogh-ind	al-ii	ind			-	2	1
<i>Cocconeis placentalis</i> var. <i>euglypta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-ii	ind			-	1	-
<i>Cocconeis placentalis</i> var. <i>linesta</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-ii	r-ph	T		-	-	1
<i>Craticula ambiguus</i> (Ehr.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-ii	ind	S		-	1	1
<i>Craticula cuspida</i> (Kuetz.)D.G.Mann	Ogh-ind	al-ii	ind	S		-	1	-
<i>Cymbella aspera</i> (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-ii	ind	0,T		1	-	-
<i>Cymbella cuspidata</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind			-	1	-
<i>Cymbella naviculiformis</i> Auerswald	Ogh-ind	ind	ind	0		1	-	-
<i>Cymbella silesiaca</i> Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T		1	1	1
<i>Cymbella tunida</i> (Breb.)Ex Kusts.(V.Hurck)	Ogh-ind	al-ii	ind	T		-	-	1
<i>Cymbella turgida</i> Grunow	Ogh-ind	al-ii	r-ph	K,T		1	-	-
<i>Distomea hyemale</i> var. <i>asesson</i> (Ehr.)Kirchner	Ogh-ind	al-ii	r-bi	K,T		-	-	1
<i>Diploneis ovalis</i> (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-ii	ind			3	1	1
<i>Diploneis parva</i> Cleve	Ogh-ind	ind	ind			-	1	-
<i>Eutonia pectinata</i> var. <i>undulata</i> (Ralfs.)Rabenhorst	Ogh-hil	sc-ii	ind	0		-	-	1
<i>Fragilaria bicapitata</i> A.Mayer	Ogh-hil	ind	l-bi			1	-	-
<i>Fragilaria brevirostrata</i> Grunow	Ogh-ind	al-ii	l-ph	U		13	14	14
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>gracilis</i> (Oestr.)Hustadt	Ogh-ind	al-ii	l-ph	T		3	1	1
<i>Fragilaria capucina</i> var. <i>radicans</i> (Kuetz.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-ii	ind			-	-	1
<i>Fragilaria construens</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-ii	l-ph	T		11	23	17
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>binnodis</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-ii	l-ph	U		-	-	1
<i>Fragilaria construens</i> fo. <i>venter</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-ii	l-ph	S		11	16	17
<i>Fragilaria exigua</i> Grunow	Ogh-ind	ind	l-ph			-	3	2
<i>Fragilaria parasitica</i> (W.Smith)Grunow	Ogh-ind	al-ii	ind	U		-	-	1
<i>Fragilaria pinnata</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-ii	ind	S		1	7	4
<i>Frustulia vulgaris</i> (Thwait.)De Toni	Ogh-ind	al-ii	ind	U		1	2	-
<i>Gomphonema angustum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-ii	ind	U		1	1	-
<i>Gomphonema augur</i> var. <i>turris</i> (Ehr.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind			-	1	-
<i>Gomphonema gracile</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-ii	l-ph	0,U		-	1	1
<i>Gomphonema pavulum</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U		3	2	5
<i>Gyrosigma acuminatum</i> (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-ii	ind			-	10	9
<i>Gyrosigma sponcerii</i> (W.Smith)Cleve	Ogh-ind	al-ii	l-ph	U		-	2	-
<i>Gyrosigma scalpoides</i> (Breb.)Cleve	Ogh-ind	al-ii	r-ph			3	-	-
<i>Hantzschia amphioxys</i> (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-ii	ind	RA,U		13	2	7
<i>Melosira varians</i> Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K,U		-	-	1
<i>Navicula bacillifer</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-ii	ind	U		-	1	-
<i>Navicula breckaeensis</i> Petersen	Ogh-ind	ind	ind	R1		-	1	1
<i>Navicula bryophila</i> Boye-Petersen	Ogh-ind	al-ii	ind	R1		1	-	-
<i>Navicula capitata</i> var. <i>lincalis</i> Oestrup	Ogh-hil	al-ii	ind	U		-	-	1
<i>Navicula cincta</i> (Ehr.)Kuetzing	Ogh-hil	unk	ind			1	-	-
<i>Navicula convergens</i> (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S		2	2	3
<i>Navicula contenta</i> Grunow	Ogh-ind	al-ii	ind	RA,T		25	2	5
<i>Navicula cryptcephala</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-ii	ind	U		-	3	6
<i>Navicula cryptoteniella</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	T		-	1	-
<i>Navicula eiginensis</i> (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-ii	ind	0,U		-	1	1
<i>Navicula eiginensis</i> var. <i>neglecta</i> (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-ii	r-ph	U		3	3	4
<i>Navicula geppertia</i> (Bleisch)H.L.Smith	Ogh-hil	al-ii	ind	S		2	-	-
<i>Navicula ignota</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	BB		2	-	-

表1 珪藻分析結果(2)

種類	生長形	pH	海水	理端指標	2		
					2	6	8
<i>Navicula kotschyii</i> Grunow	Ogh-ind	al-ii	ind	-	-	1	
<i>Navicula lesvissima</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	-	1	-	
<i>Navicula antica</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-ii	ind	RA, S	20	3	7
<i>Navicula notanda</i> Pantocsek	Ogh-ind	al-ii	ind	-	1	1	
<i>Navicula pseudolanceolata</i> Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-ii	ind	U	-	1	2
<i>Navicula pupula</i> Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	S	5	4	14
<i>Navicula pusio</i> Cleve	Ogh-hab	ind	ind	-	1	-	
<i>Navicula symmetrica</i> Patrick	Ogh-ind	al-ii	ind	U	-	-	1
<i>Navicula veneta</i> Kuetzing	Ogh-hil	al-ii	ind	U	10	1	1
<i>Navicula viridula</i> var. <i>rostellata</i> (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-ii	r-ph	K, U	2	7	5
<i>Navicula</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	1	-
<i>Neidium alpinum</i> Hustadt	Ogh-unk	unk	ind	RA	-	-	1
<i>Neidium ampliatum</i> (Ehr.) Krammer	Ogh-ind	ind	l-ph	-	2	-	
<i>Neidium iridis</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-hab	ac-ii	l-bi	O	-	1	1
<i>Neidium iridis</i> var. <i>aphthophorus</i> (Ehr.) V. Beurck	Ogh-hab	ac-ii	l-bi	-	1	-	
<i>Nitzschia amphibia</i> Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	3	1	3
<i>Nitzschia brevissima</i> Grunow	Ogh-hil	al-ii	ind	RB, U	1	-	-
<i>Nitzschia hantzschiana</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	ind	-	1	1	
<i>Nitzschia linearis</i> W. Smith	Ogh-ind	al-ii	r-ph	U	-	1	-
<i>Nitzschia permixta</i> (Grun.) Paragallo	Ogh-ind	ind	ind	R1	1	1	-
<i>Nitzschia sinuata</i> var. <i>deleguei</i> (Grun.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-ii	l-ph	U	-	2	1
<i>Nitzschia umbonata</i> (Bhr.) Lange-B.	Ogh-ind	al-ii	ind	U	3	4	4
<i>Orthosira roesemei</i> (Wahl.) Mears	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1	-
<i>Pinnularia acrospherica</i> W. Smith	Ogh-ind	al-ii	l-ph	O	1	1	1
<i>Pinnularia borealis</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	3	-	1
<i>Pinnularia gentilis</i> (Dokdo) Cleve	Ogh-ind	ac-ii	l-bi	-	1	-	
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	Ogh-ind	ac-ii	ind	O	-	3	5
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustadt	Ogh-hab	ac-ii	ind	-	1	1	2
<i>Pinnularia interrupta</i> W. Smith	Ogh-ind	ac-ii	ind	S	-	1	-
<i>Pinnularia mesolepta</i> (W. Smith)	Ogh-ind	ind	ind	S	1	-	-
<i>Pinnularia obscura</i> Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	-	1
<i>Pinnularia schoenfelderi</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	R1	5	-	-
<i>Pinnularia subcapitata</i> Gregory	Ogh-ind	ac-ii	ind	RB, S	1	-	1
<i>Rhopalodia gibba</i> (Bhr.) Müller	Ogh-ind	al-ii	ind	-	6	3	
<i>Rhopalodia gibberula</i> (Bhr.) Müller	Ogh-hil	al-ii	ind	-	12	12	
<i>Stauroneis acuta</i> W. Smith	Ogh-ind	al-ii	l-ph	-	1	-	
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	3	-	
<i>Surirella angusta</i> Kuetzing	Ogh-ind	al-ii	r-bi	U	1	-	1
<i>Surirella ovata</i> var. <i>pinnata</i> (W. Smith) Hustadt	Ogh-ind	al-ii	r-ph	U	-	1	-
<i>Surirella pontocaspia</i> Weisster	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	
<i>Symedra ulna</i> (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind	al-ii	ind	U	3	-	1
海水生種合計					0	0	0
海水-汽水生種合計					0	0	0
汽水生種合計					10	16	12
淡水生種合計					197	198	200
無機化石總數					207	212	212

凡例

H.R.: 深分濃度に対する適応性	pH: 水深 pH 濃度に対する適応性	C.R.: 流水に対する適応性
Meh : 海水生種	al-ii: 真7349性種	l-bi: 真海水性種
Ogh-hil: 我喜好塗生性種	al-ii: 好7349性種	l-ph: 好海水性種
Ogh-ind: 我喜不定性種	ind : pH不定性種	ind: 挑水不定性種
Ogh-hab: 我喜鹽塗生性種	ac-ii: 好鹽性種	r-ph: 好海水性種
Ogh-unk: 我喜不明確	unk : pH不明確	r-bi: 真淡水性種
		unk : 淡水不明確

環境指標

- E1: 海水泥質干潟指標 E2: 水泥質干潟指標（以上は小杉, 1983）
 E3: 中一下流河川指標 E4: 沿沼泥底地帶指標 E5: 沿沼泥底地帶生種（以上は安藤, 1990）
 S: 好汚濁性種 U: 広適応性種 T: 好清流水種（以上は Asai, K. & Watanabe, T. 1995）
 RI: 陸生珪藻 (RA: A群, RB: B群、伊藤・組内, 1991)

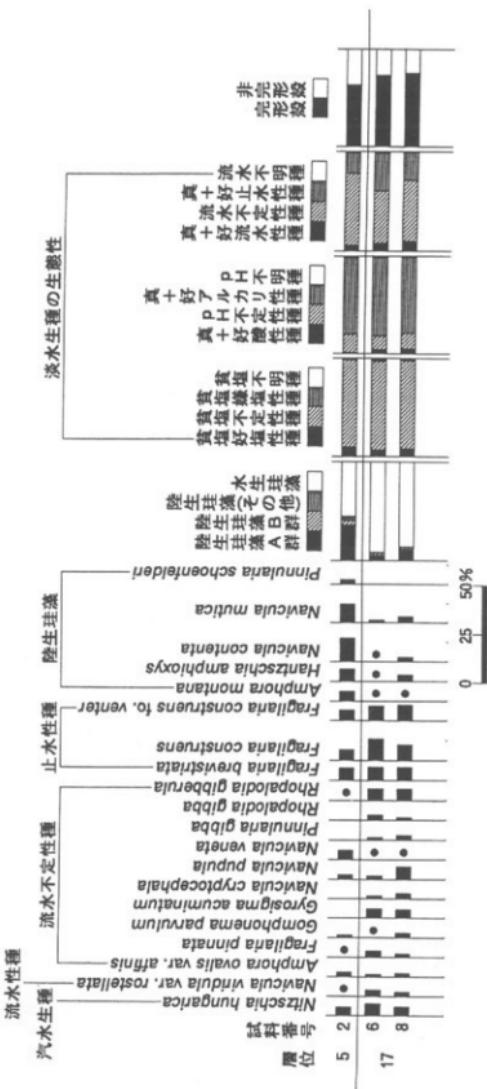


図2 主要珪藻化石群集の層位的分布
海水-汽水-淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率
は淡水生種の合計を基数として相対頻度で算出した。なお、●は産出率1%未満の種類を示す。

試料番号 8・6 の珪藻化石群集は近似しており、汽水付着性種の *Nitzschia hungarica*、流水不定性種で貧塩好塩性種の *Rhopalodia gibberula*、流水不定性種の *Gyrosigma acuminatum*、流水不定性種で好濁性種の *Navicula pupula*、好止水性種の *Fragilaria brevistriata*、*F. construens*、好止水性種で好濁性種の *Fragilaria construens var. venter* が 5~10% 産出する。試料番号 2 は、試料番号 8・6 で検出される種類に加えて陸生珪藻 A 群の *Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*N. mutica* が 5~12% 産出する。

2) 花粉化石

結果を表 2 に示す。試料番号 8・2 とも花粉化石は、ほとんど検出されない。また、わずかに検出される花粉・胞子化石も保存状態が悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れていたりする。検出される種類は、木本花粉がマツ属・スギ属の 2 種類、草木花粉がイネ科・ナデシコ科の 2 種類、シダ類胞子がミズワラビ属・アカウキクサ属・他のシダ類胞子の 3 種類である。

3) 植物珪酸体

結果を表 3・図 3 に示す。試料番号 8・6 では、植物珪酸体の検出個体数が少ない。これらの 2 試料では、植物珪酸体の保存状態が悪く、珪酸体表面に多数の溶食痕が認められる。試料番号 2 では、イネ属・タケアヤ科が多産し、ヨシ属・コブナクサ属・スキ属・イチゴツナギアヤ科を伴う。

(4) 考察

17 層では、*Fragilaria brevistriata*、*F. construens*、などの好止水性種、貧塩好塩性種の *Rhopalodia gibberula*、流水にも止水にも普通に産する流水不定性種が多産することを特徴とする。この内、*Rhopalodia gibberula* は、古代の水田土壤やそれに伴う水路などから検出される報告例がある（田中、1987；パリノ・サーヴェイ株式会社、1982、1983）。また、木本珪酸体に生育する *Nitzschia hungarica* や有機汚濁の進んだ富栄養水域に多産する好汚濁性種の *Navicula pupula*、*Fragilaria construens var. venter* なども比較的多く検出されている。一方、花粉化石・植物珪酸体では、わずかながらミズワラビ属・アカウキクサ属など水生植物に由来する胞子、イネ属珪酸体などが検出されている。これらのことから、遺構内部は、ミズワラビ属・アカウキクサ属などが生育しており、流水の影響が少なく、塩類の葉積した富栄養な安定した水域であったと考えられる。また、イネ属が検出されているが、検出個体数は少ないと、本遺構内部が稻作地として利用されていたか不明である。

5 層では、17 層で検出された種類に加えて耐乾性の強い陸生珪藻の A 群の *Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*、*N. mutica* が増加する。また、本層では、花粉化石が検出されないが、イネ属珪酸体・タケアヤ科珪酸体が多産する。イネ属珪酸体の出現率は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも 30% 以上である。現在の稻作では、10 ha 当たり 500 t のイナワラを堆肥する作業を 8 年間統計した水田耕作土層でイネ属機動細胞珪酸体の出現率は 16% 以上とされている（近藤、1988）。この調査例を比較すると、溝埋積物上部のイネ属の出現率は高率である。また、植物珪酸体群集は、既報の 1 トレンチ・3 トレンチ・5 トレンチの中世水田層とほぼ同様な組成を示す。以上のことから、埋積が進行するにしたがいしばしば乾燥するような状態に変化したと考えられる。また、この時期になると付近で稻

表 2 花粉分析結果

種類	試料番号	2	8
木本花粉			
マツ属		2	2
スキ属		-	1
草木花粉			
イネ科		7	-
ナデシコ科		1	-
シダ類胞子			
ミズワラビ属		-	1
アカウキクサ属		-	1
他のシダ類胞子		23	5
合計			
木本花粉		2	3
草木花粉		8	0
不明花粉		0	0
シダ類胞子		23	7
総計(不明を除く)		33	10

表3 植物細胞体分析結果

種類	試料番号	2	6	8
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	89	4	3	-
タケ亜科ネササ節	6	-	-	-
タケ亜科	92	6	3	-
ヨシ属	11	-	-	-
ヨシクサ族コブナグサ属	1	-	-	-
ワシクサ族ススキ属	9	2	-	-
イチゴツナギ亞科	5	-	-	-
不明キビ型	13	1	1	-
不明ヒゲンバ型	7	-	1	-
不明タンク型	11	2	2	-
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	84	4	2	-
タケ亜科ネササ節	7	-	-	-
タケ亜科	82	2	6	-
ヨシ属	10	-	1	-
ワシクサ族	11	1	1	-
不明	12	-	2	-
合計	244	15	10	-
イネ科葉部短細胞珪酸体	206	7	12	-
イネ科葉部短細胞珪酸体	450	22	22	-
組織計	661	34	34	-
イネ属短細胞	39	-	-	-
イネ属短細胞	35	2	-	-

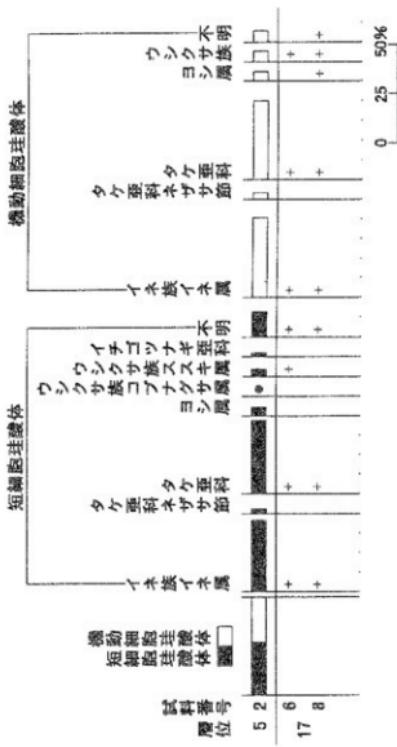


図3 植物珪酸体群集の層位的分布
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉部短細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。なお、●は1%未満、+は1%未満、イネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉部短細胞珪酸体で100個未満の層類を示す。

作が行われていたと考えられる。

以上のことから、17層・19層では植物珪酸体の保存状態が悪く、稻作が行われていた水田耕作土か否かを本分析結果のみで判断できなかった。また珪藻分析結果より、17層堆積時は富栄養の安定した水域の存在していたことは明らかであるが、水田耕作に伴う施肥などの影響かどうかについては現段階で判断しかねる。一方、5層はイネ属の植物珪酸体が高率に出現するなど、杭列の北側の中世水田層と同様の結果が得られた。これより調査地点付近で水田において稻作が行われていたと考えられる。今後本遺跡周辺の発掘調査で5層相当層が確認された際には、その層について今回と同様に分析を行い、その結果と今回の結果を比較検討し、当時の稻作地の拡がりを把握することが課題とされる。

2. 炭化材同定

(1) 試料

炭化材同定を行った試料は、古墳時代前期の住居跡から出土した炭化材である。炭化材は6ケース（SB-1 W 164, SB-9 W 349, SB-10 W 355, SB-14 W 168, SB-18 W 356, SB-21 W 351）に納められており、各ケースとも複数の炭化材が入っていた。そのうち種類の同定が可能とみられる合計19点を選択した。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表4に表示する。

(2) 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

炭化材は、針葉樹1種類（スギ）と、広葉樹3種類（コナラ属アカガシ亜属・クリ・ケヤキ）に同定された（表4）。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

表4 炭化材の樹種同定結果

遺構名	試料番号	時代・時期	用途	樹種
SB-1	W-164	古墳時代前期	不明	クリ
				クリ
SB-9	W-349	古墳時代前期	不明	クリ
				クリ
SB-10(2)	W-355	古墳時代前期	不明	コナラ属アカガシ亜属
				コナラ属アカガシ亜属
SB-14	W-168	古墳時代前期	不明	クリ
				クリ
SB-18	W-356	古墳時代前期	不明	クリ
				クリ
				クリ
				スギ
SB-21	W-351	古墳時代前期	不明	ケヤキ
				ケヤキ
				ケヤキ

- ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don) スギ科スギ属
早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2~4個。放射組織は單列、1~15細胞高。
- ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科
放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高のものと複合放射組織がある。柔組織は短接線状および散在状。柔細胞はしばしば結晶を含む。
- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属
環孔材で孔間部は1~4列、孔国外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形~梢円形、小道管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った梢円形~多角形、ともに管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。
- ・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属
環孔材で孔間部は1~2列、孔国外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は單穿孔を有し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~10細胞幅、1~30細胞高で、時に60細胞高を越える。しばしば結晶を含む。今回の試料では、征日面の切片が作製できなかった。

(4)考察

炭化材には4種類の木材が確認され、クリが最も多い。炭化材は、それぞれの遺構によって種類が異なる傾向がある。しかし、もとは同一試料で小片に破砕されたものを複数同定している可能性もあり、今回の結果から各生層跡で種類構成の違いがあると一概には断定できない。

これらの炭化材は、住居構築材や燃料材の可能性があるが、詳細は不明である。確認された種類は、山木遺跡の弥生時代の木製品にも多数確認されている(眞理・山内, 1962)。

ところで、辻(1977)の報告では、この頃にスギなどの伐採による森林破壊が指摘されている。今回の調査でもスギが認められている。スギの大量使用を示唆する結果は、本遺跡のほかにも静岡市登呂遺跡や沼津市離鹿塚遺跡など、静岡県内各地の遺跡で確認されている(眞理, 1949; 真理・山内, 1954; 能城ほか, 1991など)。このような大量使用が森林の二次林化を招いたことは充分考えられるが、今回の樹種同定結果をみる限り断定することはできない。今後さらに類例を蓄積し、検討を行いたい。

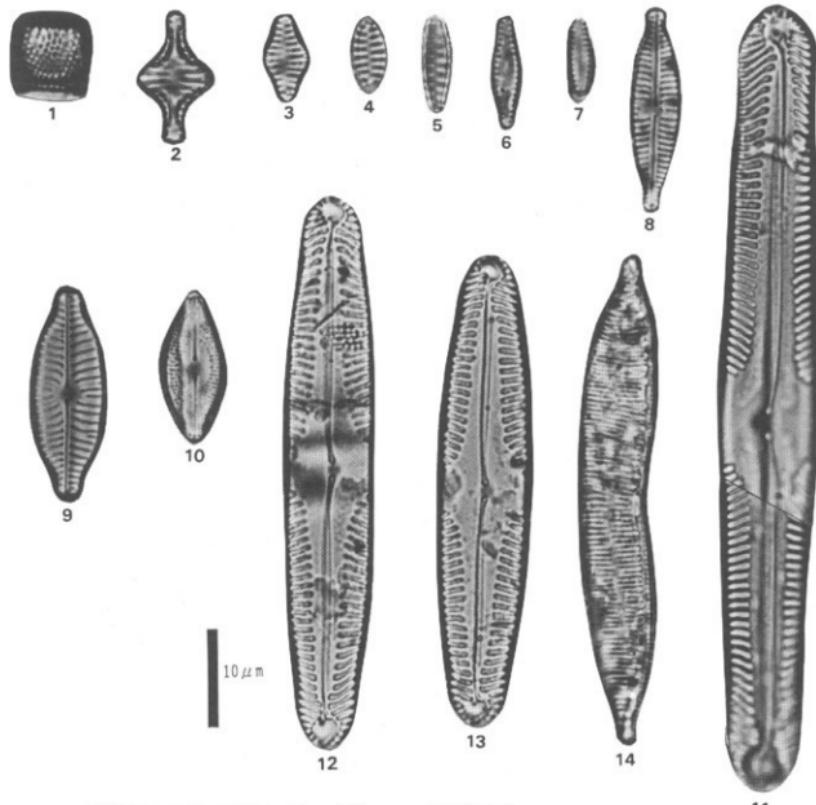
<引用文献>

- 安藤・男(1990) 淡水産珪藻による環境指標純群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- 伊藤良永・堀内誠(1991) 露生珪藻の現在に於ける分布と古環境解釈への応用. 硅藻学会誌, 6, p. 23-45.
- 近藤鉢三(1988) 十二遺跡土壤の植物珪酸体分析、「十二遺跡発掘調査報告書」, p. 377-383, 御代田町教育委員会.
- 近藤鉢三・佐瀬 隆(1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31-64.
- Krammer,K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26, p. 1-353, BERLIN・STUTTGART.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa. 876 p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536 p., Gustav Fischer

Verlag.

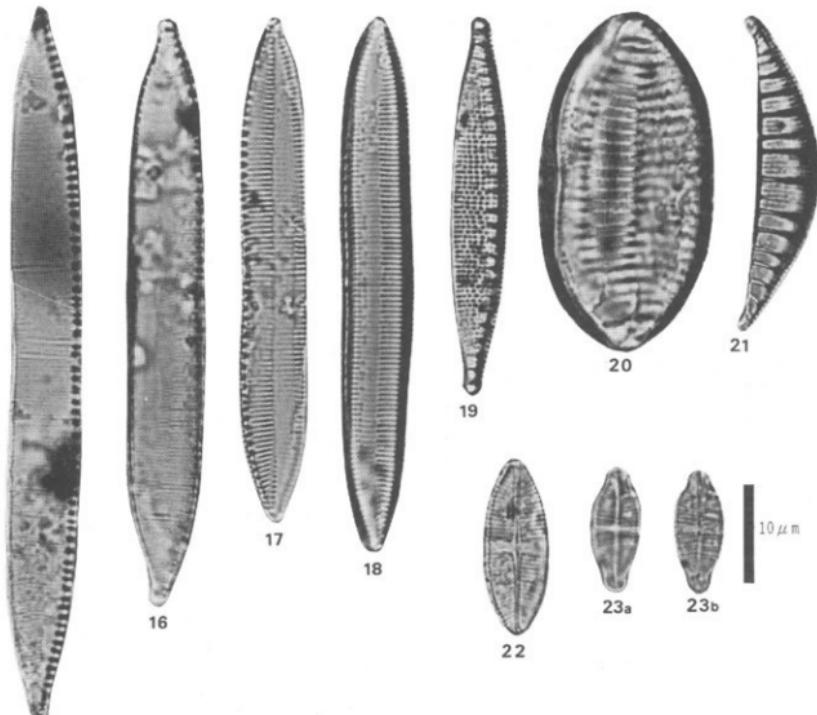
- Krammer, K. and Lange Bertalot,H. (1991 a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230 p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange Bertalot,H. (1991 b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248 p., Gustav Fischer Verlag.
- 能城修・平崎正彦・鈴木三男・石川治夫 (1991) 静岡県沼津市越鹿塚遺跡出土木製品の用材, 金沢大学教養部論集・人文学科編, 28 (2), p. 43-63.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1982) 微化石分析結果, 高崎市文化財調査報告書第35集, 「矢巾遺跡群(II)天王前遺跡」, p. 40-41, 高崎市教育委員会.
- バリノ・サーヴェイ株式会社 (1983) 微化石分析結果報告, 高崎市文化財調査報告書第40集, 「矢巾遺跡群(III)村北A・天王前遺跡」, p. 30-33, 高崎市教育委員会.
- 辻 誠一郎 (1977) 山木遺跡における花粉分析的検討, 「山木遺跡第4次調査報告書」, p. 64-66. 茂山町教育委員会.
- 田中宏之 (1987) 群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の珪藻, 群馬県立歴史博物館紀要, 8, p. 1-15.
- 亘理俊次・山内 文 (1962) 木材, 後藤守一編「伊豆ノ山木遺跡」, p. 95-101, 築地書館.
- 亘理俊次 (1949) 木材, 日本考古学協会編「登呂・前廬」, p. 82-91, 東京堂出版.
- 亘理俊次・山内 文 (1954) 木材, 「登呂 本編」, p. 344-353, 日本考古学協会.

図版1 珪藻化石(1)



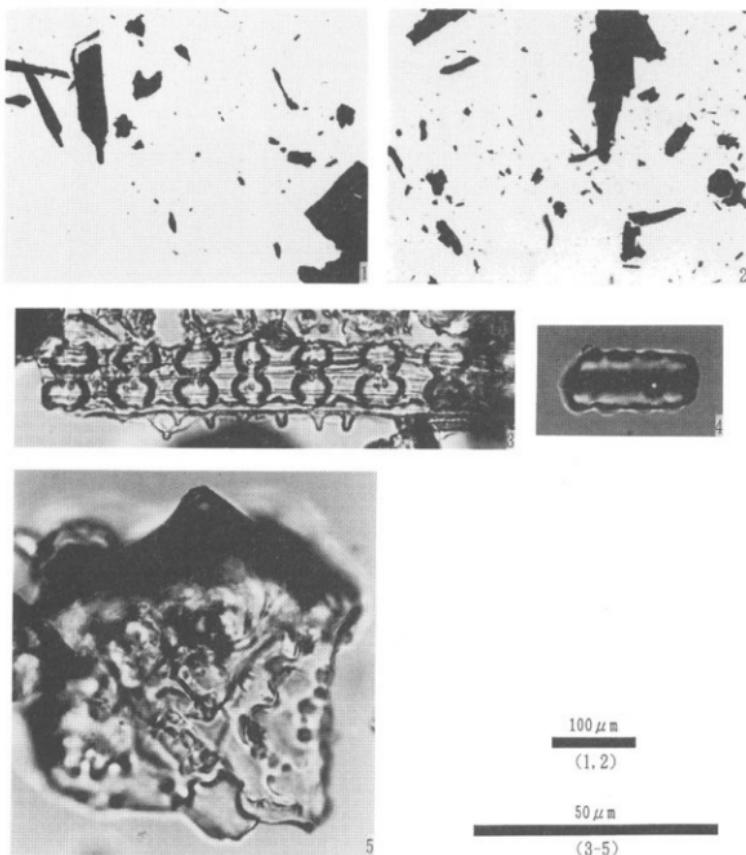
1. *Aulacoseira ambigua* (Grun.) Simonsen (試料番号6)
2. *Nitzschia levidensis* var. *salinarum* Grunow (試料番号6)
3. *Fragilaria construens* fo. *venter* (Ehr.) Grunow (試料番号2)
4. *Fragilaria pinnata* Ehrenberg (試料番号8)
5. *Fragilaria pinnata* Ehrenberg (試料番号8)
6. *Fragilaria brevistriata* Grunow (試料番号6)
7. *Fragilaria brevistriata* Grunow (試料番号8)
8. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (試料番号8)
9. *Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.) Patrick (試料番号8)
10. *Navicula confervacea* (Kuetz.) Grunow (試料番号6)
11. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (試料番号6)
12. *Pinnularia gibba* var. *linearis* Hustedt (試料番号6)
13. *Pinnularia gibba* var. *linearis* Hustedt (試料番号8)
14. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (試料番号6)

図版2 珪藻化石(2)



15. *Nitzschia umbonata* (Ehr.) Lange-B. (試料番号8)
16. *Nitzschia umbonata* (Ehr.) Lange-B. (試料番号2)
17. *Nitzschia hungarica* Grunow (試料番号2)
18. *Nitzschia hungarica* Grunow (試料番号8)
19. *Nitzschia sinuata* var. *delognei* (Grun.) Lange-Bertalot (試料番号8)
20. *Nitzschia levidensis* var. *salinarum* Grunow (試料番号6)
21. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Muller (試料番号6)
22. *Achnanthes hungarica* Grunow (試料番号2)
23. *Achnanthes exigua* Grunow (試料番号8)

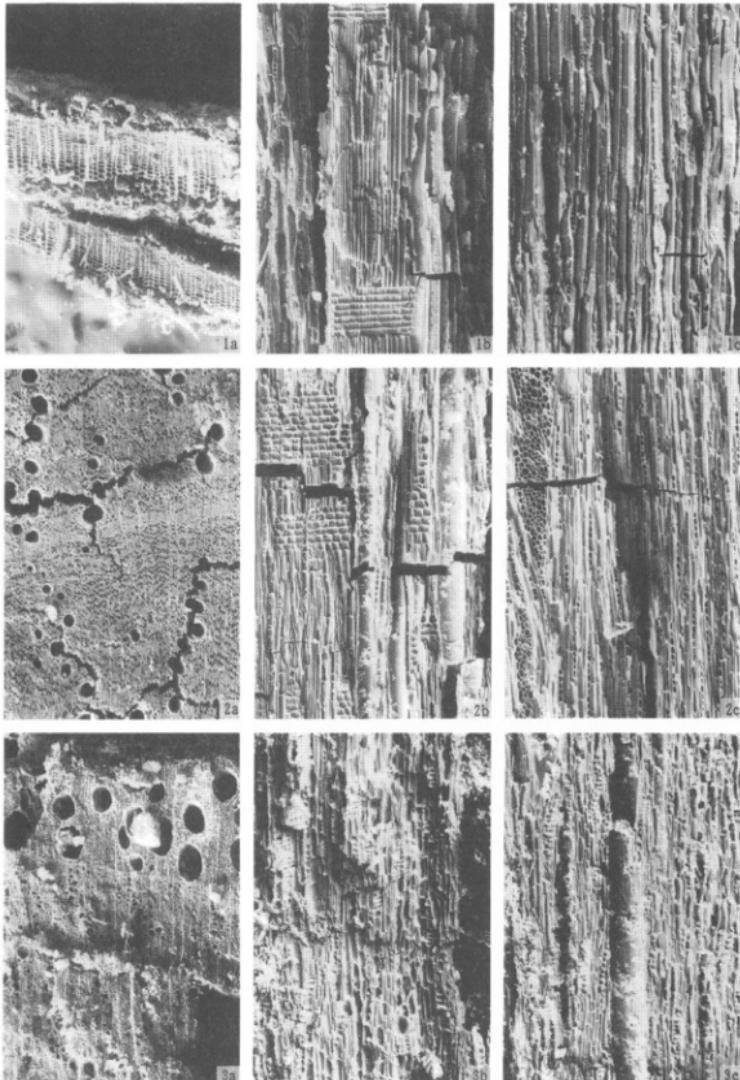
図版3 花粉分析プレパラート内の状況・植物珪酸体



1. 状況写真(試料番号2)
3. イネ属短細胞列(試料番号2)
5. イネ属穎珪酸体(試料番号2)

2. 状況写真(試料番号8)
4. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体(試料番号2)

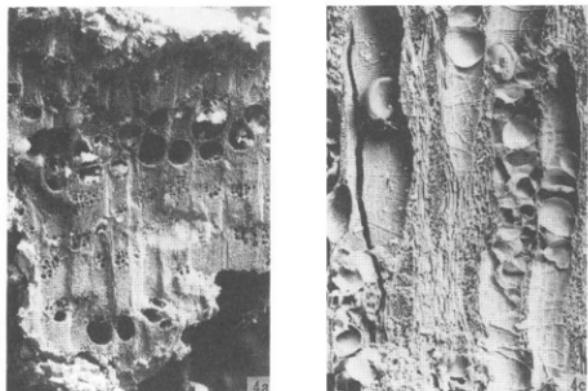
図版4 炭化材(1)



1. スギ (SB-21 W-351)
 2. コナラ属アカガシ亜属 (SB-10 W-355)
 3. クリ (SB-18 W-356)
- a : 木口, b : 柄目, c : 板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b, c

図版 5 炭化材(2)



4. ケヤキ (SB-21 W-351) a : 木口, c : 板目

— 200 μm :a
— 200 μm :c

図 版



遺跡遠景 北より



1. 菩山城跡（航空写真）東より



2. 菩山城跡（手前城池）東より



1. 調査前状況 西より



2. 調査区全景 西より



1. SX-1 西より



2. SF-1 北より



3. SF-2 北より



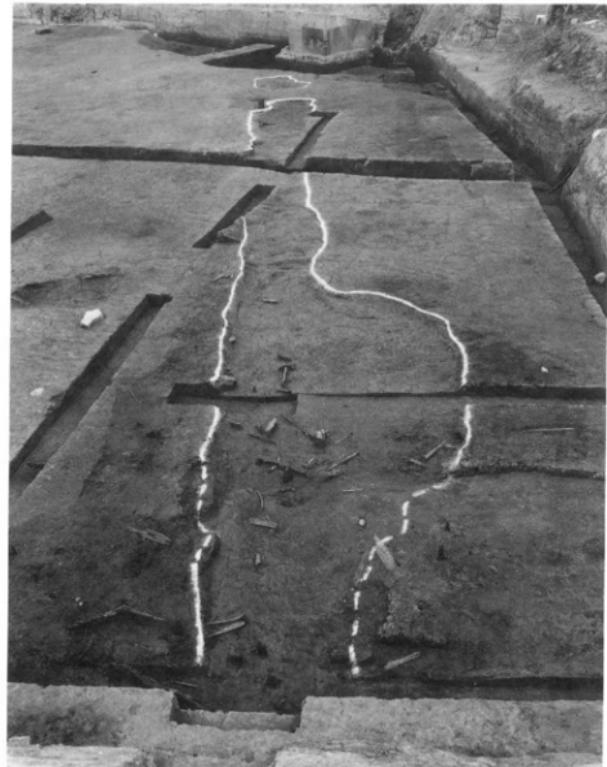
1. SX-3 南より



2. SX-3 上蓋除去後 南より



3. SX-3 土層断面 西より



1. SD-1 南より



2. SD-1 磚群出土状況 西より



3. SD-1 箸状木製品出土状況 東より



1. SF-3 西より



2. SX-7 北より



3. SX-7 (部分) 北より



1. SX-4 石積み（東半分）北より



2. SX-4 石積み東端 北より



1. SX-4 石積み（西半分）北より



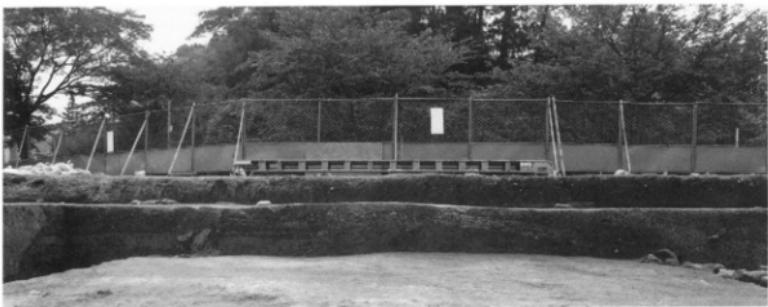
2. SX-4 石積み西端 北より



1. SX-4 石敷道 北より



2. 第4トレンチ東壁土層断面 西より



3. 第7トレンチ南壁土層断面 北より



1. 遺物出土状況（261）東より



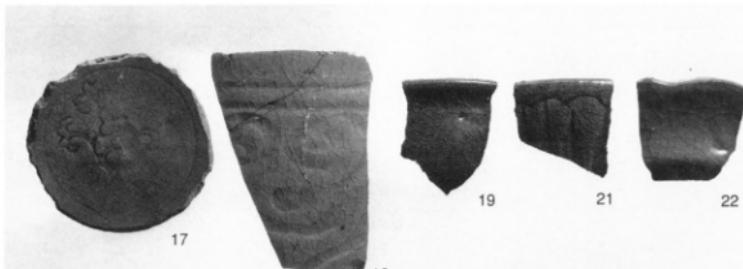
2. 遺物出土状況（34）東より



3. SA-1 検出状況 東より



4. SA-1 東より



17

18

19

21

22



23



24



20



15



15

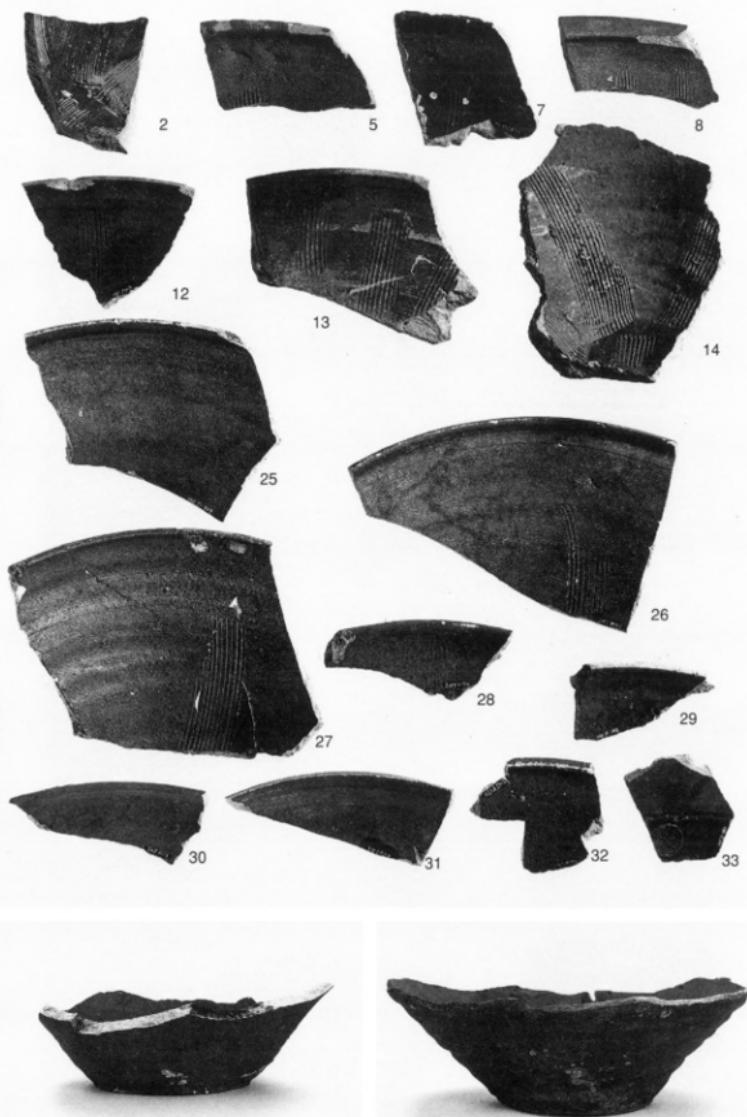
陶磁器等 1



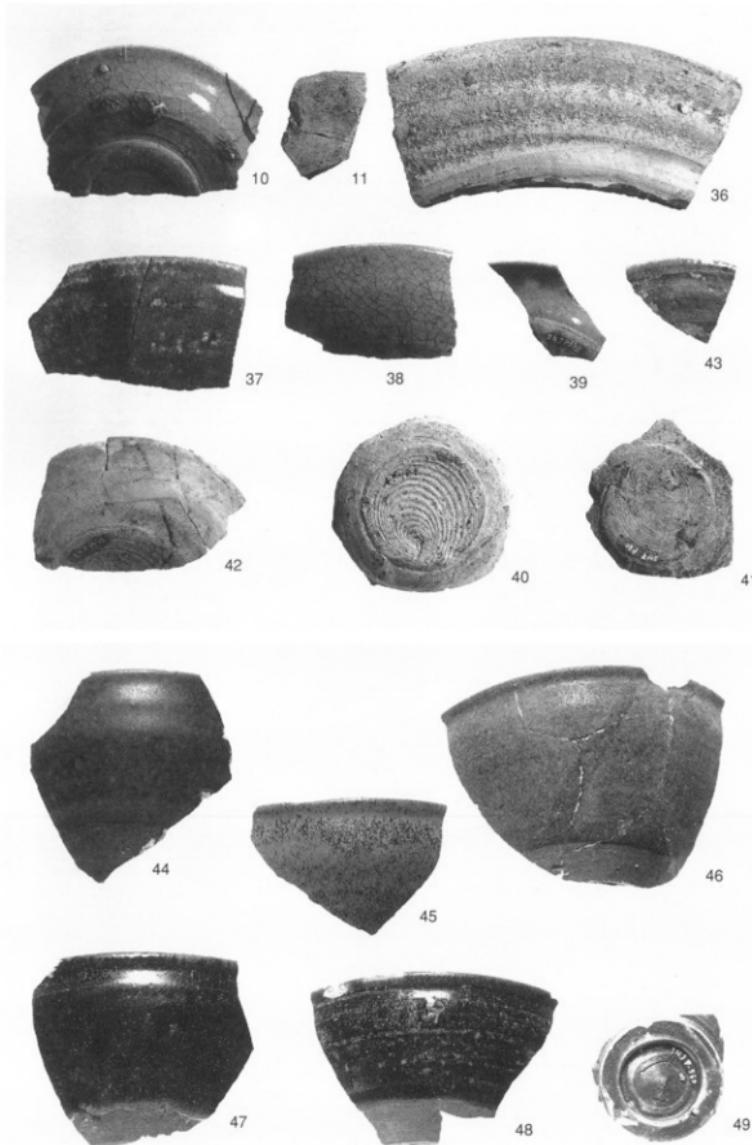
16



57



陶磁器等 2



陶磁器等 3



9



50



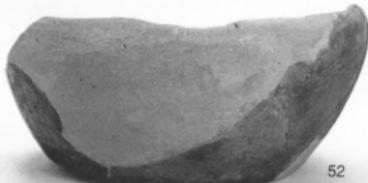
51



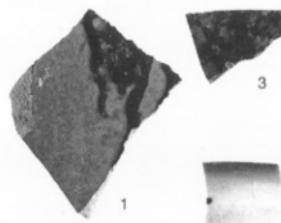
53



54



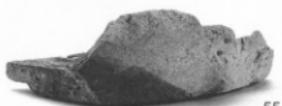
52



1

3

4

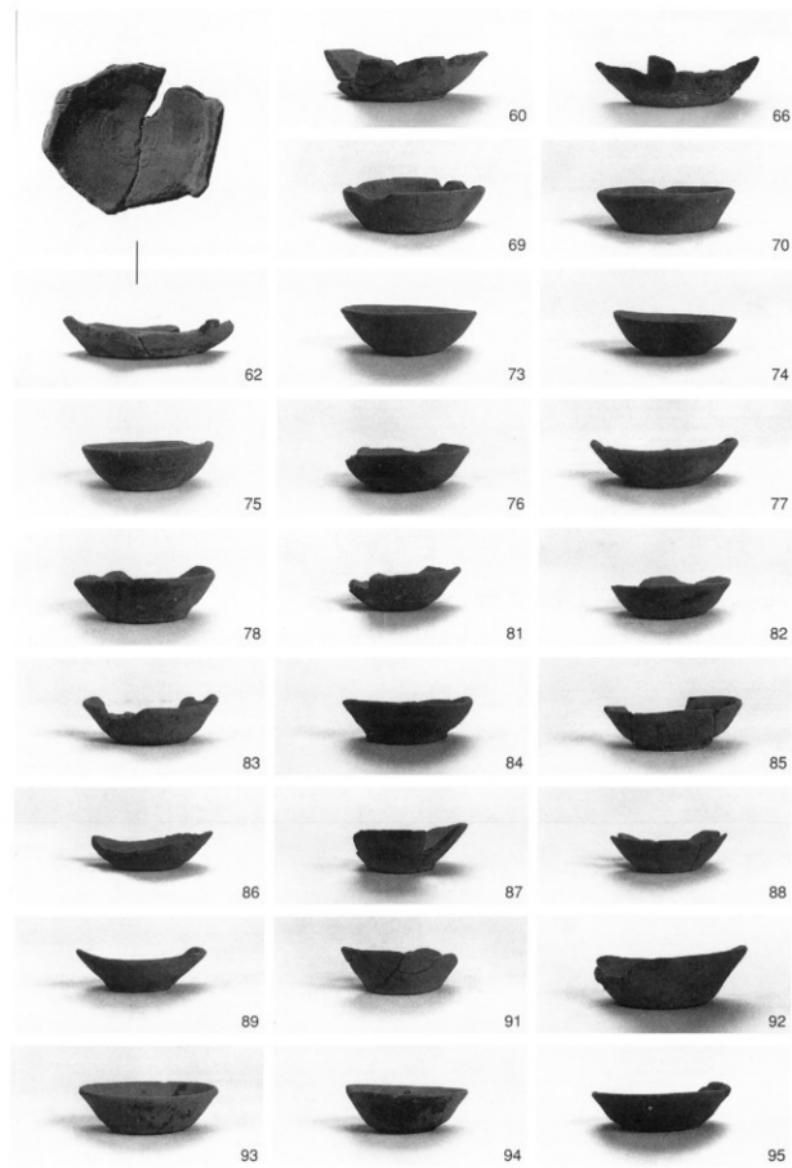


55



6

56





98



99



100



102



103



104



105



106



107



108



110



111



115



119



120



122



123



126



127



129



133



134



136



138



139



142



145



146



148



152



153



154



158



159



160



161



162



163



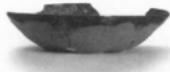
166



169



174



177



182



185



188



189



190



192



195



200



201



203



204



205



206



209



212



216



217



219



220



221



223



224



226



227



229



235



236



237



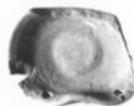
238



241



242



かわらけ 4



248



252



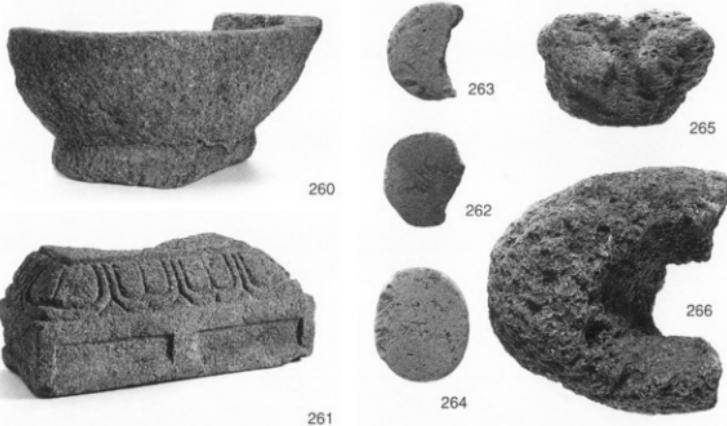
253



257

258

259



260

261

263

262

264

266

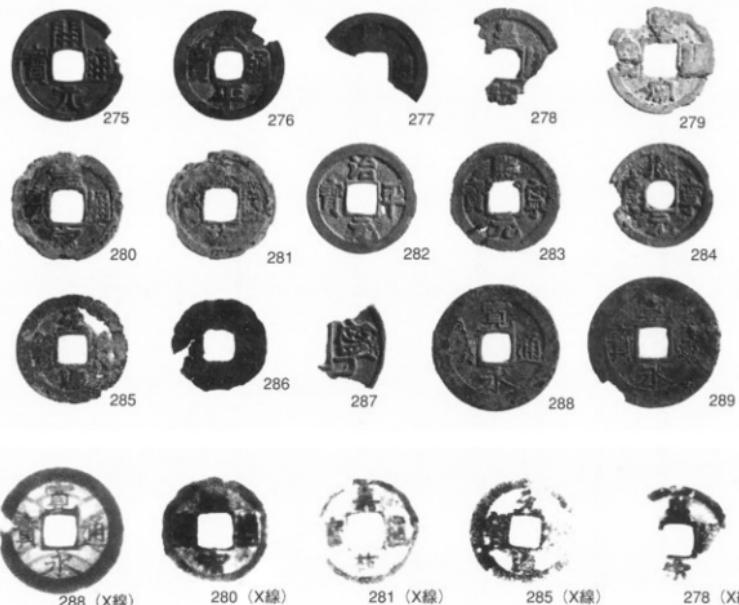
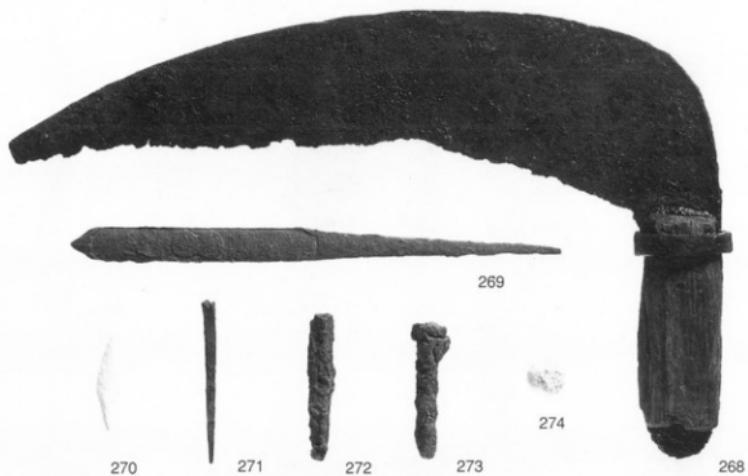


267

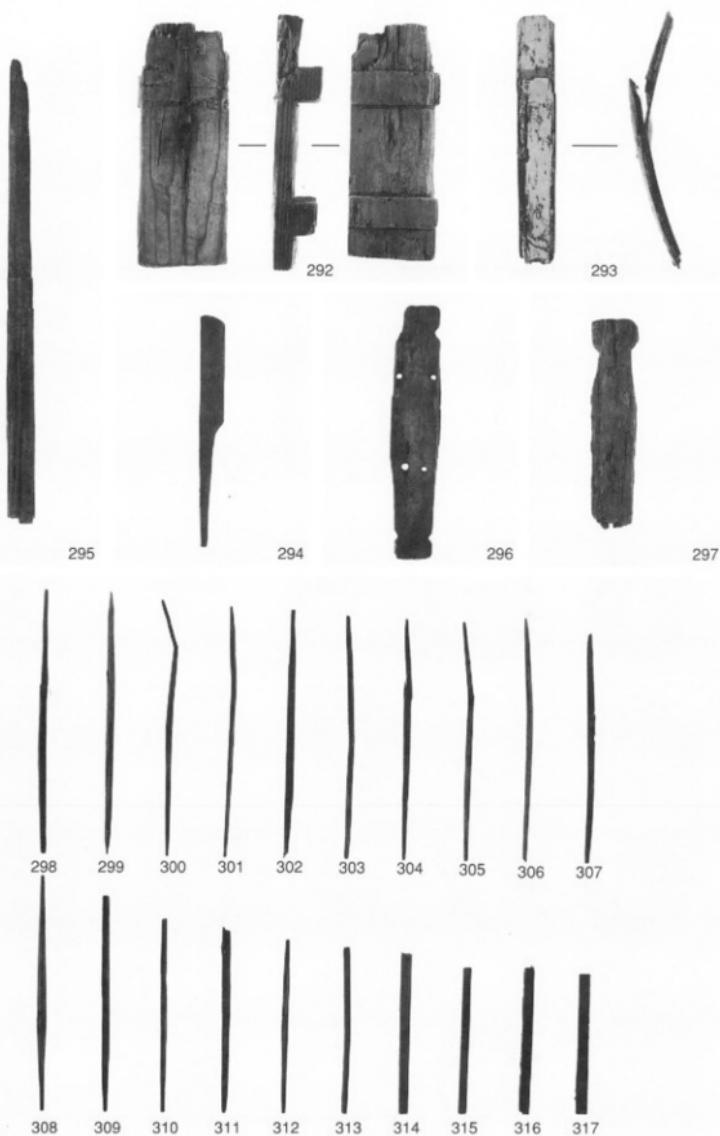


267(X線)

土製品・石製品・金属製品（歴史時代）



金属製品・銭貨（歴史時代）



木製品(歴史時代) 1



318



321



319



322



320



323



324



325



326



329



330



331



332



333



334

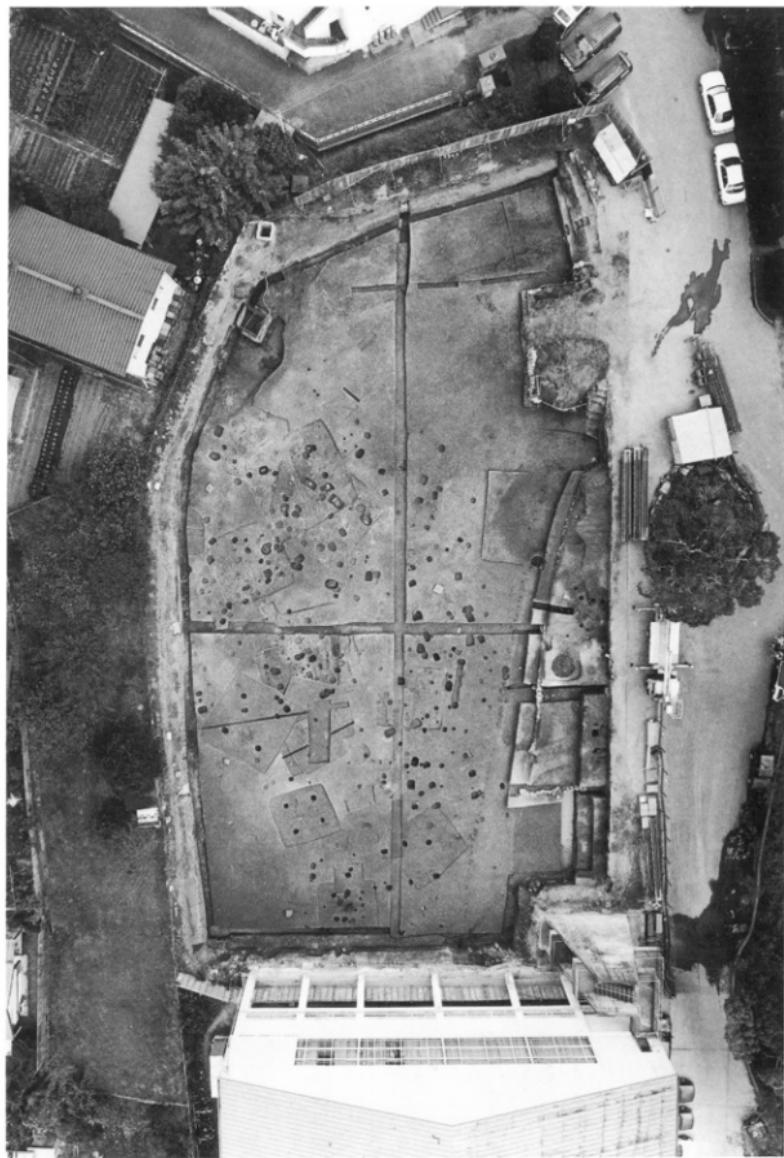


335

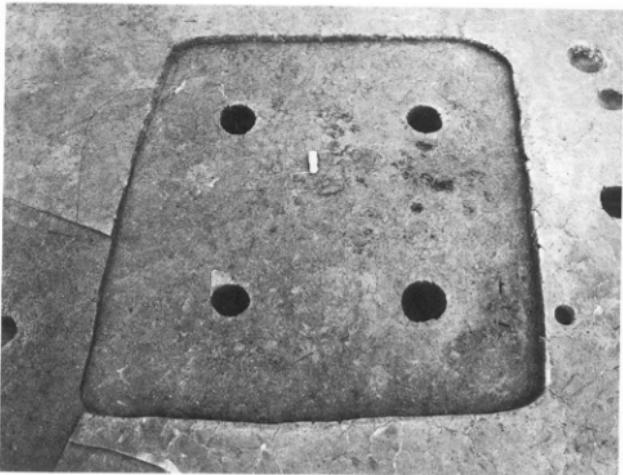


336

338



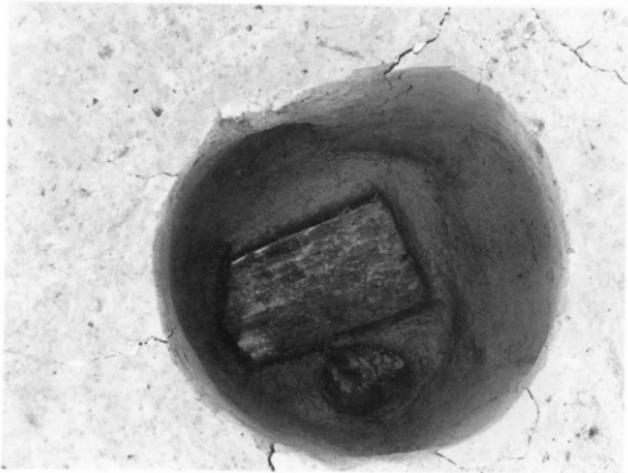
弥生時代～古墳時代 調査区全景



1. SB-1 南より



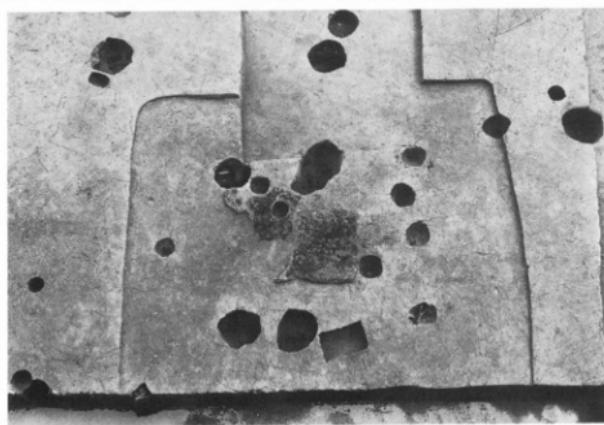
2. SB-1 炉 南より



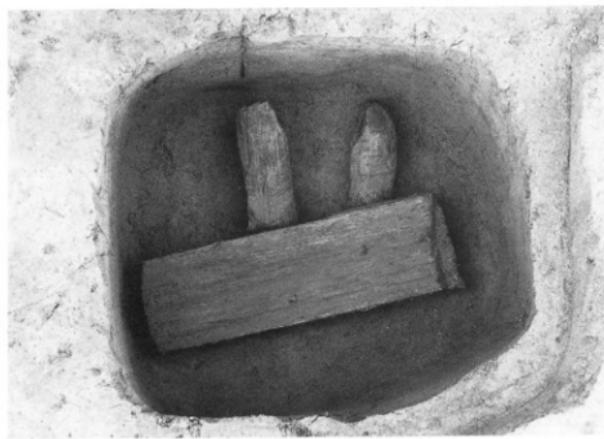
3. SB-1 P3 北より



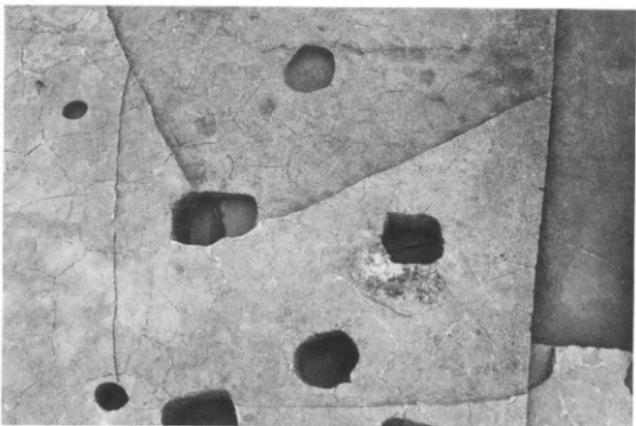
1. SB-2 西より



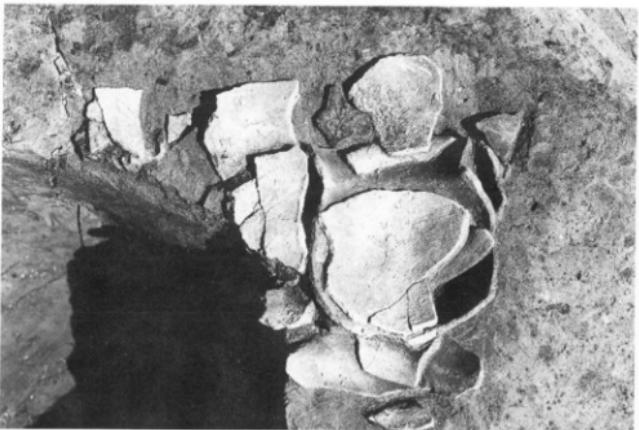
2. SB-3 西より



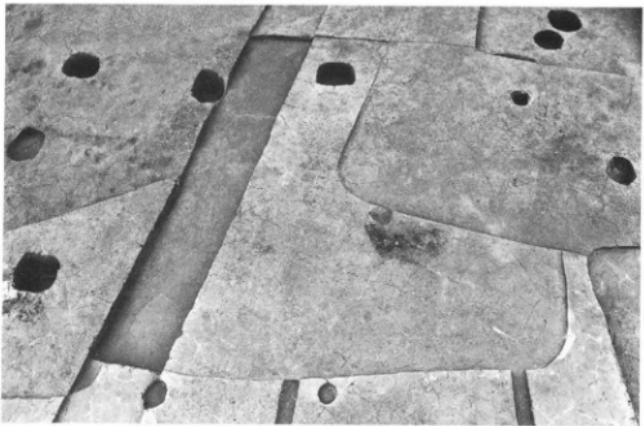
3. SB-3 P2 東より



1. SB-4 東より



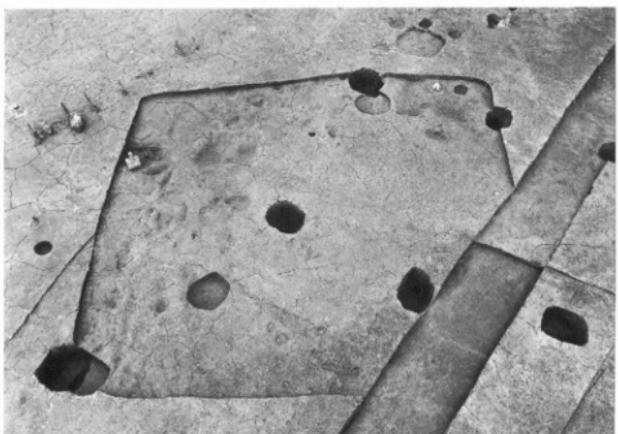
2. SB-4
遺物出土状況
(362) 西より



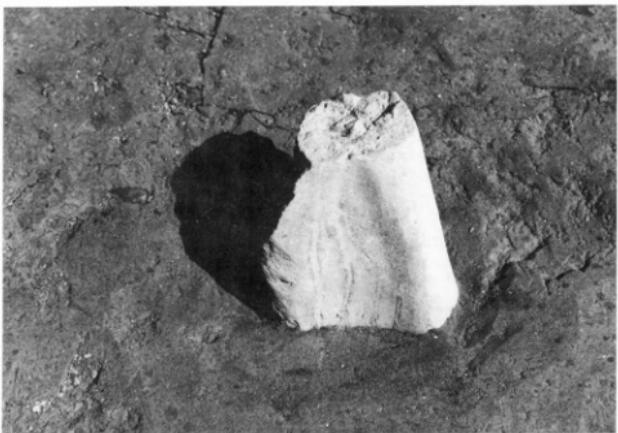
3. SB-5 東より



1. SB-6 北より



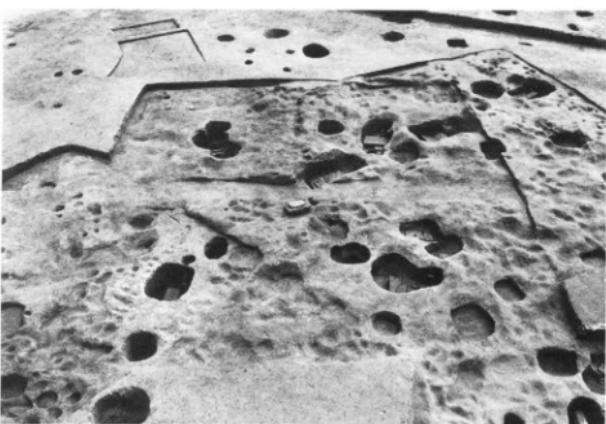
2. SB-7 東より



3. SB-7
遺物出土状況 (636) 西より



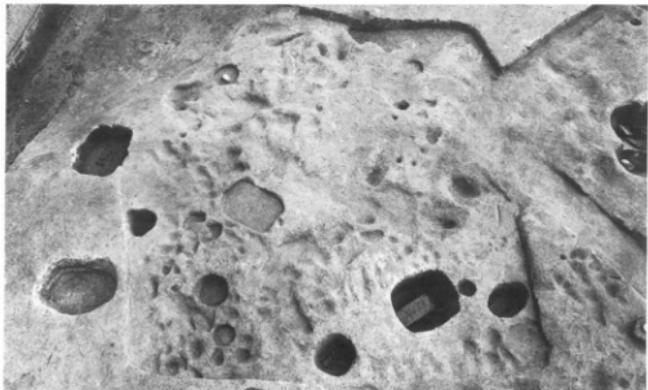
1. SB-8 東より



2. SB-9 北より



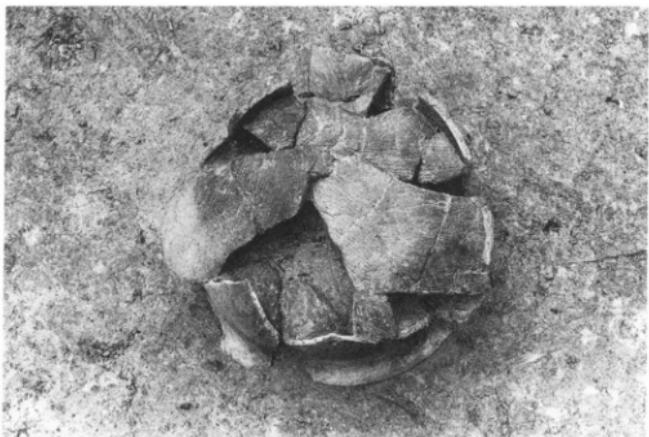
3. SB-9 炉石出土状況
北より



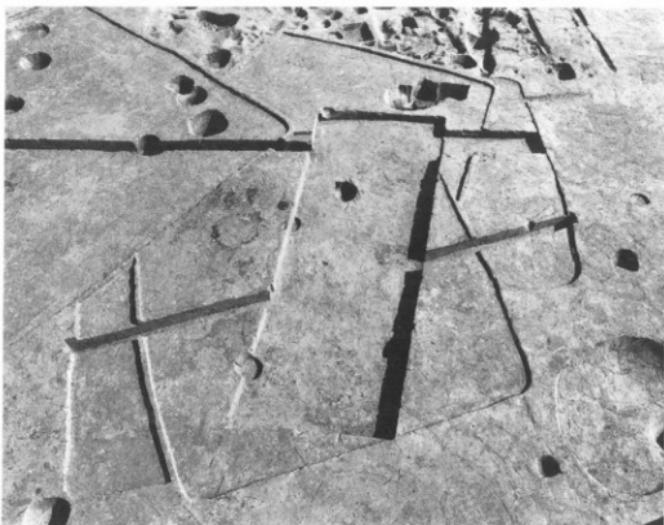
1. SB-10 西より



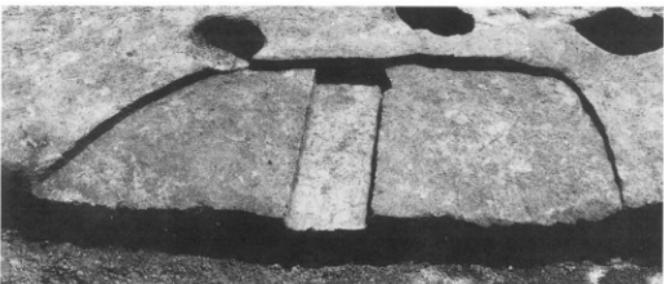
2. SB-11・20
北より



3. SB-20
遺物出土状況(374) 東より



1. SB-12・SB-13・
SB-14・SB-15
西より



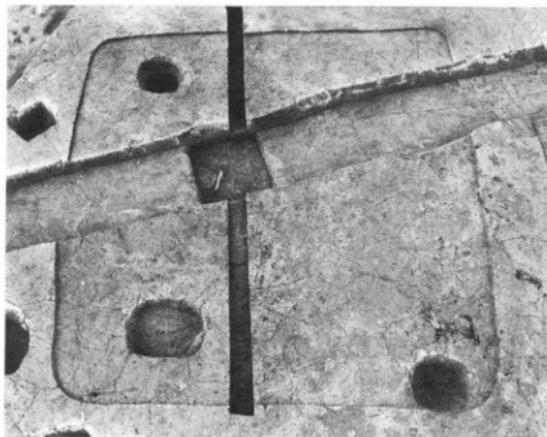
2. SB-16 北より



3. SB-18 南より



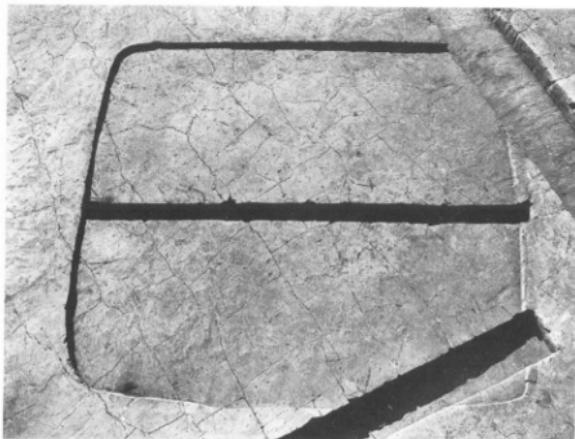
1. SB-21 東より



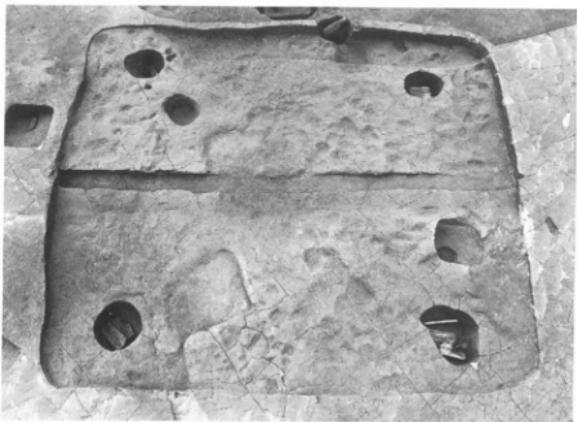
2. SB-28 南より



3. SB-29 東より



1. SB-30 東より



2. SB-31 東より



3. SB-31 P4 南より



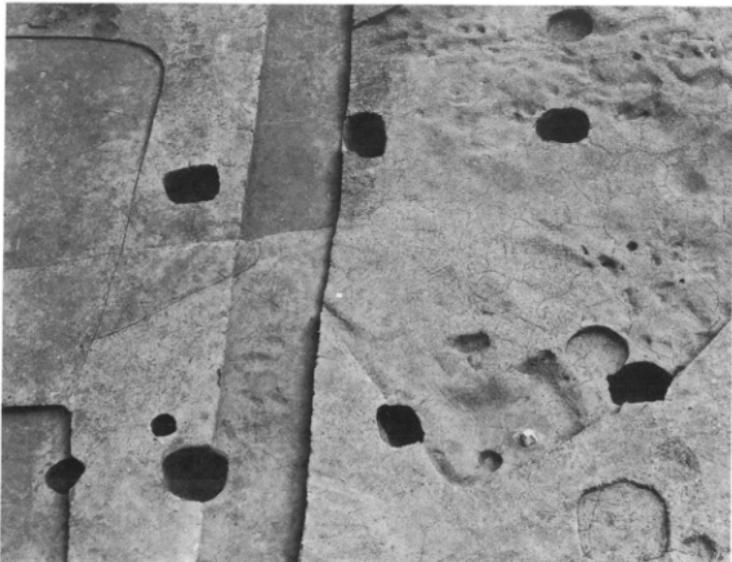
1. SB-32 西より



2. SB-32 P1 南より



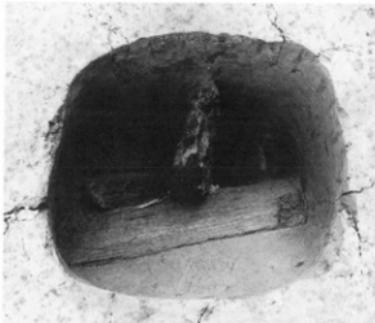
3. SB-32 P4 南より



1. SH-1
西より



2. SH-1 P1 西より



3. SH-1 P2 北より



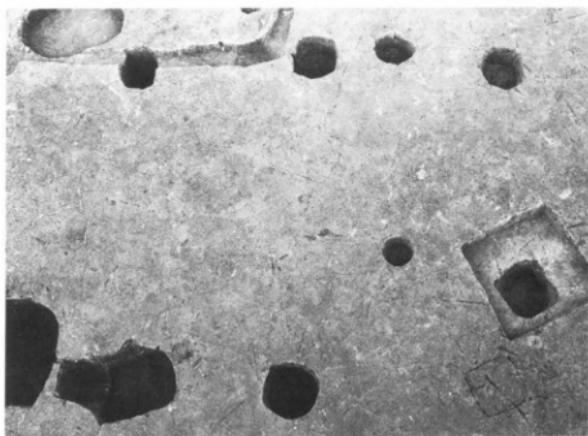
4. SH-1 P3 東より



5. SH-1 P6 西より



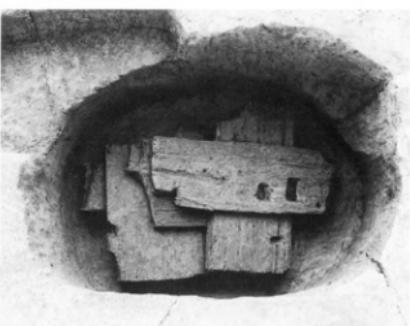
1. SH-2 北より



2. SH-4 西より



3. SH-5 南より





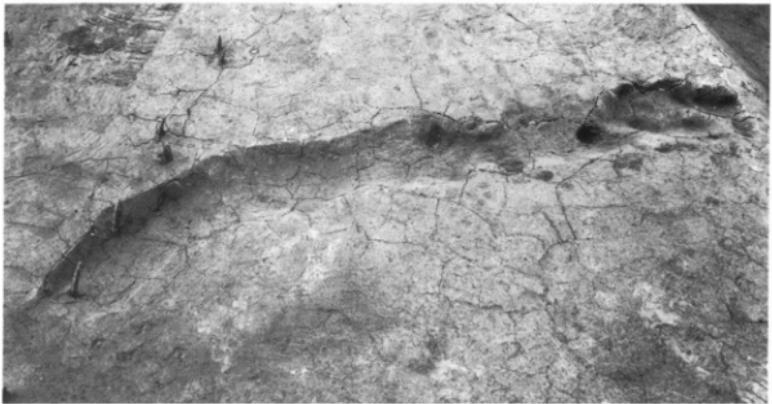
1. SH-6 北より



2. SH-7 西より



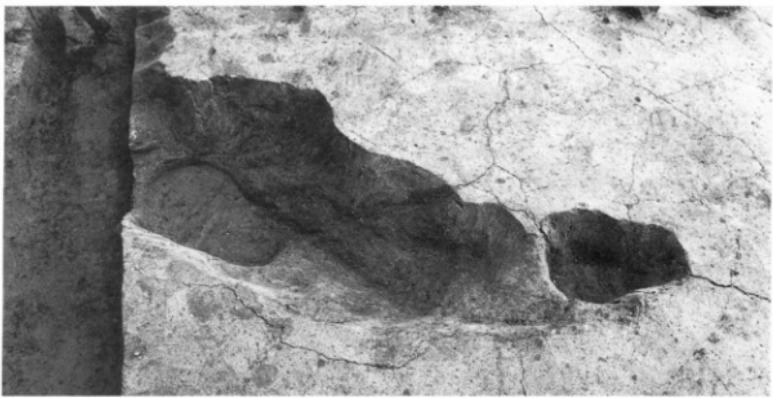
3. SH-7 P2 北より



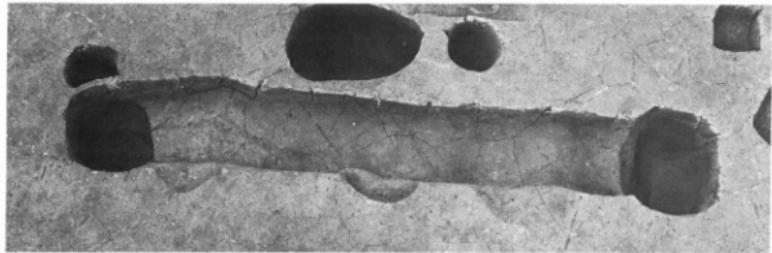
1. SD-2 西より



2. SD-2 遺物出土状況（389・395）西より



3. SD-3 南より



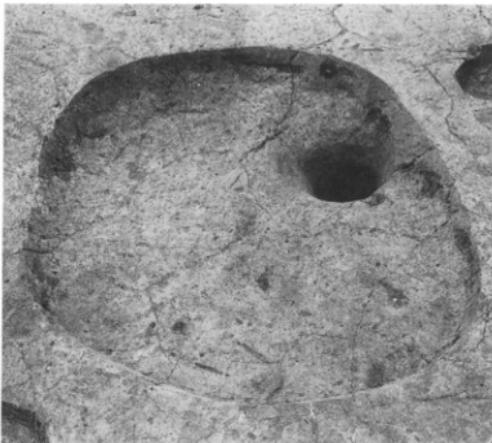
1. SD-4 南より



2. SD-6 南より



3. SD-7 南より



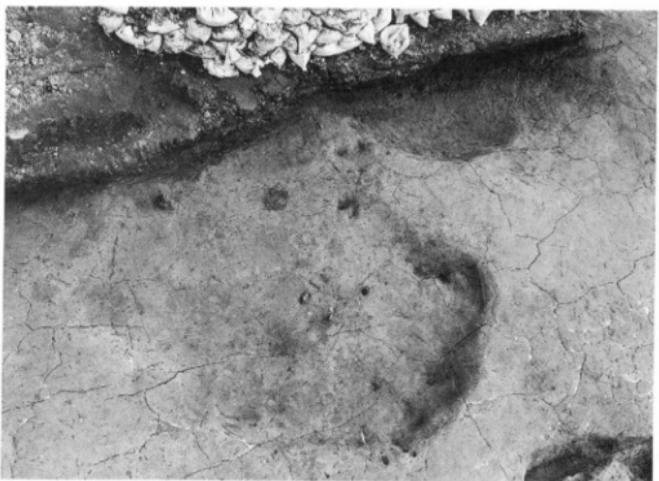
4. SF-5 北より



1. 土器集中出土地点 2
北より



2. 土器集中出土地点 3
(西側) 北より



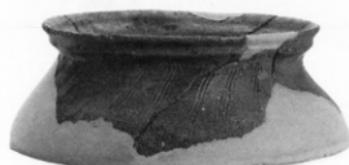
3. 土器集中出土地点 3
(東側) 完壊状況
北より



339



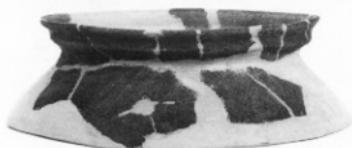
350



344



353



345



362



349



346



363



376



390



374



396



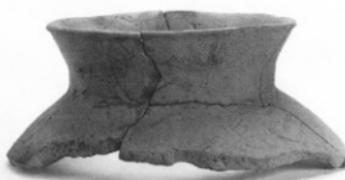
381



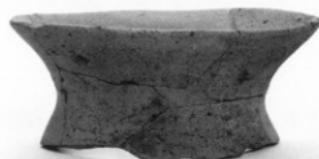
397



403



420



406



424



413



418



429



430



440



432



441



442



431



444



451



448



456



449



458



452



459



460



463



461



464



465



462



467



469



476



471



477



472



478



473



483



475



485



492



499



493



500



494



496



501



497



498



502



506



512



507



514



516



518



519



524



522



526



523



527



525



528



533



542



535



544



540



553



555



556



557



558



562



565



560



564



568



577



569



579



570



581



571



583



572



587



588



596



601



589



598



613



590



602



616



617



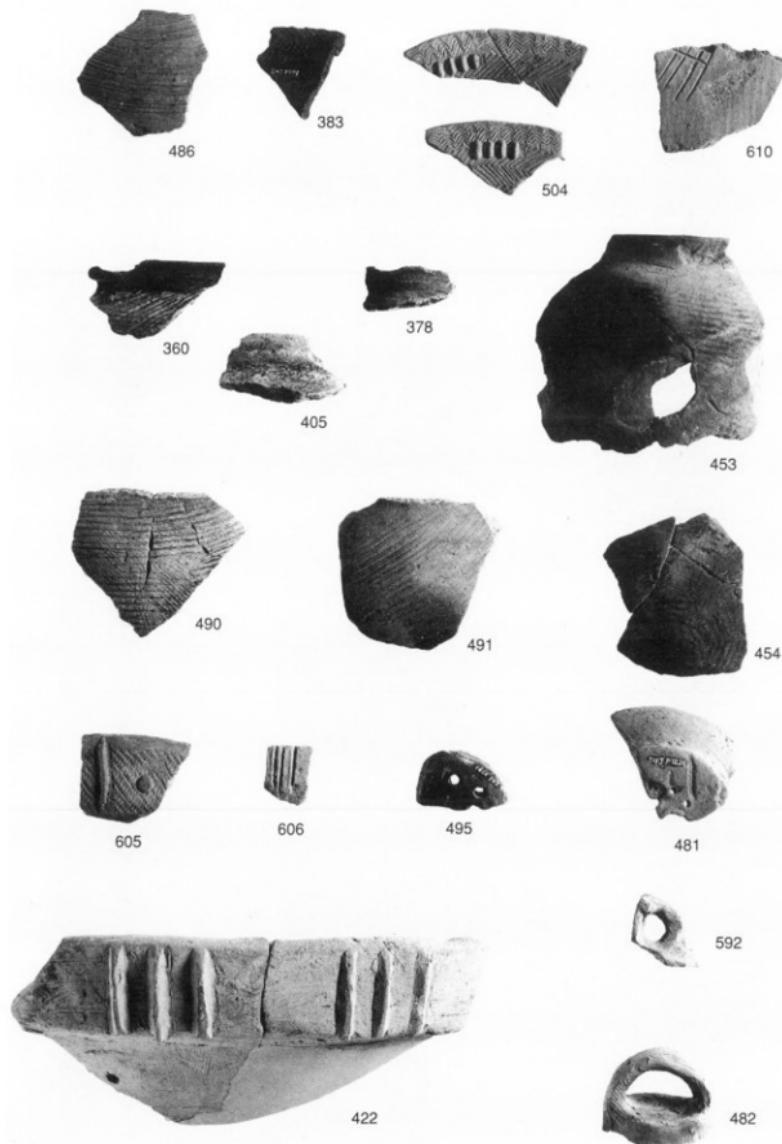
595



603

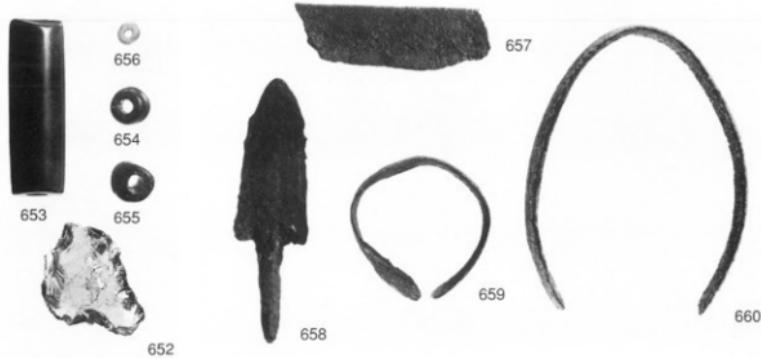
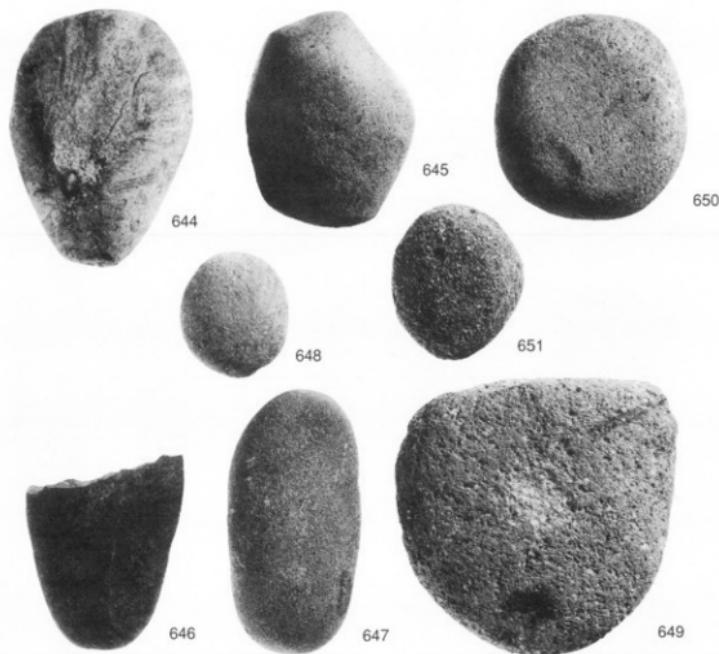


618

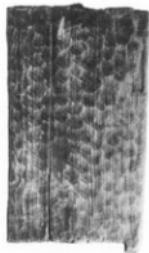




土製品・石製品（弥生時代～古墳時代）



石製品・ガラス製品・金属製品（弥生時代～古墳時代）



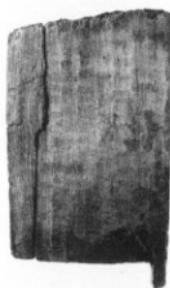
661



662



663



664



665



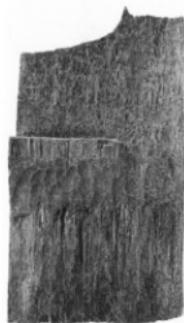
666



667



668



669



670

1
礎板

1

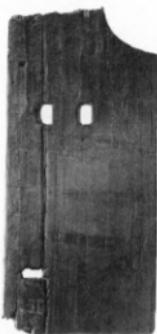


671



674

672



675



676



677



678



679

璇板 2



680



681



682



683



684



685



686



687



礎板 3



688



689



690



691



699



692



693

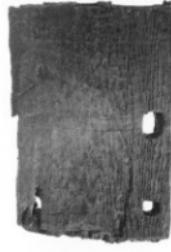


694

700



695



696

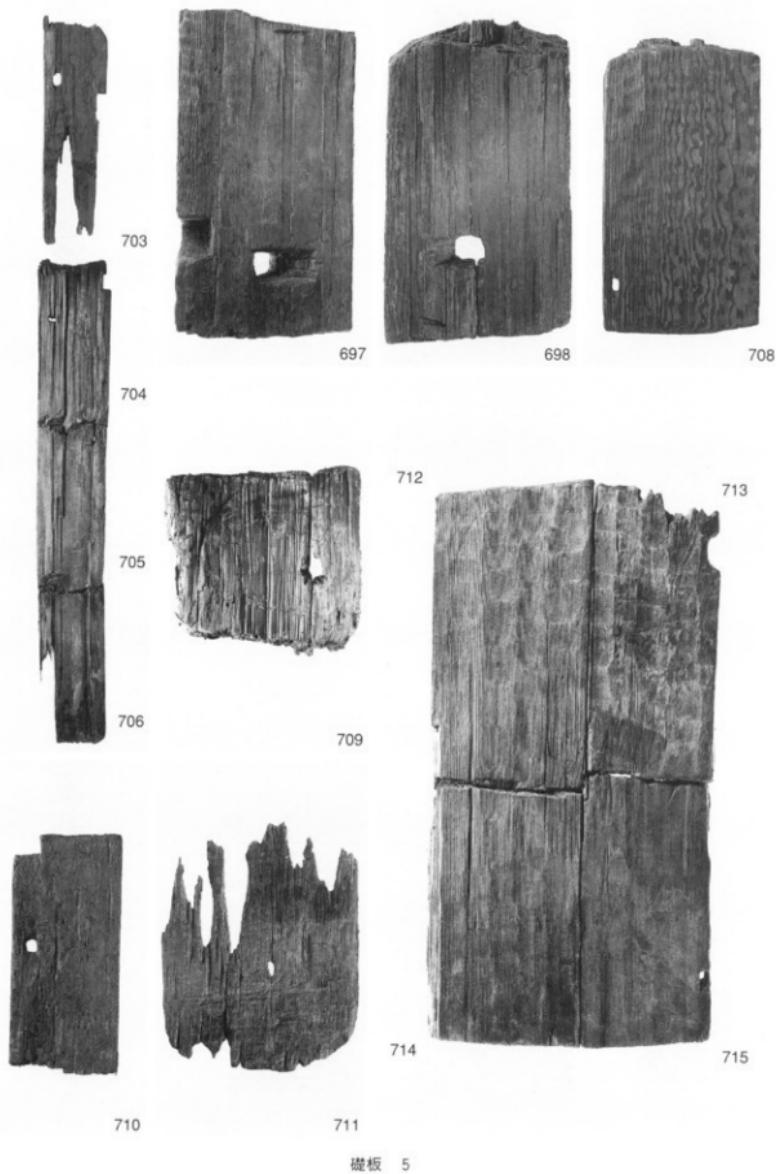


707

701



702





716



717

718



719



720



721



722



723



724

726



727



728



729

725



730



731



732



733



734



735



736



737



738



739



740



741



742



743



744



745



746



747



748



749



750



751



752



753



754



755



756



757



758

編集後記

本遺跡の調査を実施するにあたって、例言に記した以外にも、多くの専門家の方々の有益な助言を頂いた。この場を借りてお礼申し上げたい。また本書の執筆にあたって、多くの研究所職員の直接的あるいは間接的な協力を頂いた。併せてお礼申し上げたい。

本遺跡の調査中に御協力・御助言を頂いた方々（敬称略、順不同）

原 茂光	斎藤 宏	肥塚 隆保	村上 隆	鈴木 敏則	望月 保宏
依田 亮一	辻本 崇夫	鶴原 明	松井 敏也	伊林 修一	笹原 芳郎
前嶋 秀張	市村慎太郎	宇留野主税			

発掘調査参加者（敬称略、順不同）

町田彦三郎	山口 尚	森島富士夫	鈴木 秋夫	久保田親則	山口 博規
高木 龍雄	芹沢 操	山本 博司	桑山 隆光	鈴木 章	小池 秀俊
野口 庫造	小川美千夫	加藤 善一	向坂 隆	末村 隆	渡辺 重利
江本 義行	杉澤 静夫	荻田 博	高島 敏孝	下山 貢	鈴木 八郎
渡辺 美行	藤田 末吉	山本 伴子	石渡 陽子	遠藤 清子	田口あや子
今井 洋子	永坂 松江	高木 幸子	後藤口出子	佐藤 貴子	津々野詩織
関口あや子	山本佐智子	金田 純子	大胡田十四子	山崎 国枝	杉山よ志恵
石川美保子	渡辺 カン	皆口日出子	牧野 富子	東 しづ子	中村 秋枝
高橋 敏子	佐々木美枝子	野中 俊弥	杉本亜澄美	羽二生 保	小野千賀子
笹原 芳郎	後藤 正人	伊林 修一	岩崎しのぶ	湊 嘉秀	吉田 幸子
吉村たまみ	柴田美佐子	福島とき子	椿 孝江	舟山八代江	浦田みどり
越後さつき	溝口 若菜	姥炒 洋子	福地 幸子		

整理作業参加者（敬称略、順不同）

南條 敏子	田村みどり	金田 純子	津々野詩織	草瀬うた子	小野 なつ
黒瀬 悅子	今井 洋子	小川とし江	後藤 俊江	横田 瞳子	山田 瑞子
湊 嘉秀	森島富士夫	栗木 崇	岩名健太郎	高田みゆき	大川佳世子
高橋 元子	白井なみ子	豊島智恵子	伊澤 幸恵	林 美幸	湯川 由巳
鈴木 洋子	藤林小百合	遠藤 美鈴	工藤 香織	高橋 裕子	鈴木 里江
鈴木 輝美	山本 和美	海東 千晴	高遠 美幸	中嶋 郁夫	望月由佳子
岩崎しのぶ	仲家三千彦	笹原千賀子	遠藤佐知子	大澤とも子	和田 恵子

報告書抄録

ふりがな	にらやまじょうあと・にらやまじょうないいせき
書名	蘿山城跡・蘿山城内遺跡
副書名	平成7年度県立蘿山高等学校プール改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第90集
編著者名	青木修・(パリノ・サーヴェイ株式会社)
編集機関	財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422 静岡県静岡市谷田23-20
発行年月日	1997年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯／東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号				
にらやまじょ うあと・にら やまじょうな いいせき 蘿山城跡・ 蘿山城内遺 跡 (INJ)	しづおかけんたがたぐん にらやまちょうにらやま 静岡県田方郡蘿山町 蘿山229	22326		35° 03' 12" / 138° 57' 32"	19950401 ~ 19951031	1700m ² 延べ3400m ²	県立蘿山高 等学校プー ル改修に伴 う事前調査

所収遺跡名	種別	主な年代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蘿山城跡	城跡	戦国時代	石積み遺構 石敷道 石縞暗渠遺構 土坑 溝状遺構 竪穴遺構 柱穴	陶磁器 かわらけ 瓦 鬼羽口 こね鉢 宝鏡印塔 鉄砲玉 和鏡 鐵鏡 銭貨 斧 漆椀 弓 刀形 箸状木製品 曲物 輪カンジキ型皿下駄 下駄 種子 獣骨	中世城郭の石積 みを検出、城の 改築を確認
蘿山城内遺跡	集落	古代末～中世 弥生時代後期 ～古墳時代	杭列 竪穴住居 挖立柱建 物 溝状遺構 土坑 柱穴	弥生土器 土師器 土鍤 土製紡錘車 土製勾玉 砥石 磨石 破石 石斧 管玉 ガラス小玉 銅鏡 銅環 碓板 柱根 種子	田方条里的坪界 線を確認 山木遺跡（水田 遺跡）と関連す る集落の、初の 本格的な調査

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第90集

蘿山城跡・蘿山城内遺跡

平成7年度県立蘿山高等学校ホール改修工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成9年3月31日発行

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422 静岡県静岡市谷田23 20
TEL 054-262-4261
FAX 054 262 4266

印 刷 株式会社 三 創
静岡市中村町166番地の1
TEL 054-282-4031